

後 家 山 遺 跡
東 久 保 遺 跡
宮 田 遺 跡 I ・ III

後家山・東久保の丘陵上に営まれた弥生時代中期から後期の集落址と
宮田の谷地に展開する中世村落と生産址遺跡の調査

2004. 10

佐 久 市
佐久市教育委員会

後家山遺跡
東久保遺跡
宮田遺跡 I・III

後家山・東久保の丘陵上に営まれた弥生時代中期から後期の集落址と
宮田の谷地に展開する中世村落と生産址遺跡の調査

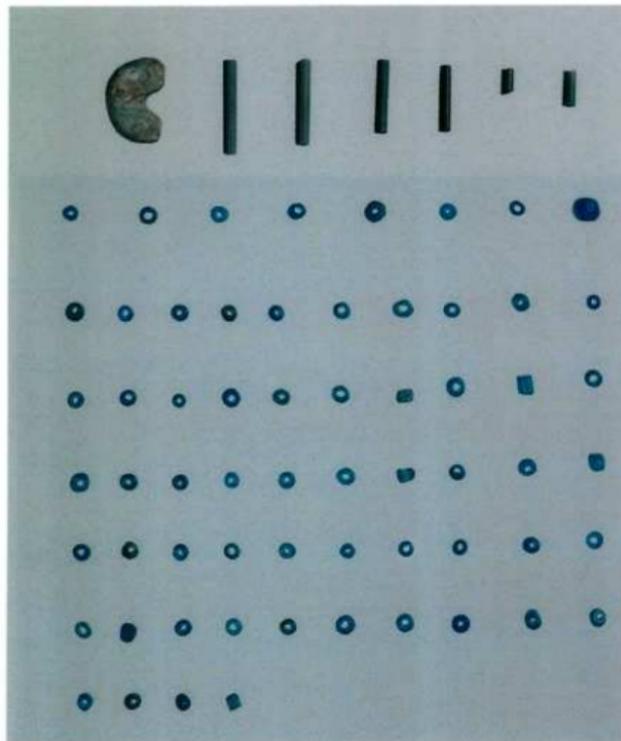
2004. 10

佐 久 市
佐久市教育委員会



西方より佐久平を望む

中央部に流れるのが千曲川、写真左側にそびえるのが浅間山である。遠く霞むのは赤城山と榛名山、後家山、東久保、宮田遺跡は東からのびた丘陵の右から2番目の先端に位置する。



後家山遺跡出土玉器
勾玉 H2号住居址
管玉 住居址・埋漆
片玉小玉 1号木棺墓



H51号住居址出土「曲柄装着平鉄」



後家山遺跡 1号木棺墓出土「螺旋型鉄鉄」

例 言

1. 本書は、佐久市が行う佐久総合運動公園建設に伴う後家山・東久保・宮田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 佐久市（都市計画課）
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び所在地

後家山遺跡	(HGO)	佐久市大字平賀字後家山（ごかやま）
東久保遺跡Ⅰ	(HHK)	大字平賀字東久保（ひがしくぼ）
宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ	(SMTⅠ・Ⅲ)	大字瀬戸字宮田（みやた）
5. 調査期間及び面積

発掘調査	平成13年5月7日～平成14年10月18日
整理作業	平成15年4月1日～平成16年10月28日
開発面積	209,555㎡
試掘面積	167,180㎡
調査面積	38,200㎡（全体）
後家山遺跡	22,422㎡
東久保遺跡	2,270㎡
宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ	13,508㎡
6. 本遺跡の航空測量・出土遺物の鑑定・保存処理・実測等の委託は以下の通りである。

航空測量	株式会社 ジャステック
人骨鑑定	パリオ・サーヴェイ株式会社
木製品保存処理	株式会社 東都文化財研究所
鉄製品保存処理	財団法人 元興寺文化財研究所
樹種・種子鑑定	株式会社 古環境研究所
炭化材の年代測定	株式会社 古環境研究所
ガラス小玉分析	武蔵野文化財修復研究所 小泉好延
黒曜石産地分析	沼津高等物理工学科 望月明彦
石器実測・分析	株式会社 アルカ
7. 調査区と担当者は以下の通りである。

後家山遺跡中央尾根部・東久保北古墳	富沢一明
後家山遺跡南側尾根部・東久保遺跡住居址群	佐々木宗昭
宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ地点	羽毛田卓也・富沢一明（平成13年度分） 佐々木宗昭（平成14年度分）
8. 本遺跡の整理作業は後家山遺跡を富沢が、東久保・宮田遺跡を佐々木が行った。また、後家山遺跡の石材鑑定は羽毛田が行った。原稿は文頭か文末に文責を記載した。その他記載のないものは編集・執筆を富沢と佐々木が各担当遺跡を行った。

なお、陶磁器類は(財)長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏に、後家山遺跡石器類は高橋哲氏、池谷壽典氏、馬場伸一郎氏に、螺旋型鉄剣は岡谷南高校教諭 野澤誠一氏に、曲柄装着平鍬は梓川中学校教諭 臼居直之氏に、弥生中期前半の土器群は明治人学教授 石川日出志氏に、翡翠勾玉の鑑定にはフォッサマグナミュージアム 宮島宏氏に、佐久平出土のガラス小玉については小泉好延氏にそれぞれご留意を得てご教示頂き、また玉箱も賜った。記して感謝申し上げます。
9. 調査から報告書作成に至る過程で以下の方々並びに各機関のご指導・ご協力を頂いた。御芳名を記して厚く御礼申し上げます。（順不同・敬称略）

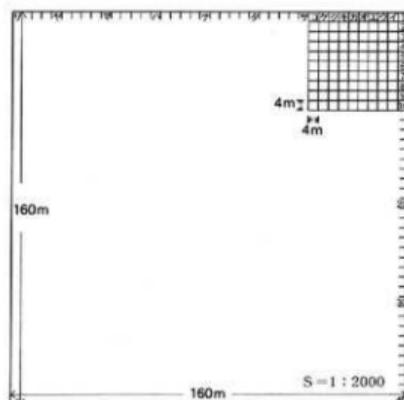
臼田武正	堤 隆	小山岳夫	青木一男	町出勝典	山下誠二	飯島哲也	風間栄一
中沢 悟	千野 浩	山田昌久	中沢道彦	長滝藏康	桜井秀雄	佐久考古学会	

(財)長野県埋蔵文化財センター 長野県考古学会 地元瀬戸・平賀区の皆さん

10. 本書及び後家山・東久保・宮田遺跡からの出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 凡例は各遺跡ごとに記載した。
2. 3遺跡の調査グリッドは共通のグリッドで右図のように設定した。



後家山、東久保、宮田I・II遺跡グリッド設定図

目 次

巻頭カラー図版	
例 言	
凡 例	
第1章 発掘調査の経緯	
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査組織	2
第3節 調査日志	3
第II章 遺跡の立地と環境	
第1節 自然的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第III章 基本層序と試掘調査の概要	
第1節 基本層序	7
第2節 試掘調査と検出遺構の概要	8
第IV章 後家山遺跡	
凡 例	
第1節 後家山遺跡の概要	14
第2節 遺構と遺物	
1. 竪穴住居址	17
2. 特殊遺構	135
3. 木棺墓	139
4. 上 坑	142
5. 溝状遺構	151
6. ビット群	167
7. 古墳跡	171
8. 塚	176
9. 遺構外出土遺物	177
第3節 科学分析	181
1. 後家山遺跡における種実同定	株式会社 古環境研究所
2. 後家山遺跡における樹種同定	株式会社 古環境研究所
3. 後家山遺跡出土試料の放射性炭素年代測定	株式会社 古環境研究所
4. 後家山遺跡出土のガラス小玉分析	武蔵野文化財修復研究所 小泉好延
5. 後家山遺跡H2号住居址に残された炭化木材による年代測定の結果	武蔵野文化財修復研究所 小泉好延
6. 後家山遺跡H2号住居址出土炭化材樹種	パレオ・ラボ 植田弥生
7. 後家山遺跡出土鉄鋼の自然科学的調査	財団法人 元興寺文化財研究所 宮井裕子 井上美智子 尼子奈美枝 株式会社 九州パナソニック・TACセナー 大塚正己
8. 後家山遺跡出土の勾玉について	フォッサマグナミュージアム 宮島 宏
第4節 小 結	213
写真図版	

第V章 東久保遺跡	361
凡例	
第1節 東久保遺跡の概要	362
第2節 遺構と遺物	
1. 竪穴住居址	363
2. 掘立柱建物址	371
3. 土坑	372
4. 溝状遺構	372
5. 古墳跡	375
6. 集石基	379
第3節 科学分析	
1. 集石墓出土人骨について	381
写真図版	
第VI章 宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ	
カラー図版	
凡例	
第1節 宮田遺跡Ⅰ・Ⅲの概要	406
第2節 検出遺構	
1. 竪穴状遺構	408
2. ビット群	411
3. 建物址群	416
① 掘立柱建物址 ② 建物址群	
4. 溝状遺構	432
① 建物址及びビット群を区画する溝状遺構	
② 竈(畑)を区画する溝状遺構	
5. 土坑	446
① 集水坑 ② 焼土・炭化物を含む土坑 ③ その他の土坑	
6. 井戸址	464
7. 竈(畑)	466
第3節 出土遺物	
1. 陶磁器類	469
2. 遺構別出土遺物	473
①土坑出土遺物 ②溝状遺構出土遺物 ③竪穴状遺構出土遺物	
④ビット群出土遺物 ⑤グリッド出土遺物 ⑥表採遺物	
第4節 科学分析	489
宮田遺跡Ⅰ 土坑出土炭化物の同定 古環境研究所	
第5節 小結	492
写真図版	
第VII章 考察	
論 攷	
1. 佐久市出土のガラス玉材質分析	小泉好延
… 弥生時代後期から7世紀後半までのガラス玉類の材質分析…	
2. 後家山遺跡出土の打製石斧の使用痕分析	池谷勝典 高橋 哲
3. 後家山遺跡出土の弥生黒曜石製石器群の検討	馬場伸一郎
4. 後家山遺跡1号木棺墓出土の螺旋型鉄剣について	野澤誠一
5. 後家山遺跡住居址出土の曲柄装着平鍔について	白居直之

挿図目次（後家山遺跡）

第1図	後家山・東久保・宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ位置図（1:100,000）	1	第46図	H31号住居址実測図	60
第2図	周辺の遺跡位置図（1:20,000）	5	第47図	H31号住居址出土遺物実測図	61
第3図	後家山・東久保遺跡基本層序模式図	7	第48図	H32号住居址及び出土遺物実測図（1）	62
第4図	宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ基本層序模式図	7	第49図	H32号住居址出土遺物実測図（2）	64
第5図	後家山・東久保・宮田Ⅰ・Ⅲ遺跡試掘調査全体図	9	第50図	H33号住居址実測図	65
第6図	後家山遺跡全体図（1:1,500）	15	第51図	H33号住居址出土遺物実測図	66
第7図	H1号住居址及び出土遺物実測図	18	第52図	H34号住居址及び出土遺物実測図（1）	67
第8図	H2号住居址実測図	19	第53図	H34号住居址出土遺物実測図（2）	68
第9図	H2号住居址出土遺物実測図（1）	20	第54図	H35号住居址出土遺物実測図	69
第10図	H2号住居址出土遺物実測図（2）	21	第55図	H35号住居址実測図	70
第11図	H3号住居址実測図	23	第56図	H36号住居址及び出土遺物実測図	72
第12図	H3号住居址出土遺物実測図	24	第57図	H37号住居址及び出土遺物実測図	74
第13図	H4号住居址及び出土遺物実測図（1）	25	第58図	H38号住居址及び出土遺物実測図（1）	75
第14図	H4号住居址出土遺物実測図（2）	26	第59図	H38号住居址及び出土遺物実測図（2）	76
第15図	H5号住居址実測図	28	第60図	H39号住居址及び出土遺物実測図	77
第16図	H5号住居址出土遺物実測図	29	第61図	H40号住居址実測図	78
第17図	H6号住居址実測図	30	第62図	H41号住居址実測図	79
第18図	H6号住居址出土遺物実測図	31	第63図	H41号住居址出土遺物実測図	80
第19図	H7号住居址実測図	32	第64図	H42号住居址及び出土遺物実測図	82
第20図	H7号住居址出土遺物実測図（1）	33	第65図	H43号住居址実測図	84
第21図	H7号住居址出土遺物実測図（2）	34	第66図	H43号住居址出土遺物実測図	85
第22図	H8号住居址及び出土遺物実測図	35	第67図	H44号住居址実測図	86
第23図	H9号住居址及び出土遺物実測図	37	第68図	H45号住居址及び出土遺物実測図	86
第24図	H10号住居址及び出土遺物実測図	37	第69図	H46号住居址実測図	87
第25図	H11号住居址及び出土遺物実測図	39	第70図	H47号住居址及び出土遺物実測図（1）	88
第26図	H12号住居址及び出土遺物実測図	40	第71図	H47号住居址出土遺物実測図（2）	89
第27図	H13号住居址及び出土遺物実測図	41	第72図	H48号住居址実測図	91
第28図	H14号住居址及び出土遺物実測図	42	第73図	H48号住居址出土遺物実測図	92
第29図	H15号住居址及び出土遺物実測図	43	第74図	H49号住居址及び出土遺物実測図	93
第30図	H16号住居址及び出土遺物実測図	44	第75図	H50号住居址及び出土遺物実測図	94
第31図	H18号住居址及び出土遺物実測図	45	第76図	H51号住居址実測図	96
第32図	H19号住居址及び出土遺物実測図	46	第77図	H51号住居址出土遺物実測図（1）	97
第33図	H20号住居址及び出土遺物実測図	47	第78図	H51号住居址出土遺物実測図（2）	98
第34図	H21号住居址実測図	48	第79図	H52号住居址実測図	101
第35図	H21号住居址出土遺物実測図	49	第80図	H52号住居址出土遺物実測図（1）	102
第36図	H22号住居址及び出土遺物実測図	50	第81図	H52号住居址出土遺物実測図（2）	103
第37図	H23号住居址実測図	51	第82図	H53号住居址出土遺物実測図（2）	104
第38図	H24号住居址及び出土遺物実測図	52	第83図	H53号住居址出土遺物実測図（1）	105
第39図	H25号住居址及び出土遺物実測図	53	第84図	H54号住居址及び出土遺物実測図	106
第40図	H26号住居址実測図	53	第85図	H55号住居址及び出土遺物実測図	108
第41図	H26号住居址出土遺物実測図	54	第86図	H56号住居址及び出土遺物実測図	109
第42図	H27号住居址及び出土遺物実測図	56	第87図	H61号住居址実測図	110
第43図	H28号住居址及び出土遺物実測図	57	第88図	H62号住居址実測図	110
第44図	H29号住居址及び出土遺物実測図	58	第89図	H62号住居址出土遺物実測図（1）	111
第45図	H30号住居址及び出土遺物実測図	59	第90図	H62号住居址出土遺物実測図（2）	112

挿図目次 (後家山遺跡)

第91図	H63号住居址実測図	113	第124図	D1、2、3、5、6、10、25号土坑出土遺物実測図	149
第92図	H63号住居址出土遺物実測図	114	第125図	M1号溝状遺構実測図	150
第93図	H64号住居址及び出土遺物実測図	115	第126図	M1号溝状遺構遺物出土分布図	151
第94図	H65号住居址実測図	116	第127図	M1号溝状遺構出土遺物実測図 (1)	153
第95図	H65号住居址出土遺物実測図 (1)	117	第128図	M1号溝状遺構出土遺物実測図 (2)	154
第96図	H65号住居址出土遺物実測図 (2)	118	第129図	M1号溝状遺構出土遺物実測図 (3)	155
第97図	H65号住居址出土遺物実測図 (3)	119	第130図	M1号溝状遺構出土遺物実測図 (4)	156
第98図	H66号住居址実測図	120	第131図	M1号溝状遺構出土遺物実測図 (5)	157
第99図	H67号住居址実測図	121	第132図	M1号溝状遺構出土遺物実測図 (6)	158
第100図	H68号住居址及び出土遺物実測図	122	第133図	M1号溝状遺構出土遺物実測図 (7)	159
第101図	H69号住居址及び出土遺物実測図	123	第134図	M1号溝状遺構出土遺物実測図 (8)	160
第102図	H70号住居址実測図	124	第135図	M2～9号溝状遺構実測図	163
第103図	H70号住居址出土遺物実測図	125	第136図	M2～7号溝状遺構出土遺物実測図	164
第104図	H71号住居址及び出土遺物実測図	127	第137図	M10、11号溝状遺構実測図	166
第105図	H72号住居址及び出土遺物実測図	128	第138図	ビットB群実測図	167
第106図	H73号住居址及び出土遺物実測図	129	第139図	ビットC群実測図	168
第107図	H74号住居址及び出土遺物実測図	130	第140図	ビットD群実測図	169
第108図	H75号住居址実測図	131	第141図	ビットA群実測図	170
第109図	H75号住居址出土遺物実測図	132	第142図	後家山2号墳全体図	171
第110図	H117号住居址及び出土遺物実測図	133	第143図	後家山2号墳平面図	172
第111図	H117号住居址出土遺物実測図	134	第144図	後家山2号墳主体部実測図	173
第112図	T1号特殊遺構実測図	135	第145図	後家山2号墳主体部断面図	174
第113図	T4号特殊遺構実測図	135	第146図	後家山2号墳出土遺物実測図	175
第114図	T2号特殊遺構及び出土遺物実測図	136	第147図	O T2号全体図及び出土遺物実測図	176
第115図	T5号特殊遺構実測図	137	第148図	遺構外出土遺物実測図 (1)	178
第116図	T3号特殊遺構及び出土遺物実測図	137	第149図	遺構外出土遺物実測図 (2)	179
第117図	1号木棺蓋及び出土遺物実測図 (1)	138	第150図	H39・41・51・52号住居址樹根判定図	186
第118図	1号木棺蓋出土遺物実測図 (2)	140	第151図	作久地域の弥生住居址規模分布図	213
第119図	2号木棺蓋実測図	141	第152図	後家山遺跡住居址規模分布図	214
第120図	D1～3、5、6、8～13号土坑実測図	143	第153図	壺分類図	218
第121図	D14～21号土坑実測図	144	第154図	壺・高坏分類図	219
第122図	D22～28号土坑実測図	146	第155図	甕分類図	220
第123図	D29～32号土坑実測図	148	第156図	鉢・甌分類図	221

表目次 (後家山遺跡)

第1表	周辺の遺跡一覧	6	第13表	H12号住居址出土遺物観察表	40
第2表	H1号住居址出土遺物観察表	17	第14表	H13号住居址出土遺物観察表	41
第3表	H2号住居址出土遺物観察表	22	第15表	H14号住居址出土遺物観察表	43
第4表	H3号住居址出土遺物観察表	24	第16表	H15号住居址出土遺物観察表	44
第5表	H4号住居址出土遺物観察表	27	第17表	H16号住居址出土遺物観察表	44
第6表	H5号住居址出土遺物観察表	29	第18表	H18号住居址出土遺物観察表	46
第7表	H6号住居址出土遺物観察表	32	第19表	H19号住居址出土遺物観察表	46
第8表	H7号住居址出土遺物観察表	35	第20表	H20号住居址出土遺物観察表	47
第9表	H8号住居址出土遺物観察表	36	第21表	H21号住居址出土遺物観察表	48
第10表	H9号住居址出土遺物観察表	36	第22表	H22号住居址出土遺物観察表	51
第11表	H10号住居址出土遺物観察表	36	第23表	H24号住居址出土遺物観察表	52
第12表	H11号住居址出土遺物観察表	38	第24表	H25号住居址出土遺物観察表	53

表目次 (後家山遺跡)

第25表	H26号住居址出土遺物観察表	55	第55表	H63号住居址出土遺物観察表	114
第26表	H27号住居址出土遺物観察表	55	第56表	H64号住居址出土遺物観察表	114
第27表	H28号住居址出土遺物観察表	57	第57表	H65号住居址出土遺物観察表 (1)	118
第28表	H29号住居址出土遺物観察表	58	第58表	H66号住居址出土遺物観察表 (2)	120
第29表	H30号住居址出土遺物観察表	59	第59表	H68号住居址出土遺物観察表	122
第30表	H31号住居址出土遺物観察表	60	第60表	H69号住居址出土遺物観察表	124
第31表	H32号住居址出土遺物観察表	62	第61表	H70号住居址出土遺物観察表	126
第32表	H33号住居址出土遺物観察表	65	第62表	H71号住居址出土遺物観察表	126
第33表	H34号住居址出土遺物観察表	69	第63表	H72号住居址出土遺物観察表	127
第34表	H35号住居址出土遺物観察表	71	第64表	H73号住居址出土遺物観察表	129
第35表	H36号住居址出土遺物観察表	73	第65表	H74号住居址出土遺物観察表	130
第36表	H37号住居址出土遺物観察表	73	第66表	H75号住居址出土遺物観察表	132
第37表	H38号住居址出土遺物観察表	76	第67表	H117号住居址出土遺物観察表	134
第38表	H39号住居址出土遺物観察表	77	第68表	T2号特殊遺構出土遺物観察表	135
第39表	H41号住居址出土遺物観察表	81	第69表	T3号特殊遺構出土遺物観察表	137
第40表	H42号住居址出土遺物観察表	83	第70表	M1号木棺墓出土遺物観察表	139
第41表	H43号住居址出土遺物観察表	83	第71表	D1、2、3、5、6、10、25号土坑出土遺物観察表	149
第42表	H45号住居址出土遺物観察表	87	第72表	M1号溝状遺構出土遺物観察表 (1)	160
第43表	H47号住居址出土遺物観察表	90	第73表	M1号溝状遺構出土遺物観察表 (2)	161
第44表	H48号住居址出土遺物観察表	91	第74表	M1号溝状遺構出土遺物観察表 (3)	162
第45表	H49号住居址出土遺物観察表	93	第75表	M2~7号溝状遺構出土遺物観察表	165
第46表	H50号住居址出土遺物観察表	95	第76表	ビット計測表 (1)	168
第47表	H51号住居址出土遺物観察表	99	第77表	ビット計測表 (2)	169
第48表	H52号住居址出土遺物観察表	100	第78表	後家山2号墳出土遺物観察表	175
第49表	H53号住居址出土遺物観察表	106	第79表	O T2号出土遺物観察表	176
第50表	H54号住居址出土遺物観察表	107	第80表	遺構外出土遺物観察表	177
第51表	H55号住居址出土遺物観察表	109	第81表	出土陶磁器類一覽表	180
第52表	H56号住居址出土遺物観察表	109	第82表	後家山遺跡住居址一覽表 (1)	215
第53表	H62号住居址出土遺物観察表 (1)	111	第83表	後家山遺跡住居址一覽表 (2)	216
第54表	H62号住居址出土遺物観察表 (2)	112	第84表	後家山遺跡住居址出土土器組成表	222

挿図目次 (東久保遺跡)

第1図	東久保遺跡位置図	361	第11図	D1号・坑穴実測図	372
第2図	東久保遺跡Ⅰ・Ⅱ全体図	362	第12図	M1・2号溝状遺構実測図	373
第3図	H1号住居址実測図	363	第13図	M3・4号溝状遺構実測図	374
第4図	H1号住居址出土遺物実測図	364	第14図	東久保西古墳検出状況図	375
第5図	H2号住居址実測図	365	第15図	東久保西古墳全体及び石室展開図	376
第6図	H2号住居址出土遺物実測図 (1)	366	第16図	東久保西古墳出土遺物実測図 (1)	377
第7図	H2号住居址出土遺物実測図 (2)	367	第17図	O T1号墓出土遺物実測図	379
第8図	H3号住居址実測図	369	第18図	遺構外出土遺物実測図	379
第9図	H3号住居址出土遺物実測図	370	第19図	O T1号墓実測図	380
第10図	F1号独立柱建物址実測図	371			

表目次 (東久保遺跡)

第1表	H1号住居址出土遺物観察表	364	第3表	H3号住居址出土遺物観察表	371
第2表	H2号住居址出土遺物観察表	368	第4表	東久保西古墳出土遺物観察表	378

挿図目次 (宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ)

第1図	宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ地点位置図	407	第37図	D9・19・20・25号土坑実測図	453
第2図	Ta1・2号竪穴状遺構実測図	409	第38図	D32・51号土坑実測図	454
第3図	Ta3・4・5号竪穴状遺構実測図	410	第39図	D1～D9号土坑実測図	455
第4図	宮田遺跡Ⅰ地点ビット群配置図1・2	411	第40図	D10～D18号土坑実測図	456
第5図	ビット群配置図1-(1)・(2)・(3)・(4)	412	第41図	D19～D27号土坑実測図	457
第6図	ビット群配置図2-(1)・(2)	413	第42図	D28～D36号土坑実測図	458
第7図	宮田遺跡Ⅲ地点F1・2号孤立柱建物址・ビット群3	414	第43図	D37～D46号土坑実測図	459
第8図	F1・2号孤立柱建物址・ビット群配置図3-(1)	415	第44図	D47～D55号土坑実測図	460
第9図	F1・2号孤立柱建物址実測図	416	第45図	D56～D59号土坑実測図	461
第10図	建物址群・ビット群配置図1-(1)・(2)・(3)・(4)	417	第46図	D60～D64号土坑実測図	462
第11図	1号建物址群・ビット群実測図1-(2)	418	第47図	D65～D73号土坑実測図	463
第12図	2号建物址群・ビット群実測図1-(1)	419	第48図	1・2号井戸址実測図(D63・D64)	464
第13図	3号建物址群・ビット群実測図1-(1)	420	第49図	3号井戸址実測図(D21)	465
第14図	4・5・6号建物址群・ビット群実測図1-(4)	421	第50図	1・4号竪穴実測図	466
第15図	ビット群実測図2-(1)	422	第51図	2号竪穴実測図	467
第16図	ビット群実測図2-(2)	423	第52図	3号竪穴実測図	468
第17図	宮田遺跡Ⅰ地点建物址群・溝状遺構・他遺構配置図	433	第53図	中世・近世陶磁器類実測図(1)	469
第18図	M1・2・3号溝状遺構実測図	435	第54図	中世・近世陶磁器類実測図(2)	470
第19図	M4・5・6号溝状遺構実測図	436	第55図	中世・近世陶磁器類(1)	471
第20図	M7・8・9・10号溝状遺構実測図	437	第56図	中世・近世陶磁器類(2)	472
第21図	M11・12・13号溝状遺構実測図	438	第57図	土坑出土遺物実測図(1)	474
第22図	M14・15号溝状遺構実測図	439	第58図	土坑出土遺物実測図(2)	475
第23図	M16・17・18号溝状遺構実測図	440	第59図	土坑出土陶磁器類	476
第24図	M19・20・21号溝状遺構実測図	441	第60図	溝状遺構出土遺物実測図(1)	478
第25図	M22・23・24号溝状遺構実測図	442	第61図	溝状遺構出土遺物実測図(2)	479
第26図	M25・26・27・28号溝状遺構実測図	443	第62図	溝状遺構出土遺物実測図(3)	480
第27図	M29・30・31・32号溝状遺構実測図	444	第63図	竪穴状遺構出土遺物実測図	481
第28図	M33・34号溝状遺構実測図	445	第64図	ビット出土遺物実測図	481
第29図	1号集水坑実測図(D56)	446	第65図	グリッド出土遺物実測図(1)	484
第30図	2号集水坑実測図(D66)	447	第66図	グリッド出土遺物実測図(2)	485
第31図	3号集水坑実測図(D68)	448	第67図	グリッド出土遺物実測図(3)	486
第32図	4号集水坑実測図(D28)	449	第68図	グリッド出土陶磁器類	487
第33図	5号集水坑実測図(D62)	449	第69図	表探遺物実測図	488
第34図	D4・5・6号土坑実測図	450	第70図	溝状遺構に区画される建物址群	493
第35図	D7・8・10・12・13・17・18・24・26号土坑実測図	451	第71図	溝状遺構に区画される竪(堀)	494
第36図	D27・31・33・52・54・69・70・72号土坑実測図	452			

表目次 (宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ)

第1表	Ta1号竪穴状遺構計測表	409	第12表	ビット計測表	430
第2表	Ta2号竪穴状遺構計測表	409	第13表	ビット計測表	431
第3表	Ta3号竪穴状遺構計測表	410	第14表	溝状遺構計測表	445
第4表	Ta4号竪穴状遺構計測表	410	第15表	陶磁器類観察表	470
第5表	Ta5号竪穴状遺構計測表	410	第16表	土坑出土遺物観察表	473
第6表	ビット計測表	424	第17表	溝状遺構出土遺物観察表	477
第7表	ビット計測表	425	第18表	Ta4号竪穴状遺構出土遺物観察表	481
第8表	ビット計測表	426	第19表	ビット出土遺物観察表	481
第9表	ビット計測表	427	第20表	グリッド出土遺物観察表	483
第10表	ビット計測表	428	第21表	表探出土遺物観察表	487
第11表	ビット計測表	429			

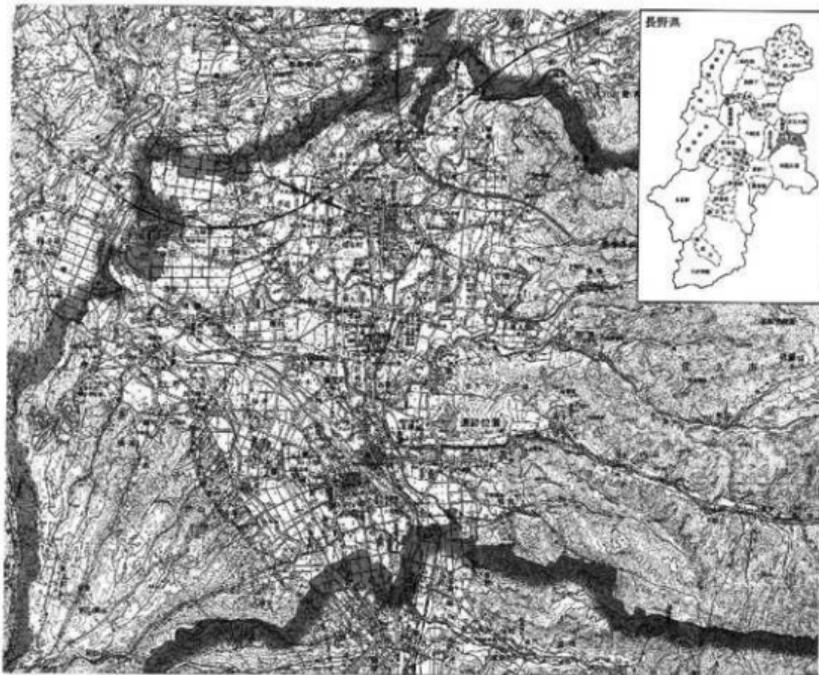
第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査の経緯

後家山遺跡、東久保遺跡、宮田遺跡Ⅰ・Ⅱが所在する佐久市は長野県の東端に位置し、北に浅間山、南に八ヶ岳連峰、東に荒船山塊などの山並みに抱かれた海拔700m内外に広がる高原都市である。

佐久市においては、平成13年第3次総合計画の中において「いきいき交流文化都市」を宣言し、その理念のもと様々な事業が進められている。中でも市民生活におけるスポーツ振興は重点目標であり、“一市民一スポーツ”を目指し実践運動を展開している。このような中においてサッカー・野球・陸上競技などの高度なスポーツ観戦や競技力の向上が図られ、また生涯を通じてスポーツに親しみ、世代間交流や市民の憩いの場として利用可能な佐久総合運動公園建設が計画された。場所は佐久市の瀬戸・平賀にまたがる宮田・後家山・東久保地帯の丘陵であり、計画面積は21万㎡が予定された。

佐久市都市計画課は、平成12年に佐久市教育委員会に当地籍の遺跡の有無についての照会を行った。教育委員会では予定地に後家山遺跡、東久保遺跡、宮田遺跡が存在することを回答した。よって、都市計画課と当教育委員会で保護協議を行った結果、平成13年春より試掘調査を行い遺跡の存在する部分については記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成13年5月より宮田遺跡から行われ、続く平成14年には後家山遺跡、東久保遺跡が調査され、同年秋に発掘調査は終了した。整理作業は平成14年冬から始められ、平成15年に主だった作業を行い、平成16年に原稿執筆を行い報告書を刊行した。



第1図 後家山遺跡、東久保遺跡、宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ位置図 (1:100,000)

第2節 調査組織

調査主体者	佐久市教育委員会		教育長	依田英夫（平成13年6月退任） 高柳 勉（平成13年7月就任）
事務局	教育次長	小林宏造（平成12年度～13年度4月） 赤羽根寿文（平成15・16年度）	黒沢俊彦（平成13年度～14年度）	
	文化財課長	草間芳行（平成13年度） 嶋崎節夫（平成14年度～平成15年度） 小林正衛（平成16年度）		
	文化財係長	萩原一馬（平成13年度4月） 森角吉晴（平成13年度5月～14年度） 高村博文（平成15・16年度）		
	文化財係	林 幸彦 三石宗一（平成14年度～平成15年度） 羽毛田卓也（平成13年度・平成16年度） 山本秀典（平成13・14年度）	須藤隆司 小林真寿 富沢一明 上原 学 赤羽根太郎（平成15・16年度） 出澤 力	

調査体制

調査担当者	羽毛田卓也（平成13年度）	富沢一明（平成13年～平成16年度）				
調査主任	佐々木宗昭（平成14年～平成16年度）					
調査員	浅沼ノブ江	市川 昭	岩下友子	白田真杉	江原富子	堺 益子
	萩原千鶴子	柏木貞夫	柏木三郎	柏木義雄	柏原松枝	小金沢たけみ
	金井保夫	菊池喜重	小須田サクエ	小林よしみ	小山 功	小林まさ子
	桜井牧子	桜下純子	佐々木 正	佐々木久子	佐藤 剛	副島充子
	澤井卓月	島田幹子	田中章雄	田中ひさこ	中嶋照夫	前島道則
	中嶋フクジ	中嶋良造	橋詰勝子	橋詰信子	花里四之助	山口智洋
	花里三佐子	真嶋保子	森角雅子	柳沢季子	依田みち	内藤文子
	和久井義雄	渡邊久美子	渡辺長子	中島里住	高見澤綾	須江真理
	加藤美雪	相澤昭二	浅沼直美	遠藤光美	菊原 哲	
	桜井理也	澤井秋雄	大工原敏彦	高畑貞彦	土屋詠司	



平成14年夏 後家山遺跡にて

第3節 調査日誌

平成12年度

- 2・3月 宮田遺跡側より試掘調査開始
試掘はその後本調査と平行して行う。

平成13年度

- 5月7日 宮田遺跡谷部より本調査開始
中世の遺構群検出
- 5月10日 野沢中学校職場体験
- 7月2日 後家山遺跡試掘開始
- 7月28日 第1回目の航空測量
- 8月2日 後家山遺跡本調査開始
弥生時代後期住居址群、環濠等を検出
- 8月6～8日 少年考古学教室開催
- 9月13日 弥生期木棺墓より「螺旋型鉄釘」とガラス小玉出土
- 10月20日 瀬戸・後家山地区遺跡見学会
- 10月5日 後家山2号墳調査開始
- 11月26日 第2回目の航空測量
- 12月3日～3月 整理作業

平成14年度

- 4月8日 本調査再開 本年度より2班体制
後家山遺跡中央部尾根と南側斜面より調査開始
- 5月20日 野沢中学校職場体験
- 5月28～31日 久城山小学校発掘体験
- 6月4日 I151号住居址より炭化木製品
「曲柄装着平鍬」出土
- 6月25・28日 佐久建設事務所職員研修 遺跡見学
- 6月29日 後家山遺跡現場説明会
- 8月27日 後家山・東久保・宮田遺跡航空測量
- 9月2日 東久保西古墳調査開始
- 10月7日 宮田遺跡残り部分 調査開始
- 10月18日 すべての調査を終了し機材撤収する。
- 10月21日～3月 整理作業 土器洗い開始
- 10月26日 炭化木製品「曲柄装着平鍬」新聞報道する。

平成15年度

- 4月～3月 報告書作成業務開始
注記・土器復元・図面修正
遺物実測・写真撮影・樹種・種子同定
図版作成
- 4月9日 「螺旋型鉄釘」新聞報道する。

平成16年度

- 原稿執筆をして報告書を刊行する。



宮田遺跡と試掘風景



宮田遺跡調査風景



遺跡現場説明会風景



少年考古学教室開催

第二章 遺跡の立地と環境

第1節 自然的環境

佐久平は長野県内を流れる大河千曲川の上流部に位置し、浅間山・八ヶ岳・荒船山などの山々に囲まれた海拔700mを平均とする盆地である。この盆地の中央部には南から千曲川が先の山々から流れ出た湯川・滑津川・片貝川などの中小河川を集め北流している。佐久平の地形は大きく北と南で異なる。北側は浅間山の火山活動により形成された火山灰台地が浅間山麓より広がり、特に佐久市長土呂・小諸市耳取付近では火山灰台地特有の「田切り」地形が発達している。これとは趣を異にして、南側は蓼科・八ヶ岳山麓から扇状に延びる尾根とそれら尾根の谷筋より流れ出る小河川が造り出す小規模な扇状地と千曲川や片貝川の氾濫により形成された沖積低地が広がり、のどかな水田風景が広がっている。

後家山・東久保・宮田遺跡はこの佐久平の東端、佐久市瀬戸・平賀に所在する。遺跡は群馬県境に連なる東部山地の一つである物見山（標高1375.4m）から東に延びる山麓が佐久平に飛び出した丘陵先端に位置する。この丘陵は千曲川の支流である志賀川と滑津川に挟まれた海拔900～700mの低丘陵で、浸食が進み東西に延びる細い尾根と南北には小さな谷地形を形成している。遺跡はこの尾根上に後家山・東久保遺跡が、谷間に宮田遺跡が広がっている。

遺跡内の最高標高は海拔736m、水田地帯との標高差は約51mを測る。この丘陵の地質は基盤層が第3紀層に由来する粘土質層であり、谷部は丘陵部から流れ込み堆積した強粘性の黒色土が堆積している。

第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する瀬戸・平賀地帯及びその周辺地区には、西に傾斜する山地や山裾、また小河川の沖積低地に数多くの遺跡が散在する。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先石器時代の遺跡は確認されていないが、後家山遺跡から今回の調査でナイフ型石器が出土している。弥生期の遺構よりの出土であり、層位的な見知は得られなかったが、周辺部の丘陵上には風化ばいりん土層があり今後発見される可能性はある。続く縄文時代の遺跡としては、当遺跡の北方1kmに寄山遺跡群が存在する。この寄山遺跡群は中条峯遺跡と合わせて、平成元年から平成4年にかけて県営リサーチパーク造成事業に伴い発掘調査が行われた。寄山・中条峯・勝負沢の各遺跡からは縄文前期～中期、平安時代に至る住居址群とその包含層からおびただしい量の土器・石器が出土した。また、近年には白田町大奈良地帯で大奈良遺跡が調査され数石住居址を含む住居址群が調査され、沖積低地での縄文遺跡の一端が解明されつつある。

次に弥生時代の遺跡としては、まず遺跡の西方1.5kmの志賀川と滑津川の合流地点に深堀遺跡群が存在する。この深堀遺跡は昭和47年と平成10年に調査が行われ弥生時代中期栗林期の住居址6軒が調査されている。この深堀遺跡の栗林式土器は今日佐久平で初現的な土器群として位置づけられており、佐久平において栗林期の集落が集中する湯川中流域の北西の久保遺跡や根々井芝宮遺跡などに先駆けて集落が形成されたと考えられる。次に桶村遺跡がある。昭和57・58年に園場整備に伴い発掘調査が行われている。その結果、弥生期の遺構としては中期栗林期の住居址5軒、後期吉田式の住居址17軒とともに環壕2本が調査されている。また、北西に隣接する上の台遺跡からは後期吉田式の住居址2軒が調査されている（両遺跡の吉田式については本報告がなされていない為不確定）。これら調査された遺跡はいずれも遺跡全体を調査したものではないが、集落規模は小規模な集落と判断されている。

古墳時代になると、まず前期の集落が深堀遺跡IVで検出されている。住居址は9軒が調査され、弥生後期箱清水式の影響が得られる土器前期段階の土器要素となった土器群が出土している。また、この深堀遺跡からは試掘資料であるが北西の久保遺跡と平行する中期前半を示す有段口縁壺が出土しており、本調査とならなかった住居址群の中に当該期の資料が包蔵されている可能性がある。後期の集落遺跡としては桶村遺跡がある。検出遺構は住居址が273軒と掘立柱建物址・土坑等が多数検出され、遺物も土師器・須恵器をはじめ白玉等の遺物が数多く出土した。また、平成11年にこの未調査部分である園場整備の中央を国道バイパス建設に伴い発掘調査が行われた。その結果、住居址35軒、掘立柱建物址10棟などが検出された。検出された住居址の時期は6世紀代を中心とする古墳時代中期末から後期であり、時期変遷も3時期が捉えられた。このことから昭和57・58年の調査も含め桶村遺跡の古墳時代集落は比較的継続時期のままであった集落であり、また規模も非常に大きいことから集落の性格解明に興味を持たれる。

また、古墳跡の調査としては後家山遺跡が所在する丘陵の先端に昭和49年に調査された後家山古墳がある。主体部は横穴式石室と考えられ、玄室は2.3m×2.9mの方形に近い形態である。羨道部が破壊されていたため、石室形態が両袖なのか無袖なのかは不明であるが、石室内から切子玉8、管玉7、ガラス小玉14、小型白玉12、鉄鏃12、直刀片5、



第2図 周辺の遺跡位置図 (1:20,000)

刀子2が出土した。次に平成13年に後家山の丘陵の南斜面において、東久保古墳群1号墳が調査されている。本古墳は巨石を使った両袖形横穴式石室を主体部とする古墳で、一部に周溝と列石が確認された。出土遺物は石室内より瑪瑙の勾玉が、墳丘部分より須恵器甕が出土している。このように滑津川に沿った丘陵の南斜面には東久保古墳群、東姥石古墳群、月崎古墳群、長峰古墳群といった古墳群が存在し、佐久地域のなかでも古墳密集地帯を形成している。これら古墳群の密集理由は解明されていないが、まず第一に考えられるのは石室使用に適した石材が入手しやすいということ。また第二に種村遺跡などの大規模な古墳時代後期集落が周辺に所在する事などがあげられる。ただこの集落との関係で、種村遺跡についてはこれら古墳群と形成時期がやや異なり、未調査部分に7世紀代の集落が存在するのか、或いは滑津川の対岸の平賀中屋敷遺跡等の集落の墓域かは今後の調査課題である。

次に、奈良・平安時代の調査は、深堀遺跡・平賀中屋敷遺跡等で集落が調査されている。特に深堀遺跡Ⅱ～Ⅴでは台地上の広範囲な面積が調査され9世紀～10世紀の集落が調査された。これらの住居址群は比較的規模の小さな住居址

No.	遺跡名	所在地	縄	弥	占	奈	平	中	備考
1	後家山遺跡	平賀字後家山		○					H13・14年度調査
2	後家山古墳	平賀字後家山			○				S49年度発掘調査 納蔵
3	宮田遺跡	瀬戸字宮田	○						H13・14年度調査
4	東久保遺跡	平賀字東久保・瀬戸字宮田			○	○	○		H13・14年度調査
5	樋村遺跡群	平賀字樋村・上吉田・山崎外		○	○	○	○		S57・58年度1・2次発掘調査
6	関戸遺跡	平賀字関戸田・後家					○		
7	長塚古墳群	瀬戸字長塚	○		○				S62年度調査
8	東郷古墳群	平賀字東郷石					○		
9	月崎古墳群	平賀字月崎					○		
10	内畑城跡	平賀字月崎						○	
11	西和田古墳群	内山字西山			○				
12	平賀城跡	平賀字城平・北谷津・邊平外						○	
13	北谷津遺跡	平賀字北谷津・南谷津					○		
14	上屋敷古墳	平賀字上屋敷				○			
15	池邊跡	平賀字池		○		○	○	○	
16	八十海戸遺跡	富和字八十海戸						○	
17	城平遺跡群	平賀字城平・崎井・常磐字八十海戸外	○	○		○	○	○	
18	宮の脇遺跡	瀬戸字宮の脇	○		○	○	○		
19	樋山城跡	瀬戸字城						○	
20	藤敷古墳群	瀬戸字藤敷				○			
21	南郷遺跡	瀬戸字南郷				○	○	○	
22	大日山古墳	瀬戸字中条平						○	
23	中条塚遺跡	瀬戸字中条塚・中条平			○	○	○		H元・2・3年度調査
24	中条塚古墳群	瀬戸字中条塚				○			
25	袴山遺跡	瀬戸字藤敷武・志賀字荷山・葛輪於・町田	○					○	H元・2・3・4年度調査
26	中反遺跡群	瀬戸字中反・中塚敷						○	
27	八反田城跡	瀬戸字八反田						○	
28	八反田遺跡	瀬戸字八反田						○	
29	上の台遺跡	瀬戸字上の台・天神前		○					S57年度発掘調査
30	西屋敷遺跡	瀬戸字西屋敷						○	
31	東千石平遺跡	瀬戸字千石平・西屋敷				○	○	○	
32	深瀬遺跡群	瀬戸字深瀬・狐塚・残塚・下原・西原外	○	○	○	○	○	○	H11・12年度調査
33	川原田遺跡	平賀字川原田						○	
34	平賀中塚敷遺跡	平賀字中塚敷・下屋敷・上屋敷			○	○	○	○	H17年度調査
35	河原遺跡	平賀字河原					○		
36	中塚敷遺跡	平賀字中塚敷					○		
37	久瀬遺跡	太田字久瀬塚・飛越・飯塚		○	○	○	○		H11・12年度調査
38	新町遺跡	中込字新町・横道・狐塚・猪塚				○	○		

第1表 周辺の遺跡一覧

からなり、集落の区画の意味いくつかの細い溝状遺構により区画されていた。特色ある遺物としては「蛙」の線刻陶がある土師器や墨書土器、青銅製器具、三果須頭太刀柄頭などがあつた。

鎌倉時代以降になると調査事例は少なく不明な部分が多い。調査例としては深塚遺跡において台地東端にある八反田城の堀跡の調査と、坪の内遺跡の中世の竅穴状遺構がある。また、城跡については滑津川対岸の平賀城跡、丘陵奥の内山城跡等があるが、これら城郭は中世後期に武田氏の佐久侵攻にさいし活躍したとされる平賀玄信とともに語られる部分もあるが、今日この平賀玄信の実在・非実在について議論されている事もあり、これら城郭の歴史的な位置付けは今後の研究成果に因るところが大きい。

以上、後家山・東久保・宮田遺跡周辺の調査された遺跡をもとに歴史的環境を概観した。

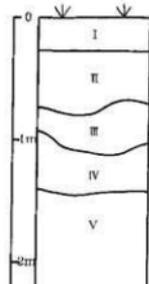
第三章 基本層序と試掘調査の概要

第1節 基本層序

後家山・東久保遺跡

後家山遺跡及び東久保遺跡における基本層序は5層に分かれる。尾根部分と斜面部においては礫の混入に差が見られたが基本的には同一であった。第1層は耕作土で締まりの弱い粘土層であった。遺構の確認面は、この第1層直下であり、耕作土を除去すると遺構検出が可能であった。第2層下は所謂「風化ばい乱土」であり、第2紀層は風化した粘土堆積であった。その為、下層にいくに従い粘質度を増し第4層は白色化していた。

このような土壌の為、自然地形及び畑作による削平を受けていない部分は遺構の残存状態が良好であったが、遺物に関しては、土器等が粘土に付着してしまい、施文も不明となる物が多かった。



第3図 後家山・東久保遺跡基本層序模式図

第I層 耕作土

第II層 褐色土 (10YR4/4)

こまかな黒色土粒子 (0.1~0.3mm大) が多量混入し、なめのブロック微量混入。

第III層 褐色土 (10YR4/6)

こまかな黒色土粒子 (0.1~0.3mm大) が微量混入し、なめのブロック少量混入。

第IV層 黄褐色土 (10YR5/6)

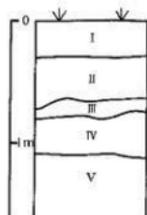
なめの岩盤

第V層 灰白色土 (10YR7/1)

なめの岩盤

宮田遺跡

宮田遺跡I地点とIII地点の地形は、まずI地点が北西側に抜ける小さな谷地形であり、全体を粘質の黒色土が覆っていた。これに対しIII地点は丘陵裾部から沖積地へと地形が変換する部分であり、黒色土と丘陵本体の層序がむき出しとなっている部分とに分かれたが、基本的な層序は同一のため、I地点の基本層序を示す。遺構確認面はII層の黒色土層上面であったが、宮田遺跡I地点の谷部奥にかけては第I層耕作土と第II層黒色土間に褐色の耕作土的な土壌が厚く堆積し、中世の遺構確認面までは深いところで80cm以上の堆積が確認された。



第I層 耕作土

第II層 黒色土 (10YR2/1)

小石少量混入。

第III層 黒褐色土 (10YR3/2)

ローム粒子多量混入。(ローム層の前位層)

第IV層 黄褐色土 (10YR5/8)

ローム層 (石が混入)

第V層 黄褐色土 (10YR5/6)

ローム層 (シルト質の層が混入)

第4図 宮田遺跡I・III基本層序模式図

第2節 試掘調査と検出遺構の概要

(1) 試掘調査の概要

今回の発掘調査にあたって試掘調査は、緑地保存区と急傾斜地等で明らかに遺構の存在が否定できる所及び周辺部の試掘調査により遺構の有無が判断できる所をのぞき、全向に試掘トレンチを設定し調査にあたった。

その結果、まず、北方の瀬戸地帯側に延びる尾根上には縄文時代と考えられる落とし穴が発見されたのみで、遺構の面的な広がりには確認できなかった。西側の尾根下である谷部においては中世の所産と考えられる遺構群が全体に広がり宮田遺跡Ⅰ地点として調査が行われた。次に西側に延びる丘陵本体の尾根筋には丘陵の最高地点から奥まった尾根上に弥生時代後期の集落が検出された東久保遺跡、沖積地に臨む尾根筋と小さな谷を挟んだ南斜面には同じく弥生時代後期の集落が検出された後家山遺跡が発見された。なお、本丘陵の北斜面部分は遺構の存在が確認されなかったが、丘陵と沖積地の接点部分で中世の遺構群が検出され、宮田遺跡Ⅲ地点とし調査が行われた。

(2) 検出遺構の概要

後家山遺跡

竪穴住居址	7 軒 (弥生中期2・弥生後期6 8・平安1)
特殊遺構	5 基
木棺墓	2 基 (弥生後期)
土 坑	3 0 基 (落とし穴2)
溝状遺構	9 本 (弥生中期環濠1)
古墳跡	1 基 (古墳中期末～後期初頭)
旗 塚	1 基 (中世～近世)
ピット群	4 カ所

東久保遺跡

竪穴住居址	3 軒 (弥生後期)
掘立柱建物址	1 棟
溝状遺構	3 本
古墳跡	1 基 (古墳終末期)
集石墓	1 基 (中世)

宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ地点

竪穴状遺構	5 基
掘立柱建物址	2 棟
建物址群	6 カ所
土 坑	7 3 基 (井戸・集水遺構・炭焼きの土坑含む)
溝状遺構	3 4 本
畝 跡	4 カ所
ピット	672 基

出土遺物

ナメ型石器、縄文土器、弥生土器(神保宮Ⅰ塚式・栗林式・箱清水式)、玉類(ガラス小玉・管玉・勾玉)、石器類(磨製石斧・磨製石鏃・石包丁・磨石・敲き石・紡錘車)、鉄製品(鉄鏃・螺旋型鉄釘)、炭化木製品(曲柄装着平鍬)、炭化種子
土師器、須恵器、土鍋、石臼、杵き臼、陶磁器類(青磁碗・染付け)、古銭

後家山遺跡

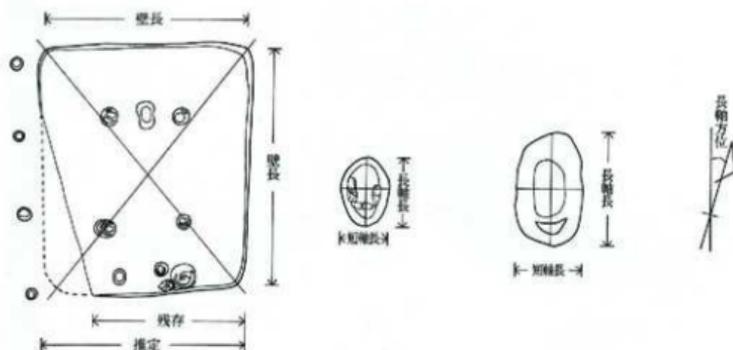
第Ⅳ章 後家山遺跡



後家山遺跡、東久保遺跡、宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ航空写真（筋状の掘込みが試掘トレンチ）

凡 例

1. 本章は後家山道跡部分の道構・遺物を取り上げた。なお、後家山2号墳は本章に掲載した。また東久保道跡の凡例も同一とする。
2. 道構の略記号は、住居址(H)・掘立柱建物址(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)である。
3. 挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
 竪穴住居址・掘立柱建物址1/80 炉(カマド)1/40 土坑1/60 古墳・周溝墓1/80.1/100
 土器1/4・石器1/3
 その他については個々にスケールを記載
4. 道構の海拔標高は各道構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
5. 土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
6. 遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。
7. 調査区グリッドは全体の凡例で述べた道跡全体の区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
8. 住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、炉は面積に含め計測してある。
9. 道構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。
10. 各道構の計測は下の凡例に従った。



11. 挿図中のシャドントンは以下のことを示す。その他の指定については本文中で個々に示す。



12. 出土土器の施文分類は下図に従い、用語も下記を使用した。



13. 出土遺物の観察表は下記項目で記載した。

土器・土製品								(単位 cm)	
No.	器種	法 帯			成形・調整・文様		色調	備 考	出土位置
		口径	底径	器高	外 面	内 面			

石器・鉄製品・玉類							(単位 mm)		
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所 見	出土位置

①Noは遺構平面図での出土位置及び写真図版番号と一致する。

②() は推定値、() は残存値を表す。

③出土位置の数値は床面より浮いた状態で出土したものについて、何cm浮いていたかを示す。

④出土位置の区割りは住居址を四分割して基本的に北東角のマスよりⅠ区で時計と逆回りⅣ区までとする。

第1節 後家山遺跡の概要

今回調査された後家山遺跡の範囲は後家山の西にのびる上丘陵尾根と小さな谷を挟み南面する山麓斜面である。調査面積は両地点合わせて22010㎡であり、確認された主な遺構としては弥生時代中期(栗林期)住居址2軒、同時代後期(箱清水期)住居址68軒、環濠1本、木棺墓2基、平安時代住居址1軒、古墳(5世紀後半～6世紀前半)1基、溝状遺構、土坑、塚である。

この内、弥生中期の集落は丘陵上に遺地する事や環濠を伴う事で特に注目される。住居址の検出は2軒のみであったが、現状から判断すると既に自然地形の傾斜等で削平された住居も存在したと考えられる。ただ、未調査部分も含めても5～6軒程度の集落と考えられる。この集落を囲むように環濠が検出された。この環濠は尾根先端部をのぞき一部浅くなる部分もあるがつながっており、未検出部分も含めると約3000㎡の範囲を区画していた。環濠は覆土上層から弥生後期の箱清水式土器が破棄されたような状態で出土し、環濠中層から底面にかけて弥生中期の栗林式土器と黒曜石剥片が出土した。佐久地域において丘陵上の弥生中期集落はあまり検出例がなく、また明白な環濠を伴う事例も初めてである。今回の後家山遺跡の中期集落が湯川周辺に展開する中期集落とどのような関係にあるのか、また後家山西に広がる沖積地に展開する竊土遺跡の同時期住居との関係も含め今後の研究課題となった。

次に、後家山遺跡からは丘陵尾根に沿って弥生後期の所産として68軒の住居址が調査された。また丘陵奥に所在する東久保遺跡では後期住居址12軒が調査され、地形の状況から20軒近い集落の存在が想定できた。よって後家山には弥生後期の住居が累計で100軒近く集まっていた事となる。そして、これら両遺跡の集落は沖積地水田面から離れた所に立地し、特に東久保遺跡は50mもの標高差を持つ高所に集落を営んでおり、弥生時代集落の分類では「高地性集落」と呼ばれる可能性が指摘できた。しかし、今回の集落について、その遺構配置や出土遺物等の検討をした結果、本地域他の弥生時代後期集落との差異を明らかにすることは難しく、結論としては佐久平における弥生時代後期の集落としては普遍的な在処と考えられた。

出土遺物としては弥生中期(栗林式)や弥生後期(箱清水式)などの土器類を中心に磨石や敷石といった石器類が多く出土した。特筆すべき出土遺物としては弥生後期の竇穴住居址から翡翠の勾玉や碧玉製管玉・ガラス小玉等の玉類、鉄鍔を含む鉄製品等がやや大きめの住居址から出土し、特殊遺物の出土傾向を示唆した。また、M1号溝状遺構である「環濠」からは弥生時代中期栗林式成立前段階の土器が少量であるが出土した。これら土器群は群馬県北西部に広がる所謂「神保富士塚式」と類似する物があり、佐久地域の出土としては希少な例となった。この他特に注目される出土遺物として特異な形態の「螺旋型鉄剣」と「曲柄装着平鍔」がある。

まず、螺旋型鉄剣は弥生時代後期の所産と考えられる木棺墓から検出された。遺跡内では2基の木棺墓が検出されている。この内の1号木棺墓から鉄剣とガラス小玉54点が出土した。木棺墓の形態は長方形で両側に小穴があり、所謂「小口式の組合わせ木棺墓」と考えられる。規模は長軸1.9m・短軸80cmで東西方向に長軸を持つ。鉄剣はこの土壌内中央部北よりから発見された。埋葬頭位はガラス小玉が土壌東側から纏まって出土していることから、これを胸飾りの一部と推定すると頭位は東であり、長野県内の多くの出土事例と同じく鉄剣は右腕の装着が考えられた。形状はほぼ円形を保っており、出土時の観察では8～9本の鉄輪が確認できた。形態は保存処理の結果、5本一組と6本一組の螺旋状の鉄剣2つが連結していると判明した。この内屑側に近い一組は鉄の幅が広い部分から徐々に細くなる特異な形態であることが確認されている。今回の出土資料は、円形異形の鉄剣を同時に使用しているという全国でも唯一の資料であり、今後注目される鉄剣である。

次に「曲柄装着平鍔」は弥生時代後期の焼失した竇穴式住居址の床面から炭化した状態で出土した。本址は遺跡内でも規模の大きな家であり、この他にガラス小玉の出土があった。平鍔は住居址の東側の壁際から表を上にした状態で出土し、全長は49cmを覆り刃部先端が一部欠損していたがほぼ完形である。樹種はアサダであることが判明している。本製品の出土意義は、まず第一に住居址から出土したことにより出土木製品品の所属時期がはっきりと確定できる事。第二に今回出土の平鍔は東海地方と共通する形態を持っており、その分布域の問題解明の糸口となる事。そして第三に出土地点が希少な例であるという事である。現在までの研究成果では弥生時代中期から古墳時代前期初葉まで農具はこの出土事例から水田などの生産域近くは共同保管し、集落や特定所有者へ移行するのは前方後田墳が出現する古墳時代前期前半からであると考えられている。しかし、今回の出土場所は遺跡内でも人の型竇穴式住居からであり、この農具保管体制の定義に一石を投じる事になると考えられる。

以上が弥生時代を中心とした後家山遺跡の概要である。



第6図 後家山遊群全体図 (1 : 1500)

第2節 遺構と遺物

1. 竪穴住居址

(1) H1号住居址 (第7図, 写真版四)

本住居址は、調査区西端の台地の先端部であるB-キ-12・13、B-ク-12・13Grに位置する。残存状態は良好である。

形態はほぼ長方形を呈する。住居址北側主柱六間に炉が造られている。規模は北壁3.88m・南壁3.62m・西壁4.76m・東壁4.23mで、壁高さは南東コーナーより22cmを測る。壁は緩やかに立ち上るが、主軸方位はN-11°Eを示す。住居址の床面積は17.7m²を測る。覆土は3層に分れる。床は住居址炉周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を敷いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は東壁の一部と西壁中央から南西コーナーにかけて確認された。溝幅は9~25cmで深さは2~16cmを測る。断面の形態はU字形である。柱穴は3個が検出された。規模はP1が径24cm・深さ36.5cm、P2が径35cm・深さ41cm、P3が径30cm・深さ35cmを測る。P1の検出位置よりこれらは主柱穴と考えられる。また、本址は住居址南東コーナーに土坑が検出された。土坑の規模は長軸174cm・短軸129cm・深さ33.5cmを測る。土坑内からは図に示した1の壺が破砕した状態で出土した。本土坑の性格は検出位置から推察すると貯蔵穴とも考えられるが、本遺跡の他の竪穴住居址と比べるとその規模は大きく、貯蔵穴とは異なる性格の掘り込みと考えられる。炉址は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はNを測る。形態は楕円形であり、規模は長軸43cm・短軸30cmで焼土の厚さは6cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址の遺物は全体として少量で覆土内と土坑内より出土した。図示した遺物の出土位置は1・4・8が土坑内、2はⅢ区の床面から、6と7はそれぞれ西壁際からの出土であるが、7は床面上から6は床面よりも6cm浮いた状態で出土した。器種は1と2が壺と考えられるが、出土地が塗粘土のために器面観察が十分にできなかった。石器類は磨石・砥石・磨石と砥石の両方の使用痕を兼ね備えた物があつた。4はみがき石と考えられ先端の一部のみが摩耗していた。5は磨り部分が溝状に窪んでおり、玉砥石状を呈する。

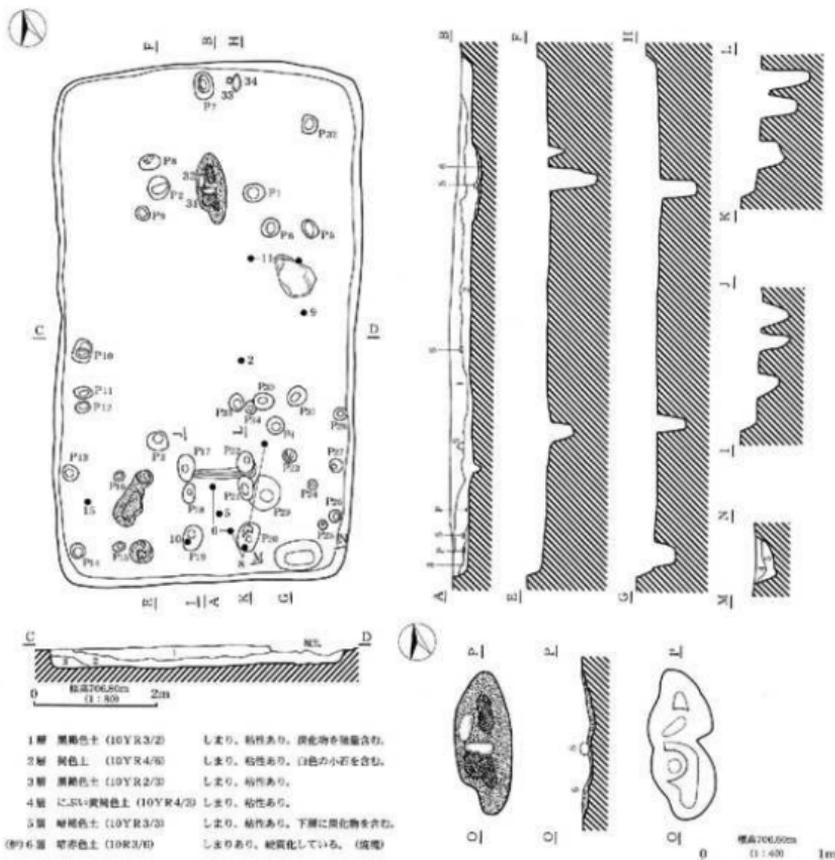
本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

No.	器種	法量		成形・調整・文様				色調	備考	出土位置
		口径(φ)	底径(φ)	器高	外	内	底			
1	壺	24.0	—	(17.0)	不明	不明	不明	不明	完全実態	土坑、Ⅰ区1層
2	壺	—	7.6	(9.0)	不明	不明	不明	不明	完全実態	南壁、Ⅲ区
3	次加工柄	陶器片	実態	残存率	最大径	最大幅	最大厚	考見		出土位置
					17.4	8.8	4.1	0.60	年刻別に微細刻線	
4	磨石(みがき石)	磨石(火山石)	実態		69.0	32.0	22.0	72.00	素材先頭一面のみに磨り	Ⅱ区
5	磨石・砥石	砂岩	実態		85.0	75.0	14.0	113.40	断面に磨き、一面が磨り、一面に磨石と溝状の痕	Ⅳ区
6	磨石・砥石	磨石(凝灰岩)	実態		215.0	127.0	48.0	1830.00	面が丸みを帯び、一面に溝状の痕	6
7	砥石	磨石(凝灰岩)	実態		134.0	101.0	32.0	3060.00	両先端に磨き	
8	磨石	砂岩	2/3残存		112.0	62.00	22.00	(179.20)	一面にテラレータ状の磨き	土坑内

表2 表 H1号住居址出土遺物観察表

(2) H2号住居址 (第8~10図, 写真版四五)

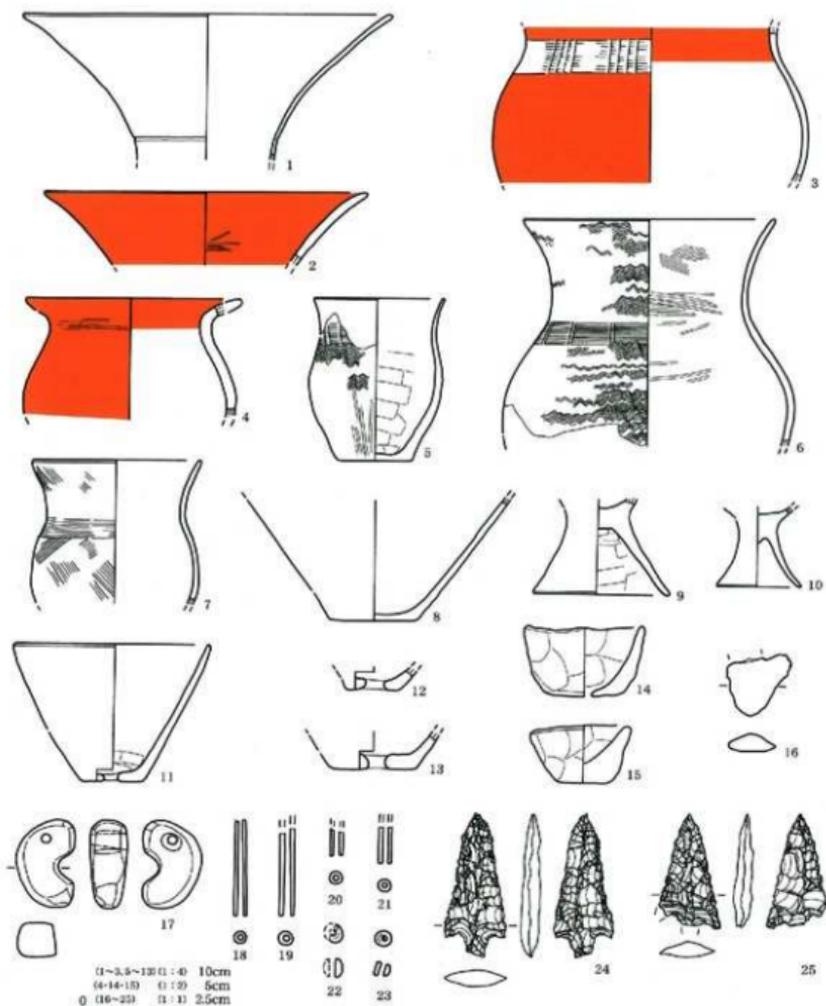
本住居址は、調査区西よりの台地先端部に近いB-ア-13~16、B-イ-13~15Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北方向に長い長方形を呈する。炉は住居址北側主柱六間と南西コーナー部分に造られている。規模は北壁4.70m・南壁4.25m・西壁8.00m・東壁7.98mで、壁高さは南西コーナーより30.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上る。主軸方位はN-15°Eを示す。住居址の床面積は37.3m²を測り、後家山遺跡最大の規模を誇る。覆土は3層に分れる。床は住居址炉周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を敷いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は34個が検出された。規模はP1が径35cm・深さ56.5cm、P2が径37cm・深さ77.5cm、P3が径34cm・深さ39cm、P4が径28cm・深さ44.5cm、P5が径32cm・深さ16cm、P6が径30cm・深さ15cm、P7が径45cm・深さ63cm、P8が径35cm・深さ47cm、P9が径24cm・深さ8cm、P10が径38cm・深さ32cm、P11が径30cm・深さ52cm、P12が径23cm・深さ35.5cm、P13が径27cm・深さ29.5cm、P14が径24cm・深さ30.5cm、P15が径21cm・深さ18.5cm、P16が径17cm・深さ17.5cm、P17が径45cm・深さ46.5cm、P18が径33cm・深さ50cm、P19が径41cm・深さ35.5cm、P20が径47cm・深さ44cm、P21が径40cm・深さ58.5cm、P22が径34cm・深さ77.5cm、P23が径22cm・深さ22cm、P24が径17cm・深さ14.5cm、P25が径15cm・深さ11cm、P26が径20cm・深さ17cm、P27が径22cm・深さ26cm、P28が径21cm・深さ18cm、P29が径67cm・深さ51cm、P30が径33cm・深さ14cm、P31が径35cm・深さ27.5cm、P32が径30cm・深さ



第8図 H2号住居地実測図

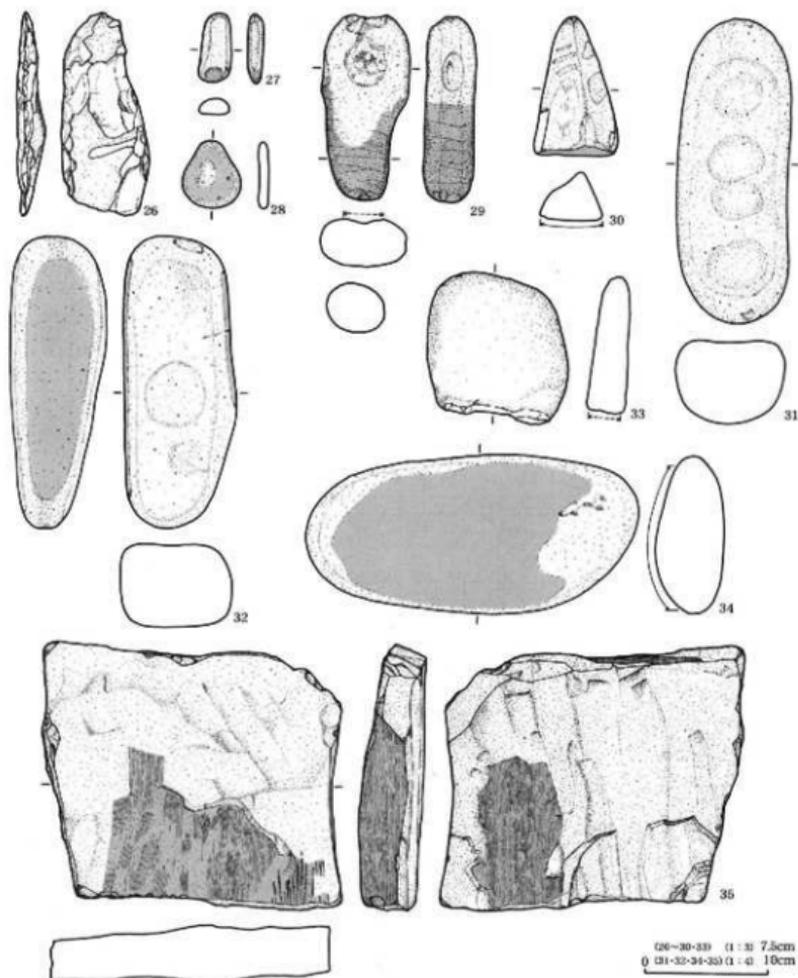
さ13cm、P33が径28cm・深さ10cm、P34が径22cm・深さ12cmを測る。これらのピットの内、使用目的が推察されるものとして、主柱穴のP1・P2・P3・P4、壁際柱穴のP10～P14・P26～P28、入り口施設のピットとしてP17・P22、P18・P21、P19・P20の組み合わせ、P7が棒持ち柱と考えられる。これらの入り口施設の配置から、本址形態の長軸が他の住居地に比して長いため、南側への2度の拡張が考えられる。また、本址は住居地南東コーナーに貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。土坑の規模は長軸77cm・短軸50cm・深さ35.5cmを測る。

炉址は2カ所で確認された。No1号炉は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はN-8°-Eを測る。形態は楕円形であり、焚き口側よりし字状に配された枕石が2点検出されている。規模は長軸122cm・短軸52cmで焼上の厚さは5cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。No2号炉は南西コーナー付近にあり、主軸方位はN-45°-Eを測る。形態は不整形であり、規模は長軸96cm・短軸40cmで焼上の厚さは2cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。



第9図 H2号住居址出土遺物実測図(1)

本址の遺物は炉址の周辺と入口ピット付近よりまとまって出土した。特にP29からは17の翡翠勾玉・22のガラス小玉・35の置き砥石がまとまって出土しており特殊性を示している。図示した遺物の出土位置は1と2の壺と11の甌、31・32の敲石と磨石から転用した炉石、25の石鏃、29の敲石+石鏃、30の磨石が床面直上であり、出土地点を図示した他のものについては床面より2~6cmほど浮いた状態で出土した。また、住居址中央部東よりの床面から



06-30-33 (1:3) 7.5cm
 0 01-32-24-33(1:4) 10cm

第10図 H2号住居址出土遺物実測図(2)

は長軸80cmの扁平な山石が床面で確認された。この機に顕著な使用痕は確認できなかったが、台石等の使用が考えられる。1と2は壺の口縁部で2は赤色塗彩されている。3は短頸壺で口縁部を欠損している。頸部に柳描簾状文を施し、外面と口縁部内面に赤色塗彩を施す。5～8は甕で、5と6は柳描簾状文と柳描波状文、7は柳描簾状文と柳描羽状文の組み合わせである。9と10は台付甕の脚部であり、いずれも小型品である。11～13は単孔の甕である。4・14・15はミニチュア製品であり、4は短頸壺で外面と口縁部内面に赤色塗彩が施されている。14は甕と考えら

No.	器種	法	原料	成形・調査・文様		色調	備考	出土位置		
				外	内					
1	色	(30.2)	—	(11.9)	不明	7.5YR4/4 (暗)	円形実測	Ⅱ区床直		
2	瓦	(26.3)	—	(8.0)	ヘラミガキ、赤色塗彩	5Y11.4 (赤赤中彩)	10R1.9 (赤)	瓦敷実測	Ⅱ・Ⅲ区床直	
3	加灰土	—	—	(12.5)	加灰土・赤色塗彩	10R4.6 (赤)	円形実測	Ⅰ区床直		
4	ミニチュア器	—	—	(4.7)	ヘラミガキ、赤色塗彩	5Y11.4 (赤赤中彩)	10R4.6 (赤)	円形実測	Ⅱ区	
5	壺	(10.6)	6.1	(3.3)	加灰土・赤色塗彩、滑面に磨蝕痕状文、ヘラミガキ	5YR6.6 (赤)	完全実測	Ⅲ区		
6	壺	20.5	—	(18.4)	加灰土・赤色塗彩文 (12本1段に近止目) 口縁部と胴部に磨蝕痕状文 (単位不明)	ヘラミガキ、ヘラミガキ	7.5YR7/4(0.5) (暗)	完全実測	5	
7	壺	(13.8)	—	(11.7)	口縁部に磨蝕痕状文、胴部に磨蝕痕状文、胴部に磨蝕痕状文	不明	5YR6.6 (明赤)	円形実測	Ⅱ区	
8	壺	—	7.1	(9.8)	不明	不明	7.5YR7/4(0.5) (暗)	完全実測	4	
9	台付鉢	—	11.1	(7.7)	不明	ヘラミガキ	5YR5.6 (明赤)	完全実測	1	
10	高坪	—	6.9	(6.2)	不明	不明	5YR6.6 (明赤)	完全実測	6	
11	瓶	(16.0)	5.1	11.2	不明	ヘラミガキ	7.5YR7/6 (暗)	完全実測、厚孔	1	
12	瓶	—	1.6	(1.6)	不明	不明	7.5YR7/6 (暗)	完全実測、厚孔	Ⅰ区	
13	瓶	—	7.0	(2.8)	不明	不明	5YR5.6 (明赤)	完全実測、厚孔	Ⅲ区	
14	手取わし器 (4.9)	(3.2)	(2.8)	(2.8)	ナゲ、磨蝕痕	ナゲ、磨蝕痕	7.5YR7/6 (暗)	完全実測、厚孔	Ⅳ区	
15	ミニチュア器	4.1	2.3	2.3	ナゲ	ナゲ、磨蝕痕	7.5YR6.6(0.5) (暗)	完全実測	Ⅳ区	
16	銅	銅製	銅製	銅製	最大径	最大径	最大径	重量	所見	出土位置
17	円玉	銅製	銅製	銅製	11.0	—	—	0.70	2.66 片割からの穿孔	P29
18	銅玉	銅製	銅製	銅製	18.0	8.5	—	—	0.25 縁	ふちい
19	銅玉	銅製	銅製	銅製	19.5	9.8	—	—	0.25 縁	ふちい
20	銅玉	銅製	銅製	銅製	—	3.0	~1.4	0.26 縁	—	ふちい
21	銅玉	銅製	銅製	銅製	—	2.6	~1.2	0.04 縁	—	ふちい
22	銅玉	銅製	銅製	銅製	—	2.8	1.2	0.08 縁	—	ふちい
23	銅玉	銅製	銅製	銅製	2.8	—	—	0.01 縁	—	P29
24	銅玉	銅製	銅製	銅製	2.9	1.0	1.1	0.03 片	—	ふちい
25	銅玉	銅製	銅製	銅製	28.5	12.2	3.7	1.00 縁辺がくづれた磨蝕痕	—	Ⅰ区
26	銅玉	銅製	銅製	銅製	23.1	12.3	3.7	0.70 縁辺が磨蝕痕	—	Ⅲ区床直
27	銅玉	銅製	銅製	銅製	123.0	53.0	18.0	110.00 磨蝕痕	—	Ⅳ区
28	銅玉	銅製	銅製	銅製	42.0	20.0	10.0	20.00 背面と矢張り 部に磨り	—	Ⅳ区
29	銅玉	銅製	銅製	銅製	41.0	35.0	6.0	20.00 磨り磨り	—	Ⅱ区
30	銅玉	銅製	銅製	銅製	112.0	53.0	30.0	230.00 上下・両面に磨き、上半分に円筒により磨りと磨蝕の痕	—	Ⅳ区床直
31	銅玉	銅製	銅製	銅製	81.0	40.0	40.0	130.00 素材先磨り 面にのみ磨り	—	Ⅲ区床直
32	銅玉	銅製	銅製	銅製	247.0	89.0	66.0	273.00 上下先端に磨き (磨り)	—	—
33	銅玉	銅製	銅製	銅製	236.0	90.0	77.0	25.90 0.00 磨きでないが磨蝕が磨り (磨り)	—	—
34	銅玉	銅製	銅製	銅製	82.0	42.0	24.0	270.00 下感先端に磨き	—	2
35	銅玉	銅製	銅製	銅製	269.0	129.0	55.0	3080.00 磨り	—	4
36	銅玉	銅製	銅製	銅製	238.0	206.0	51.0	3570.00 磨り磨りあり、 部に美版あり (磨り)	—	P29

第3表 H2号住居址出土遺物観察表

れるが孔部分が欠損か穿孔か不明瞭であり確証を得ない。16は鉄製品であるが錆がひどく種別は不明。17～23は玉類である。本址は規模が大きく特殊性が推定できた為、床面より5cmの厚みで覆土を洗浄した。その結果図示した玉類が確認できた。17は勾玉で材質は翡翠であるが風化が進み表面がざらついている (材質鑑定は第3節 (8) 参照)。片面からの穿孔で、大きい孔は楕円形を呈する。顕著な研蝕痕は確認出来ない。18～21は舞玉製の管玉である。18のみが成形である。穿孔は18は片側から、19は片中に段が観察できるため両面穿孔と考えられる。22と23はガラス小玉で、透明度は22は気泡が多く濁ったように見える。23は気泡も少なく透明度がある。端面の成形はいずれも丸い。24・25は黒曜石の有茎石、26は石斧、27・28はみがき石で、特に27は端部のみ顕著な磨り面があり、土器等のみが成形に用いられたと考えられる。29は上下端・両側面に磨き痕が顕著であるが、右器下部は螺旋状の磨耗痕が顕著に観察でき、石鏝の使用例とも考えられる。なお、このような石器は従来「環状石斧」の穿孔具と捉えられているが、本品などの形状はむしろ、木製品などのほぞ開けに使用した可能性が指摘できるのではないだろうか。30～34は破石や磨石である。35は置き砥石で側面が湾曲する程良く使い込まれている。本址はこれらの石器の他に黒曜石剥片47点や原石1点、水晶断片6点が出上している。

本址はこれらの遺物より弥生後期第2段階に位置づけられる。

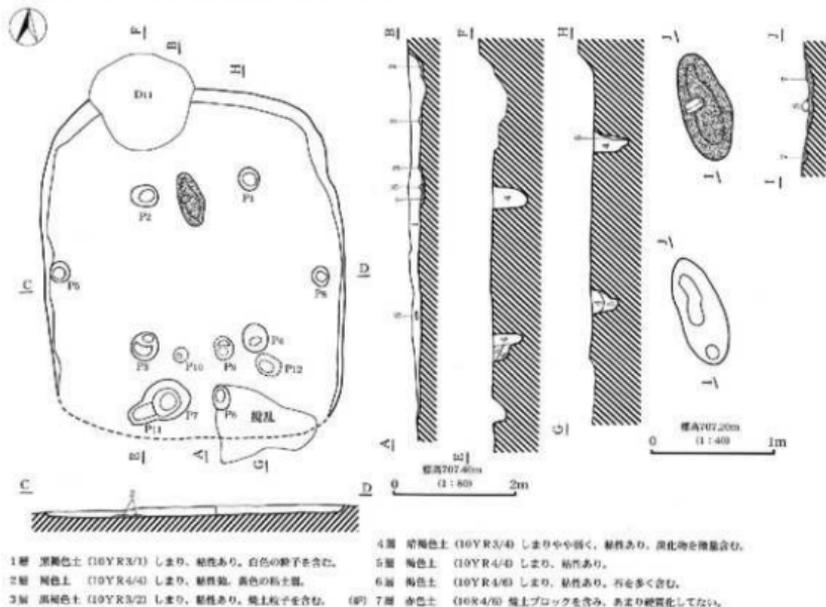
なお、時期の段階設定については第4節小結を参照。

(3) H3号住居址 (第11.12回, 写真図版六)

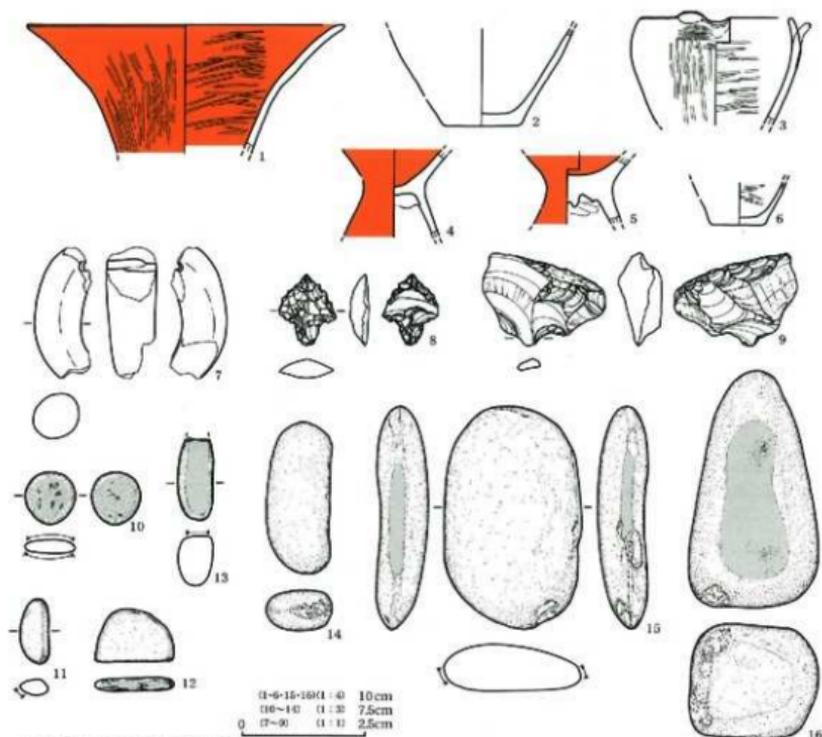
本住居址は、調査区西側の南斜面部であるF-モ16、F-ヤ-15-16、F-ユ-15-16Grに位置する。残存状態は北壁がD11号土坑に嵌まれ、南壁が地形の傾斜と畑の耕作により削平されていた。形態は隅丸長方形を呈する。住居址北側主柱穴間に伊が造られている。規模は北壁4.22m・南壁推定4.23m・西壁残存4.12m・東壁4.74mで、壁高さは北壁中央で25cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN3°Wを示す。住居址の床面積は残存で21.48㎡・推定23.35㎡を測る。礎上は2層に分れる。床は全体に軟質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は12個が検出された。規模はP1が径37cm・深さ58cm、P2が径43cm・深さ50.5cm、P3が径47cm・深さ54cm、P4が径45cm・深さ57cm、P5が径33cm・深さ16cm、P6が径40cm・深さ36.5cm、P7が径65cm・深さ45.5cm、P8が径34cm・深さ12.5cm、P9が径38cm・深さ39cm、P10が径24cm・深さ22cm、P11が径44cm・深さ17.5cm、P12が径42cm・深さ23.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴、P6とP7が入り口施設と考えられる。P5とP8は機持柱的な配置であるが住居址長軸とは直交してしまい、壁柱穴の一種と考えられる。伊址は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はN-19°Wを測る。形態は楕円形であり、中央部に炉石が検出された。規模は長軸90cm・短軸39cmで焼土の厚さは6cmを測る。焼土はよく焼けており硬化していた。

本址の遺物は全体として少量で覆土内より出土した。土器は6点を図示した。1は蓋の口縁部で赤彩が施されている。2と6は甕の胴部から底部と考えられるが、器面が荒れていて調整は不明である。3は片口の鉢で片口部分の隘口唇部が蹄状に盛り上げられている。4と5は高坏の脚と坏部の接合部分である。7は緑泥岩の勾玉で、上下の先端部を欠損している。孔は両面からの穿孔である。黒曜石製品は2点を図示した。8は有茎石鏃で完形である。一部縁辺を歯状にしている。2は鏃で、鏃の先端を欠損している。10~13はみがき石で、いずれも一部分が良く磨れている。14は礫石、15と16は礫石と磨石の両方の使用痕跡があった。この他に住居址覆土中から黒曜石利片27点と水晶断片1点がそれぞれ出土している。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。



第11回 H3号住居址実測図

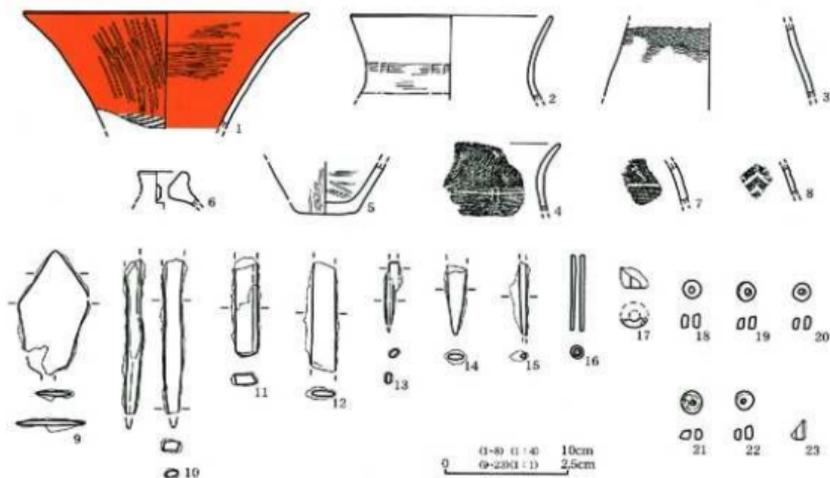
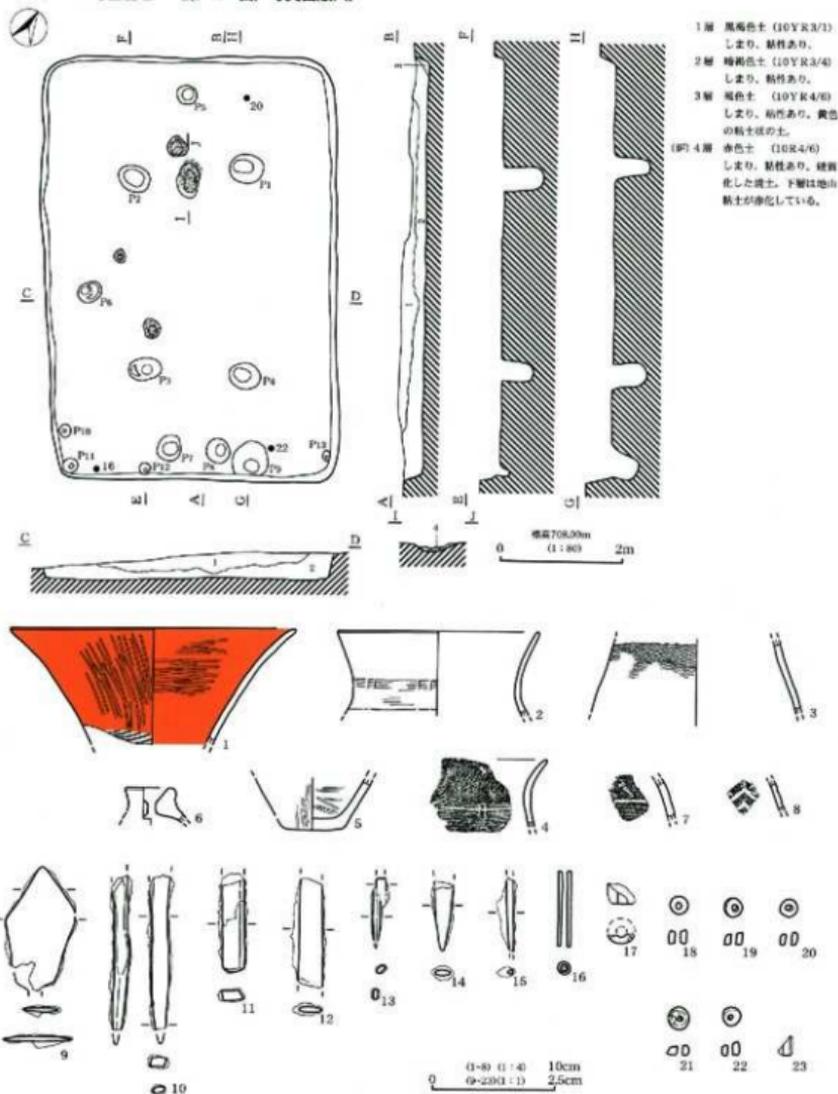


第12図 H3号住居址出土遺物実測図

No.	器種	造 量		成 形・調 整・支 撐				色 調	備 考	出土位置
		口径長(決保幅)器高厚		外 面	内 面					
1	壺 (25.8)	-	(10.5)	ヘラミガキ, 赤色塗部			N9E 8, 赤色塗部	10R4/8 (赤)	白土支脚	I区
2	壺	-	6.4 (7.6)	不明			不明	7.5YR7/6 (橙)	完全支脚	Ⅱ区南端
3	鉢 (9.1D)	(12.4)	-	(8.7)	ハシ目, ヘラミガキ		ヘラミガキ	7.5YR6/6 (橙)	列軸支脚	I区南端
4	高杯	-	-	(5.6)	ヘラミガキ, 赤色塗部		杯部赤色塗部, 脚部ナデ	10R4/6 (赤)	完全支脚	Ⅱ区南端
5	高杯	-	-	(5.1)	赤色塗部		杯部赤色塗部, 脚部ナデ	10R5/8 (赤)	完全支脚	Ⅱ区南端
6	壺	-	4.5 (3.5)	不明			ヘラミガキ	7.5YR4/2 (灰藍)	完全支脚	Ⅱ区
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大短	最大厚	厚 量	所 見	出土位置	
7	勾玉	緑泥岩	陶製部欠損	—	9.5	1.5	3.31	両面より穿孔	IV区	
8	有茎石鏡	雲母石	完形	14.5	11.3	3.6	0.40	一部縁辺が陥没状	Ⅱ区	
9	石鏝	雲母石	完形	19.2	25.3	8.6	3.69	刃部に磨製痕跡, 素材割片は自然面が多く残している	一併	
10	磨石 (のみぎ石)	雲母	完形	32.0	30.0	8.0	10.50	両面に磨製を伴う磨り	IV区	
11	磨石 (のみぎ石)	褐色チャート	完形	39.0	17.0	10.0	8.90	一面面に磨り	P13	
12	磨石 (のみぎ石)	凝灰岩	完形	32.0	47.0	3.0	16.90	欠損した一側面を磨り	Ⅱ	
13	磨石 (のみぎ石)	凝灰岩	1/2残存	(49.0)	(21.0)	(30.0)	(49.70)	一面面に磨製を磨り	IV区	
14	磨石	凝結凝灰岩	完形	91.0	40.0	24.0	125.60	下部先端に磨き	IV区	
15	磨石+磨石	輝石火山岩	完形	177.0	112.0	38.0	960.00	両面に扇状の磨り, 右側に磨き	Ⅱ区	
16	磨石+磨石	黒閃石火山岩	完形	192.0	103.0	93.0	3590.00	下部先端に磨き, 一面面に磨り	P2	

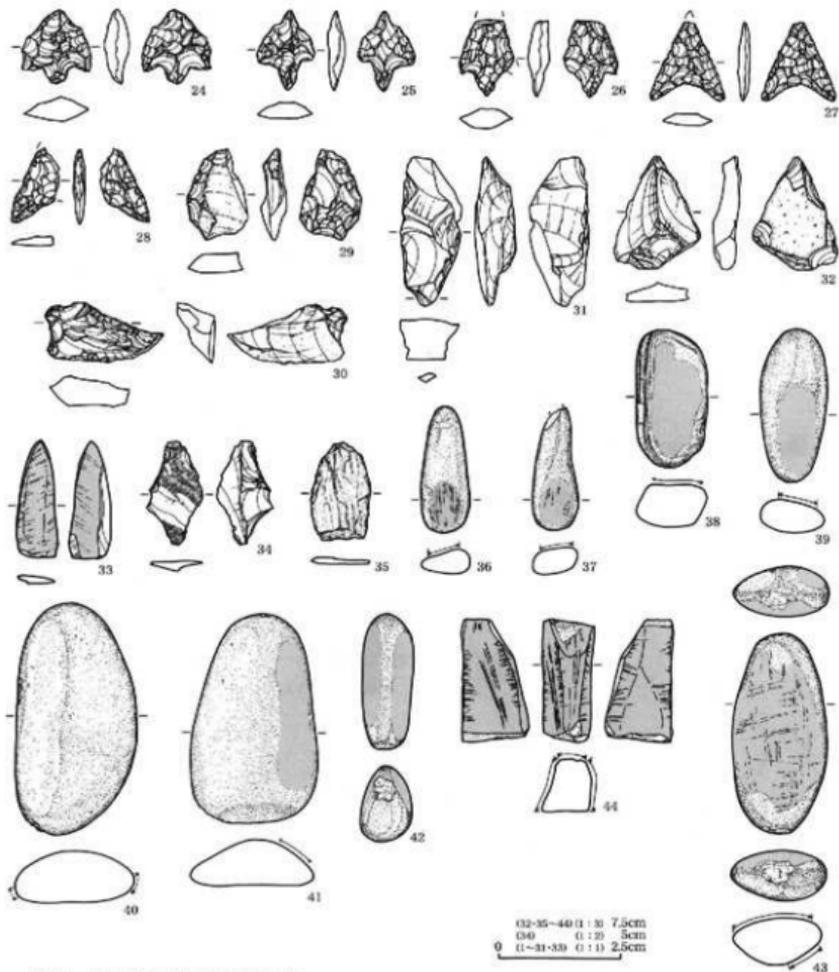
第4表 H3号住居址出土遺物観察表

(4) H 4号住居址 (第13.14回, 写真回版六)



第13回 H 4号住居址及び出土遺物実測図 (1)

本住居址は、調査区西側の丘陵部分が平坦面になるF-ム-12・13、F-メ-11～13、F-モ-12Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長方形を呈する。住居址北側主柱穴間に物が造られている。規模は北壁4.43m・南壁推定4.23m・西壁残存6.57m・東壁6.67mで、壁高さは南東コーナーで44.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-31°-Wを示す。住居址の床面積は30.0㎡を測る。覆土は3層に分れる。床は全体に軟質であり、貼り床は確認されず地山を敷いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は13個が検出された。規模はP1が径50cm・深さ57.5cm、P2が径53cm・深さ64.5cm、P3が径52cm・深さ51.5cm、P4が径52cm・深さ56cm、P5が



第14図 H4号住居址出土遺物実測図(2)

No.	品名	産地		形状・用途・文様		色調	備考	出土位置	
		口部	底面	外	内				
1	山	(23.0)	-	(9.5)	胎面に雙線斜文、ヘラミガキ、赤い塗	ヘラミガキ、赤い塗	10R1/6 (赤)	同私実測	IV区
2	変	(16.4)	-	(6.8)	胎面に雙線斜文 (2連止め)	不明	7.5YR6/4 (赤)	同私実測	I区
3	変	-	-	(6.0)	胎面に雙線斜文	不明	7.5YR7/6 (赤)	同私実測	II区
4	変	-	-	(5.5)	胎面に雙線斜文 (2連止め) の後、胎面に雙線斜文	ナデ	2.5YR5/6 (明赤)	破片実測	IV区
5	変	-	4.9	(4.1)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR7/3 (赤)	完全実測	IV区
6	変	4.1	-	(2.5)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 (赤)	完全実測	II区
7	変	-	-	(3.2)	胎面に雙線斜文、條状状上只による 刺突文	ナデ	10YR7/6 (明黄)	破片実測、M1に同・創作 (條状)	II区
8	変	-	-	(2.4)	胎面に雙線斜文	ナデ	7.5YR3/2 (黄)	破片実測 (条状)	IV区
No.	品名	産地	保存率	最大径	最大径	最大径	重量	備註	出土位置
9	鉄鍔	鉄製品	一部欠損	25.0	14.0	1.30			II区
10	鉄鍔?	鉄製品	両端部欠損	31.0	3.7	0.90			IV区
11	鉄鍔?	鉄製品	両端部欠損	30.0	4.5	0.70			I区
12	不明	鉄製品	両端部欠損	22.0	3.0	0.20			II区
13	不明	鉄製品	欠損	14.0	2.0	0.10			II区
14	不明	鉄製品	欠損	14.0	3.5	0.20			II区
15	不明	鉄製品	欠損	14.0	1.3	0.10			II区
16	管玉	碧玉	欠損	15.3	2.6	1.30~1.20	0.16	緑	II区
17	管玉	碧玉	1/4残存	-	-	-	0.05	緑 大ナヤ	I区
18	小玉	ガラス	完形	3.0	3.8	径1.5	0.05	青	II区
19	小玉	ガラス	欠部	2.7	3.7	径1.2	0.05	青	II区
20	小玉	ガラス	完形	2.6	3.6	径1.5	0.04	青	I区
21	小玉	ガラス	完形	2.0	4.1	径1.1	0.06	青	IV区
22	小玉	ガラス	完形	2.8	3.9	径1.0	0.06	青	IV区成坑
23	小玉	ガラス	1/3残存	3.9	-	-	0.02	青	I区
24	青灰色土器	陶器台	完形	15.8	14.7	5.2	0.80		II区
25	青灰色土器	陶器台	完形	16.8	11.8	3.5	0.50		IV区
26	青灰色土器	陶器台	先端・右端部欠損	15.0	11.3	3.9	0.50	ハンドハンマーによる割損、種器未定	IV区
27	凹形土器 (陶器)	陶器台	先端部欠損	16.7	15.3	2.6	0.40		I区
28	凹形土器	陶器台	先端部欠損	15.7	8.3	2.4	0.10	ソツハンマーによる割損、種器未定	IV区
29	赤褐色土器	陶器台	完形	19.0	13.2	4.7	1.00	背面に内筒部	II区
30	小型土器	注片	完形	15.7	24.0	6.9	1.80	両面に持ち手作り、片側となる辺には加工した鋭利な鋸歯の跡	IV区
31	石斧	燧石	完形	30.4	12.3	6.5	3.60	両面に持ち手作り、片側となる辺には加工した鋭利な鋸歯の跡	II区
32	凹形不明	燧石	欠部	69.1	22.5	16.4	40.10	打突石屑層を再加工	I区
33	磨製石製土器	平紋	欠部?	22.5	8.5	1.5	0.50	両面に磨製、正面はあらゆる形状の磨製	II区
34	磨製石製土器	平紋	欠部?	42.0	23.0	2.0	2.80	両面に磨製、背面はあらゆる形状の磨製	II区
35	磨製石製土器	平紋	下部欠損	49.0	35.0	4.0	(14.10)	上面に一部磨製	II区
36	磨石 (みぎき石)	解石山産	完形	77.0	29.0	15.0	38.70	正面下部に縦方向の磨り	P9
37	磨石 (みぎき石)	河原産	先端部欠損	74.0	27.0	16.0	(43.00)	正面下部に縦方向の磨り	IV区
38	磨石	黒色硬岩	完形	83.0	43.0	25.0	101.80	正面に磨り	P12
39	磨石	黒色硬岩	完形	93.0	41.0	20.0	99.40	正面に磨り	II区
40	磨石	黒色硬岩	完形	140.0	72.0	31.0	416.00	両面に磨り	II区
41	磨石+解石	安山岩	部欠損	126.0	74.0	27.0	(382.00)	上面に磨り、右側面に磨り	II区
42	磨石+解石	安山岩	完形	82.0	66.0	31.0	165.70	二面に磨り、下部に磨り	IV区
43	磨石+解石	砂岩	完形	121.0	53.0	29.0	296.00	正面・背面に磨り、上・下部に磨り	P9
44	磨石+解石	砂岩	完形	75.0	48.0	32.0	118.70	二面に磨り、正面・背面に磨りがある	P12

第5表 H4号住居址出土遺物観察表

径32cm・深さ60cm、P6が径39cm・深さ13.5cm、P7が径43cm・深さ48.5cm、P8が径40cm・深さ42cm、P9が径58cm・深さ48cm、P10が径21cm・深さ41.5cm、P11が径25cm・深さ47cm、P12が径19cm・深さ21cm、P13が径17cm・深さ9cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴、P7とP8が入り口施設、P5が棟持ち柱と考えられる。またP9は規模が小型であるが貯蔵穴と推定される。が址は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方向はN-31°Wを測る。形態は楕円形である。規模は長軸56cm・短軸35cmで焼土の厚さは8cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。また、が址とは判断出来なかったが、硬質化した焼土範囲が3カ所確認された。

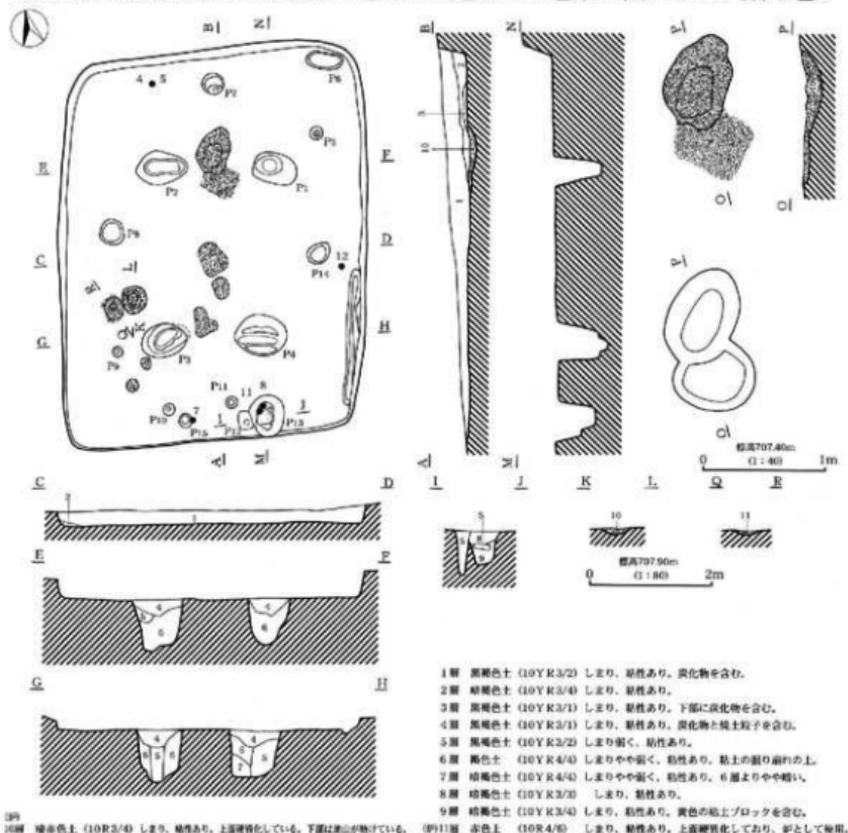
本址の遺物は全体として少量で、硬土内より出土した。土器は8点を図示した。出土位置はいずれも住居址の覆土中である。器種は1と7が壺、6が甕、その他は甕である。また時期は1~4が弥生後期の箱清水式土器であり、7と8が弥生中期の粟林式土器である。本址の場合は弥生中期の遺物が混入品である。9~15は鉄製品である。この内種別の判るものは9の鉄鍔身、10と11が鉄鍔釜部分である。また、15は針状に細く、鉄鍔の先端部と考えられる。16~23は玉類で、16と17は管玉、18~23はガラス小玉である。住居址実測図に位置を示さなかったものはい

ずれも土壌のふるい作業によって検出された物である。石器類は21点を図示した。24~28は黒曜石の石鏃で、有茎と凹基のものがある。また、29は石鏃の未製品と考えられる。33~35は磨製石鏃未製品と考えられ、33と35は千枚岩、34は輝石安山岩である。33は両面及び側面も研磨が進み、残り作業は穿孔段階まで進んでいる。34はあら割の後、片面に研磨が開始されている。36と37はみがき石で、いずれも同一の部位に縦方向の研磨痕が確認出来る。38~40は磨石、41~43は敲石と磨石の両方の使用痕が確認できる。44は砂岩製の手持ち砥石で、三面に研ぎ面が確認できる。特に研ぎ面の面中央は縦方向の、面の両端には横方向のそれぞれ異なる研ぎが確認できる。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

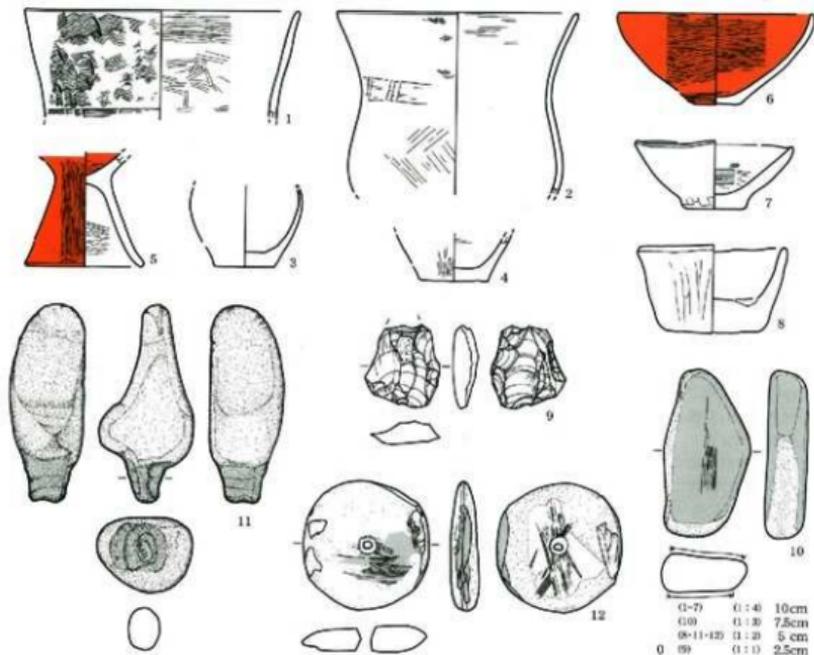
(5) H5号住居址 (第15.16図, 写真版七)

本住居址は、調査区西端の丘陵傾斜が平坦部に移るF・ミ14~16、F・ム14~16Grに位置する。残存状態は良好である。形態はほぼ長方形を呈するが、北東側に偏る菱形である。住居址北側主柱穴間と西壁側にそれぞれ炉が造られている。規模は北壁4.30m・南壁4.45m・東壁6.05m・東壁6.97mで、壁高さは北東3ナで52cmを測る。壁は



1層 黒褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性あり。炭化物を含む。
 2層 緑褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性あり。
 3層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。下部に炭化物を含む。
 4層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。炭化物と粘土粒子を含む。
 5層 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱く、粘性あり。
 6層 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱く、粘性あり。粘土の面内層の上。
 7層 暗褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱く、粘性あり。6層よりやや細かい。
 8層 暗褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性あり。
 9層 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性あり。黄色の粘土ブロックを含む。
 10層 暗褐色土 (10R3/4) しまり、粘性あり。上部硬質化している。下部は流石が散らばっている。
 11層 赤土 (10R4/6) しまり、粘性あり。上部硬質化しており、砂として検出。

第15図 H5号住居址実測図



第16図 H5号住居址出土遺物実測図

No.	品名	法 風		成 形・装 璜・文 様		色 調	備 考	出土位置	
		口径(長×短径%)	身高(厚)	外 面	内 面				
1	甕	(22.4)	—	(8.8)	口縁部に磨崖状文、胴部に磨崖状文(3連止め)	ヘラミガキ	7.5YR4/1 (黒)	口縁欠損 I区、II区、IV区	
2	甕	(19.0)	—	(34.8)	口縁部に磨崖状文、 胴部に磨崖状文(3連止め)、 胴部に磨崖羽状文	ヘラミガキ	7.5YR6/6 (橙)	口縁欠損 I区、II区、IV区	
3	甕	—	5.0	(6.4)	不明	不明	5YR5/6 (橙)	完全欠損 III区	
4	甕	—	5.6	(3.8)	ヘラミガキ	ナデ	7.5YR7/6 (橙)	完全欠損 9	
5	高杯	—	(9.7)	(8.7)	ヘラミガキ、赤色塗布	ハタ目、赤色塗布 脚部ハタ目、ナデ	10R4/8 (赤)	完全欠損 9	
6	鉢	(15.8)	4.4	7.4	ヘラミガキ、赤色塗布	ハタ目、赤色塗布	10R4/8 (赤)	完全欠損 IV区	
7	鉢	12.9	5.2	5.6	ナデ	ハタ目、ナデ	10YR7/3(2)・(黄)	完全欠損	
8	ミニチュア鉢	6.1	4.0	3.6	ヘラミガキ	ナデ	10YR7/3(2)・(黄)	完全欠損 死込み部に指挿孔	
No.	品名	素材	残存率	最大径	最大短	最大厚	重 量	所 見	出土位置
9	石製土器品	馬場石	先端欠損	17.4	14.8	5.1	1.20		2区
10	磨石	ホルンフェルス	完形	101.0	92.0	23.0	213.00	両面・右側上部に磨り	P13
11	石鏝	砂岩	完形	80.0	38.0	30.0	76.00	先端部に凹み跡について磨痕がある	ピット底から10
12	石製紡錘車	砂岩	完形	52.0	50.0	11.0	34.00	両面に糸痕あり、右側に研磨した断面がある、穴は同形より	ピット底から11

第6表 H5号住居址出土遺物観察表

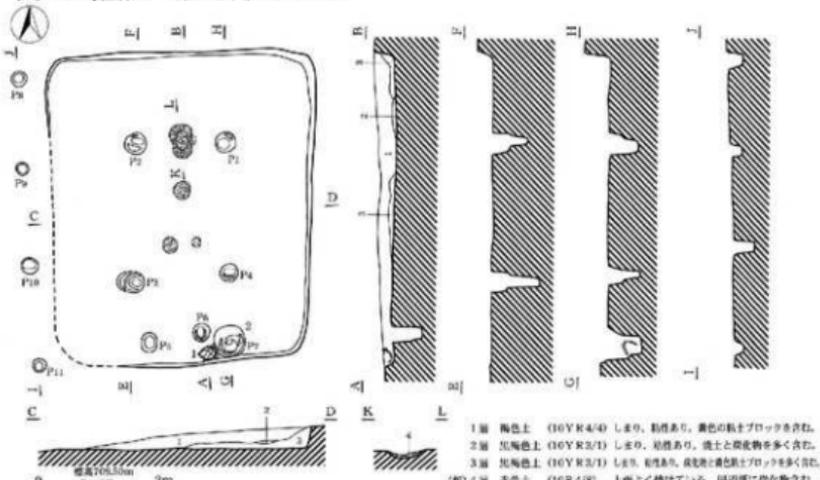
垂直に立ち上がる。主軸方位はN-14°-Eを示す。住居址の床面積は28.7㎡を測る。覆土は3層に分れる。床は住居址が周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は東壁の一部分のみ確認された。溝幅は13~21cmで深さは2~6cmを測る。断面の形態はU字形である。柱穴は15個が検出された。規模はP1が径71cm・深さ75cm、P2が径84cm・深さ86.5cm、P3が径75cm・深さ89cm、P4が径85cm・深さ80cm、P5が径20cm・深さ48.5cm、P6が径58cm・深さ16cm、P7が径34cm・深さ44cm、P8が径42cm・深さ11cm、P9が径18cm・深さ18.5cm、P10が径18cm・深さ22cm、P11が径19cm・深さ19.5cm、P12が径30cm・深さ72.5cm、P13が径67cm・深さ58cm、P14が径41cm・深さ5cm、P15が径24cm・深さ55.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴、P12とP15が入り口施設、P8とP14はH3号住居址に同一位置にピットが検出されている。P7は棒持ち柱と考えられる。またP13は規模より貯蔵穴と推定される。このP13は図に示したように、底面から浮いた状態で平たい川原石を蓋状に伏せてあり、その川原石の下より8のミニチュア製品である鉢と11の異形石鏝が出土している。

炬屋は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はNを測る。形態は不整形であり、規模は長軸111cm・短軸63cmで焼土の厚さは13cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。また、本址はこの炬の他に床面に7カ所の焼土範囲が検出された。これら焼土範囲はいずれも住居址の西側に確認された。この内P3炬の二カ所の焼土は掘り方があり、焼土も硬質化していたことから、補助的な炬と考えられる。

本址の出土遺物は全体として少量であった。1~4は甕、5は高杯、6と7は鉢で6は内外面赤彩を施す。8はミニチュアの鉢である。出土位置は4と5が床面より9cm浮いた状態で、7は床面直上で、8はピットの底面より11cm浮いた状態でそれぞれ出土している。石器類は4点を図示した。9は黒曜石の石鏝未製品、10は磨石である。11は異形の石製鏝で、断面が楕円形の錐部分がある。錐部分には回転によると考えられる擦痕が顕著に確認できる。上部は断面扁平で、上部先端にも横方向の擦痕が一部確認できた。12は石製紡錘車と考えられる。床面直上から出土した。断面形態はレンズ状であり、孔は両面からの穿孔で両面に条痕を残す擦りが観察できる。また、一部側面には刃部状に研磨した面が存在する。弥生時代においては土製紡錘車が主流の佐久地域にあって本製品は特異な存在であり、先に述べた形状も踏案すると、環状石斧のミニチュア等の可能性もあると考える。

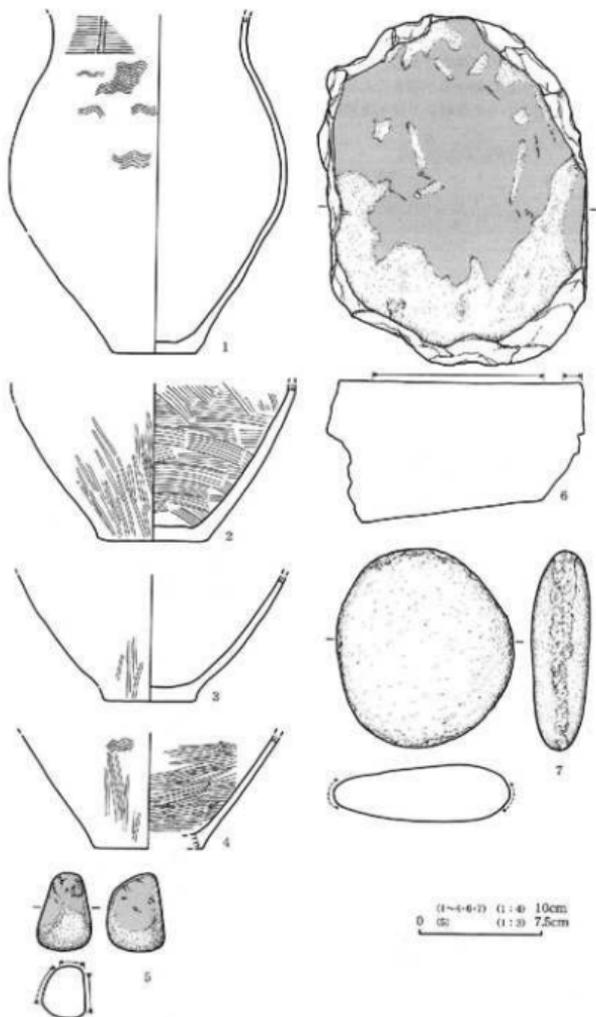
本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

(6) H6号住居址 (第17.18図, 写真図版八)



第17図 H6号住居址表測図

本住居址は、調査区西端の丘陵傾斜が平坦部に移るF・フ-11・12、F-へ-11・12、F-ホ-11Grに位置する。残存状態は北西コーナー部分が自然地形の傾斜により削平されている。形態は長方形を呈する。炉は住居址北側支柱穴間につくられている。規模は北壁4.12m・南壁残存2.95m推定3.72m・西壁残存1.16m推定4.73m・東壁4.74mで、壁高さは北東コーナーで47cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居址の床面積は残存18.4m²・推定20.1m²を測る。覆土は3層に分れる。床は炉周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は住居址内に7個が検出された。規模はP1が径33cm・深さ46cm、P2が径36cm・深さ55cm、P3が径43cm・深さ77.5cm、P4が径30cm・深さ53.5cm、P5が径31cm・深さ35cm、P6が径29cm・深さ50cm、P7が径50cm・深さ57.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4は支柱穴、P5・6が入り口施設、P7は規模より貯蔵穴と推定される。また、H6号住居址の西壁際には本址に伴うと考えられる3間のピット列が確認された。規模は長さ4.91mで、ピットの規模はP8が径27cm・深さ26.5cm、P9が径22cm・深さ16.5cm、P10が径28cm・深さ35cm、P11が径21cm・深さ15cmを測る。炉址は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はN-9°-Wを測る。形態は不整形であり、規模は長軸55cm・短軸36cmで焼土の厚さは6cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。また、本址はこの炉の他に床面に3カ所の焼土範囲が検出された。これら焼土範囲はいずれも住居址の中央部に確認されたが、硬質化はしていなかった。



第18図 H6号住居址出土遺物実測図

規模は長軸55cm・短軸36cmで焼土の厚さは6cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。また、本址はこの炉の他に床面に3カ所の焼土範囲が検出された。これら焼土範囲はいずれも住居址の中央部に確認されたが、硬質化はしていなかった。

本址の出土遺物は全体として少量であった。1・3・4は甕、2は壺の胴部下半である。出土位置は1は入り口の貯蔵穴脇の床面から、2は貯蔵穴内に伏せた状態で出土した。5はみがき石で三面に顕著な磨りが確認できる。6は一面に顕著な磨りが確認される。また縁周辺部は打ち欠いて成形したような痕跡があり、蓋き砥石の可能性がある。7は砥石で側面に磨き痕が顕著である。この他に本址からは黒曜石の剥片4点が出土している。

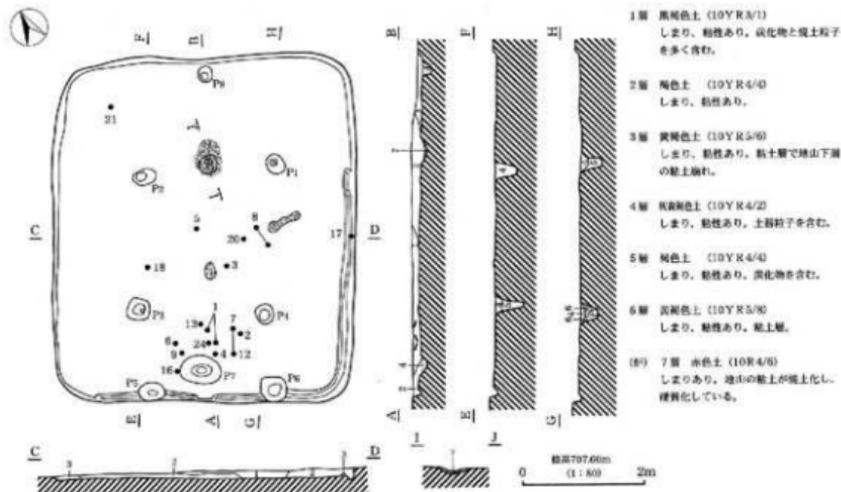
本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

No.	器種	遺 蹟		成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		色 調	備 考	出土位置	
		口徑(高)・底径(高)	容積	外 面	内 面				
1	甕	—	6.8 (27.5)	胴部に磨地装文(2道止め)・ 側面に磨地装文	ナデ	7.5YR7/5 (黄)	完全実態	1区	
2	壺	—	9.0 (15.8)	縦方向のみがき	ハケ目	5YR5/8 (赤褐色)	完全実態	ビツト裏から9	
3	甕	—	7.5 (16.5)	ヘラミガキ	本磨	7.5YR6/4 (R・R・黄)	完全実態	1区	
4	甕	—	(8.4) (9.1)	胴部に磨地装文の横へラミガキ	ヘラミガキ	10YR7/4 (R・R・黄)	断面実態	IV区	
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所 見	出土位置
5	砂石(みがき石)	安山岩	47.0	20.0	32.0	85.79	両側・上面に顕著な磨り、一部に磨削		II区
6	砥石(蓋き砥石?)	磨林燧石	282.0	208.0	102.0	10860.00	正面に磨り、側面は磨打により成形		I区
7	砥石	砂岩	120.0	106.0	33.0	560.00	側面に磨き		III区

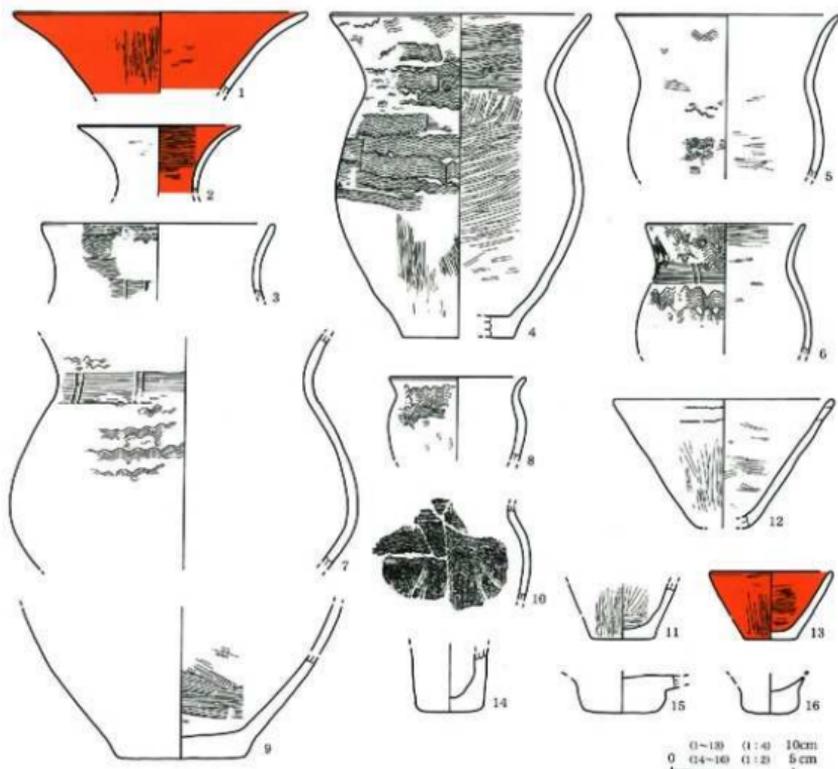
第7表 H16号住居址出土遺物観察表

(7) H7号住居址 (第19.2021図, 写真図版八)

本住居址は、調査区西端の平地中央部であるB・E-13・14、B・オ-13・14、B・カ-13・14Grに位置する。残存状態は良好である。形態はほぼ長方形を呈する。炉は住居址北側主柱穴間に造られている。規模は北壁4.35m・南壁4.52m・西壁5.00m・東壁5.33mで、壁高さは南壁中央で14cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-32°-Eを示す。住居址の床面積は25.2㎡を測る。覆土は3層に分れる。床は住居址炉周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を敷いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は東壁の中央から南東コーナー・南壁にかけて確認された。溝幅は11~25cmを測る。断面の形態はU字形である。柱穴は8個が検出された。規模はP1が径33cm・深さ34cm、P2が径37cm・深さ45.5cm、P3が径35cm・深さ50cm、P4が径31cm・深さ29cm、P5が径43cm・深さ22cm、P6が径41cm・深さ31cm、P7が径67cm・深さ27.5cm、P8が径25cm・深さ39cmを測る。ビツトの検出位置よりP1~P4は主柱穴、P8が棒持ち柱、P7が入り口施設と考えられる。また、P5とP6も壁際のため入り口施設と考えられるが主柱



第19図 H17号住居址実測図

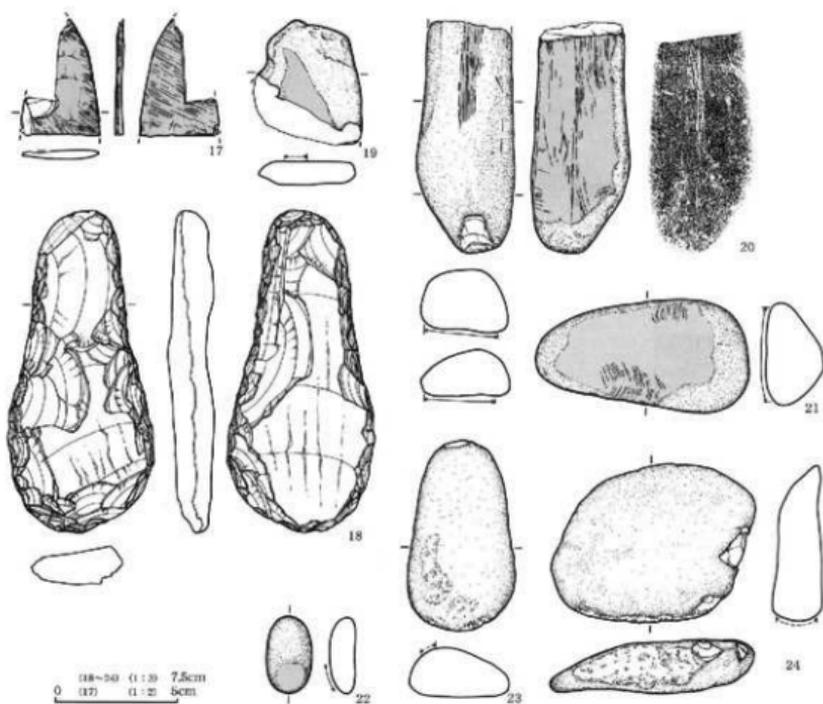


第20図 H7号住居址出土遺物実測図(1)

穴と方向が合うため、あるいは6本柱の支柱穴の可能性もある。

如址は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はN-18°-Eを測る。形態は楕円形であり、規模は長軸59cm・短軸44cmで焼土の厚さは3cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。本址はこの他に2カ所の焼土範囲が床面で確認されたが、いずれも表面は硬質化していなかった。

本址の遺物はP7付近の南壁際より多く出土した。図示した遺物の出土位置は1~3・6・8・17・18が床面直上より、4・5・7・12・13・16・20・21が床面より5~8cm浮いた状態で出土した。その他のものは覆土中よりの出土である。器種は1と2が壺であり、2は内面のみの赤色塗彩が施されている。3~11は甕である。施文の判るものは頸部に縷状文、胴部に波状文を施すか、全面に波状文を施すものがある。12と13は鉢である。13は内外面赤色塗彩が施されている。なお、12は底部付近が欠損しており、底部屈曲部の状態から甕の可能性もある。14~16はミニチュア土製品である。いずれも器面が荒れており調整は不明であるが、部位は底部と考えられる。器種は14が甕、15が壺、16は胴部付近が極端に薄く鉢の可能性が指摘できる。石器類は8点を図示した。17は大型の磨製石鏃かあるいは剣の未製品と考えられる。壁溝内から出土した。両面に丁寧な研磨痕が確認できる。18は打製石斧で、刃部に摩耗痕が観察できる。20は手持ち砥石で一部に磨き痕がある。砥面は二面確認でき、いずれも石の長軸方向に平行するように条線状の擦り痕が確認できる。21は磨石で磨り面は一面のみであるが、縁辺にかかるとして条線状の擦



第21図 H7号住居址出土遺物実測図(2)

痕が確認できる。22はみがき石で、先端部一カ所に顕著な磨り面が確認できる。22と23は敲石である。本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

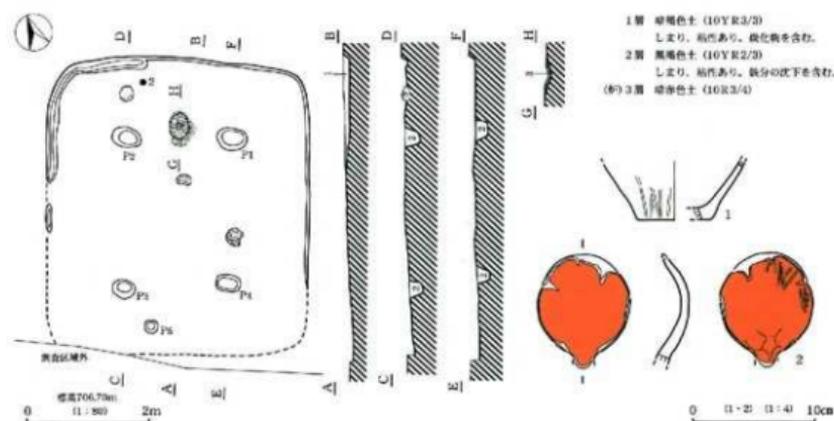
(B) H8号住居址 (第22図, 写真図版九)

本住居址は、調査区西端の平地中央部であるB-ウ-15・16、B-エ-15・16、B-オ-16Grに位置する。残存状態は南側が自然の地形傾斜により削平されている。形態はほぼ長方形を呈すると考えられる。炬は住居址北側主柱穴間に造られている。規模は北壁3.76m・南壁推定3.98m・西壁残存2.70m推定4.47m・東壁残存3.40m推定4.19mで、壁高さは北壁中央で8.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-20°・Eを示す。住居址の床面積は残存13.0㎡・推定19.2㎡を測る。覆土は単層である。床は住居址が周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を載いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は東壁の中央から北西コーナー部分に確認された。溝幅は15~21cm、深さ3cmを測る。断面の形態はU字形である。柱穴は5個が検出された。規模はP1が径50cm・深さ22.5cm、P2が径49cm・深さ27cm、P3が径38cm・深さ22cm、P4が径40cm・深さ22.5cm、P5が径21cm・深さ8cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴と考えられる。炬址は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はN-18°・Eを測る。形態は不整形であり、規模は長軸60cm・短軸33cmで焼土の厚さは4cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は非常に少なかった。図示した1は鏝、2は土製の匙である。2は柄の部分が欠損しており、赤彩が施されている。本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

No.	品類	数量		形状・形態・文様		色澤	備考	出土位置	
		口徑(長)	底径(短)	外 形	内 形				
1	壺	(24.0)	-	(8.7)	ヘラミガキ, 赤色塗彩	512*8, 赤色塗彩	10R3/6 (赤赤)	回転実器	IV区
2	壺	13.2	-	(5.5)	ヘラミガキ	512*8, 赤色塗彩	5YR7/4 (赤赤)	完全実器	
3	壺	(19.0)	-	(5.1)	口縁部に群緑状文(8本1組?) 胴部に群緑状文(2連止め?)	不明	7.5YR7/6 (黄)	回転実器	
4	壺	(21.2)	(9.0)	(26.4)	口縁部から胴部群緑状文, 体部下半ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR7/4(赤赤)	回転実器	III区, IV区, 一括
5	壺	(18.2)	-	(13.5)	口縁部と胴部に群緑状文, 胴部に垂流状文?	ヘラミガキ	7.5YR7/4(赤赤)	回転実器	8
6	壺	13.0	-	(10.0)	胴部に垂流状文(2連止め) 口縁部と胴部に群緑状文	ヘラミガキ	7.5YR4/2 (赤黄)	完全実器	一括
7	壺	-	-	(18.8)	口縁部と胴部に群緑状文, 胴部に垂流状文(2連止め)	ヘラミガキ	7.5YR7/3(赤赤)	回転実器内側すずり付	5
8	壺	(11.1)	-	(8.8)	胴部から口縁にかけて群緑状文, 胴部下半ヘラミガキ	不明	10YR8/4 (明赤)	回転実器	
9	壺	-	(10.4)	(12.4)	不明	ハケ目	5YR5/6 (明赤)	回転実器 内面磁化粉付	
10	壺	-	-	(7.6)	胴部に群緑状文, 胴部に群緑状文, 胴部下半ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR6/4(赤赤)	粗末	一括, III区
11	壺	-	5.0	(4.0)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR7/3(赤赤)	完全実器	III区
12	鉢	(18.0)	(4.2)	(10.4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR7/4(赤赤)	回転実器	8
13	鉢	(19.1)	4.2	5.5	ヘラミガキ, 赤色塗彩	512*8, 赤色塗彩	10R3/6 (赤赤)	完全実器	5
14	スニチュア	-	(2.6)	(2.6)	ナデ	ナデ	10YR7/4(赤赤)	回転実器	IV区
15	スニチュア	-	3.0	(1.5)	ナデ	ナデ	5YR5/6 (明赤)	完全実器	IV区
16	スニチュア	-	2.2	(1.5)	不明	不明	5YR5/6 (明赤)	完全実器	5
No.	品類	素材	保存率	最大径	最大径	最大厚	厚 度	備 考	出土位置
17	磨製木製品	千枚骨	先端と付根欠損	(46.0)	(32.0)	(3.0)	(4.5)	両面に溝あり, 右側面にも溝あり	
18	打製石斧	安山岩	完形	260.1	89.9	28.5	498.6	側面ハードハンマーの遺跡打撃による成形, 両面に厚肌あり	1
19	磨石	砂岩	一部欠損	75.0	52.0	12.5	(112.6)	正面一部に磨り	III区
20	手持ち網石+磨石	砂岩	上部欠損	(229.0)	53.5	38.0	(388.0)	両面に無数の突起, 断面に磨り, 下部先端に磨き	3
21	磨石	板石(安山岩)	完形	129.0	62.0	35.0	432.0	表面に磨り上層方向の溝あり	7
22	磨石(冷かき石)	安山岩	完形	47.0	37.0	16.0	25.3	正面下部に磨り	III区
23	磨石	砂岩	完形	115.0	69.0	30.0	293.0	上下面に磨き	I区
24	磨石	板石(安山岩)	一部欠損	95.0	123.0	30.0	(420.0)	下部に磨き上層に磨き	

第8表 H7号住居址出土遺物観察表



第22図 H8号住居址及び出土遺物実測図

No.	器種	法 量			成 形・調 整・文 様			色 調	備 考	出土位置
		口徑(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外 面	内 面				
1	壺	—	(6.0)	(4.6)	ナデ	ヘラミガキ	10YR7/2(赤褐色)	同転写刷	Ⅱ区	
2	壺	9.2	7.5	0.6	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	10R4/8 (赤)		1	

第9表 H8号住居址出土土物観察表

No.	器種	法 量			成 形・調 整・文 様			色 調	備 考	出土位置
		口徑(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外 面	内 面				
1	壺	—	(17.0)	(12.2)	ハケ目、くび部の赤色塗彩	不明	10YR8/4 (明黄緑)	同転写刷	P7	
2	甕	(18.3)	—	(14.3)	口縁部と胴部に磨滅状文、磨滅に磨滅磨状文(2遺止め)	ハケ目、ヘラミガキ	10YR7/4(赤褐色)	同転写刷	Ⅱ区・P7	
3	壺	(16.8)	—	(7.1)	不明	不明	10YR7/3(赤褐色)	同転写刷	P7	
4	剥片	器種	素材	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所 見	出土位置
		黒曜石	赤岩	15.9	21.0	7.0	2.10	黄面自然面		P7

第10表 H9号住居址出土土物観察表

No.	器種	法 量			成 形・調 整・文 様			色 調	備 考	出土位置
		口徑(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外 面	内 面				
1	壺	—	—	(2.0)	胴部に磨滅刻文	ナデ	10YR3/3 (褐色)	破片尖削(塗彩)		
2	壺	—	—	(3.6)	胴部に磨滅磨状文	不明	10YR7/4(赤褐色)	破片尖削(塗彩)		
3	剥片	器種	素材	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所 見	出土位置
		黒曜石	赤岩	11.4	12.7	2.0	0.20			

第11表 H10号住居址出土土物観察表

(9) H9号住居址 (第23図, 写真図版九)

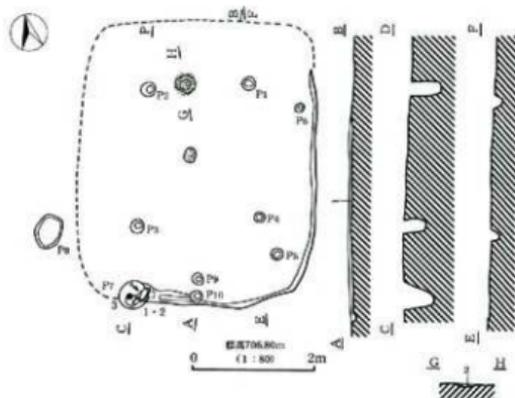
本住居址は、調査区西端の平地中央部であるB-W-13・14、B-E-13・14Grに位置する。残存状態は北西側が自然の地形傾斜により削平されており、住居址全体の1/2程が残存していたのみである。形態は隅丸長方形を呈すると考えられる。炉は住居址北側主柱間に造られている。規模は北壁推定3.21m・南壁残存2.73m推定3.10m・西壁推定4.30m・東壁残存3.61m推定4.15mで、壁高さは南東コーナーで6cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-14°Eを示す。住居址の床面積は推定16.3㎡を測る。覆土は単層である。床は全体に軟質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は南壁の一部に確認された。溝幅は16~19cmを測る。断面の形態はU字形である。柱穴は10個が検出された。規模はP1が径21cm・深さ15cm、P2が径23cm・深さ50cm、P3が径23cm・深さ37cm、P4が径18cm・深さ15cm、P5が径18cm・深さ12cm、P6が径17cm・深さ13.5cm、P7が径47cm・深さ49cm、P8が径54cm・深さ15cm、P9が径20cm・深さ9cm、P10が径20cm・深さ24cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴、P7は貯蔵穴と考えられる。なお、P8は住居址外であるが、範囲が推定であり本址に含まれる可能性もあるので同時に掲載した。炉は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。上軸方位はN-10°Eを測る。形態は円形であり、規模は長軸38cm・短軸33cmで焼土の厚さは3cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は非常に少なく、P7よりその多くが出土した。図示した4点の出土遺物はすべてP7からの出土である。なお、2はⅡ区覆土中からの出土破片と接合関係にある。1は壺の胴部下平であり一部赤色塗彩が施してある。2と3は甕で、2は頸部に簾状文、口縁部と胴部に波状文が施されている。4は黒曜石の剥片である。この他に本址からは黒曜石原石剥片1.2gが出土している。

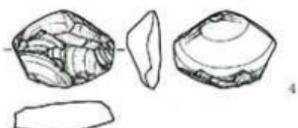
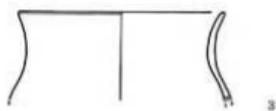
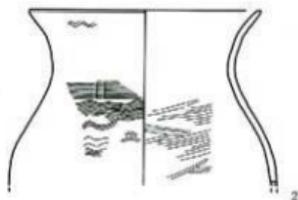
本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

(10) H10号住居址 (第24図, 写真図版十)

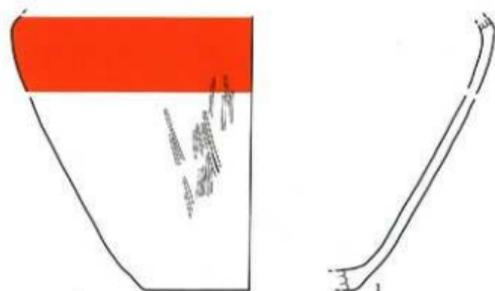
本住居址は、調査区西端の平地中央部であるB-W-12・13、B-E-12・13Grに位置する。残存状態は北側が畑耕作により削平されており、住居址全体の1/4程が残存していたのみである。形態は隅丸長方形を呈すると考えられる。炉は住居址中央に造られている。規模は北壁推定3.27m・南壁推定3.24m・西壁残存1.28m推定2.84m・東壁残存1.38m推定2.86mで、壁高さは南東コーナーで4cmを測る。主軸方位はN-19°Eを示す。床面積は推定12.7㎡を測る。覆土は単層である。床は全体に軟質であった。柱穴は6個が検出された。規模はP1が径20cm・深さ40.5cm、P2が径26cm・深さ56cm、P3が径23cm・深さ36cm、P4が径30cm・深さ51.5cm、P5が径31cm・深さ29cm、P6が径23cm・深さ14cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴と考えられる。炉は住居址中央に検出された。形態は円形であり、規模は径45cmで焼土の厚さは3cmを測る。焼土はあまり焼けていなかった。本址からの出土遺物は非常に少なく、図示した3点の出土遺物はすべて覆土やピットからの出土である。本址からはこれらの他に黒曜石剥片6点が出土している。本址はこれらの遺物より弥生中期後半に位置づけられる。



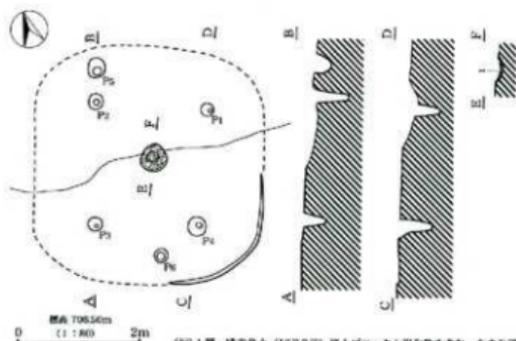
(1) 黒褐色土 (10Y R3/2)
しまり、粘性あり、炭化物を含む。
(即) 2層 暗赤色土 (10Y R3/4)
しまり、粘性あり、上面硬質化している。



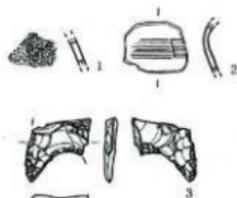
(1-2) (1:4) 10cm
0 (4) (1:1) 2.5cm



第23図 H9号住居址及び出土遺物実測図



(即) 1層 暗赤色土 (10Y R3/6) 灰土ブロックと炭化物を含む、あまり硬質化していない。



(1-2) (1:4) 10cm
0 (3) (1:1) 2.5cm

第24図 H10号住居址及び出土遺物実測図

(11) H11号住居址 (第25図, 写真図版十)

本住居址は、調査区西端の台地の先端部北側であるB-オ-12、B-カ-12、B-キ-12Grに位置する。本址はM2号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は北側が自然地形の傾斜とM2号溝状遺構により削平されている。形態は隅丸方形を呈する。炉は住居址中央に造られている。規模は南壁3.57m・西壁残存2.03m・東壁残存3.24mで、壁高さは南東コーナーよりで32.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。軸方位はN-23°-Eを示す。床面積は残存で11.1㎡を測る。壁土は3層に分れる。床は全体に軟質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は南西コーナーがとぎれるだけで、検出された壁全体に通っていた。溝幅は8~32cmで深さは1~7cmを測る。断面の形態はU字形である。柱穴は6個が検出された。規模はP1が径45cm・深さ44.5cm、P2が径20cm・深さ13cm、P3が径31cm・深さ46cm、P4が径43cm・深さ60cm、P5が径48cm・深さ10.5cm、P6が径23cm・深さ10.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1・P3・P4が主柱穴と考えられる。炉址は住居址中央部に検出された。形態は楕円形であり、規模は長軸44cm・短軸26cmで焼土の厚さは4cmを測る。焼土はあまり焼けておらず、硬質化もみられなかった。

本址の遺物は全体として少量で覆土から主に出土した。土器は4点を図示した。1と2は逆の顔部と胴部の破片であり、1は縄文施文の後、笠掻底線文間に刺突を施す。2はやや太い帯括弧線文を施す。3と4は甕の底部付近と考えられるが確証を得ない。石器類は9点を図示した。5と6は黒曜石の石鏃と石鏃木製品である。7は小型の横刃型刃器と考えられ、刃部に摩耗と刃つぶれがある。8と9は打製石斧であるが、9は大型品の欠損部分か再利用と考えられる。10~13は礫石と燧石で、特に13は全体がなめらかに磨っており、ほぼ球形を呈する。本址からはこの他に黒曜石の原石・石核・2次加工剥片・剥片等29点が出土している。

本址はこれらの遺物より弥生中期後半に位置づけられる。

No.	品名	法		成形・調整・文様		色調	備考	出土位置	
		白灰(土表側)	黒灰(内)	外	内				
1	甕		(巴)	胴部に縄文施文の後、笠掻底線文間に刺突		ナデ	7.5YR5/6 (明黄)	破片実用(薬材)	II区
2	甕	-	(30)	胴部に笠掻底線文		ナデ	7.5YR5/6 (明黄)	破片実用(薬材)	II区
3	甕?	-	(11.6)	(20)	ヘタミギキ		7.5YR5/6 (明黄)	円筒実用	II区
4	甕?	-	4.3	(1.3)	ヘラナデ		10YR7/4(0.5)灰黄	完全実用	II区
No.	品名	素材	発祥	最大長	最大幅	最大厚	重量	用途	出土位置
5	青灰色石	燧石	古くえし弥生前期	15.6	9.0	2.6	0.30	ソフトハンマーの押打部。素材剥片は磨打をもつ	1区
6	石鏃木製品	燧石		20.2	16.3	6.8	1.90		
7	小型横刃型	燧石		18.0	9.0	12.0	36.0	横長の剥片素材を使用。刃部に摩耗とおこぼれあり	II区
8	打製石斧	燧石		230.1	105.1	22.3	637.50	ハードハンマーの両側打撃により成形。刃部に摩耗あり	1区
9	打製石斧	燧石(燧石)	燧石?	95.0	72.0	16.0	162.00	ハードハンマーの両側打撃により成形。刃部に摩耗あり、小型のため大量品の両側打撃か?	一括
10	礫石+燧石	燧石	先端欠損	1105.0	38.0	20.0	1220.00	両面に磨りと磨き、上部先端に磨き	一括
11	礫石	燧石	燧石	92.5	68.0	87.0	330.00	磨度の違いはあるが、全体が磨られている	1区
12	燧石	砂岩	燧石	97.0	83.0	17.0	220.00	両面に磨き	一括
13	燧石(みがき石)	燧石	燧石	15.0	14.0	12.0	3.40	全体に磨らなで、ほぼ球形である	一括

第12表 H11号住居址出土遺物観察表

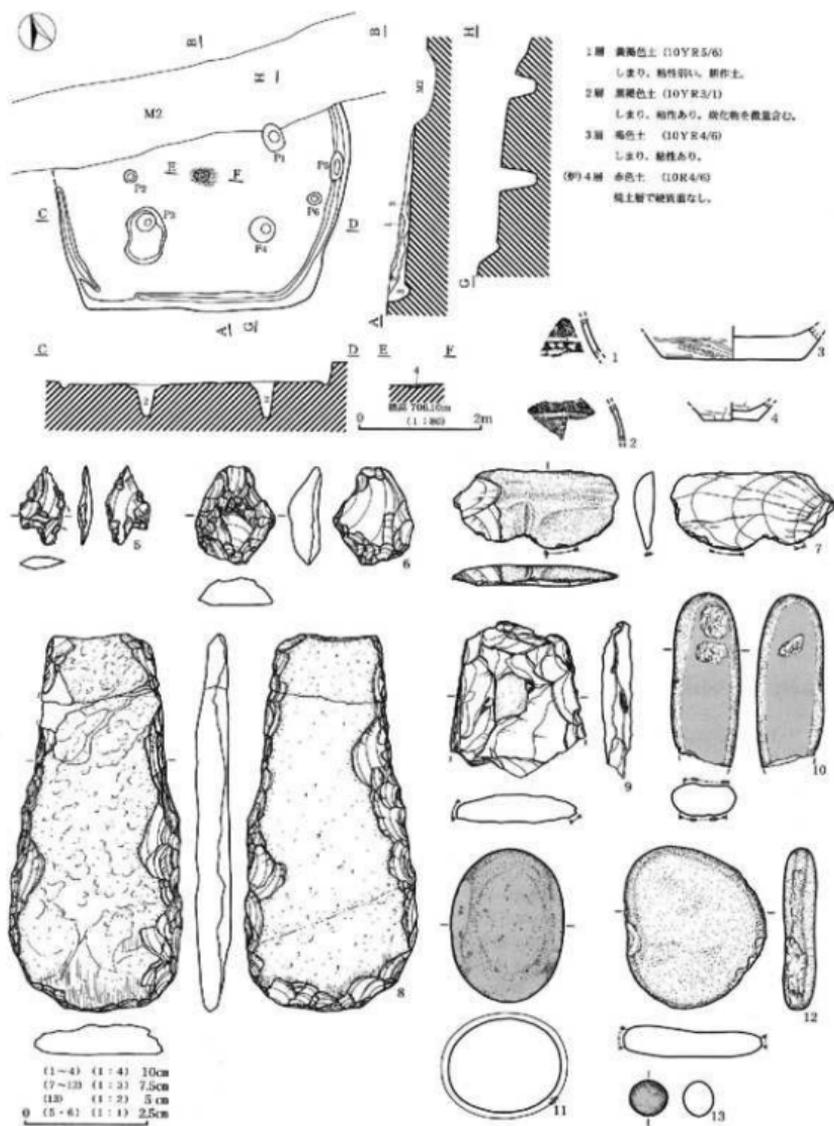
(12) H12号住居址 (第26図, 写真図版十一)

本住居址は、調査区西よりの台地先端部北側斜向であるB-エ-11、B-オ-11、B-カ-11Grに位置する。残存状態は南側壁部分を水道管に、また北側半分は自然地形の傾斜で削平されている。形態は炉の検出位置より推定すると東西に長い方形を呈すると考えられる。炉は住居址東側に造られている。規模は南壁推定5.50m・西壁残存2.04m・東壁残存1.79mで、壁高さは西壁南よりで32.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は残存で10.7㎡、推定で12.7㎡を測る。床は全体に軟質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は5個検出された。規模はP1が径36cm・深さ48.5cm、P2が径42cm・深さ30cm、P3が径42cm・深さ28.5cm、P4が径33cm・深さ31cm、P5が径40cm・深さ29cmを測る。これらのピットの内、P1とP2は主柱穴と考えられる。

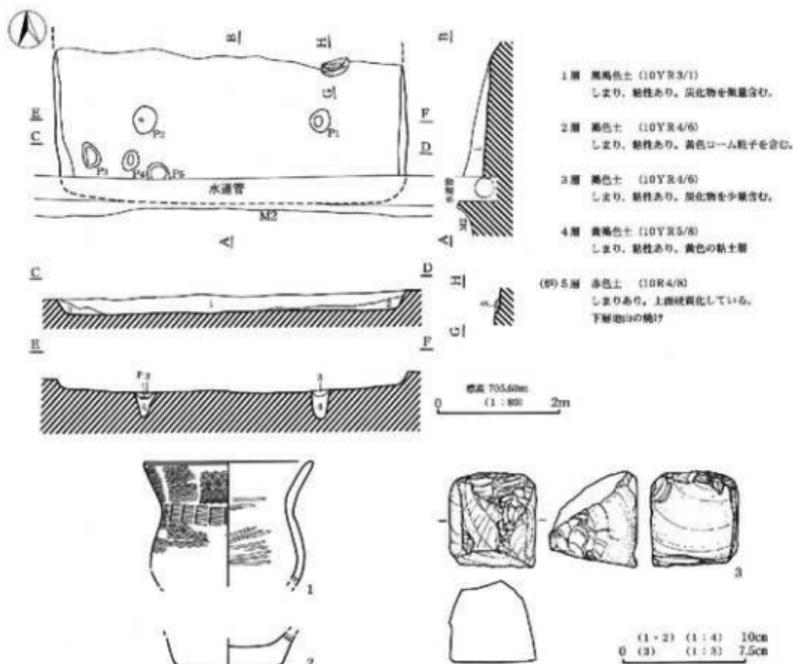
炉址は東壁より確認されたが、北側半分が削平されており形態は不明である。規模は残存で長軸46cm・短軸25cmで焼土の厚さは7cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は少量で、図示した1の甕以外はすべて覆土中からの出土である。1と2は甕の口縁部~胴部の破片と底部破片である。3は黒曜石の原石で遺跡内では大型品である。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。



第25図 H11号住居址及び出土遺物実測図



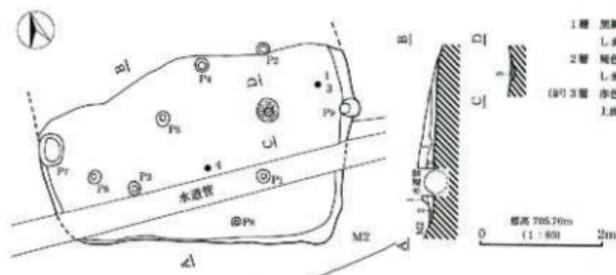
第26図 H112号住居址及び出土遺物実測図

No.	部 類	法 量		成 形 ・ 測 量 ・ 文 様				色 調	備 考	出土位置		
		(口厚) 底面積(断面厚)	(口径)	形 状	内 面	外 面	重 量					
1	甕	13.8	-	(16.1)	口縁部と胴部に輪状凹凸文(8本1組) 胴部に縄文様文(通止め)				ヘラミガキ	7.5YR7/4(G:R:黄)	完全実測	P-2
2	甕	-	8.7	(2.5)	不明				不明	7.5YR6/5(黄)	完全実測	Ⅱ区
3	器 種	素材		残存率	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見			出土位置
3	原石	黒輝石		完形	18.8	17.5	18.0	7.90				Ⅱ区

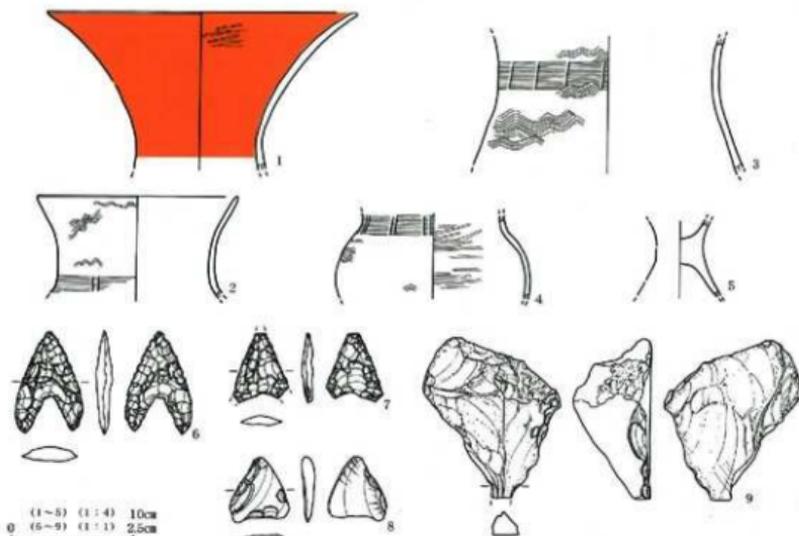
第13表 H112号住居址出土遺物観察表

(13) H13号住居址 (第27図, 写真図版十一)

本住居址は、調査区西制端の北斜面部であるB-イ-11・12、B-ウ-11・12Grに位置する。M2号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は北側が自然の地形による傾斜で削平され、また住居址南側は水道管により一部破壊されている。形態は方形を呈すると考えられる。竈は東壁よりに造られている。規模は南壁4.04m・西壁残存1.72m・東壁残存3.14mで、壁高さは南東コーナーで37cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-14°Eを示す。住居址の床面積は残存で12.4m²を測る。覆土は2層に分れ、自然堆積である。床は全体に軟質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は9個が検出された。規模はP1が径21cm・深さ19.5cm、P2が径20cm・深さ18.5cm、P3が径23cm・深さ14.5cm、P4が径22cm・深さ15cm、P5が径25cm・深さ9cm、P6が径20cm・深さ9.5cm、P7が径51cm・深さ17.5cm、P8が径14cm・深さ8cm、P9が径33cm・深さ27cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P3は主柱穴、P7が入り口施設と考えられる。またP9は棟持柱的な配置である。



- 1層 黒褐色土 (10YR3/2)
しまり、粘性あり、灰化物を含む。
- 2層 褐色土 (10YR4/4)
しまり、粘性あり、下部に灰化物の少量含む。
- (約)3層 赤色土 (10R4/3)
上部よく焼けて硬質化している、下部は地山の焼け。



第27図 H13号住居址及び出土遺物実測図

No.	器種	法 量		成 形・調 整・文 様		色 調	備 考	出土位置	
		口徑長	底径幅	外 面	内 面				
1	甕	(25.2)	—	(12.8)	ヘラミガキ、魚鱗模	9YR5, 赤色塗	10R4/3 (赤)	完全欠損	5
2	甕	(16.4)	—	(7.8)	口縁部に魚鱗状文、 胴部に魚鱗状文 (2連止め)	ナデ	7.5YR7/0 (黄)	回転欠損	一括
3	甕	—	—	(10.5)	口縁部と胴部に魚鱗状文、 胴部に魚鱗状文 (1本1組1連止め)	ナデ	7.5YR5/0 (黄)	回転欠損	5
4	甕	—	—	(6.7)	胴部に魚鱗状文 (2連止め) 胴部に魚鱗状文	ヘラミガキ	7.5YR7/0 (黄)	回転欠損	4
5	台付甕	—	—	(8.0)	不明	不明	7.5YR7/0 (黄)	回転欠損	1区
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置
6	円蓋の轆	灰燻石	完全	20.5	13.5	3.3	0.60		1区
7	円蓋の轆	灰岩	完全	13.8	11.3	2.2	0.10		2区
8	石製水製品	緑色凝灰岩	完全	13.0	12.3	2.6	0.40	素材割付の未端はセシジになっている	3区
9	石鏃	燧石	局部欠損	33.7	28.3	16.2	9.40	素材は角礫をそのまま刃端にわずかに加工がみられるのみ	一括

第14表 H13号住居址出土遺物観察表

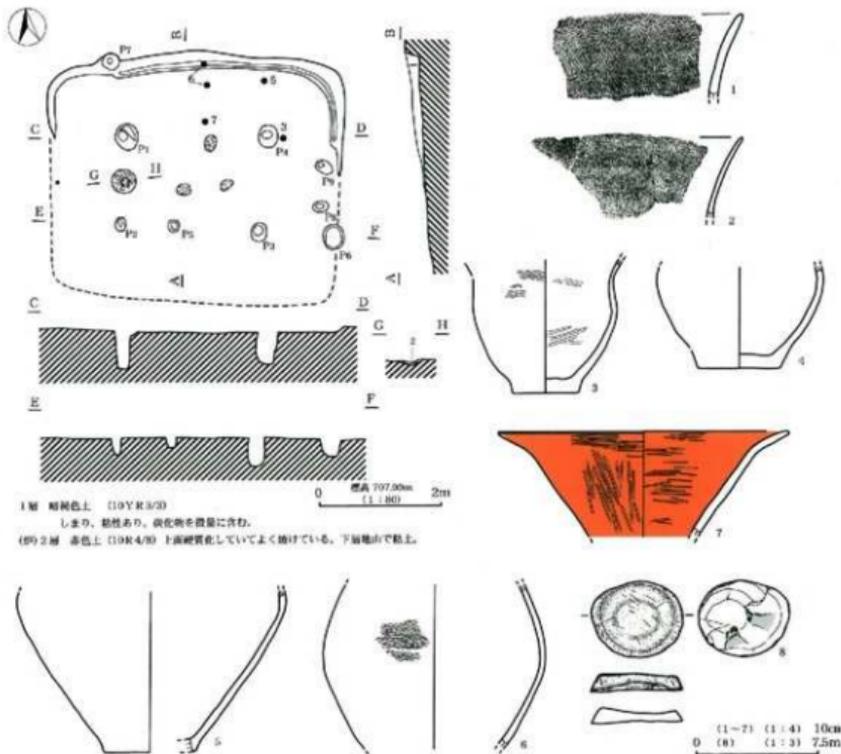
が東壁よりに検出された。主軸方位はN-5°-Eを測る。形態は円形であり、規模は長軸38cm・短軸35cmで焼土の厚さは6cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址の遺物は全体として少量で覆土内より出土した。土器は5点を図示した。1は壺の口縁部で赤彩が施されている。3～4は甕の口縁部と胴部で、いずれも頸部に柳葉状文と波状文が施されている。5は台付甕の脚部が高坏の脚部と考えられ、今回は赤彩が確認されないため台付甕とした。これら図示した土器の出土位置は1と3と4は平面図中に位置を示したが、床面からは4～8cm浮いた状態で検出されている。石器類は4点図示した。この他に本址からは3点の黒曜石原石及び剥片が出土している。6と7は石鏝で、8は石鏝未製品と考えられる。9は鎌の刃部を欠損しているが石鏝である。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

(14) H14号住居址 (第28図、写真図版十二)

本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF・ノ-18・19、F・ハ-18・19、F・七-18・19Grに位置する。残存状態は南側半分が自然の地形傾斜により削平されている。形態はほぼ長方形を呈する。炉は住居址西壁側に造られている。規模は北壁4.60m・南壁推定4.47m・西壁残存0.88m推定3.14m・東壁残存1.64m推定3.65mで、壁高さは北壁中央で23cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-7°-Eを示す。住居址の床面積は残存6.8㎡・推定17.6㎡



第28図 H14号住居址及び出土遺物実測図

を測る。覆土は単層で、床は住居土炉周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は東壁の一部から北壁にかけて確認された。溝幅は18~37cmで、深さは1~3.5cmを測る。断面の形態はU字形である。柱穴は9個が検出された。規模はP1が径42cm・深さ64cm、P2が径22cm・深さ29cm、P3が径30cm・深さ49cm、P4が径36cm・深さ51.5cm、P5が径20cm・深さ18cm、P6が径40cm・深さ29cm、P7が径28cm・深さ24cm、P8が径25cm・深さ35cm、P9が径30cm・深さ40.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴、P8とP9が入り口施設と考えられる。またP6は規模より貯蔵穴と推定される。

炉は西壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はN-36°-Wを測る。形態は円形であり、規模は長軸40cm・短軸38cmで焼土の厚さは5cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。また、本址はこの炉の他に床面に3カ所の焼土範囲が検出された。これら焼土範囲はいずれも住居土中央部に確認された。

本址の出土遺物は全体として少量であった。図示した土器の出土位置は3と7は床面直上より、5と6は床面より4~7cm浮いた状態で、その他は覆土中の出土である。1~6は壺で、全体に摩耗が激しく筋文や調整は不明な部分が多い。7は高坏坏部で内外面赤彩を施す。8は片面に自然面を残す剥片で、側面より台形状を呈する。両面にわずかが顕著な擦痕状の磨りがみられる。

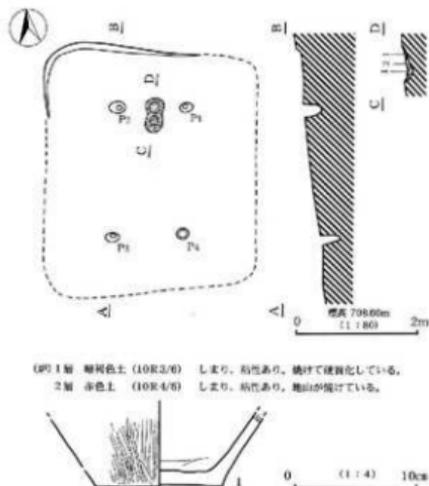
本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

No	器種	形 態		成 形・調整・文 様		色 澤	備 考	出土位置	
		口縁部(直径/高さ)	器高	外 面	内 面				
1	壺	-	(6.7)	口縁部に磨痕状文(10本上彫)	ヘラミガキ	7.5YR4/2 (8C焼)	破片実測	1区	
2	壺	-	(6.3)	口縁部に磨痕状文、頂部に磨痕状文	不明	7.5YR6/4(2.0-2.5)焼	破片実測	1区	
3	壺	5.4	(10.7)	胴部に磨痕状文	ヘラミガキ	7.5YR4/4 (焼)	完全実測	6区	
4	壺	6.8	(8.3)	不明	不明	7.5YR7/4(2.0-2.5)焼	完全実測	P 6区、6区	
5	壺	(7.6)	(13.1)	不明	不明	5YR6.5 (焼)	調整実測	1区、7区	
6	壺	-	(13.4)	胴部に磨痕状文	不明	7.5YR8/4(2.0-2.5)焼	調整実測	4区	
7	高坏	(32.6)	(28.6)	ヘラミガキ、赤色塗彩	N37 丸、赤色塗彩	10R3/6 (焼赤)	調整実測		
No	器 種	素 材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置
8	磨石	灰岩	完形	65.0	55.0	10.0	25.40	両面に少ない磨痕状の磨り	1区

第15表 H114号住居土出土遺物観察表

(15) H15号住居土 (第29図, 写真図版十二)

本住居土は、調査区中央部の南斜面であるF-ヌ-16-17、F-ネ-16・17Grに位置する。残存状態は住居土北西コーナーと炉及びピットしか残存していない。形態は方形を呈すると考えられる。炉は住居土北壁側に造られている。規模は北壁残存2.40m・南壁推定3.26m・南壁推定3.15m・西壁残存1.03m・東壁推定3.82m・東壁推定3.40mで、壁高さは北西コーナーで11cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN 7°-Eを示す。住居土の床面積は推定13.0㎡を測る。覆土は単層で、床は住居土炉周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されなかった。柱穴は4個が検出された。規模はP1が径22cm・深さ35.5cm、P2が径25cm・深さ30cm、P3が径23cm・深さ32cm、P4が径19cm・深さ32.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴と考えられる。炉は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はN-11°-Eを測る。形態は8の字形であり、規模は長軸57cm・短軸23cmで焼土の厚さは7cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。本址の出土遺物は少量で、図示できる物は壺底部のみであった。本址は不確定であるが弥生後期 に位置づけられると考える。



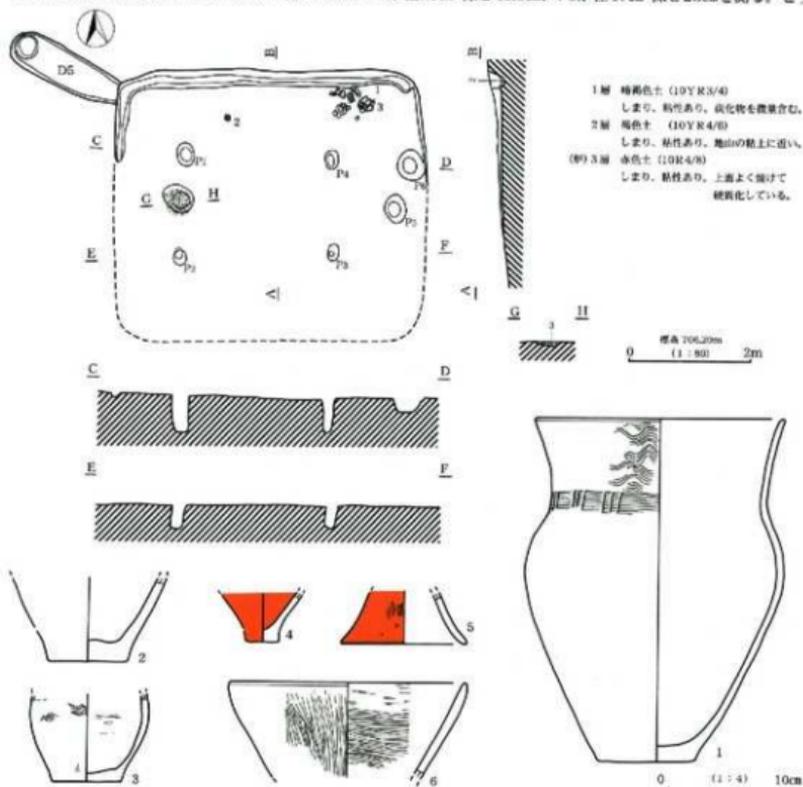
第29図 H15号住居土及び出土遺物実測図

本址からの出土遺物は少量で、図示した遺物の出土位置は1～3が床面直上より、4は覆土中である。1と2は裏で、1は1/2程が残存しているが摩耗も少なく、施文・調整が明確に観察できた。3と4は高坏の坏部と脚部でそれぞれに赤彩が施されている。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

(17) H18号住居址 (第31図, 写真図版十四)

本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF・フ-19・20、F-へ-19・20、F-ホ-19・20Grに位置する。残存状態は南側が自然地形の傾斜により削平されている。形態はほぼ長方形を呈すると考えられる。竈は住居址西側に造られている。規模は北壁4.72m・南壁推定4.56m・西壁残存1.24m推定4.02m・東壁残存1.65m推定4.10mで、壁高さは北壁際で21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-3°-Eを示す。住居址の床面積は残存7.4㎡・推定21.2㎡を測る。覆土は2層に分れる。床は住居址伊周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を敷いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は北壁の全体と西壁の一部に確認された。溝幅は12～29cm、深さ2.5～7cmを測る。断面の形態はU字形である。柱穴は6個が検出された。規模はP1が径37cm・深さ60.5cm、P2が径25cm・深さ38cm、P3が径26cm・深さ38cm、P4が径30cm・深さ56cm、P5が径45cm・深さ46.5cm、P6が径47cm・深さ23cmを測る。ピット



第31図 H18号住居址及び出土遺物実測図

の検出位置よりP1～P4は主柱穴、P5は入り口施設、P6は貯蔵穴と考えられる。また本址には北西コーナーに接するように長楕円形の土坑が検出された。本土坑は住居址との重複関係は不明であるが、群馬県中高瀬観音山遺跡などにおいて類似した遺構が検出されているため本項で記載する。土坑の規模は長軸190cm・短軸60cmで深さ14.5cmを測る。また土坑西先端には円形のピットが一段深く掘り込まれている。

炉址は西壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はN-44°Wを測る。形態は不整形であり、規模は長軸51cm・短軸42cmで焼土の厚さは5cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は少量であったが、北東コーナー付近にまとまって出土した。図示した遺物の出土位置は1～3が床面直上で、その他は覆土中である。器種は1～3が甕、4が赤彩された小型の鉢と考えられるが不確実である。5は高坏脚部、6が鉢口縁部である。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

No.	器種	法 量			形状・調整・文様	色 調	備 考	出土位置	
		口径長(表)	底径(裏)	高さ(厚)					
1	甕	29.3	8.9	28.0	口縁に磨崖線状文、 胴部に磨崖線状文(2道止め)	不明	10YR6/3(2)赤褐色	完全実測	
2	甕	-	6.4	6.6	不明	不明	2.5YR4/8(赤)	完全実測	Ⅱ区
3	甕	-	5.6	7.2	胴部に磨崖線状文、 胴部上半に磨崖線状文、 胴部下半にヘラミガキ	ヘラミガキ	3YR6/6(赤)	完全実測	
4	鉢?	-	2.6	3.8	赤色塗彩	赤色塗彩	10R4/8(赤)	完全実測	一部
5	高坏	-	(10.3)	(4.2)	ヘラミガキ、赤色塗彩	不明	10R4/8(赤)	図転実測	一部、Ⅱ区
6	鉢	-	(19.0)	(7.8)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR8/4(明黄緑)	図転実測	Ⅱ区

第18表 H18号住居址出土遺物観察表

No.	器種	法 量			形状・調整・文様	色 調	備 考	出土位置	
		口径長(表)	底径(裏)	高さ(厚)					
1	甕	-	-	(5.3)	口縁部に磨崖線状文、口唇部に刻み	ヘラミガキ	2.5YR7/6(赤)	一部	
2	甕	-	-	(4.2)	胴部に磨崖線状文(1道止め)	不明	2.5YR6/7(2)赤褐色	破片実測	ペルト、P2

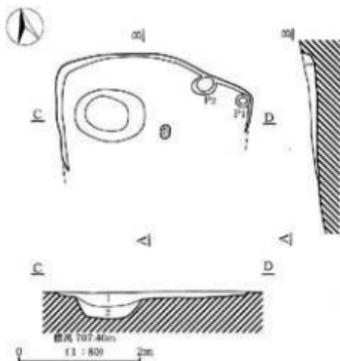
第19表 H19号住居址出土遺物観察表

(H19号住居址 (第32図、写真図版十四))

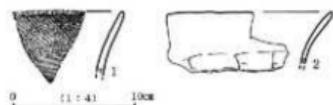
本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF-F'-17Grに位置する。残存状態は南側が自然地形により削平されている。形態はいびつな方形を呈すると考えられる。炉は住居址中央部で検出された。規模は北壁3.13m・西壁残存1.66m・東壁残存0.59mで、壁高さは20.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は残存で4.0㎡を測る。覆土は単層である。床は全体に軟質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は2個検出された。規模はP1が径21cm・深さ23.5cm、P2が径40cm・深さ38.5cmを測る。ピットはいずれも住居の柱的な配列を示さない。また、本址には住居内土坑が検出された。規模は長軸113cm・短軸85cmで、深さは34cmを測る。

炉址は住居址中央部で確認されたが、規模も小さく、焼土も他の住居址に比べ硬質化していなかった。これらの事から本址は一般的な住居ではなく、作業小屋的な仮小屋を想定すべきと考える。本址からの出土遺物は非常に少なく、2点の土器を図示した。2点共に甕の口縁部破片であり、1は口縁部に磨崖線状文と口唇部に刻みを施している。2は胴部に磨崖線状文が施されているが詳細は不明である。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。



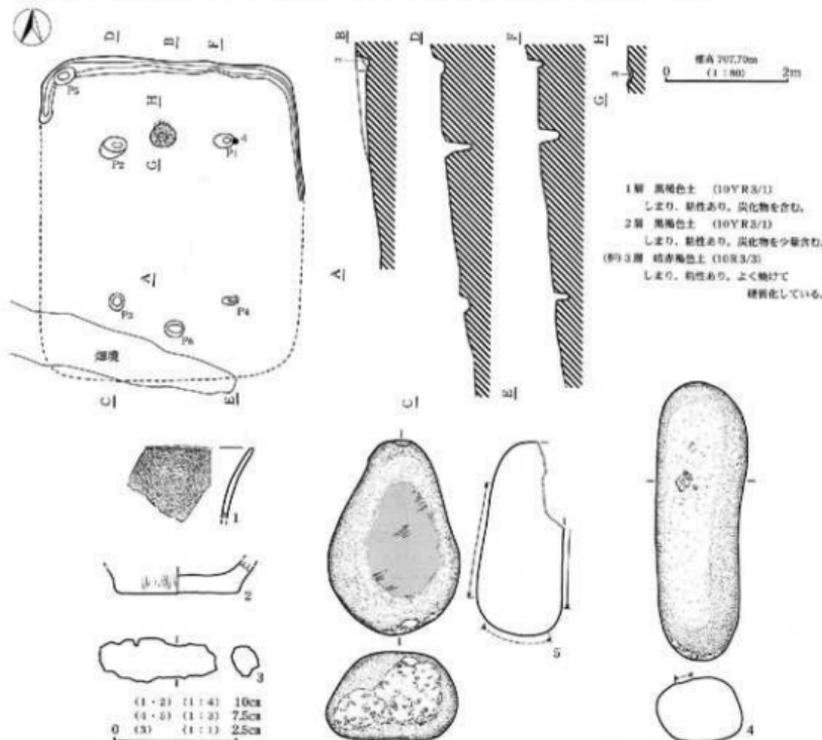
1 甕 暗褐色土(10YR8/3) しまり、形化あり、灰化物を含む。
2 甕 赤褐色土(10YR3/1) しまり、形化あり、黄色ローム層を含む。



第32図 H19号住居址及び出土遺物実測図

(19) H20号住居址 (第33図, 写真図版十五)

本住居址は、調査区中央部の南斜面であるFナ18・19、Fニ18・19Grに位置する。残存状態は南側が自然の地形により削平されており、住居址の北壁と炉及びピットが残存していたのみである。形態はピットより長方形を呈すると考えられる。炉は住居址北側に造られている。規模は北壁推定3.88m・南壁推定3.77m・西壁残存0.80m推定4.83m・東壁残存2.00m推定4.52mで、壁高さは20cmを測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。床面積は残存6.3㎡・推定21.0㎡を測る。覆土は2層である。床は全体に軟質であった。柱穴は6個が検出された。規模はP1が径33cm・深さ32.5cm、P2が径45cm・深さ45cm、P3が径28cm・深さ22.5cm、P4が径26cm・深さ25.5cm、P5が径39cm・深さ13.5cm、P6が径31cm・深さ9cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴、P6は入り口施設と考えられる。



第33図 H20号住居址及び出土遺物実測図

No.	器種	寸法		成形・形状・文様				色調	備考	出土位置	
		口径(長)	底径(短)	外	内	面	底				
1	甕	—	(5.8)	口縁部に斜線状軟文				ヘラミガキ	7.5YR6/6 (他)	断面	上段
2	甕	—	5.8 (2.1)	ヘラミガキ				ナデ	7.5YR6/6 (他)	完全欠損	一括
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大径	最大厚	重量	肉眼		出土位置	
3	不明	鉄製品	欠損	(25.5)	—	—	1.50				
4	磁石	ホルンフェルス	完整	168.0	52.0	39.0	686.00	上・下先端に鋭き			
5	磨石・磨石	輝石火山岩	部分欠損	118.0	79.0	53.0	656.00	正面に斜め方向に走る凹線をけり廻り、上・下先端に鋭き鋭き			

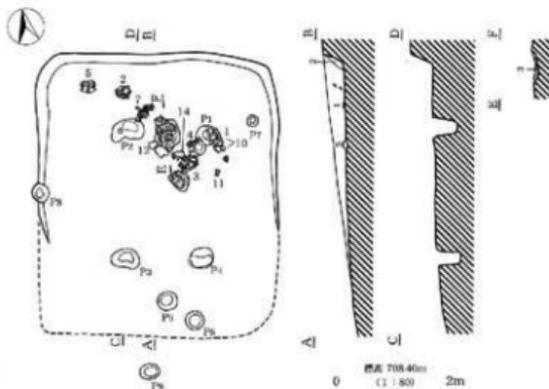
第20表 H20号住居址出土遺物観察表

炉は住居址北よりP1とP2間に検出された。形態は円形であり、規模は径42cmで焼土の厚さは3cmを測る。焼土は良く焼け硬質化していた。本址からの出土遺物は非常に少なく、土器2点、鉄製品1点、石器2点をそれぞれ図示した。これらの遺物の出土位置は4の礫石のみ床面直上よりの出土で、その他は覆土中の出土である。1と2は裏の口縁部と底部の破片である。3は鉄製品であるが錆が激しく、種別は不明である。4は礫石、5は礫石と磨石の両方の使用痕跡がある。特に礫石は顕著である。本址からはこの他に黒曜石の刃部を欠損した石錐が出土している。

本址はこれらの遺物より弥生中期後半に位置づけられる。

(20)H21号住居址 (第34.35図, 写真図版十五十六)

本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF・ハ・15・16、F・ヒ・15～17Grに位置する。残存状態は南側が自然地形の傾斜により削半されている。形態はほぼ長方形を呈すると考えられる。炉は住居址北側と中央部に2カ所造られている。規模は北壁3.56m・南壁推定2.40m・西壁残存3.00m推定4.35m・東壁残存2.71m推定4.27mで、壁高さは北壁際で34.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-11°-Eを示す。床面積は残存10.4㎡・推定16.3㎡を測る。覆土は2層に別れ、自然堆積である。床は住居址中央部が硬質であり、貼り床は確認されず地山を露出させて踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は9個が検出された。規模はP1が径38cm

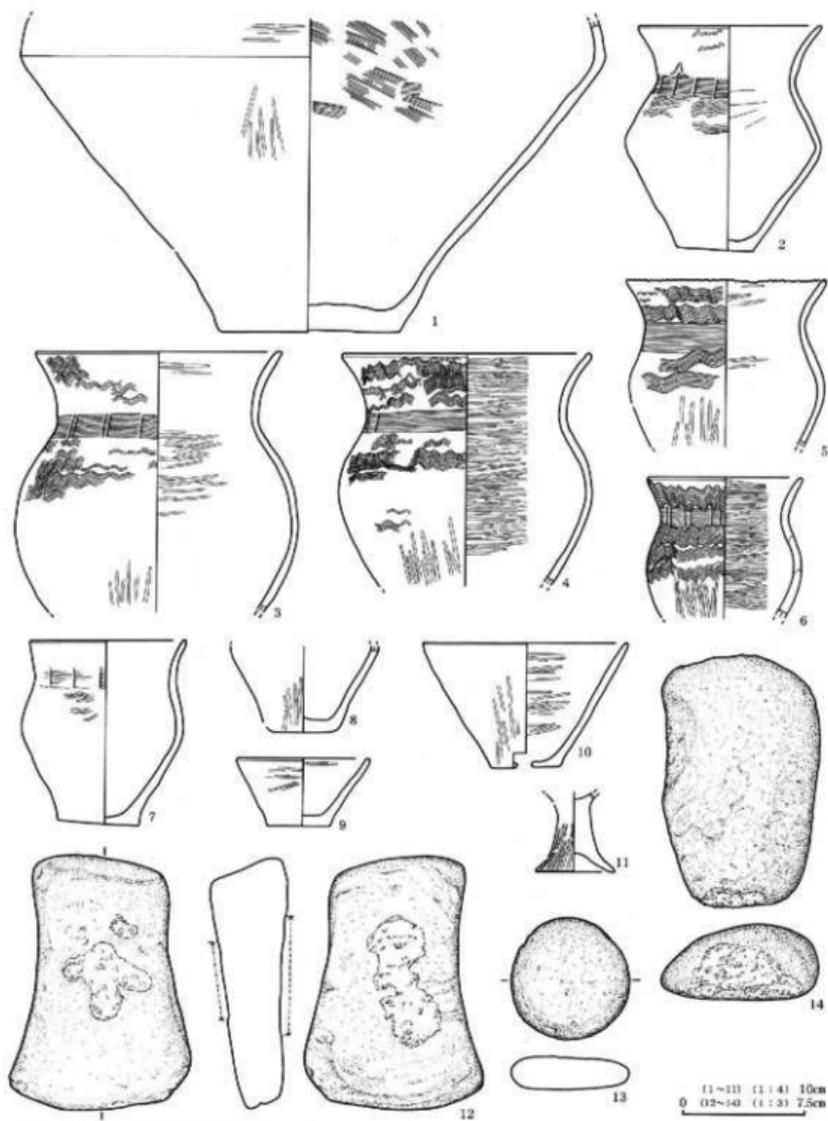


1 薪 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。
2 薪 黒褐色土 (10YR3/0) しまり、粘性あり。下部に炭化物を含む。
(9) 3 薪 赤色土 (10R4/8) しまりあり、土面よく硬質化している。下部は地山が露出している。

第34図 H21号住居址実測図

No	部 類	出 土 地 点		説 明・測 量・文 様		色 調	備 考	出土位置	
		区画番号	測点番号	形 状	内 容				
1	炭	-	14.8 (25.4)	ヘラミガキ	ハケ目の残るナゲ	7.5YR6/6 (薄)	完全実測	1区	
2	炭	14.9	6.3 18.3	口縁部と胴部に磨蝕痕状文。 胴部に磨蝕線状文 (10本1組1連止め)	ナゲ	7.5YR6/6 (薄)	完全実測		
3	炭	(20.6)	- (21.2)	ヘラミガキ。口縁部磨蝕痕状文。 胴部に磨蝕線状文 (12本1組2連止め)	ヘラミガキ	10YR8/4 (明黄褐色)	10%実測 残状が一部欠	II区	
4	炭	(20.4)	- (18.8)	胴部下平にヘラミガキ。 口縁部と胴部上平に磨蝕痕状文(10本1組) 胴部に磨蝕線状文(10本1組1連止め2箇所)	ヘラミガキ	10YR7/4(2) (明黄褐色)	10%実測		
5	炭	16.3	- (13.0)	胴部下平にヘラミガキ。 口縁部と胴部上平に磨蝕痕状文(7本1組) 胴部に磨蝕線文。口縁部に刻み	ヘラミガキ	5YR6/6 (薄)	完全実測		
6	炭	(12.6)	- (11.3)	胴部下平にヘラミガキ。 口縁部と胴部上平に磨蝕痕状文(8本1組) 胴部に磨蝕線状文(8本1組2連止め)	ヘラミガキ	7.5YR7/4(2) (明黄褐色)	10%実測	1区	
7	炭	12.7	6.5 15.0	胴部に磨蝕痕状文。 胴部に磨蝕線状文(1連止め)	不明	7.5YR7/6 (薄)	完全実測	3	
8	炭	-	5.6 (7.0)	ヘラミガキ	不明	2.5YR4/8 (赤褐色)	完全実測	1区	
9	鉄	10.8	5.1 5.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR7/4(2) (明黄褐色)	完全実測	1区	
10	鉄	16.7	5.6 16.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR7/6 (薄)	完全実測 穿孔	3	
11	高坪	-	(6.3)	6.2	ヘラミガキ	ナゲ	10YR7/3(2) (淡黄褐色)	完全実測	2
No	部 類	出 土 地 点	現存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所 見	出土位置
12	礫石 (台石)	磨蝕痕状石		15.0	10.0	4.0	11.20	内面中央に磨石状磨き	
13	磨石?	石灰灰土質		7.0	7.0	1.0	1.18	両面を磨って成形していると考えられるが、磨蝕不明	II区
14	磨石	礫石灰土質		10.0	9.0	4.0	10.40	下先端に顕著な磨き	2

第21表 H21号住居址出土遺物観察表



第35图 H21号住居址出土遺物実測图

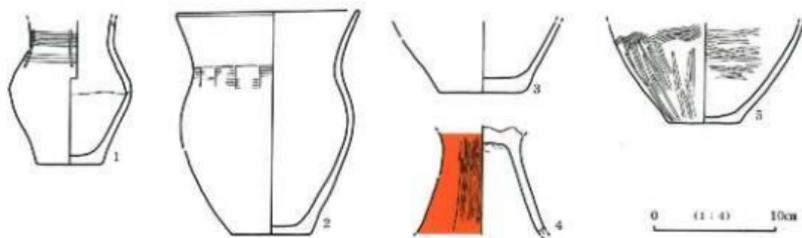
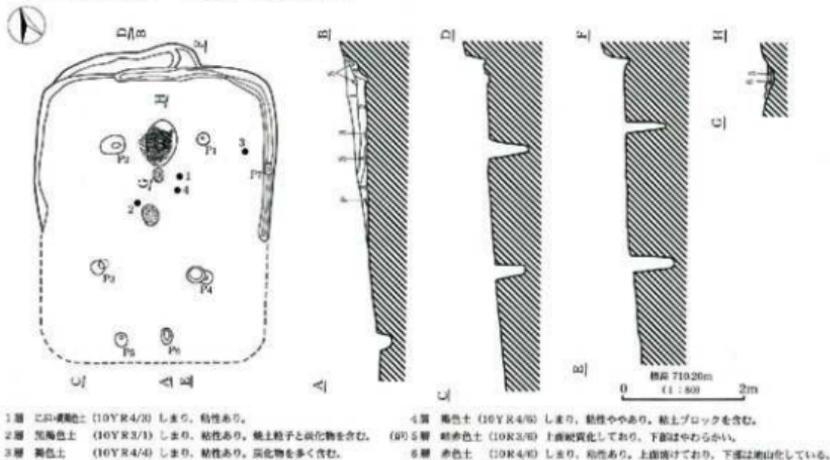
・深さ51cm、P2が径52cm・深さ41.5cm、P3が径47cm・深さ38cm、P4が径37cm・深さ71cm、P5が径30cm・深さ30cm、P6が径30cm・深さ12cm、P7が径18cm・深さ23.5cm、P8が径31cm・深さ24.5cm、P9が径32cm・深さ12cmを測る。これらピットの検出位置よりP1～P4は主柱穴でいずれも楕円形を呈する。P5は入り口施設と考えられる。またP9は住居址推定ラインよりも外に位置するが、近接しており本項で扱った。

がは2カ所検出された。まず住居址北よりP1とP2間に検出されたがは形態が不整形で、規模は長軸61cm・短軸42cmで焼土の厚みは5cmを測る。良く焼けており焼土は硬質化していた。また、炉南側には襷が2点検出され、炉石的配置を示す。住居址中央部のがは円形で、規模は長軸35cm・短軸27cmを測る。焼土は良く焼けており、硬質化していた。

本址からの出土遺物は非常に多く、特にすべてが床面上に破壊された様な状態で出土した。1は壺の胴部下半部分である。P1脇に伏せたような状態で出土した。2～7は甕であり、ほぼ全容を知りうる資料が多い。施文方法は頸部に柳葉状文、口縁部と胴部に柳葉波状文がそれぞれ施されているが、5のみ崖状文でなく、横線文となっている。また、5は口縁部に刻みをもつ。8は小型壺の胴部下半、9は鉢、10は単孔の甌、11は高坏脚部と考えられるが脚部が短く特異な製品である。12は磁石で両面の中央部にいずれも敲き痕が確認できることから、手持ちではなく、台石制と考えられる。13は磨石、14は敲石である。

本址はこれらの遺物より弥生後期5段階に位置づけられる。

(21) H22号住居址 (第36図、写真図版十七)



第36図 H22号住居址及び出土遺物実測図

No.	部 種	造 量		形 状・構造・文 様		色 調	備 考	出土位置
		口径長(垂直軸) 器高(寸)	器底(寸)	外 面	内 面			
1	甕	—	5.4 (14.7)	形底に薄造模倣文の跡、器底非下文	不明	10YR4/6 (地)	完全製	
2	甕	(15.0)	6.4 (16.4)	胴部に薄造模倣文(1通止め)	不明	7.5YR6/6 (地)	完全製	2
3	甕	—	6.9 (5.6)	不明	不明	5YR5/6 (赤褐色)	完全製	4
4	高杯	—	(7.6)	ヘラミガイナ、赤色赤彩	ナズ	10R4/8 (赤)	完全製	
5	甕	—	(5.8)	胴部上中に薄造模倣文、胴部下中にヘラミガイ	ヘラミガイ	2.5YR6/6 (地)	河内製	Ⅱ区

第22表 H22号住居址出土遺物観察表

本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF-二-13-14、F-ヌ-13-14Grに位置する。残存状態は南側が自然の地形により削平されており、住居址の1/2程とが及びットが残存していたのみである。形態はピットより長方形を呈すると考えられる。炉は住居址北側に造られている。規模は北壁推定3.62m・南壁推定3.30m・西壁残存2.27m推定4.23m・東壁残存2.55m推定4.35mで、壁高さは北壁路で31cmを測る。主軸方位はN-21°Eを示す。床面積は残存9.9㎡・推定17.3㎡を測る。覆土は4層に分れ自然堆積である。壁溝は東壁と北壁にかけて確認された。規模は幅12～27cm・深さ2.5～9cmで、断面U字形を呈する。床は炉周辺部のみ硬質であり、貼り床は確認されなかった。柱穴は6個検出された。規模はP1が径20cm・深さ63cm、P2が径40cm・深さ65cm、P3が径23cm・深さ68.5cm、P4が径50cm・深さ70cm、P5が径23cm・深さ25cm、P6が径27cm・深さ22cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4は主柱穴、P5とP6は入り口施設と考えられる。また、本址は北壁側に棚状のテラス部が検出された。テラス部は全体が平坦ではなく、西に向けて段が形成されていた。

炉は住居址北よりのP1とP2間で検出された。形態は楕円形で、規模は長軸75cm・短軸61cmで焼土の厚みは7cmを測る。良く焼けており焼土は硬質化していた。また、炉南側には焼土範囲が2カ所検出された。いずれも小型ではあるが表面は硬質化していた。

本址からの出土遺物は少量であった。図示した遺物の出土位置は1と4が床面直上、2と3が2～4cm床よりも浮いた状態で、5が覆土中からの出土である。1は小型の壺で、胴部中に粘土紐による接合痕が明瞭に残る。2・3と5は甕、4は赤彩を施した高杯脚部である。

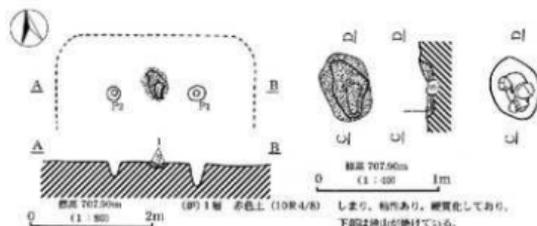
本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

(22) H23号住居址 (第37図、写真図版十七)

本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF-ノ-16-17Grに位置する。残存状態は南側が自然の地形により削平されており、住居址の炉及びットが残存していたのみである。形態はピットより長方形を呈すると考えられるが不確定である。規模は北壁推定2.95mで、壁は残存していなかった。床は炉周辺部のみ硬質であった。柱穴は2個検出された。規模はP1が径28cm・深さ36cm、P2が径22cm・深さ22cmを測る。ピットの検出位置よりP1とP2は主柱穴と考えられる。

炉は住居址北よりのP1とP2間で検出された。形態は楕円形で、規模は長軸52cm・短軸38cmで焼土の厚みは9cmを測る。良く焼けており焼土は硬質化していた。炉の掘り方時に縄が検出されたが、地山の石と考えられる。

本址からの出土遺物は少量で図示できる物はなかったが、壺・甕片11点が出土している。本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。



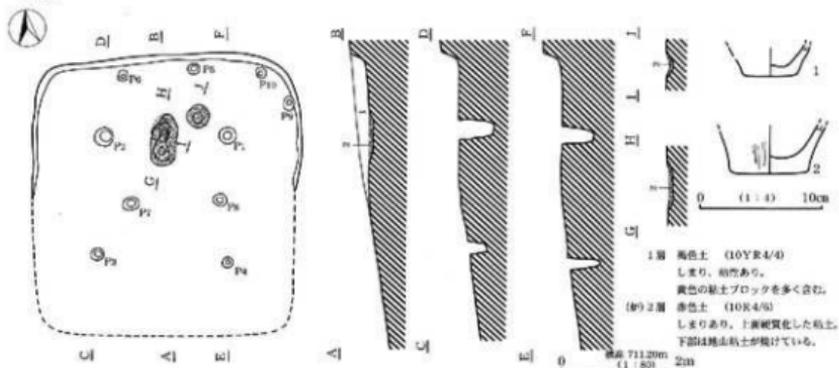
第37図 H23号住居址実測図

(23) H24号住居址 (第38図、写真図版十八)

本住居址は、調査区中央部の台地南斜面であるF-ツ13、F-テ13Grに位置する。残存状態は南側半分が自然地形の傾斜により削平されている。形態はほぼ方形を呈する。今は住居址北壁より造られている。規模は北壁3.78m・南壁推定3.78m・西壁残存2.06m推定4.15m・東壁残存2.08m推定4.27mで、壁高さは北壁よりで27.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-7°-Eを示す。床面積は残存で8.7㎡・推定で18.1㎡を測る。覆土は単層で、床は全体に軟質であった。壁溝は確認されていない。柱穴は10個が検出された。規模はP1が径27cm・深さ50cm、P2が径30cm・深さ58cm、P3が径20cm・深さ31.5cm、P4が径17cm・深さ49.5cm、P5が径20cm・深さ9cm、P6が径17cm・深さ8.5cm、P7が径27cm・深さ11.5cm、P8が径23cm・深さ9cm、P9が径23cm・深さ7cm、P10が径17cm・深さ6cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴と考えられる。また、P7とP8は主柱穴間のライン上にややずれるものの配置されているため、本址は6本柱による主柱穴の可能性もある。

かじは2力所確認された。まず主の炉址は住居址北よりのP1とP2間に検出された。形態は楕円形であり、規模は長軸85cm・短軸40cmで焼土の厚さは7cmを測る。焼土は良く焼けており、硬質化していた。補助的なかじは、北東に隣接するように確認され、形態は円形で、規模は径38cmで焼土の厚みは3cmを測る。焼土は良く焼けており、硬質化していた。

本址の遺物は極めて少量で覆土から主に出土した。図示した土器2点はいずれも壁底部と考えられる。出土位置はいずれも覆土中である。本址は出土遺物が極めて少なく不確定要素も多いが、弥生後期に位置づけられると考えられる。



第38図 H24号住居址及び出土遺物実測図

坑	器種	位置		形状・調整・文様		色澤	備考	出土位置	
		口縁部(表径和)	底径和	外 面	内 面				
1	甕	-	4.6	底0	不明	不明	Z5Y2/7(地)	完全焼潰	Ⅱ区
2	甕	-	6.3	底0	ヘラミガキ	不明	Z5Y2/7(地)	完全焼潰	Ⅱ区

第23表 H24号住居址出土遺物観察表

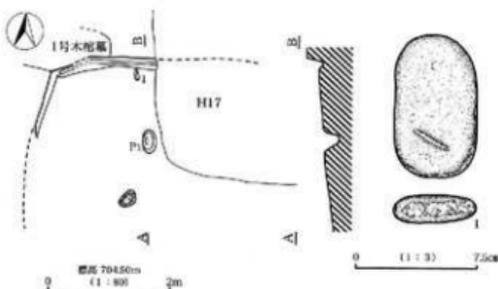
(24) H25号住居址 (第39図、写真図版十八)

本住居址は、調査区南端の南斜面であるF-ヒ22、F-フ22Grに位置する。本址は1号木棺墓とH17号住居址とそれぞれ重複関係にある。新旧関係はいずれよりも本址が古い。残存状態は自然地形の傾斜でほとんどが削平されており、住居址の北西コーナーとかじ及びピットが確認されたのみである。形態はかじの検出位置より推定すると東西に長い方形を呈すると思われる。今は住居址西側に造られている。規模は北壁残存1.73m・西壁残存1.10mで、壁高さは北西コーナーで18.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は残存で2.5㎡を測る。覆土は単層であった。床は全体に軟弱であり、貼り床は確認されず地山を敷いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は北壁に確認され、規模は幅14～18cm・深さ2.5～6cmを測る。柱穴は1個検出された。規模はP1が径38cm・深さ23cmを測

る。P1はその検出位置より主柱穴と考えられる。

炉は西壁より確認された。形態は不整形で、規模は長軸30cm・短軸22cmで焼土の厚さは3cmを測る。焼土はよく焼けていたが、硬質部分は確認できなかった。

本址からの出土遺物は少量で、図示した散石の他には赤彩された壺・甕・鉢片17点があったのみである。本址はこれらの遺物より不確定要素もあるが弥生後期に位置づけられると考える。



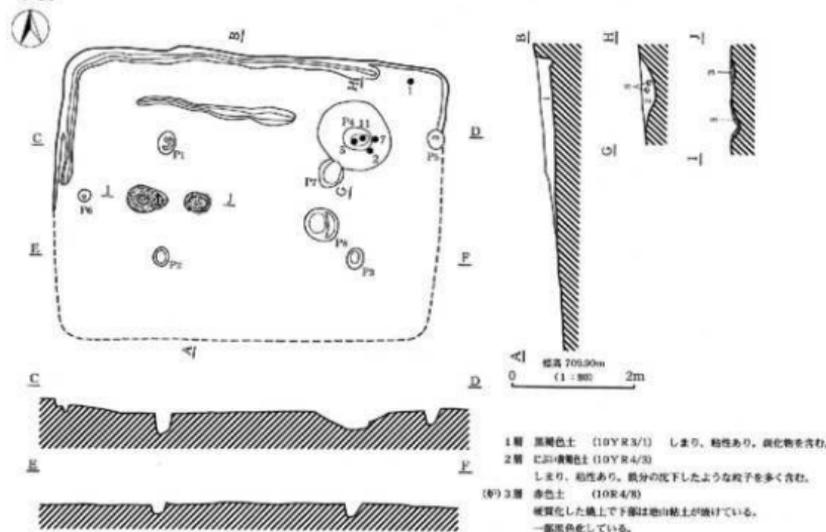
第39図 H25号住居址及び出土遺物実測図

No.	遺物	素材	保存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
1	散石	砂岩	完形	88.0	56.0	17.0	107.40	石割と上下瓦割に過ぎず	一掃

第24表 H25号住居址出土遺物観察表

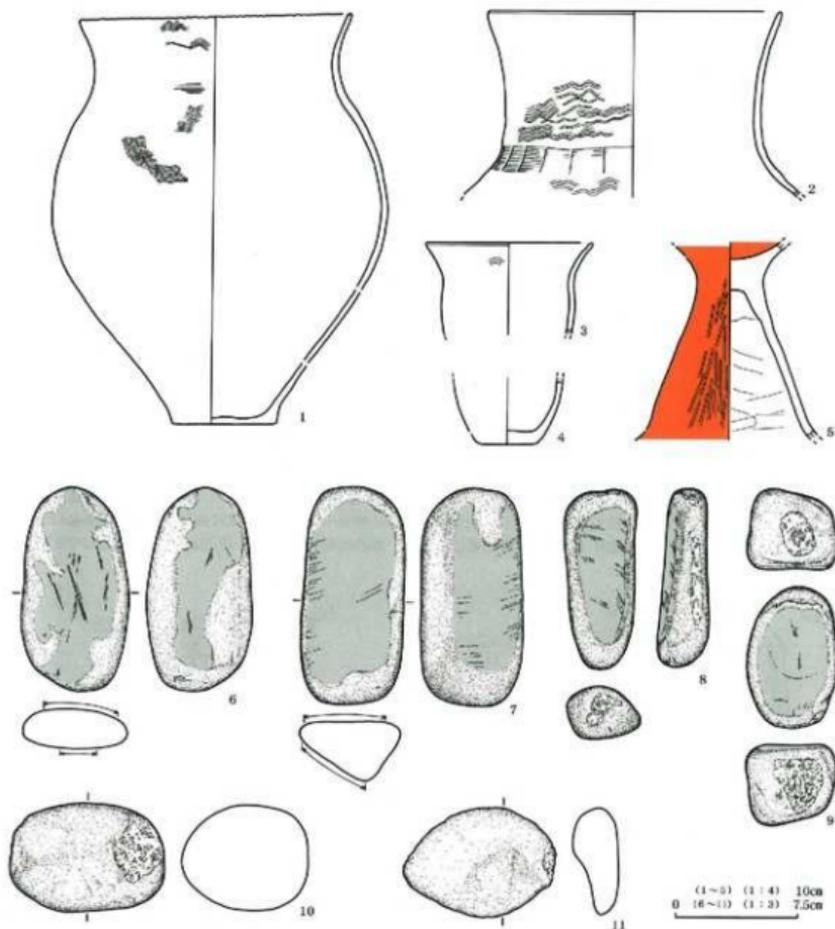
(25) H26号住居址 (第40.41回, 写真図版十九)

本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF-タ15・16、F-チ15・16、F-ツ15・16Grに位置する。残存状態は南側が自然の地形による傾斜で削平されている。形態は東西方向に長軸をもつ長方形を呈する。炉は西壁よりに造られている。規模は北壁6.00m・南壁推定5.72m・西壁残存2.55m推定4.50m・東壁残存1.20m推定4.25mで、壁高さは北壁際で28.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-86°-Wを示す。住居址の床面積は残存で13.5m²・推定27.8m²を測る。覆土は単層である。床は炉周辺部は硬質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様状態であった。壁溝は北壁と西壁に確認された。規模は幅11~30cm・深さ9cmで、断面はU字形を呈する。



- 1層 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり、粘性あり、炭化物を含む。
- 2層 棕色黄褐色土 (10YR 4/3) しまり、粘性あり、炭分の沈下したような粒子を多く含む。
- (N) 3層 赤色土 (10R 4/3) 硬質化した土上で下部は地山粘土が検出されている。一部黒色化している。

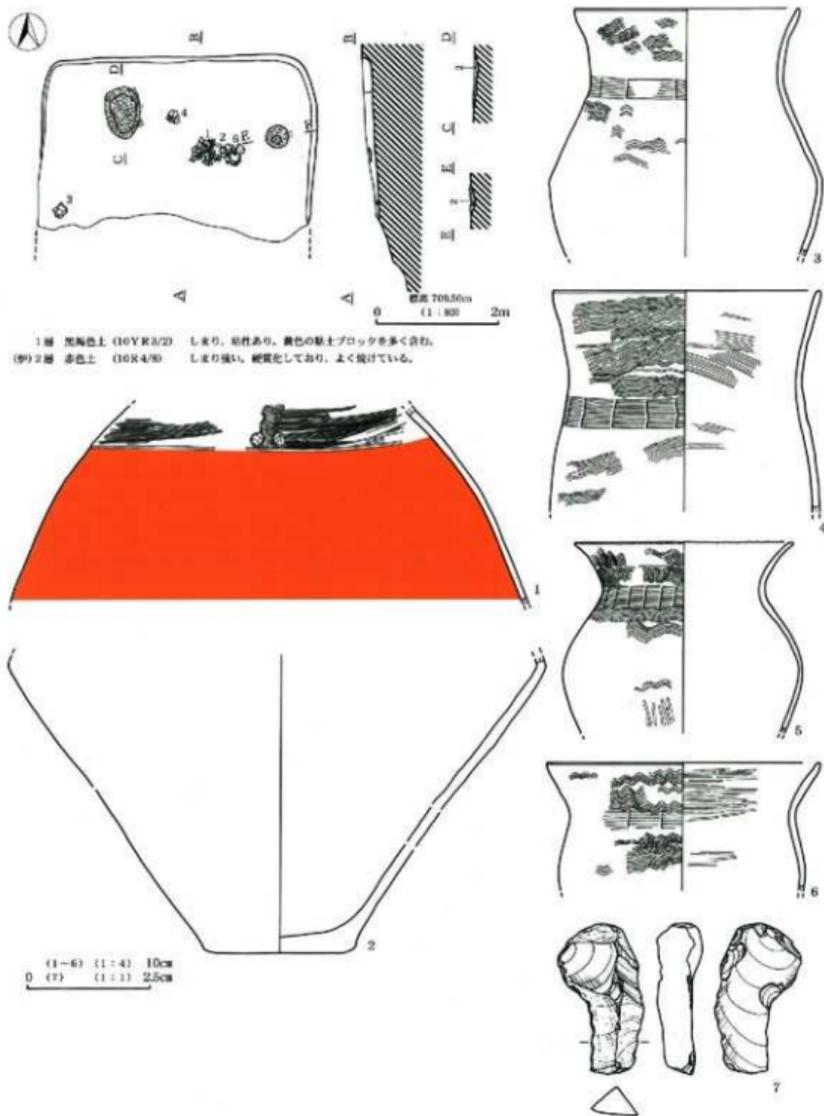
第40回 H26号住居址実測図



第41図 H26号住居址出土遺物実測図

また、本址は北壁際に北壁と平行するように間仕切りのな溝が検出された。規模は幅11~29cm・深さ2.5~4.5cmを測る。柱穴は8個検出された。規模はP1が径37cm・深さ34.5cm、P2が径31cm・深さ18cm、P3が径34cm・深さ21.5cm、P4が径47cm・深さ7.5cm、P5が径31cm・深さ28cm、P6が径20cm・深さ14.5cm、P7が径45cm・深さ11.5cm、P8が径56cm・深さ16cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴、P6が種持ち柱と考えられる。なお、P4は周辺部に掘り込みが広がり土坑状を呈し、貯蔵穴的な様相も示す。

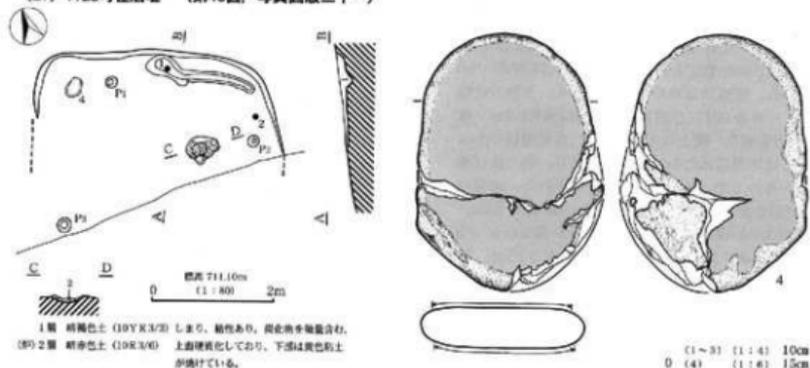
がは西壁よりに2カ所並ぶように検出された。西側のがは楕円形で、規模は長軸67cm・短軸44cmで、焼土の厚み7cmを測る。焼土は良く焼けており、硬質化していた。主軸方位はN・87°・Wを測る。住居址中央に近いがはやや小ぶ



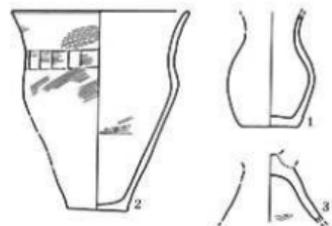
第42図 H27号住居址及び出土遺物実測図

に櫛掻波状文を施す。7は黒曜石の使用痕跡片である。
本址はこれらの遺物より弥生後期3段階に位置づけられる。

(27) H28号住居址 (第43図, 写真図版二十一)



1 黄褐色土 (19YR3/3) しまり、粘性あり、褐色赤土層を含む。
2 黄褐色土 (19YR3/6) 上部硬質化しており、下部は黄色土が透れている。



第43図 H28号住居址及び出土遺物実測図

北は西壁よりで検出された。主軸方位はN-86°-Wを測る。形態は楕円形であり、規模は長軸53cm・短軸39cmで粘土の厚さは7cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址の出土遺物は少量であった。図示した遺物の出土位置は、4が床面直上、1が8cm、2が4cm床面より浮いた状態で、3が覆土中である。1は小型壺であり、口縁部を欠損するがほぼ方形である。2は甕で頸部に櫛掻波状文、口縁部と肩部に櫛掻斜文をそれぞれ施す。3は高杯脚部と考えられるが、器面は摩耗しているため調整等は不明。4は磨石の台側と考えられ、両面ともに良く磨れていた。

本址はこれらの遺物により弥生後期に位置づけられると考える。

No.	器種	法	量	成形・調整・文様				色調	備考	出土位置
				外	内	西	東			
1	小型壺	-	4.7	39.0	不明	不明	不明	5YR5/6 (黄)	完全実測	8
2	甕	14.4	4.9	16.2	口縁部と肩部に櫛掻斜文 肩部に櫛掻波状文 (1連止め)	ヘラミガキ	不明	5YR5/6 (明赤)	完全実測	4
3	高杯	-	-	3.3	不明	ヘラミガキ	不明	5YR6/8 (黄)	完全実測	8区
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大短	最大厚	重量	産地		出土位置
4	磨石 (台の方)	角閃石安山岩	一部欠損	319.0	201.0	50.0	6690.00	両面磨り、背に一面はやや凹凸する		

第27表 H28号住居址出土遺物観察表

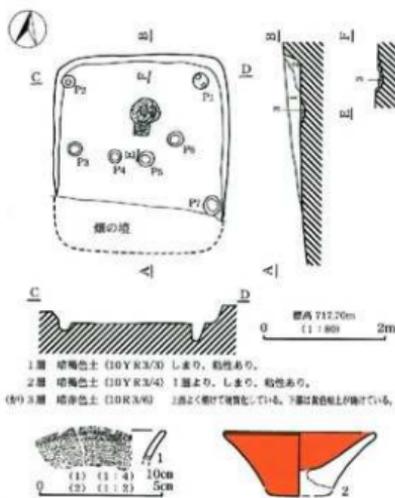
(28) H29号住居址 (第44回, 写真図版二十一)

本住居址は、調査区中央部の尾根上であるF・ナ・11Grに位置する。残存状態は自然地形の傾斜で南側が削平されている。形態はほぼ長方形を呈する。炉は住居址北側よりに造られている。規模は北壁2.60m・南壁推定2.45m・西壁残存2.05m・推定2.80m・東壁残存2.60m・推定2.97mで、壁高さは北壁際で30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-7°-Wを示す。住居址の床面積は残存6.0㎡・推定8.0㎡を測る。覆土は2層に分れ、自然堆積であった。床は炉周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されなかった。柱穴は7個が検出された。規模はP1が径26cm・深さ28.5cm, P2が径21cm・深さ18cm, P3が径23cm・深さ27cm, P4が径22cm・深さ9cm, P5が径26cm・深さ29.5cm, P6が径26cm・深さ28cm, P7が径30cm・深さ8.5cmを測る。これらピットの検出位置はいずれも主柱穴と考えられる位置にはないが、P1~P3とP7は壁柱穴として捉えられる。

炉址は北壁よりに検出された。主軸方位はN-3°-Wを測る。形態は8の字形であり、規模は長軸62cm・短軸48cmで焼土の厚さは7cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は少量で、2点の土器を図示した。いずれも覆土中からの出土である。1は櫛歯波状文を施した甕口縁部である。2はミニチュア製品の鉢と考えられる。内外面に赤彩が施されている。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。



第44回 H29号住居址及び出土遺物実測図

No.	器種	造形		成形・調整・文様		色調	備考	出土位置
		口徑(口)	底径(底)	外面	内面			
1	甕	-	-	(2A) 口縁部に櫛歯波状文	ヘラミガキ	7.5YR5/2(6.2)赤褐色		II区
2	ミニチュア鉢	(6.2)	-	(2B) 赤色塗彩	赤色塗彩	10R4/7 (赤)	口縁本刺	I区

第28表 H29号住居址出土遺物図表

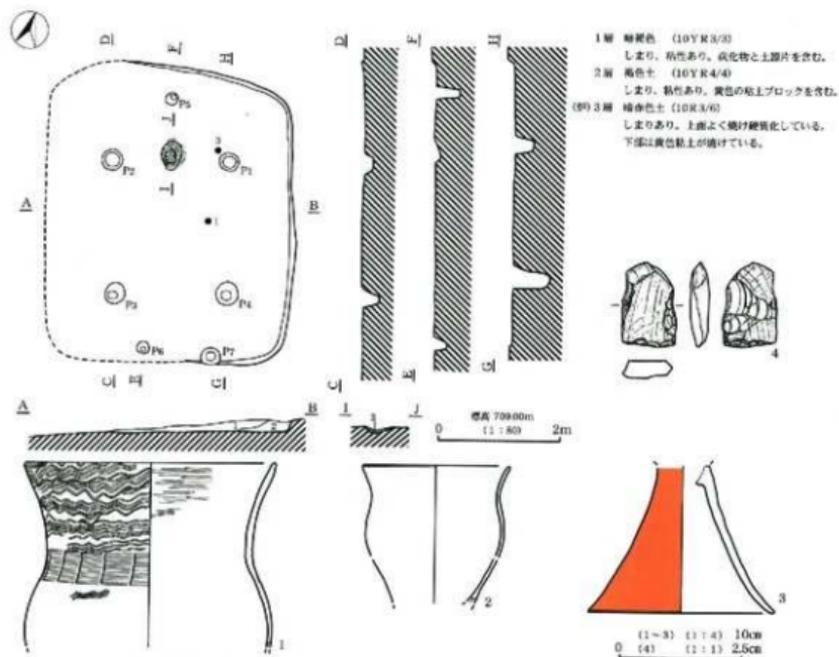
(29) H30号住居址 (第45回, 写真図版二十二)

本住居址は、調査区中央部の尾根平坦部であるF・ホ・12・13、F・マ・12・13Grに位置する。西側にH6号住居址が近接する。残存状態は西側が自然地形の傾斜により削平されている。形態はほぼ長方形を呈する。炉は住居址北壁よりに造られている。規模は北壁残存2.68m・推定3.52m・南壁残存1.45m・推定3.52m・西壁推定4.23m・東壁4.05mで、壁高さは東壁際で17.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-7°-Wを示す。住居址の床面積は残存9.5㎡・推定17.9㎡を測る。覆土は2層に分れる。床は炉周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は7個検出された。規模はP1が径31cm・深さ30.5cm, P2が径34cm・深さ15.5cm, P3が径35cm・深さ28cm, P4が径37cm・深さ60.5cm, P5が径20cm・深さ39cm, P6が径20cm・深さ20cm, P7が径31cm・深さ55cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴, P6は入り口施設, P7は貯蔵穴, P5は棒持ち柱と考えられる。

炉址は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。主軸方位はN-1°-Wを測る。形態は楕円形であり、規模は長軸43cm・短軸33cmで焼土の厚さは6cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は少量であった。図示した遺物の出土位置は1が床面直上、その他は覆土中である。1と2は甕で、3は高坏脚部で赤色塗彩が施されている。4は黒曜石の二次加工剥片であり、周辺部に加工痕がある。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。



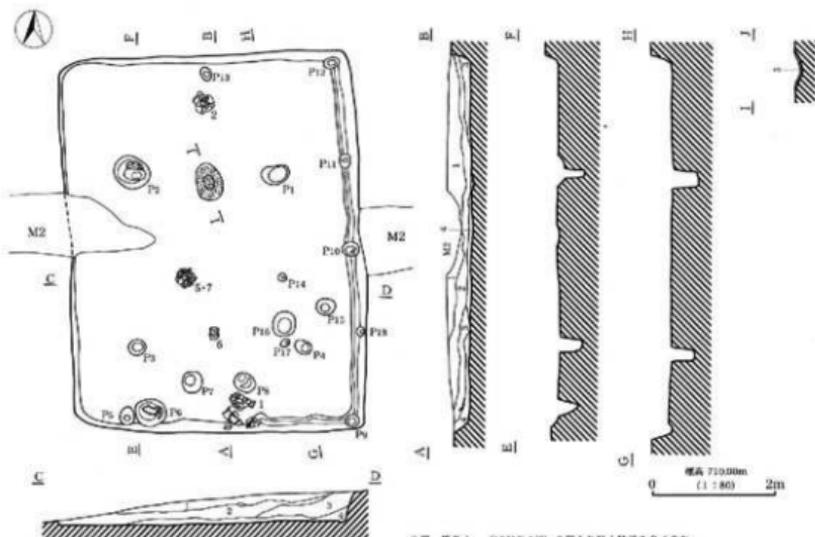
第46図 H30号住居址及び出土遺物実測図

No.	遺構	法	量	形状・調整・文様			色澤	備考	出土位置
				外	内	内			
1	壁	(20.4)	—	(15.5)	①縁部と扉部に無須溝状文 ②無須に無須溝状文(1連止め)	ヘラミヤキ	10YR8/4(10.6)・黄緑	回転先施	
2	溝	(12.0)	—	(11.2)	不明	不明	10YR8/1(10.0)・黄緑	回転先施	Ⅱ区
3	灰床	—	15.2	(11.5)	非色法塗	不明	10R4/4(赤)	完全先施	Ⅱ
No.	器種	素材	残存率	最大径	最小径	最大厚	重量	所見	出土位置
4	二次加工割片	加焼石	不明	17.6	11.6	4.0	1.00	薄い灰で両辺を加工している	Ⅰ区

第29表 H30号住居址出土遺物観察表

(30) H31号住居址 (第46.47図, 写真図版二十二・二十三)

本住居址は、調査区中央部の地根平坦部であるF・フ9・10、F・へ9・10Grに位置する。M2号溝状遺構と重複関係にあり、本址の方が古い。残存状態は中央部分をM2号溝状遺構により削平されている他は良好である。形態は角がほぼ直角となる長方形を呈する。如は住居址北よりで検出された。規模は北壁4.60m・南壁4.68m・西壁5.57m・東壁6.08mで、壁高さは東壁側で55cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面積は26.7㎡を測る。覆土は4層に分れ、自然堆積であった。床は住居址中央部を中心に硬質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は西壁の全体と南壁の東よりで確認された。規模は幅20~31cm・深さ10.5cmで、断面U字形を呈する。柱穴は18個検出された。規模はP1が径45cm・深さ43cm、P2が径60cm・深さ43cm、P3が径27cm・深さ38cm、P4が径28cm・深さ37.5cm、P5が径30cm・深さ37.5cm、P6が径49cm・深さ37.5cm、P7が径34cm・深さ43cm、P8が径35cm・深さ44.5cm、P9が径20cm・深さ13cm、P10が径26cm・深さ14.5cm、P11が径21cm・深さ33.5cm、P12が径25cm・深



1層 暗褐色土 (10YR3/2) しまり、黏性あり、小石と粘土粒を多く含む。

2層 褐色土 (10YR4/4) しまり、黏性あり、粘土粒を多く含む。

3層 褐色土 (10YR4/6) 2層より粘土粒を多く含む。

4層 黄褐色土 (10YR3/1) しまり、黏性あり、腐化物を多く含む。

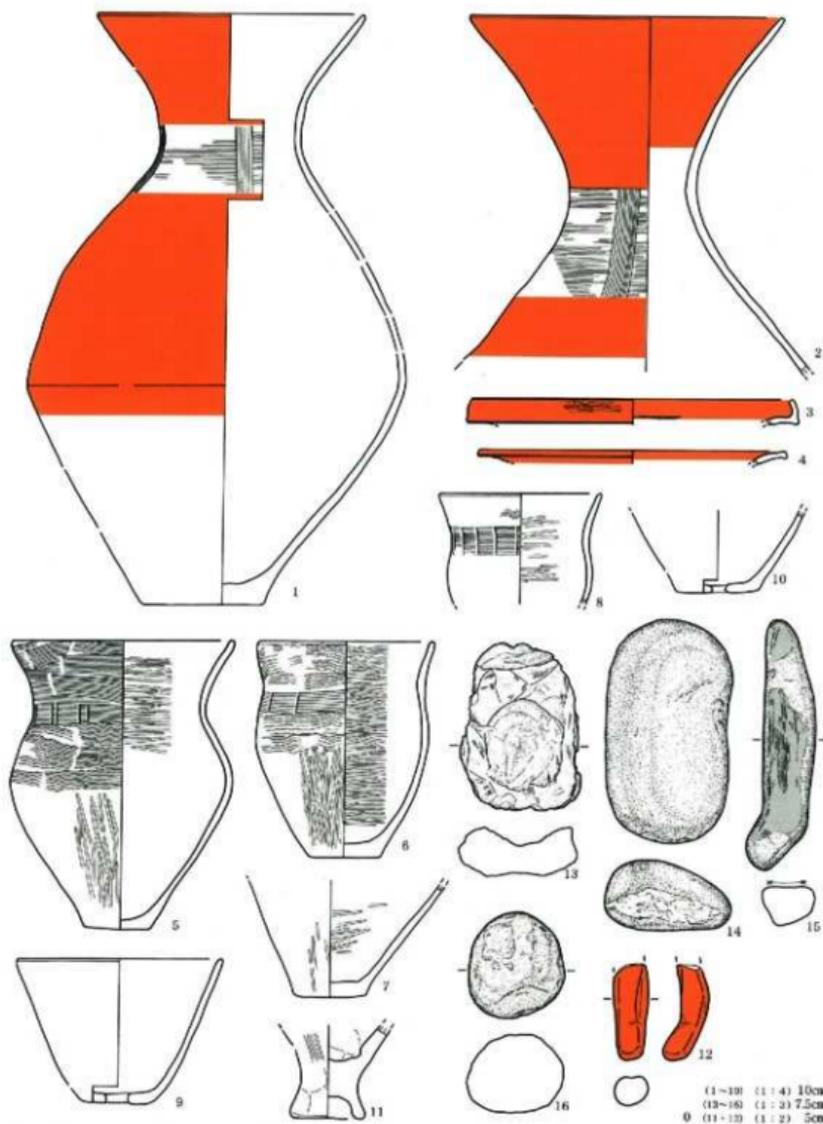
(※) 5層 暗赤色土 (10R3/6) しまり、黏性あり、上部はよく焼け硬質化している。

下部は黄色粘土が厚化する。

第46図 H31号住居址実測図

No.	部 類	法 量		形 状・測 量・文 様		色 調	備 考	出土位置	
		口径(φ)	底径(φ)	高(取)	外 面				内 面
1	竈	(21.3)	10.0	48.1	胴部に輪線模様の文、輪線直下文、赤色塗彩	不明	5YR4/6 (赤焼)		
2	竈	(25.0)	-	(28.0)	胴部に輪線模様の文、輪線直下文、赤色塗彩	赤色塗彩	10R4/6 (赤)	完全実測	
3	壺	(26.2)	-	(21.1)	ヘラミガキ、赤色塗彩	△凹み、赤色塗彩	10R3/3 (暗赤焼)	回転実測 中島式?	Ⅱ区貯蔵穴
4	壺	(25.2)	-	(11.1)	不明、赤色塗彩	赤色塗彩	10R4/6 (赤)	回転実測 外底高	Ⅱ区貯蔵穴
5	甕	18.1	5.4	23.5	胴部下平にヘラミガキ、胴部に輪線模様の文 (11本1組2連止め) 口縁部に輪線模様の文、胴体上半に輪線直下文	ヘラミガキ	7.5YR7/6 (暗)	完全実測	
6	甕	14.4	5.8	17.5	胴部下平にヘラミガキ、胴部に輪線模様の文、胴体上半に輪線直下文 (8本1組1連止め)	ヘラミガキ、赤色顔料付着	7.5YR7/4(6) (赤)	完全実測	10
7	甕	-	5.8	(9.5)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR7/4(6) (赤)	完全実測	Ⅱ区
8	甕	(13.2)	-	(9.0)	口縁部に輪線模様の文、胴部に輪線模様の文 (15本1組1連止め)	ヘラミガキ、口縁部斜みあり	7.5YR6/4(6) (赤)	回転実測	Ⅳ区
9	甕	(16.7)	5.5	11.9	不明	不明	7.5YR7/4(6) (赤)	完全実測	Ⅱ区、Ⅳ区
10	甕	-	6.7	(6.5)	不明	不明	7.5YR7/6 (暗)	完全実測	
11	ミニチュア高杯(お台付甕)	-	3.0	(3.0)	ハタヒ、ナデ	ナデ	7.5YR7/4(6) (赤)	完全実測	Ⅱ区
12	甕・短玉?	3.9	1.5	1.2	ヘラミガキ、赤色塗彩	△凹み、赤色塗彩	10R4/6 (赤)		Ⅱ区
No.	部 類	素 材	残存率	最大幅	最大厚	最大厚	重 量	所 見	出土位置
13	四石	灰雲母白色軽石	定形	102.0	72.0	29.0	84.00	正面中央部にくぼみ	Ⅰ区
14	磨石	砂岩	定形	85.0	77.0	43.0	570.00	上面先端に縁き	Ⅱ区貯蔵穴
15	磨石	輝石安山岩	定形	151.0	32.0	23.0	174.00	正面に書り、縦方向の線痕	Ⅰ区
16	円盤	輝石安山岩	定形	65.0	57.0	47.0	244.00		Ⅱ区

第30表 H31号住居址出土遺物観察表



第47图 H131号住居址出土遗物实测图

き14cm、P13が径23cm・深さ9.5cm、P14が径12cm・深さ39cm、P15が径31cm・深さ8cm、P16が径40cm・深さ5.5cm、P17が径16cm・深さ38cm、P18が径30cm・深さ29cmを測る。これらピットの内、P1～P4が主柱穴、P13が棒持柱、P7とP8が入り口施設、P6が貯蔵穴、P5とP9～P12とP18が礎石柱穴と考えられる。

炉は住居址北よりP1とP2間で確認された。形態は楕円形で、規模は長軸61cm・短軸40cmで、焼土の厚みは3cmを測る。主軸方位はN-18°-Wを示す。火床部は良く焼けており、硬質化していた。

本址からの出土遺物は非常に多く、特にいずれもが床面上で破砕した様な状態で出土している。なお、6の裏のみ床面から10cm浮いた状態で出土している。1～4は壺である。1は部分的な欠損はあるものの、ほぼ全容を把握できる土器である。1と2の施文は頸部に櫛描横線文と櫛描垂下文を施し、赤彩を施している。3と4も壺口縁部と考えられるが、いずれも在地箱清水式の形態ではなく、外來系の土器と考えられる。3は口唇部の屈曲から南信地方の中島式の範疇とも捉えられるが、赤彩を施すなどの点は在土化している。5～8は裏、9と10は単孔の甕である。11はミニチュア製品で、器種は高坏か台付甕と考えられる。12は土製品の匙の柄か勾玉の一部分と考えられる。丁寧な赤彩が施されている。13は不整形であるが凹石、14は敲石で下部に顕著な敲きがある。15は磨石と考えられ、片面に擦り方向がわかる磨面が確認できる。16は円鏡で、顕著な使用痕は確認できないが、遺跡内に自然に存在する機ではないことから掲載した。

本址はこれらの遺物より弥生後期3段階に位置づけられる。

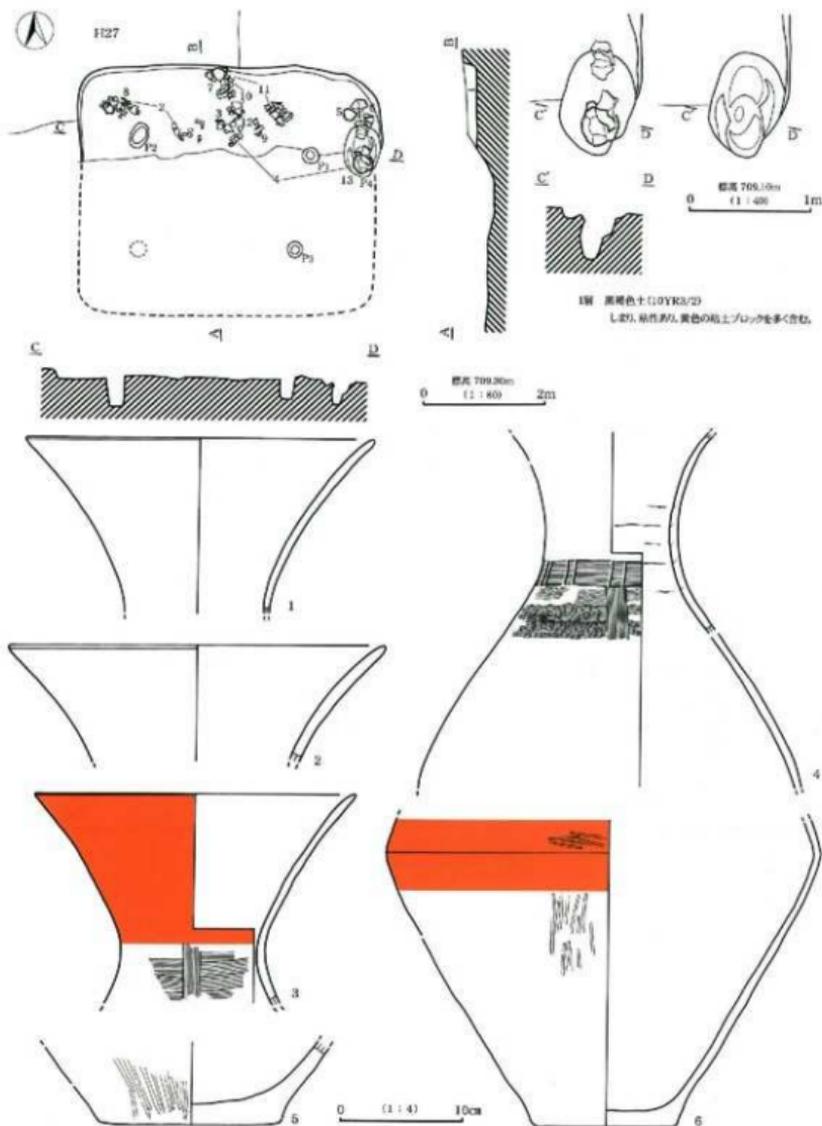
(31) H32号住居址 (第48,49図, 写真図版二十四)

本住居址は、調査区中央部の尾根上であるF-ヒ-13、F-F-13Grに位置する。H27号住居址と重複関係にあるが本址の方が古い。残存状態は南側が畑地耕作のために削平されており、住居址の北側1/3が残存していたのみである。形態は柱穴より東西に長い長方形を呈すると考えられる。炉は確認されなかった。規模は北壁4.42m・西壁残存1.40m・東壁残存1.44mで、壁高さは北壁際で38cmを測る。床面積は残存で6.6㎡を測る。覆土は単層である。床は全体に軟質であった。柱穴は3個検出された。規模はP1が径27cm・深さ38cm、P2が径41cm・深さ51.5cm、P3が径25cm・深さ28cmを測る。これらは主柱穴と考えられる。P4は検出位置とその規模から貯蔵穴と考えられ、規模は長軸85cm・短軸56cmを測る。土坑内からは図示した4の壺や13の土製瓦などが出土している。

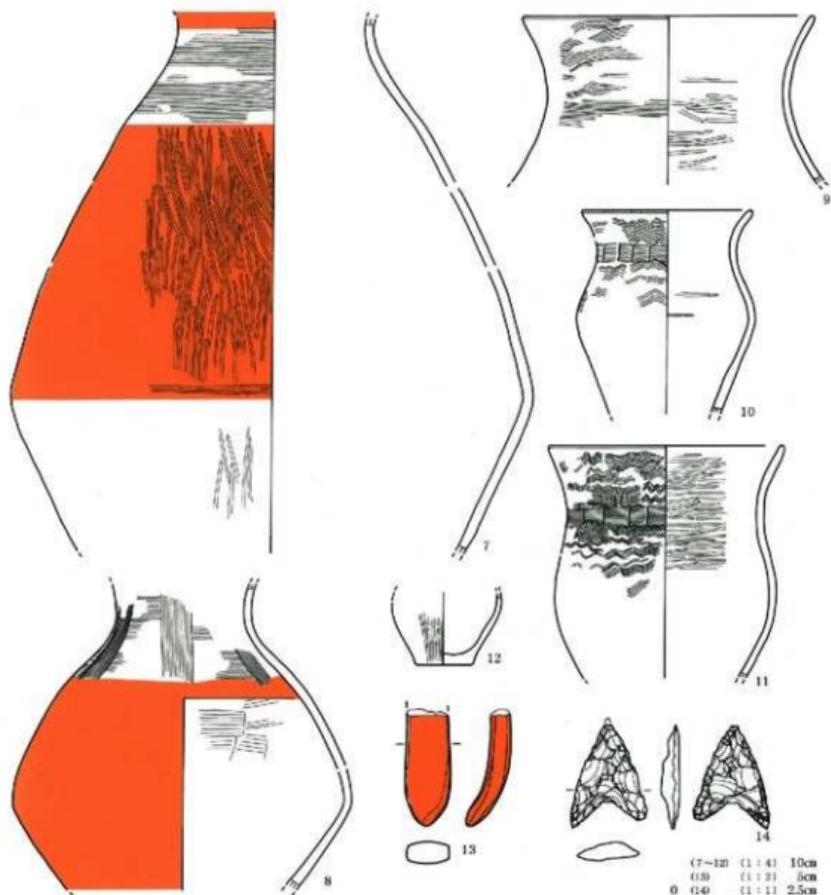
本址からの出土遺物は非常に多く、またいずれもが床面直上からの出土である。1～4と6～8は壺の口縁部及び胴部・底部である。赤彩と非赤彩が混在する。施文方法は4が頸部に櫛描横線文と垂下文及び波状文を組み合わせている。3と7と8は櫛描横線文と垂下文である。9～12は甕である。施文方法は10と11が頸部に櫛描横線文・口縁

No	器種	地 層		成 形・ 図 像・ 文 様		色 調	備 考	出土位置
		(1)形数	(2)容積	外 面	内 面			
1	壺	(28.4)	-	(14.2)	不明	不明	7.5YR7/4(紅・黄)	同軸実測
2	壺	(30.6)	-	(9.5)	不明	不明	7.5YR6/4(紅・黄)	同軸実測
3	壺	(26.0)	-	(17.0)	頸部に櫛描横線文の残、櫛描垂下文(9本)、赤色塗彩	不明	10R4/8(赤)	同軸実測
4	壺	-	-	(28.4)	頸部と胴部に櫛描横線文の残、櫛描垂下文(13本)1個2割止め	不明	7.5YR7/4(紅・黄)	完全実測
5	甕	-	14.8	(6.3)	不明	ヘラミガキ	7.5YR6/6(黄)	完全実測
6	壺	-	11.8	(23.0)	ヘラミガキ、赤色塗彩	不明	7.5R4/8(赤)	完全実測
7	壺	-	-	(43.4)	胴部に櫛描横線文、胴部にヘラミガキ、赤色塗彩	不明	10R4/8(赤)	同軸実測
8	壺	-	-	(24.9)	胴部に櫛描横線文の残、櫛描垂下文(12本?)、赤色塗彩	ヘラミガキ	10R5/6(赤)	同軸実測
9	甕	(23.8)	-	(13.4)	口縁部に櫛描横線文、胴部に櫛描横線文?	ヘラミガキ	7.5YR7/6(黄)	同軸実測
10	甕	13.9	-	(16.6)	口縁部と胴部に櫛描横線文、口唇部に粘土	ヘラミガキ	7.5YR7/6(黄)	完全実測
11	甕	(19.2)	-	(18.9)	口縁部と胴部に櫛描横線文、胴部に櫛描横線文(12本1個1割止め)	ヘラミガキ	7.5YR7/4(紅・黄)	完全実測
12	甕	-	4.7	(5.9)	ヘラミガキ	不明	7.5YR7/6(黄)	完全実測
13	瓦	4.7	1.9	0.9	赤色塗彩		10R4/8(赤)	
14	凹石	磨石			硬質	最大長 19.5、最大幅 15.7、最大厚 3.7、重量 0.90		出土位置 貯蔵穴

第31表 H32号住居址出土遺物観察表



第48図 H32号住居址及び出土遺物実測図(1)



第49図 H32号住居址出土遺物実測図(2)

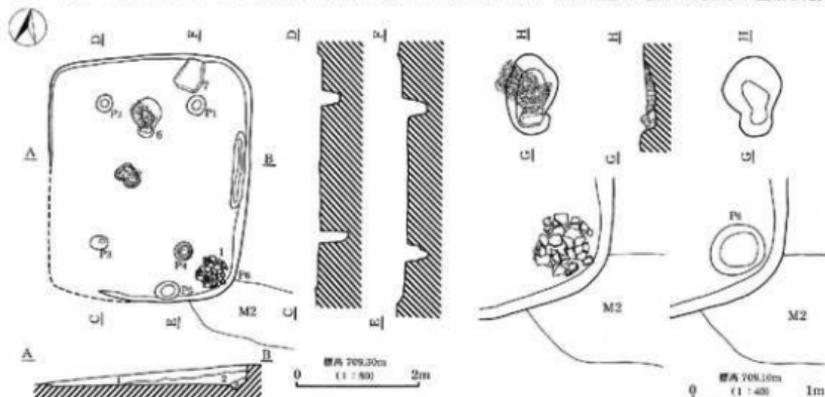
部と胴部に縞楕波状文を施す。9は縞楕波状文のみである。10は口唇部に刻みが施されている。13は土製品の匙の柄と考えられ丁寧な赤彩が施されている。14は凹基石楸でP4の貯蔵穴より出土した。

本城はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

(32) H33号住居址 (第50.51図, 写真図版二十五)

本住居址は、調査区中央部の尾根上であるF・ホ-8・9、F・マ-8・9Grに位置する。残存状態は南西コーナーが自然地形の傾斜により削平されている。形態はほぼ長方形を呈する。炉は住居址北側に検出された。規模は北壁3.03m・南壁残存2.00m・推定2.73m・西壁残存1.60m・推定3.47m・東壁3.58mで、壁高さは西壁際で30.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-7°-Wを示す。床面積は残存10.8㎡・推定11.4㎡を測る。覆土は3層に分れ、自然堆積であった。床は住居址中央部が硬質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は西壁中央部に一部分確認された。規模は幅10~17cm・深さ3~11cmを測る。柱穴は6個が検出された。規模はP1径32cm・深さ30cm, P2が径29cm・深さ30.5cm, P3が径28cm・深さ46cm, P4が径30cm・深さ36cm, P5が径40cm・深さ26.5cm, P6が径45cm・深さ17cmを測る。これらピットの検出位置よりP1~P4は主柱穴、P5は入り口施設、P6は貯蔵穴と考えられる。炉は住居址北よりP1とP2間に検出された。形態は不整形で、住居址中央側に炉石が1点置かれていた。規模は長軸65cm・短軸47cmで焼土の厚みは7cmを測る。焼土は良く焼けており硬質化していた。また、炉の南側には床面に焼土が広がっていた。

本址からの出土遺物は少なかった。1は甕でありほぼ完形である。P6の上に置かれて破砕したような状態で出土した。2は単孔の甕である。3は黒曜石の石鏝、4は磨石であるが、側面のみよく磨れておりみがき石と考えられる。5は片面に幅のある条痕と磨りがあるが確認でき、側面には敷き痕があるが、手持ち砥石と砥石の両方の機能を持つ。6は磨石で片面のみ良く磨れている。7は磨きの台石或いは置き砥石と考えられ、住居址壁際に置かれたように出土した。

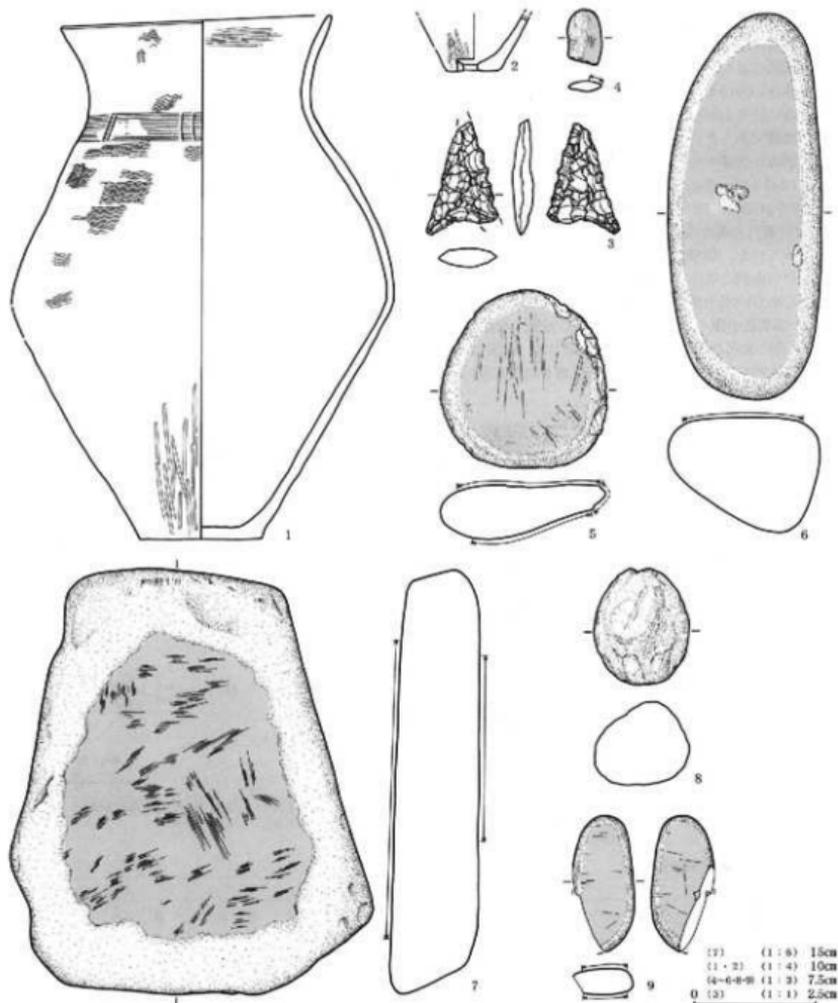


- 1 甕 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、脆性あり、黄色粘土粉子を多く含む。(*) 4層 暗褐色土 (10YR3/6) しまり、脆性あり、上面よく硬質化している。
 2 甕 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、脆性あり、灰白色物を微量含む。 5層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、脆性あり。
 3 甕 褐色土 (10YR4/6) しまり、脆性あり。

第50図 H33号住居址実測図

No.	品名	造 成		形 状・図 形・寸 法						色 調	備 考	出土位置
		(口径) 底径(輪)	器底形状	外 径		内 径		厚 度				
1	甕	22.0	10.0	42.3	(1)縁部と底部に磨損痕あり、 底部に磨損痕あり(12本1組2連止)		ヘラミガキ		7.5YR6/6 (黄)	完全実測		
2	甕	-	4.4	(丸)	ヘラミガキ		ヘラミガキ		7.5YR2/0 (黄)	完全実測	1区	
No.	品名	素材	形状	最大長	最大幅	最大厚	備 考	所 見			出土位置	
3	円形石鏝	黒曜石	右小丸し部欠損	25.9	14.8	4.3	1.10	縁部に磨損痕あり			1区	
4	磨石	硬質砂岩	完形	34.0	20.0	7.0	6.80	正面半分に着き、強い磨痕あり			2区	
5	手持ち砥石・磨石	軟頁岩	完形	105.0	99.0	33.0	353.00	正面に幅のある条痕と磨り、断面に磨り、側面に磨り			3区	
6	磨石	輝石質山岩	完形	239.0	92.0	89.0	2300.00	正面に磨り				
7	磨石 (台石)	磨粒凝灰岩	完形	515.0	410.0	100.0		正面よく磨れている、条痕が一部にある。				
8	内磨	輝石質山岩	完形	73.0	57.0	36.0	238.00	表面は磨損している			3区	
9	磨石	硬質砂岩	欠損	82.0	(32.0)	15.0	561.00	両面磨り、一部磨痕あり			1区	

第32表 H33号住居址出土遺物観察表



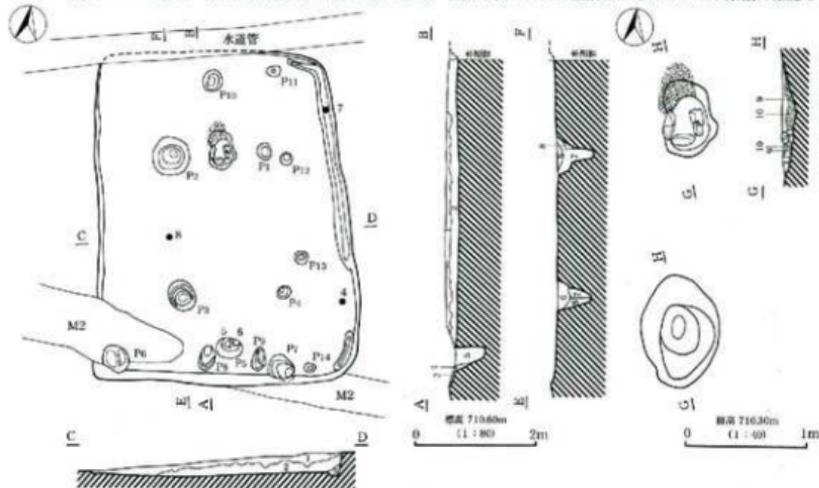
第51図 H33号住居址出土遺物実測図

両面よく磨れているが、特に片面は顕著で不規則な条線も確認できた。8は円礫であり、顕著な使用痕は確認されなかったが、H31号住居址出土の円礫と同じく、住居址周辺部に自然にあるものではなく、持ち込まれた礫と考えられるため記載した。9は磨石で、一部欠損しているが、両面よく磨られている。

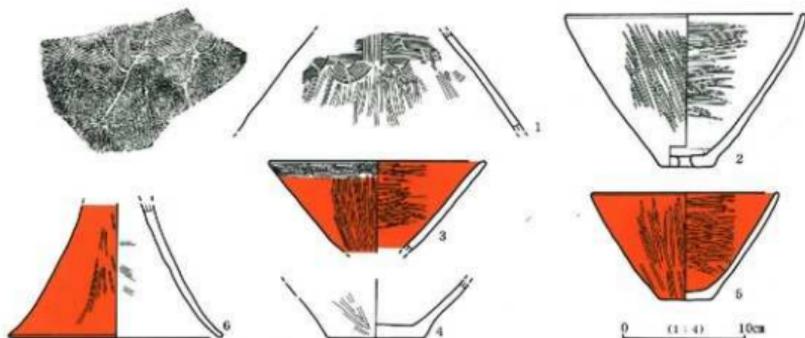
本址はこれらの出土遺物より弥生後期に位置づけられる。

(33) H34号住居址 (第52.53図, 写真図版二十六)

本住居址は、調査区中央部の尾根上であるF-ハ9、F-七-8~10、F-フ-8・9Grに位置する。M2号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は北壁が水道管に、南壁の一部がM2号溝状遺構によって破壊されている。形態は長方形を呈する。炉は住居址北側に造られている。規模は北壁残存0.85m推定3.55m・南壁4.10m・西壁4.94m・東壁5.12mで、壁高さは西壁際で36cmを測る。主軸方位はN-12°-Wを示す。床面積は残存20.1㎡・推定20.2㎡を測る。覆土は柱底部方も含め9層に分れ、自然堆積である。壁溝はとぎれているが東壁に確認さ



- | | |
|--|---|
| 1層 黄褐色土 (10YR5/1) しまり、粘性あり、 | 6層 褐色土 (10YR4/0) しまり、粘性あり、黄色の粘土ブロックを含む、 |
| 2層 暗褐色土 (10YR5/3) しまり、粘性あり、炭化物を微量含む、 | 7層 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや弱く、粘性あり、 |
| 3層 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性あり、黄色粘土層、 | 8層 黄褐色土 (10YR5/0) しまり、粘性あり、粘土の塊状化ブロックを含む、 |
| 4層 褐色土 (10YR4/0) しまり、粘性あり、 | 9層 黄褐色土 (10YR3/5) しまり、粘性あり、炭化物を微量含む、 |
| 5層 暗褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性あり、黄色の粘土粒子を多く含む、 | (9)10層 赤色土 (10R4/0) しまりあり、よく攪けられている、 |
| | 11層 暗褐色土 (10YR3/3) 凝土ブロックと黄褐色土の混成土、 |

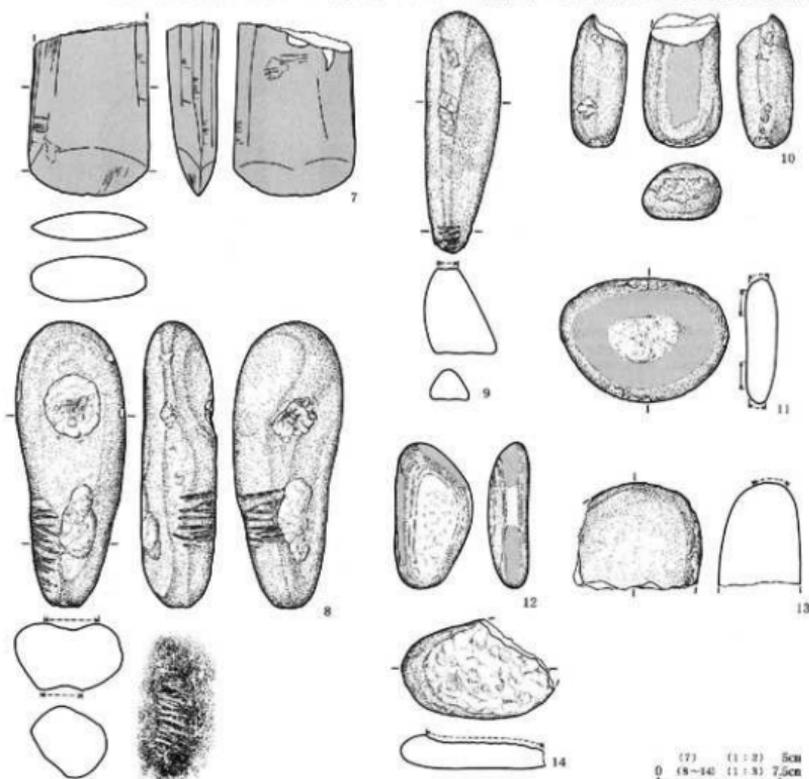


第52図 H34号住居址及び出土遺物実測図 (1)

れた。規模は幅8～25cm・深さ3～14cmで、断面U字形を呈する。床は全体に硬質であり、貼床は確認されなかった。ピットは14個検出された。規模はP1が径28cm・深さ50.5cm、P2が径62cm・深さ60.5cm、P3が径52cm・深さ52cm、P4が径22cm・深さ56cm、P5が径44cm・深さ43cm、P6が径47cm・深さ27cm、P7が径42cm・深さ65.5cm、P8が径39cm・深さ48cm、P9が径38cm・深さ51cm、P10が径36cm・深さ47cm、P11が径22cm・深さ37.5cm、P12が径20cm・深さ30cm、P13が径22cm・深さ23.5cm、P14が径18cm・深さ41cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4は主柱穴、P5・P8・P9は入り口施設、P7は貯蔵穴、P10は様持ち柱と考えられる。またP11～P14は補助的な柱穴か或いは直線に配列されていることから間仕切りを目的とする柱穴とも考えられる。

4は住居址北よりのP1とP2間で検出された。形態は不整形で、「コ」の字状に礫石が配されていた。規模は長軸92cm・短軸63cmで土上の厚みは8cmを測る。良く焼けており焼土は硬質化していた。

本址からの出土遺物はやや多く、土器5点、石器8点を図示した。1は壺の胴部破片である。頸部にかかる部分に施文があり、髹漆横線文の後に髹漆垂下文を施し、垂下文とは不連続で「J」状に曲げている。本文様は中信地域を中心に観られる所謂「J」字文を意識した施文と考えられるが、垂下文と切り離されている事や屈曲部分が単独で横線文下に連続して存在する事等、所謂「1/4円弧文」的な要素も含んでいると考えられる。3と5は赤彩を施した鉢であり、3は口縁部に髹漆波状文を施す。2は単孔の甗である。7は磨製石斧であり壁溝中より出土した。ただ、形態



第53図 H34号住居址出土遺物実測図 (2)

的に磨製石斧としては薄く、「独钻石」或いは「両刃斧」の可能性もある。8と9は手持ち砥石と礮石の両方の機能を持つ。いずれも一部に鋭い条痕が刻られる。10～12は磨石、13と14は礮石である。

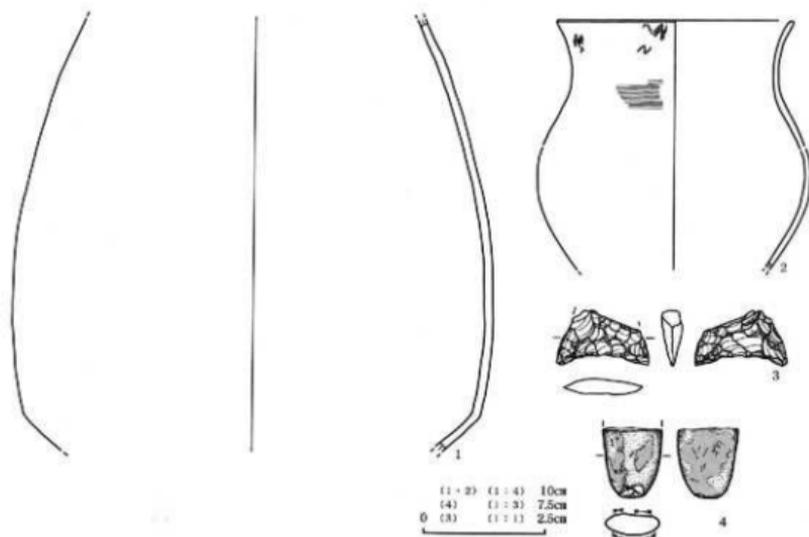
本址はこれらの遺物より弥生後期2段階に位置づけられる。

No.	品名	法			形状・観察・文様		色調	備考	出土位置	
		口厚(%)	底厚(%)	底平(%)	外	内				
1	産	-	-	(8.5)	胴部に磨製線刻文の後、縦線ノ字文、胴部にヘラミガキ		10YR7/6 (明黄褐)	回転実測	I区	
2	産	19.7	4.4	12.5	ヘラミガキ		10YR7/4 (灰黄赤)	完全実測		
3	群 or 高坪 (17.6)	-	-	(7.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩、口縁部に磨製線刻文		10R4/8 (赤)	回転実測	I区	
4	産	-	18.0	(4.4)	ヘラミガキ		7.5YR7/8 (緑)	完全実測	II	
5	群	15.2	4.2	8.8	ヘラミガキ、赤色塗彩		10R4/8 (赤)	完全実測	ビット風から3	
6	高坪	-	17.4	(10.8)	ヘラミガキ、赤色塗彩		10R4/8 (赤)	回転実測	ビット風から2	
7c	群	磨石	磨石	磨石	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
7	磨製石斧	石炭質緑石	石炭質緑石	上縁尖頭	173.0	65.0	41.0	113.60g	片側方ごぼれあり、側縁は磨刃面が残る	
8	手持ち砥石+礮石	砂岩	完形	尖形	146.0	44.0	31.0	376.00g	上面の両面に円状の磨き、下面の二面に鋭くするどい条痕	
9	手持ち砥石+礮石	砂岩	完形	尖形	192.0	76.0	19.0	188.00g	正面に磨り、側縁・下部先端に磨き	I区
10	磨石+礮石	砂岩	欠損	尖形	88.0	25.0	46.0	150.00g	両側を中心に磨り、側縁・下部先端に磨き	PT
11	磨石+礮石	砂岩	欠損	尖形	94.0	27.0	49.0	124.00g	両側を中心に磨き	PT
12	礮石	砂岩	欠損	尖形	92.0	30.0	20.0	108.20g	正面に磨きによるくぼみ	I区

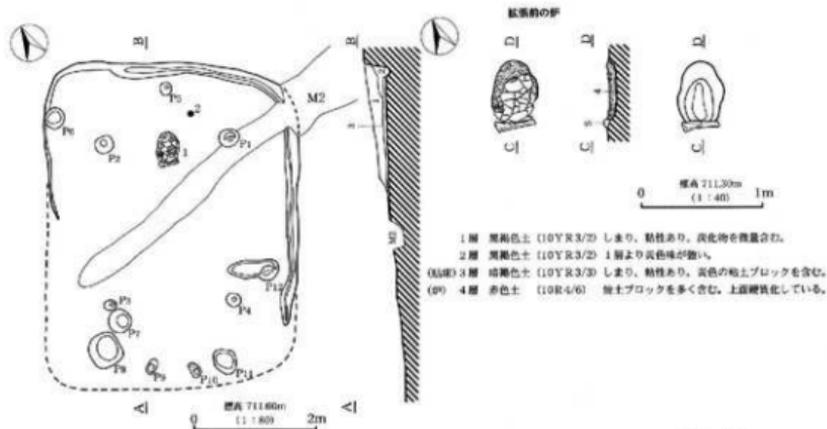
第33表 H34号住居址出土遺物観察表

(34) H35号住居址 (第545回, 写真図版二十七二十八)

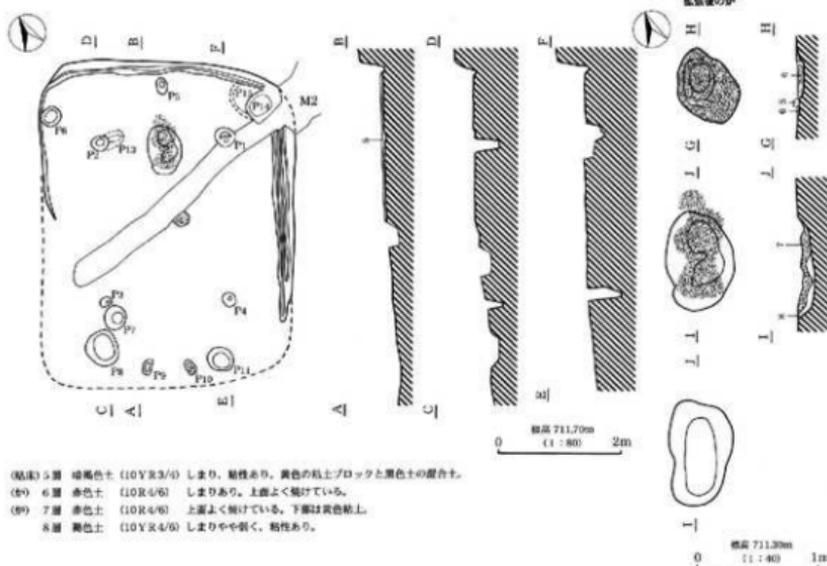
本住居址は、調査区中央部の尾根上であるF・ヌ-9・10、F・ネ-9・10Grに位置する。M2号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は南側が自然地形により削平されており、また、住居中央部を南東から南西にM2号溝状遺構が一部状を破壊している。形態は長方形を呈する。規模は北壁3.67m、南壁推定3.74m、西壁残存2.32m推定4.92m、東壁残存3.90m推定4.46mで、壁高さは北西角で40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第54回 H35号住居址出土遺物実測図



- 1層 黄褐色土 (10Y R3/2) しまり、粘性あり、炭化物を微量含む。
 2層 黄褐色土 (10Y R3/2) 1層より黄褐色が強い。
 (65層) 3層 暗褐色土 (10Y R3/3) しまり、粘性あり、黄色の粘土ブロックを含む。
 (90) 4層 赤色土 (10R 4/6) 粘土ブロックを多く含む、上面腐食している。



- (65層) 5層 暗褐色土 (10Y R3/4) しまり、粘性あり、黄色の粘土ブロックと黒色土の混合土。
 (90) 6層 赤色土 (10R 4/6) しまりあり、上面よく腐けている。
 (90) 7層 赤色土 (10R 4/6) 上面よく腐けている、下層は黄色粘土。
 8層 黄褐色土 (10Y R4/6) しまりやや弱く、粘性あり。

第55図 H35号住居址実測図

床面積は残存12.5㎡推定19.9㎡を測る。床は伊周辺部のみ硬質であった。ピットは12個検出された。規模はP1が径34cm・深さ38.5cm、P2が径31cm・深さ45.5cm、P3が径21cm・深さ26.5cm、P4が径25cm・深さ57cm、P5が径22cm・深さ28cm、P6が径34cm・深さ8.5cm、P7が径38cm・深さ13cm、P8が径56cm・深さ21cm、P9が径26cm・深さ16cm、P10が径25cm・深さ19.5cm、P11が径46cm・深さ22.5cm、P12が径82cm・深さ9cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が

主柱穴、P5が棟持ち柱、P9とP10が入り口施設、P8とP11は貯蔵穴と考えられる。壁溝は北壁の一部と東壁に確認された。規模は幅13～24cm・深さ2～12.5cmで、断面はU字形を呈する。

炉は住居北よりのP1とP2間で検出された。炉の主軸方位はN-23°-Eを測る。形態は楕円形で、長軸と直交する形で炉石が配されていた。また火床面の上には図示した1の蓋が土器の内面を上に向けた状態で敷かれるように置かれていた。炉の規模は長軸55cm・短軸36cmで焼上の厚みは5cmを測る。良く焼けており焼土は硬質化していた。

本址はこの炉直下より新たな炉址と床面（図中第5層）が検出された。それに伴い壁溝が東壁よりもう一本確認され、ピットも新たに3個検出された。ただ、主柱穴や入り口施設的位置は変化がないことから、H35号住居址は東側への一部拡張が行われたと考えられる。新たに確認された炉は同じ場所に2回作り直されていた。まず上面の炉は、最上面の炉と同じく炉石を持ち、形態は楕円形で、規模は長軸38cm・短軸46cmで焼土の厚みは5cmを測る。焼土は良く焼けて硬質化していた。次に最下層の炉は形態が不整形で、規模は長軸84cm・短軸46cmで焼土の厚みは7cmを測る。焼土は良く焼けて硬質化していた。新たに検出されたピットの規模はP13が径35cm・深さ35.5cm、P14が径63cm・深さ12cm、P15が径60cm・深さ8cmを測る。

本址からの出土遺物は少量であった。1は炉址より出土した蓋であり、二次焼成を受けていた。2は甕で床面より12cm厚いた状態で出土した。3は黒曜石の石鏃、4は磨石と礫石の両方の機能が確認された。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

No.	器種	法 器			成 形 ・ 測 量 ・ 文 様		色 調	備 考	出土位置
		口内径(φ)	底径(φ)	器高(H)	形 態	内 容			
1	蓋	—	—	(35.2)	ヘラミガキ	不明	7.5YR7/6 (焼)	回転素面	
2	甕	(19.2)	—	(20.3)	口縁部に櫛歯状文、頸部に櫛歯状文	不明	2.5Y7/4 (成土)	短軸素面	12
No.	器種	素 材		発見層	最大径	最大厚	備 考	所 見	出土位置
3	両石黒石	黒曜石	先地穴痕	11.2	18.8	4.2	0.70	縹文の石鏃の可能性あり	Ⅱ区
4	磨石・礫石	礫石	穴痕	(42.0)	(36.0)	(13.0)	(24.70)	両面に磨りの一部磨痕。下部先端に鋭き	Ⅱ区

第34表 H35号住居址出土遺物観察表

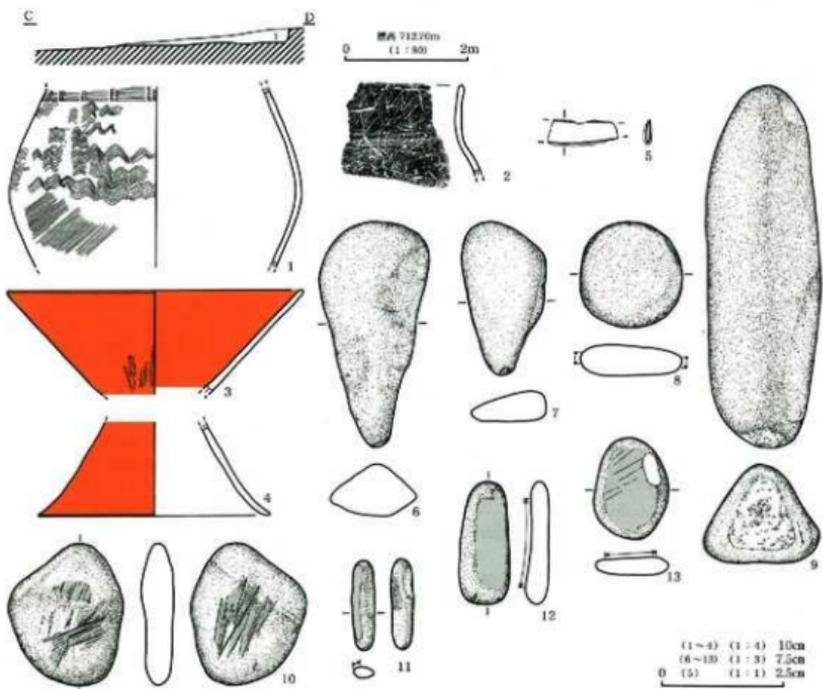
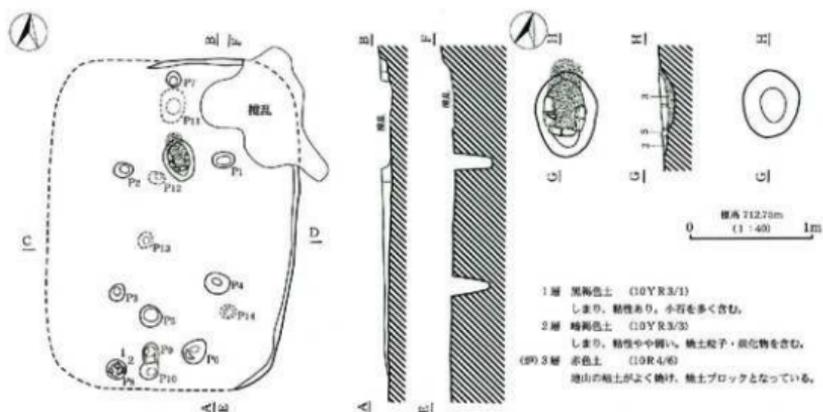
(35) H36号住居址 (第56図、写真図版二十九)

本住居址は、調査区中央部の西斜面であるF-ニ-5-7、F-ヌ-5-7Grに位置する。残存状態は西側半分が自然地形の傾斜により削平され、また北東コーナーが耕作による擾乱を受け壊れていた。形態はほぼ方形を呈する。炉は住居址北壁よりに造られている。規模は北壁残存1.57m推定3.5m・南壁残存0.4m推定3.20m・西壁推定4.75m・東壁残存3.57m推定4.90mで、壁高さは東壁よりで24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを示す。床面積は残存で8.1㎡・推定で19.7㎡を測る。覆土は単層で、床は全体に軟質であった。壁溝は確認されていない。ピットは床面で10個、床の硬質部分を除去中に4個の合計14個が検出された。規模はP1が径37cm・深さ62cm、P2が径31cm・深さ49.5cm、P3が径28cm・深さ43.5cm、P4が径40cm・深さ60cm、P5が径37cm・深さ42cm、P6が径43cm・深さ55cm、P7が径27cm・深さ37cm、P8が径33cm・深さ32cm、P9が径25cm・深さ45cm、P10が径31cm・深さ23cm、P11が径56cm・深さ15.5cm、P12が径27cm・深さ48.5cm、P13が径26cm・深さ14.5cm、P14が径25cm・深さ49.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴、P7が棟持ち柱、P6・P9・P10が入り口施設で、P8が規模は小さいが貯蔵穴と考えられる。

炉址は住居址北よりのP1とP2間で検出された。形態は楕円形であり、「コ」の字状に川原石が炉石として配されていた。規模は長軸70cm・短軸50cmで焼上の厚さは6cmを測る。焼土は良く焼けており、硬質化していた。

本址の遺物は少量で、土器4点、石器8点、鉄製品1点を図示した。1と2は甕であり、いずれもP8内より出土した。1は甕の胴部であり、頸部に櫛歯状文、胴部に櫛歯波状文と斜走文をそれぞれ施す。4は高坏坏部と脚部で同一個体と考えられる。石器は6～9が礫石でいずれも先端が側面に敲打の痕が残る。10～13は磨石で、10と11は不規則な条痕が確認でき、手持ち砥石的な使用が考えられる。5は鉄製品である。断面はレンズ状を呈するが両端が欠損しており種別は不明である。

本址はこれらの出土遺物より、弥生後期に位置づけられる。



第56図 H36号住居址及び出土遺物実測図

No.	器種	法量			成形・調整・文様			内面	色調	備考	出土位置
		口径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	作	用	目				
1	罎	-	-	(14.7)	須部に磨痕残存(2連止め) 須部下半に磨痕残存 制作下半に磨痕残存		不明	10YR7/6 (明黄)	同転実測	ピット底から5	
2	罎	-	-	(7.2)	須部に磨痕残存(11本1組2連止め) 口縁部と制作に磨痕残存		ヘラミガキ	7.5YR6/4(赤黄)	鏡片実測	ピット底から5	
3	高坏	(24.0)	-	(8.5)	ヘラミガキ、赤色磨痕		不明	10R4/8 (赤)	同転実測	IV区	
4	高坏	(18.8)	(7.6)		ヘラミガキ、赤色磨痕		不明	10R4/8 (赤)	同転実測	I区	
No.		器種	素材	残存率	最大径	最大厚	最大穴	重量	所見	出土位置	
5	不明	灰製品	欠形	(14.2)	3.5	0.30		0.30	断面レンズ状を呈する	岸土位置	
6	磨石	砂岩	完形	137.0	66.0	31.0	293.00		下部先端に磨き	II区	
7	磨石	砂岩	欠形	94.0	45.0	18.0	99.50		下感先端に磨き	II区	
8	磨石	砂岩	完形	64.0	65.0	19.0	92.30		側面に磨き	II区	
9	磨石	輝石安山岩	完形	220.0	70.0	39.0	1260.00		下部先端に磨き	II区	
10	手持ち砥石	砂岩	欠形	69.0	88.0	20.0	132.50		両面にやや深い磨痕あり	II区	
11	手持ち砥石?	燧石砂岩	完形	65.0	12.0	7.0	7.90		片面に磨り、一部磨痕あり	II区	
12	磨石	砂岩	完形	71.0	30.0	13.0	41.00		片面に磨り、両面は磨痕している	II区	
13	磨石	砂岩	欠形	62.0	44.0	11.0	38.20		正面に磨り	II区	

第35表 H36号住居址出土遺物観察表

(36) H37号住居址 (第57図、写真図版二十九)

本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF-ツ6-8、F-テ6-8Grに位置する。残存状態は南壁が自然地形の傾斜により削平されている他は良好である。本址は1140号住居址と南側部分で重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。形態は長方形を呈する。炉は住居址北壁よりに造られている。規模は北壁3.44m・南壁推定3.66m・西壁残存3.62m推定4.68m・東壁残存4.17m推定4.73mで、壁高さは北壁よりで28cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-16°-Eを示す。床面積は残存で16.2㎡、推定で18.8㎡を測る。覆土は柱痕も入れて5層に分かれ、自然堆積の様相を示す。床は炉周辺部のみ僅かに硬質で、その他の部分は全体に軟質であった。磨痕は確認されていない。ピットは6個検出された。規模はP1が径49cm・深さ40cm、P2が径45cm・深さ35cm、P3が径31cm・深さ37.5cm、P4が径38cm・深さ44.5cm、P5が径35cm・深さ44cm、P6が径51cm・深さ38cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が柱柱穴、P5が棟持ち柱、P6が貯蔵穴と考えられる。

炉址は住居址北よりのP1とP2間に検出された。形態は不整形であり、規模は長軸47cm・短軸40cmで焼土の厚さは5cmを測る。焼土は良く焼けており硬質化していた。炉中央部西よりには炉石が検出されたが、住居址長軸とはずれており、元位置は失われていると考えられる。

本址の遺物は少量で、土器3点、石器5点を図示した。1は甕であり、炉北側の床面上より出土した。2は貯蔵穴より出土し、丁寧なミガキの後に赤彩が施されているが、器種は不明である。3はミニチュアの土製品で甕と考えられる。器面は摩耗が激しく詳細は不明である。4と5は磨石と砥石の両方の使用痕跡を残す。7は磨石で片面のみ顕著な磨りが確認できる。8は砥石で下部先端に磨き痕がある。6は炉の南側床面上から出土した置き砥石で、両面は八面を数え、一部に刃物傷のような深いV字状の痕跡がある。

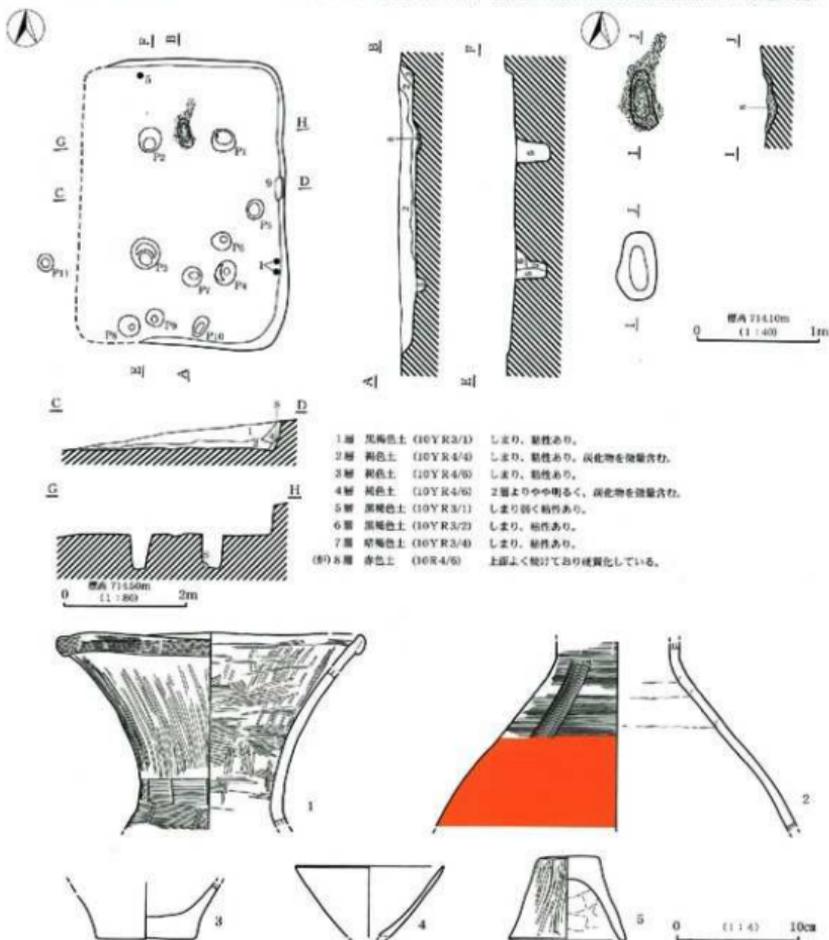
本址はこれらの出土遺物より、弥生後期に位置づけられる。

No.	器種	法量			成形・調整・文様			内面	色調	備考	出土位置
		口径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	作	用	目				
1	甕	-	43.0	(5.2)	ヘラミガキ		不明	7.5YR7/6 (赤)	完全実測	貯蔵穴	
2	不明	-	5.8	(1.6)	ヘラミガキ、赤色磨痕、 底部も丁寧なミガキ		不明	10R4/8 (赤)	完全実測	貯蔵穴	
3	ミニチュア甕	7.4	-	(4.8)	不明		不明	7.5YR6/6 (黄)	完全実測	II区、IV区	
No.		器種	素材	残存率	最大径	最大厚	最大穴	重量	所見	出土位置	
1	磨石+砥石	砂岩	完形	119.0	36.0	35.0	195.80		下部先端に顕著な磨り、上下先端に磨き	貯蔵穴	
5	磨石+砥石	砂岩	完形	99.0	26.0	11.0	87.70		両面に磨り、側面に磨き	II区	
6	磨石	砂岩	完形	280.0	128.0	81.0	4090.00		砥石の磨痕8。一部深いV字状の痕跡。上下先端に磨痕あり	II区	
7	磨石	輝石安山岩	ほぼ完形	35.0	(24.0)	7.0	7.70		片面に磨り	貯蔵穴	
8	砥石	砂岩	完形	92.0	41.0	31.0	148.80		下部先端に磨き	II区	

第36表 H37号住居址及び出土遺物実測図

(37) H38号住居址 (第58.59図, 写真図版三十)

本住居址は、調査区中央部の北西斜面であるF・ト・2・3、F・ナ2・3Grに位置する。残存状態は西壁が自然地形の傾斜により削平されている他は良好である。形跡は長方形を呈する。今は住居址北壁より造られている。規模は北壁残存2.76m推定3.02m・南壁残存2.15m推定3.05m・西壁推定4.32m・東壁4.47mで、壁高さは東壁よりで49cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-1°-Eを示す。床面積は残存で11.3㎡、推定で14.4㎡を測る。覆土は柱痕も入れて7層に分かれ、自然堆積の様相を示す。床は炉周辺部のみ僅かに硬質で、その他の部分は軟質であった。壁溝は確認されていない。ピットは11個検出された。規模はP1が径38cm・深さ56.5cm、P2が径41cm・

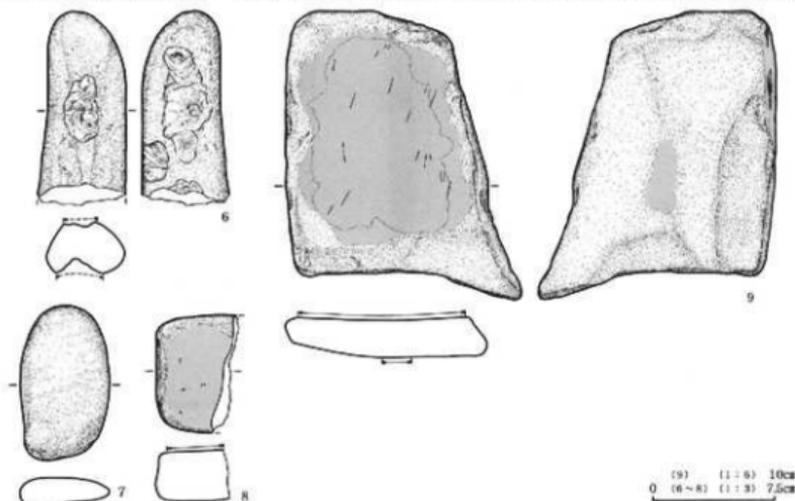


第58図 H38号住居址及び出土遺物実測図 (1)

深さ56cm、P3が径50cm・深さ52.5cm、P4が径40cm・深さ56.5cm、P5が径34cm・深さ27.5cm、P6が径32cm・深さ51.5cm、P7が径31cm・深さ50.5cm、P8が径35cm・深さ41cm、P9が径27cm・深さ39.5cm、P10が径36cm・深さ39.5cm、P11が径29cm・深さ16.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴、P9とP10が入り口施設、P8が貯蔵穴と考えられる。またP5～P7及びP9は斜めに直線上の配列を示すが、使用目的は不明である。

炉址は住居址北よりのP1とP2間に検出された。形態は楕円形であり、規模は長軸50cm・短軸20cmで焼土の厚さは6cmを測る。焼土は良く焼けており硬質化していた。また、焼土は炉掘り方よりも北側に大きく広がっていた。

本址の出土遺物は少量であった。1は西壁際より破砕した状態で出土した。口唇部を折り返し肥厚させ、櫛歯状文を施す。頸部に櫛歯状文と、櫛歯横線文と篋形垂下文を組み合わせた二段の文様帯を有する。下段の横線文と垂下文の組み合わせは所謂「T字文」として捉えられるものである。2は赤彩の施された壺である。床面近くから



第59図 H38号住居址出土遺物実測図(2)

No.	器種	位置	数量	成形・調整・文様				色	備考	出土位置
				口縁部(表・裏)	底面	外面	内面			
1	壺	(24.0)	—	(16.0)	口縁部へつミガキ、口唇部取付の肥厚口縁で櫛歯状文を施す。 胴部上段に櫛歯状文(11本1組1道止め) 胴部下段に櫛歯横線文(11本)の横。 篋形垂下文(半長竹管?)	八角目、へつミガキ、 櫛歯状文ハケ目・竹 へつミガキ	75YR7/6 (肌)	完全実測	I区、IV区	
2	壺	—	—	(15.0)	へつミガキ、赤色地帯 胴部上段に櫛歯状文(半長竹管1道止め) 胴部下段に櫛歯横線文(14本1組)の横。 篋形垂下文	ナズ?	10YR7/4(B・肌)	同軸実測	I区、III区、 IV区	
3	壺	—	8.0	(4.0)	不明	不明	10YR6/6 (明黄肌)	完全実測	器面欠れ	I区
4	鉢?	(12.0)	—	(3.0)	不明	不明	10YR7/6 (明黄肌)	同軸実測	器面欠れ	III区、IV区
5	台形土器	—	9.4	(6.3)	へつミガキ	ナズ?	10YR7/3(B・肌)	完全実測		6
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置	
6	磁石	砂岩	欠損	118.0	47.0	32.0	240.00	両面にくぼみ状の磨き	P1	
7	磁石	砂岩	完形	94.0	54.0	17.0	126.80	下部先端に磨き	P1	
8	磨石	典野石(火山岩)	欠損	72.0	45.0	31.0	240.00	正面に磨り	IV区	
9	磨石	西結凝灰岩	完形	30.40	20.00	47.0	8070.00	両面に一側面が磨り、一側面あり		

第37表 H38号住居址出土遺物一覧表

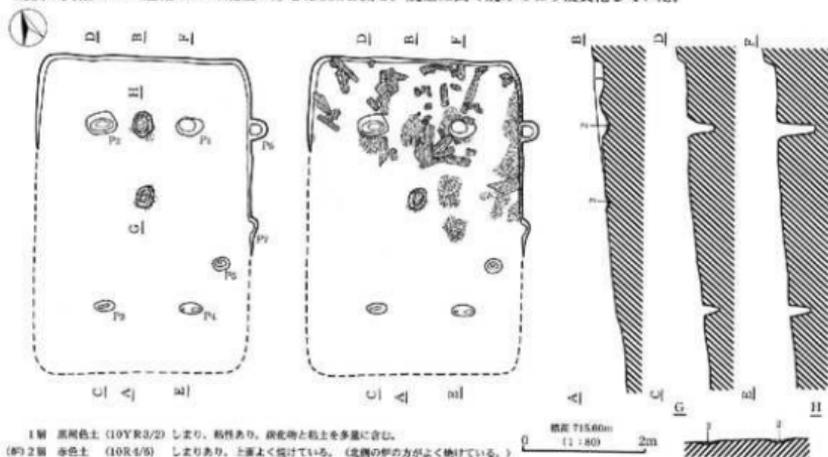
出土した。頸部から胴部のみが残存で、頸部に柳葉状文と、下段に柳葉横線文と柳葉垂下文を組み合わせた二段の文様帯を有する。この文様も「T字文」の範疇に含まれるものである。これら1と2は文様構成は似るものの、赤彩と非赤彩、垂下文の施文具の違い等が指摘でき、同一遺構内からの出土としては好資料である。3は甕底部。4は鉢と考えられる。5は台形土器或いは支脚形土器と考えられる。床面より6cm厚いた状態で出土した。6は磁石で両面に顕著な窪みが確認できる。7も磁石。8は磨石である。9は置磁石か磨り台石と考えられる。東壁に立てかけられた様な状態で出土した。裏面も一部磨れているが、正面の磨りが顕著で一部擦痕も確認できる。

本址はこれらの出土遺物より、弥生後期に位置づけられる。

(38) H39号住居址 (第60図, 写真図版三十一)

本住居址は、調査区中央部の南西斜面であるF-タ4・5、F-子4・5Grに位置する。残存状態は南側が自然地形の傾斜により削平されている。形態は長方形を呈する。今は住居址中央と北壁よりに造られている。規模は北壁3.20m・南壁推定3.20m・西壁残存1.50m推定5.03m・東壁残存3.10m推定4.90mで、壁高さは北壁よりで21cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-20°-Eを示す。床面積は残存で7.6㎡、推定で17.3㎡を測る。覆土は単層であった。床の残存部分は硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。ピットは7個検出された。規模はP1が径44cm・深さ59.5cm、P2が径46cm・深さ44cm、P3が径34cm・深さ31.5cm、P4が径37cm・深さ38.5cm、P5が径26cm・深さ38cm、P6が径34cm・深さ9cm、P7が径30cm・深さ7cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が土柱穴と考えられ、形態はいずれも楕円形を呈していた。

今は住居址中央部と北よりのP1とP2間に2カ所検出された。まず北よりの炉は形態が楕円形であり、規模は長軸41cm・短軸33cmで焼土の厚さは3cmを測る。焼土は良く焼けており硬質化していた。次に中央部の炉は形態が円形で、規模は長軸38cm・短軸28cmで焼土の厚さは2cmを測る。焼土は良く焼けており硬質化していた。



1 炉 黒褐色土 (10YR3/2) しまり、粘りあり。炭化物と焼土を多量に含む。
 (約2層 赤土色 (10R4/6) しまりあり、土層よく焼けている。(北側の炉の方がよく焼けている。)

第60図 H39号住居址及び出土遺物実測図

No.	図録	法 量		成 形・構造・文 様		色 調	備 考	出土位置
		口徑(長) 底径(幅)	高さ(厚)	外 面	内 面			
1	甕	-	5.5 (2.6)	ヘラミガキ	ナデ	10YR2/4.0C(黄褐色)	完全実測	P1
2	甕	-	(6.2) (2.5)	ナデ	ナデ	10YR3/2 (紫褐色)	図録実測	Ⅱ区

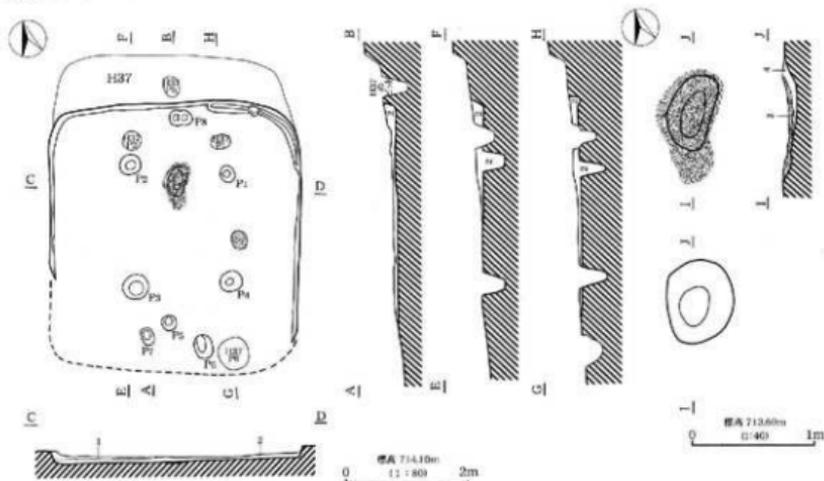
第38表 H39号住居址出土遺物観察表

本址からの出土遺物は非常に少なく、2点の土器を図示した。2点共に裏底部と考えられ、1はP1より出土した。また、本址は床残存部分に多量の粘土と炭化物が検出された。炭化物はその出土状態から、住居構築材と考えられるが、部位が把握できるものはなかった。これら炭化材はコナラ属コナラ節が多く、14C年代測定法によるとBC370～AD90年の年代が与えられている。(詳細は第3節 科学分析参照)

本址の年代的位づけは、炭化物の年代が弥生後期よりも古く測定された事、また出土遺物が少量であり不確定要素がある事など判断に苦慮するが、出土土器は箱清水式の甕罎として捉えられ、現段階では弥生後期として位置付けておきたい。

(39) H40号住居址 (第61図, 写真図版三十一)

本住居址は、調査区中央部の南西斜面であるF・7・7・8、F・テ・7・8Grに位置する。H37号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。残存状態は南側が自然地形の傾斜により削平されている。形態は長方形を呈する。炉は住居址北壁より造られている。規模は北壁3.82m・南壁推定3.60m・西壁残存3.54m推定3.83m・東壁残存2.65m推定3.90mで、壁高さは北壁よりで33cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-16°-Eを示す。床面積は残存で12.9㎡、推定で16.6㎡を測る。覆土は2層であった。床は全体に硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は北西コーナー部に検出され、規模は幅10～20cm、深さ1～3cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは8個検出された。規模はP1が径28cm・深さ41cm、P2が径33cm・深さ39cm、P3が径43cm・深さ38cm、P4が径33cm・深さ39cm、P5が径25cm・深さ31.5cm、P6が径40cm・深さ31cm、P7が径30cm・深さ31cm、P8が径38cm・深さ32cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴、P8が椀持ち柱、P6とP7が入り口施設と考えられる。なお、P3とP4はH37号住居址柱穴と同一方所であり、この点を考慮すると、東西壁ラインもあまり変わらない事から、H40号住居址を拡張した結果がH37号住居址とも考えられる。しかしこの2軒は北壁側で20cmの段差があり、1軒の拡張にしては大きすぎるように考えられる。因って、H37号住居址の南側主柱穴が傾斜により削平されてしまっていた状況を、H40号住居址の柱穴と誤認した可能性も否定できないため、現況では2軒の住居址が時期を異なり存在したと仮定したい。



1層 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性あり。

(砂) 3層 赤色土 (10R4/5) しまりあり、上面よく焼けている。炭化物を含む。

2層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性あり。炭化物を多量、黄色の硝子ブロンクを含む。

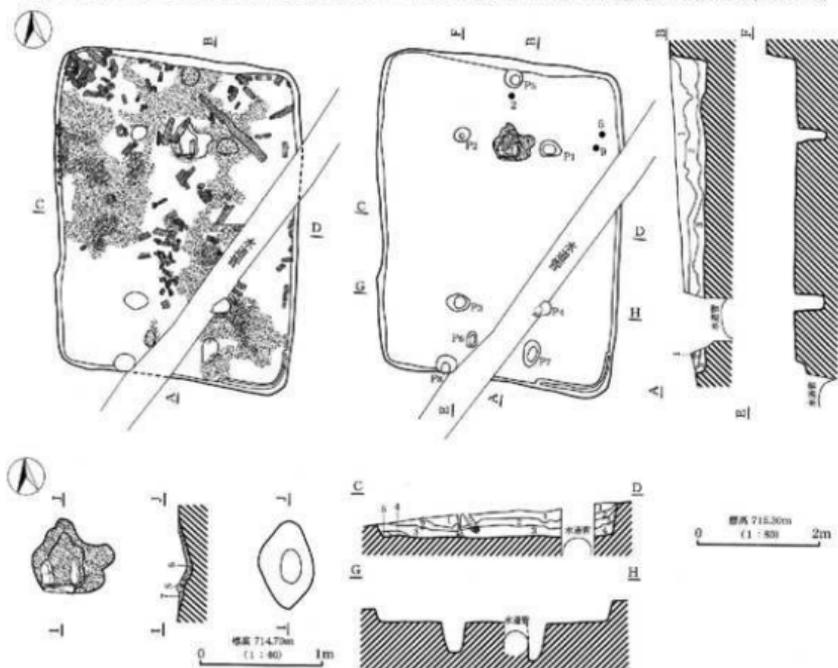
4層 赤褐色土 (10R2/1) しまり、粘性あり。黄色の粘土を含む。

第61図 H40号住居址実測図

(40) H41号住居址 (第62.63図, 写真図版三十二三十三)

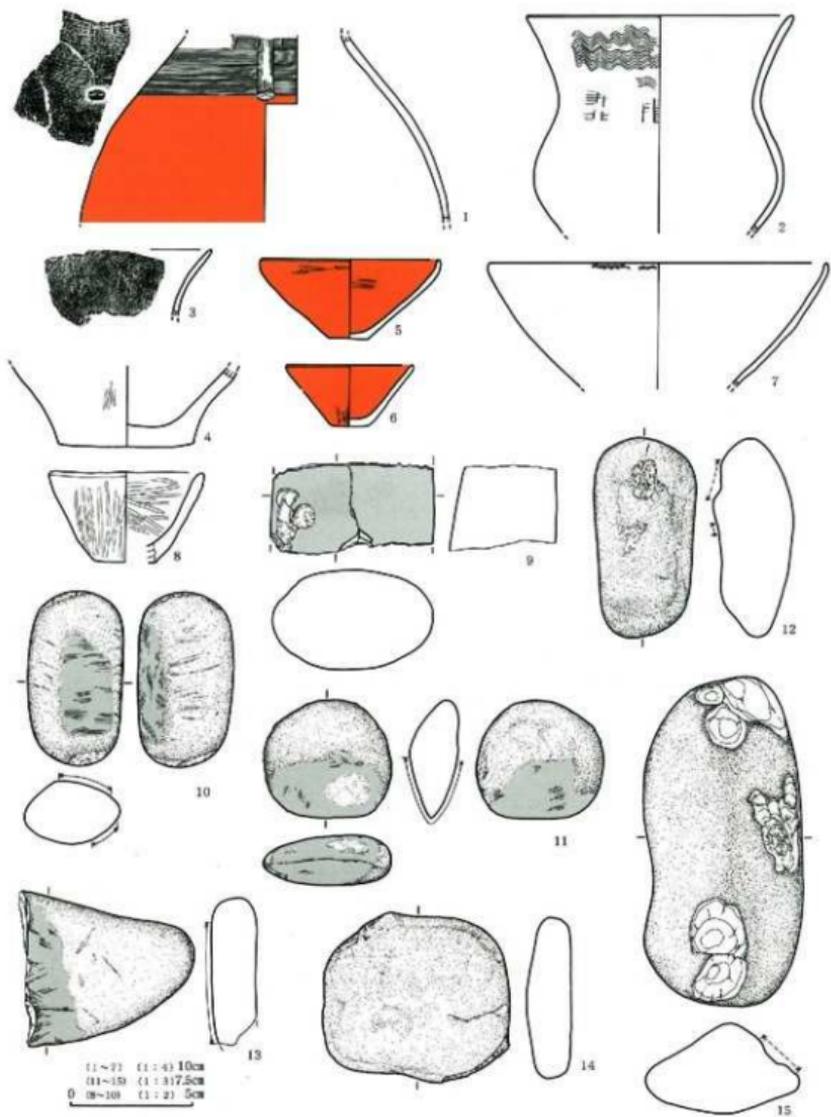
本住居址は、調査区中央部の南西斜面であるF・ツ3・4、F・テ3・4Grに位置する。残存状態は東側から南側にかけて水道管が敷設され、一部壁を破壊している他は良好である。形態はやや歪な長方形を呈する。炉は住居址北壁よりに造られている。規模は北壁3.62m・南壁3.51m・西壁4.98m・東壁5.14mで、壁高さは北壁際で62.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-5°-Eを示す。床面積は18.8㎡を測る。覆土は5層に分れ、自然堆積の状況であった。床は全体に硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は南東コーナー部のみ検出された。規模は幅6~10cm・深さ1~3cmで、断面はU字形を呈する。ピットは8個検出された。規模はP1が径35cm・深さ50cm、P2が径28cm・深さ46cm、P3が径38cm・深さ49cm、P4が径26cm・深さ61cm、P5が径31cm・深さ41cm、P6が径26cm・深さ11cm、P7が径43cm・深さ30cm、P8が径33cm・深さ39cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴、P5が棟持ち柱、P6とP7が入り口施設と考えられる。P8は規模が小さいが石器等も出土していることから貯蔵穴の可能性もある。

炉は住居北よりのP1とP2間に検出された。形態は不整形であり、規模は長軸71cm・短軸45cmで焼土の厚さは5cmを測る。焼土は良く焼けており硬質化していた。本址炉には住居中央よりに「コ」の字状に礫3点が炉石として置かれた。また、本址は床面上からおびただしい量の炭化材とそれに伴うように焼土が検出された。焼土は一部炭化材の上に乗っている状態で検出された部分もあり、これらが屋根に被せた所謂「土屋根」を示す資料とも考えられる。



- | | |
|---|---|
| 1層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。 | 4層 暗褐色土 (10YR2/4) しまり、粘性あり。焼土破片を多量に含む。 |
| 2層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性あり。微量の炭化物を含む。 | 5層 黒色土 (10YR2/1) しまり、粘性強い。炭化物を多量に含む。 |
| 3層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。炭化物と焼土を多量に含む。
(下層は炭化物層) | (砂) 6層 赤色土 (10R4/8) しまり、粘性あり。よく硬質化しており、焼けている。 |
| | 7層 暗赤色土 (10R3/1) しまり弱く、粘性あり。炭化物を含む。 |

第62図 H41号住居址実測図



第63图 H41号住居址出土遺物実測図

これら炭化材は出土状態より住居構築材と考えられるが、部材の判るものは無かった。炭化材の樹種は分析の結果、コナラ属コナラ属が多かった。また、14C年代測定によるとBC200～AD60年を示した(詳細は第3節 科学分析参照)。

本址からの出土遺物は比較的多く、土器8点、石器7点を図示した。1は竈である。頸部に櫛歯状文と櫛歯横線文を施した後、櫛歯垂下文を波状に施し、円形浮文を貼付している。2と3は甕である。どちらも波状文を基調とする。5～7は鉢で、5と6は赤彩を施した小型品で、7は無彩で1層部に波状文を施している。8はミニチュアの土製品で器種は鉢と考えられる。9は磨製石斧の基部で、上下欠損するがどちらの割れ口も整っており、意図的な破砕と考えられる。11は下部に刃部を研磨により造りだし、磨製石斧を模した様な石器である。その他、10と13は磨石と礫石の両方の機能をもち、12と14と15は敲石である。15は炉石として使用されていた。

本址はこれらの出土遺物により、弥生後期に位置づけられる。

No	器種	形		外 形	内 容	出 土 位置	備 考	出土位置	
		口部(径)	底径(径)						
1	甕	-	-	(15.0)	波状下に櫛歯横線文(1層部止め)、 櫛歯垂下文(波状)、 系下上に刺突のある円形浮文貼付。 赤色塗彩	不明	10R4/8 (赤)	同船発掘	Ⅱ区上層 IV区上層
2	甕	(21.8)	(17.7)		口縁部に櫛歯状文、 腹部に櫛歯横線文(2層部止め)	ナデ	10YR7/6 (明青陶)	同船発掘	Ⅱ区上層
3	甕	-	-	(5.4)	口縁部に櫛歯状文	不明	3YR7/6 (橙)	破片発掘	Ⅱ区上層
4	甕	11.1	(6.0)		ヘラミガキ	不明	10YR8/4(赤-黄緑)	完全発掘	Ⅱ区上層
5	鉢	14.7	3.4	6.5	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ	10R4/8 (赤)	完全発掘	Ⅱ区上層
6	鉢	(10.4)	3.3	5.0	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ	10R4/8 (赤)	完全発掘	Ⅱ区上層
7	鉢	(27.7)		(10.1)	口縁部櫛歯状文、不明	不明	7.5YR7/6 (橙)	同船発掘	Ⅱ区上層
8	ミニチュア鉢	(6.4)	(2.4)	(3.7)	ヘラミガキ	不明	10YR7/4(赤-黄陶)	同船発掘	Ⅱ区
No	器種	部材	形状	残存率	最大径	最大厚	最大重	備 考	出土位置
9	磨製石斧	石質緑石	互部のみ	38.0/34.0	41.0	(187.00)		成形時の磨打が残る、全体にみがき。断面は楕円	
10	磨石+敲石	硬質砂岩	穴形	71.0	38.0	26.0	108.00	面に磨石痕あり、上左端に溝	Ⅱ区上層
11	磨製石斧	麻石安山岩	斧形	72.0	76.0	31.0	327.00	下部に磨石により刃部を形成している。磨石の配用?	Ⅱ区上層
12	敲石	安山岩	斧形	121.0	61.0	49.0	470.00	正面下部にくぼみ状の磨き	Ⅱ区上層
13	磨石+敲石	砂岩	穴形?	106.0	90.0	28.0	414.00	正面に磨石、下左端に磨き	Ⅱ区上層
14	礫石	砂岩緑灰岩	塊形	113.0	98.0	27.0	501.00	断面2ヶ所に磨き	P8
15	礫石	麻石安山岩	穴形	200.0	55.0	93.0	1620.00	正面中央部に磨き(4ヶ所)	

第39表 H41号住居址出土遺物観察表

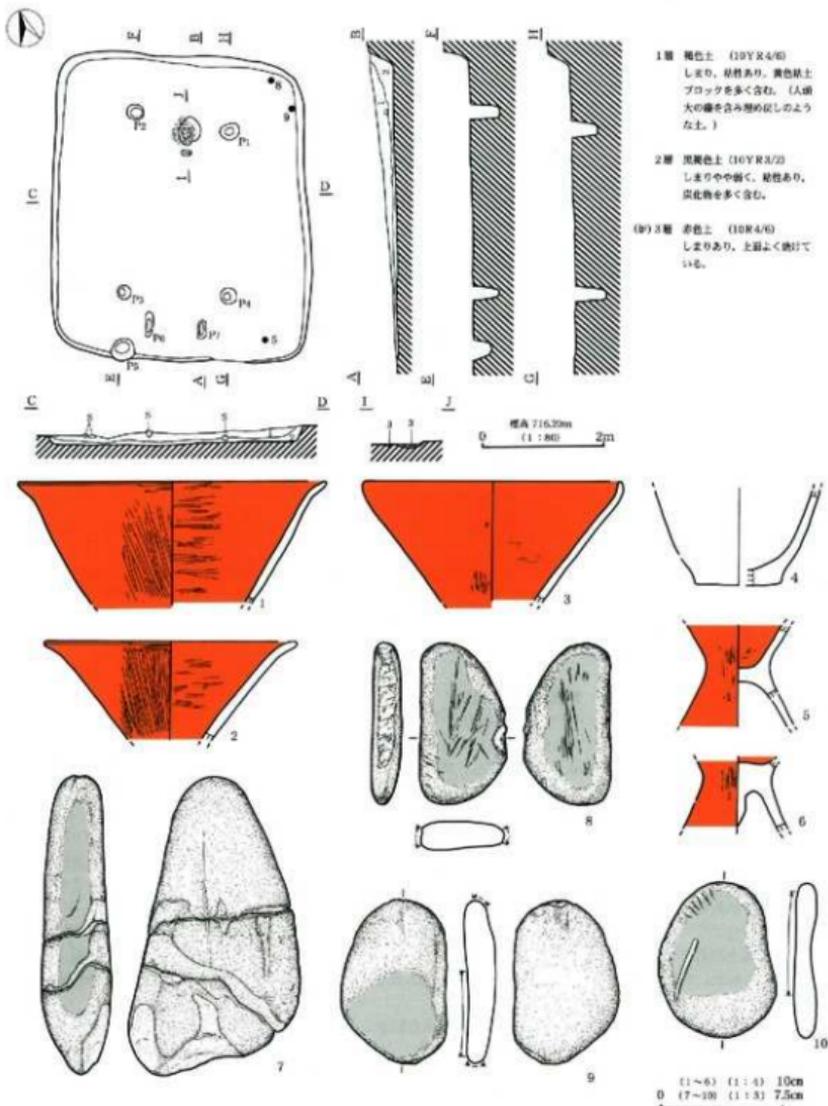
(41) H42号住居址 (第64図、写真図版三十四)

本住居址は、調査区中央部東よりの尾根上であるF-セ-4・5、F-ソ-4・5Grに位置する。残存状態は南側の一部が自然地形の傾斜により削平されている他は良好である。形態は長方形を呈する。炉は住居址北壁よりに造られている。規模は北壁3.80m・南壁3.79m・西壁4.52m・東壁4.77mで、壁高さは北壁際で39cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-18°-Eを示す。床面積は18.5㎡を測る。覆土は2層に分れ、自然礫の混入が観られた。床は南側入り口付近から炉周辺部の住居址中央部分が特に硬質化していた。壁溝は確認されなかった。ピットは7個検出された。規模はP1が径30cm・深さ44.5cm、P2が径27cm・深さ49cm、P3が径23cm・深さ45cm、P4が径27cm・深さ50.5cm、P5が径38cm・深さ33.5cm、P6が径41cm・深さ23cm、P7が径29cm・深さ22.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴、P6とP7が入り口施設と考えられる。P5は規模が小さいが石器等も出土していることから貯蔵穴の可能性もある。

炉は住居北よりのP1とP2間に検出された。形態は不整形であり、規模は長軸46cm・短軸35cmで焼土の厚さは5cmを測る。焼土は良く焼けており硬質化していた。また、本址は北東コーナー部分と東壁際中央付近で床面上に炭化物が検出された。ただ、炭化物の形状はH41号住居址等と大きく異なり、細かい炭の集まりで本来の形状確認が出来る物は無かった。

本址からの出土遺物は比較的多く、土器6点、石器4点を図示した。4が甕以外1～6は高坏坏部か脚部破片である。ただ3は口唇部が内縮する形状であり、鉢の可能性もある。7は磨石で側面に磨り痕がある。石材が軟質の凝灰岩であり磨き等は不明瞭である。8は手持ち砥石と考えられ両面に条痕の残る磨りがあり、側面は横方向に強くこすったような磨き痕である。9は磨りや磨き痕が確認され、10は磨石である。

本址はこれらの出土遺物により、弥生後期に位置づけられる。



第64図 H42号住居址及び出土遺物実測図

No.	階層	法	器	形状・調査・文様		色調	備考	出土位置	
				外	内				
1	高坪	(23.0)	—	(19.9)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハレ目、赤色塗彩	10R4/8 (赤)	同軸実測	I区、II区
2	高坪	(20.6)	—	(8.0)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハレ目、赤色塗彩	10R4/8 (赤)	同軸実測	I区
3	高坪	(20.6)	—	(9.8)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハレ目、赤色塗彩	10R4/8 (赤)	同軸実測	III区
4	壁	—	7.0	(7.7)	不明	不明	7.5YR7/6 (橙)	完全実測	I区、II区
5	高坪	—	—	(8.0)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハレ目、赤色塗彩、 線不明	10R4/8 (赤)	同軸実測	IV区
6	高坪	—	—	(5.2)	ヘラミガキ、赤色塗彩	赤色塗彩、線ナシ	10R4/8 (赤)	完全実測	P4
7	器種	素材	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
2	磨石	板状岩	完全	181.0	103.0	42.0	690.00	側面に盛り、面が荒れていない	PS
3	平持ち丸内・磨石	砂岩	完全	98.0	51.0	18.0	120.00	側面に全面の盛り、側面に磨き(条痕のない)	
9	磨石・磨石	砂岩	完全	99.0	64.0	20.0	155.00	正面に盛り、下部先端に磨き、付着物が付く	
10	磨石	砂岩	完全	94.0	71.0	14.0	133.00	正面に盛りと縁部に磨きが一箇所	I区

第40表 H42号住居址出土遺物観察表

(42) H43号住居址 (第65.66図、写真図版三五)

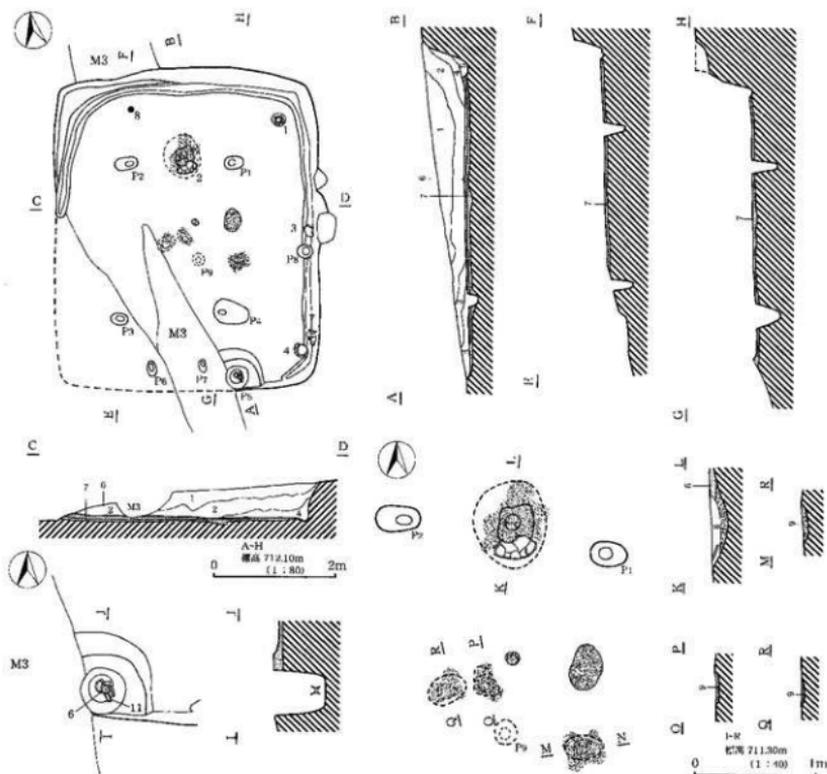
本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF-タ12～14、F-チ13・14Grに位置する。本址はM3号溝状遺構と重複関係にあり、新田関係は本址の方が古い。残存状態は南西側壁がM3号溝状遺構により破壊されている。形態は長方形を呈する。如は住居址北壁よりに造られている。規模は北壁4.00m・南壁残存1.20m・推定3.97m・西壁残存2.05m・推定4.72m・東壁4.80mで、壁高さは北東コーナーで69cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、上部で立ち上がりがなだらかとなり、すり鉢状を呈する。主軸方位はN-9°-Eを示す。床面積は残存で16.8㎡、推定で20.2㎡を測る。覆土は5層に分れ、自然堆積の状態であった。床は全体に良く踏み絞まっており、特に炉周辺部が硬質化していた。本址の床面は2面確認された(図中6層と7層)。第6層と第7層の間には炭化物層が薄く検出された。壁溝は南壁の一部を除く壁部分で確認された。ただ、北西コーナー付近は壁から離れた位置で壁溝が屈曲し、壁との空間が空く。規模は幅17～45cm・深さ1～7cmを測り、断面形状はU字形を呈する。ピットは9個検出された。規模はP1が径31cm・深さ42.5cm、P2が径37cm・深さ33cm、P3が径28cm・深さ35.5cm、P4が径58cm・深さ39cm、P5が径39cm・深さ82cm、P6が径27cm・深さ26cm、P7が径21cm・深さ17cm、P8が径25cm・深さ11.5cm、P9が径21cm・深さ25cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が柱穴、P5が貯蔵穴、P6とP7が入り口施設と考えられる。特にP6とP7はピット形態が長方形に近い長楕円形であり、使用木材は板状の物を差し込んだと考えられる。また、貯蔵穴と考えられるP5は掘り込みの周辺部が一段高く盛り上がり、土手状の形態であった。貯蔵穴内からは図示した6の付着物と赤彩が施された鉢と11の磨石が出土した。

如は住居北よりのP1とP2間に検出された。また、炉の南側には床面上に5カ所の焼土の広がり確認された。主の炉の形態は楕円形であり、規模は長軸70cm・短軸58cmで、焼土は良く焼けており硬質化していた。炉南よりに炉石状態を図示した2の土器片が出土した。この土器は埋設というよりは底部側を下にして置かれていた状態であった。その他の焼土は補助的な炉と考えられ、規模は長軸12～36cm・短軸12～35cmで、いずれも焼土は硬質化していた。

本址は、2枚床面の存在や、北西壁が壁溝に沿わない事などから一部拡張が行われたと考えられる。なお、主とされた炉は第6層の床も一部分重なるが、同じ場所で焼土層が検出されている為、炉の位置替えは行わなかったようである。ただ土器を置いたのは、焼土の堆積から判断すると拡張後と考えられる。

No.	器種	法	器	形状・調査・文様		色調	備考	出土位置	
				外	内				
1	壁	—	—	(11.7)	割破ヘラミガキ、 新面に黒塗彩文(矢羽線状)と黒塗彩横文	ハレ目、ヘラミガキ	10YR8/4 (明黄緑)	完全実測	
2	土	—	—	(17.5)	ヘラミガキ、ハレ目	不明	10YR7/4 (C34) (黄緑)	同軸実測	断面荒れ
3	土	—	—	(20.0)	ヘラミガキ、層成時の線状が残る	不明	7.5YR7/6 (橙)	同軸実測	I区、4
4	壁	15.5	—	(13.30)	黒塗彩状文(横線状)	ハレ目、ヘラミガキ	7.5YR8/2 (灰緑)	完全実測	
5	付着物	—	(6.2)	(4.3)	ナシ	厚層、脚層ともナシ	5YR6/6 (橙)	同軸実測	断面荒れ
6	付着物	—	(5.9)	(3.4)	ヘラミガキ	厚層、脚層ともナシ	5YR6/6 (橙)	完全実測	ピット底から
7	鉢	13.5	4.4	6.8	ヘラミガキ、赤色塗彩、底溝ナシ	ハレ目、ヘラミガキ、赤色塗彩	7.5YR8/4 (黄緑)	完全実測	IV区
8	器種	素材	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
2	磨石	千枚岩	完全	34.0	15.0	2.0	1.50	両面より磨削、孔は両面穿孔	
9	磨石	板状砂岩	基部欠損	70.0	(51.0)	4.0	26.00	剥片素材を一部磨削し、刃磨をつくり出している	II区床底
10	円筒	輝石炭山岩	完全	75.0	83.0	67.0	610.00	表面磨れている。使用痕は不明	IV区
11	磨石	千枚岩	完全	90.0	33.0	18.0	74.50	両面に一部磨り、上部先端に磨き	ピット底から11

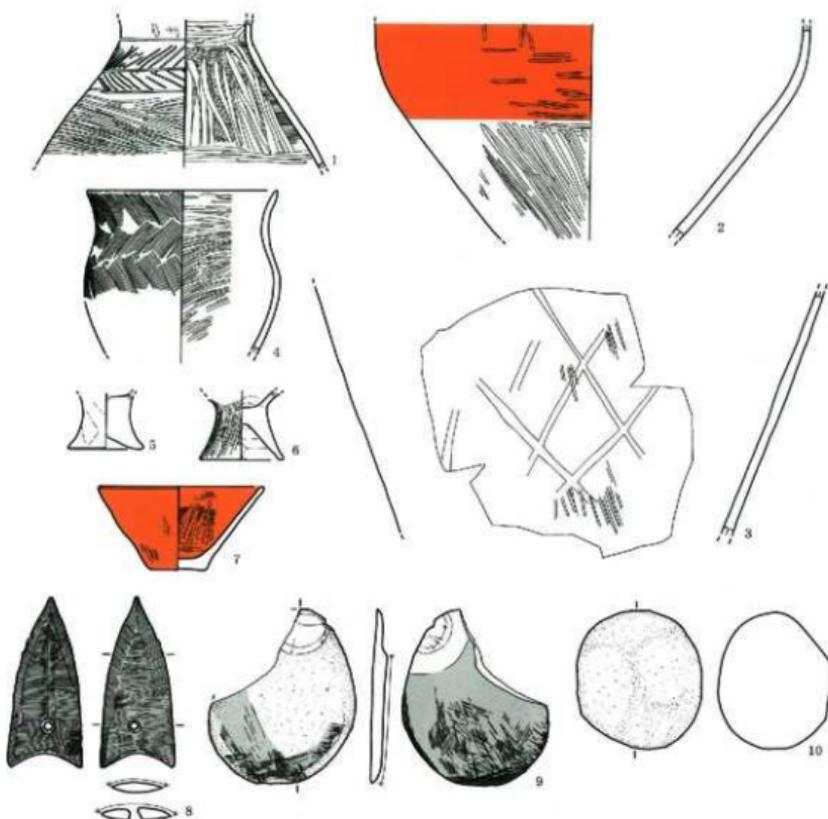
第41表 H43号住居址出土遺物観察表



- | | | | |
|-------------------|-----------------------------|--------------------|---------------------------------------|
| 1層 黒褐色土 (10YR3/1) | しまり、粘性あり。 | 6層 褐色土 (10YR4/6) | 第1段床 しまり、粘性あり。灰色粘土ブロックを多く含む下部に灰化層がある。 |
| 2層 暗褐色土 (10YR3/4) | しまり、粘性あり。 | 7層 褐色土 (10YR4/6) | 第2段床 しまり、粘性あり。灰色粘土ブロックを6層より多く含む。 |
| 3層 褐色土 (10YR4/6) | しまり、粘性あり。小石を含む。 | 8層 黒褐色土 (10YR3/2) | しまり弱く、粘性あり。粘土粒子と灰化物を多く含む。 |
| 4層 灰褐色土 (10YR3/3) | しまり、粘性あり。灰色粘土ブロックを含む。 | (8)9層 赤色土 (10R4/6) | しまりあり、1層厚化している。F層地山土の境目している。 |
| 5層 黄褐色土 (10YR5/8) | しまり、粘性あり。二つ大の石を含み下部に灰化物を含む。 | | |

第65図 H43号住居址実測図

本址からの出土遺物は比較的多く、特に東壁際の床面上に置かれた状態で出土したものが多かった。土器は7点、石器は4点図示した。1は壺の頸部から胴部上半にかけてである。住居址北東コーナーの床面上から出土した。出土状態は、頸部が上で据え置かれたような状態で、何かしらの台への転用と考えられる。無彩であり、頸部に3本の篋描横線文で区画した中に篋描斜走文を矢羽根状に施す。2は赤彩が施された壺胴部下半である。如の埋設土器の様な形で出土した。二次焼成を受けているかどうかは不明である。3は壺胴部下半で、東壁跡溝中からの出土である。焼成時か使用時についたと考えられる節目が確認出来る。4は壺の口縁部から胴部上半で南西コーナーの床面上から出土した。1と同様に正位置で置かれており、台としての転用が考えられる。施文は篋描斜走文が3段施されている。



第66図 H43号住居址出土遺物実測図

5と6は台付甕の脚部と考えられる。5は脚部の中に粘土が詰まった状態であり製型がない。7は赤彩を施した鉢である。東壁際の壁溝中より破砕した状態で出土した。8は磨製石鏃である。図示した位置の床面に刺さった様な状態で出土した。両面良く横方向の研磨がしてある。基部近くに両面からの穿孔が施してある。9は磨製刃器の様な製品の未製品と考えられる。両面は自然面と自然剥離面で、下部に研磨により一部刃部を研ぎ出している。10は円礫で、顕著な使用痕は確認できなかったが、先に述べた住居址と同じ理由で掲載した。11は磨石と砥石の両方の機能を兼ね備えた石である。貯蔵穴から出土した。

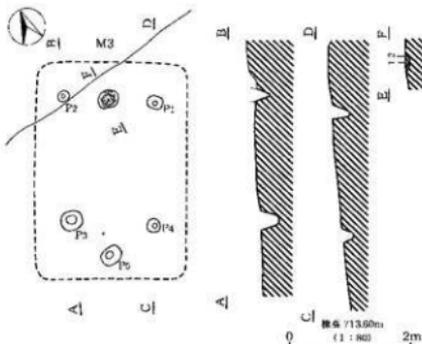
本址はこれらの出土遺物より弥生後期2段階に位置づけられる。

(1~7)	(1:4)	10cm
(8-11)	(1:2)	7.5cm
(9)	(1:2)	5cm
(11)	(1:1)	2.5cm

(43) H44号住居址 (第67図, 写真図版三十六)

本件居址は、調査区中央部の南斜面であるF・ソ・8Grに位置する。本址はM3号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は自然地形の傾斜と畑地の削平により、炉とピットしか残存していなかった。形態はピット配置より類推して長方形を呈すると考えられる。規模は北壁推定2.30m・南壁推定2.28m・西壁推定3.40m・東壁推定3.35mを測る。主軸方位はN-18°-Eを示す。床面積は推定で8.6㎡を測る。床は不明瞭であった。ピットは5個検出された。規模はP1が径26cm・深さ31cm、P2が径18cm・深さ21.5cm、P3が径35cm・深さ27.5cm、P4が径22cm・深さ18.5cm、P5が径34cm・深さ26.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴、P5が入り口施設と考えられる。炉は住居北よりのP1とP2間に検出された。形態は円形であり、規模は径29cmで、焼土は良く焼けており硬質化していた。

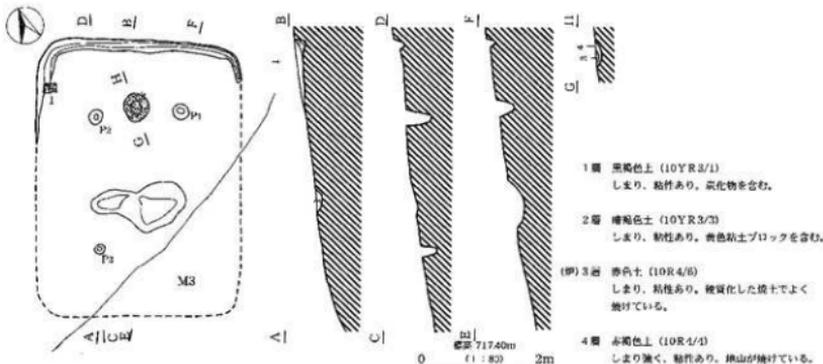
本址からの出土遺物は無かったが、周辺部の検出遺構や形態から、弥生後期に位置づけられると考えられる。



(明) 1層 赤褐色土 (10R4/6) 1層よく焼けており硬質化している。
2層 褐色土 (10YR4/6) しまり、粘性あり。炭化物粘土。

第67図 H44号住居址実測図

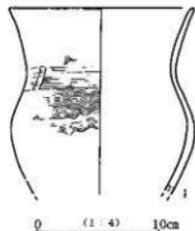
(44) H45号住居址 (第68図, 写真図版三十六)



1層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。炭化物を含む。
2層 褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性あり。褐色粘土ブロックを含む。
(明) 3層 赤褐色土 (10R4/6) しまり、粘性あり。硬質化した焼土でよく焼けている。
4層 赤褐色土 (10R4/4) しまり強く、粘性あり。焼土が焼けている。

第68図 H45号住居址及び出土遺物実測図

本件居址は、調査区東よりの南斜面であるF・ケ-5、F・コ-5・6Grに位置する。本址はM3号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は南側がM3号溝状遺構と自然地形の傾斜により破壊されている。形態は長方形を呈する。炉は住居北壁よりに造られている。規模は北壁3.02m・南壁推定2.98m・西壁残存1.62m推定4.30m・東壁残存0.44m推定4.16mで、壁高さは北壁より13.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-21°-Eを示す。床面積は残存で3.4㎡、推定で14.3㎡を測る。覆土は2層に分れる。床は炉周辺のみ良く踏み絞まっていた。壁溝は検出された壁全体で確認された。規模は幅8~26cm・深さ1~8cmを測り、断面形状はU字形を呈する。ピットは3個検出



された。規模はP1が径27cm・深さ29cm、P2が径25cm・深さ40.5cm、P3が径16cm・深さ27cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P3は主柱穴と考えられる。また本址は中央部に不整形の土坑が検出された。土坑覆土は住居址の覆土と同じであったが、住居址と土坑が同一時期の遺構であるかは確証がもてなかった。炉は住居北よりのP1とP2間に検出された。形態はほぼ円形であり、規模は径45cmで、焼土は良く焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は少量で、北西コーナー付近床面上で図示した裏が出土したのみである。裏は口縁部から胴部の破片であり、施文は頸部に櫛指波状文、口縁部と胴部に櫛指波状文が施されている。

本址は出土遺物が少量で不確実であるが、時期は弥生後期と考えられる。

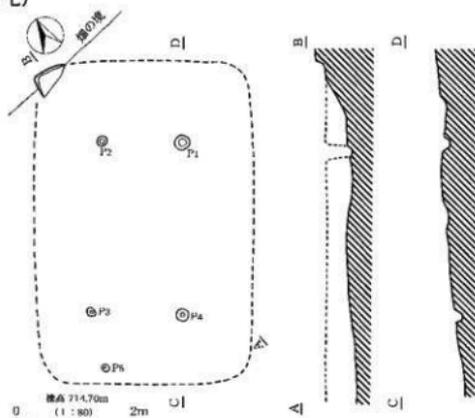
No.	器種	法			成形		文様	色調	備考	出土位置
		口徑(φ)	底径(φ)	底厚	外面	内面				
1	壺	15.0		(15.1)	口縁部と胴部に櫛指波状文、 頸部に櫛指波状文(2連止め)		不明	3YR7/4(中央)	完全支脚	3

第42表 H45号住居址出土遺物観察表

(45) H46号住居址 (第69図, 写真図版三十七)

本住居址は、調査区東よりの南斜面であるF-シ7・8、F-ス7・8Grに位置する。残存状態は自然地形の傾斜と畑地造成により削平されており、壁コーナーとピットしか残存していなかった。形態は長方形を呈すと考えられる。規模は北壁推定3.32m・南壁推定3.06m・西壁推定4.90m・東壁推定1.92mで、壁高さは北西コーナーで17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-31°-Eを示す。床面積は推定で2.2㎡を測る。ピットは5個検出された。規模はP1が径25cm・深さ11.5cm、P2が径17cm・深さ5.5cm、P3が径16cm・深さ10.5cm、P4が径21cm・深さ12.5cm、P5が径13cm・深さ9cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴、P5が入り口施設と考えられる。

本址からの出土遺物はなく、よって本址の時期決定には不確定要素も多いが、周辺部の遺構状況や、住居規模等を考へて、弥生後期に位置づけられると推定される。

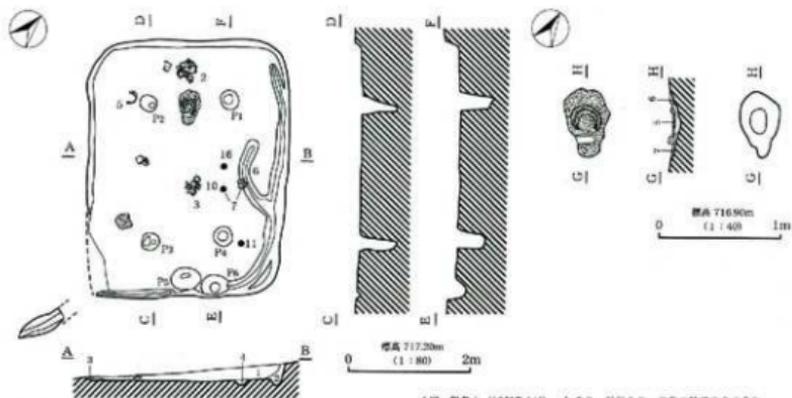


第69図 H46号住居址実測図

(46) H47号住居址 (第70.71図, 写真図版三十七)

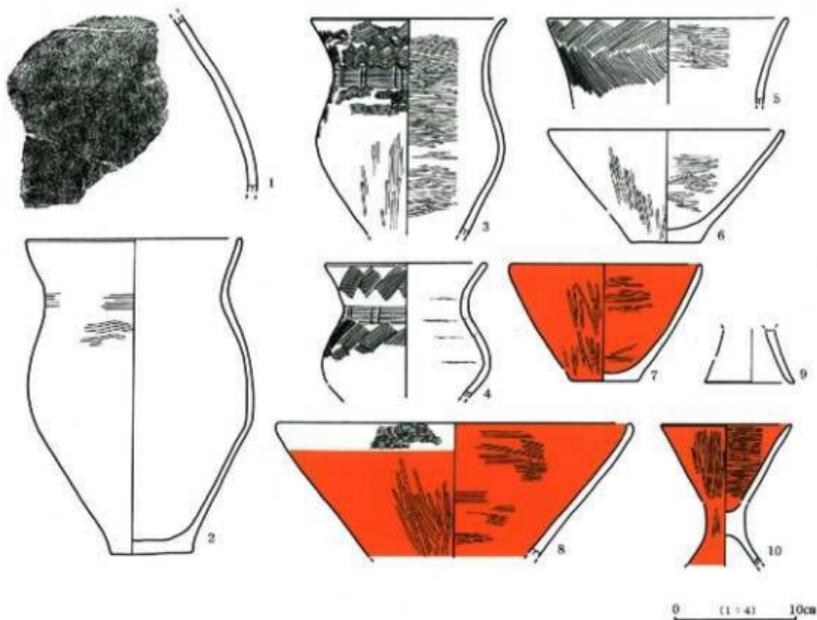
本住居址は、調査区東より尾根上であるF-ス2・3、F-セ2・3Grに位置する。残存状態は自然傾斜により南西側が削平されている他は良好である。形態は長方形を呈する。炉は住居北北壁よりに造られている。規模は北壁2.88m・南壁2.84m・西壁残存2.52m推定3.88m・東壁3.82mで、壁高さは東壁で31cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-42°-Wを示す。床面積は残存で11.6㎡、推定で11.9㎡を測る。覆土は4層に分れ、自然堆積の状態であった。床は全体に良く踏み絞まっており、特に炉周辺部が硬質化していた。壁溝は南壁と東壁に確認された。特に東壁側は住居内に張り出すように分岐した溝も検出された。規模は幅8～28cm・深さ1～9cmを測り、断面形状はU字形を呈する。また、本址は南西コーナー付近家屋外側に尿外排水溝のような溝の一部が検出された。規模は幅10～30cm・深さ4cmを測る。ピットは6個検出された。規模はP1が径33cm・深さ54cm、P2が径28cm・深さ58cm、P3が径28cm・深さ61cm、P4が径32cm・深さ44.5cm、P5が径50cm・深さ52.5cm、P6が径42cm・深さ22.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴、P5が炉竈穴、P6が入り口施設と考えられる。

炉は住居北よりのP1とP2間に検出された。形態は歪な楕円形であり、炉石が検出された。規模は長軸54cm・短軸33cmで、焼土は良く焼けており硬質化していた。特に炉中央部には上層の底部を窪いたような円形の土手状の高ま

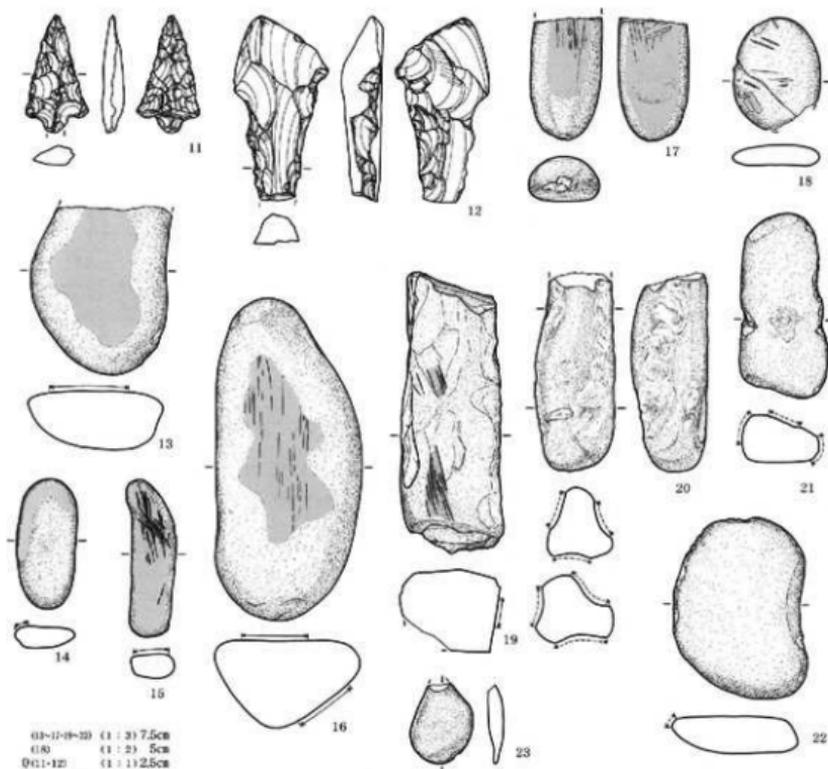


- 1層 黒褐色土 (10YR3/3) しまりあり、粘性やや弱い、炭化物を多く含む。
 2層 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性あり、黄色粘土ブロックを含む。
 3層 褐色土 (10YR4/6) しまり、粘性強い、黄色粘土粒子を含む。

- 4層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性あり、灰色の粒子を多く含む。
 5層 赤色土 (10R4/6) しまりあり、西面状の粘土でよく硬質化している。
 6層 赤色土 (10R4/4) しまりやや弱く、粘性あり、堆山がよく残っている。
 7層 暗赤褐色土 (10R3/3) しまり、粘性弱く、炭化物と黄土粒子を含む。



第70図 H47号住居址及び出土遺物実測図 (1)



第71図 H47号住居址出土遺物実照図(2)

りがあった。

本址からの出土遺物は比較的多く、土器10点、石器13点を図示した。出土位置は6・7・10・11は床から7~10cm浮いた状態で、2・3・5・16は床面直上、その他の物は覆土中か或いはピット内からの出土である。11は壺胴部破片である。櫛描羽状文の後、鬚描横線文を施す。2~5は鏃である。21はほぼ完形の鏃で伊の脇で潰れた様な状態で出土した。施文は器面が荒れていて不明。3は頸部に櫛描簾状文、口縁部と胴部に櫛描波状文を施す。4は胴部がそろばん玉状になるやや特異な形態である。施文は口縁部が櫛描斜走文、胴部が櫛描羽状文、頸部が櫛描簾状文を施す。6~8は鏃である。6は無彫で、7と8は赤彩を施す。形態は6は口縁部が直線的に立ち上がるが、7と8はやや内湾する。8は口縁部に櫛描波状文を施しており、鏃或いは高坏坏部としても類例に乏しい。9は小型の台付甕の脚部と考えられる。10は小型の高坏である。脚端部を欠損するがほぼ全容を把握できる。坏部が直線的に延びるタイプで、出土例は少数である。11と12は黒曜石製品の有茎石鏃と石鏃である。11は基部を欠損、12の石鏃も鏃先端部を欠損している。13・15は磨石と敲石の両方の機能を持つ。特に15は一部に条痕を伴う磨りが確認できる。14はみがき石で鏃先端部のみ顕著な磨りが確認できた。16は磨石。17と19は手持ち砥石と考えられる。どちらも深い条痕が一部に確認できる。20は敲石で3面に縦方向に連続した敲きか確認できる。21と22は敲石である。23は使用痕は確認できなかったが、形状がスプーン状を呈し、本遺跡の他の住居址からも大きさは異なるが同一形状の石が出土しているた

め、何らかの目的の為の石器と推定し記載した。

これらの出土遺物より、本址は弥生後期に位置づけられる。

No.	器種	法 量		形状・構造・文様	内 道	色 調	備 考	出土位置	
		口径(φ)	高さ						
1	甕	-	-	(14.3)	頸部に柳葉波状文の後、莖部縦線文、胴部ヘラミガキ	ハケ目	5YR7/6 (他)	破片実測	Ⅱ区
2	甕	17.6	6.6	25.7	頸部に柳葉波状文、胴部に柳葉波状文	不明	7.5YR2/4(他234枚)	完全実測	
3	甕	15.8	-	(17.0)	口縁部と胴部に柳葉波状文、胴部下へヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR7/6 (他)	完全実測	Ⅰ区
4	甕	13.2	-	(10.9)	口縁部に柳葉波状文、胴部に柳葉波状文(2道止め)、胴部に柳葉波状文	ナデ	7.5YR7/4 (他1他)	完全実測	Ⅰ区
5	甕	(19.6)	-	65.9	口縁部に柳葉波状文	ヘラミガキ	10YR7/3(他1他)	図録実測	
6	鉢	(19.2)	5.7	9.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR7/6 (他)	完全実測	8
7	鉢	(15.8)	5.5	9.5	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ	7.5R4/8 (他)	完全実測	7
8	脚付高坏	(29.0)	-	(10.5)	口縁部に柳葉波状文、ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ	10R4/8 (他)	図録実測	Ⅰ区
9	付付甕	-	7.3	(4.3)	不明	不明	5YR6/6 (他)	完全実測	Ⅰ区
10	高坏	(10.8)	-	(11.1)	ヘラミガキ、赤色塗彩	外縁ヘラミガキ、赤色塗彩、柳葉ナデ	10R4/8 (他)	完全実測	Ⅰ区 10
№	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所 以	出土位置
11	有蓋石椁	当茂石	蓋部欠損	24.0	13.0	4.5	0.90		Ⅶ
12	石鏝	当茂石	刃部欠損	38.0	19.5	8.5	4.70	中や大形の石鏝	P3
13	石片+緑石	砂岩	欠損	(102.0)	81.0	35.0	(394.00)	正面に磨り、前面の一部に磨き	Ⅰ区
14	磨石(みがき石)	砂岩	磨面	79.0	36.0	13.0	50.50	正面に磨面によって磨り	Ⅰ区
15	磨石+緑石	焼真砂岩	磨面	95.0	26.0	13.0	88.00	正面に磨面によって磨り、上部先端に磨き	Ⅰ区
16	磨石	磨石(火山岩)	磨面	195.0	87.0	53.0	1330.00	二面に磨り	
17	子持石(既石+緑石)	砂岩	欠損	(75.0)	43.0	27.0	(86.00)	両面に磨面を伴う磨り、下部先端に磨き	Ⅰ区
18	磨石	当茂石	一部欠損	(46.0)	35.0	7.5	18.40	正面に磨り	P2
19	磨石+緑石	砂岩+緑石	磨面	170.0	80.0	50.0	673.00	正面に磨り、右面に磨り(砂石)	
20	磨石	砂岩	欠損	(120.0)	40.0	43.0	(310.00)	三つの面中に大きくぼんた磨面あり、面にV字状の溝あり	P5
21	磨石	火山岩	欠損	112.0	47.0	29.0	252.00	正面中央に磨面、下部先端に磨き	Ⅱ区
22	磨石	砂岩	磨面	110.0	76.0	22.0	276.00	左側磨面に磨面を磨き	Ⅰ区
23	スラン状の石	火山岩	基部欠損	(49.0)	33.0	9.0	17.10	先端部に引っかかったような磨面	Ⅱ

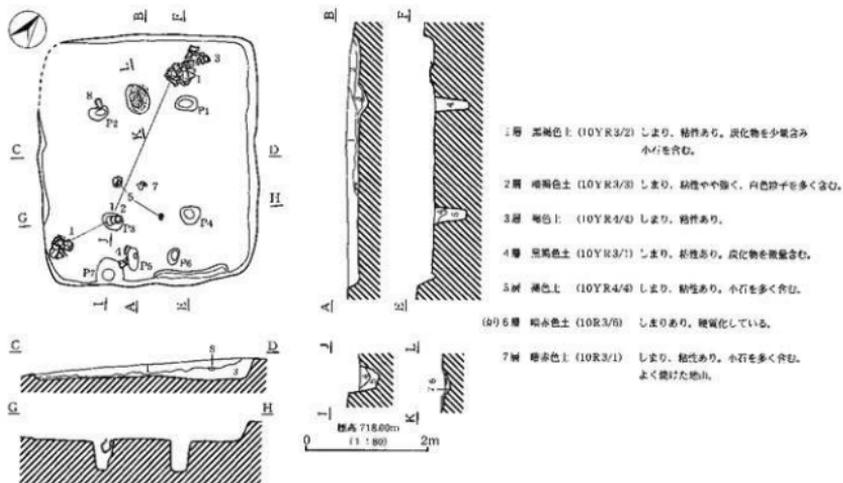
第43表 H47村住居址出土遺物観察表

(47) H48号住居址 (第72.73図, 写真図版三十八)

本住居址は、調査区東より尾根上であるF-セ-37~39、F-ソ-37~39Grに位置する。残存状態は自然傾斜により北西側が削平されている他は良好である。形態は方形に近い。竪は住居址北壁より内側に造られている。規模は北壁残存3.10m推定3.30m・南壁3.07m・西壁残存2.85m推定3.75m・東壁3.67mで、壁高さは東壁際で30cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。軸方位はN-39°-Wを示す。床面積は残存で12.6㎡、推定で12.7㎡を測る。覆土は柱穴覆土も含め5層に分れ、自然堆積の状態であった。床は全体に良く踏み絞まっており、特に竪周辺部が硬質化していた。壁溝は南壁の一部に確認された。規模は幅16~25cm・深さ1.5~6cmを測り、断面形状はU字形を呈する。ピットは7個検出された。規模はP1が径35cm・深さ58cm、P2が径33cm・深さ42.5cm、P3が径35cm・深さ48cm、P4が径33cm・深さ52.5cm、P5が径37cm・深さ30cm、P6が径27cm・深さ25.5cm、P7が径45cm・深さ42cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴、P7が貯蔵穴、P5とP6が入り口施設と考えられる。

竪は住居北壁よりのP1とP2間に検出された。形態は楕円形であり、規模は長軸50cm・短軸35cmで、焼土の厚みは8cmで、焼土は良く焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は多く、特に住居址北東コーナー部と南西コーナー部よりまとまって出土した。出土位置を示した遺物はすべて床面直上より出土している。1は甕である。住居址の北壁よりから一括出土した物と南西コーナー部から出土した土器群と接合し、口縁部を欠くものほぼ完形となった。頸部に施文しているが器面が荒れていて不明瞭である。赤彩を施す。2も甕で、口縁部の一部を欠損する他はほぼ完形である。P3の中から正位で収まるように入土したが、住居跡後に柱穴脇にあった土器が滑り込んだと考えられる。頸部から胴部にかけて柳葉波状文と垂文を施すが、通常の甕よりも施文幅がある。3と4は甕でいずれも胴部下半を欠損している。文様構成はいずれも頸部に柳葉波状文、口縁部と胴部に柳葉波状文がそれぞれ施されている。5と6は高坏の脚部である。いずれも赤彩が施されている。特に6は貯蔵穴内より出土し、脚部部近くに焼成前の穿孔がある。7は鉢で住居址中央部から



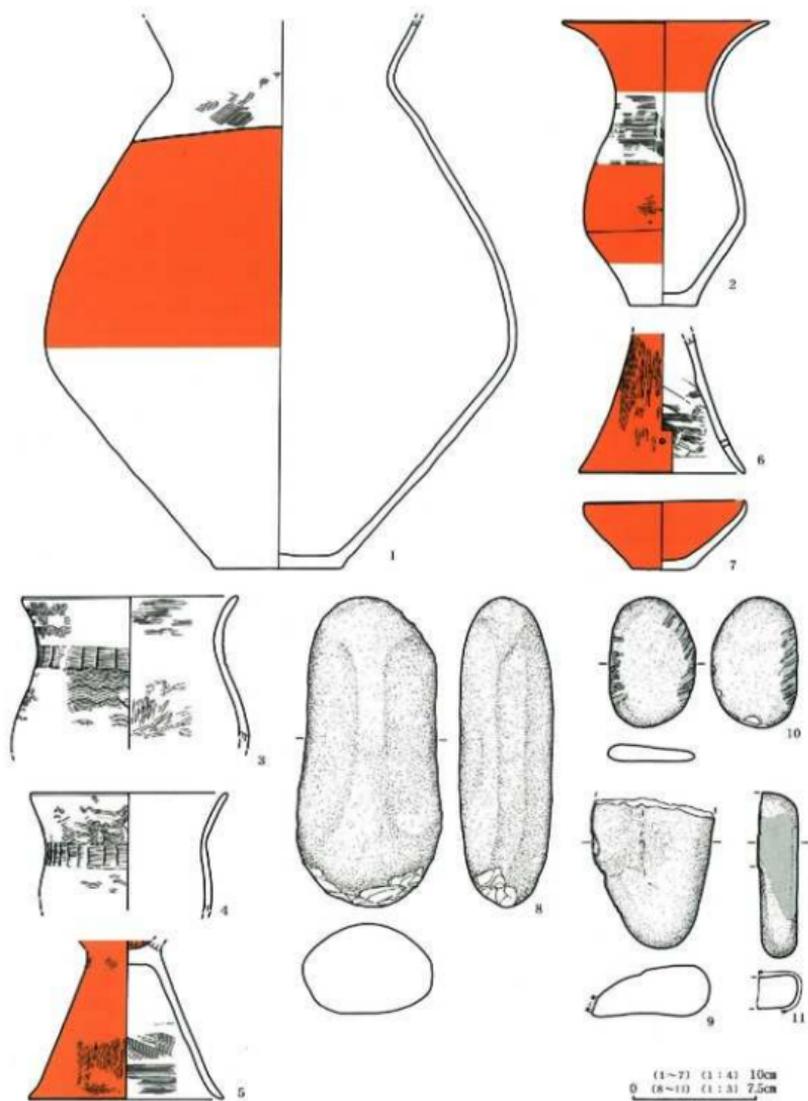
- 1層 黒褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性あり。炭化物を少量含む小石を含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性やや弱く、白色砂子を多く含む。
- 3層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性あり。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。炭化物を微量含む。
- 5層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性あり。小石を多く含む。
- (9) 6層 暗赤色土 (10R3/5) しまりあり、硬質化している。
- 7層 暗赤色土 (10R3/1) しまり、粘性あり。小石を多く含む。よく焼けた地山。

第72図 H48号住居址実測図

No.	器種	注		量	成形・調整・文様				色調	備考	出土位置
		口限長	底厚(器高)		外 面	内 面	備 考				
1	碇	-	(10.1)	(44.5)	頸部に磨指羽状文と磨指横線文 胴部に赤色塗彩	ヘラナ子	10YR8/4(明黄緑)	同転実測		ビツ武から31	
2	壺	(16.8)	5.4	23.1	頸部に磨指横線文の後、磨指垂下文、 体部下半ヘラミガキ、赤色塗彩	不明、 口縁部赤色塗彩	10R4/8(赤)	完全実測			
3	甕	17.5	-	(12.4)	胴部に磨指横線状文、 口縁部と胴部に磨指波状文	ヘラミガキ	5YR6/6(橙)	完全実測		I区	
4	甕	(16.0)	-	(9.4)	口縁部と胴部に磨指波状文、 頸部に磨指横線状文(1連止め)	不明	7.5YR7/6(橙)	完全実測		II区	
5	高坪	-	15.7	(12.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩	坪部ヘラミガキ、 赤色塗彩、脚部ハケ目	10R4/8(赤)	完全実測			
6	高坪	-	(13.5)	(11.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハケ目	10R4/8(赤)	完全実測 焼成前に穿孔		貯蔵穴	
7	鉢	13.0	4.9	5.5	不明	不明、赤色塗彩	10R4/8(赤)	完全実測		III区	
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所 見	出上位置		
8	碇石	砂岩	完形	188.0	79.0	55.0	1160.00	下部先端に鋭きな鋭き			
9	碇石	砂岩	欠損	(91.0)	71.0	31.0	248.00	左側面に鋭き		II区	
10	碇石(仔細丸碇石)	砂岩	完形	79.0	52.0	10.0	61.80	両面縁面に幅のある条痕		III区	
11	磨石+碇石	硬質砂岩	完形?	101.0	25.0	20.0	95.00	三面に磨り、下部先端に鋭き		II区	

第44表 H48号住居址出土遺物観察表

出土した。赤彩が施されている。8と9は碇石である。8は下部に顕著な鋭き痕があり、9は側面に鋭き痕が確認できる。10は手持ち碇石と考えられ両側面に幅のある溝状の条痕が確認できる。この条痕はいずれの辺も右上がりの方向にあり、使用方法を推測させる。11は磨石と碇石の両方の機能を持つが、特に棒状の側面の磨りは顕著である。これらの出土遺物により、本址は弥生後期4段階に位置づけられる。



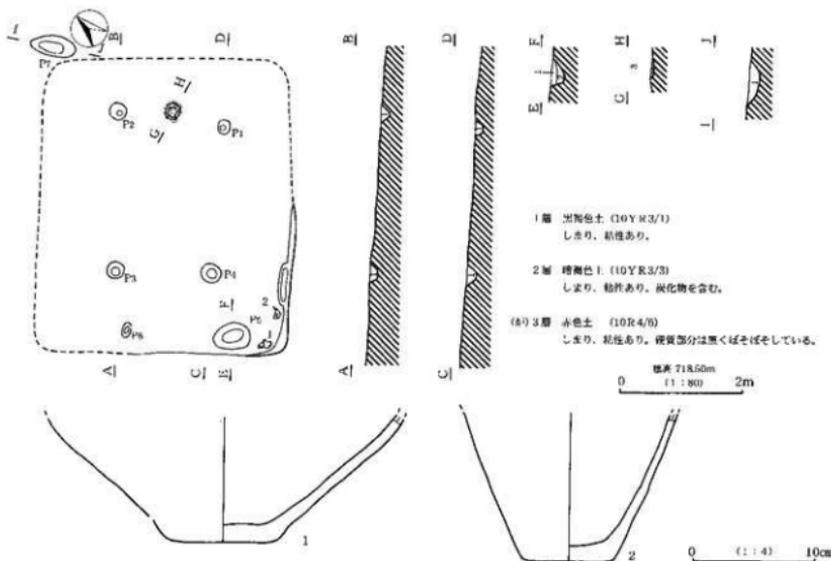
第73图 H48号住居址出土遗物实测图

(48) H49号住居址 (第74回, 写真図版三十九)

本住居址は、調査区東より尾根上であるF-ス-36・37、Fセ-36・37Grに位置する。残存状態は自然傾斜より南西コーナーとピット・炉を残すのみであった。形態は方形に近いと考えられる。炉は住居址北壁より前に造られている。規模は北壁推定3.70m・南壁残存2.53m推定3.94m・西壁推定4.50m・東壁残存2.40m推定4.59mで、壁高さは南東コーナーで8cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-45°-Eを示す。床面積は残存で3.0㎡、推定で19.3㎡を測る。床は削平されていたためか軟質であった。壁溝は東壁の一部に確認された。規模は幅14~20cm・深さ1.5~3cmを測り、断面形状はじ字形を呈する。ピットは7個検出された。規模はP1が径23cm・深さ17cm、P2が径27cm・深さ14.5cm、P3が径28cm・深さ13.5cm、P4が径35cm・深さ16cm、P5が径60cm・深さ21cm、P6が径25cm・深さ9.5cm、P7が径73cm・深さ21.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴、P5が貯蔵穴、P6が入り口施設と考えられる。また、P7は住居址推定線よりも外側に位置するが、H47号住居址のような住居址外壁溝もあることから同一図面に示した。

炉は住居北よりのP1とP2間に検出された。形態はU形であり、規模は径35cmで、焼上の厚みは4cmで、焼土は良く焼けていたが軟質であった。

本址からの出土遺物は少なく、住居址南東コーナーに図示した上層2点が出土したのみである。出土位置は2点とも床面直上であった。1は壺胴部下半と考えられる。出土遺物が少なく不確定要素もあるが、弥生後期に位置づけられると考える。

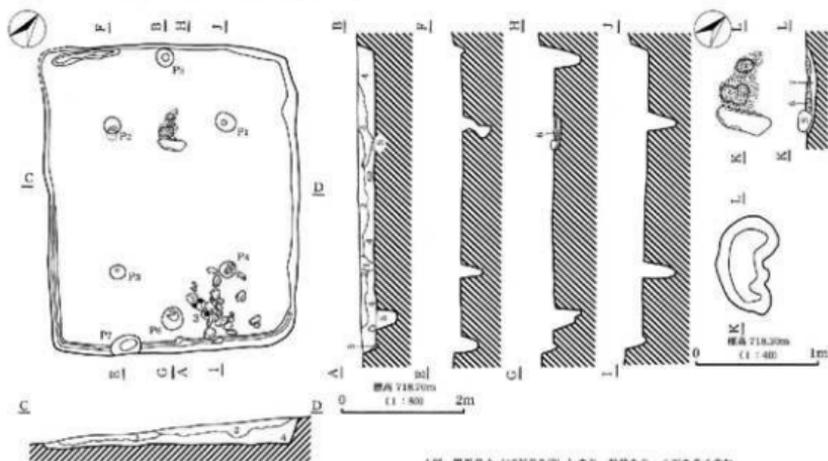


第74回 H49号住居址及び出土遺物実測図

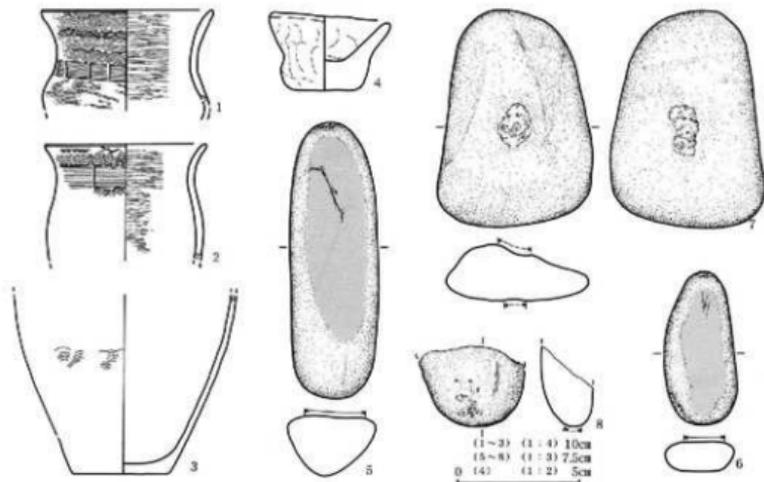
No.	器種	法		成形・調整・文様			色	備考	出土位置
		山採長	底径(輪)	底径(厚)	外	内			
1	壺	-	9.1	(10.1)	不明	不明	5YR7/8 (底)	完全欠損	
2	甕	-	(7.4)	(12.1)	不明	不明	2.5YR6/8 (底)	同転来部	

第45表 H49号住居址出土遺物観察表

(49) H50号住居址 (第75図、写真図版三十九)



- 1層 黒色土 (10YR2/1) しまり密く、粘性ややあり、炭化物を含む。
 2層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり、炭化物を多く含む。
 3層 褐色粘土 (10YR4/3) しまり、粘性あり、黄色の砂子と小石を多く含む。
 4層 黒褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性あり、小石を多く含む。
 5層 褐色土 (10YR4/0) しまり、粘性あり、大つぶの小石と黄色粘土を多く含む。
 (6) 6層 赤色土 (10R4/6) しまり、粘性あり、上面硬質化しておりよく保たれている。
 7層 黒褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性あり、黄色粘土と白色土ブロックを含む。



第75図 H50号住居址及び出土土物実測図

本住居址は、調査区東より屋根上であるE-コ・サ・シー40、F-コ・サ・シー1Grに位置する。残存状態は北西コーナーが煙の耕作で一部破壊されている他は良好である。形態は長方形を呈する。炉は住居址北壁より造られている。規模は北壁3.93m・南壁3.80m・西壁4.68m・東壁4.52mで、壁高さは北東コーナーで42cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-40°-Wを示す。床面積は18.5㎡を測る。床は全体的に硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。覆土は柱穴も含め5層に分かれ、自然堆積の状態であった。盛溝は南壁と西壁の一部及び北壁の西側に確認された。規模は幅10~26cm・深さ1~7cmを測り、断面形状はU字形を呈する。ピットは7個検出された。規模はP1が径35cm・深さ47.5cm、P2が径27cm・深さ19.5cm、P3が径25cm・深さ35cm、P4が径29cm・深さ52.5cm、P5が径31cm・深さ43.5cm、P6が径36cm・深さ47cm、P7が径50cm・深さ24.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴、P5が椀持ち柱、P7が貯蔵穴、P6が入り口施設と考えられる。また、P2は柱穴と考えられるが斜め方向に掘りこまれており、特異な形態である。

炉は住居北よりのP1とP2間に検出された。形態は不整形であり、炉石が1点検出された。規模は長軸80cm・短軸42cmで、焼土の厚みは5cmで、焼土は良く焼けて硬質化していた。

本址からの出土遺物は少なく、土器4点と石函4点を図示した。図示した遺物はいずれも覆土中の上出であり、特に南東コーナー部には礫がまとまって出土した。しかし、これら礫はいずれも床面から浮いた状態で検出され、すべてが自然礫であった。1~3は裏である。1と2はいずれも頸部に櫛描嵐状文、口縁部に櫛描波状文を施す。

4はミニチュアの土製品で鉢を表していると考えられる。5は磨石と礫石の両方の機能をもち、6は磨石、8は礫石である。7は両面に敵きによる窪みをもち、縄文時代の円石のような形態である。

これらの出土遺物より、本址は弥生後期に位置づけられる。

No.	品名	法	量	形状・調整・文様		色調	備考	出土位置	
				外面	内面				
1	裏	14.0	(7.7)	櫛描渦線嵐状文(逆止め)	櫛描嵐状文	ヘラミガキ	10YR7/4(2.5)~(2.0)電	完全実器	P2
2	裏	(18.1)	(9.5)	櫛描渦線嵐状文(逆止め)	櫛描嵐状文	ヘラミガキ	7.5YR7/4(2.5)~(2.0)電	回転実器	非区、非区
3	裏	7.5	(4.5)	櫛描嵐状文		不明	7.5YR6/4(2.5)~(2.0)電	完全実器	9
4	ミニチュア鉢?	4.9	2.8	指環圧痕					
5	磨石						7.5YR6/6(電)	完全実器	非区

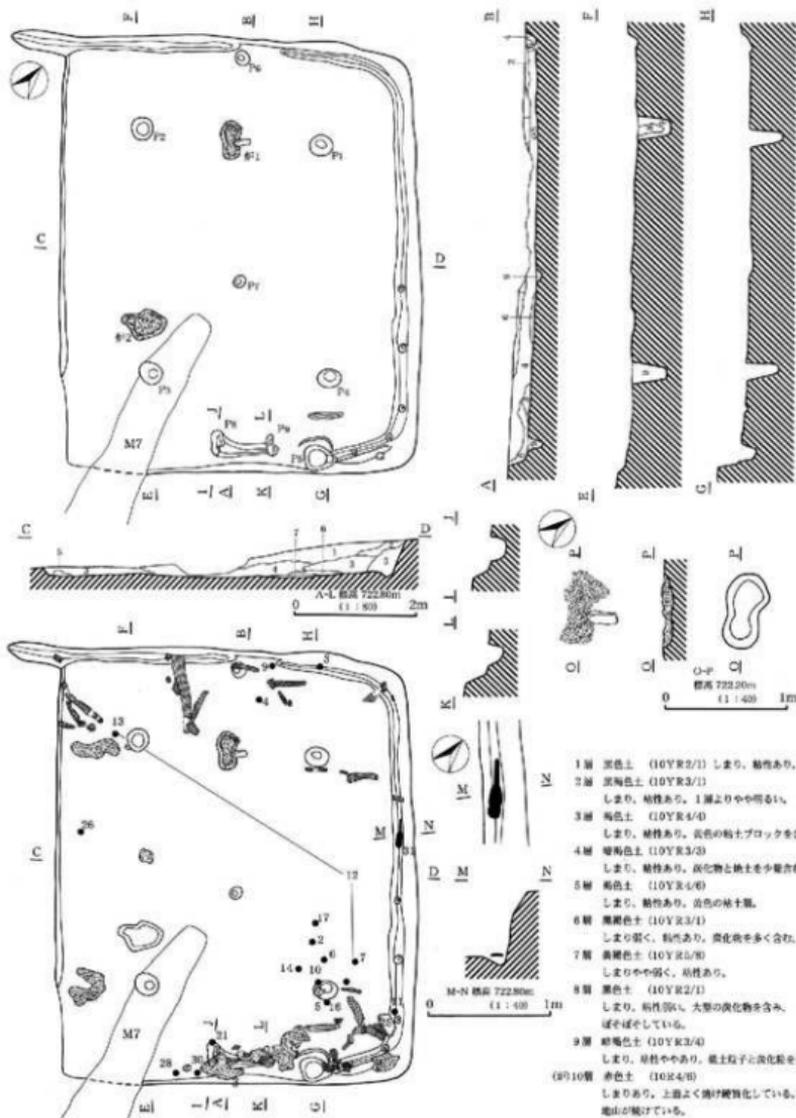
No.	品名	素材	残存率	最大径				所見	出土位置
				最大径	最大軸	最大厚	重量		
5	磨石+礫石	磨石(火山岩)	完全	167.0	54.0	37.0	545.0g	正面に磨り、上層先端に敵き	非区
6	磨石	砂岩	完全	93.0	32.0	18.0	102.0g	正面に磨り、上層先端に敵き	非区
7	礫石(台石)	泥岩	完全	131.0	86.0	34.0	610.0g	両面中央にくぼみ状の敵き	非区
8	礫石	硬質砂岩	欠損	(49.0)	(6.4)	(31.0)	(107.0g)	一面に敵き痕あり、磨き跡の基部の可能性あり	非

第46表 H50号住居址出土遺物観察表

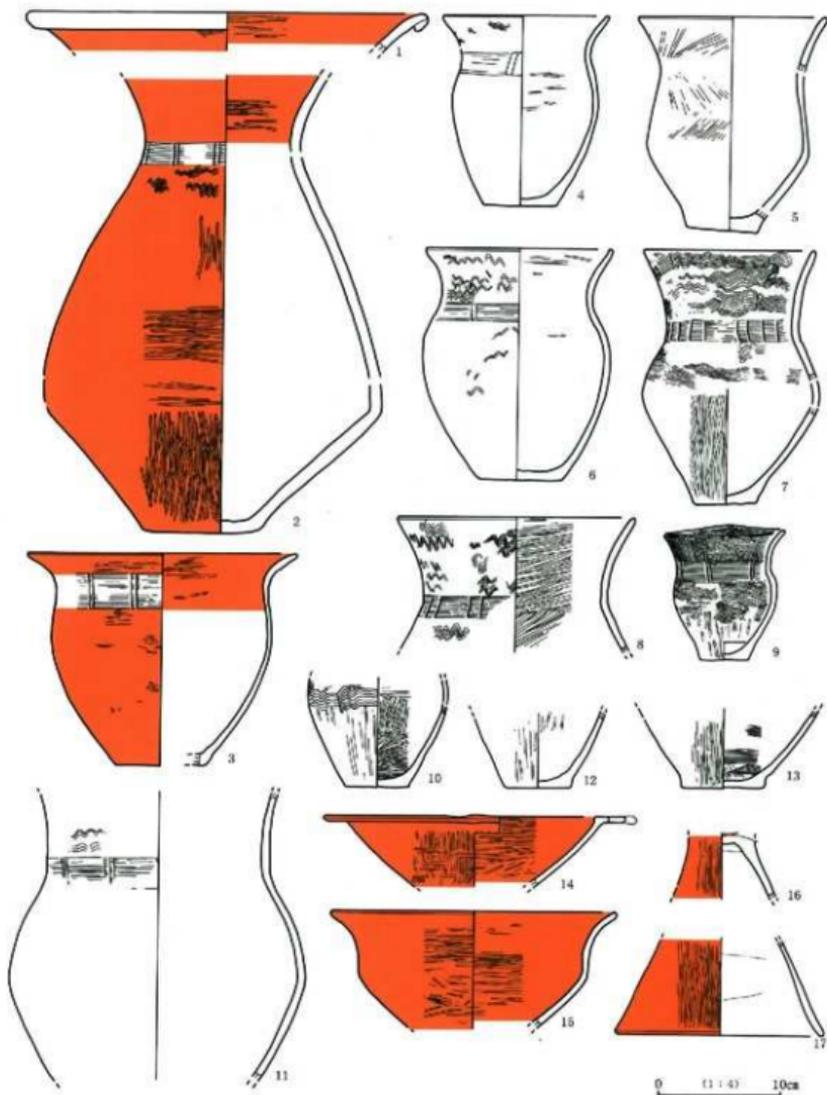
(50) H51号住居址 (第76.77.78図、写真図版四十四一)

本住居址は、調査区東端の屋根上であるF-ア-35~37、E-イ-35~37、E-ウ-35・36Grに位置する。残存状態は南西コーナーが煙の境界溝で一部破壊されている他は良好である。形態は長方形を呈する。炉は住居址北壁より造られている。規模は北壁5.50m・南壁5.50m・西壁6.78m・東壁6.50mで、壁高さは東壁際で54cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-43°-Wを示す。床面積は37.5㎡を測る。床は全体的に硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。覆土は柱穴も含め9層に分かれ、やや層片は乱れていたが自然堆積の状態であった。盛溝は南壁の一部と東壁と一部とぎれるが北壁の全体に確認された。また、北壁の盛溝は住居址外に90cmほど延びていた。規模は幅17~50cm・深さ3~7cmを測り、断面形状はU字形を呈する。ピットは9個検出された。規模はP1が径37cm・深さ54.5cm、P2が径36cm・深さ51.5cm、P3が径40cm・深さ55cm、P4が径38cm・深さ52cm、P5が径52cm・深さ30cm、P6が径26cm・深さ38cm、P7が径22cm・深さ32cm、P8が径40cm・深さ26cm、P9が径34cm・深さ25cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴であり、P2には柱痕が確認された。P6が椀持ち柱と考えられる。P5が貯蔵穴で住居側に一段高くなった段をもつ。P8とP9が入り口施設と考えられる。この二つのピットは楕円形で、このピット間にはH2号住居址と同じく、柱穴間をつなぐ溝状遺構が確認された。また、東壁際盛溝内には小ピットが5カ所検出され、壁柱穴と考えられる。

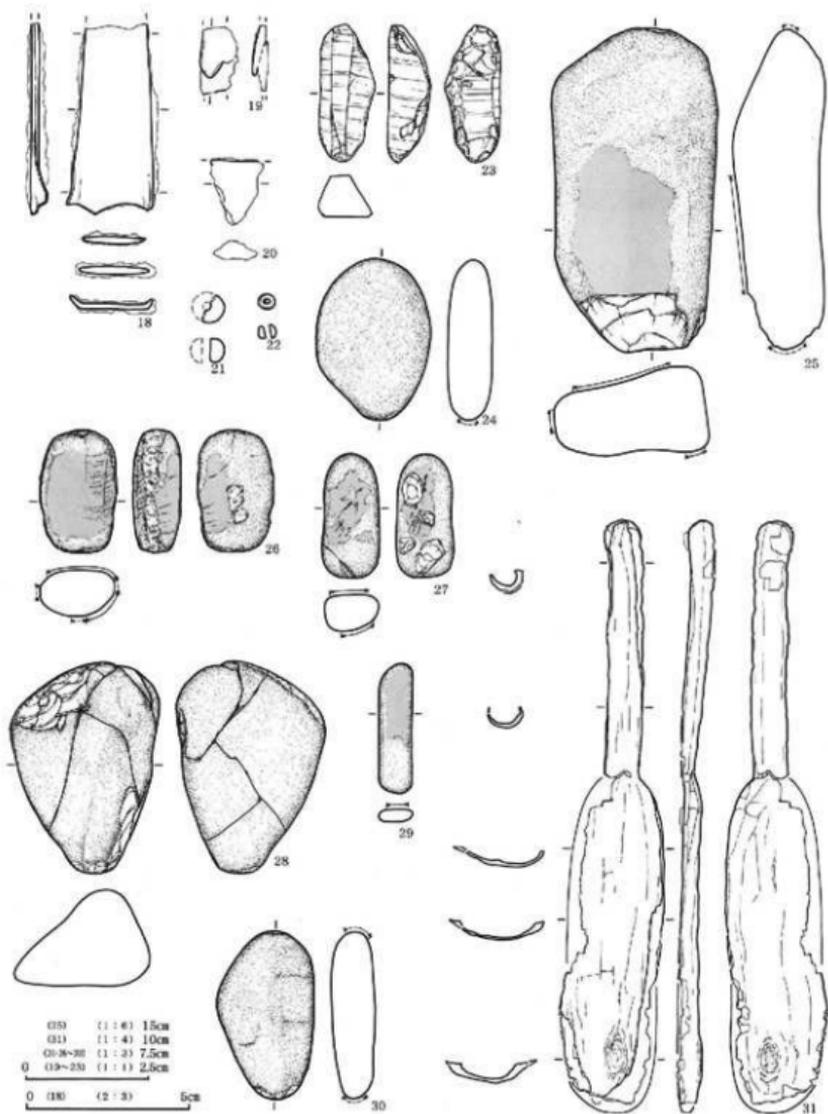
炉は住居北よりのP1とP2間に検出された。形態は「8」の字形であり、炉石が1点検出されたが、元位置からはずれていると考えられる。炉の規模は長軸62cmで、焼土の厚みは9cmを測り、焼土は良く焼けて硬質化していた。また、住居址南西側には補助的な炉と考えられる焼土範囲が検出された。形態は不整形で、規模は長軸75cm・短軸48cmである。焼土は良く焼けており硬質化していた。



第768図 H51号住居址実測図



第77图 H51号住居址出土器物实图(1)



第78图 H51号住居址出土器物实测图(2)

No.	器種	法		量		形・調・文		色	調	備考	出土位置
		口徑(長)	底径(幅)	高(厚)	加(厚)	外	内				
1	壺	(32.7)	-	(3.2)		ハケ目、ヘラミガキ、赤色塗彩 口付唇部分より肥部		赤塗彩	10R4/8 (赤)	完全実用	跡丸穴 IV区
2	壺	-	9.7	(36.5)		胴部に楕圓狀文(2連止め)。 胴部上部に楕圓狀文	ヘラミガキ		2.5YR4/8 (赤褐)	完全実用	2
3	出口壺	(22.0)	(7.2)	(17.3)		胴部に楕圓狀文(2連止め)。 口縁・胴部に赤色塗彩		赤塗彩	10R4/8 (赤)	完全実用	1区
4	壺	(13.4)	6.0	13.5		胴部に楕圓狀文(3連止め)。 口縁部に楕圓狀文	ヘラミガキ		7.5YR6/2 (灰褐)	完全実用	1区
5	壺	13.4	3.7	17.1		口縁部に楕圓狀文、胴部に楕圓狀文	ヘラミガキ		10R4/8 (赤)	完全実用	7
6	壺	15.2	6.7	23.9		口縁部と胴部に楕圓狀文。 胴部に楕圓狀文(2連止め)	ヘラミガキ		7.5YR7/4(0.5) (赤)	完全実用	2
7	壺	14.3	5.2	20.8		胴部上半と口縁部に楕圓狀文。 胴部下半ヘラミガキ	ヘラミガキ		7.5YR5/3(0.5) (赤)	完全実用	Ⅱ区、IV区
8	壺	(19.3)	-	(10.8)		口縁部と胴部に楕圓狀文。 胴部に楕圓狀文(2連止め)	ヘラミガキ		7.5YR4/2 (灰褐)	完全実用	1区
9	壺	9.8	3.9	11.0		胴部に楕圓狀文(1.3A-1.3B-2連止め)。 口唇部に刻み	ヘラミガキ		7.5YR7/4(0.5) (赤)	完全実用 完全品	
10	壺	-	3.2	(8.8)		胴部上半に楕圓狀文。 胴部下半にヘラミガキ	ヘラミガキ		7.5YR7/2 (明灰)	完全実用	
11	壺	-	-	(23.3)		口縁部に楕圓狀文。 胴部に楕圓狀文(3連止め)	不明		7.5YR7/4(0.5) (赤)	出土実用	IV区
12	壺	-	3.4	(6.0)		ヘラミガキ	ヘラミガキ		7.5YR7/4(0.5) (赤)	完全実用	2
13	壺	-	6.8	(6.4)		ヘラミガキ	ヘラミガキ		5YR6/6 (褐)	完全実用	2
14	高杯	(24.3)	-	(5.9)		口縁部ナデ、ヘラミガキ、赤色塗彩	赤塗彩	赤塗彩	7.5R4/8 (赤)	同軸実用	3
15	高杯	(23.2)	-	(9.5)		ヘラミガキ、赤色塗彩	赤塗彩	赤塗彩	7.5R4/8 (赤)	同軸実用	1区
16	高杯	-	-	(5.0)		ヘラミガキ、赤色塗彩	赤塗彩	赤塗彩	7.5R4/8 (赤)	完全実用	7
17	高杯	-	(17.0)	(7.7)		ヘラミガキ、赤色塗彩	脚部ヘラミガキ		7.5R4/8 (赤)	同軸実用	10

No.	器種	素材	形状	長さ	最大径	重量	所見	出土位置
18	短先?	鉄製品	欠損	5R.0	26.0	13.70	一部折り曲がりが見られる。	Ⅱ区
19	不明	鉄製品	欠損	(13.2)		0.66		IV区
20	不明	鉄製品	欠損	(13.0)	(10.5)	0.99		IV区
21	小玉	ガラス	1/2球状	5.0	-	0.12	転	
22	小玉	ガラス	球形	2.9	3.2	1.4	青	1区
23	水皿(結晶片)	水皿	完形	27.6	8.6	11.5	3.10 両端部の縁部摩耗。ドリルとして使用された可能性あり	Ⅱ区
24	燧石	燧石	完形	98.0	69.0	27.0	269.00 下部先端に鋭き	1区
25	燧石一級石(砕石)	燧石	完形	40.2	205.0	115.0	1508.00 上面と側面一部に磨り、上部と下部先端に鋭き。特に下部は鋭き	
26	玉持ち石(砕石)	燧石	完形	75.0	45.0	28.0	148.60 両面に横方向の磨り、側面は鋭きな鋭き	
27	燧石	硬質燧石	完形	75.0	33.0	22.0	107.30 全体に磨りのあるような面で、つるつるしている	Ⅱ区
28	燧石	硬質燧石	欠損	128.0	81.0	58.0	(770.00) 上と先端に鋭き	2
29	燧石	硬質燧石	完形	53.0	14.0	5.0	8.00 上面に磨り	
30	燧石	燧石	欠損	102.0	59.0	30.0	246.00 上下先端部に鋭き	
31	曲柄鍬骨手鋸	炭化木製品	一部欠損	(47.4)	3.0		刃部最大長(26.3)、最大幅(8.8)、最大厚(2.0)	

第17表 H51号住居址出土遺物観察表

本址からの出土遺物は非常に多く、十器17点・鉄製品3点・ガラス小玉2点・石磨8点・炭化木製品1点を図示した。図示した土器の出土層位は5・11・16・17は覆土中でその他の十器は4が4cmほど床面より浮いていたが、ほぼ床面直上より出土している。出土位置としては、住居址南東コーナー付近よりまとまって出土した。1と2は壺である。1は壺口縁部で口唇部を折り返している。折り返された部分は赤彩が施されていない。2は口縁部に欠損する。赤彩が施され、頸部に楕圓狀文、楕圓狀文直下に楕圓狀文を施す。3は出口の短頸壺で、赤彩が施され頸部に幅の広い楕圓狀文が施されている。4~13は壺である。7のみやや頸部から口縁部が長く他の壺とは形態が異なる。7と9はほぼ完形であり、9は二次焼成の痕跡が明瞭であった。施文方法は5が楕圓狀文が施されている他は、頸部に楕圓狀文、口縁部と胴部に楕圓狀文がそれぞれ施されている。14~17は高杯の杯部と脚部である。いずれも赤彩が施されている。14は口縁部が鈎状に広がり、口唇部の一つの突起がある。15は口縁部が緩やかに外反する身の深い高杯杯部である。18~20は鉄製品である。18は断面が薄いレンズ状で、基部のみ両端が折曲げてある。側

先の二次利用品とも考えられるが確証を得ない。19と20は鉄板状の製品の一部と考えられるが種別の特定はできない。21と22はガラス小玉である。21は半分が欠損しており、色調は藍色に近い。出土位置は入り口施設のピット脇より出土した。22は1区の床面の土をふるいにかけて検出された。なお本址の床面上5cmの土はふるいにかけて。23は水晶の結晶体で、硬質の床部分を除去しているときに出土した。ドリルとして使用した可能性がある。24・28・30は磁石で、27と29は磨石である。26は手持ち砥石と考えられ、一部磨きの痕跡も確認できるが、側面に横方向の磨りが覗かれる。31は炭化木製品で種別は曲柄装着平砥と考えられる。先端部を欠損するがほぼ完形と考えられる。東壁際の壁溝にかぶるように入土した。出土した状態は盛り上がりつつある方が上となっていた。樹種はアサダである。また放射性炭素年代測定は交点AD30年を示した。(詳細は第3節参照)。

また本址は、床面上からおびただしい焼土炭化材が検出された。特に北壁側と南東コーナー付近は建築部材と考えられる大型の炭化材が出土した。これら炭化材はコナラが多く一部竹や檜であった。放射性炭素年代測定はBC10～AD240年を示した。これらの炭化材や焼土より本址は焼失住居址と考えられる。

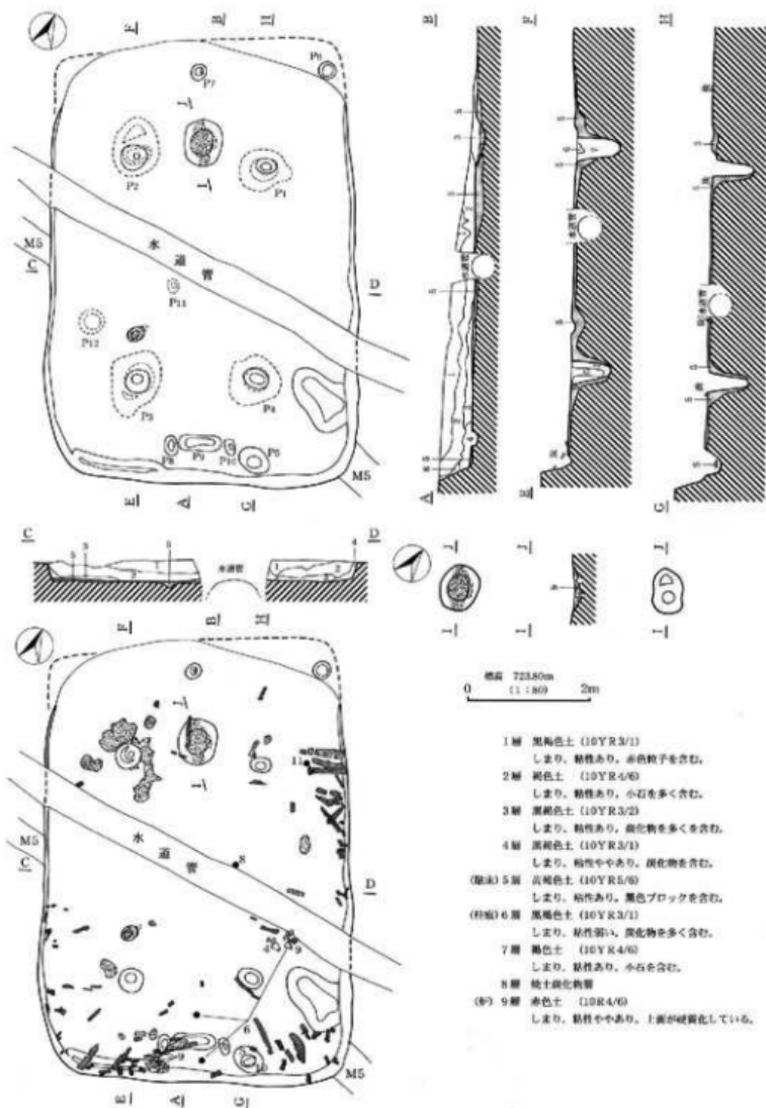
これらの出土遺物より、本址は弥生後期5段階に位置づけられる。

(51) H52号住居址 (第79.80.81図、写真図版四十二、四十三)

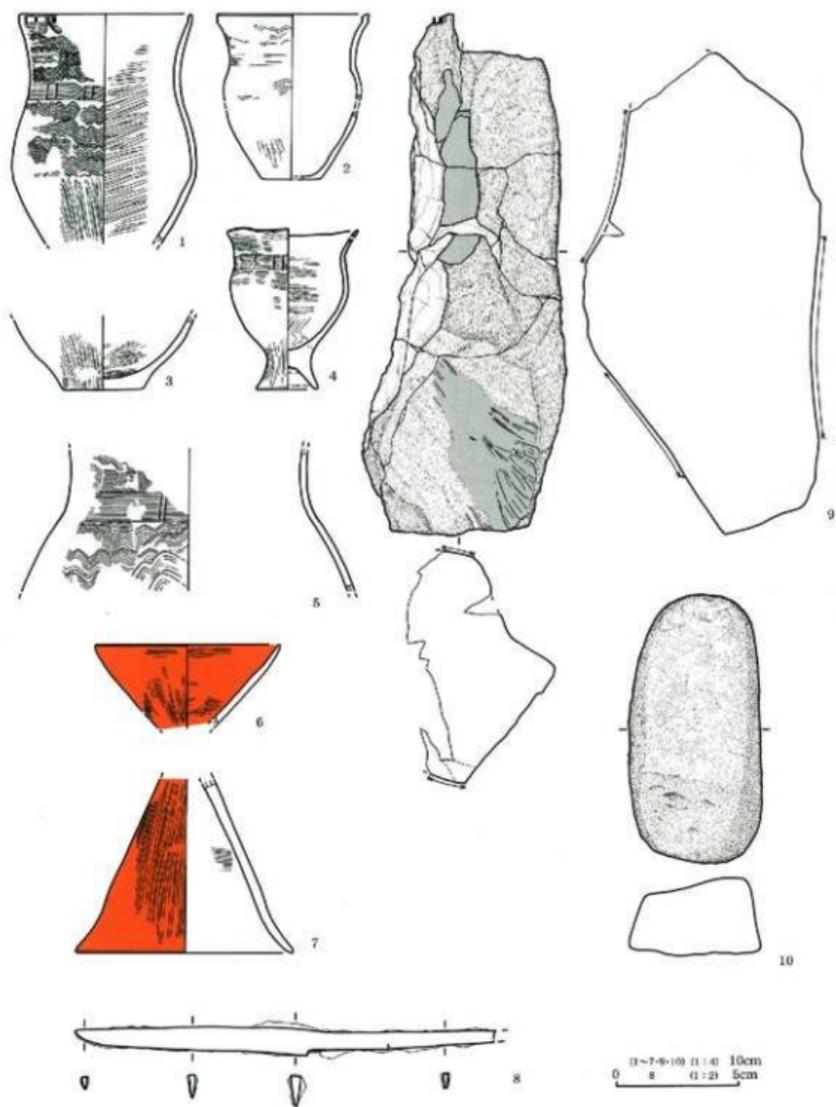
本住居址は、調査区東端の尾根上であるI-ヤ-34、I-ユ-33・34、I-ヨ-33・34Grに位置する。残存状態は住居中央部が水道管による破壊を受けており、北側は自然地形の傾斜により削平されている。形態は長方形を呈する。炉は住居址北壁よりに造られている。規模は北壁推定4.48m・南壁4.50m・西壁残存5.85m推定6.50m・東壁残存5.97m推定6.88mで、壁高さは南壁際で55cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-27°-Wを示す。床面積は残存で31.9㎡、推定で32.9㎡を測る。床は全体的に硬質で、全体に貼り床が確認された。床は厚いところで13cmを測る。覆土は柱穴・床も含め8層に分かれ、自然堆積の状態であった。壁溝は南壁の一部に確認された。規模は幅26～35cm・深さ1.5～3cmを測り、断面形状はU字形を呈する。ピットは掘り方時に検出されたものも含め12個検出された。規模はP1が径35cm・深さ69.5cm、P2が径42cm・深さ71cm、P3が径50cm・深さ64cm、P4が径42cm・深さ65cm、P5が径53cm・深さ29cm、P6が径28cm・深さ12.5cm、P7が径26cm・深さ29cm、P8が径33cm・深さ22.5cm、P9が径69cm・深さ11cm、P10が径27cm・深さ15.5cm、P11が径23cm・深さ23cm、P12が径41cm・深さ27cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴であり、P3には柱痕が確認された。P7が榎持ち柱と考えられる。P5

No.	品 種	材 質	成 形 ・ 測 量 ・ 文 様				色 調 備 考		出土位置
			外 面	内 面					
1	粟	(14.0)	—	(18.3)	口縁部と胴部に磨蝕痕状文。 胴部に磨蝕痕状文(2番止め?) 胴底下部へラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR7/4(赤い)	内転実測	IV区、前壁穴
2	粟	(12.4)	(5.8)	(13.1)	口縁部と胴部に磨蝕痕状文。 胴部に磨蝕痕状文? 胴底下部へラミガキ	不明	7.5YR8/4(浅黄緑)	内・外とも 磨面されている	IV区
3	粟	—	(6.5)	(5.6)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.5YR6/6(橙)	内転実測 外出、 磨面元れ	I区、IV区
4	付付粟	(10.5)	5.0	13.0	口縁部と胴部に磨蝕痕状文。 胴部に磨蝕痕状文(1番止め) 胴底へラミガキ	体部へラミガキ、 ナデ、磨蝕ナデ	7.5YR7/6(橙)	完全実測	
5	粟	—	—	(11.4)	口縁部と胴部に磨蝕痕状文。 胴部に磨蝕痕状文(2番止め)	不明	5YR6/6(橙)	同転実測 内面、 磨面元れ	IV区
6	鉢	15.0	—	(5.8)	ヘラミガキ、赤色染布	ヘラミガキ、赤色染布	10R4/8(赤)	完全実測 内・外とも 磨面されている	III区、IV区
7	漆片	—	(17.6)	(11.1)	ヘラミガキ、赤色染布	ハケ目	10R4/8(赤)	内転実測 内面、磨面元れ	IV・III区
No.	品 種	材 質	検出数	最大径	最大厚	備 考	所 在	出土位置	
8	刀子	鉄製品	1	(17.0)	11.0	19.20		15	
9	磨石(黒砥石)	砂質凝灰岩	欠片	420.0	165.0	192.0 105.0 100.0	砥石遺物は三箇。特に「青」は凹状にすりへる。磨面によるわれあり	3	
10	台石?	砂岩	形状	218.0	106.0	62.0 2320.0	内転実材を縦割りにした車材でせらみ		
11	磨製石斧	石英閃緑岩	形状	144.0	64.0	32.0	590.00 全体に磨削痕が残る。刃部に磨蝕痕があり刃こぼれあり		
12	磁石(スプーン状)	輝石玄武岩	形状	65.0	75.0	15.0	78.10 下部先端に磨き、スプーン状にけぼり	II区	
13	片断	焼製砂岩	形状	224.0	155.0	31.0	1610.00 割片素材の辺りに方寸おし加へによる方部を形成する	III区	

第48表 H52号住居址出土遺物観察表



第79図 H52号住居址実測図



第80图 H52号住居址出土器物实测图(1)

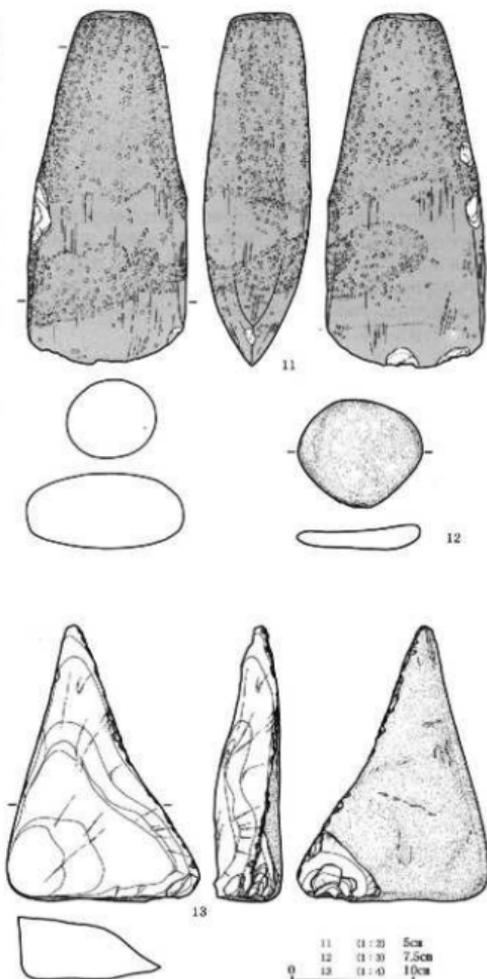
が貯蔵穴。P8とP10が入り口施設と考えられる。この二つのピットのピットは楕円形で、このピット間にはH51号住居址と同じく、柱穴間をつなぐ溝状のP9が確認された。ただ、P9はP8とP10に接していない。また、東壁際には不整形の土坑が確認された。規模は長軸118cm・深さ14.5cmを測る。

が住居北よりのP1とP2間に検出された。形態は楕円形であり、規模は長軸77cm・短軸62cmで、焼土の厚みは10cmを測り、焼土は良く焼けて硬質化していた。また、住居址南西側には補助的ながと考えられる焼土範囲が検出された。焼土は良く焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は比較的多く、土器7点・鉄製品1点・石器5点を図示した。図示した土器の出土層位は4と6はほぼ床面直上で、1は貯蔵穴内、その他は覆土中の出土である。1～5は壺である。4のみ小型の台付壺でほぼ完形であった。施文方法はいずれも頸部に櫛描縷状文、口縁部と胴部に櫛描波状文を施す。6と7は高杯の坏部と脚部である。いずれも赤彩が施されている。8は刀子である。住居址の中央部分の床面より15cm程浮いた状態で出土した。柄部先端を欠損するがほぼ完形品である。本品の形態は古代の範疇に属すると考えられ、混入品と判断すべき出土品であるが、出土状況から一概に混入とすべきか判断に迷う。また、弥生時代の刀子についても出土例からすると、本品も全くあり得ない形態ではなく、今回の出土品の位置づけは保留したい。9は大型の置き砥石であり、住居址南壁際から破砕した状態で出土した。接合の結果、一部欠落する部分もあるがほぼ形態は把握できた。砥面は三面が確認できた。10は台石と考えられ、貯蔵穴内より出土した。11は磨製石斧で住居址の東壁側床面より出土した。ほぼ完形で、被熱した様な痕跡がある。柄装着側は二次加工のためやや湾曲した細身になっている。

12はスプーン状の石で中央部がやや窪んでいる。13は大型の刃器で自然面を残す。一面に刃潰し加工のような刃部を形成する。

また、本址は面上からおびただしい焼土炭化材が検出された。特に東壁側と南壁側付近に多く、建築部材と考え



第81図 H52号住居址出土遺物実測図(2)

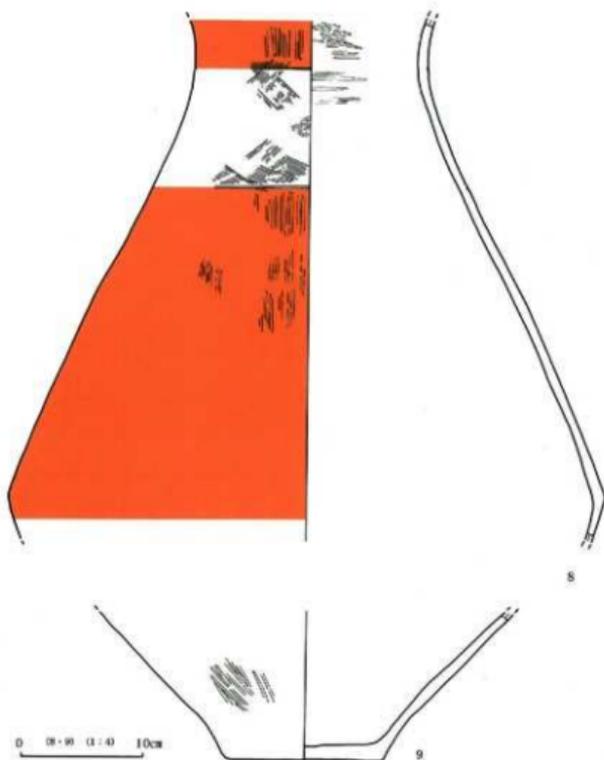
られる大型の炭化材も出土した。これら炭化材は住居中央部に向かって延びる物が多く、屋根材としての使用が考えられる。樹種はコナラが多く一部榎やブナがあった。放射性炭素年代測定はBC100～AD130年を示した。これらの炭化材や焼土より本址は焼失住居址と考えられ、出土遺物より、本址は弥生後期に位置づけられる。

(52) H53号住居址 (第82.83図, 写真図版四十四)

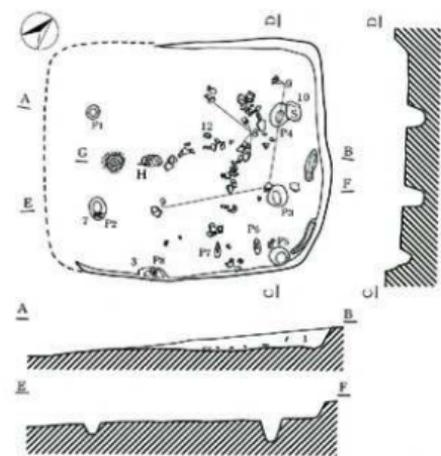
本住居址は、調査区東端の尾根上であるE-I-39、E-U-38・39、E-E-39Grに位置する。残存状態は自然の傾斜により西側が剛平されている。形態は長方形を呈する。伊は住居址西壁より造られている。規模は北壁残存2.60m推定4.23m・南壁残存3.67m推定3.93m・西壁推定3.36m・東壁3.54mで、壁高さは東壁路で13cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-43°-Eを示し、本遺跡中では珍しく東西に長軸をもつ住居址である。床面積は残存で11.9㎡、推定で15.8㎡を測る。床は全体的に軟質で、地山を踏み固めたような状態であった。覆土は単層で自然堆積の状態であった。壁溝は東壁と南壁の一部に確認された。規模は幅8～17cm・深さ1～6cmを測り、断面形状はU字形を呈する。ピットは8個検出された。規模はP1が径22cm・深さ21.5cm、P2が径36cm・深さ17.5cm、P3が径36cm・深さ35.5cm、P4が径38cm・深さ31cm、P5が径31cm・深さ19.5cm、P6が径25cm・深さ17.5cm、P7が径20cm・深さ13cm、P8が径48cm・深さ7cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴であり、P5が貯蔵穴、P6とP7が入り口施設と考えられる。この二つのピットは楕円形であった。

伊は住居西よりのP1とP2間に検出された。形態は円形であり、規模は径41cmで、焼土の厚みは7cmを測り、焼土は良く焼けており硬質であった。また、伊の東側には補助的な伊と考えられる焼土範囲が検出された。形態は楕円形で、焼土は良く焼けていた。

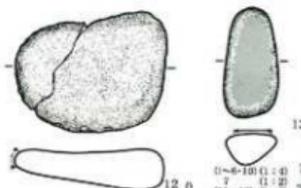
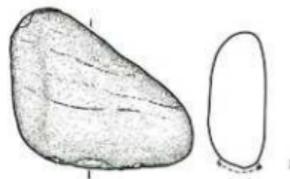
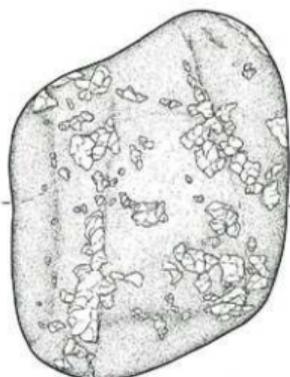
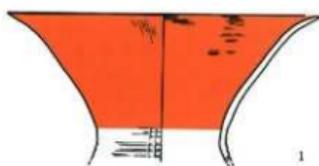
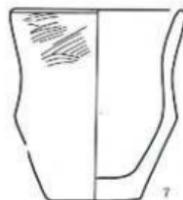
本址からの出土遺物は多く、住居址全体から出土した。これら土器群は東壁に近くなるに従い床から浮き、住居中央部は床面に近かった。この事からこれらの土器は、住居埋没過程で東側より流れ込んだものと考えられる。1は意口縁部である。頸部に櫛描縞文、内外面に赤彩を施す。2も意の口縁部であり、頸部近くに篋描横線文を施す。無彩である。3は高坏で、脚部は兩壁の取溝の中より出土した。全面赤彩が施され、脚部に篋描横線文3本が施されている。4と5は甕の底部破片で



第82図 H53号住居址出土遺物実測図(2)



- 1層 赤褐色土 (10YR3/1)
 しまり、粘性あり、黄色の粘土ブロックを少量含む。
 (2) 2層 赤色土 (10R4/6)
 しまりあり、上面層状化している。
 3層 赤色土 (10R5/6)
 しまり、粘性あり、粘土がよく凝っている。



第83図 H53号住居跡及び出土遺物実測図(1)

(53) H54号住居址 (第84回, 写真版四十五)

本住居址は、調査区東端の尾根上であるJ-YO-1、J-ラー-1・2、I-ラー-40Grに位置する。残存状態は自然の傾斜により西側が削平されている。形態は長方形を呈する。炬は住居址西壁よりに造られている。規模は北壁残存1.11m推定3.37m・南壁残存1.15m推定3.20m・西壁推定3.00m・東壁3.02mで、壁高さは東壁際で13.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-48°-Eを示し、本遺跡中ではH53号住居址と同じく東西に長軸をもつ住居址である。床面積は残存で3.6㎡、推定で11.0㎡を測る。床は全体的に軟質で、地山を踏み固めたような状態であった。覆土は層厚で自然堆積の状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは7個検出された。規模はP1が径22cm・深さ29cm、P2が径20cm・深さ21.5cm、P3が径16cm・深さ22cm、P4が径17cm・深さ17cm、P5が径24cm・深さ13cm、P6が径34cm・深さ23cm、P7が径43cm・深さ20.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴と考えられるが他の住居址と異なり壁際のピットである。P5が貯蔵穴、P6とP7が入り口施設と考えられる。この二つのピットは楕円形であった。

炬は住居西側よりに検出された。形態は円形であり、規模は径32cmで、焼土の厚みは5cmを測り、焼土は良く焼けており硬質であった。また、東壁側には炭化物が検出された。

本址からの出土遺物は非常に少なく、3点の土器と1点の石を图示した。1は小型の甕でP5内より出土した。頸部に縞縞状文、口縁部と胴部に縞縞状文を施す。2も甕で口縁部の破片である。3は壺底部と考えられるが、器面の摩耗が激しく確認を得ない。4は磨石で片面に顕著な擦りが確認できる。

これらの出土遺物より、本址は弥生後期に位置づけられる。

No.	品名	法 量			形 態	測 定 文 様	色 調	備 考	出土位置	
		(口縁部)	(胴部)	(底)						
1	甕	12.5	5.1	13.1	口縁部と胴部上半に縞縞状文。 胴部下半ハラスガキ 胴部に縞縞状文(10本1道1道止め)	ハラスガキ 赤色顔料付替	7.5YR6/2 (灰赤)	完全実用	P5	
2	甕	(18.0)	-	(6.5)	縞縞状文(10本1道1道止め)	不明	5YR7/6 (黄)	胎土実用	1区	
3	壺	9.3	-	(9.8)	ナシ	不明	7.5YR7/6 (黄)	完全実用	1区	
4	磨石	砂岩	石研	残存率	長径長	短径長	厚身厚	表面	出土位置	
				元形	47.0	38.0	7.0	16.50	断面に縞縞状文あり	2

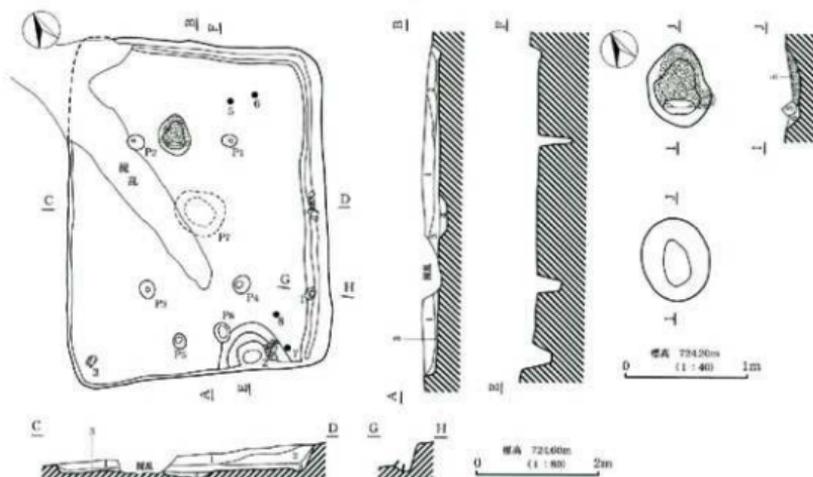
第50表 H54号住居址出土遺物観察表

(54) H55号住居址 (第85回, 写真版四十六)

本住居址は、調査区東端の尾根上であるI-メ-34・35、I-モ-34~36、I-ヤ-35Grに位置する。本址は後家山遺跡の中で標高で最高位に位置する住居址である。残存状態は北西コーナー部が傾地の境溝により削平されているほかは良好である。形態は歪な長方形を呈する。炬は住居址西壁よりに造られている。規模は北壁残存3.20m推定3.67m・南壁3.90m・西壁残存4.02m推定5.62m・東壁4.97mで、壁高さは東壁際で37.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-24°-Eを示す。床面積は残存で3.6㎡、推定で11.0㎡を測る。床は全体的に硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。覆土は4層に分れ自然堆積の状態であった。壁溝は東壁と北壁に確認された。規模は幅20~45cmで深さ1.5~10cmを測る。断面形状はU字形を呈する。ピットは6個検出された。規模はP1が径25cm・深さ53.5cm、P2が径28cm・深さ57cm、P3が径31cm・深さ39.5cm、P4が径30cm・深さ43cm、P5が径25cm・深さ45cm、P6が径32cm・深さ44cm、P7が径83cm・深さ15cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴、P5とP6が入り口施設と考えられる。また、P7は硬質の床下から確認された。形態は不整形であり、床下土質的な性格とも考えられる。貯蔵穴は住居址南東コーナー部で検出された。貯蔵穴の周りには床面より僅かに高くなる周堤帯的な盛り上がり確認できた。規模は穴部分が長軸47cm・短軸44cmで深さは33.5cmを測る。

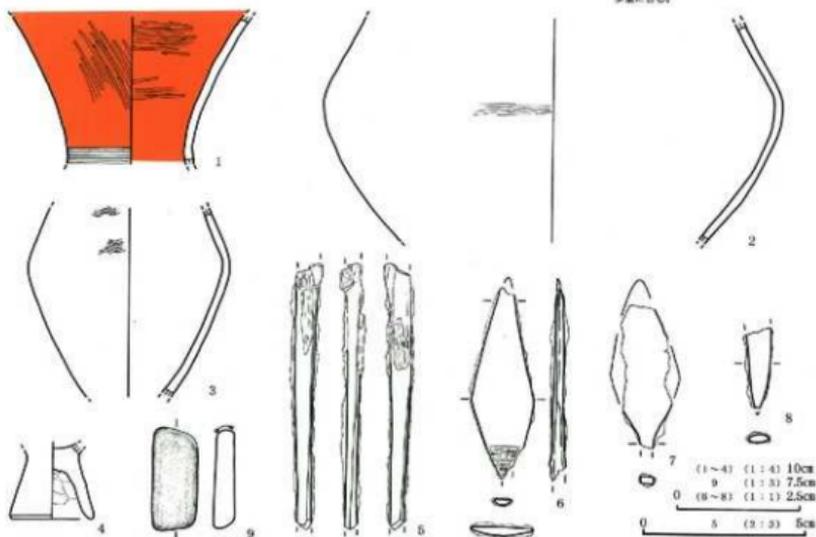
炬は住居北よりのP1とP2間で検出された。形態は楕円形であり、炬石が1点検出された。規模は長軸68cm・短軸55cmで、焼土の厚みは8cmを測り、焼土は良く焼けており硬質であった。また、東壁側には炭化物が検出された。

本址からの出土遺物は土器・石器等は少なかったが、鉄製品が4点出土した。图示した土器4点の出土層位は1~3がほぼ床面直上で4は覆土中からの出土である。1は壺口縁部の破片で赤彩が施されている。頸部に縞縞状文と考えられる施文がある。2は形態から甕胴部破片と考えられるが確認を得ない。3は甕の胴部で一部に縞縞状文が確認できる。4は小型の台付甕の脚部である。5~8は鉄製品である。出土層位はいずれも床面に張り付く様な状態であった。5は鉄鏃の茎部分か或いは鋳・雜器の一部と考えられる。断面は長方形で一部ねじれが認められる。6と7は鉄鏃の鏃身部であり、両方とも菱形を呈する。特に7は鏃身部は推定が大きいものの有茎の鉄鏃と考えられ、弥生後期に



1層 三色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。小石を多量に含む。炭化物を微量に含む。
 2層 褐色土 (10YR4/6) しまり、粘性あり。小石、土団粒を含む。
 3層 黒褐色土 (10YR2/2) しまり、粘性あり。炭化物、焼土粒子を微量に含む。

4層 暗褐色土 (10YR4/3) しまり、粘性あり。
 (9) 5層 赤色土 (10R4/6) しまり、粘性あり。上部は硬質化しており、よく固けている。
 6層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性あり。灰色粘土ブロックを多量に含む。



第85図 H155号住居址及び出土遺物実測図

中部・関東を中心に広がる無茎の五角形や三角形の鉄鏃とは形態を異にする。なお5と6は出土位置も近く、或いは同一個体の可能性がある。8は断面円形で先細りの鉄製品で種別は不明である。9はみがき石と考えられる。これらの出土遺物より、本址は弥生後期に位置づけられる。

No.	器種	法量		成形・調整・文様		色調	備考	出土位置	
		口縁径(丸底形)	底径(円)	外面	内面				
1	漆	-	-	(11.8)	口縁部ヘラミガキ、赤色塗彩、胴部に櫛波状文様	赤塗り、赤色塗彩	7.5R4/8 (木)	完全素製	
2	漆	-	-	(18.0)	ヘラミガキ	木肌	7.5R7/4(木)	口縁先塗	
3	漆	-	-	(13.5)	胴部に櫛波状文	木肌	5YR5/6 (木)	口縁先塗	
4	付付漆	-	(6.8)	(6.2)	ナデ	ヘラミガキ	2.5YR6/6 (木)	口縁先塗	
No.	器種	素材	現存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所収	出土位置
5	鉄鏃・遺す	鉄製品	両面欠損	(7.5)	6.0		5.90		
6	鉄鏃	鉄製品	欠損	(8.8)	12.5		2.30	柄杓倉庫が一部に確認できる。	
7	鉄鏃	鉄製品	欠損	(8.3)	9.0		1.90		
8	不明	鉄製品	欠損	(15.0)	5.0		0.40		
9	磨石(みがき石)	硬質砂岩	欠損	63.0	14.0	36.0	44.30	上層先層に散り	東区味通

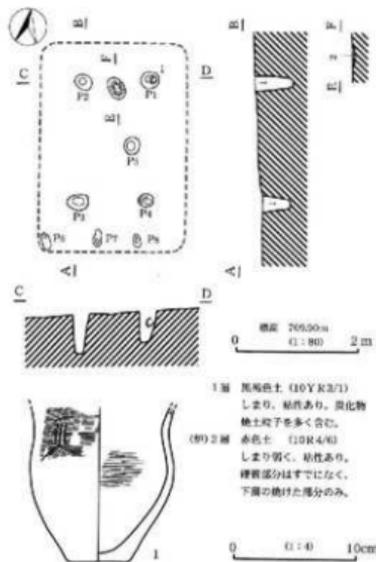
第51表 H55号住居址出土遺物観察表

(55) H56号住居址 (第86図, 写真図版四十七)

本住居址は、調査区中央部の尾根上であるFーヒー11、Fーフー11Grに位置する。現存状態は壁等はすべて削平され炉とピットのみの残存である。形態は長方形を呈すると考えられる。炉は住居北壁よりに造られている。規模は北壁推定2.25m・南壁推定2.24m・西壁推定3.25m・東壁推定3.25mを測る。主軸方位はN-8°-Wを示す。床面積は推定で8.1㎡を測る。ピットは8個検出された。規模はP1が径30cm・深さ50cm、P2が径29cm・深さ43.5cm、P3が径35cm・深さ46cm、P4が径25cm・深さ50cm、P5が径28cm・深さ10.5cm、P6が径29cm・深さ7cm、P7が径28cm・深さ5cm、P8が径22cm・深さ12.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴、P7とP8が入り口施設と考えられる。

炉は住居北よりのP1とP2間で検出された。形態は楕円形であり、規模は長軸37cm・短軸25cmで、焼土の厚みは4cmを測り、焼土は良く焼けていたが軟質であった。

本址からの出土遺物は図示した土器がP1より出土したのみであった。1は口縁部を欠損した甕で、口縁部と胴部に櫛波状文、頸部に波状文と同じ施文具によると考えられる3列1組の刺突が観られる。本址は出土遺物が少なく不確実であるが、弥生後期に位置づけられると考えられる。



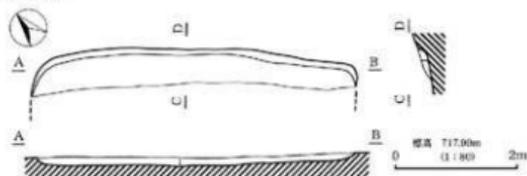
第86図 H56号住居址及び出土遺物実測図

No.	器種	法量		成形・調整・文様		色調	備考	出土位置
		口縁径(丸底形)	底径(円)	外面	内面			
1	甕	-	4.7	(12.4)	口縁部と胴部に櫛波状文(平位不明) 頸部に波状文の工具による刺突(3列1組)	ヘラミガキ	10YR7/4(2.5)黄緑	完全素製 内・外とも 器面焼けている

第52表 H56号住居址出土遺物観察表

(56) H61号住居址 (第87図, 写真図版四十八)

本住居址は、南朝調査区の中央部上段であるJーユ-36・37、Jーヨ-37Grに位置する。残存状態は自然地形の傾斜と畑作による段造成により東西壁と南壁が削平されており、北壁が残存するのみである。形態は方形を呈すると考えられるが不明。規模は北壁5.13m・西壁残存0.45m・東壁残存0.32mで、壁高さは北壁より19cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。床面積は残存で2.3㎡を測る。覆土は自然堆積の様相を示す。床は軟質であった。壁溝やピットは確認されていない。



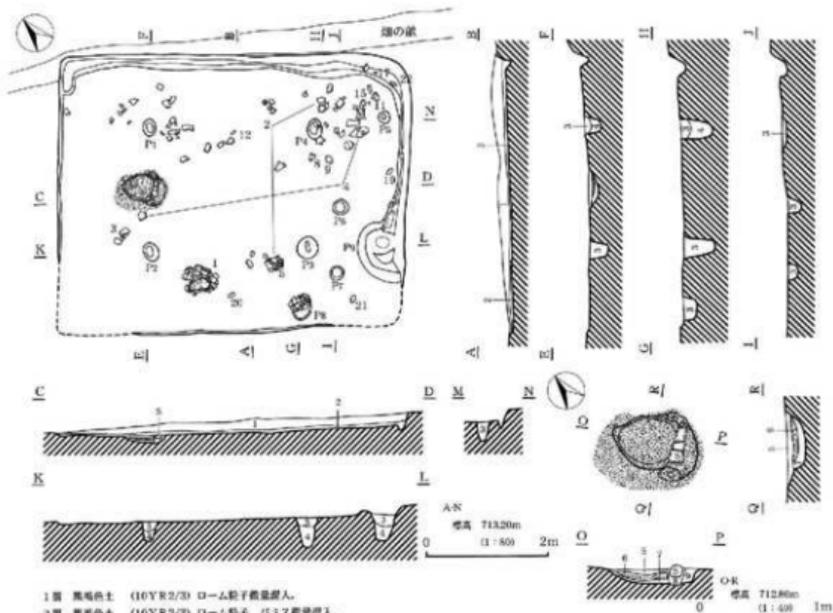
1層 黒褐色土 (10YR2/3) 小石、炭化物少量混入。

第87図 H61号住居址実測図

本址からの出土遺物は非常に微量で、内時期の推測できるものは波状文が施された甕片が少量あった。よって、不確定であるが本址は弥生後期に位置づけられると考えられる。

本址からの出土遺物は非常に微量で、内時期の推測できるものは波状文が施された甕片が少量あった。よって、不確定であるが本址は弥生後期に位置づけられると考えられる。

(57) H62号住居址 (第88.89.90図, 写真図版四十九五十)



1層 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子微量混入。

2層 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子、パリス軟炭混入。

3層 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子少量、炭化物微量混入。

4層 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子少量混入。

5層 暗赤褐色土 (5YR3/3) 炭多量混入。炭化物、粘土粒子微量混入。

(6) 6層 暗赤褐色土 (5YR3/6) 強土。硬質化している。

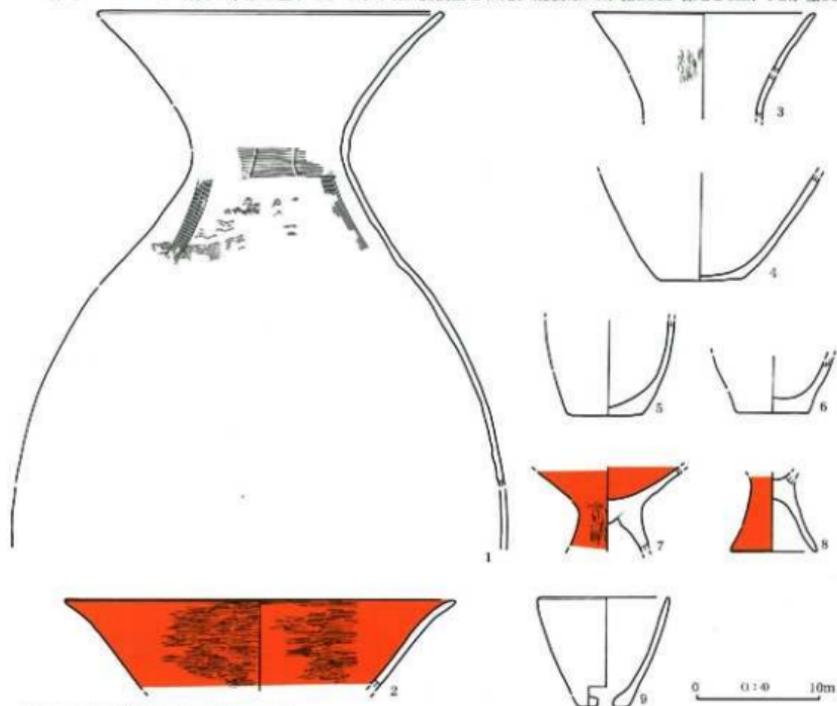
7層 暗赤褐色土 (5YR3/4) 粘土粒子多量、炭化物少量混入。

8層 暗赤褐色土 (5YR3/2) 炭化物、粘土粒子少量混入。

9層 灰褐色土 (5YR4/2) ローム粒子、炭化物混入。

第88図 H62号住居址実測図

本住居址は、南側調査区の西端であるF-ケー-37・38、F-ケー-37・38、F-コー-37・38Grに位置する。残存状態は南東及び南西コーナーが自然地形の傾斜により削平されている。形態は長方形を呈する。炉は住居址西よりに造られている。規模は北壁5.50m・南壁残存3.38m推定5.50m・西壁残存3.34m推定4.45m・東壁残存3.64m推定4.15mで、壁高さは北壁よりで19cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-49°-Wを示す。床面積は残存で23.1㎡、推定で24.1㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて5層に分れ、自然堆積の状態であった。床の残存部分は非常に硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は東壁の一部と北壁側に検出された。規模は16~43cm・深さ1~18cmで、断面U字形を呈する。ピットは8個検出された。規模はP1が径28cm・深さ24cm、P2が径32

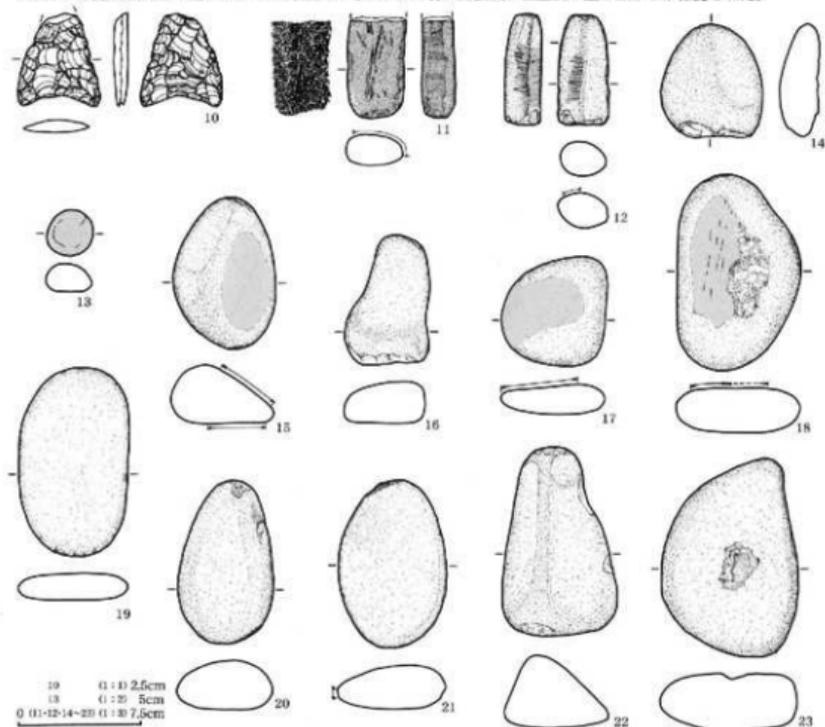


第89図 H62号住居址出土遺物実測図 (1)

No.	品種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		色 調	備 考	出土位置
		口徑(φ)	幅(幅)	高さ(高)	外 面	内 面			
1	土	(28.1)	-	(38.5)	後部上半部造反(文、部部造反文、部部造反文(1部造反))		不明		10YR7/4(2.25・黄)
2	土	(31.7)	-	(7.3)	ヘラミ型牛、赤色塗彩		不明		10R4/8 (赤)
3	土	(18.2)	-	(8.7)	ヘラミ型牛		不明		7.5YR7/6 (橙)
4	土	-	7.1	(8.4)	不明		不明		7.5YR7/4(2.25・橙)
5	土	-	8.2	(7.7)	不明		不明		7.5YR4/1 (黄)
6	土	-	5.9	(4.6)	不明		不明		5YR6/6 (橙)
7	土	-	(5.8)	(5.7)	ヘラミ型牛、赤色塗彩		不明		10R4/8 (赤)
8	土	-	(7.1)	(5.7)	不明、黒色塗彩		不明		10R4/8 (赤)
9	土	(10.7)	4.1	9.0	不明		不明		7.5YR7/6 (橙)

第53表 H62号住居址出土遺物観察表 (1)

cm・深さ30cm, P3が径36cm・深さ49cm, P4が径33cm・深さ50cm, P5が径20cm・深さ31cm, P6が径25cm・深さ22cm, P7が径23cm・深さ18cm, P8が径40cm・深さ23cm, P9が径56cm・深さ44cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主住穴で、形態は楕円形を呈する。P9は貯蔵穴と考えられ、特に床面側に土塁状の盛り上がりが確認された。



第90図 H62号住居址出土遺物実測図(2)

No.	品名	素材	保存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
10	苧藁片断	砂岩	先端欠損	119.0	17.0	3.0	1.00		層上内
11	手持ち砥石+磨石	砂岩		86.0	35.0	15.0	60.00	正面に巻物の残る磨り、後面に広い磨跡の残り、下縁先端に鋭き	
12	手持ち砥石+磨石	砂岩	変形?	67.0	30.0	23.0	50.00	磨りにより内側面に成形、横方向の巻物の残る磨り、上下先端は	7
13	みがき石	砂岩質石灰岩	完整	15.0	19.0	11.5	6.00	磨きにより両面を磨き	IV区
14	磨石	凝灰岩	完整	60.0	62.0	34.0	106.00	下部に磨着な磨き	IV区
15	磨石+磨石	砂岩	完整	92.0	62.0	35.0	267.00	両面に磨り、上下先端に鋭き	
16	磨石	砂岩質砂岩	完整	78.0	48.0	25.0	152.00	上下先端に磨着な磨き	II区
17	磨石	安山岩	完整	67.0	63.0	19.0	130.00	正面に磨り	
18	磨石+磨石	砂岩	完整	119.0	73.0	27.0	414.00	正面に磨り、正面と上部先端と右側面に鋭き	一底
19	磨石	砂岩	完整	114.0	66.0	16.0	190.00	左側面と下部先端に磨き	
20	磨石	砂岩	完整	99.0	58.0	30.0	236.00	上下先端と下部に磨き	
21	磨石	砂岩質砂岩	完整	102.0	65.0	27.0	197.00	上下先端および両面に磨き	
22	磨石	砂岩	完整	115.0	70.0	44.0	445.00	上下先端に磨き	
23	磨石	砂岩	完整	120.0	82.0	35.0	494.00	正面中央部にこぼみ状の磨き	IV区

第54表 H62号住居址出土遺物観察表(2)

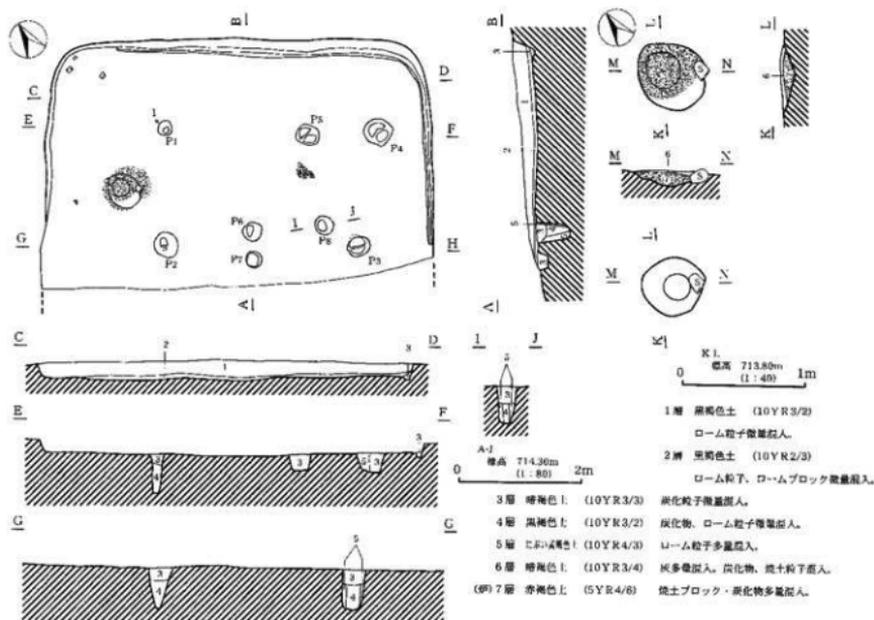
炉は住居址西よりのP1とP2間に検出された。形態は楕円形であり、炉石が1点検出されている。規模は長軸90cm・短軸62cmで焼上の厚さは15cmを測る。焼土は良く焼けており硬質化していた。本住居の炉址は顕著な掘り込みが確認され、炉石部分に關しても一度掘りこんだ部分に石を設置している様子が、土層の断面観察から確認されている。

本址からの出土遺物は非常に多く、床面全体に広がっていた。土器9点、石器14点を図示した。出土層位は4の瓮と12の手持ち砥石は7~9cm床よりも浮いた状態で、10・13・14・18・23は覆土内から出土し、それ以外はほぼ床面直上からの出土である。1は壺の口縁部から胴部であり、住居址南側の床面上から潰れた状態で出土した。頸部の上段に櫛描波状文、下段に櫛描波状文と櫛描垂下文の組み合わせを二段施文する。器面は荒れているが、無彩である。2は高坏坏部で赤彩が施されている。3は壺の口縁部で無彩である。4~6は甕の胴部下半から底部であり、いずれも器面が荒れていて調整は不明である。7と8は高坏脚部と坏部と脚部の接合部でいずれも赤彩が施されている。9は単孔の甕であり、孔の部分が他の甕に比べ大きい。10は円基石で先端が欠損している。11と12は手持ち砥石で、11は長軸方向に細かな擦痕があり、12は横方向に短く擦痕が確認できる。13はみがき石で全体につるつるしている。14・16・19~23は敲石である。18と23は中央部に敲きによる窪みが形成され、凹石的である。その他の敲石は上下先端部を敲き部として使用している。

本址はこれらの出土遺物より、弥生後期と位置づけられる。

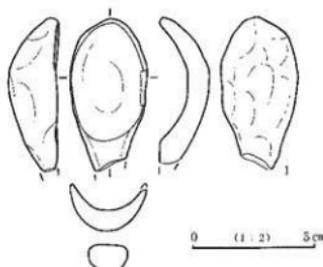
(58) H63号住居址 (第91.92図, 写真図版五十一)

本住居址は、南側調査区の西よりであるF-U-40、F-E-39・40、F-O-40、Q-U-1、Q-E-1Grに位置する。残存状態は南側を畑作による耕作で削平されている。形態は長方形を呈する。炉は住居址西よりに造



第91図 H63号住居址実測図

られている。規模は北壁5.68m・南壁推定6.36m・西壁残存3.78m・東壁残存3.35mで、壁高さは北壁よりで36cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-58°-Wを示す。床面積は残存で23.4㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて6層に分れ、自然堆積の状態であった。床の残存部分は非常に硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は東壁の一部と北壁側に検出された。規模は9~28cm・深さ1~6cmで、断面U字形を呈する。ピットは8個検出された。規模はP1が径23cm・深さ62cm、P2が径43cm・深さ69cm、P3が径38cm・深さ64cm、P4が径44cm・深さ33cm、P5が径37cm・深さ36cm、P6が径32cm・深さ52cm、P7が径28cm・深さ15cm、P8が径33cm・深さ60cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴で、P5~P8は補助的な柱穴と考えられる。



第92図 H63号住居址出土遺物実測図

炉はP1とP2間より西にずれた位置に検出された。形態はほぼ円形であり、元位置は失われていると考えられる。欠損した炉石が1点検出されている。規模は径61cmで焼土の厚さは9cmを測る。焼土は良く焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は少なく、住居中央部と北西コーナー部にやや床面より浮いた状態で少量の土器片が出土した。図示した土製品はスプーンと考えられる。柄を欠損しており、P1脇の床面より9cm浮いた状態で出土した。

本址は出土遺物が少なく、不確定要素もあるが土器片はいずれも弥生後期を示すものであり、これらの出土遺物より、弥生後期と位置づけられると考える。

No.	器種	造 景			形 態・測 量・文 様		色 調	備 考	出土位置
		口径(長)	底径(短)	底高(厚)	外 面	内 面			
1	ミコニチャア巻	(62)	3.1	1.2	不明	ナシ		破片実測	9

第55表 H63号住居址出土遺物観察表

(59) H64号住居址 (第93図, 写真図版五十二)

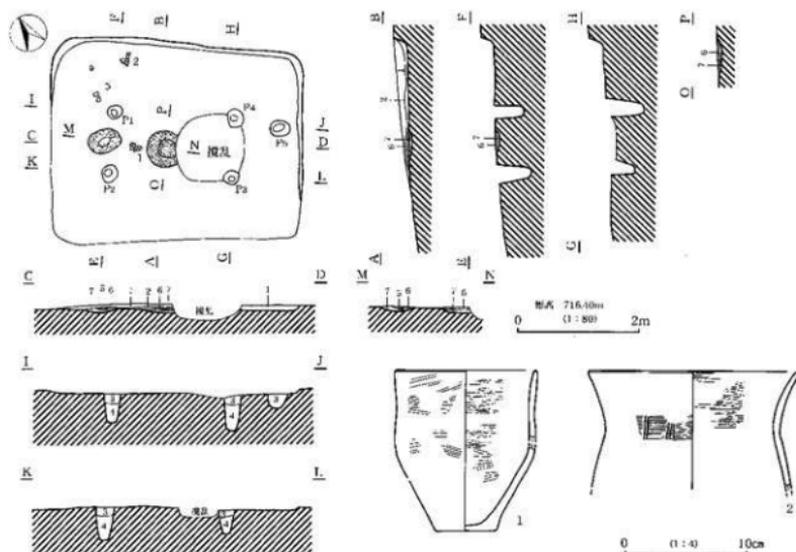
本住居址は、南側調査区の東よりであるK-ム-2、K-ム-1・2Grに位置する。残存状態は住居中央部が攪乱により一部削平、南側が自然地形の傾斜により削平されていたが、住居址床面の範囲ではほぼ全容を把握できた。形態は長方形を呈する。炉は住居址西よりと中央に2カ所確認された。規模は北壁3.90m・南壁3.84m・西壁3.10m・東壁2.86mで、壁高さは北壁よりで19.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-59°-Wを示す。床面積は12.4㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて4層に分れ、自然堆積の状態であった。床は硬質で地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは5個検出された。規模はP1が径25cm・深さ44cm、P2が径30cm・深さ55.5cm、P3が径27cm・深さ39cm、P4が径30cm・深さ60cm、P5が径32cm・深さ23cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴で、P5が入り口施設と考えられる。

炉は2カ所に検出された。まず、P1とP2間の炉は形態が楕円形であり、規模は長軸53cm・短軸38cmで焼土は良く焼けており硬質化していた。また、住居址中央部の炉はほぼ円形で、規模は長軸59cm・短軸45cmで、焼土の厚さ5cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は少なく、住居址中央部と北西コーナー部にやや床面より浮いた状態で少量の上器片が出土し

No.	器種	造 景			形 態・測 量・文 様		色 調	備 考	出土位置
		口径(長)	底径(短)	底高(厚)	外 面	内 面			
1	変	(11.6)	4.9	(3.1)	口縁部と胴部に條線刻文(平位不明)	ヘラミガキ	10YR7/4(赤褐色)	上部(口縁部)、下部(全変遷) 同上で合成	2
2	変	(17.0)	-	(9.5)	帯引に帯線刻文(2連止め)	ヘラミガキ	7.5YR7/6(緑)	口縁部も内・外とも磨面されている	7

第56表 H64号住居址出土遺物観察表



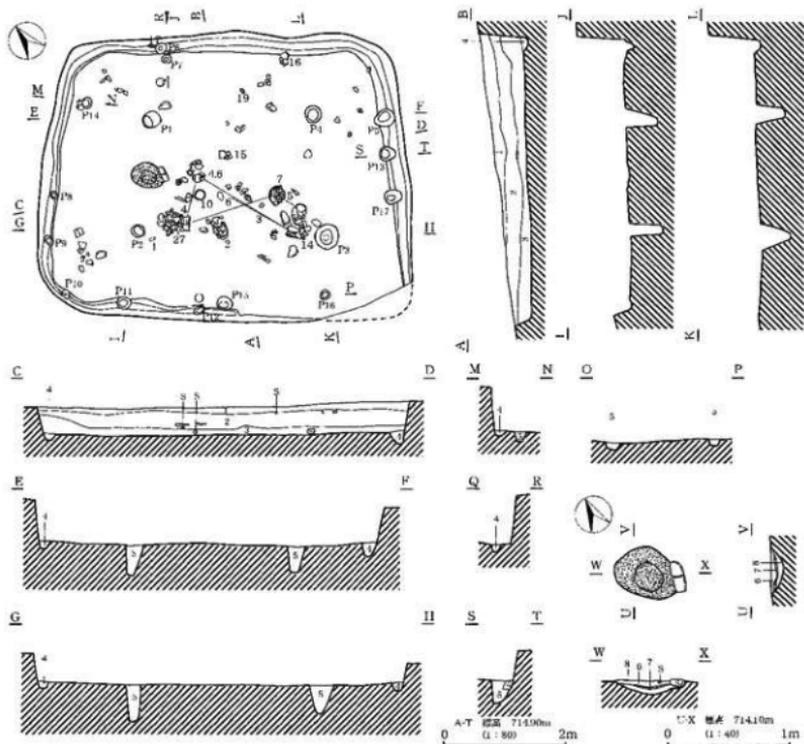
- 1層 黒褐色土 (10YR2/2) 11-12μ粒子微少混入
 2層 灰褐色土 (10YR2/3) ローム粒下、炭化灰下、焼土粒子微少混入
 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物少量、焼土粒子微量混入
 4層 暗褐色土 (10YR2/3) ローム粒子少量混入
 5層 灰褐色土 (5YR4/2) 灰多量混入
 (R) 6層 暗褐色土 (5YR2/4) 炭化物少量、焼土多量、硬い
 7層 暗褐色土 (5YR2/3) 炭化物、焼土粒子少量混入

第93図 I164号住居址及び出土遺物実測図

た。図示した1と2の出土層位は1が床面より2cm、2が7cm浮いた状態で出土した。1は小型の甕で器向が荒れているため詳細は不明であったが、一部に御指斜土文が確認できた。2は甕の口縁部から胴部で、頸部に櫛描縞状文を施す。本址は出土遺物が少なく、不確定要素もあるが土器片はいずれも弥生後期を示すものであり、これらの出土遺物より、弥生後期と位置づけられると考える。

(60) H65号住居址 (第94.95.96.97図, 写真図版五十三・五十四)

本住居址は、南側調査区の東よりであるK-メ-3・4、K-モ-3~5、K-ヤ-3・4Grに位置する。残存状態は住居南東コーナーが一部自然の地形により削平されている他は良好である。形態は東西方向に長軸を持つ長方形を呈する。炉は住居址西よりに確認された。規模は北壁5.04m・南壁残存4.45m推定5.72m・西壁3.96m・東壁残存3.83m推定4.30mで、壁高さは北壁よりで81cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-53°-Wを示す。床面積は残存で24.5㎡、推定で24.9㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて4層に分れ、自然堆積の状態であった。床は非常に硬質で特に入り口部分が堅く踏みしめていた。取溝は南壁の一部を除いて全周していた。規模は幅13~40cm・深さ16cmで、幅のある壁溝であった。ピットは17個検出された。規模はP1が径30cm・深さ50cm、P2が径20cm・深さ52.5cm、P3が径38cm・深さ46cm、P4が径26cm・深さ43cm、P5が径35cm・深さ20cm、P6が径18cm・深さ14.5cm、P7が径15cm・深さ13.5cm、P8が径14cm・深さ13cm、P9が径17cm・深さ13.5cm、P10が径15cm・深さ16.5cm、P11が径22cm・深さ15cm、P12が径18cm・深さ14.5cm、P13が径26cm・深さ37.5cm、P14が径17cm・深さ17cm、P15が径26cm・深さ11.5cm、P16が径16cm・深さ9.5cm、P17が径28cm・深さ39cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が土柱穴で、P13とP17が入り口施設と考えられる。その他は壁際の小柱穴と考えられるが、規則的な配列は南西コーナー部分だけである。



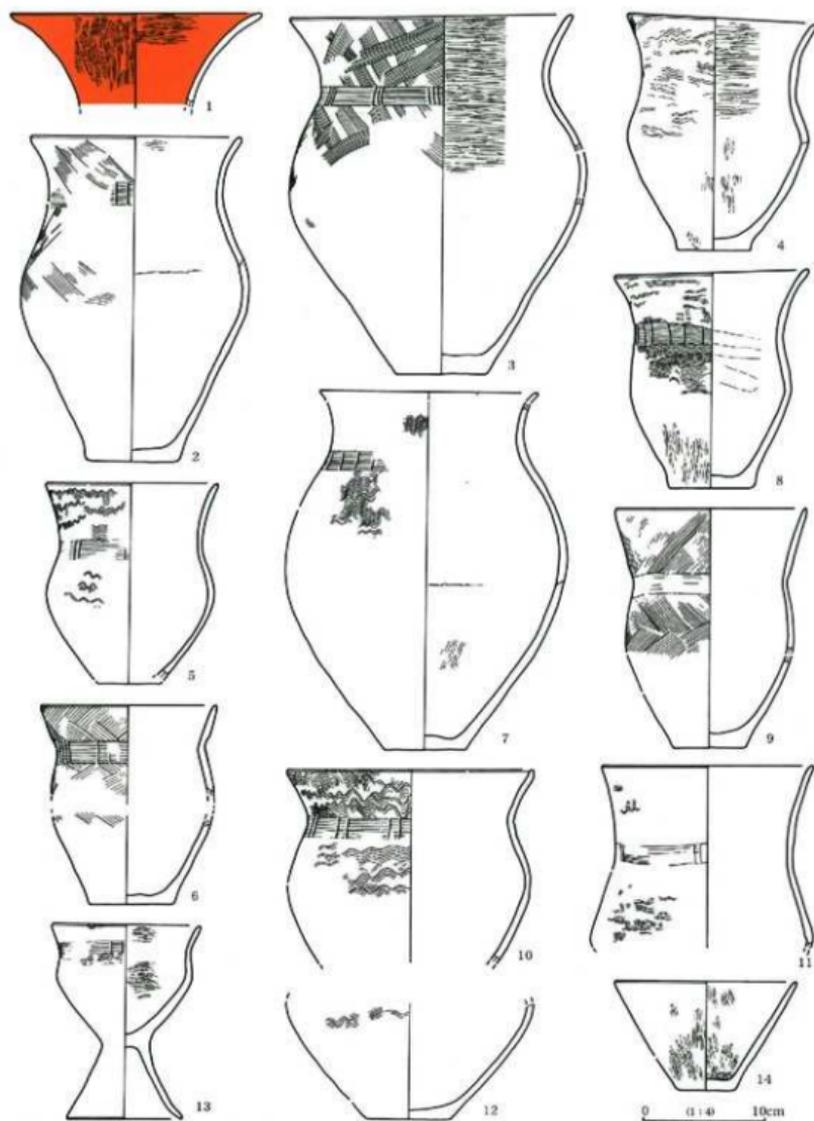
- 1層 黒褐色土 (10YR3/1) D-ム粒子、炭化物微量混入
 2層 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物、焼土粒子少量混入
 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物、ローム粒子少量混入
 4層 黒褐色土 (10YR3/0) 炭化物少量混入

- 5層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物、D-ム粒子少量混入
 6層 暗褐色土 (5YR2/0) 粘土炭化物多量混入少量の灰を含む
 (b) 7層 赤褐色土 (5YR3/6) 焼土が非常に硬い層
 8層 赤褐色土 (5YR3/2) 炭化物、焼土粒子少量混入

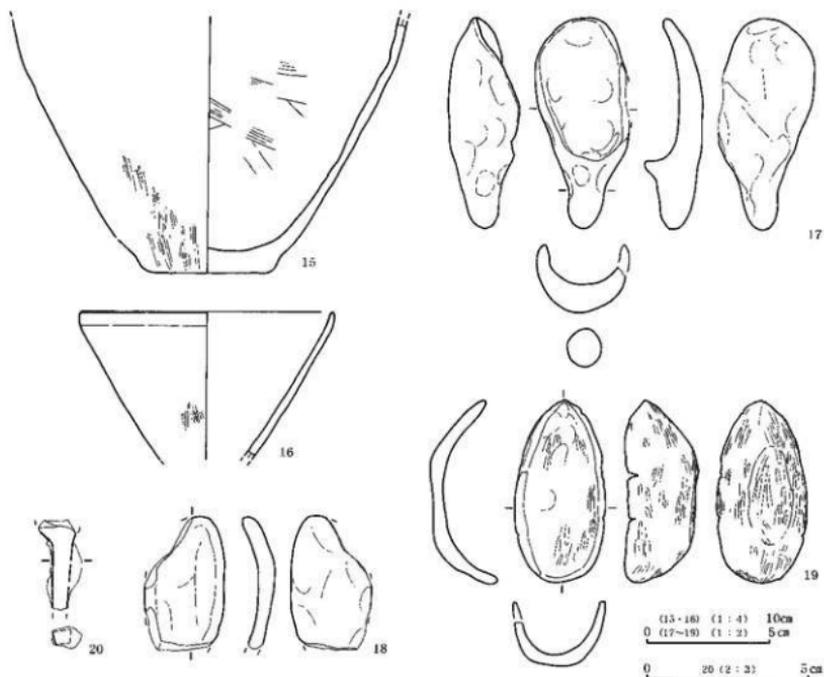
第94図 I165号住居址実測図

炉はP1とP2間に検出された。形態が楕円形であり、住居址中央側に炉石が1点確認された。炉石は中央部で割れていたが、ほぼ元位置を保っていると考えられる。規模は長軸54cm・短軸39cmで焼土は良く焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は非常に多く、特に住居址中央部から床面よりやや浮いた状態でまとまって出土した。図示した遺物は土器16点、ミニチュアの上製品が3点、鉄製品1点、石器14点である。1は壺の口縁部と考えられる。P2脇の床面より6cmほど浮いた状態で出土した。2～12は甕である。特に2～9は欠損部分があるがほぼ全容を把握できる資料である。出土層位は、3～6はほぼ床面直上から、2・7・10は床面よりも17～24cm浮いた状態で出土した。施文方法は3タイプで、まず頸部に櫛描縞状文を施し、口縁部と胴部に櫛描斜走文或いは羽状文を施す物が2・3・6・9、次に頸部に櫛描縞状文を施し、口縁部と胴部に櫛描波状文を施すものが5・7・8・10・11である。そして、11縁部から胴部にかけて櫛描波状文のみというものが4である。これらの甕は施文により器形が変化するというより、



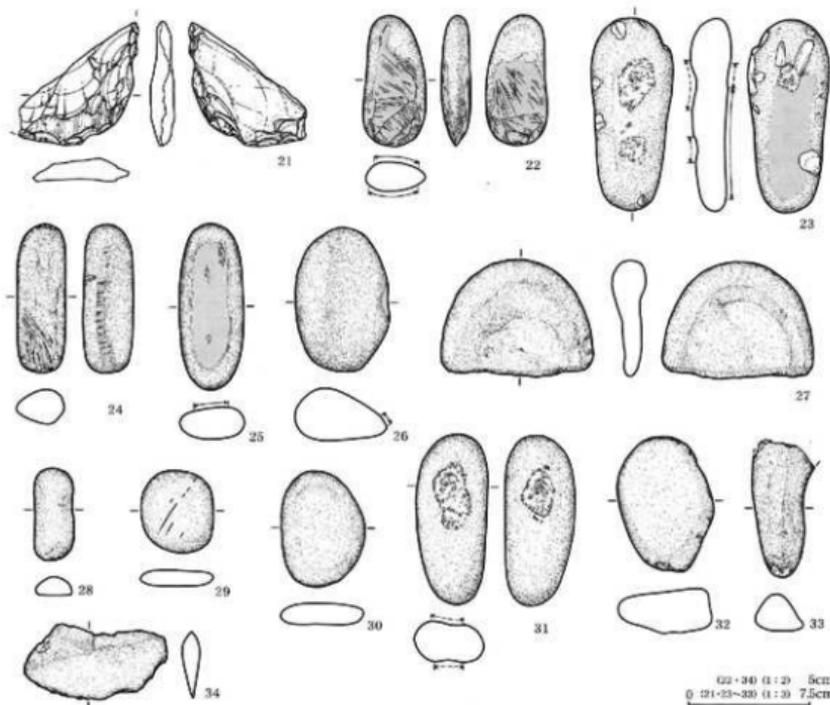
第95图 H65号住居址出土遗物实测图(1)



第96図 H65号住居址出土遺物実測図(2)

No.	種類	径			成形・調整・文様		色 調	備 考	出土位置
		口徑(全)	底径(全)	縁高(取)	外 面	内 面			
1	蓋	(20.5)		(7.7)	黑色地部		10R4/8 (赤)	同転写測	6
2	蓋	(17.2)	7.5	28.5	胴部に線刻羽状文、口縁部に縞縞斜走文、底部に縞縞底文(2連止め)		7.5YR7/6 (橙)	完全実測	24
3	蓋	22.9	7.3	29.2	口縁部と胴部上半に縞縞羽状文、底部縞縞底文(9本1組)、底部に縞縞底文(9本1組2連止め)		7.5YR7/4 (赤黄)	完全実測	
4	蓋	15.7	6.1	18.9	口縁部と胴部下半に縞縞底文、胴部ト平ヘラミガキ		7.5YR6/2 (灰黄)	完全実測	
5	蓋	(14.0)	-	(16.1)	口縁部と胴部上半に縞縞底文、底部縞縞底文(2連止め)	不明	7.5YR7/4 (赤黄)	同転写測	II区
6	蓋	14.3	(6.9)	(15.2)	口縁部と胴部上半に縞縞羽状文、底部縞縞底文(9本1組2連止め?)		7.5YR7/6 (橙)	完全実測	底点、I区、II区
7	蓋	(16.5)	6.6	29.2	口縁部と胴部に縞縞底文、底部に縞縞底文(1連止め)、底部に縞縞底文(1連止め)		7.5YR8/4 (浅黄)	完全実測	19
8	蓋	15.8	6.9	17.5	口縁部と胴部上半に縞縞底文、胴部ト平ヘラミガキ		7.5YR5/2 (灰黄)	完全実測	II区
9	蓋	(15.6)	5.9	(19.5)	胴部上半に縞縞羽状文、口縁部に縞縞斜走文、底部に縞縞底文?	不明	5YR6/8 (橙)	完全実測	I区、II区、III区

第57表 H65号住居址出土遺物観察表(1)



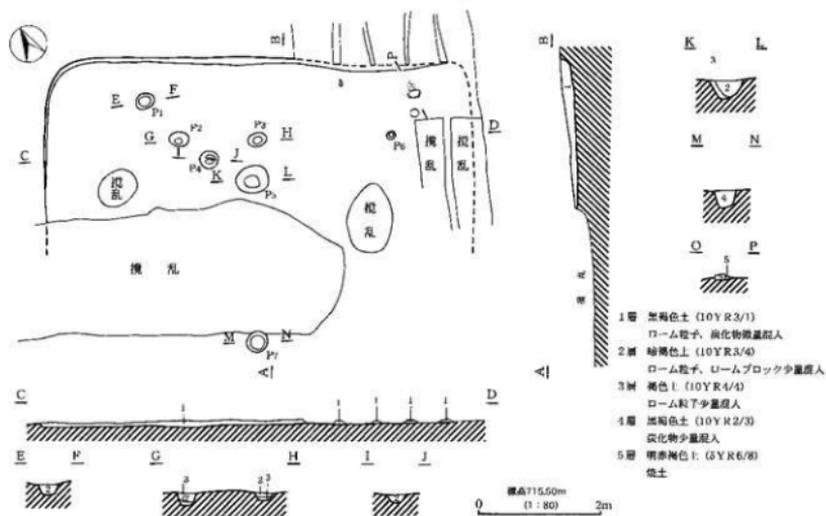
第97図 H65号住居址出土遺物実測図(3)

法量により変化するようで、3・7・10といった大型のものは胴部が丸く張り、小型の物は最大径が口縁部に有するという特徴が指摘できる。13は台付甕で頸部に細溝状文、胴部に細横波状文を施す。14と16は鉢と考えられ、14は床面より3cm浮いた状態で、16は31cm浮いた状態で出土した。15は壺の胴部下半で、床面より23.5cm浮いた状態で出土した。17～19はミニチュアの土製品で17と18が匙で、17はほぼ完形、18は柄の部分が大欠損している。いずれもよく似た作りで、所謂「れんげ」状の形態を呈する。19が平面楕円形の舟形状を呈する土製品である。床面より15cm浮いた状態で出土した。片側に片口を意識した作りがあり、鉢の変形とも考えられる。一部赤彩らしき痕跡が指摘できるが、後期の箱清水式土器に行われる典型的な「赤」色ではなく、オレンジ色に近い「橙」色である。20は鉄製品で層土中からの出土である。鉄鏝柄とも考えられるが詳細不明である。21は打製石斧の刃部断片であり、縦方向の摩耗が顕著に観察できる。22は磨製石斧のミニチュアと考えられる。強い研磨により刃部を造りだし、側面と上部は自然面を残す。23～25は磨石と礫石の両方の機能を兼ね備える石器であるが、使用痕跡には差異がある。23は棒状の礫の最大面に2カ所のくぼみ状の敲き痕が顕著に残る。24と25は先端部上下に敲き痕があり、長辺の最大面は磨面として使用している。なお24は手持ち礫石の可能性もある。26・27・29は磨石である。27は磨面は不明確であるが、他の住居址出土のスプーン状の石に似るため掲載した。28・30～33は礫石で、31のみ最大面を使った窪み状の敲きである。その他の礫は端部上下の敲きである。34は剥片素材を使った刃器と考えられる。横刃型で刃こぼれの痕跡が確認できる。

これらの出土遺物より、本址は弥生後期に位置づけられる。

No.	器種	法		成形・調整・文様	内面	色調	備考	出土位置	
		口径(長)	底径(短)						
10	甕	20.0	(15.6)	口縁部と胴部上半に帯輪状文 胴部に帯輪状文(本1起2迄止め)	ヘラミガキ	75YR7/4(0.23-3)色	完全実測	Ⅱ区 17	
11	甕	17.2	(14.0)	口縁部と胴部に帯輪状文 胴部に帯輪状文(位置止め)	不明	75YR4/1(黄灰)	完全実測	Ⅱ区	
12	甕	6.7	(9.5)	胴部に帯輪状文	不明	25YR6/8(橙)	完全実測	Ⅱ区	
13	台付甕	12.1	9.3 15.8	口縁部と胴部に帯輪状文 胴部に帯輪状文、胴部不明	ヘラミガキ	5YR6/8(橙)	完全実測	Ⅰ区、Ⅱ区 Ⅲ区	
14	鉢?	(14.8)	4.8 8.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5YR6/6(橙)	完全実測	3	
15	鉢	10.7	(20.6)	ヘラミガキ	ハケ月の残るナデ	5YR7/6(橙)	完全実測	23、5	
16	鉢	(20.6)	(12.1)	ヘラミガキ	不明	75YR7/6(橙)	完全実測	31	
17	鉢	8.6 (3.4)	2.2	指頭作意	指頭作意	7.5YR7/4(0.23-4)色	焼片実測	破溝から57	
18	鉢?	(5.5)	(3.2)	(0.7)	指頭作意	指頭作意	10YR7/4(0.23-4)色	焼片実測	Ⅱ区
19	ミニチュア?	7.5	3.7	0.7	指頭作意、ヘラミガキ	指頭作意、ヘラミガキ	10YR6/7(0.23-4)色	焼片実測	15
No.	器種	素材	現存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
20	角打	鉄製品	両面欠損	(27.0)	10.9		1.40		Ⅲ区
21	打製石片	安山岩	刃部欠損	70.0	77.0	14.3	59.40	刃部下部厚部研磨	Ⅲ区
22	磨製石片	琉球岩	完形	53.0	24.0	12.0	21.40	下部に研磨による刃部をつくり出す、未使用?	Ⅱ区
23	磨石+磨石	砂岩	欠損	117.0	49.0	25.0	166.30	両面に磨き、裏面に磨り、一面に金属片による傷?	Ⅲ区
24	磨石+磨石	砂岩	完形	90.0	29.0	21.0	75.10	正面縦方向の全面、裏面・横方向の磨り、上下先端に磨き	Ⅲ区
25	磨石+磨石	砂岩	完形	101.0	39.0	20.0	103.50	正面に磨り、上下先端に磨き	Ⅲ区
26	磨石	輝石安山岩	完形	88.0	66.0	32.0	222.00	全面一部のみ磨り	Ⅱ区
27	磨石?	砂岩	欠形?	70.0	92.0	21.0	153.40	両面を研ぎ捨て中央部をくぼまし成形?	?
28	磨石	凝灰岩	完形	56.0	22.0	11.0	21.00	下部先端に磨き	Ⅰ区
29	磨石?	砂岩	完形	50.0	49.0	10.0	31.10	全面あり、磨り石?	Ⅱ区
30	磨石	砂岩	欠形	170.0	60.0	13.0	62.10	下部先端に磨き	Ⅰ区
31	磨石	砂岩	欠形	103.0	42.0	24.0	132.20	両面上部中央に磨き	Ⅱ区
32	磨石	凝灰砂岩	完形	82.0	57.0	28.0	195.40	上下先端に磨き	Ⅱ区
33	磨石	砂岩	欠損	(84.0)	(30.0)	23.0	(82.90)	下部先端に磨き	Ⅱ区
34	磨石?	凝灰砂岩	欠形?	58.0	31.0	7.0	11.70	割片素材を使い、刃部をつくり出す、刃こぼれあり	Ⅲ区

第58表 H65号住居出土土遺物観察表(2)



第98図 H66号住居址実測図

(61) H66号住居址 (第98図, 写真図版五十二)

本住居址は、南側調査区のほぼ中央であるJーヨ-40、Jーラ-39・40、Jーリ-39・40、Kーラ-1Grに位置する。残存状態は東側を耕作による畑の故で、南側を擾乱によって削平されている。形態は長方形と考えられる。伊は北東コーナー近くで確認された。規模は北壁残存5.04m推定6.53m・西壁2.47mで、壁高さは北西コーナーよりで19cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-61°-Wを示す。床面積は残存で18.1㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて4層に分れ、自然堆積の状態であった。床はやや軟質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは6個検出された。規模はP1が径32cm・深さ17.5cm、P2が径31cm・深さ21cm、P3が径31cm・深さ13.5cm、P4が径31cm・深さ15.5cm、P5が径54cm・深さ33cm、P6が径34cm・深さ26cmを測る。ピットの検出位置はいずれも不規則な配置であり、主柱穴や入り口部を確定できなかった。

伊は住居址の北東コーナー部に確認された。形態は不整形で、規模は幅28cmで焼土の厚みは4cmを測る。また、矽石と考えられる礫が1点確認されたが元位置は失われている。

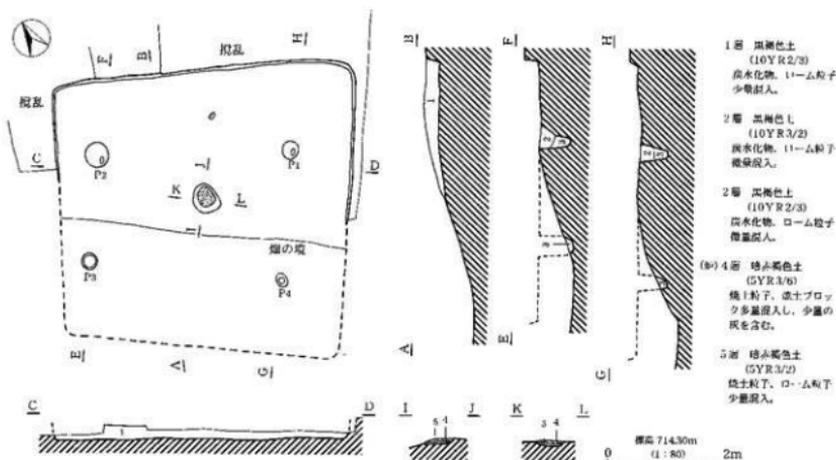
本址よりの出土遺物は非常に少なく図示できるものはなかったが、周辺部の遺構の広がりから弥生後期に位置づけられると考えられる。

(62) H67号住居址 (第99図, 写真図版五十五)

本住居址は、南側調査区のほぼ中央であるKーヨ-2・3、Kーラ-2・3、Kーリ-2・3Grに位置する。残存状態は南側を耕作による畑の境で削平されている。形態は方形と考えられる。伊は住居址中央で確認された。規模は北壁4.85m・南壁推定4.33m・西壁残存2.54m推定3.94m・東壁残存2.56m推定4.73mで、壁高さは北壁際で24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-60°-Wを示す。床面積は残存で12.5㎡、推定で21.0㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて3層に分れ、自然堆積の状態であった。床はやや軟質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは4個検出された。規模はP1が径30cm・深さ48.5cm、P2が径40cm・深さ46cm、P3が径27cm・深さ11.5cm、P4が径24cm・深さ19.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴と考えられる。

伊は住居址の中央部に確認された。形態は不整形、規模は長軸48cm・短軸40cmで焼土の厚みは5cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址よりの出土遺物は非常に少なく図示できるものはなかったが、周辺部の遺構の広がりから弥生後期に位置づけられると考えられる。

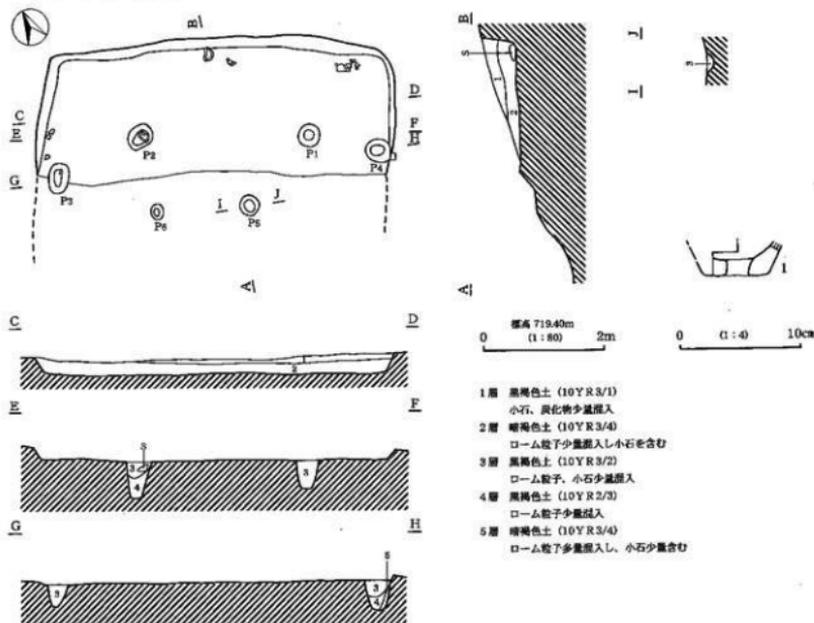


第99図 H67号住居址実測図

(63) H68号住居址 (第100図, 写真図版五十五)

本住居址は、南側調査区の東よりであるJ-ヘ-39・40、J-ホ-39・40、J-マ-39・40Grに位置する。残存状態は南側を耕作による畑の境で削平されている。形態は方形と考えられる。炉は確認されなかった。規模は北壁5.50m・西壁残存2.94m・東壁残存2.14mで、壁高さは北壁際で59.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面積は残存で11.6㎡、推定で16.0㎡(P5・P6南側範囲まで)を測る。覆土は柱穴まで入れて5層に分れ、自然堆積の状態であった。床はやや軟質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは6個検出された。規模はP1が径38cm・深さ48.5cm、P2が径44cm・深さ61cm、P3が径50cm・深さ40cm、P4が径43cm・深さ51cm、P5が径35cm・深さ13.5cm、P6が径26cm・深さ12cmを測る。ピットの検出位置よりP1・P2・P5・P6が支柱穴、P4が入り口施設、P3が棟持ち柱と考えられる。本址よりの出土遺物は非常に少なく、壁際に赤彩された壺片が少量出土した。図示できたものは単孔の甕が1点のみであった。覆土中からの出土である。

これらの事より不確実ではあるが、本址は弥生後期に位置づけられると考える。



第100図 H68号住居址及び出土遺物実測図

No.	層様	法		量		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		色 調	備 考	出土位置
		口(縦長)	底(縦短)	高さ(厚)	容積	外 面	内 面			
1	甕	-	5.3	(2.5)	不明			7.5YR7/4(G・G・地)	完全実測	IV区

第59表 H68号住居址出土遺物観察表

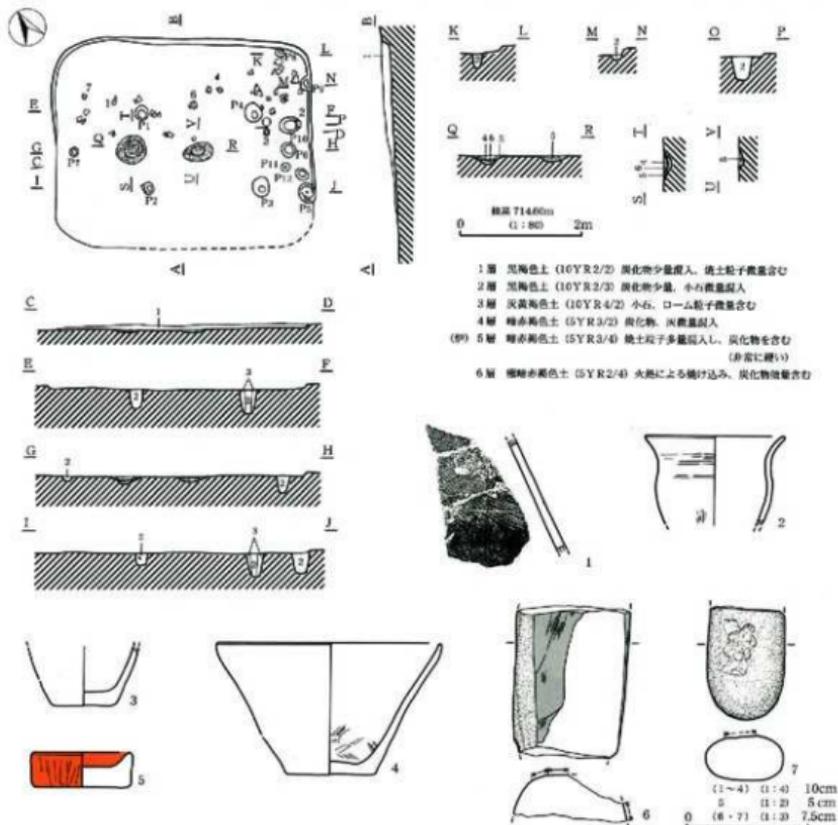
(64) H69号住居址 (第101図, 写真図版五十六)

本住居址は、南側調査区のほぼ中央であるF-ア-40、F-イ-40、Q-ア-1、Q-イ-1Grに位置する。残存状態は南側が自然地形の傾斜により削平されている他は良好である。形態は長方形と考えられる。炉は住居址中央と西よりで確認された。規模は北壁3.93m・南壁残存1.23m推定3.87m・西壁2.91m・東壁残存2.72m推定3.02

mで、壁高さは北壁際で18.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-59'-Wを示す。床面積は残存で12.9m²、推定で13.5m²を測る。覆土は柱穴まで入れて4層に分れ自然堆積の状態であった。床はやや軟質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは12個検出された。規模はP1が径24cm・深さ25.5cm、P2が径19cm・深さ21.5cm、P3が径32cm・深さ37.5cm、P4が径31cm・深さ41.5cm、P5が径33cm・深さ30cm、P6が径23cm・深さ26.5cm、P7が径14cm・深さ7.5cm、P8が径15cm・深さ24cm、P9が径22cm・深さ8cm、P10が径32cm・深さ39cm、P11が径14cm・深さ12cm、P12が径22cm・深さ27cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴で柱痕が確認できた。P6とP10は入り口施設、P7が棒持ち柱、P5が貯蔵穴と考えられる。

炉は住居の中央部と西よりに2カ所確認された。まず西よりの炉の形態は円形で、規模は径49cmで焼土の厚みは12cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。次に中央部の炉は形態が楕円形で、規模は長軸47cm・短軸30cmで、焼土の厚みは9cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址よりの出土遺物はやや多く、住居北側半分に小破片で床面に広がっていた。図示したものは土器5点と石器2



第101図 H69号住居址及び出土遺物実測図

点である。1は壺の胴部破片であり、出土層位は床面直上である。施文は櫛描羽状文の後、篋描直線文が施されている。無彩である。2と3は小型壺の口縁部と底部であり、出土層位はいずれもほぼ床面直上である。2は頸部に施文があるが荒れて不明瞭である。4は無彩の鉢であり、口唇部がやや内湾する。出土層位は覆土中である。5はミニチュアの土製品で、器種は鉢と考えられ、内外面に赤彩が施されている。出土層位は覆土中である。6は手持ち砥石の破片と考えられ、砥面は2面が確認できる。出土層位は床面より10cm浮いた状態で出土した。7は砥石で、出土層位は床面より5cm浮いた状態で出土した。

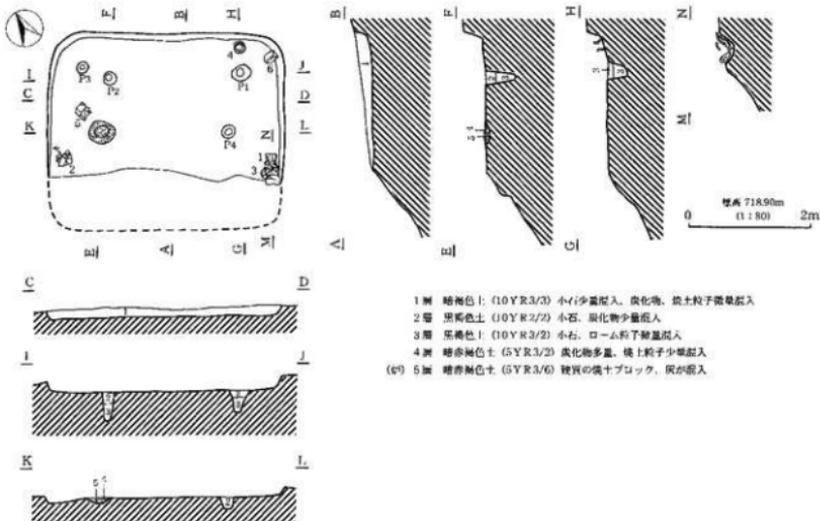
これらの出土遺物より本址は弥生後期に位置づけられる。

No.	器種	土質別(底形編)	底径(φ)	成形・調製・文様		色測	備考	出土位置
				外面	内面			
1	壺	-	φ6.6(4)	底面に櫛描羽状文の後、篋描直線文 ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR7/4(0.5)地	断面実測 粘土	
2	壺	(11.0)	-	(7.2) 頸部に櫛描直線文か? 下部ヘラミガキ、 他は不明	不明	7.5YR7/4(0.5)地	貝輪実測	
3	壺		5.1	(4.7) 不明 底部付着ヘラミガキ	不明	7.5YR6/3(0.5)地	完全実測	
4	鉢	(18.3)	7.2	不明	ヘラミガキ、ハケ目	10YR8/4(浅黄褐色)	完全実測	
5	ミニチュア	(4.1)	(4.0)	1.5	ヘラミガキ、赤色塗彩	2.5YR4/8(赤黄)	断面実測	IVK
6	砥石	砂岩		欠損	残存率 92.0% 最大径 68.0mm 最大厚 27.0mm (258.00g)	正面向二面の磨り、仕上げ砥石的		10
7	砥石	砂岩		欠損	残存率 69.0% 最大径 47.6mm 最大厚 27.0mm (127.50g)	上面と下面光面に磨き		5

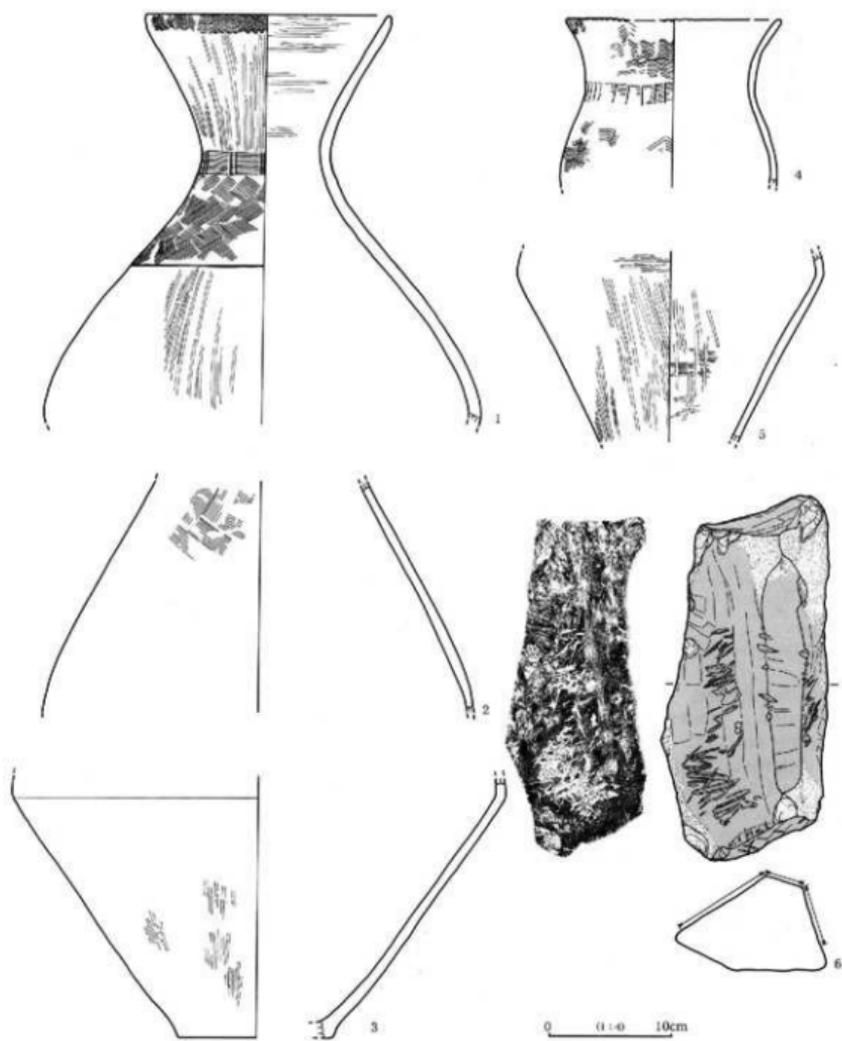
第60表 H69号住居址出土遺物観察表

(65) H70号住居址 (第102.103図, 写真図版五十六)

本住居址は、南側調査区のほぼ中央であるJ-ム-38、J-メ-37・38Grに位置する。残存状態は南側が細地の境により削平されている他は良好である。形態は長方形と考えられる。炉は住居址西よりで確認された。規模は北壁3.52m・南壁残存3.55m・西壁残存2.22m推定2.96m・東壁残存2.26m推定2.85mで、壁高さは北壁際で29cmを



第102図 H70号住居址尖頭図



第103图 H70号住居址出土器物实测图

測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-60°-Wを示す。床面積は残存で8.0㎡、推定で11.3㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて4層に分れ自然堆積の状態であった。床は全体に硬質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは4個検出された。規模はP1が径33cm・深さ33cm、P2が径21cm・深さ49cm、P3が径20cm・深さ59cm、P4が径23cm・深さ21cmを測る。ピットの検出位置よりP1とP2が主柱穴と考えられる。

炉は住居址の西よりで確認された。形態は円形で、規模は径43cmで焼土の厚みは9cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址よりの出土遺物はやや多く、特に床面よりの出土が多かった。図示した土器4点と石器1点の出土層位はいずれも床面直上である。1は壺の口縁部から胴部であり無彩である。住居址東側の壁際より潰れた状態で出土した。この壺下には、ピット状の掘り込みが検出され、貯蔵穴と考えられる。施文は口唇部に縞描波状文、頸部の上段に縞描波状文、下段に縞描羽状文で、最下段に縞描横線文を施す。2は壺の頸部から胴部であり、住居址西側よりから出土した。器面が荒れているが、施文は縞描羽状文が施されている。3は壺胴部下平から底部であり、1と同じ場所より出土したが、胴部くびれの形状や径が異なる別個体と判断した。4と5は甕である。4は住居址北東コーナーに口縁部を上にした状態で置かれたような状態で出土した。口唇部に刻みがあり、頸部には縞描波状文、口縁部と胴部には縞描波状文が施されている。6は置き紙石で、住居址北東コーナー部壁に立て掛けるように出土し、H38号住居址と同じような出土形態であった。砥面は二面確認でき、中央部がよく研ぎ減りしていた。また、襷の一部に刃物で傷つたようなくさび形の傷が無数に確認できた。

これらの出土遺物より本址は弥生後期1段階に位置づけられる。

No.	類別	法 量			形 成 期 間 ・ 文 様		色 調	備 考	出土位置
		口径(長)	底径(幅)	高さ(厚)	外 面	内 面			
1	壺	(20.0)	-	(33.3)	ヘラミガキ、ヘラ縞描波状文(1本)、 口唇部縞描波状文、 頸部縞描波状文(2本)、 胴部全体縞描羽状文(横位、羽状)	ハケ目、 胴部ヘラミガキ	7.5YR7/6 (橙)	回転変調	1K
2	壺	-	-	(18.7)	築前付近縞描羽状文(横位、羽状)、 他は不明	不明	5YR7/6 (橙)	回転変調	
3	壺	-	(12.7)	(21.3)	ヘラミガキ	不明	7.5YR7/6 (橙)	回転変調	
4	甕	17.5	-	(13.5)	縞描波状文、頸部縞描波状文(1本止め) 口唇部ヘラによる刻み目	不明	7.5YR7/3(6)C(黄)	完全変調	
5	甕	-	-	(15.5)	ヘラミガキ	ハケ目、ヘラミガキ	10YR7/6 (明黄緑)	回転変調	
6	置き紙石	砂岩	丸形	現存率	最大長 298.0 最大幅 122.0 最大厚 78.0	3480.00	砥石面5面、外面は使用痕が異なる、一部にV字状の刃物傷がある	所 見	出土位置 Ⅱ区

第61表 H70号住居址出土遺物観察表

(66) H71号住居址 (第104図、写真図版五十七)

本住居址は、南側調査区の東よりであるK-ホ-3・4、K-マ-3・4Grに位置する。残存状態は南側が畑地の境により削平されている。形態は南北に長辺を持つ長方形と考えられる。炉は住居址中央で確認された。規模は北壁5.32m・西壁残存2.47m・東壁残存2.64mで、壁高さは西壁際で19cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-71°-Wを示す。床面積は残存で16.6㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて2層に分れ自然堆積の状態であった。床は全体に硬質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは3個検出された。規模はP1が径33cm・深さ37cm、P2が径50cm・深さ28cm、P3が径74cm・深さ19cmを測る。ピットの検出位置よりP1とP2が主柱穴、P3は棒持ち柱と考えられる。また、本址は北側に所謂「ベット状遺構」が確認された。幅は最大72cm・深さは北壁部分で14cmを測る。

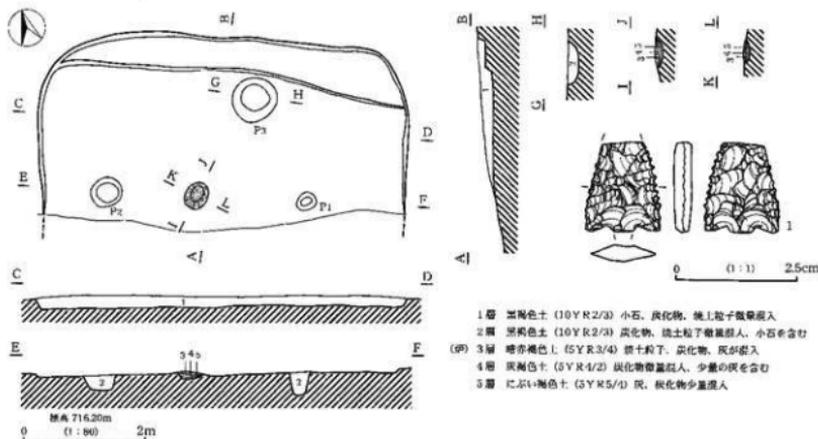
炉は住居址の北よりで確認された。形態は円形で、規模は径46cmで焼土の厚みは6cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址よりの出土遺物は非常に少なく、図示した石器の他に壺・甕片が少量出土した。これら土器片はいずれも箱清水式の形式を示すものである。1の石器は鋸歯の形態の有茎石鏃であり茎部が欠損している。

これらの事から、不確定要素はあるが本址は弥生後期に位置づけられると考える。

No.	器 種	素 材	現存率	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置
1	有茎石鏃(鋸歯)	黒曜石	先端、茎部欠損	18.2	15.5	3.6	1.10		Ⅱ区

第62表 H71号住居址出土遺物観察表



第104図 H71号住居址及び出土遺物実測図

(67) H72号住居址 (第105図, 写真図版五十七)

本住居址は、南側調査区の東よりであるK-ユ-4・5、K-ヨ-4・5、K-ラ-3~5Grに位置する。残存状態は全体が畑地の境と自然地形により削平されており、ピットと炉が確認できたのみである。形態は南北に長辺を持つ方形と考えられる。炉は住居址北よりで確認された。規模は北壁推定8.28mと考えられる。床面積は図に示した点線内で37.8㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて2層に分れ自然堆積の状態であった。床は全体に軟質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは20個検出された。規模はP1が径34cm・深さ17cm、P2が径41cm・深さ27cm、P3が径26cm・深さ33cm、P4が径35cm・深さ29cm、P5が径13cm・深さ25cm、P6が径14cm・深さ20cm、P7が径13cm・深さ12cm、P8が径17cm・深さ9cm、P9が径18cm・深さ11cm、P10が径19cm・深さ4cm、P11が径13cm・深さ40cm、P12が径17cm・深さ13cm、P13が径18cm・深さ6cm、P14が径32cm・深さ28cm、P15が径35cm・深さ34cm、P16が径32cm・深さ24cm、P17が径47cm・深さ13cm、P18が径33cm・深さ18cm、P19が径60cm・深さ16cm、P20が径35cm・深さ24cmを測る。ピットの検出位置はいずれも不規則な配置で支柱穴等の特定はできなかった。ただ、北壁際の小ピットは壁際柱穴と考えられる。炉は住居址の北よりで確認された。形態は円形で、規模は径75cmで焼土の厚みは7cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址よりの出土遺物は非常に少なく、図示した石器の他に壺・甕片が少量出土した。これら十器片はいずれも猪清式の水式の形式を示すものである。1の石器は打製石斧である。ほぼ完形であり、刃部に刃こぼれの痕跡がある。

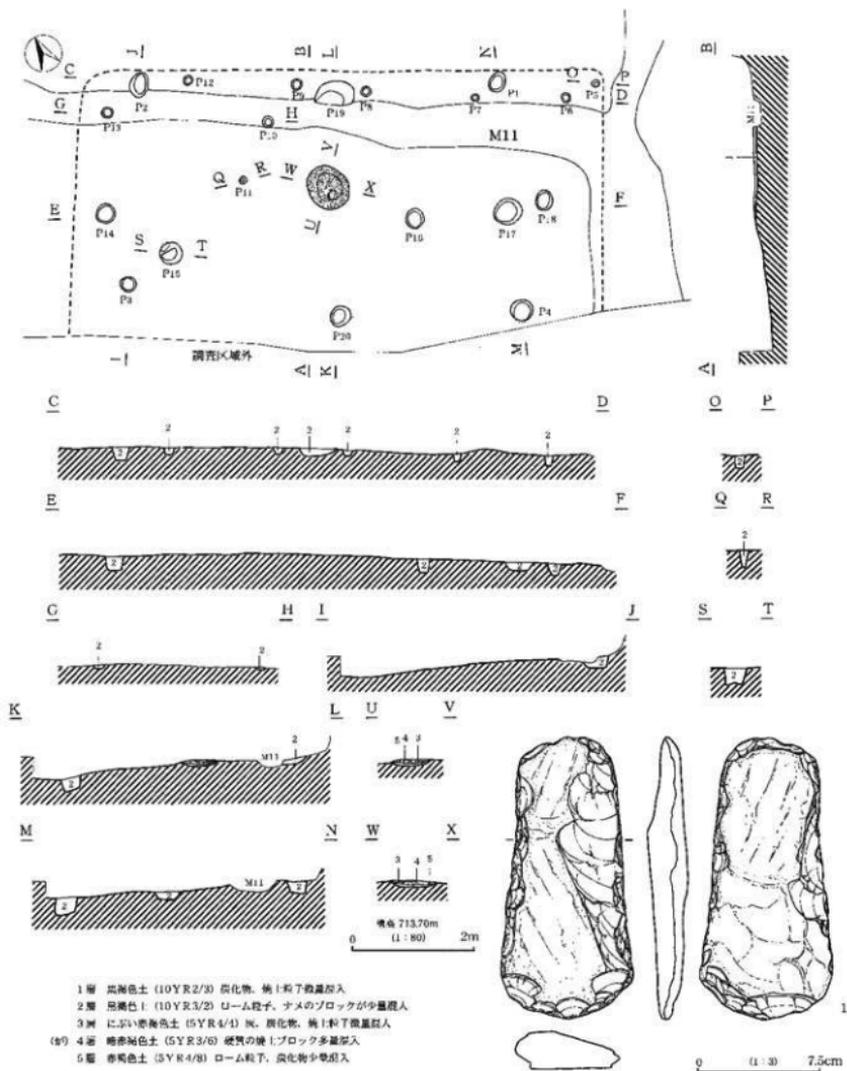
これらの事から、不確定要素はあるが本址は弥生後期に位置づけられると考える。

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
1	打製石斧	燧石	完形	170.0	80.5	23.3	340.30	刃部刃こぼれ	

第63表 H72号住居址出土遺物観測表

(68) H73号住居址 (第106図, 写真図版五十七)

本住居址は、南側調査区の西よりであるJ-ラ-34・35、J-リ-34・35Grに位置する。残存状態は南側が畑地の境により削平されている。形態は東西に長辺を持つ長方形と考えられる。炉は住居址西よりで確認された。規模は北壁4.86m・南壁推定4.76m・西壁残存3.28m推定4.25m・東壁残存1.01m推定3.68mで、壁高さは西壁際で29cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-29°-Wを示す。床面積は残存で14.2㎡、推定で22.1㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて3層に分れ自然堆積の状態であった。床は全体に非常に硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは8個検出された。規模はP1が径30cm・深さ63cm、P2が径23cm・深さ56cm、P3

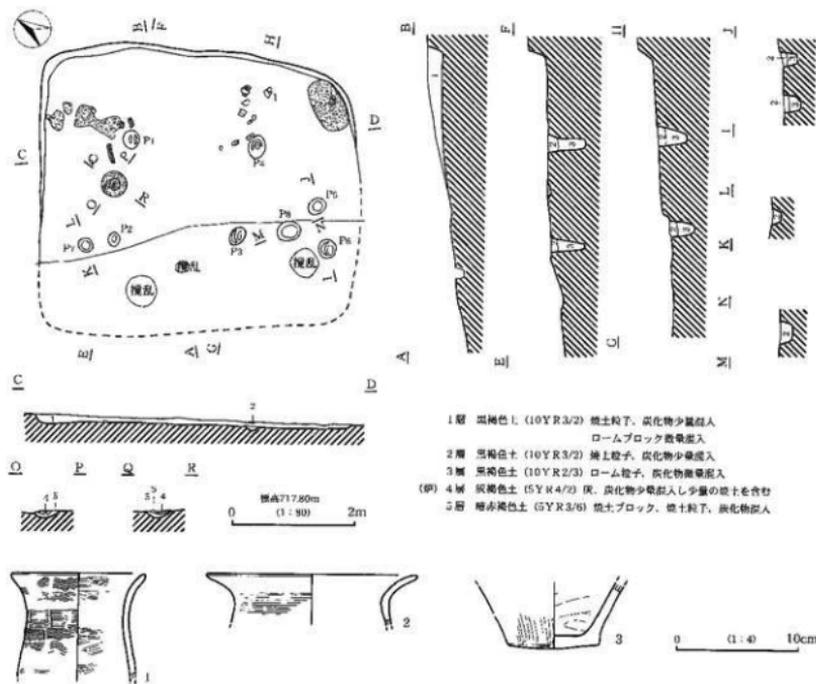


第105図 H72号住居址及び出土遺物実測図

が径32cm・深さ37cm、P4が径37cm・深さ46cm、P5が径30cm・深さ27cm、P6が径29cm・深さ26cm、P7が径23cm・深さ14cm、P8が径39cm・深さ19cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴、P5は入り口施設と考えられる。炉は住居址の西よりで確認された。形態は円形で、規模は径42cmで焼上の厚みは10cmを測る。焼上はよく焼けており硬化していた。また、住居北東コーナー部では焼土がまとまって検出された。

本址よりの出土遺物は非常に少なく、土層3点を図示した。図示した土器の出土層位は1と3が床面より10cm浮いた状態で出土し、2は覆土中からの出土である。1～3はいずれも裏の部位破片であり、施文は1が頸部に帯描線状文、口縁部と胴部に帯波状文、2が頸部に帯描線状文を施す。

これらの出土遺物より、不確定要素はあるが本址は外生後期に位置づけられると考える。



第106図 H73号住居址及び出土遺物実測図

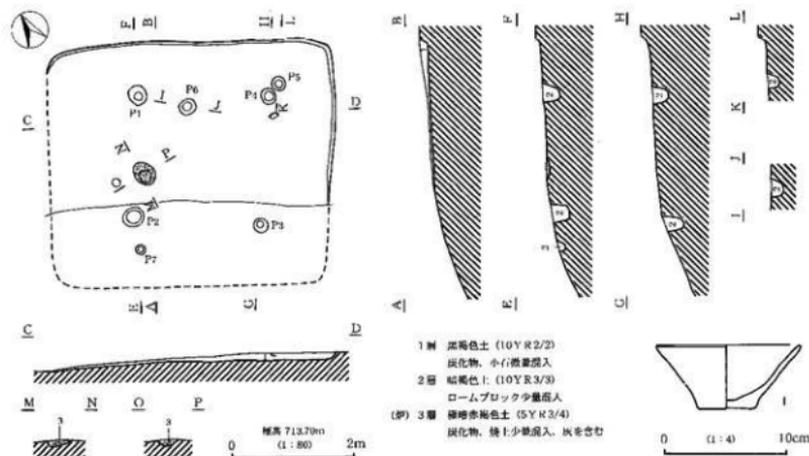
No.	器種	法		成形・調整・文様	内面	色調	備考	出土位置
		口徑(外)	底内径(内)					
1	甕	(11.0)	-	(8.5) 1 縁部と胴部に帯描線状文、 2 頸部に帯描線状文(1面止り)	ヘラミガキ	5YR6/6 (暗)	図録未測	10
2	甕	(17.0)	-	(4.0) 頸部に帯描線状文	ナデ	5YR6/6 (暗)	図録未測	10
3	甕	-	7.5	(5.1) ヘラミガキ、底部もヘラミガキ有り	ナデ	10YR7/4(中-暗)	完全未測	10

第64表 H73号住居址出土遺物観察表

(69) H74号住居址 (第107図, 写真図版五十八)

本住居址は、南側調査区の西よりであるF-カー39・40、F-キー39・40Grに位置する。残存状態は南側が畑地の境により削平されている。形態は東西に長辺を持つ長方形と考えられる。炉は住居址西よりで確認された。規模は北壁4.48m・南壁推定4.23m・西壁残存0.40m推定3.62m・東壁残存2.60m推定3.78mで、壁高さは北壁際で12.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-61'-Wを示す。床面積は残存で11.9㎡、推定で17.7㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて2層に分れ自然堆積の状態であった。床は全体に硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは7個検出された。規模はP1が径31cm・深さ29cm、P2が径35cm・深さ24cm、P3が径23cm・深さ33cm、P4が径27cm・深さ26cm、P5が径23cm・深さ19cm、P6が径28cm・深さ21.5cm、P7が径17cm・深さ14.5cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴と考えられる。炉は住居址の西よりで確認された。形態は不整形で、規模は長軸42cm・短軸32cmで焼土の厚みは1cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址よりの出土遺物は非常に少なく、土器1点を図示した。図示した1は鉢で、出土層位は覆土中からである。この出土遺物より、不確定要素はあるが本址は弥生後期に位置づけられると考ええる。



第107図 H74号住居址及び出土遺物実測図

No	器種	法 量			成 形 ・ 測 量 ・ 文 様		色 調	備 考	出土位置
		口径(径)	底径(径)	体高(厚)	外 径	内 径			
1	鉢	(11.7)	4.7	5.2	不明	不明	5YR6/9 (包)	完全欠割	IV区

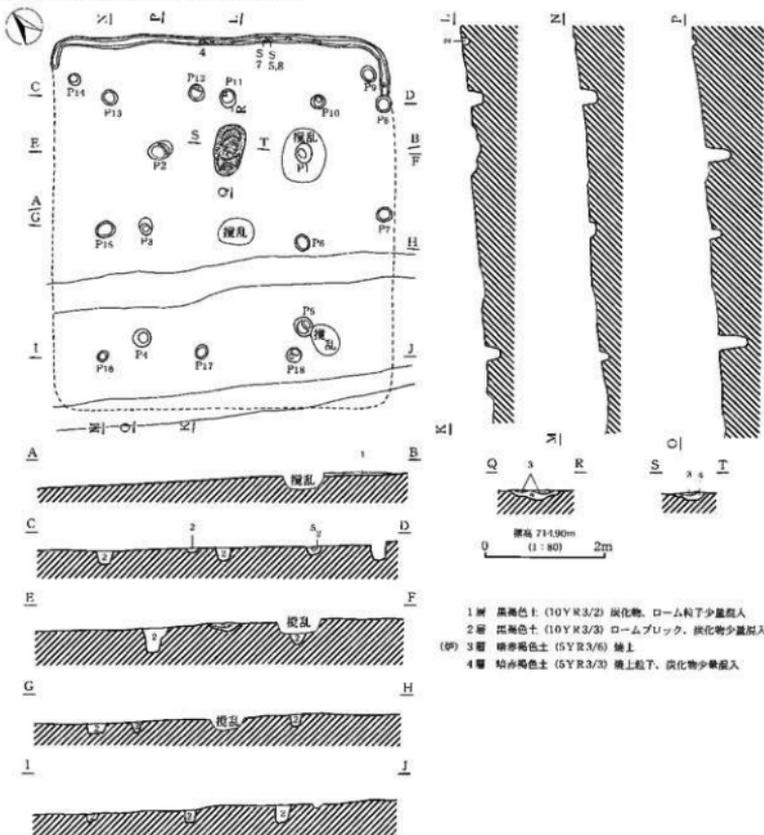
第65表 H74号住居址出土遺物観察表

(70) H75号住居址 (第108.109図, 写真図版五十八)

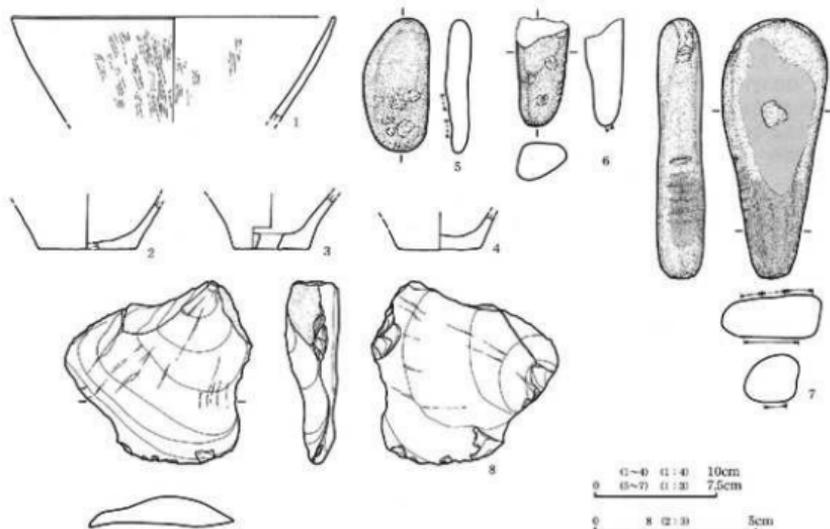
本住居址は、南側調査区の西よりであるF-ウー37・38、F-エー37~39・F-オー38Grに位置する。残存状態は南側が自然地形と畑地の耕作により削平されている。形態は南北に長辺を持つ長方形と考えられる。炉は住居址北よりで確認された。規模は北壁5.37m・南壁推定5.28m・西壁残存0.40m推定6.00m・東壁残存0.77m推定5.83mで、壁高さは北壁際で7cmを測る。主軸方位はN-39'-Eを示す。床面積は残存で12.1㎡、推定で34.4㎡を測る。覆土は柱穴まで入れて2層に分れ自然堆積の状態であった。床は全体に軟質であった。壁溝は北壁際で確認された。規模は幅10~17cm、深さ1~11cmを測る。ピットは18個検出された。規模はP1が径33cm・深さ40cm、P2が径41cm・深さ39cm、P3が径30cm・深さ19cm、P4が径30cm・深さ48cm、P5が径33cm・深さ37cm、P6が径27cm・深さ23cm、P7が径27cm・深さ21cm、P8が径27cm・深さ30cm、P9が径29cm・深さ18cm、P10が径23cm・深さ16cm、P11が径31cm・深さ25cm、P12が

径26cm・深さ16cm、P13が径27cm・深さ27cm、P14が径22cm・深さ25cm、P15が径32cm・深さ19cm、P16が径19cm・深さ14cm、P17が径23cm・深さ21cm、P18が径25cm・深さ30cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P6が6本柱の支柱穴、P10・P11・P13・P15～P18は2間×2間の掘立柱建物址の補助柱穴と考えられる（P6は支柱穴としたが、補助柱穴の配置とも整合し、或いは他の住居址と共に4本柱の可能性もある）。

が住居址の北よりで確認された。形態は楕円形で、規模は長軸87cm・短軸49cmで土の厚みは15cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。本址よりの出土遺物は少なかつたが、土器4点、石器4点を図示した。図示した遺物の出土層位は4の壁がほぼ床面直上から、5と7と8が床面より8cm浮いた状態、その他の物は覆土中より出土した。1は鉢か単孔の甕である。2と4は甕の底部、3は単孔の甕である。5は下部の平面に敲き痕がある敲石である。6と7はいずれも敲き痕や磨りが確認できる敲石や磨石であるが、確先端部に回転時についたと考えられる擦痕が横方向に確認でき石維の可能性もある。8は剥片素材を利用した刃器と考えられる。これらの出土遺物より、本址は弥生後期に位置づけられると考える。



第108図 H75号住居址実測図



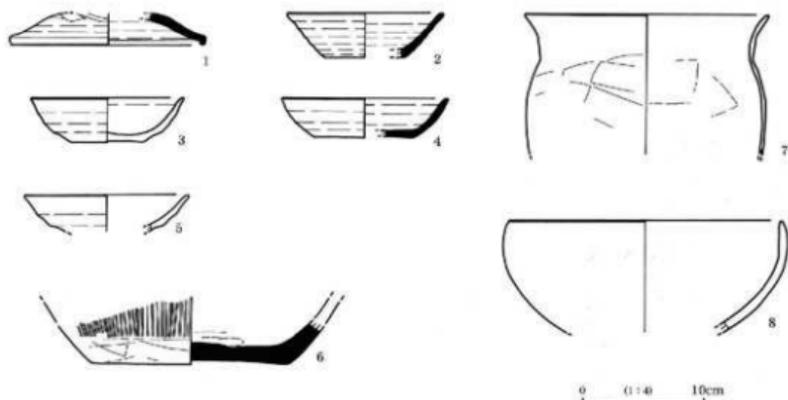
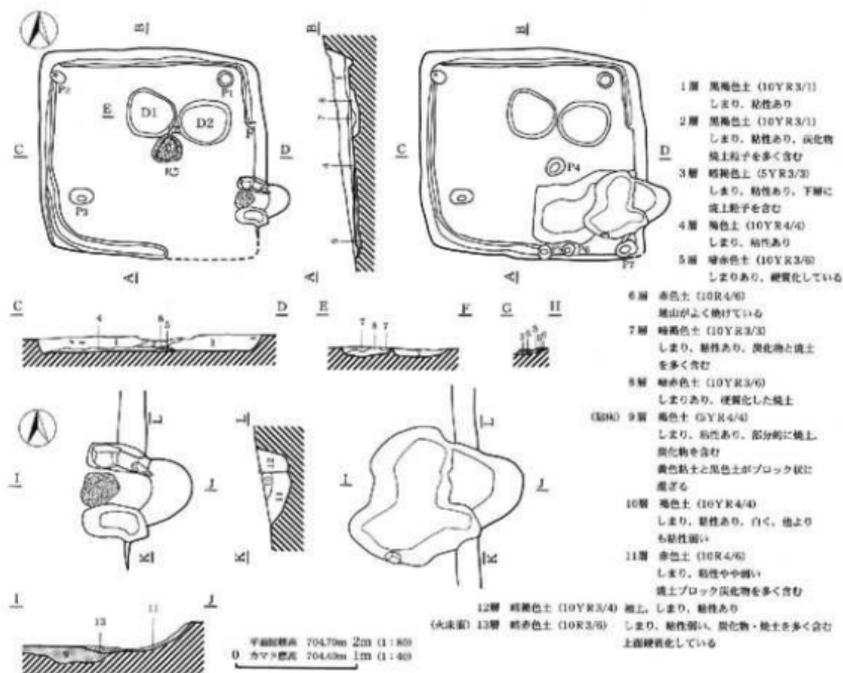
第109図 H75号住居址出土遺物実測図

No	部 種	形 態		形 式・測 量・文 様				色 調	備 考	出土位置
		口縁部(残存部)	底部(残存部)	外 面	内 面	最大径	最小径			
1	鉢	(26.3)	(8.6)	ヘラミガキ	ヘラミガキ			7.5YR8/4 (灰青緑)	回転灰土	層土
2	鉢	(7.50)	(3.6)	不明	不明			7.5YR8/6 (灰青緑)	回転灰土	層土
3	蓋	(6.1)	(4.3)	不明	不明			7.5YR7/6 (暗)	回転灰土	層土
4	蓋	(6.6)	(2.7)	不明	不明			7.5YR6/4 (灰青)	完全灰土	
5	磁石	砂岩	定形	残存率	最大径	最小径	最大径	色 見		壁土粒層
					81.0	40.0	15.0	60.50	下部下部に嵌まり	8
6	磁石(石籠)	砂岩	不定形		96.0	30.0	23.0	63.10	下部下部に嵌まり、下部はドリル状の表面	壁溝内
7	磁石+燧石(石籠)	砂岩	不定形		138.0	63.0	26.0	373.00	内部に嵌り、正面中央より下部に嵌り、下部は壁溝内から嵌り	8
8	貝殻	燧石(定形)	定形		55.0	37.0	16.0	43.30	製作素材の下部を対照として使用、写こぼれ?	8

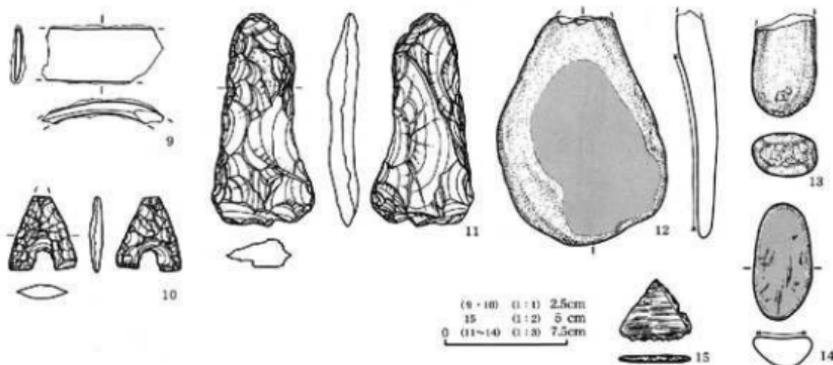
第66図 H75号住居址出土遺物観察表

(71) H17号住居址 (第110.111図, 写真図版五十九)

本住居址は、調査区中央部の南斜面であるF-11-22、F-11-21・22Grに位置する。残存状態は南東コーナーが自然地形により削平されている。形態は方形であり、カマドは住居址東壁南よりで確認された。規模は北壁3.40m・南壁3.35m・西壁3.10m・東壁3.10mで、壁高さは北壁際で44cmを測る。主軸方位はN-87°-Eを示す。床面積は10.4㎡を測る。覆土は柱穴及び貼床まで入れて9層に分れ自然堆積の状態であった。床は全体に軟質であった。壁溝は東壁の一部と北壁・西壁・南壁で確認された。規模は長軸15~31cm、深さ5.5cmを測る。ピットは掘り方時も含め7個検出された。規模はP1が径25cm・深さ5.5cm、P2が径27cm・深さ17.5cm、P3が径39cm・深さ14cm、P4が径33cm・深さ9.5cm、P5が径22cm・深さ13cm、P6が径20cm・深さ9cm、P7が径35cm・深さ20.5cmを測る。また、本址からは床面において二つの土坑と焼土塊が検出された。まずD1は形態が円形で、規模は長軸87cm・短軸77cm・深さ18.5cmを測る。D2も形態が楕円形で、規模は長軸87cm・短軸72cm・深さ15.5cmを測る。焼土塊は床面よりも盛り上がった状態で検出され、規模は長軸50cm・短軸43cm・高さ7.5cmを測る。この焼土塊はぼろぼろした状態で硬質化した焼土を集めた様な状態であった。



第110図 H17号住居址及び出土土遺物実測図



第111図 H17号住居址出土遺物実測図

No.	器種	法量	成形・調整・文様			色調	備考	出土位置	
			口徑長	底径幅	底径厚				外面
1	須恵器 蓋	(15.0)	—	(2.0)	ロクロナデ、天部部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	10K4/1 (緑赤灰)	回転実器	カマド内方
2	須恵器 杯	(12.8)	(5.4)	(3.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	5G5/1 (青リブ灰)	回転実器 内・外に丸だすき痕	IV区、 カマド内方
3	土師器 杯	(12.5)	(5.9)	3.6	ロクロナデ、底面回転糸切り	ロクロナデ	7.5YR7/4(0.5灰)	回転実器 器面残れ	IV区
4	須恵器 杯	(13.4)	(6.0)	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y7/1(黄オリーブ)	回転実器	H25一括
5	土師器 杯	(13.4)	—	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR5/6 (黄)	回転実器 器面残れ	I区一括
6	須恵器 甕	—	(16.2)	(5.1)	タタキ、底面下堀～底縁、ヘラケズリ	ナデか?	7.5YR5/1 (黄灰)	回転実器 器面残れ	I区
7	土師器 甕	(20.0)	—	(11.5)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	5YR6/6 (黄)	回転実器 器面残れ	IV区
8	土師器 鉢	(20.4)	—	(5.2)	不明	不明	7.5YR6/2 (黄灰)	回転実器	IV区一括
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
9	磨石?	灰燐	欠損	(23.0)	(10.0)	—	1.40		I区
10	西洋石鹸	珪岩	先端欠損	(15.1)	13.1	2.7	(0.50)	ソフトハンマーによる押し割痕	I区
11	打製石斧	安山岩	完整	134.1	62.5	19.2	119.30	ハードハンマーによる直接打撃、刃こぼれ・摩耗あり	II区
12	磨石	砂岩	上部先端一部欠損	(159.0)	109.0	19.0	(314.00)	断面スプーン状にこぼれ、磨り	II区
13	磨石	砂岩	欠損	(62.0)	39.0	26.0	(9.100)	下縁先端に磨き	II区
14	磨石	輝石安山岩	完整	71.0	36.0	17.0	(65.20)	正面に磨り	掘り方
15	磨製木製品?	千枚岩	完整?	26.0	29.0	2.5	2.50	内面・外面に硬質、下縁辺縁部歯状となる	掘り方

第67表 H17号住居址出土遺物観察表

カマドは住居址東壁の南より確認された。形態は煙道部があまり住居址壁よりも飛び出さないタイプで、軸は粘土と自然礫によって構築されていた。規模は煙道部長さ87cm、幅28cmで、火床面はよく焼けていた。

本址からの遺物は覆土中や掘り方検出時に主に出土した。1は須恵器蓋であり、天井部に手持ちヘラケズリをおこそう。2・4は須恵器杯である。3と5は土師器杯で、3は底部回転糸切り難しが行われている。6は須恵器甕で、やや生焼けの様な色を呈している。7は土師器甕、8は土師器の鉢である。9は鉄製品で、覆土中からの出土である。種別には確認はもてないが、周辺部の遺構として弥生期の木棺墓が存在することから、「鉄劍」の断片の可能性もある。

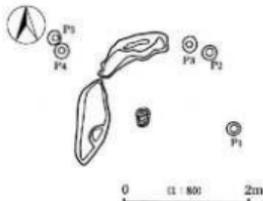
10は石鹸で先端部を欠損する。11は打製石斧でほぼ完形である。刃こぼれと摩耗が認められる。12は磨石で、形態がスプーン状を呈する。13は砥石で先端部に顕著な磨き痕が確認できる。14は磨石、15は千枚岩の磨製石礫の未製品と考えられる。両面を研磨し、一部に鋸歯状の刃部を造りだしている。なお、これらの石器群は本址に伴うものではなく、周辺部に広がる弥生期住居に属する遺物と考えられる。

これらの出土遺物より、本址は9世紀後半に位置づけられると考える。

2. 特殊遺構

(1) T1号特殊遺構 (第112回, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部の台地の南斜面であるF-フ-15・16、F-ヘ-15・16Grに位置する。形態は楕円形の土坑2基とピットに囲まれるように焼土範囲を検出した。この2基の土坑規模は北側が長軸122cm・短軸41cm・深さは12.5cmを測る。次に南側の土坑は長軸130cm・短軸51cm・深さ17cmを測る。ピットは5個検出された。規模はP1が径20cm・深さ12.5cm、P2が径23cm・深さ21.5cm、P3が径21cm・深さ12cm、P4が径23cm・深さ13.5cm、P5が径20cm・深さ10.5cmを測る。ピットの検出位置はいずれも不規則な配列で柱穴とは考えにくい。焼土は形態が不整形で、規模が長軸57cm・短軸45cmを測る。住居の炉址ほどではないが硬質化が確認できた。



第112図 T1号特殊遺構実測図

本址からの出土遺物は非常に少なく、赤彩された壺片が少量と黒曜石の剥片が出土したのみである。これらの事から遺構の性格は不明であるが、所産時期は弥生後期に位置づけられると考えられる。

(2) T2号特殊遺構 (第114回, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部の台地の南斜面であるF-ヤー-19~21Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外、南側が自然地形の傾斜により削平され、遺構の全容は不明である。形態は北側部分に一部壁溝を伴う、住居壁の様な立ち上がりを確認。その一段下がった南側に緩やかな落ち込みが検出された。これらの規模は北側掘り込みの北壁は残存で4.07m・東壁は残存で1.10mを測る。ピットは9個検出された。規模はP1が径28cm・深さ22.5cm、P2が径27cm・深さ20cm、P3が径33cm・深さ25cm、P4が径33cm・深さ22.5cm、P5が径33cm・深さ27.5cm、P6が径27cm・深さ29.5cm、P7が径32cm・深さ33cm、P8が径27cm・深さ19cm、P9が径35cm・深さ25.5cmを測る。いずれも不規則な配列で、使用目的等は不明である。

本址からの出土遺物はやや多く、赤彩された壺片や藤編文を施文する壺片が第2層中より出土した。ただいずれもが小片であり、図示可能な物は1の壺底部のみであった。また、図示した2は磨石であり、P9の上面よりピットに蓋をするような状態で出土した。形状より磨りの為の台部に利用された礫と考えられ、両面に磨りの範囲が確認された。また、北面と西面にはやや粗い条痕のような擦痕が多数に観察された。

本址は、北側の掘りこみ部を竪穴住居址、南側を自然地形の傾斜に包含層が堆積したとも考えられるが、住居址として積極的に判断できる材料も乏しく、調査区域外もあることから、今回は性格不明の特殊遺構として報告する。本址の所産時期は弥生後期に位置づけられると考えられる。

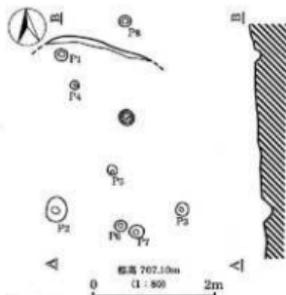
No.	形種	位置 □(西)■(東)▲(南)●(北)	成産・調査・文種		色調	備考	出土位置		
			外	内					
1	壺	(4.4)	(4.6)	ヘラミ字キ			10YR7/4C(赤-黄粉) 陶板文		
No.	形種	素材	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
2	磨石(白石)	磨石(黒岩)	完形	361.0	276.0	42.0	747.00	両面に磨石と一部条痕を伴う磨り、正確の方がよく磨かれている	P9

第68表 T2号特殊遺構出土遺物観察表

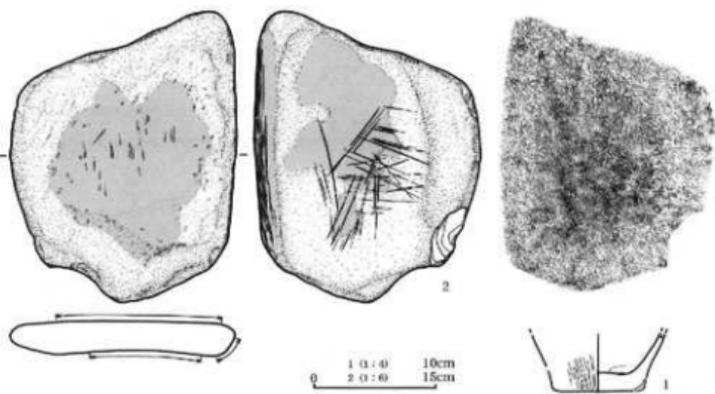
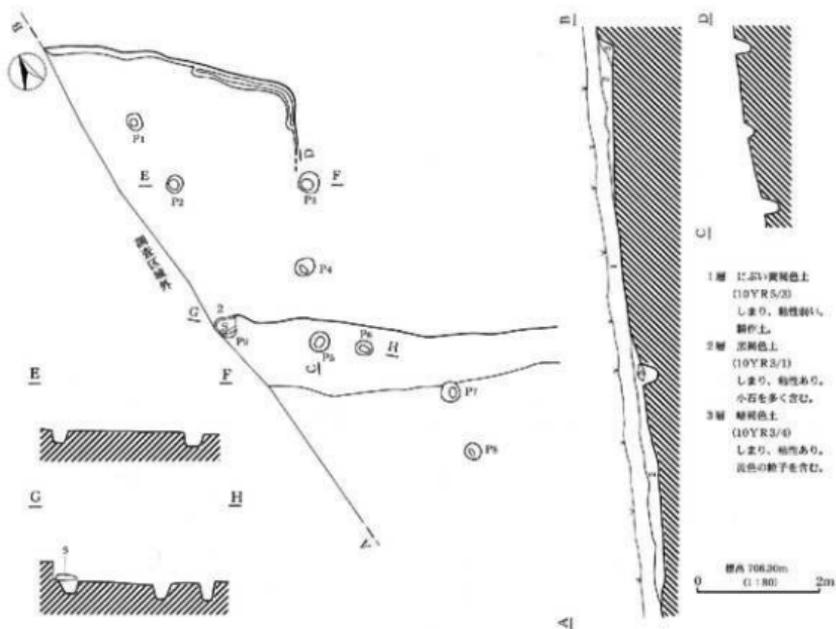
(3) T4号特殊遺構 (第113回, 写真図版六十一)

本址は、調査区中央部の台地の南斜面であるF-ミー-16・17、F-ム-16・17Grに位置する。残存状態は南側が自然地形の傾斜により削平され、遺構の全容は不明である。形態は北側部分に住居壁の様な立ち上がりを確認された。規模は北壁は残存で1.76mを測る。ピットは8個検出された。規模はP1が径21cm・深さ9.5cm、P2が径40cm・深さ17cm、P3が径21cm・深さ28cm、P4が径15cm・深さ5.5cm、P5が径16cm・深さ8cm、P6が径20cm・深さ14.5cm、P7が径24cm・深さ10cm、P8が径18cm・深さ13.5cmを測る。いずれも不規則な配列で使用目的等は不明である。また、中央で焼土が検出された。形態は円形で、硬質化は観られなかったがよく焼けていた。

本址からの出土遺物は無く、遺構の性格・所産時期は不明である。



第113図 T4号特殊遺構実測図

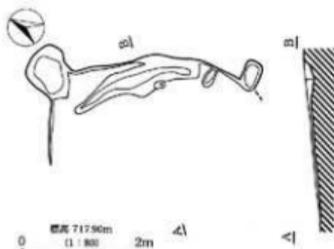


第114図 T2号特殊遺構及び出土遺物実測図

(4) T5号特殊遺構 (第115図, 写真図版六十一)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF-サー2・3Grに位置する。残存状態は西側が自然地形の傾斜により削平され、遺構の全容は不明である。形態は北側と南側に土坑をもち、東壁には壁溝状の溝が一部検出されている。壁は緩やかに立ち上がる。規模は北壁は残存で1.15m、東壁で2.80mを測る。土坑は北側のやや大型のものが長軸88cm・短軸62cm、南側の小型のものが、形態は楕円形で規模は長軸50cm・短軸30cmを測る。焼土等は検出されなかった。

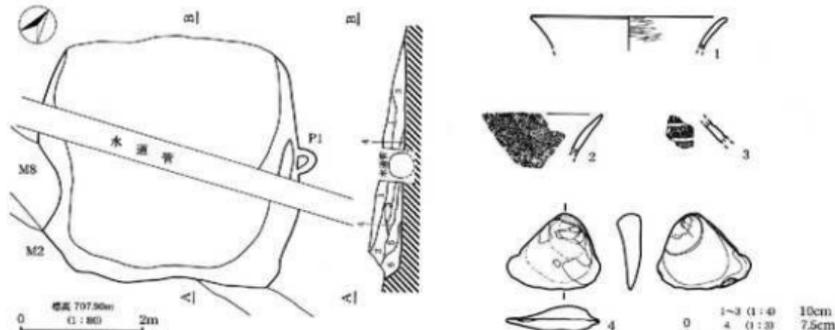
本址からの遺物は裏片が5点出土したのみであり、遺構の性格・所産時期は不明である。



第115図 T5号特殊遺構実測図

(5) T3号特殊遺構 (第116図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部の台地北斜面であるF-メ-10・11、F-モ-10・11Grに位置する。M2・8号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は北側が自然地形の傾斜により削平されている。規模は北壁推定3.35m、南壁3.45m、西壁3.34m、東壁3.63mで、壁高さは南東部で60cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。平坦部面積は残存で11.7㎡を測る。平坦部は軟質で、ピットは1個で規模がP1が径42cm・深さ13cmを測る。焼土等は確認されなかった。本址からの出土遺物は非常に少なく、図示した弥生中期の壺・甕片と1の土師器甕、4の小型刃器のみである。1は小片が数点出土し、その特徴から古墳時代中期の所産と考えられる。本址の性格は、図示した1の土師器甕の所産時期を積極的に評価すれば台地先端に所在する後家山2号墳との関係を考慮し、「モガリ屋」的な施設とも考えられる。

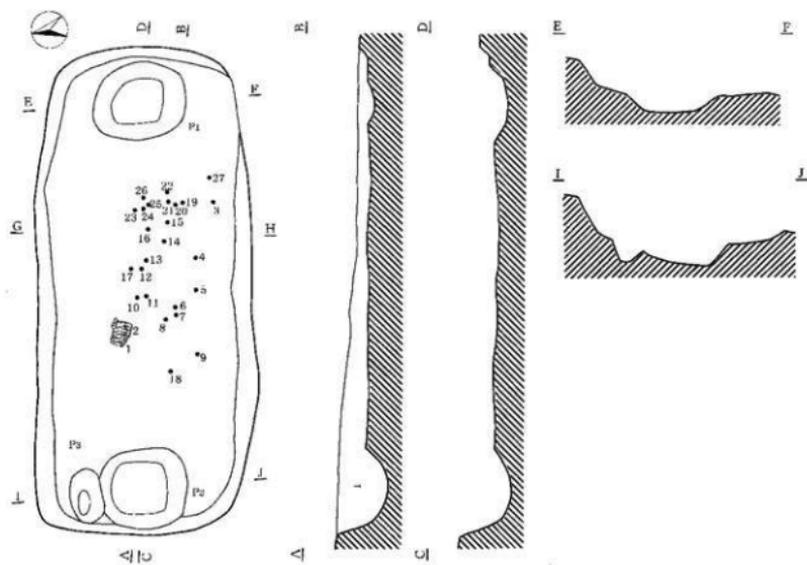


- 1 甕 褐色土 (10YR4/4) しまり強く、粘性あり。
- 2 甕 褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性あり。
- 3 甕 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり、炭化物層を含む。
- 4 壺 褐色土 (10YR4/4) しまりやや強く、粘性あり。炭化物層を含む。
- 5 甕 灰褐色土 (10YR3/2) 2層にわたるがやや中軽い。
- 6 甕 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性あり。流山の褐色土にちかい。

第116図 T3号特殊遺構及び出土遺物実測図

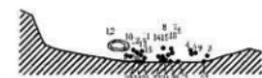
No.	器名	法 量		成 形 ・ 測 量 ・ 定 検				色 調	備 考	出土位置
		(口徑長) (底径幅) 器高/厚	(口徑)	外 形	内 形	重 量	測 量			
1	土師器 甕	(16.0)	-	(2.6)	群輪状文? 群輪状文?	ヘラミガキ	10YR5/3(G) (A-濃)	群輪状文? 他に同一型体2片	Ⅱ区	
2	壺	-	-	(3.5)	不明	ヘラミガキ	7.5YR5/6 (暗)	黒褐色実面	Ⅱ区	
3	壺	-	-	(1.5)	ヘラ群輪状文	ナデ?	7.5YR5/6 (暗)	断崖実面 (群輪)	Ⅰ区	
No.	器 種	素 材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重 量	測 量	備 考	出土位置
4.	刃部	輝石安山岩	完好	46.0	57.0	15.0	27.10	上部に自然面残す。下部に使用による磨耗あり		Ⅱ区

第69表 T3号特殊遺構出土遺物観察表

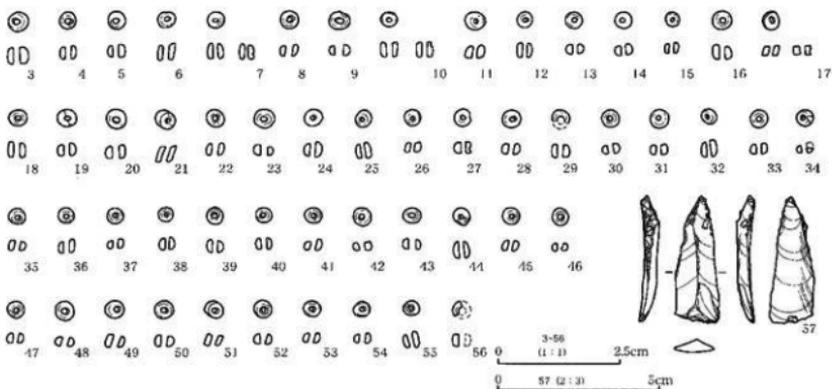


1層 暗褐色土 (10YR 3/3)

しまり、粘性あり。黄色土と灰色土がブロック状にはいる。薄め戻したようなナ。



標高 704.50m
(1:20) 50cm



第117図 1 朽木柩墓及び出土遺物実測図(1)

3. 木棺墓

(1) 1号木棺墓 (第117.118図, 写真図版六十二)

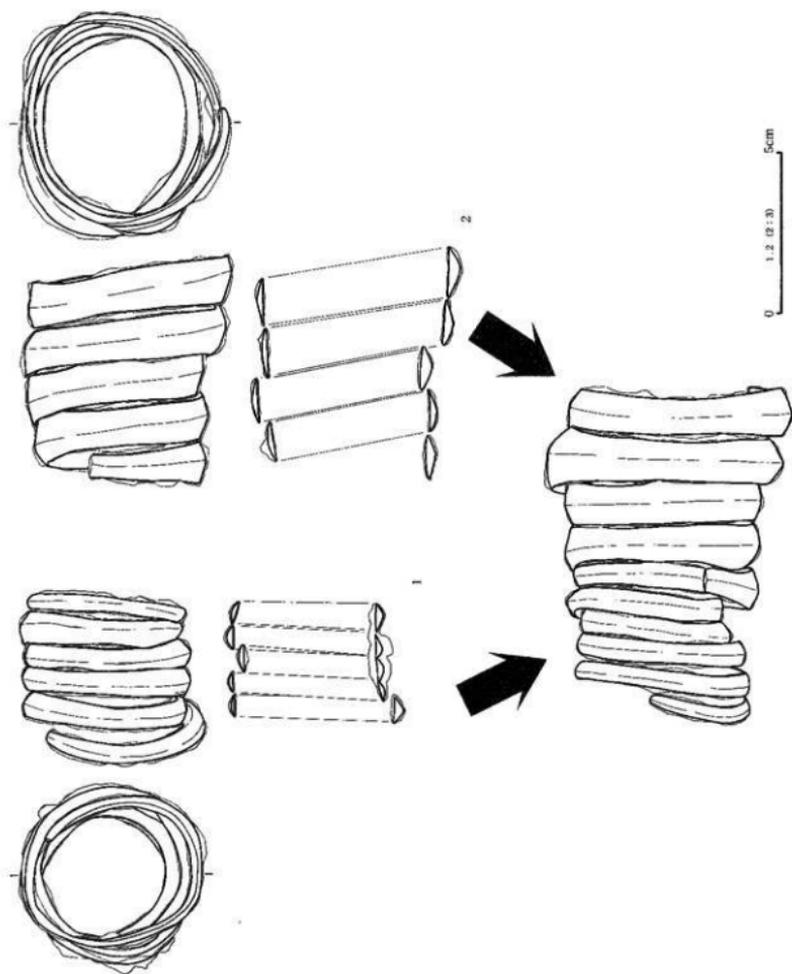
本址は、調査区中央部の台地の南斜面であるF-7・22Grに位置する。H25号住居址と重複関係にあり、新口関係は本址の方が新しい。残存状態は南東コーナーが自然地形の傾斜により削平されているが、他は良好である。形態は隅丸長方形で両端に小穴があり、木片は残していなかったが所謂「組み合わせ式箱形木棺」であったと考えられる。規模は、土壌本体が長軸200cm・短軸86.5cmで、深さは北側の立ち上がり部分で16.5~19cmを測る。長軸方位はN-77°-Eを測る。土壌内のピットは3力所確認された。形態はP1とP2がやや隅丸の方形で、P3は楕円形である。規模はP1が径38cm・深さ9cm、P2が径35cm・深さ8.5cm、P3が長軸22cm・短軸13cm・深さ12cmを測る。ピットの掘り込みはいずれも緩いすり鉢状を呈していた。

本址からの遺物は図示した物の他に縞縞波状文を施文する斐片4点と底部2点が出土したが、土器片はいずれも小片であり客体的な遺物と考えられる。ガラス小玉は54点が出土した。内25点は出土地点を計測し、その他29点は土壌内のばらふるって検出されたものである。ガラス小玉の出土傾向は土壌中央部にまとまっており、特に東側より多く検出された。出土層位は底面から5cmほど浮いた範囲内で出土した。色調はいずれもブルーかやや緑色で色調のばらつきはない。形態は大きく2種類あり、まず3を代表例とする小口面も側面も丸みを帯びたほぼ円形のタイプと、2を代表例とする小口面がカットされたような平坦面を持ち、側面もストロー状に延びた物ができる。数量的には前者が圧倒的に多い。また、7・10・17といった側面に気泡の穴が空いた状態のものも存在した。なお、ガラス小玉の成分分析については第3節を参照。鉄鋼は図示した1と2が組み合わされた状態で出土した。出土地点は土壌中央部やや北よりで、1が西側、2が東側の配置である。出土位置は底面に接している(図中は見逃し図の為、底面より浮いた状態になっている)。形態はいずれも螺旋状に巻きあがった所謂「螺旋型鉄鋼」であり、1が6巻き一組、2が5巻き一組である。法量は1が鉄軸6~8mm・径4~4.5cm・延伸長88.2cmを測る。2は鉄軸1.4cm・径5~6.3cm・延伸長84.6cmを測る。断面形状は錆の為不明瞭な部分もあるが三角形で外側に稜を持つ。1と2いずれも端部はやや細く丸く終わっている。また、鋼内の土からは植物性の繊維で織られた布小片が同時に出土している。これら鋼の鉄素材分析及布の分析は第3節を参照。57のナイフ型石器は混入遺物と考えられ、基部に刃漬し加工が観察できる。

以上、1号木棺墓からは人骨の遺存が確認できなかったため埋葬方位が不明であるが、ガラス小玉の出土範囲が偏ることからこれを胸飾り等と考えたと頭位は東を推定でき、木鋼も長野県内の多くの出土事例と同じく右胸への装着が考えられる。本址の所産時期は土器等の出土が無い為確定できないが、周辺部の遺構の状況から弥生後期と考えられる。

No.	器種	素材	残存状況	最大径				色調	No.	器種	素材	残存状況	最大径				色調
				最大径	最小径	最大径	重量						最大径	最小径	最大径	重量	
1	鋼	鉄	完形	84.6	30.9	1.8	48.90	30	小玉	ガラス	完形	2.8	3.8	1.3	0.03	青	
2	鋼	鉄	残片	84.6	1.2~1.5	3.5	80.60	31	小玉	ガラス	完形	2.6	3.8	1.3	0.05	青	
3	小玉	ガラス	完形	3.2	4.0	1.2	0.07	32	小玉	ガラス	完形	3.6	3.4	1.0	0.05	青	
4	小玉	ガラス	完形	3.0	3.5	1.0	0.03	33	小玉	ガラス	完形	2.1	3.5	1.5	0.04	青	
5	小玉	ガラス	欠陥	2.6	3.8	1.0	0.05	34	小玉	ガラス	完形	2.2	3.3	1.0	0.03	青	
6	小玉	ガラス	完形	3.5	3.6	1.7	0.05	35	小玉	ガラス	完形	2.3	3.8	1.5	0.03	青	
7	小玉	ガラス	完形	3.1	3.6	1.1	0.03	36	小玉	ガラス	完形	3.0	3.4	1.5	0.01	青	
8	小玉	ガラス	完形	2.8	3.9	1.8	0.04	37	小玉	ガラス	完形	2.0	3.6	1.5	0.03	青	
9	小玉	ガラス	一部欠陥	2.1	4.1	1.7	0.01	38	小玉	ガラス	完形	2.5	3.9	1.0	0.03	青	
10	小玉	ガラス	完形	3.0	3.6	1.0	0.05	39	小玉	ガラス	完形	2.7	3.4	1.1	0.03	青	
11	小玉	ガラス	完形	2.7	4.0	1.0	0.06	40	小玉	ガラス	完形	2.4	3.4	1.3	0.03	青	
12	小玉	ガラス	完形	3.0	3.1	1.0	0.03	41	小玉	ガラス	完形	2.3	3.8	1.2	0.04	青	
13	小玉	ガラス	完形	2.0	3.3	1.0	0.03	42	小玉	ガラス	完形	1.8	3.8	1.3	0.03	青	
14	小玉	ガラス	完形	2.3	3.7	0.9	0.04	43	小玉	ガラス	完形	2.2	3.7	1.8	0.03	青	
15	小玉	ガラス	残片	2.2	2.9	0.8	0.03	44	小玉	ガラス	一部欠陥	3.7	3.5	1.1	0.04	青	
16	小玉	ガラス	完形	3.0	4.0	0.9	0.06	45	小玉	ガラス	完形	2.3	3.5	1.2	0.01	青	
17	小玉	ガラス	完形	2.1	3.7	0.9	0.04	46	小玉	ガラス	完形	1.8	3.4	1.1	0.03	青	
18	小玉	ガラス	完形	3.3	3.7	1.2	0.06	47	小玉	ガラス	一部欠陥	2.0	3.6	1.2	0.03	青	
19	小玉	ガラス	完形	2.7	4.0	1.3	0.03	48	小玉	ガラス	完形	2.1	3.9	1.5	0.04	青	
20	小玉	ガラス	完形	3.0	4.1	1.5	0.06	49	小玉	ガラス	完形	2.7	4.0	1.5	0.05	青	
21	小玉	ガラス	一部欠陥	3.4	4.1	1.2	0.06	50	小玉	ガラス	完形	2.2	3.8	1.0~1.8	0.03	青	
22	小玉	ガラス	完形	2.7	3.9	1.4	0.04	51	小玉	ガラス	完形	2.4	4.0	1.2	0.05	青	
23	小玉	ガラス	完形	2.8	4.3	1.4	0.04	52	小玉	ガラス	完形	2.2	3.8	1.0~1.8	0.03	青	
24	小玉	ガラス	完形	3.1	3.9	1.2	0.05	53	小玉	ガラス	完形	2.1	3.7	1.3	0.03	青	
25	小玉	ガラス	完形	3.4	3.5	0.8	0.05	54	小玉	ガラス	完形	2.2	3.5	1.4	0.02	青	
26	小玉	ガラス	完形	2.1	3.6	1.1	0.03	55	小玉	ガラス	完形	3.5	3.2	1.1	0.04	青	
27	小玉	ガラス	完形	2.4	3.5	1.2	0.04	56	小玉	ガラス	1/3残存	(2.5)	-	-	0.02	青	
28	小玉	ガラス	完形	2.1	3.0	1.2	0.04	57	ナイフ	基岩石	残片	38.0	13.0	5.0	1.70		
29	小玉	ガラス	一部欠陥	2.9	3.8	1.3	0.04										

第70表 1号木棺墓出土遺物観察表

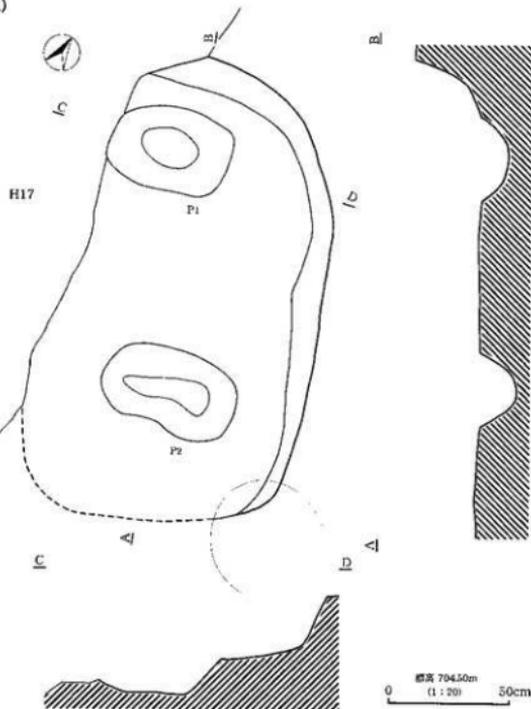


第118图 1号木枪墓出土遗物尖副图(2)

(2) 2号木棺墓 (第119図、写真図版六十二)

本址は、調査区中央部の台地の南斜面であるF-ハ-22、F-ヒ-22Grに位置する。H17号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は西側がH17号住居址に、南側が自然地形の傾斜により削平されている。形態は隅丸長方形で両端に小穴があり、木片は残していなかったが1号木棺墓と同じく所謂「組み合わせ式箱形木棺」であったと考えられる。規模は、土壌本体が長軸191cm・短軸残存113cmで、北側の立ち上がり部分で31cmを測る。長軸方位はN-27°-Wを測る。土壌内のピットは2カ所確認された。形態はP1とP2がやや隅丸の長方形である。規模はP1が長軸49cm・短軸34.5cm・深さ15cm、P2が長軸56.5cm・短軸31cm・深さ20cmを測る。ピットの掘り込みはいずれも緩いすり鉢状を呈していた。

本址からの出土遺物は非常に少なく、弥生期と考えられる残片5点が出土したのみである。因って所産時期等は不明であるが、1号木棺墓等の存在を考えると同時期と考えられる。なお、H17号住居址より鉄鋼の断片と考えられる鉄製品が出土している。本址との重複関係から考えて、2号木棺墓の副葬品とも考えられるが、重複位置からすると可能性は低いと考えられる。



第119図 2号木棺墓実測図

4. 土坑

(1) 1号土坑 (第120図, 写真図版六十三)

本址は、調査区中央部の台地平坦部であるBア-14Grに位置する。H2号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は西側がH2号住居址に削平されている。形態は楕円形で、規模は長軸1.84m・短軸0.71mで、深さは22cmを測る。長軸方位はN-22°-Eを測る。土坑内には東よりに焼土塊が一部検出された。

本址からの出土遺物は図示した土器の他に赤彩された壺破片が出上している。1は高坏か台付甕の脚部で、器面が荒れており塗彩の有無は不明である。本址の所産時期は弥生後期と考えられる。

(2) 2号土坑 (第120図, 写真図版六十三)

本址は、調査区中央部の台地平坦部であるF-ヤ-14、F-モ-14Grに位置する。M1号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しいと考えられるが重複部分が少なく確証を得なかった。残存状態は西側が自然地形の傾斜で削平されている。形態は不整形で、規模は長軸1.70m・短軸0.78m・深さ6cmを測る。長軸方位はN-15°-Wを測る。土坑内には底面に接するように、図示した土器と緻密安山岩の剥片が散らばって出土した。また、土坑北側には焼土が検出された。この焼土は硬質化はしていなかったがよく焼けていた。

本址からの出土遺物は先に述べた土器と緻密安山岩の剥片のみである。図化した2の土器は壺の頸部と考えられるが、器面が荒れていて確定できない。緻密安山岩は11点が出土したが定型化した石器は確認できなかった。ただ、一部に接合できる資料があり、この場で何らかの打ち割り作業が行われたと考えられる。本址の所産時期は弥生期と考えられるが確定はできない。

(3) 3号土坑 (第120図, 写真図版六十三)

本址は、調査区中央部の台地平坦部の北斜面であるB-イ-11、B-ア-11Grに位置する。M2号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状態は南側が水道管とM2号溝状遺構によって削平されている。形態は方形と考えられ、規模は長軸3.80m・短軸1.50m・深さ26.5cmを測る。長軸方位はN-89°-Eを測る。北壁には円形の土坑状の廻り込みが接する。規模は長軸1.10m・短軸0.68m・深さ22.5cmを測る。土坑の底面には焼土の広がりか2カ所検出された。焼土は硬質化はしていなかったがよく焼けていた。

本址からの出土遺物は土坑底面を中心に図示した壺の他に赤彩された蓋片等が出上した。3は甕であり器面が荒れており詳細は不明である。本址の所産時期は弥生後期と考えられる。

(4) 5号土坑 (第120図, 写真図版六十四)

本址は、調査区中央部の南斜面であるF-ホ-19Grに位置する。H18号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古いと考えられるが、住居址の項でも述べたが同時併存の可能性もある。形態は長い楕円形で、規模は長軸1.92m・短軸0.60m・深さ8cmを測る。長軸方位はN-58°-Wを測る。土坑の底面西よりにビットが検出され、規模は径38cm・深さ16.5cmを測る。

本址からの出土遺物は、図示した土器の他に壺破片がある。4は高坏脚部の破片で外面に赤色塗彩が施されている。本址の所産時期は弥生後期と考えられる。

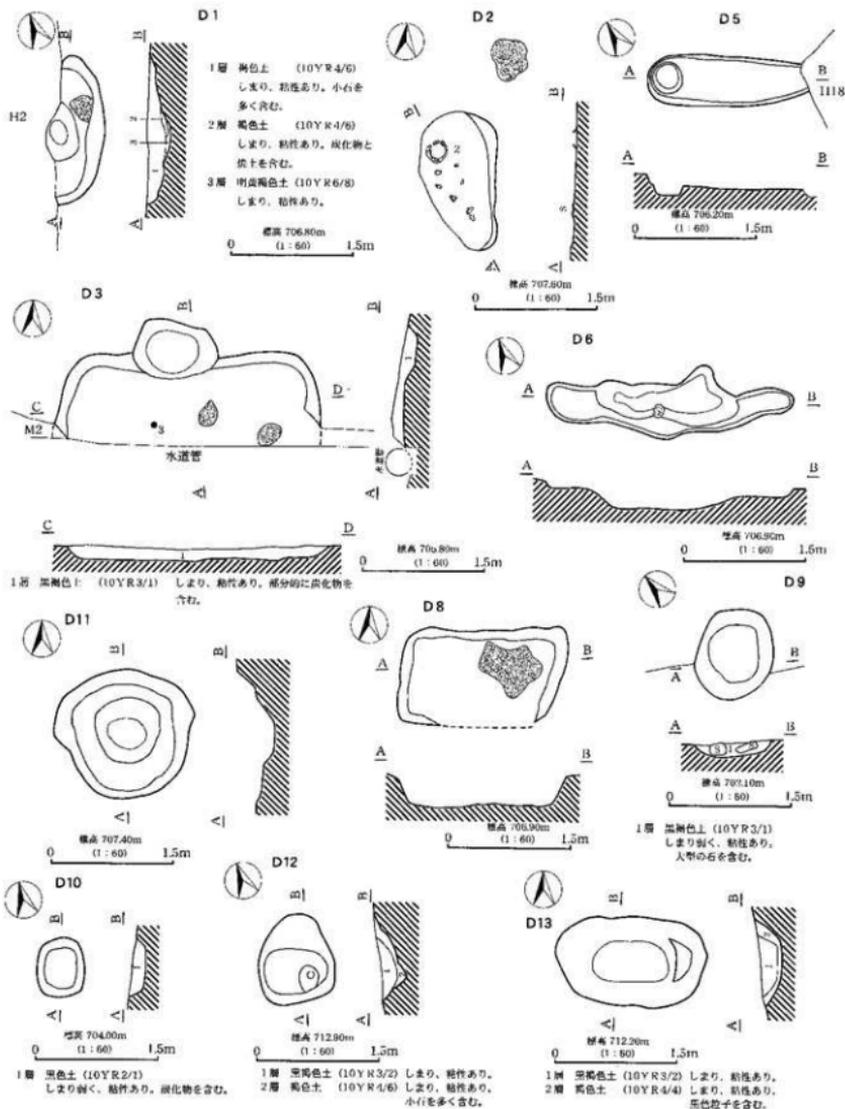
(5) 6号土坑 (第120図, 写真図版六十四)

本址は、調査区中央部の南斜面であるF-ホ-18Grに位置する。形態は東西に細長い不整形で、規模は長軸3.00m・短軸0.66m・深さ42.5cmを測る。長軸方位はN-69°-Wを測る。土坑の底面は凹凸が激しく中央部が一段低くなる。また、底面近くで焼土が検出された。本址からの出土遺物は図示した黒曜石の石鏃が1点あったのみである。因って所産時期は不明である。

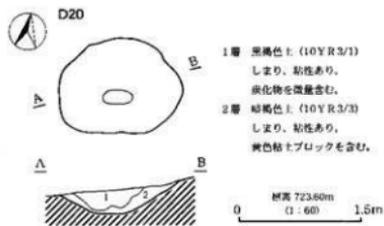
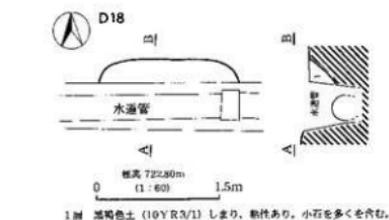
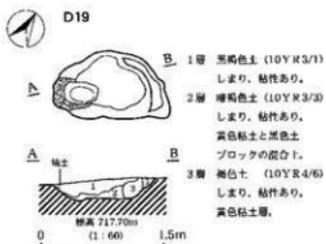
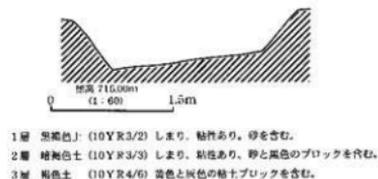
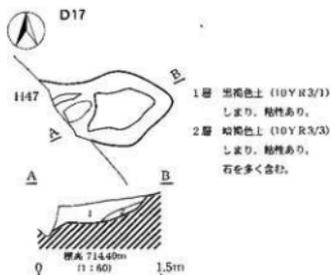
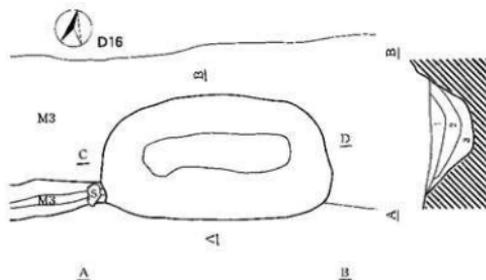
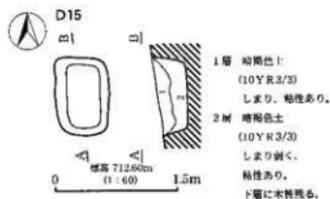
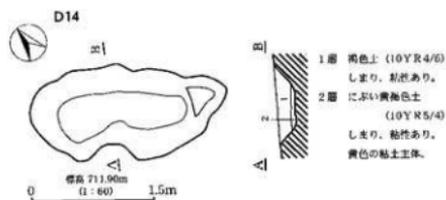
(6) 8号土坑 (第120図, 写真図版六十四)

本址は、調査区中央部の平坦部であるF-メ-16、F-メ-17Grに位置する。M1号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は把握できなかった。形態は東西に長い長方形で、規模は長軸1.86m・短軸1.18m・深さ29cmを測る。長軸方位はN-89°-Eを測る。土坑の底面は平坦で、底面近くで焼土が検出された。

本址からの出土遺物は図示できなかったが壺片が5点あった。所産時期は不明である。



第120図 D1~3, 5, 6, 8~13号上坑実測図



第121図 D14~21号土坑実測図

(7) 9号土坑 (第120図, 写真図版六十五)

本址は、調査区中央部の北斜面であるB-カー-8、B-キ-8Grに位置する。M1号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は把握できなかった。形態は円形で、規模は径1.04m・深さ13~23.5cmを測る。長軸方位はN-39°-Eを測る。土坑の底面は平坦で、底面近くに手のひら大の礫が2点出土した。

本址からの出土遺物は図示できなかったが裏片が3点あった。所産時期は不明である。

(8) 10号土坑 (第120図, 写真図版六十五)

本址は、調査区中央部の北斜面であるB-ア-10Grに位置する。M1号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は把握できなかった。形態は長楕円形で、規模は長軸0.72m・短軸0.58m・深さ19.5cmを測る。長軸方位はN-18°-Eを測る。土坑の底面は平坦で、覆土には炭化物が混入していた。

本址からの出土遺物は図示したものの他に壺小片があった。5は壺の底部部分である。6は小型の鉢で内外面赤色塗彩を施している。これらの遺物より本址の所産時期は弥生後期と考えられる。

(9) 11号土坑 (第120図, 写真図版六十五)

本址は、調査区中央部の南斜面であるF-ヤ-15、F-ユ-15Grに位置する。H3号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。形態は円形で、規模は径1.64m・深さ47.5cmを測る。土坑の底面は二段の掘り込みがなされていた。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(10) 12号土坑 (第120図, 写真図版六十五)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF-テ-9Grに位置する。形態は不整形で、規模は南北軸1.08m・東西軸0.94m・深さ31.5cmを測る。土坑の底面にはピットが1カ所確認された。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(11) 13号土坑 (第120図, 写真図版六十五)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF-テ-10、F-テ-11Grに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸1.84m・短軸1.04m・深さ35cmを測る。長軸方位はN-89°-Wを測る。土坑の底面はほぼ平坦で東側に一部テラスが確認された。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(12) 14号土坑 (第121図, 写真図版六十五)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF-ト-10、F-ト-11Grに位置する。形態は不整形で、規模は長軸2.42m・短軸1.14m・深さ26cmを測る。長軸方位はN-59°-Wを測る。土坑の底面はほぼ平坦で東側に一部テラスが確認された。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(13) 15号土坑 (第121図, 写真図版六十六)

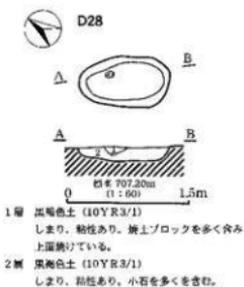
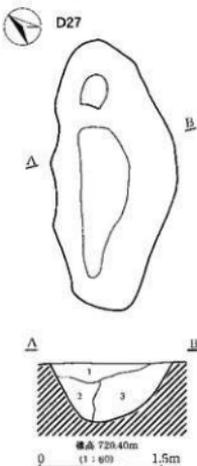
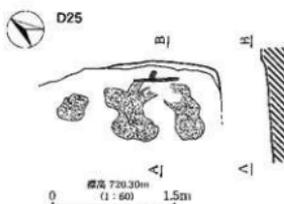
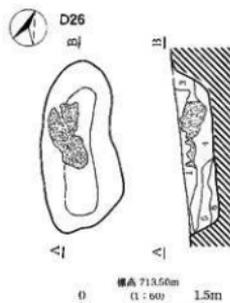
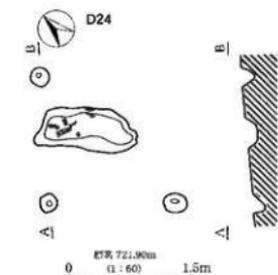
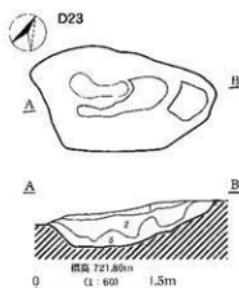
本址は、調査区中央部の尾根上であるF-チ-10Grに位置する。形態は隅丸長方形で、規模は長軸0.98m・短軸0.66m・深さ41.5cmを測る。長軸方位はN-3°-Wを測る。土坑の底面はほぼ平坦で板状の木質が一部検出された。本址からの出土遺物は無かったが、覆土の状況から近世以降の所産と考えられる。

(14) 16号土坑 (第121図, 写真図版六十六)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF-ス-7、F-セ-7Grに位置する。M3号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。形態は隅丸長方形で、規模は長軸2.74m・短軸1.53m・深さ61.5cmを測る。長軸方位はN-82°-Eを測る。土坑の底面はほぼ平坦で、覆上の堆積状況は一部水が溜まったような状況を示していた。

また、底面も傾斜の低い西側が下がっていた。本址は完掘時より差し水が溜まり、丘陵上であるが常に水の溜まった状態であった。また、あふれた水はM3号溝状遺構を通り、丘陵下へ流れていた。

本址からの出土遺物は無かったが、覆土の状況から近世以降の所産と考えられ、遺構の性格も農業等に使用するための所謂「集水遺構」的なものと考えられる。



第122図 D22～28号土坑実測図

(15) 17号土坑 (第121図, 写真図版六十六)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF-ス-2Grに位置する。H47号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。形態は不整形で、規模は長軸1.40m・短軸0.90m・深さ35.0cmを測る。長軸方位はN-86°-Eを測る。土坑の底面は起伏がある。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明であるが、遺構の形態から自然木の倒木痕と考えられる。

(16) 19号土坑 (第121図, 写真図版六十六)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF-ケ-4、F-コ-4Grに位置する。形態は不整形で、規模は長軸1.34m・短軸0.82m・深さ27cmを測る。長軸方位はN-57°-Eを測る。覆土は3層に分かれ、埋め戻しのような堆積状況であった。また、底面西側より焼土塊が検出された。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(17) 20号土坑 (第121図, 写真図版六十七)

本址は、調査区中央部の尾根上東端であるI-ユ-38・39、I-ヨ-38・39Grに位置する。形態は円形で、規模は径1.50m・深さ45.5cmを測る。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(18) 21号土坑 (第121図, 写真図版六十七)

本址は、調査区中央部の尾根上東端であるI-ム-39、I-ム-40Grに位置する。形態は円形で、規模は径1.10m・深さ54cmを測る。第1層には炭化物が微量混入していた。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(19) 22号土坑 (第122図, 写真図版六十七)

本址は、調査区中央部の尾根上東端であるJ-モ-1Grに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸1.05m・短軸0.74m・深さ33cmを測る。長軸方位はN-45°-Wを測る。覆土は2層に分かれ、第1層には炭化物が微量混入していた。また、本址の内縁には不整形のピットが東西に検出され、本址との関係が推測される。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(20) 23号土坑 (第122図, 写真図版六十七)

本址は、調査区中央部の尾根上東端であるF-ア-2Grに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸2.24m・短軸1.26m・深さ70cmを測る。長軸方位はN-74°-Eを測る。覆土は3層に分かれ、第2層には炭化物が微量混入していた。上坑底面は起伏があり、西側が低くなっていた。本址からの出土遺物は櫛状波状文を施した甕小片が数点出土したのみである。因って所産時期は不確定であるが、弥生期と推定される。

(21) 24号土坑 (第122図, 写真図版六十七)

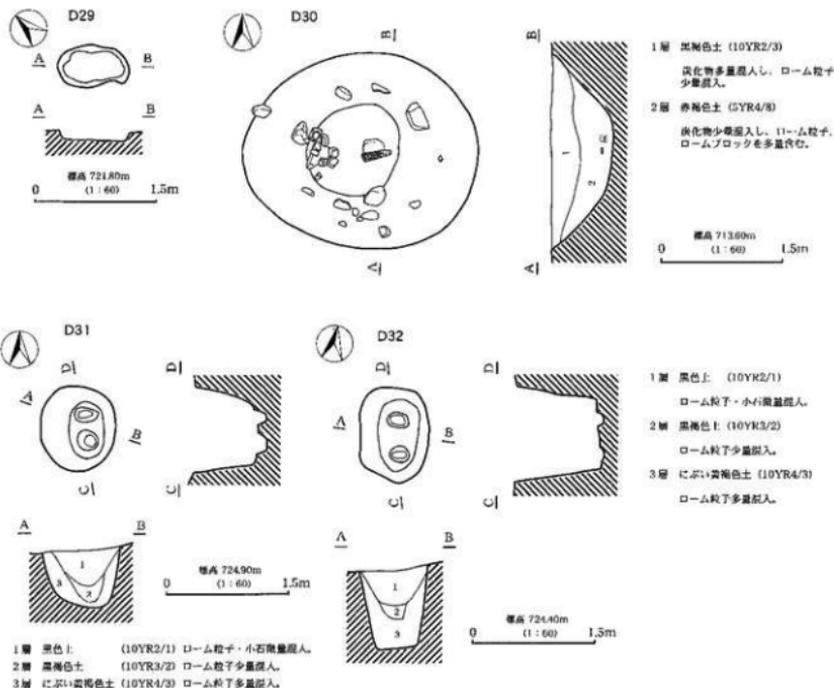
本址は、調査区中央部の尾根上東端であるF-イ-1Grに位置する。形態は不整形で、規模は長軸1.16m・短軸0.50m・深さ13.5cmを測る。長軸方位はN-38°-Wを測る。土坑底面は平坦で、炭化材が出土した。また、周辺部にはピットが検出され、これらピット群と関係があるものと考えられる。本址からの出土遺物は甕小片が出土したのみである。所産時期は不確定であるが、弥生期と推定される。

(22) 25号土坑 (第122図, 写真図版六十七)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF-カー1、F-オー1Grに位置する。形態は長方形で、規模は長軸2.26m・短軸0.92m・深さ9cmを測る。長軸方位はN-40°-Wを測る。土坑底面は平坦で、炭化材と焼土塊が検出された。炭化材は建築材の部材のような長さであり、焼土もよく焼けていた。本址からの出土遺物は図示した8の凹基石のみで、所産時期も不明である。しかし、周辺の遺構の状況から或いは住居址の残存部とも考えられる。ただ、周辺部を精査したが、柱穴や入り口施設等のピットは検出されなかった。

(23) 26号土坑 (第122図, 写真図版六十八)

本址は、調査区中央部の南斜面であるF-ソ-10Grに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸2.04m・短軸0.87m・深さ48cmを測る。長軸方位はN-25°-Wを測る。底面は平坦で、中間層に焼土塊が検出された。この焼土塊はぼろぼろしており、その場に破壊された様な状況であった。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。



第123図 D29～32号土坑実測図

(24) 27号土坑 (第122図, 写真図版六十八)

本址は、調査区中央部の尾根上であるE-カ-39、E-キ-39、E-キ-40Grに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸3.24m・短軸1.50m・深さ83.5cmを測る。長軸方位はN-52°-Eを測る。土坑底面は平坦で、東側にテラスがある。本址からの遺物は弥生時代の甕片と土師器の内面黒色処理された灰片が出土しているが、所産時期は不明である。

(25) 28号土坑 (第122図, 写真図版六十八)

本址は、調査区中央部の尾根平坦部であるF-ヨ-13、F-ヨ-14Grに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸1.12m・短軸0.63m・深さ18cmを測る。長軸方位はN-40°-Wを測る。土坑底面は平坦で、1層下部に焼土塊が検出された。この焼土は上面がよく焼けていた。本址からの出土遺物は無く、所産時期は不明である。

(26) 29号土坑 (第123図)

本址は、調査区中央部の尾根上東端であるF-ア-2Grに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸0.88m・短軸0.52m・深さ15cmを測る。長軸方位はN-41°-Wを測る。土坑底面は平坦であった。本址からの出土遺物は無く、所産時期は不明である。

(27) 18号土坑 (第121図, 写真図版六十六)

本址は、調査区中央部の尾根上であるE-ア-イ-33Grに位置する。水道管に削平され、形態・規模不明である。

(28) 30号土坑 (第123図, 写真図版六十八)

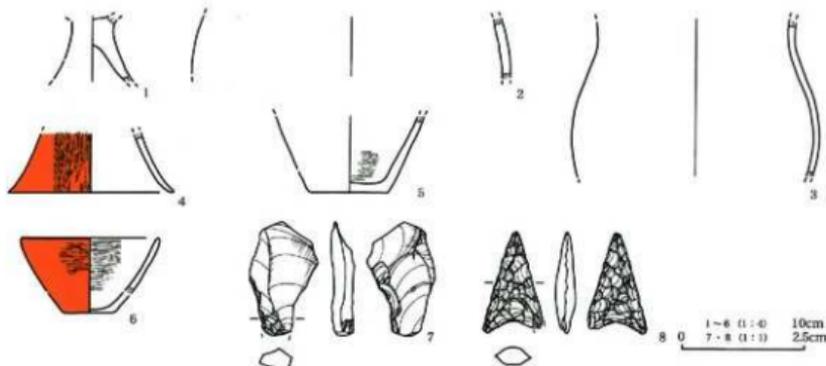
本址は、南側調査区の北端であるJーリー-27、Fーア-27Grに位置する。形態は円形で、規模は径2.88m・深さ91cmを測る。覆土は2層に分かれ、炭化物が多く含まれていた。土坑底面はすり鉢状を呈し、人頭大から拳大の礫が多く出土した。本址からの出土遺物は礫と混ざって図示はできなかったが赤彩された壺・高坏片や櫛掻波状文を施した甕片等が多く出土した。因って、所産時期は弥生後期と考えられる。本土坑の性格は、本址が検出された場所が調査範囲内においては谷地形の部分であり、降雨の後は最後まで水が溜まっていた事等考えると、集水的な遺構と考えられる。

(29) 31号土坑 (第123図, 写真図版六十八)

本址は、南側調査区の北端であるJーヒー-28Grに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸1.04m・短軸0.92m・深さ91.5cmを測る。長軸方位はN-1°-Eを測る。覆土は3層に分かれていた。土坑底面にはピットが2カ所検出された。規模は径24~30cm・深さが16~22cmを測る。本址からの出土遺物は小片ではあるが赤彩された甕片や甕片がまとまって出土した。本土坑の性格は形造的に所謂「落とし穴」と考えられ、所産時期は出土遺物から弥生後期と考えられるが、弥生期の落とし穴は類例も少なく確証を得ない。

(30) 32号土坑 (第123図, 写真図版六十八)

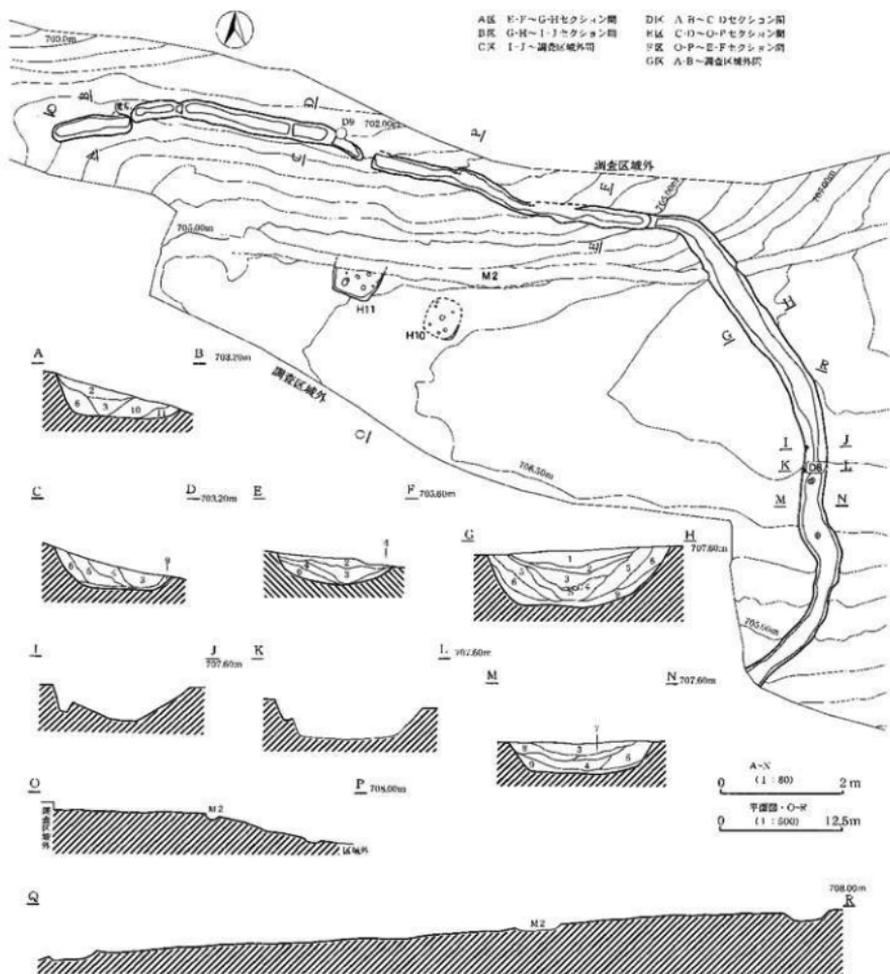
本址は、南側調査区の北端であるJーフ-28Grに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸1.14m・短軸0.84m・深さ110cmを測る。長軸方位はN-10°-Wを測る。覆土は3層に分かれていた。土坑底面にはピットが2カ所検出された。規模は径20~26cm・深さが6.5~8cmを測る。本址からの出土遺物は無かった。本土坑の性格は31号土坑と同じく形造的に所謂「落とし穴」と考えられる。所産時期については31号土坑と同じく現段階では保留したい。



第124図 D1・2・3・5・6・10・25号土坑出土遺物実測図

No.	群 属	法 量		成 形・調整・文 様				色 調	備 考	出土位置
		口径(長)	底径(短)	外 面	内 面	重 量				
1	高坏のフ 台付葉	-	-	5.0	不明	不明	不明	5YR5/6 (黄)	完全実測	D1
2	壺フ	-	-	6.9	不明	不明	不明	5YR5/6 (明赤褐)	図録実測	D2
3	甕	-	-	12.5	不明	不明	不明	7.5YR7/6 (橙)	図録実測	D3、1区
4	高坏	-	(12.5)	(4.8)	赤色塗彩	5YR7/4	不明	10R4/6 (赤)	図録実測	D5
5	甕	-	6.5	(6.2)	不明	ヘラミガキ	不明	5YR5/6 (明赤褐)	完全実測	D10
6	鉢	(11.4)	(4.2)	(6.1)	ヘラミガキ、赤色塗彩	5YR7/4、赤色塗彩	不明	10R4/6 (赤)	完全実測	D10
No.	群 属	素 材	保存率	最大径	最大幅	最大厚	重 量	所 産		出土位置
7	石 鏡	黒曜石	完好	23.4	14.5	4.2	1.10			D5
8	西脇石鏡	チャート	右脇欠損	20.3	12.6	4.2	0.60	西脇の僅分に赤色顔料?付着		D25

第71表 D1・2・3・5・6・10・25号土坑出土遺物観察表



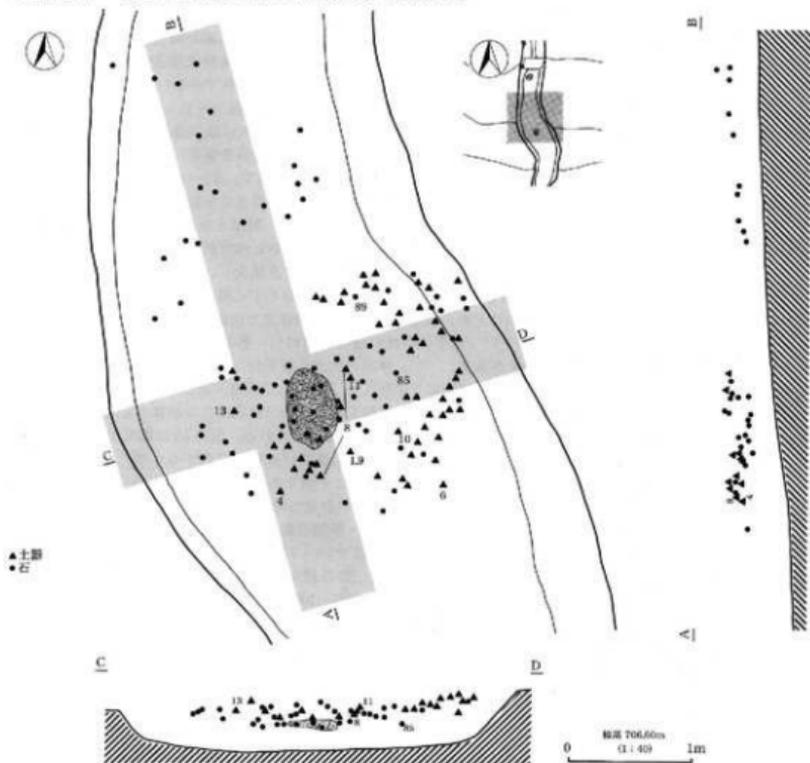
- | | | | |
|---------------------|-------------------------|---------------------|--------------------------------|
| 1層 灰黄褐色土 (10Y R5/2) | しまり、粘性あり。土層を含む。 | 7層 紫褐色土 (10Y R3/4) | しまり、粘性あり。小石を含む。 |
| 2層 灰黄褐色土 (10Y R4/2) | しまり、粘性あり。黄色の粘土ブロックを含む。 | 8層 褐色土 (10Y R4/D) | しまり、粘性あり。小石を含む。 |
| 3層 褐色土 (10Y R2/1) | しまりやや弱く粘性あり。下層に土部・石を含む。 | 9層 紫褐色土 (10Y R5/8) | しまり弱く、粘性あり。粘土ブロック主体。 |
| 4層 灰黄褐色土 (10Y R4/2) | しまり、粘性ややあり。炭化物を含む。 | 10層 紫褐色土 (10Y R3/1) | しまり、粘性あり。炭化物を含む。草根が強い。素人の石を含む。 |
| 5層 灰黄褐色土 (10Y R5/2) | しまり弱く、粘性あり。土層を含む。 | 11層 紫褐色土 (10Y R3/1) | しまり、粘性あり。小石を含む。 |
| 6層 褐色土 (10Y R5/6) | しまり弱く、粘性あり。小石を含む。 | | |

第125図 M1村溝状遺構横断面図

5. 溝状遺構

(1) M1号溝状遺構 (第125～134回, 写真図版六十九～七十三)

本址は、調査区中央部西端の尾根がもつとも平坦となる、F・B区で検出された、M2号溝状遺構とD8号土坑と重複関係にありM2号溝状遺構より本址の方が古い、D8号土坑との新旧は把握できなかった。残存状態は南側が調査区外となり、また、北側部分は斜面地となるため一部溝が浅くなりどぎれた様な状況であった。特に西側先端部は明らかに掘り込みが立ち上がり、尾根中央部に土塊状の空間があったと推定される。形態は東側尾根を切断し北側斜面を直進し、丘陵先端で尾根を切断するように巡る所謂「環濠」の形態である。平面形は南側部分が調査区域外となるが、検出部分から推定すると尾根に沿うような歪な楕円形を呈すると考えられる。規模は長軸92m・短軸が推定で50mを測る。溝に囲まれた部分の面積は検出部分で1757㎡で、全体は推定で約3000㎡を測ると考えられる。溝断面形態は底面が平坦なU字形で壁立ち上りは緩やかであったが、深さがあるため梯子等を使用しないと上り下りは不可能であった。溝の規模は最大幅が東側の尾根中央部で幅3.05m、深さ1.16mを測る。溝幅は東側と南側斜面部が比較的広く平均2m以上の幅が確認された。しかし、深さについては南側斜面部で自然地形の傾斜による削平か深さ25～30cmという部分も存在した。北側斜面の溝幅は東・南部と比べると狭く1.6～2.15m、深さが29～90cmとばらつきがあった。また北側斜面部分の底面は平坦ではなく、長い楕円形土坑が連続していくような状況で、一部掘り残したようなテラス部分が多く存在した。

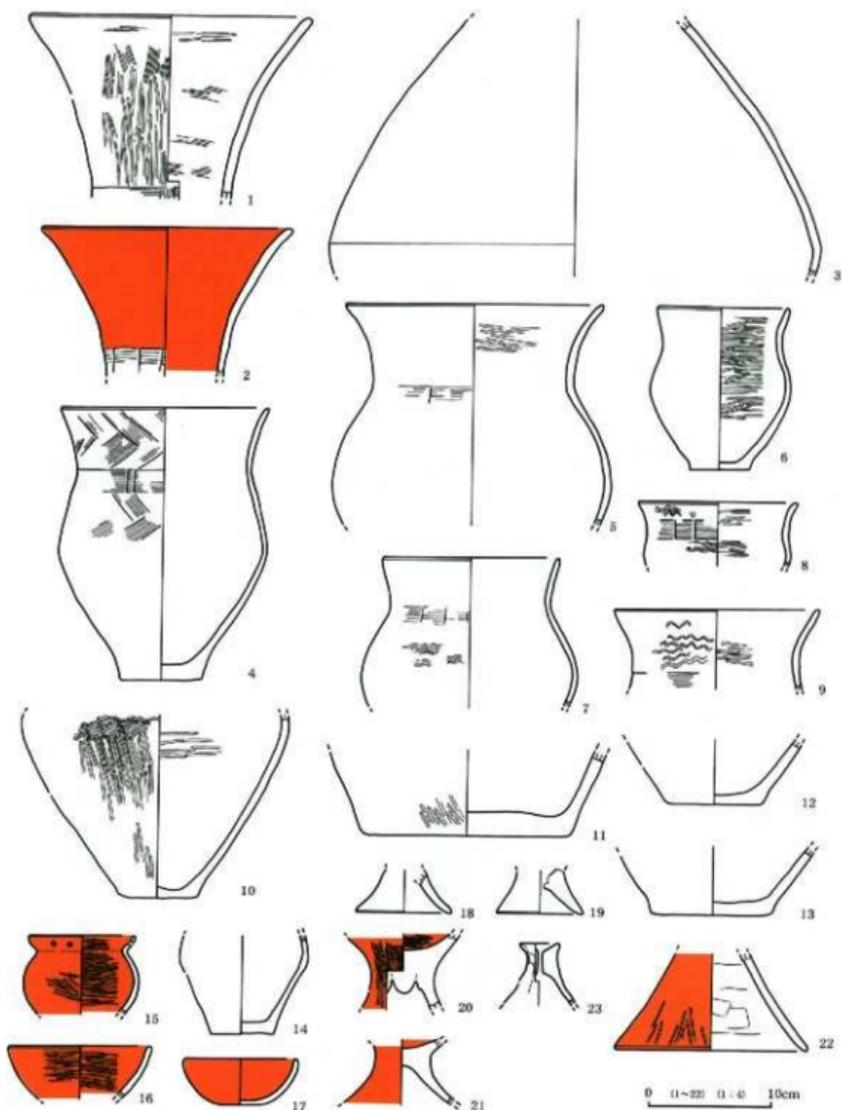


第126図 M1号溝状遺構遺物出土分布図

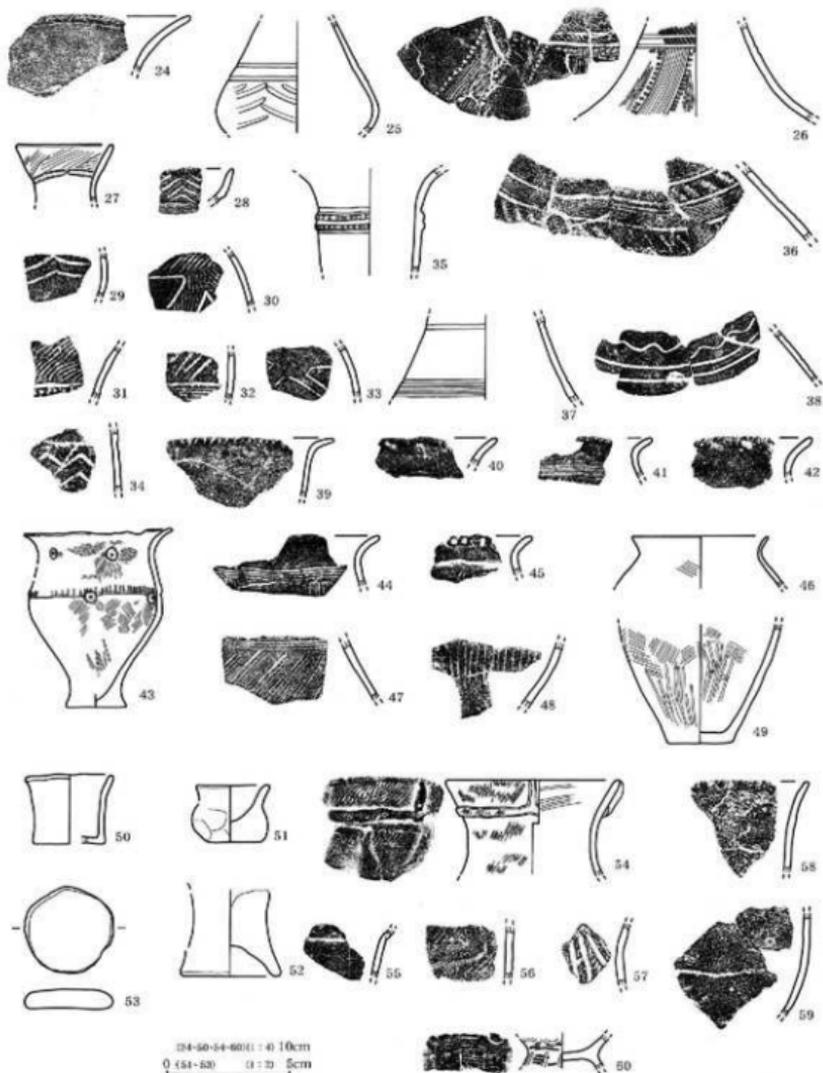
本址からの遺物はセクションラインGH間と遺物出土分布図で示したMN間が最も多く出土した。特に弥生後期箱清水式の土器群と石罌類はGH間セクションの第2層と3層から集中的に出土した。これら遺物と混ざって硬化した焼土範囲も検出された。また、3層と4層間には拳人から人頭大の礫群が存在し、これらに混じて黒曜石の剥片も出土した。次に第4層下部からは図示した弥生中期の栗林式土器が出土した。出土総量は箱清水式土器の1/4程で器形全体を把握できる物はほとんどなかった。因って、上層部分に箱清水式土器が一括廃棄されたような状態で出土すること、清下層部よりの出土は栗林式土器のみで箱清水式土器が全く伴わない事、場所によっては遺物が出土する上層と下層間に時間隔を推定させる間層(7、8層)が確認できる(MN間)事などから、本溝の削掘は中期栗林段階と判断し、住居址としてはH10・11号住居址が併存したと考えられる。

図示した遺物は、土器、石器、玉類を含め108点である。1～22は箱清水式土器と考えられる。主にA区とC区からまとまって出土した。しかし、これら土器群は復元作業を経て全容を把握できる状態にはなるものの完形個体となる土器はなく、また、二次焼成を受けている土器片も多かった。1と2は壺の口縁部である。1は無彩、2は赤彩が施されている。頸部には1が櫛描横線文と垂下文、2が櫛描夔状文を施している。3は壺胴部の破片で無彩と考えられるが、二次焼成を受けているようでもあり不確定である。4～14までは埴と考えられる。4は全体の1/2程が残存していた。施文は櫛描夔状文と波状文の組み合わせと櫛描夔状文と櫛描羽状文の組み合わせのものがある。また、6は黒く焙いた様な土器で施文が確認できなかった。器形は通常の壺であり、或いは栗林式の壺であり、24は11層部に縄文を施文、25は胴部に2条の櫛描横線文と連弧文を施す。26は頸部の地紋として単節縄文を施し2条の篋波状線文、胴部に櫛描垂下文と篋刺突を施す。28は口縁部に地紋縄文と篋山形文を施す。29は篋波連弧文、32は篋斜走文と横線文、櫛描横線文を施す。35は頸部に3条の篋横線文を施し、空間部に刻みを施す。36は櫛刺突と篋横線文、37は篋横線文と櫛描横線文を施す。38は篋横線文と篋波状文を施す。39～49は栗林式の壺であり、施文はそれぞれ口唇部の刻みや押捺が施され、胴部に櫛描の横線文、垂下文、斜走文が施される。43は唯一全容が把握できる資料で、底部と胴部の一部を欠損する。口唇部と胴部中央に刻み、胴部上半には櫛描波状文と垂下文、胴部下半には縦方向の櫛描羽状文を施し、円形浮文を貼付している。次に栗林式成立前段階の土器群として、27・31・33・34・54・60がある。まず27は壺の口縁部でかすれているが縄文を施文し、太い沈線区画している。31は壺口縁部で単節縄文を施文し、沈線区画と刺突を施す。33は沈線区画の中に縄文を施文し、擦り消し縄文風であるが器面が荒れていて確証を得ない。34は太頭の壺胴部破片で篋横線文と山形文で区画された中に縄文を施文する。54は太頭の赤い縁部で、口縁部直下に「逆T」字状の隆帯を貼付し、無節の縄文を全体に施文する。60は台付鉢の鉢と脚部接合部で地紋に単節縄文を施文し「U」字状の沈線区画を行う。これらの土器群は施文及び器形の特徴より群馬県域で認識されつつある所謂「神保富士塚形式」に似る。30は壺の胴部と考えられ沈線区画内に縄文を施文する。この沈線区画は宮ノ台式土器の「ハ」字文に似ており、宮ノ台式よりの影響とも考えられる。55は壺口胴部の破片で、形状より松本市石行遺跡第1類に平行する資料と考えられる。56・57は縄文土器、58・59は無紋の薄い土器であるが位置づけは不明である。50はコップ型の土器で口縁部は収束するか絞くかは不明瞭である。51はミニチュアの土器で器種は鉢か。中期・後期に属するかは不明である。53は土製円盤で器種は不明であるが、土器片からの転用である。52はミニチュアの高環か台付壺の脚部と考えられる。61と62は硬玉製の管玉で61は完形、62は約1/4程が残っている。63・72・74は有茎石鏃、凹茎石鏃・石鏃未製品である。石材は70の珪柱岩である。73は両極石器で完形である。75・76・78・82は刃器で76・78はガラス質安山岩である。今回の本址周辺ではD2号土坑をはじめ、製品とはならないがガラス質安山岩の剥片が出土している。80・81は横刃型の刃器でほぼ完形である。本遺跡からの横刃型刃器の出土は少ない。85・86は敲石と磨石の両方の機能を持った石器で、85は一括廃棄されたような箱清水式土器群とともに出土した。83は磨製石斧である。84は磨製石器の未製品で正面と右側面に研磨面がある。87・88・90・91は磨石、89は中央部表裏に敲き痕の残る敲石である。92～106は打製石斧で形態より所謂「石鏃」と呼ばれる形態の物である。いずれも幅広くしゃもじの様な形態の物が多い。92・95・97・100・101・102が完形であるが、100は小振りて形態も類型を呈し他の物とは形態的に異なる。107は千枚岩で使用痕や加工痕は確認できないが、磨製石鏃等の原材料と考えられる。108は器種不明であるが、全体に被熱し、側面に敲打痕が観察できる。

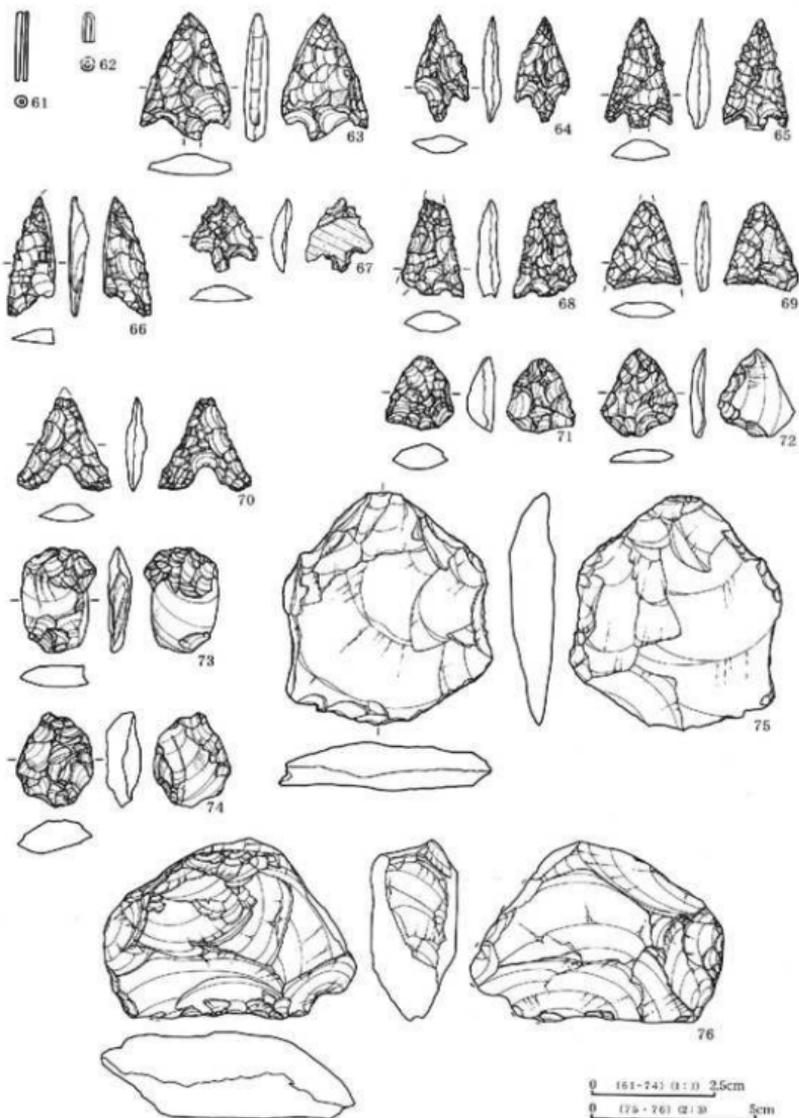
これらの出土遺物より、本址は弥生中期後半に削掘され、後期段階になってからも溝状部分は凹であり、弥生後期遺物の一括廃棄場所としての使用が考えられる。



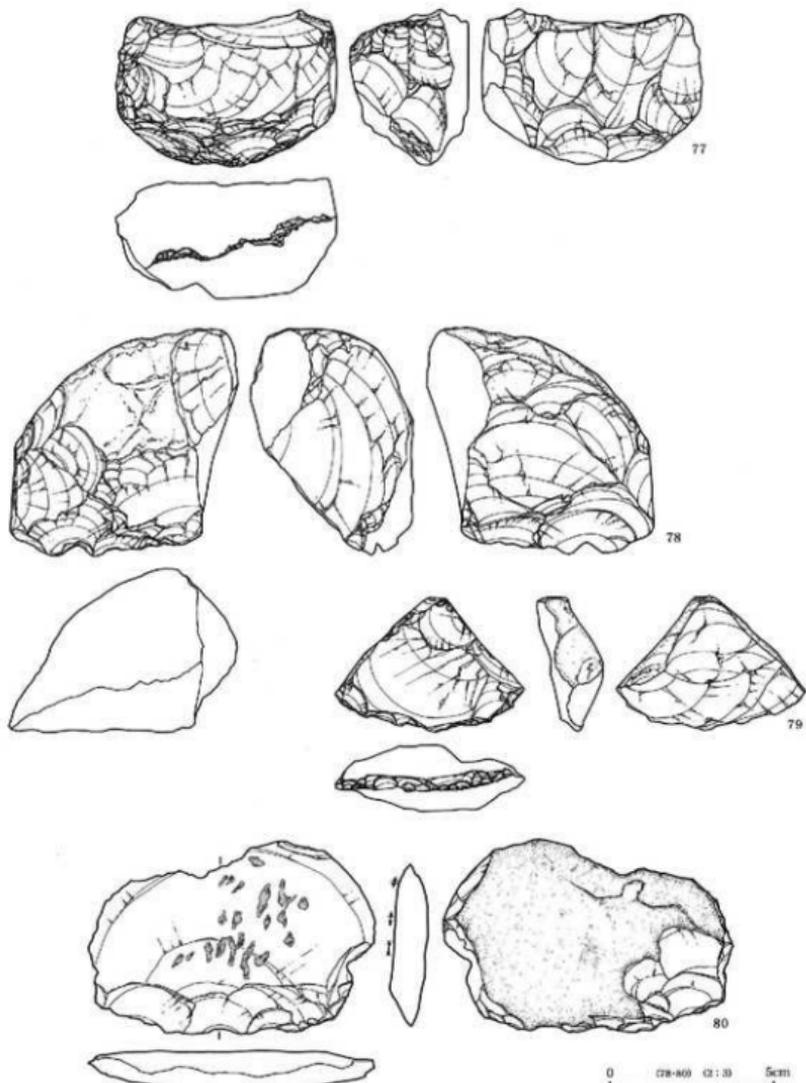
第127图 M1号溝状竖坑出土器物剖面图 (1)



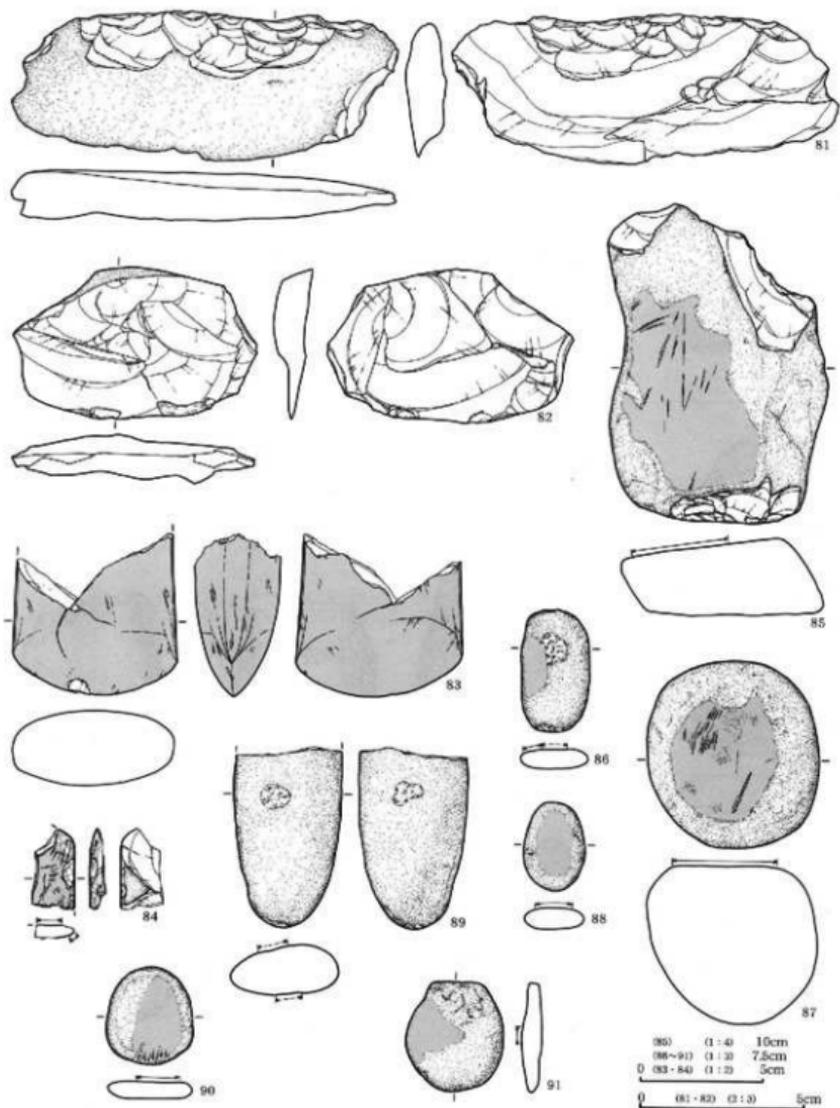
第128图 M1号满铁遗址出土器物实例图(2)



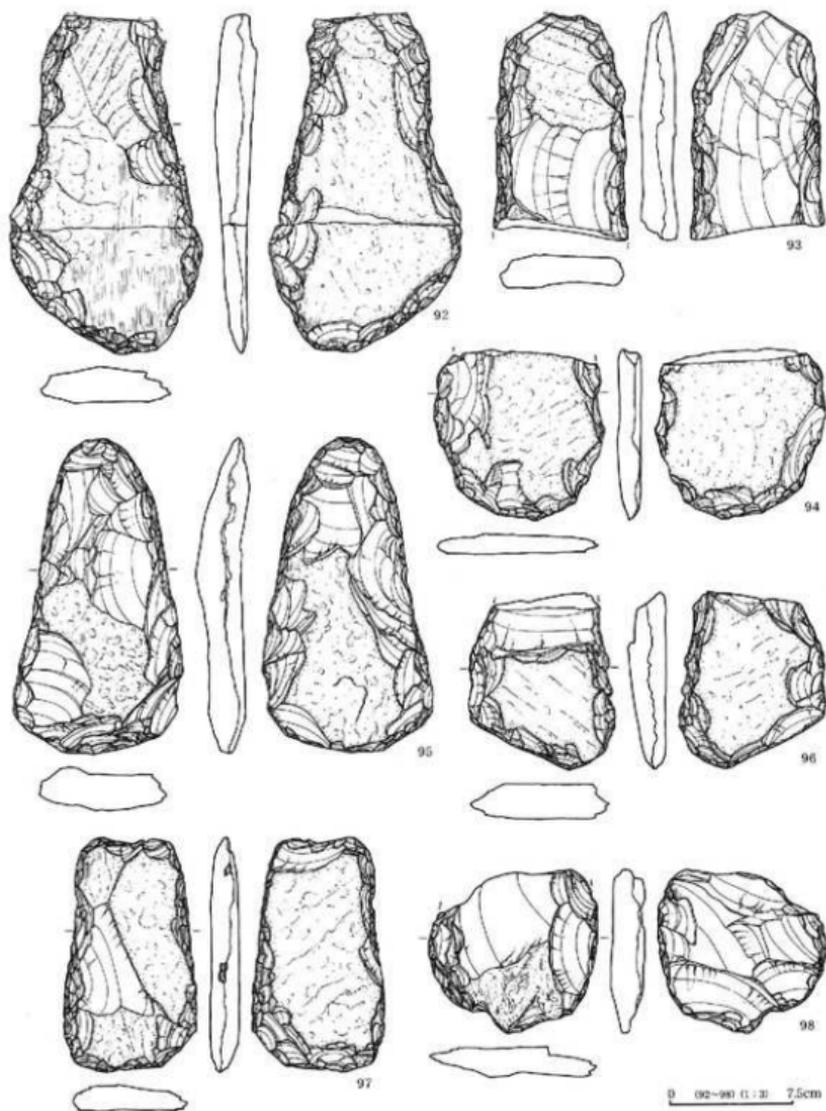
第129图 M1号薄状遗物出土遗物实景图(3)



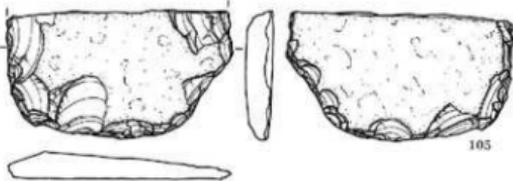
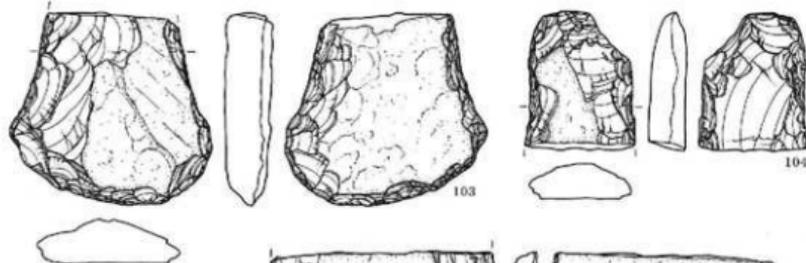
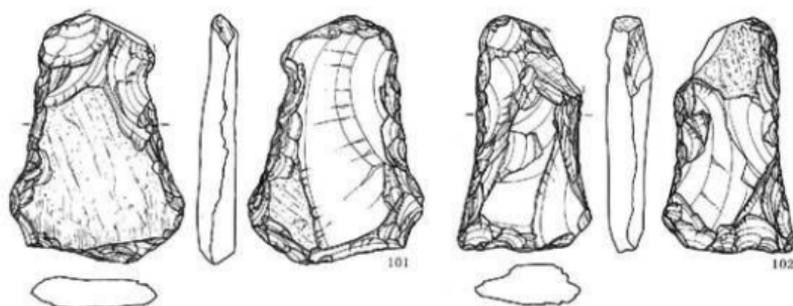
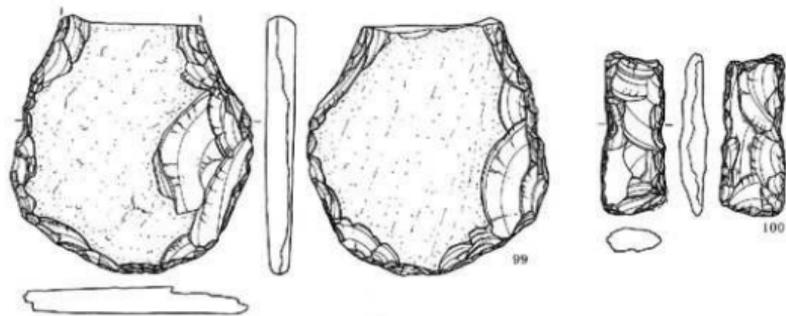
第130图 M1号满状遗址出土遗物实例图(4)



第131图 M1号沟状竖坑出土器物类图(6)

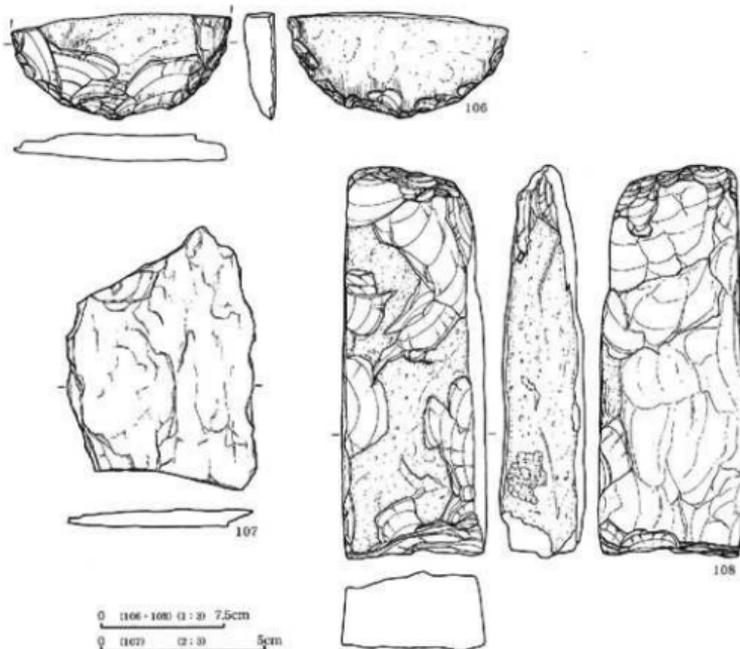


第132 图 M1号溝状遺構出土遺物実測図(6)



0 99-100 1:30 7.5cm

第133图 M1号晋侯遗址出土遗物实例图(7)



第134図 M1号溝状遺構出土遺物実測図(8)

No.	品類	法		数量		成形・調整・文様		色調	備考	出土位置
		1) 断面	2) 形状	断面	形状	外	内			
1	蓋	(28.1)	—	(14.8)	ハケ目、ヘラミガキ、赤色塗彩、 網線模短文、網線模下文	ハケ目、ヘラミガキ、赤色 塗彩		10R4/8 (赤)	完全実形	C区
2	蓋	(20.4)	—	(12.1)	網線模短文(1連止め)、赤色塗彩	赤色塗彩		10R4/8 (赤)	回転実形	A区2層
3	蓋	—	—	(20.8)	不明	不明		5YR6/4 (2.65) (黄)	回転実形	A区2層
4	甕	(17.6)	(6.8)	32.2	網線斜状文、網線縦状文(2連止め?)	不明		7.5YR7/4 (2.65) (黄)	回転実形	C区3層
5	甕	(21.6)	—	(17.9)	網線縦状文	ヘラミガキ		5YR7/4 (2.65) (黄)	回転実形	A区2層
6	甕	10.8	4.9	13.3	支脚をつけらぬに造成	ヘラミガキ		7.5YR3/1 (黒黒)	完全実形	
7	甕	(14.5)	—	(12.1)	網線斜状文、網線縦状文(1連止め)	不明		5YR6/8 (黄)	回転実形	A区3層
8	甕	(13.0)	—	(5.2)	網線斜状文(1連止め)、網線縦状文	ヘラミガキ		7.5YR7/6 (橙)	回転実形	C区3層
9	甕	(16.7)	—	(6.5)	網線模短文、網線模状文	ヘラミガキ		7.5YR6/4 (2.65) (黄)	回転実形	C区3層
10	甕	—	6.5	(14.9)	網線斜状文、ヘラミガキ	ヘラミガキ		7.5YR6/2 (灰黄)	完全実形	C区3層
11	甕	—	(17.0)	(6.6)	ヘラミガキ	不明		7.5YR7/6 (橙)	回転実形	C区3層
12	甕	—	7.7	(5.0)	不明	不明		5YR6/8 (黄)	完全実形	A区3層
13	甕	—	9.9	(5.2)	不明	不明		7.5YR7/3 (2.65) (黄)	完全実形	C区3層
14	甕?	—	5.1	(8.0)	不明	不明		5YR6/8 (黄)	完全実形	A区2層
15	小型甕	(8.0)	—	(6.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩	5YR7/1、赤色塗彩		10R4/8 (赤)	回転実形 構成後、穿孔	A区2層
16	鉢	(11.6)	—	(4.2)	ヘラミガキ、赤色塗彩	5YR7/1、赤色塗彩		10R4/8 (赤)	回転実形	E区
17	鉢	(9.0)	—	3.8	赤色塗彩	赤色塗彩		2.5YR6/8 (橙)	回転実形	B区
18	台付甕	—	(7.8)	(3.5)	不明	不明		7.5YR7/8 (橙)	回転実形	A区2層
19	台付甕	—	(7.0)	(3.7)	不明	不明		5YR7/8 (橙)	回転実形	A区

第72表 M1号溝状遺構出土遺物観察表(1)

No.	品類	法		成用・器類・文様		色調	備考	出土位置			
		口取先/底付部	器底(口)	外面	内面						
20	高坪	-	-	(5.7) ハウミガキ、赤色塗彩	フシキ、赤色塗彩、 脚部ナデ	10R4/8 (赤)	完全実用	A区2層			
21	高坪	-	-	(4.6) 赤色塗彩	丹部赤色塗彩、 脚部不明	10R5/8 (赤)	完全実用	B区			
22	高坪	-	(15.8)	(7.9) ハウミガキ、赤色塗彩	ハウミガキ	10R4/8 (赤)	ほぼ実用	A区2層			
23	甕	3.2	-	(4.8) ナデ	ナデ	5YR7/6 (黄)	完全実用	E区			
24	甕	-	-	(4.5) ナデ、口唇部陶文	ナデ	7.5YR7/4(赤黄)	新南実用	A区4層			
25	甕	-	-	(9.2) ハウ襷織文、ハウ襷織文	本明	7.5YR7/6 (黄)	ほぼ実用	B区2層			
26	甕	-	-	(7.6) 陶文、ハウ襷織文、襷織系下文、 ハウ襷織、ハウミガキ	ナデ	2.5YR6/8 (黄)	ほぼ実用	B区			
27	甕	7.9	-	(4.7) 陶文LR? 平直竹管による沈部	ナデ	5YR6/6 (黄)	完全実用 (東林前段階)	A区4層			
28	甕	-	-	(2.8) ハウ襷織文、陶文?	ナデ	5YR6/6 (黄)	新南実用	D区			
29	甕	-	-	(3.6) ハウ襷織文	ナデ	5YR7/4 (赤黄)	新南実用	C区			
30	甕	-	-	(1.8) 陶文、ハウ襷織文	本明	5YR5/6 (明赤)	新南実用(古?)	C区			
31	甕	-	-	(4.5) 陶文、ハウ襷織文、ハウ襷織 (3.8) 襷織陶文、ハウ襷織文、 ハウ襷織文	ハウミガキ 不明	5YR6/6 (黄)	新南実用	C区			
33	甕	-	-	(4.4) 陶文+ハウ襷織文	本明	5YR5/6 (明赤)	(神宮富士塚?)	C区			
34	甕	-	-	(4.5) 陶文、ハウ襷織文、ハウ襷織文	ナデ	7.5YR4/3 (黄)	(神宮富士塚?)	不明			
35	甕	-	-	(8.1) 陶文、ハウ襷織文	本明	5YR7/6 (黄)	ほぼ実用	C区			
36	甕	-	-	(5.5) 襷織陶文、襷織陶文、ハウ襷織文	ナデ	7.5YR7/6 (黄)	新南実用	B区			
37	甕	-	-	(6.7) 襷織陶文、ハウ襷織文	ナデ	7.5YR7/6 (黄)	ほぼ実用	B区			
38	甕	-	-	(3.9) ハウ襷織文、ハウ襷織文	ナデ	2.5YR7/6 (黄)	ほぼ実用	B区2層			
39	甕	-	-	(1.8) 不明、口唇部陶文	本明	5YR3/2 (暗赤)	新南実用	D区			
40	甕	-	-	(2.3) ナデ、口唇部陶文	ナデ	5YR3/1 (暗赤)	新南実用	C区			
41	甕	-	-	(3.0) 襷織陶文、口唇部陶文	ナデ	7.5YR7/4(赤黄)	新南実用	C区			
42	甕	-	-	(3.1) ナデ、口唇部陶文	ナデ	5YR3/1 (暗赤)	新南実用	B区3層			
43	甕	12.1	4.9	14.3 口唇部陶文、口唇部陶文、 襷織系下文、体部襷織陶文、 ハウミガキ、陶文、内面赤文貼付	ハウミガキ	5YR3/1 (暗赤)	完全実用	B区			
44	甕	-	-	(4.0) 襷織系下文、襷織系下文、 襷織系下文、口唇部陶文	ハウミガキ	5YR6/6 (黄)	新南実用	C区			
45	甕	-	-	(2.9) 襷織系下文、口唇部陶文	ハウミガキ	7.5YR6/3(赤黄)	新南実用	C区			
46	甕	-	-	(3.9) 襷織系下文	ナデ	7.5YR7/4(赤黄)	新南実用	A区			
47	甕	-	-	(4.6) 襷織系下文、襷織系下文	ハウミガキ	7.5YR5/1 (赤)	新南実用	B区2層			
48	甕	-	-	(3.2) ハウ襷織文	ナデ	5YR7/4 (赤黄)	新南実用	C区			
49	甕	-	6.6	(9.7) 襷織系下文、ハウミガキ	ハウミガキ、ハウミガキ	7.5YR4/3 (黄)	完全実用	-			
50	コップ?	7.3	(2.9)	5.8 ナデ	ナデ	7.5YR4/4 (黄)	完全実用	A区			
51	手取鉢上蓋	3.0	2.2	2.3 ナデ、指面付	ナデ	2.5YR6/8 (黄)	完全実用	B区3層			
52	ミニチュア?	-	4.1	(3.3) ナデ	ナデ	5YR7/6 (黄)	完全実用	A区2層			
53	土製口蓋	3.5	-	0.8 不明	不明	5YR5/6 (明赤)	ほぼ実用	A区2層			
54	甕	(14.2)	-	(7.6) 襷織系下文、陶文(L.R?)	ハウミガキ	5YR3/1 (暗赤)	ほぼ実用	E区			
55	甕	-	-	(3.3) ナデ	ナデ	10R5/2 (赤)	(新南実用?)	G区			
56	甕鉢	-	-	(4.0) 陶文、堀ノ内式	ナデ	5YR4/6 (赤)	新南実用	D区			
57	甕鉢	-	-	(4.8) 陶文、堀ノ内式	ナデ	5YR4/6 (赤)	新南実用	D区			
58	甕鉢	-	-	(2.4) ナデ	ナデ	10R5/2 (赤)	新南実用	G区			
59	甕鉢	-	-	(8.3) ナデ	ナデ	10R5/2 (赤)	新南実用	G区			
60	台付甕	-	-	(2.3) 陶文(筆跡)、ハウ襷織文	ナデ	7.5YR7/4(赤黄)	(神宮富士塚?)	E区			
No.	品類	口径	器底	残存率	最大値				重量	所見	出土位置
					最大径	最大幅	最大厚	最大重			
61	甕	13.9	2.4	0.6~0.8	0.14	0.14	0.14	0.14	0.14	H区3層	
62	甕	13.9	2.4	0.6~0.8	0.14	0.14	0.14	0.14	0.14	B区	
63	右蓋石	25.5	17.5	6.4	2.10	2.10	0.70	0.70	0.70	A区3層	
64	右蓋石	21.9	10.8	3.7	0.70	0.70	0.70	0.70	0.70	B区3層	
65	右蓋石	20.0	13.9	4.9	1.00	1.00	0.70	0.70	0.70	B区3層	
66	右蓋石	24.1	9.8	3.8	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	A区	
67	右蓋石	14.6	13.5	3.3	0.59	0.59	0.59	0.59	0.59	B区2層	
68	右蓋石	19.3	12.9	4.2	1.00	1.00	0.60	0.60	0.60	H区3層	
69	右蓋石	18.1	15.6	3.5	0.90	0.90	0.60	0.60	0.60	D区	
70	右蓋石	19.1	19.2	4.1	1.00	1.00	0.60	0.60	0.60	B区3層	

第73表 M1号清状遺構出土土物観察表(2)

No.	品名	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
71	石製未製品	黒曜石	15.1	13.9	5.3	0.90		有蓋石製の未製品の可能性高い	B区2層
72	石製未製品	黒曜石	18.3	16.0	3.3	0.70		有蓋石製の未製品の可能性低い	B区2層
73	石製石器	黒曜石	21.5	15.2	4.8	1.60			B区2層
74	石製未製品	輝石岩		19.0	15.3	6.5	1.80		D区
75	石器	輝石岩山岩	70.0	64.0	14.0	69.10		押片部による刃部の形成、ソフトハンマー	D区3層
76	石器	ガラス質火山岩	52.1	77.0	26.1	129.70		刃部に磨痕あり	C区
77	石器	ガラス質火山岩	43.3	66.0	26.5	137.20		溝部に鋭打痕あり	C区
78	石器	ガラス質火山岩	65.0	67.2	48.0	225.30		刃部に刃こぼれ	D区
79	石器	ガラス質火山岩	41.7	37.5	16.3	30.00		刃部刃こぼれ、刃は鈍	B区
80	石製石器	輝石岩	87.0	58.0	7.0	63.00		刃部刃こぼれ、刃は鈍、正面にすずれのような磨り	A区2層
81	石製石器	輝石岩	116.0	45.5	8.0	87.20		上部は刃こぼれ、下部は鈍、一部刃こぼれあり	C区
82	石器	輝石岩	46.0	74.0	11.0	38.20		上部内面を残す、刃部鈍あり	A区2層
83	石製石器	石英閃緑岩	66.0	67.0	35.0	180.00		刃部中央に刃こぼれ、よく磨きされている	B区
84	石製未製品	輝石岩	33.0	16.0	5.0	4.20		正面と右面に磨痕あり	B区
85	石製石器	ホルンフェルス	26.0	175.0	63.0	4490.00		正面に磨り、上下先端に微細磨痕あり	C区
86	石製石器	砂岩	71.0	41.0	12.0	63.90		上下先端に磨り、右面に磨り	A区3層
87	石器	輝石岩山岩	11.0	104.0	97.0	1770.00		正面に磨り、上下先端に微細磨痕あり	A区2層
88	石器	砂岩	5.0	36.0	13.0	33.20		正面に磨り	B区3層
89	石器	砂岩		65.0	30.0	299.00		両面中央部と下部先端に磨り	C区
90	石器	砂岩	60.0	31.0	11.0	47.00		正面に磨り、下部に幅の広い砥痕あり	D区
91	石器	砂岩	67.0	39.0	12.0	67.10		正面に磨り	C区
92	打製石斧	安山岩	206.8	112.4	25.7	563.10			B区
93	打製石斧	安山岩	140.9	81.7	22.6	307.90			B区
94	打製石斧	安山岩	104.1	103.9	14.9	209.90			A区2層
95	打製石斧	安山岩	192.9	103.6	32.9	572.60		両面の基部の研削の痕跡あり	D区
96	打製石斧	安山岩	108.0	89.4	23.4	275.30			B区
97	打製石斧	安山岩	143.5	80.6	18.3	288.60			D区
98	打製石斧	安山岩	100.0	102.9	20.9	185.50			D区
99	打製石斧	安山岩	157.5	147.3	17.9	294.10			B区
100	打製石斧	安山岩	99.4	40.4	17.2	76.10			
101	打製石斧	安山岩	151.6	106.5	23.6	398.70			D区
102	打製石斧未製品	安山岩	144.9	81.1	28.0	339.70			D区
103	打製石斧	安山岩	117.8	122.9	29.0	440.20			B区2層
104	打製石斧	安山岩	84.8	67.4	23.2	164.30			C区
105	打製石斧	安山岩	75.0	137.9	17.3	231.60			B区・D区
106	打製石斧	安山岩	64.9	133.8	19.7	178.30			A区2層
107	石器	千枚石	80.0	36.0	5.0	36.60		磨石あり	A区2層
108	磨石	安山岩	238.7	88.7	52.3	1715.50		磨石、朝面に磨り痕	D区

第74表 M1号溝状遺構出土土物観察表(3)

(2) M2号溝状遺構 (第135・136図、写真図版七十四)

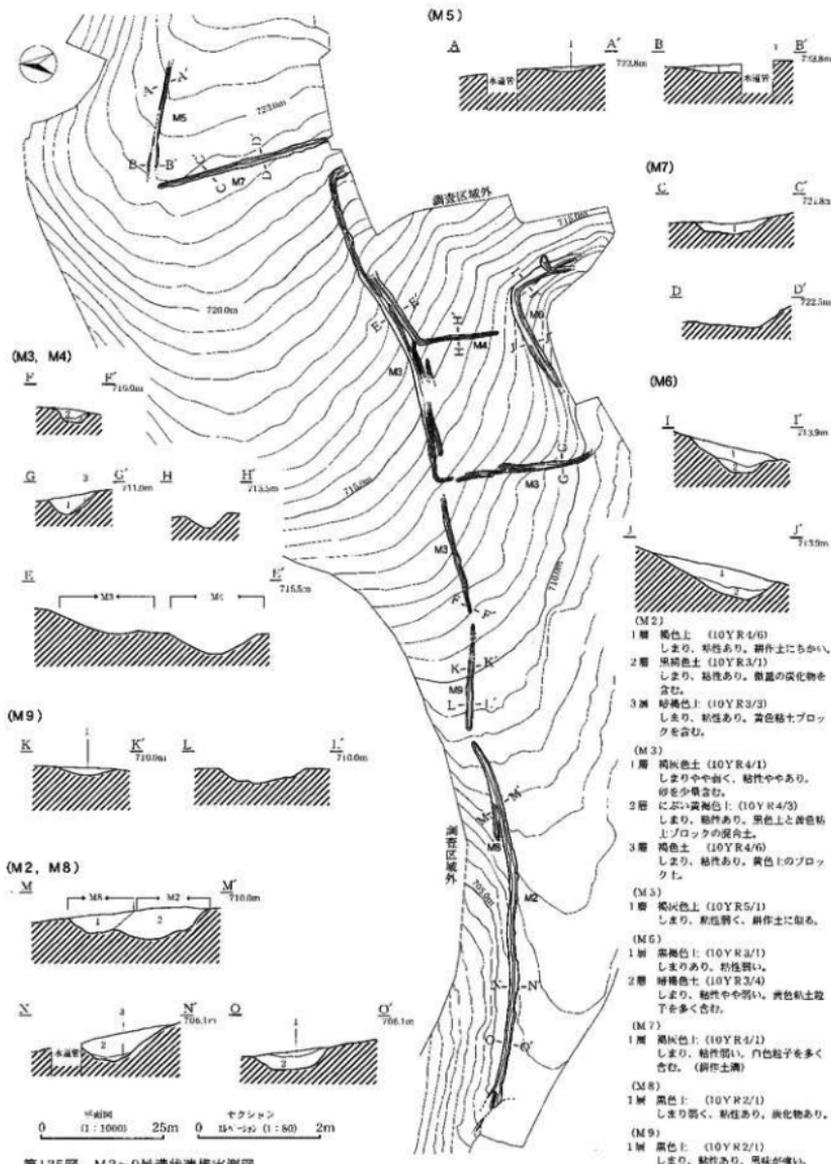
本址は、調査区中央部西端の尾根上であるB・F区に位置する。H11・12・13号住居址、M1・8号溝状遺構、後家山2号墳と重複関係にあり、M8号溝状遺構が本址より新しく、その他の遺構は本址より古い。形態は尾根上を直線的に東西に貫くような形状で、東端は自然に立ち上がり、西端は調査区域外に延びる。溝断面形態は緩いU字状を呈し、壁立ち上がりは緩やかである。規模は検出長82.4m・幅1.22～1.68mで、深さは42～68cmを測る。

本址よりの出土遺物は図示したもの他に、弥生後期の壺・甕片、縄文片2点、須恵器甕片1点、瀬戸美濃の灰種丸碗がある。2は有蓋石罐で基部が欠損している。3はみがき石で、4は黒曜石の石鏝である。5は打製石斧未製品、7は打製石斧である。6は石包丁で一部穿孔が確認できる。

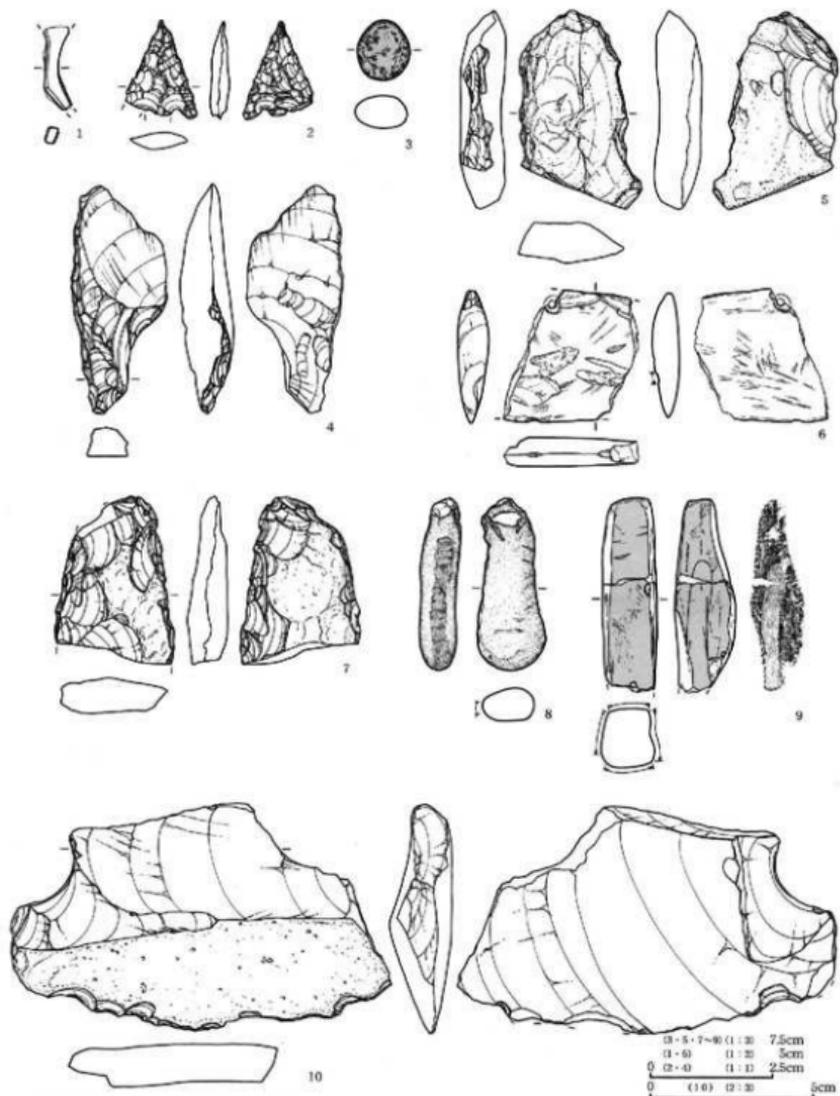
本址からの出土遺物は多量で所産時期を確定できないが、現地地層が本址と重なる。尚かつこの地層境が平賀・瀬戸の大字境であることから考えると大きく中世から近世の範囲で捉えるべきと考えられる。

(3) M3号溝状遺構 (第135・136図、写真図版七十四)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF区に位置する。住居址群と重複関係にあるが、本址の方が新しい。形態は尾根上を直線的に東西に延びる部分と南側斜面に向けL字に曲る部分からなる。また部分的に2本の溝が併走する部分もある。溝淵はいずれも自然に立ち上がり消滅している。規模は東西検出長73m・南北検出長28m・幅42～144cmで、深さは28～55cmを測る。本址よりの出土遺物は図示したもの他に、弥生後期の甕片20点、瀬戸・美濃灰種丸碗、伊万里碗がある。8は手持ち砥石である。本址は、地層境と重なり、一部現代の畑境とも重なることから所産時期は近世以降と考えられる。



- 1層 褐色土 (10YR4/6) しまり、粘性あり。餅土にちかい。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。崩壊の炭化物を含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性あり。黄色粘土ブロックを含む。
- (M3)**
- 1層 褐色土 (10YR4/1) しまりの中や弱く、粘性ややあり。砂を少量含む。
- 2層 ぶいぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり、粘性あり。黒色土と黄色粘土ブロックの混在土。
- 3層 褐色土 (10YR4/6) しまり、粘性あり。黄色土のブロック。
- (M3)**
- 1層 褐色土 (10YR5/1) しまり、粘性弱く、餅土に似る。
- (M6)**
- 1層 黄褐色土 (10YR3/1) しまりあり、粘性強い。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性やや弱い。黄色粘土粒を多く含む。
- (M7)**
- 1層 褐色土 (10YR4/1) しまり、粘性強い。白色粘土を多く含む。(餅土層)
- (M8)**
- 1層 褐色土 (10YR2/1) しまり弱く、粘性あり。炭化物あり。
- (M9)**
- 1層 褐色土 (10YR2/1) しまり、粘性あり。黒味が強い。



第136图 M2~7号洞穴遗址出土器物实物图

(4) M4号溝状遺構 (第135図, 写真図版七十四)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF区に位置する。住居址群と重複関係にあるが、本址の方が新しい。形態は尾根上を直線的に東西に延びる部分と南側斜面に向けL字に曲る部分からなる。溝端はいずれも自然に立ち上がり消滅している。規模は検出長32.6m・幅56～150cmで、深さは6～33cmを測る。本址よりの出土遺物は伊万里碗、瀬戸・美濃碗がある。本址は、M3号溝状遺構と併走し、また地籍境と重なり一部現代の畑境とも重なることから所産時期はM3号溝状遺構と同じく近世以降と考えられる。

(5) M5号溝状遺構 (第135・136図)

本址は、調査区中央部東端の尾根上であるE・I区に位置する。H52号住居址と重複関係にあるが、本址の方が新しい。形態は尾根上を直線的に東西に延び、溝端はいずれも自然に立ち上がり消滅している。規模は検出長22.1m・幅44～160cmで、深さは7～18.5cmを測る。本址よりの出土遺物はなく、所産時期は不明である。

(6) M6号溝状遺構 (第135・136図, 写真図版七十四)

本址は、調査区中央部の南斜面であるF区に位置する。形態は小さな谷を囲むように「コ」の字状に検出された。溝端は両側が耕作による畑の段で削平され、南側が自然に立ち上がり消滅している。また、両側のコの字に曲がった先では溝が2本に分かれる。溝の分岐位置に土坑的な掘り込みもあることから、或いは別遺構の可能性もある。規模は検出長37.9m・幅110～210cmで、深さは53～95.5cmを測る。

本址よりの出土遺物は図示した物の他に、弥生後期の甕・壺片30点、瀬戸・美濃灰釉丸碗が出土している。図示したIの鉄製品は種別が鉄釘と考えられるが確証を得ない。本址の所産時期は覆土的にM2号溝状遺構に似ており、地籍図の境界とも重ならないことから中世から近世ぐらいの時期と考えられる。

(7) M7号溝状遺構 (第135・136図)

本址は、調査区中央部東端の尾根上であるE・F・I・J区に位置する。H51号住居址と重複関係にあり、新旧は本址の方が新しい。形態は南北に斜面と直行し等高線に沿うように検出され、北側は自然に立ち上がり消滅している。規模は検出長35.5m・幅66～170cmで、深さは11.5～36cmを測る。溝の底面はほぼ平坦であった。

本址よりの出土遺物は図示した物の他に、唐津呉器手碗(17世紀後半?)が出土している。10の石器は南信地域に出土する所謂「有屑扇状器」であり、石材は異なるが形態的にはよく似る。本址の所産時期は地籍図並びに現代の畑地境界とも重なり、近世以降と考えられる。

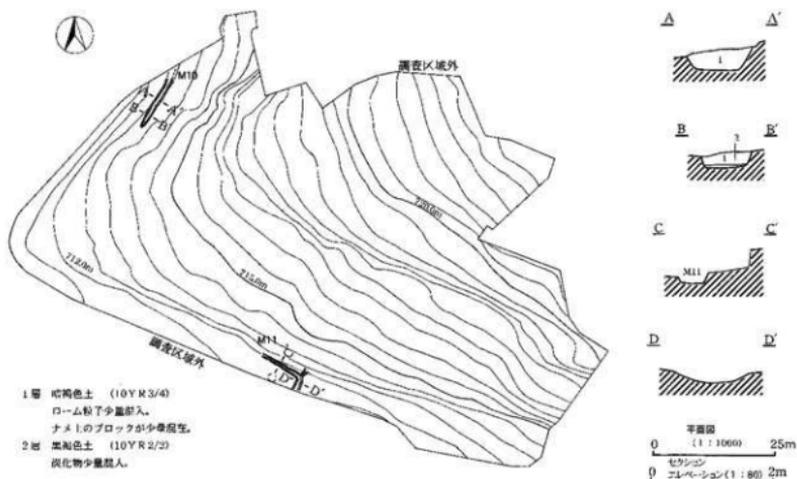
(8) M8号溝状遺構 (第135図)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF区に位置する。M2号溝状遺構・T3号特殊遺構と重複関係にあり、新旧はいずれも本址の方が新しい。形態は東西に延びるように検出され、西側は自然に立ち上がり消滅している。東側はM2号溝状遺構の掘り下げ時に確認不足で掘り下げてしまった。規模は検出長7.8m・幅90cmで、深さは28cmを測る。溝の底面はほぼ平坦であった。

本址よりの出土遺物はなく、所産時期は確定できないが、後述するM9号溝状遺構とともにM3号溝状遺構に連なるものであれば近世以降と考えられる。

No.	品名	素材	検出率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
1	不明	鉄製釘	埋没欠損	(25.0)	8.8		1.40		M6
2	有屑石	黒曜石	半・角欠損部欠損	19.9	14.5	3.6	0.70		M2
3	みがき石	黒灰色チャート	完形	36.0	32.0	20.0	31.70	全体に曇る曇りしており、多方向の磨痕あり	M2
4	石鏝	黒曜石	完形	46.8	20.2	10.0	7.80	やや尖形の石鏝	M2
5	打製石斧本製品	ホルンファルス	完形	120.0	74.0	26.3	283.90		M2
6	石錐子	石製所打	欠損	54.0	51.0	(8.0)	(40.90)	一部破きが残るが、全体に磨痕。孔は両面穿孔	M2
7	打製石斧	火山岩	基部断片	102.1	73.0	24.9	171.70	両側面厚肉部磨	M2
8	磨石(平持5減G)	砂岩	欠損	(104.0)	41.0	20.0	113.30	側面を中心に磨痕と幅広い全磨	M3
9	砥石	磨石断片	一部欠損	(117.0)	37.0	36.0	(198.40)	砥石面5面。一部にL字状のくぼみの残る砥石あり	M3
10	有屑扇状器石	安山岩	欠損	67.2	114.0	16.1	138.20	刃部にガタリ磨痕	M7

第75表 M2～7号溝状遺構出土遺物観察表



第137図 M10・11号溝状遺構実測図

(9) M9号溝状遺構 (第135図)

本址は、調査区中央部の尾根上であるF区に位置する。弥生後期の住居址群と重複関係にあり、新旧はいずれも本址の方が新しい。形態は一部とぎれているが東西に延びるように検出され、東西の両端は自然に立ち上がり消滅している。規模は検出長21.8m・幅52～122cmで、深さは11.5～21cmを測る。溝の底面はほぼ平坦であった。本址よりの出土遺物はなく、所産時期は確定できないが、前述したM8号溝状遺構とともにM3号溝状遺構に連なる様な検出位置であり、一連の遺構と考えると近世以降となる。

(10) M10号溝状遺構 (第137図、写真図版七十四)

本址は、調査区南側斜面の西よりF区に位置する。形態は等高線に沿うように南北に延びるように検出され、南側は自然に立ち上がり消滅し、北側は自然地形で削平されていた。規模は検出長12m・幅50～166cmで、深さは20～50cmを測る。溝の底面はほぼ平坦であった。

本址よりの出土遺物は弥生後期の壺・甕片が多数出土したが、いずれも小片で実測可能なものはなかった。本址の所産時期はその出土遺物より弥生後期とも考えられるが、覆土の状況や出土遺物の状況から考えると谷部をはさんで向かいに検出されているM6号溝状遺構に連なる可能性の方が大きいと考えられ、とすると中世から近世の遺構と考えられる。

(11) M11号溝状遺構 (第137図)

本址は、調査区南側斜面の中央部南端K区に位置する。H72号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は横に向けた「T」字状で主体は等高線に沿うように東西に延びるように検出され、西側は自然に立ち上がり消滅し、北側は自然地形で削平されていた。規模は検出長11.5m・幅46～136cmで、深さは7～20cmを測る。溝の底面はほぼ平坦であった。

本址よりの出土遺物はなく所産時期は不明であるが、地籍図及び現代の畑境とも一致することから近世以降の所産と考えられる。

6. ビット群 (第138~141図)

本遺跡からは孤立建物址と認識できない単独ビットが75個検出された。検出された位置より4つの群が捉えられる。それらに各群ごとに仮称をつけると、まず調査区中央部東端の尾根上をA群、尾根中央部をB群、西端の尾根平坦部をC群、小谷部上をD群と捉えられる。以下、これら各群ごとのビットの特徴を述べたい。

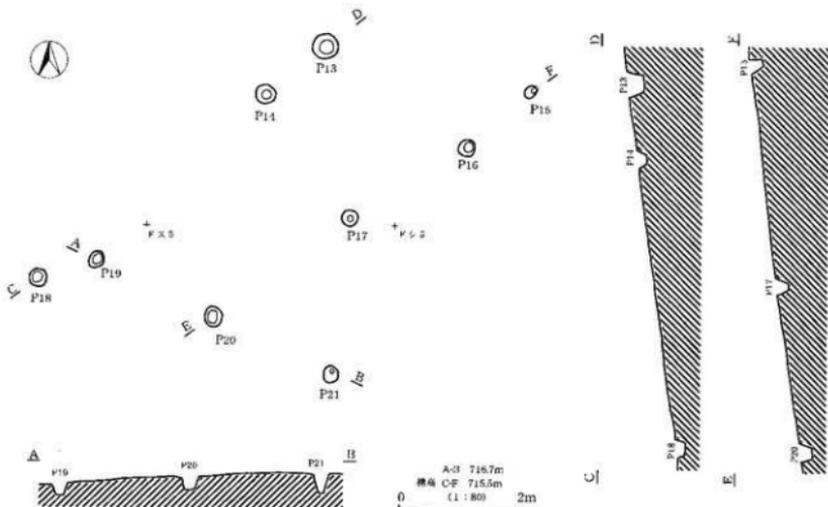
まず、A群であるが、周辺の住居址群に囲まれるようにビット群が散在する。形態は円形か楕円形で、規模は径30~15cmで、深さは10~23cmを測る。いずれも小型のビットであった。覆土はいずれも黒褐色土で炭化物和焼土を少量含み、弥生住居址群と類似する覆土であった。規則的配列を確定できるものはなかったが、P43・44・47とP48・49・54・59、P51・52・53・55・57・58・60は楕円的な配列とも考えられる。

次にB群であるが、尾根の中腹部に住居址に囲まれるように検出された。総計10個ほどの群である。形態は円形か楕円形を基調とするものが多く、規模は径20~40cm・深さ17~30cmである。本群も規則的な配列を確認できなかったが、P15・16・17とP19・20・21は2間の楕円の可能性がある。

次にC群であるが、尾根先端の平坦部で検出された。総数12個ほどの群で構成する。形態は円形か楕円形を基調とするものが多く、規模は径20~18cm・深さ3.5~28cmである。本群も規則的な配列を確認できなかったが、P2・3・4とP5・7・9は2間の楕円の可能性がある。

次にD群であるが、M6号溝状遺構が展開する小谷地形の部分で、いずれもM6号溝状遺構よりは山際に検出された。形態は円形・楕円形・不整形であり、総数17個ほどの群で構成する。規模は径25~105cm・深さ17~53cmである。形態・規模から考えると土坑とした方がよい物もあるが、性格も不明瞭であるため一括ビット群とした。規則的な配列を示すものはない。

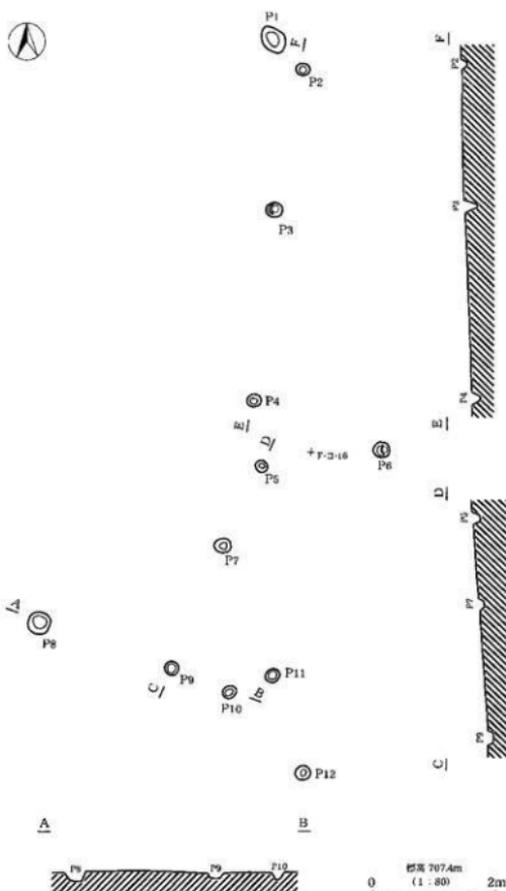
これら4つのビット群の性格であるが、まずD群に関しては形態も不揃いであり、また遺構の底面も凹凸のある物や一カ所だけ深く掘り込めるものの存在などから自然木の倒木痕や根の跡などが含まれているように考えられる。その他の3群は規則的な配列は確認できないものの、楕円的な様相を含み、3群が尾根の頂上付近と中腹と平坦地と違うようにある程度区隔をおいた配置になっており、人為的な構造物があったと推定する。所産時期は出土遺物がなため不明であるが、周辺の弥生後期住居址群が展開することを勘案すれば、同時期の所産と考える方が妥当であろう。



第138図 ビットB群実測図

番付	グリッド	長×短×深さ	形
1	F-ヨ-14	48×29×10.5	横円形
2	F-ヨ-14	32×21×7.5	横円形
3	F-ヨ-14	26×24×21	横円形
	F-ヨ-15		
4	F-ヨ-15	22×20×13.5	横円形
5	F-ヨ-16	20×18×13	横円形
6	F-ユ-15	25×25×26	円形
	F-ユ-16		
7	F-ヨ-16	27×25×10	横円形
8	F-ラ-16	35×35×18.5	円形
9	F-ヨ-16	22×21×8.5	円形
10	F-ヨ-16	23×20×11.5	横円形
11	F-ヨ-16	24×21×3.5	横円形
12	F-コ-17	21×21×23	円形
13	F-シー-4	40×40×30	円形
14	F-シー-4	33×30×17.5	横円形
15	F-サー-4	21×12×23	横円形
16	F-サー-4	27×25×21	不整な横円形
17	F-シー-4	27×26×20.5	円形
18	F-ス-5	29×29×17	円形
19	F-ス-5	28×23×21.5	横円形
20	F-シー-5	32×28×22.5	横円形
21	F-シー-5	27×23×33	横円形
22	F-オー-14	100×62×58	楕円長方形
23	F-オー-14	95×43×42.5	横円形
24	F-オー-14	29×27×19.5	横円形
25	F-オー-14	49×36×21.5	横円形
26	F-オー-14	30×39×27	横円形
27	F-オー-14	40×38×18	円形
28	F-オー-14	23×23×23	円形
29	F-オー-14	50×45×31.5	横円形
30	F-オー-14	75×54×46	楕円長方形
	F-オー-15		
31	F-オー-15	68×60×46	横円形
	F-オー-15		
32	F-オー-15	35×35×18.5	円形
	F-オー-15		
33	F-オー-15	70×62×39	不整な横円形
34	F-オー-15	105×58×53.5	楕円長方形
35	F-オー-15	65×48×27.5	横円形
	F-オー-15		
36	F-エ-15	40×32×17	横円形
37	F-オー-15	59×45×26	Sの字形
	F-オー-16		

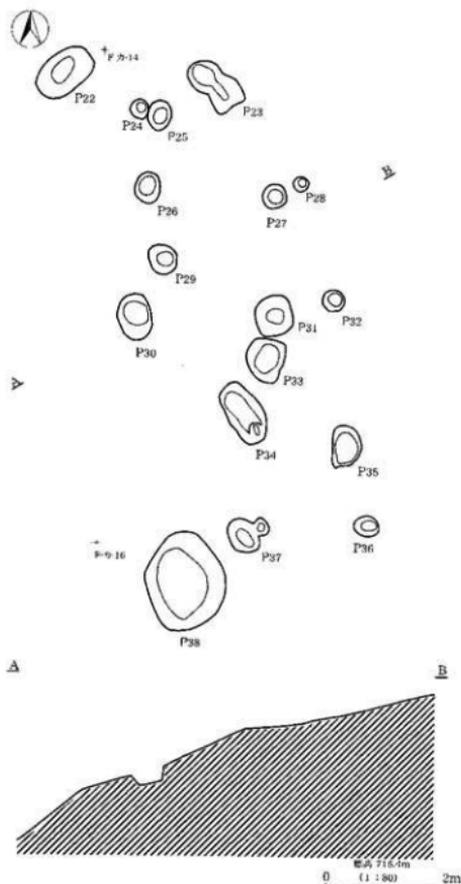
第76表 ビット計画表(1)



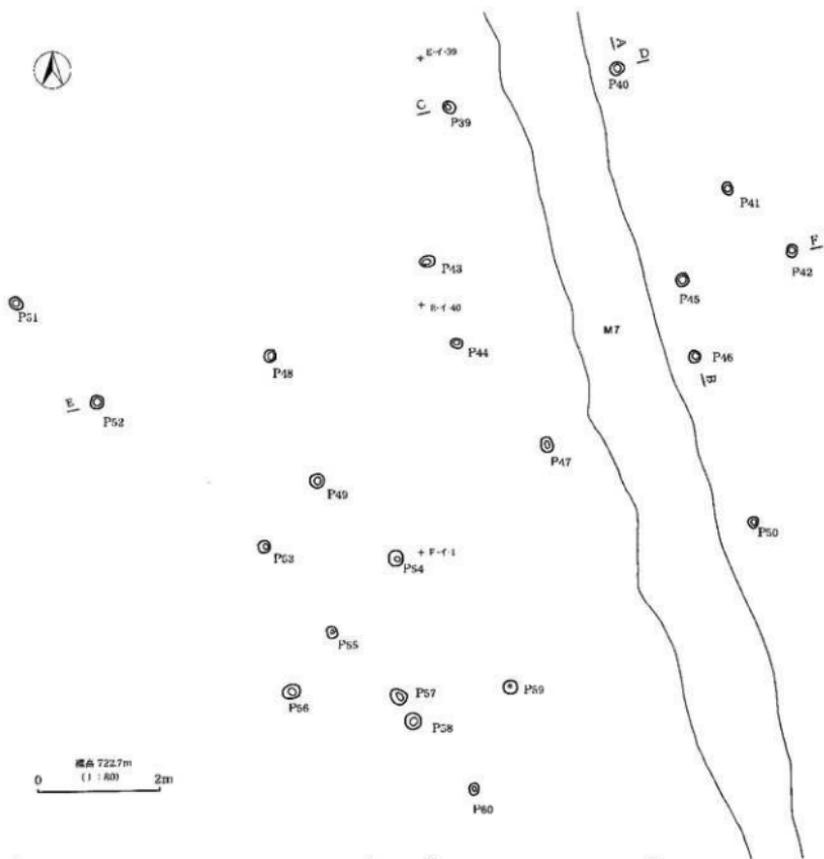
第139図 ビットC群穴洞図

番号	グリッド	長×短×高さ	形
38	D-オー-15	160×128×3.9	楕円形
	D-オー-16		
39	E-ア-39	22×17×11	楕円形
40	E-ア-39	23×23×26	円形
41	I-リ-39	21×13×32.5	楕円形
42	I-リ-39	20×18×30.5	楕円形
43	E-ア-39	28×17×21.5	楕円形
44	E-ア-40	20×17×12	楕円形
45	I-リ-39	21×20×17	方形
46	I-リ-40	19×18×17.5	不整な円形
47	E-ア-40	24×18×10.5	楕円形
48	E-イ-40	20×20×12.5	円形
49	E-イ-40	23×22×14.5	円形
50	I-リ-40	19×16×15	不整な円形
51	E-ウ-39	22×19×11	楕円形
52	E-ウ-40	22×22×12.5	円形
53	E-イ-40	19×18×23	円形
54	E-イ-1	25×23×20	円形
55	E-イ-1	20×16×16	楕円形
56	E-イ-1	30×22×14	楕円形
57	E-イ-1	28×22×12.5	楕円形
58	E-イ-1	26×26×23	円形
59	E-ア-1	22×21×15.5	円形
60	E-ア-1	20×16×8	楕円形
61	I-ウ-40	88×56×8.5	楕円形
	J-ウ-1		
62	I-リ-40	82×54×23	くびれのある楕円形
	J-リ-1		
63	J-ウ-1	54×48×20.5	円形
64	F-ヒ-11	16×13×13	円形
65	F-ナ-20	29×25×21.5	円形
66	E-キ-38	27×22×30	楕円形
	E-キ-39		
67	E-カ-39	14×13×34	円形
68	E-カ-40	30×18×15	楕円形
69	E-カ-40	39×30×10	楕円形
70	H-キ-14	35×30×-	円形
71	J-マ-38	45×39×26	楕円形
	J-マ-39		
72	J-ホ-39	63×60×27	楕円形
73	J-ハ-39	32×29×18	楕円形
74	J-ハ-33	75×47×30	不整な楕円形
	J-ハ-34		
75	J-ハ-34	82×66×30	不整な楕円形

第77表 ビット計測表 (2)



第140図 ビットD計測断面



1層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。炭化物を多く含む。黄土粒を散見す。

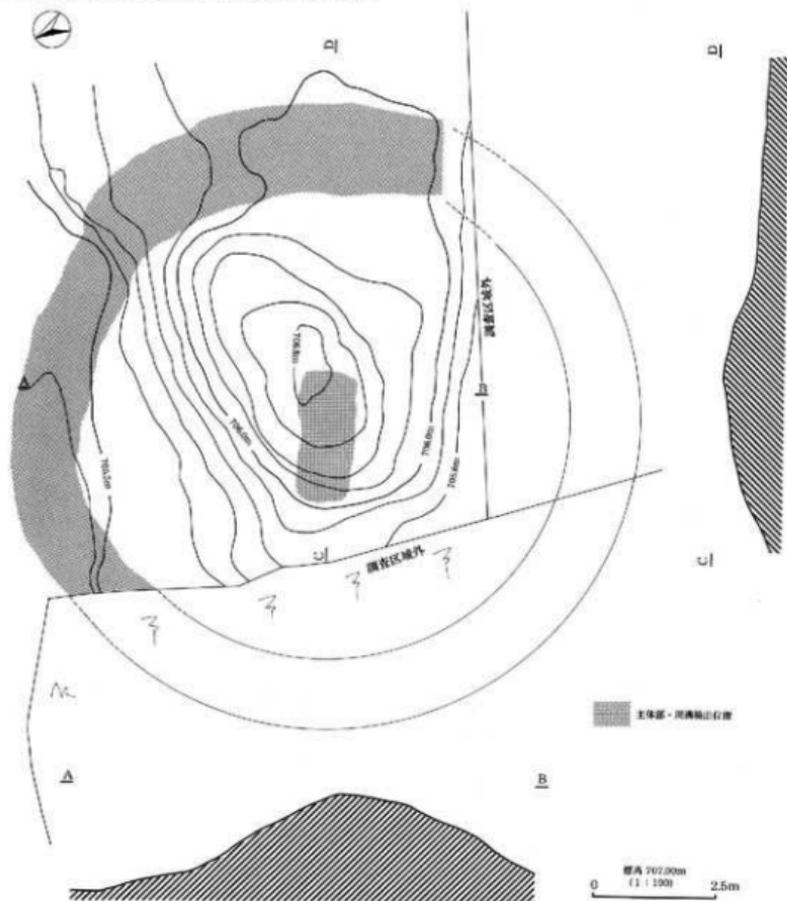


第141図 ビットA群実測図

7. 古墳跡

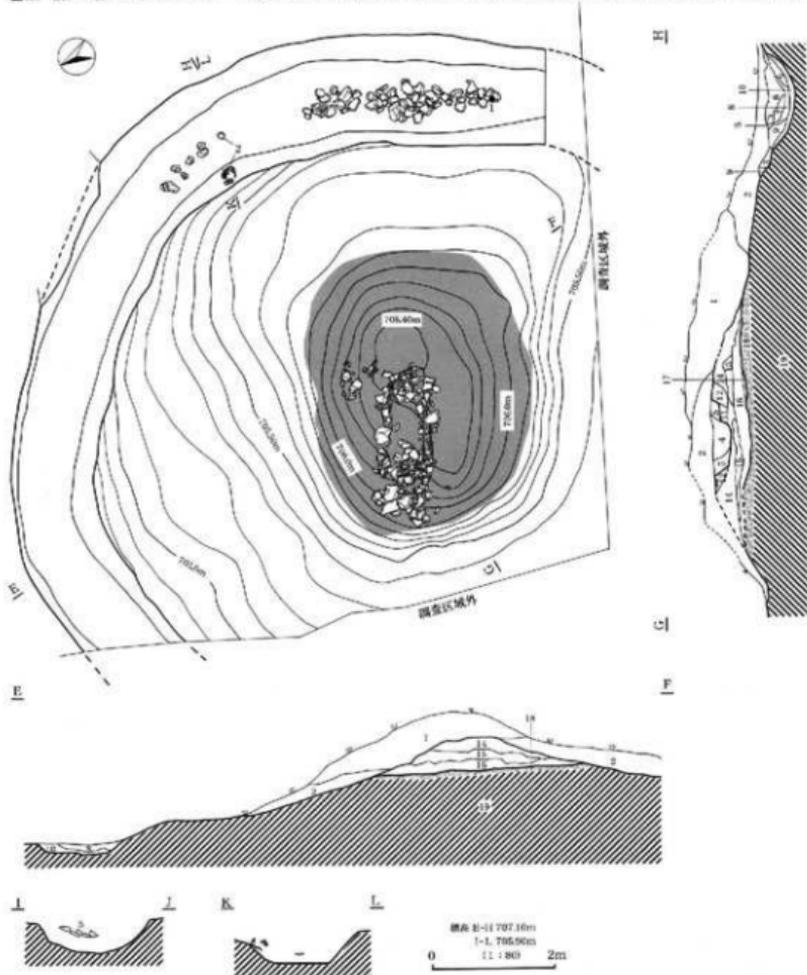
(1) 後家山2号墳【OT1】(第142~146図, 写真図版七十五~八十)

本墳は、調査区中央部の丘陵西端であるB-サー10・11・12、B-コー10~13、B-ケー11~13Grに位置する。昭和49年に発掘調査された後家山古墳は西方30mの同一尾根上に立地する。本古墳は未周知の古墳であり、今回試掘調査により発見されたため新たに後家山2号墳と命名した。残存状況は南側と西側が調査区域外であり既に削平された部分であり、検出されたのは古墳の1/3程である。M2号溝状遺構と重複関係にあり、新旧は本址の方が古い。現況は約1.3mの楕円形の小高い盛土が確認でき、盛土範囲が小さな面積の地籍で囲まれていたため、地元では由来より何らかの塚としての意識が存在したと考えられる。盛土上には樹齢30年以上のクスギの大木が3本生い茂っており、そのため耕作等による墳丘削平を免れたと考えられる。

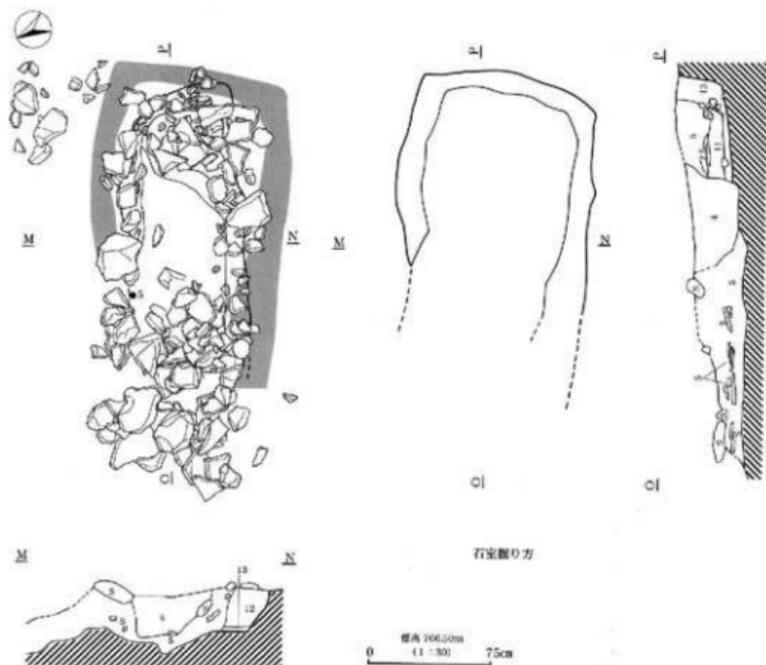


第142図 後家山2号墳現況図

墳形は検出された周溝の形態より円墳と判断される。規模は周溝を円と仮定して古墳中心を測りだし算出すると周溝外側で直径13.2m・内径で9.86mを測る。墳丘は検出時には東西に長い楕円形であったが、全体に耕作時に積み上げられたと考えられる準大の雑草が覆っており、特に東側は顕著であった。これらと表土を取り除く事により長軸4.70m・短軸3.50mの版築を伴った盛土が確認された。盛土の最高は最大で62cmを測り、粘土層である黄褐色土と旧表土に近い暗褐色土を交互に盛っていた。また、墳丘盛土最下層である第16層下には旧表土層と考えられる黒色土（第18層）が確認された。この第18層は非常に硬質化しており特に南北方向で溝状に窪んだ部分が最も硬かつ



第143図 後家山2号墳全体図



石室掘り方

標高 306.00m
(1:30) 75cm

(表土)

- 1層 黄灰色土 (10YR5/1)
しまり、粘性強い。奉次の縄文で面のやっくら状になっている。
 - 2層 灰黄色土 (10YR4/2)
しまりやや弱く、粘性ややあり。耕作土にちがひ、黄色粘土の層りくずれ。
 - 3層 耕作土 (埋込層)
(2)準埋込層
 - 4層 褐色土 (10YR4/6)
黒色土ブロックを含み、ぼそぼそしている。(埋込層)
 - 5層 暗褐色土 (10YR3/4)
さらさらしている土。しまり強い、古墳の土ではない。
- (墳溝敷土)
- 6層 黑褐色土 (10YR3/1)
しまり、粘性あり。下部に土層を含む。
 - 7層 暗褐色土 (10YR3/4)
しまり、粘性あり。
 - 8層 灰褐色土 (10YR3/2)
しまり、粘性あり。6層と7層の中間層的で灰褐色の層がある。
 - 9層 褐色土 (10YR4/6)
しまり、粘性あり。7層に似るが、明るい。
 - 10層 黄褐色土 (10YR5/8)
黒色の鉄分の沈下した砂子を多く含む。

(6)墳溝敷土

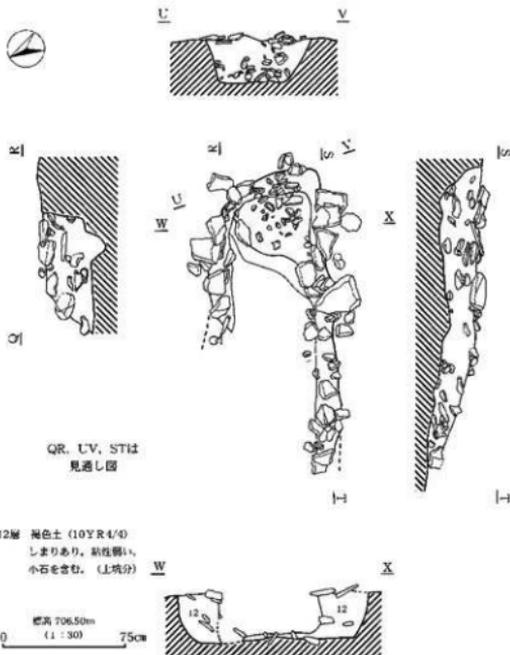
- 11層 暗褐色土 (10YR3/2)
しまり、粘性あり。小石を多く含む、黄色粘土ブロックを含む。
 - 12層 褐色土 (10YR4/4)
しまりあり。粘性強い、小石を含む。(土塊分)
 - 13層 暗褐色土 (10YR3/2)
しまり、粘性あり。硬質化しており、片づんでいる。(作業面)
(墳上)
 - 14層 黄褐色土 (10YR5/8)
しまり、粘性強い。墳上層土で黄色粘土。
 - 15層 褐色土 (10YR4/4)
しまりややあり。黒色土ブロックを含む。
 - 16層 暗褐色土 (10YR3/3)
しまり非常にあり。粘性ややあり。黒色土と褐色土をブロック状に含む。
 - 17層 暗褐色土 (10YR3/4)
16層よりも褐色土ブロックが多い。
- (池土)
- 18層 黒色土、沼土、赤土に硬質化している。(墳上の作業面)
 - 19層 褐色土

第144図 後家山2号墳主体部実測図

た。これらは古墳築造時の作業面と考えられる。周溝は検出部分においてはとぎれる事なく墳丘を巡っていた。規模は平均幅1.66mで深さは25~60cmを測る。周溝底面は平坦で断面形状は逆台形であった。また、東側部分から幅3mにわたって傘大から人頭大の川原石がまとまって出土した。いずれも周溝底面からは押いた状態であり、周溝が埋没途中で墳丘側から崩落した様子を示している。これらの礫群から図示した須恵器高坏坏部が出土している。これら礫群の解釈であるが、墳丘からの崩落であるため蓋石の使用が考えられる。

主体部は墳丘の西より検出された。検出面においては樹木の根により詳細な範囲確認に苦慮したが、礫の分布範囲から東西に長軸をもつ長方形の主体部を確認した。形態は竪楕と考えられる攪乱と樹木の根による変形を受け、石が崩れていた。規模は、まず掘り方である土壇分が残存の長軸1.4m・短軸1.2mで、深さは最大39cmを測る。長軸方位はN-54°-Wを示す。次に礫に囲まれた部分が南壁残存部1.86m、東壁0.64m、北壁残存部0.70mを測る。棺床面と考えられる部分は攪乱がひどく、主体部東端の長さ43cm・幅50cmの範囲が残存していたのみである。深さは28cmを測る。これらの事より本主体部本来の規模は長軸2.5m・短軸1.10m程と考えられる。形態は所謂「竪穴式石室」とは異なる特徴を有する。まず、壁部分は石を積み上げるのではなく、土と石を混ぜた様な土を盛っている。主体部床は攪乱部分が多く不明瞭であるが、平坦で小石が敷かれていた可能性がある。西側にまとまって検出された鉄平石は掻き出された様な状況であったが、「立石」等に使用していた様子は無い。以上の様な状況より本古墳の主体部は「竪穴式石室」や「組合式箱形棺」等の範疇には含まれない形態と考えられる。本主体部を復元構築すれば、まず長方形の土壇を盛土内に掘り込み、土と石の混合土を20~30cmの幅で充填し、遺体を埋葬した後（木棺を使用は不明）、鉄板を蓋のように覆って密閉したと考えられる。因って土壇直葬墓と竪穴式石室の折衷形と捉えられる。この形態が本地域だけの物か、或いは全国的に類別が存在するのかが現段階では資料に乏しく、今後の調査・研究によって正確な位置づけが可能となろう。

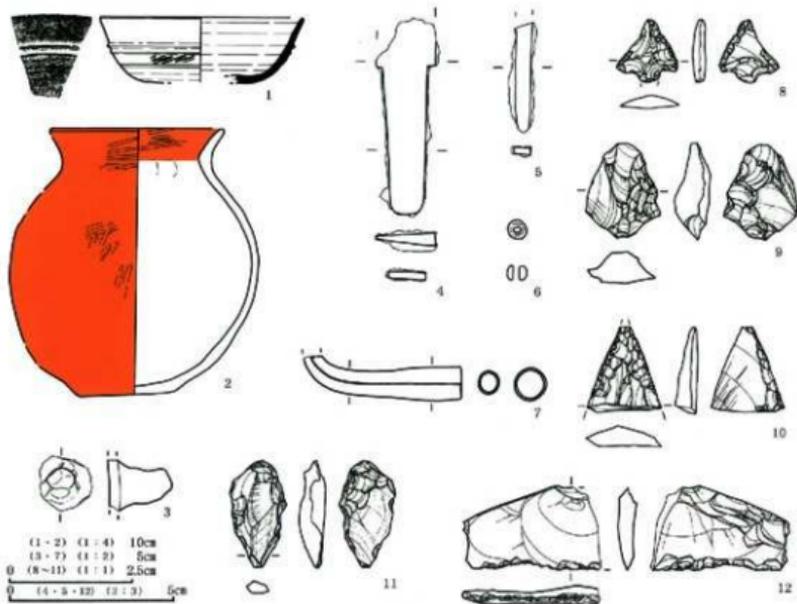
本古墳からの出土遺物は非常に少なく、特に本古墳の所産時期を指し示す物は周溝中出土の須恵器と土師器のみであった。1は須恵器無蓋高坏坏部の破片であり、周溝礫群中より出土した。調査範囲の中では本破片のみの出土で、その他の部位は全く出土していない。形態は口縁部が緩く外反し、2本の隆帯下に帯溝状文が施される。形態より陶器TK23平行段階と考えられる。2は土師器甕で同じく東側の周溝内より破砕した状態で出土した。復元作業を経てほぼ完形となっている。出土状況は墳丘側より転落した状態であった。形態は最大径を胴部中位に持ち、薄いが赤彩が施されている。3は307の土製品で、器種は壺の取っ手と考えられるが不確実である。4と5は数製品で、4はII区の墳丘検出時に出土した。直刀と考えられるが、刃の部分が錆びて薄くなっているようにも観察でき、或いは楯部側の様に幅があり、刺とも考えられる。5は主体部内より出土した。鉄櫛の茎部分と考えられる。6はガラス小玉で墳丘断面掘り時に盛土より出土した。形態より弥生後期の所産と考えられる。7はキセルである。8~12は石器



QR, UV, STは
見逃し図

12層 褐色土(10YR4/0)
しまりあり、割れ割い、
小石を含む。(土壇分)

第145図 後家山12号墳主体部展開図



第146図 後家山2号墳出土遺物実測図

No.	品名	数量	材質	外形・調整・文様			色調	備考	出土位置	
				正面	側面	背面				
1	須恵器高杯	(16.6)	-	(注3)	ロクロナデ、突縁とヘラ線織文の間に織成文	ロクロナデ	10Y5/1 (R)	回転製		
2	土師器壺	142	8.5	21.6	ヘラミガキ、赤色塗彩	口縁部ヘラミガキ、赤色塗彩、他は不明	5Y5/6 (明赤)	完全尖形、赤色塗彩?	塚溝	
3	土師器 エニテツア 製の把手?	-	-	-	ナゲ、把手貼付	不明	7.5Y4/2 (灰濁)	破片集積	一併*	
No.	品名	数量	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
4	武刀?	鉄製品	欠損	58.0	18.0	3.0			柄の可能性あり	塚内Ⅱ区
5	鉄鏃?	鉄製品	欠損	30.0	7.6	2.0				土塚部
6	ガラス小玉	ガラス	完整	3.6	2.5				薄いブルーで外生面ガラス小玉の侵入の可能性あり	表土Ⅱ区
7	オセル	銅	欠損	65.0	13.0				伸ばした巻腹板を丸める。大面部分が欠損	表土
8	青玉石鏃	青玉石	左辺欠損	12.6	12.7	3.0	0.40			I区
9	石鏃未製品	黒曜石	完整	19.8	10.5	6.8	1.40		青玉石鏃の未製品の可能性高い。一部に砥痕を残す。	Ⅱ区
10	石鏃?	黒曜石	先端部欠	16.9	14.6	4.3	0.80		右側辺の加工は反打方向にやや急内側に調整されており、背面側へ斜めの打痕としての加工である。このような加工がみられるのは、石鏃よく見られることから石鏃の可能性もある。	I区表土
11	石鏃	黒曜石	完整	21.8	11.5	5.0	1.00		小形の黒曜石鏃。加工はわずかで刃端に黒曜石鏃にかざすに類似	Ⅱ区表土
12	刀鏃	黒曜石密雲山岩	欠損	42.0	33.0	5.0	6.10		黒曜石鏃の一端を柳川製鋼により刃磨形成	Ⅲ区

第78表 後家山2号墳出土遺物観察表

ですけれども墳丘確認時に出土した。なお、主体部内より、出土陶磁器類(第148図)で示した5の白磁口刺げ皿(13~14世紀)が出土している。一点の為に不確実であるが、宮田遺跡に同時代の関連遺構が検出されていることや、M2号溝状遺構が中世の所産の可能性のあることから、本古墳の一つの発掘時期は中世とも考えられる。

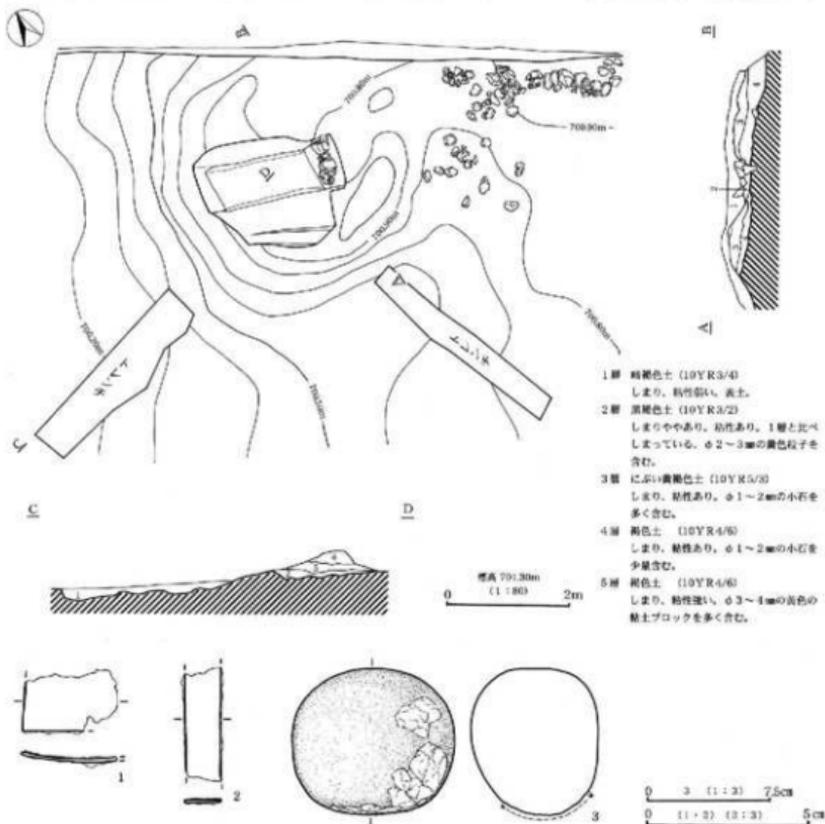
以上の出土遺物より本古墳の所産時期を示すものは1と2の須恵器高杯と土師器壺であり、須恵器の形式と土師器壺の形態より、およそ5世紀後半代と考える。

8. 塚

(1) OT2 (第147図, 写真図版八十一)

本墳は、調査区中央部の丘陵西端であるB-チ-6・7、B-ツ-5~7、B-テ-5~7Grに位置する。後家山2号墳の40m西に位置し、現況が墳丘状に僅かに盛り上がり、古墳の可能性があるため調査を行った。その結果、約40cmの盛土は確認できたものの、トレンチ及び精査に因っても周溝が確認されず、また、主体部と考えられる部分は重機によると考えられる掘り方が確認された。出土遺物は須恵器坏片・不明鉄製品2点と燧石のみである。

因って本遺構の性格は、中・近世所産の何らかの塚状の遺構とも考えられるが、不明な部分が多く確認を得ない。



第147図 OT2号全体図及び出土遺物実測図

No.	品名	素材	現存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
1	不明	須恵器片	欠損	34.0	11.0	1.0			II区
2	不明	鉄製品	欠損	28.0	16.0	1.0			II区
3	燧石	燧石(安山岩)	完整	89.0	99.0		825.00	下層と上面より崩れあり	一區

第79表 OT2号出土遺物観察表

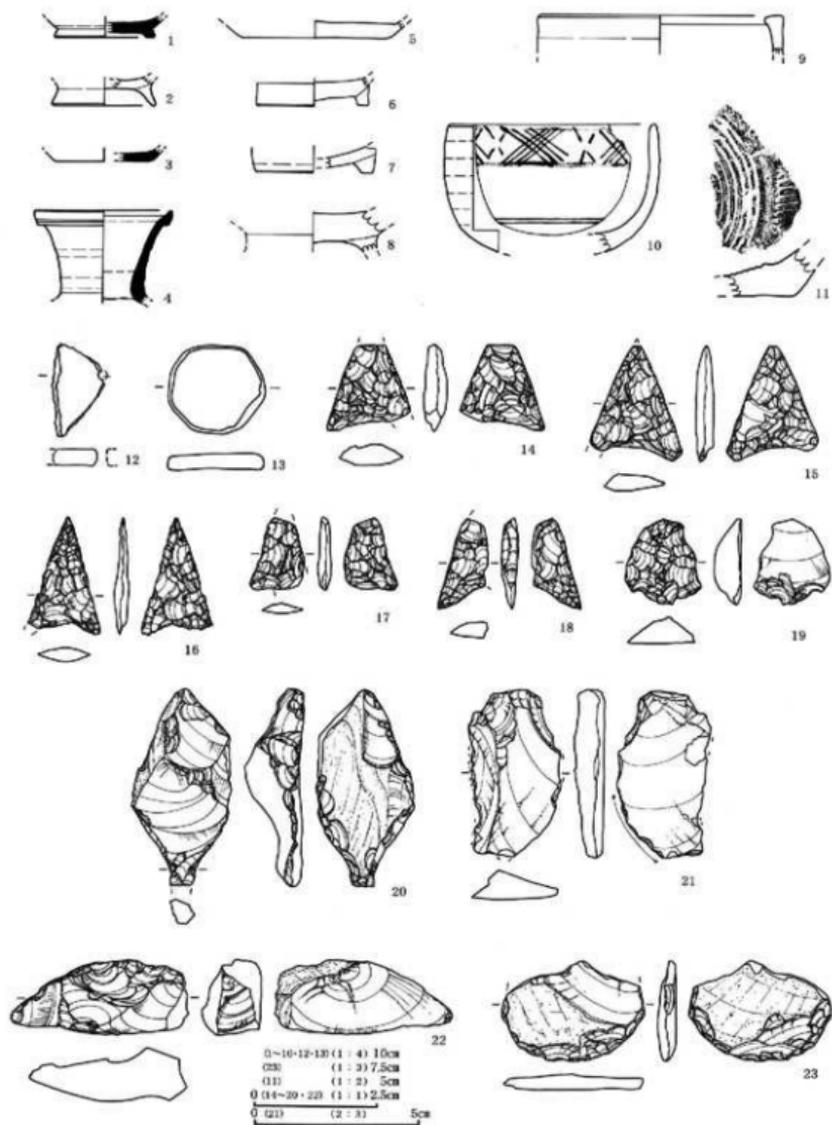
9. 遺構外出土遺物 (第148・149図)

本項では後家山遺跡から出土した遺物の内、遺構に伴わないものについて記載する。なお、陶磁器類については各遺構から出土したものも、明らかに遺構と所産時期が異なるものがほとんどであったため、本項でまとめて記載する。区化できる物は第148・149図に提示したが、その他の小片は写真図版百三十六に一括掲載した。なお陶磁器類一覧表は写真番号と一致する。

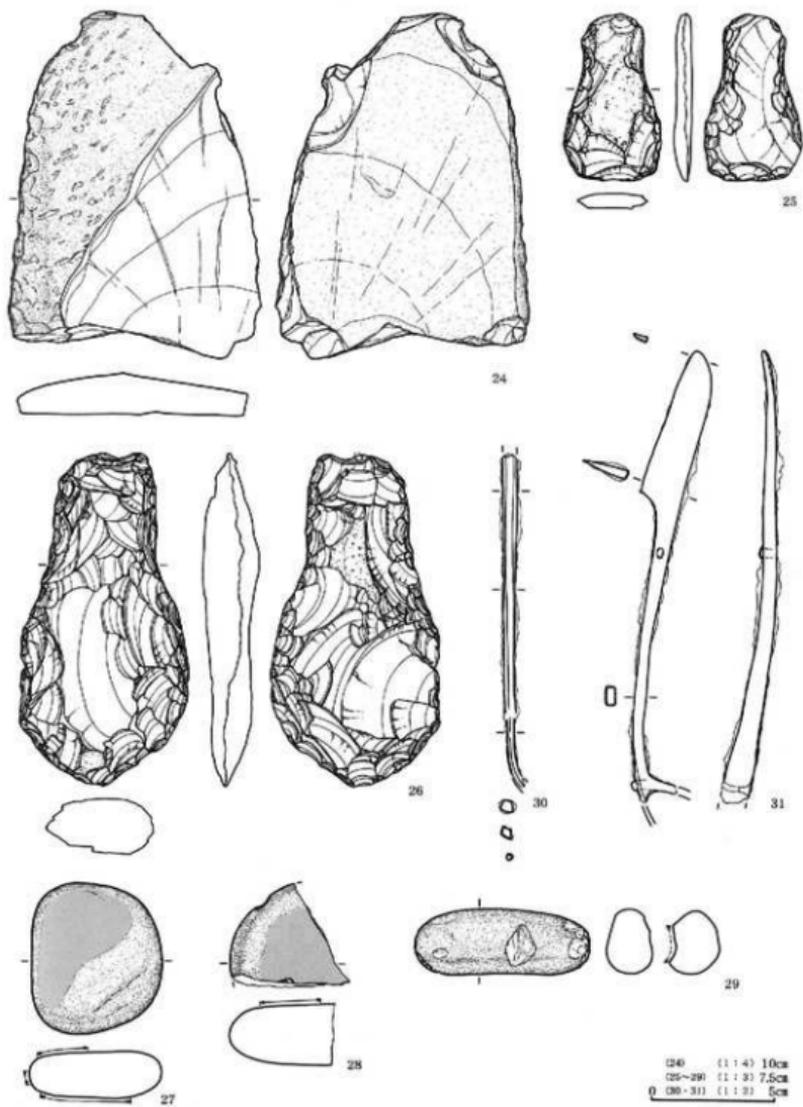
1~4は奈良・平安時代の須恵器と土師器である。1は高台付の坏で火だすきが確認できる。2は土師器の碗、3は須恵器坏で底部回転ヘラケズリを行う。4は須恵器長頸壺の口縁部である。これら奈良・平安時代の遺物は出土傾向に偏りはなく、丘陵全体から出土している。次に陶磁器類であるが、写真には42点を掲載した。後家山遺跡から出土した陶磁器は全般的に18世紀以降のものがほとんどで、近世に入って耕作とともに丘陵に持ち込まれた物がほとんどと考えられる。産地的には瀬戸・美濃が圧倒的に多く、伊万里・唐津が少量出土した。これら陶磁器類も須恵器・土師器と同じく、丘陵内での出土傾向に偏りはなく、丘陵全体から出土している。石器類は16点を図示した。石器類が6点で多く出土しており、形態は有茎が1点のみである。打製石斧は3点、敲石・磨石は3点である。石器の出土傾向は、黒曜石製が尾根と特に両側部分で多く出土している。また、24の礫は安山岩であるが、一部に成形による剥離があり、打製石斧(石鉄)の原材料となる礫と考えられる。30と31は鉄製品であり、30は断面が方形であり、先端が僅かに曲がる。種別は不明。31は和ハサミの一部と考えられる。

No.	器種	寸法		成形・調製・文様		色調	備考	出土位置	
		口径(φ)	高さ(φ)	外	内				
1	須恵器 有台坏 土師器	—	(8.7)	(1.5)	17ク1ナデ、火だすき痕。 底面回転切り残付高ナデ	ロクロナデ	7.5GY5/1 (緑灰)	回転実部 F・ス・5	
2	土師器	—	(8.5)	(1.9)	器面割れている 底部切り離し縁付高台	割られている	10YR7/4C (黄緑)	回転実部 B・ス・10	
3	須恵器 杯	—	(8.0)	(0.9)	ロクロナデ、火だすき痕。 底面回転ヘラケズリ	ロクロナデ	7.3GY3/1 (緑灰)	回転実部 O・T・2、Ⅱ区	
4	陶磁器 片断	(11.3)		(7.1)	ロクロナデ、白黒縁付	ロクロナデ、 白黒縁付	2.5GY5/1 (オリーブ灰)	回転実部 B・カ・11	
5	白磁(粥付)	—	11.8	(3.2)		白磁	白磁実部	後家山2号墳	
6	灰胎丸碗	—	9	(2.1)		黒灰・黄濁	白磁実部	後家山1号墳	
7	鉄製 片断	—	9.5	(2.1)		黒・黄濁	白磁実部	E・キ・20	
8	須恵器 片断	—	—	(3.2)		店津	白磁実部	M1	
9	鉄 片断	30	—	(3.2)		店津	白磁実部	後家山1号墳	
10	内磨 片断	16.5	—	(1.0)		中に染め付け	伊万里	白磁実部 M3	
11	すり鉢	—	—	—		円形のすり鉢	瀬戸・美濃	白磁実部 D・ミ・18	
12	土製円盤	—	—	—	穿孔あり		白磁実部	F・ス・5	
13	土製円盤	—	—	—			白磁実部	M2	
14	巴墓石	黒曜石	光澤、右欠欠	17.0	17.5	4.8	1.0	調又の石割の可能性あり	F・ク・9
15	巴墓石	黒曜石	基端欠損	24.5	18.8	4.0	1.30		Q・キ・1
16	巴墓石	黒曜石	左かみし欠欠	23.7	14.7	2.9	0.60		一灰
17	巴墓石	黒曜石	左端、片割欠	15.0	10.9	2.8	0.40		F・ツ・4
18	巴墓石	黒曜石	右割欠	17.5	12.0	3.5	0.40	表面は衝刺痕によるもの可能性高い	F・ヤ・18
19	巴墓石	黒曜石	光澤	17.7	15.7	5.3	1.10	後面部には黒炭材を残す	F・メ・14
20	石	砂岩	光澤	40.5	20.3	11.5	7.00	平らな角端から産出後下	F・オ・37
21	枕形瓦片	ガラス質安山岩	宋端欠	51.3	28.7	8.3	12.70	右側面に擦痕あり	F・イ・3
22	枕形瓦片	黒曜石	光澤	14.0	3.6	12.7	2.60	破片は小形角縁、左側に微細な擦痕	F・リ・9
23	打製石斧	安山岩	刃部破片	60.0	86.5	11.3	66.10	刃こぼれ	F・メ・21
24	石	輝石安山岩	光澤	281.0	185.0	34.0	2530.00	打製石斧の材石と考えられる、一部成形による剥離あり	Gr-板
25	打製石斧	輝石安山岩	光澤	101.2	59.5	10.2	81.70	刃こぼれ	F・メ・21
26	打製石斧	安山岩	光澤	206.7	102.8	34.7	669.10	ハドハンマーによる表面打撃によるもの	F・ヤ・21
27	磨石	硬質砂岩	光澤	79.0	91.0	29.0	347.00	両面と上端面に磨り	F・キ・37
28	磨石	硬質砂岩	欠損	72.0	63.0	37.0	(199.00)	正面に磨り	F・メ・21
29	敲石	砂岩	ほぼ完成	106.0	40.0	30.0	160.30	上下先端に鋭さ	B・カー・13
30	ハサミ	鉄製品							
31	ハサミ	鉄製品							

第80表 遺構外出土遺物観察表



第148图 道横外出土遺物実測図 (1)



第149回 遺構外出土遺物実測図 (2)

240 (1:4) 10cm
 25~290 (1:3) 7.5cm
 0 (30~31) (1:3) 5cm

通号	出土遺跡	グリット	器種	産地	時期	備考
1		F-ス-5	平鏡?	六瀬戸	15世紀	
2	OT1石室内	B-ケ-11	白磁口部/蓋	中国	13世紀~14世紀	第148図⑤
3		F-ス-5	蓋	常陸	中世	
4	H2IV区	B-ア-14	陶	瀬戸・美濃	近世	
5	H4N区	F-ス-12	灰釉丸瓶	瀬戸・美濃系	18世紀以降	
6	H7Ⅱ区	B-ア-13	丸瓶	瀬戸・美濃	近世	
7	H8	B-ウ-15	灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	18世紀以降	
8	H120	F-ア-18	灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	近世	
9	H135Ⅱ区	F-ス-9	灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	近世	
10	H55Ⅱ区	イ-モ-34	灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	近世	
11	H67	K-ラ-2	灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	近世	
12	M1		灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	18世紀	
13	M4		瓶	瀬戸・美濃	近世	
14	M6		灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	18世紀末~19世紀前半	
15		F-サ-11	灰釉小瓶	瀬戸・美濃	18世紀末~19世紀前半	
16		表探	灰釉瓶	瀬戸・美濃系	18世紀末~19世紀前半	
17		表探	灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	近世	
18		表探	灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	18世紀	
19	M2		灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	18世紀	
20	H62Ⅱ区	F-ケ-37	瓶	瀬戸・美濃	18~19世紀	
21	M3		灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	近世	
22	OT1Ⅱ区表上	B-ケ-11	灰釉丸瓶	瀬戸・美濃	18世紀	第148図⑥
23	H67	K-ウ-2	川口鉢形	瀬戸・美濃	18世紀以降	
24		E-ネ-20	異輪瓶	瀬戸・美濃	近世	第148図⑦
25		ド-マ-11	香炉	瀬戸・美濃	?	
26		F-ミ-18	すり鉢	瀬戸・美濃	近世	第148図⑧
27	H62	F-ケ-37	紅銅乳	瀬戸・美濃	18世紀末	
28		F-マ-14	打明皿	瀬戸・美濃	18世紀末~19世紀前半	
29		F-ウ-4	すり鉢	瀬戸・美濃	近世	
30		F-ヤ-17	磁手茶碗	瀬戸・美濃	18世紀後半~19世紀前半	
31	OT1	B-ケ-11	陶胎筒	伊万里	18世紀後半	
32	H65Ⅱ区	K-モ-3	筒	伊万里	18世紀末~19世紀後半	
33	H67	K-ラ-2	陶胎筒	伊万里	18世紀後半	
34	M3		異形筒・中央め付け	伊万里	18世紀後半	第148図⑨
35	M4		筒	伊万里	18世紀末	
36		F-マ-11	白磁	伊万里	江戸	
37	M7		異形手筒	輪産	17世紀後半?	第148図⑩
38	OT1	B-ケ-11	土瓶	近世	18世紀末以降	
39	OT1	B-ケ-11	土瓶底	近世	18世紀末以降	
40	OT1Ⅱ区表上	B-ケ-11	鉢	近世	近世末	第148図⑪
41		F-ス-3	土製円盤?	近世	穿孔あり	第148図⑫
42	M2		土製円盤	1瀬戸系		第148図⑬

第81表 出土陶磁器類一覧表

第3節 科学分析

(1) 後家山遺跡における種実同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、現地で選別されたもの7点と堆積物1点である。選別済み試料は、H4号住居址（Ⅱ区（2点）、Ⅲ区、Ⅳ区）、5号住居址炉、H17号住居址（Ⅳ区、カマド）の7遺構より採取された炭化植物遺体である。H4号住居址、5号住居址は弥生時代後期、H17号住居址は平安時代の遺構である。堆積物試料は宮田遺跡D25号土坑より採取されたものである。こちらの時期は中世である。

3. 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) 試料200cm³に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

(1) 分類群

樹木1、草本1の計2が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

モモ *Prunus persica* Batsch 核バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

〔草本〕

ササゲ属 *Vigna* 種子（炭化）マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現時点ではこれらを識別することは困難である。

(2) 種実群集の特徴

1) 選別済み試料

H4号住居址より採取された植物遺体は全てモモ核の破片であった。5号住居址炉より採取された植物遺体は炭化したササゲ属、不明炭化物（破片）であった。H17号住居址のⅣ区より採取された植物遺体は、モモ、カマドより採取された植物遺体は不明炭化物果実であった。

2) 堆積物試料

D25号土坑から種実は検出されなかった。

5. 種実同定から推定される植生と農耕

1) 選別済み試料

H4号住居址、H17号住居址のⅣ区よりモモが採取されたが、モモは縄文時代晩期から弥生時代にかけて伝来した外来の栽培植物である。弥生時代には一般的に栽培されており、本遺跡においても栽培されていたと考えられる。5

号住居址炉跡より採取されたササゲ属は弥生時代以降より出土し、とくに中世によく検出される。

2) 堆積物試料

D25号土坑から種実を検出されず、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境において分解された可能性が考えられる。

参考文献

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.
 笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類, 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
 南木睦彦 (1991) 栽培植物, 古墳時代の研究第4巻生業と流通 1, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.
 南木睦彦 (1992) 低湿地遺跡の種実, 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.18-22.
 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子, 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.
 古崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.2-14.
 渡辺 誠 (1975) 縄文時代の植物食, 雄山閣, 187p.
 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種, 月刊考古学ジャーナルNo.409, ニューサイエンス社, p.15-19.

後家山遺跡における種実同定結果

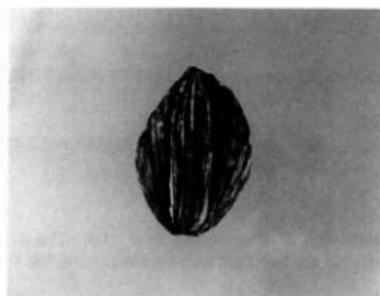
分類群		選別済み資料							200cm 3 中0.25mm篩
		H 4号住居址				H 5	H 17	D 25号土坑	
学 名	和 名	部位	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅳ区	炉	Ⅳ区	カマド	No 1
Arbor	樹木								
Prunus persica Batsch	モモ	核	2	1	1		1		
Herb	草本								
Vigna	ササゲ属	種子							
Total	合 計		2	1	1	4	1	0	0
Unknown	不明炭化果実					4		1	
Unknown	不明炭化物(破片)					5			

後家山遺跡の種実



1 モモ核 (H4号住居址Ⅲ区)

— 1.0mm



2 同左

— 1.0mm

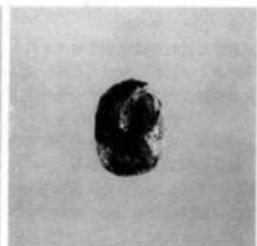


3 ササゲ属種子 (H5号住居址如)

— 1.0mm



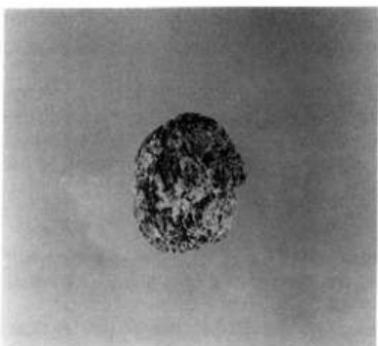
4 同左



5 ササゲ属種子 (H5住居址如)

— 1.0mm

— 1.0mm



6 不明炭化果実 (H17号住居址カマド)

— 1.0mm



7 同左

— 1.0mm

(2) 後家山遺跡における樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を推察する手がかりとなる。

2. 試料

試料は、後家山遺跡において検出された弥生時代後期の住居址（H39号、H41号、H51号およびH52号）より出土した炭化材265点である。

3. 方法

試料を剖折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果は表1に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属 *Abies* マツ科

図版1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスキ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軟軟であるが、現在では多用される。

ヒノキ属 *Chamaecyparis*

図版2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、1分野にやや小型のものが2個存在するものが、型は不明瞭である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりヒノキ属に同定される。ヒノキ属には、ヒノキとサワラがあり、その内ヒノキは、福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。またサワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、密であるが、ヒノキより軟軟でもろいが、広く用いられる。

カバノキ属 *Betula* カバノキ科

図版3

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに散在する散孔材材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～20木ぐらゐである。放射組織は同性である。道管と放射組織の間の壁孔は極めて小さく密である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で、1～3細胞幅である。道管相互の壁孔は極めて小さく密に配列する。

以上の形質よりカバノキ属に同定される。カバノキ属にミズメ、ウダイカンバ、シラカンバ、オノオレカンバなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

図版4・5・6・7

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、散在しないし火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと同型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmくらいに達する。材は強靱で弾性に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aeglops* ブナ科

図版8

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単列でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと同型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾性に富み、器具、農具などに用いられる。

ブナ科 *Fagaceae*

横断面：部分的ではあるが大型の道管と、火炎状に配列する小道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科の、クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかである。なお本試料は小片であるうえに保存状態が悪く、広範囲の観察は困難であったので、ブナ科以下の同定は困難であった。

ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ属

図版9

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独、ときに複合して密に存在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。道管の内壁にらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりニシキギ属に同定される。ニシキギ属には、ニシキギ、ツリバナ、マユミなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の低木または高木で、通常高さ3～6m、径15～30cmに達する。やや堅硬で緻密な材で、版木、弓、器具、家具、建築材などに利用される。

タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と節部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が輻射方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。

5. 所見

後家山遺跡で検出された弥生時代後期の住居址4軒より出土した炭化材について樹種同定を行った。その結果、I139号住居址ではコナラ属コナラ節26点、ヒノキ属2点、ブナ科1点、I141号住居址ではコナラ属コナラ節86点、ヒノキ属2点、ブナ科1点、カバノキ属1点、H51号住居址ではコナラ属コナラ節41点、ヒノキ属1点、コナラ属クヌギ節1点、ニシキギ属2点、モミ属1点、H52号住居址ではコナラ属コナラ節95点、ヒノキ属1点、コナラ属クヌギ節2点、ブナ科1点、タケ亜科1点であった。

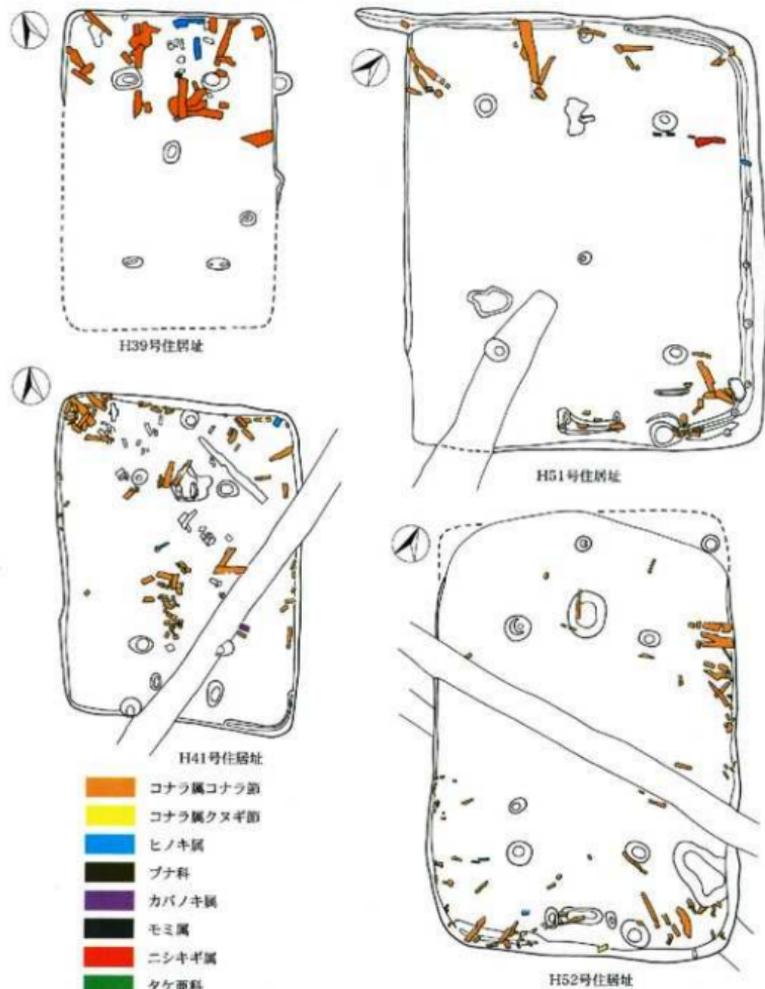
いずれの住居址もミズナラなどのコナラ属コナラ節が極めて多く、主要材であったとみられる。コナラ属コナラ節の木材は強靱で弾性に富み、建築材としても重用される。また、冷温帯の落葉広葉樹林の主要構成要素であることから、当時、本遺跡周辺にも分布していたと考えられる。他ではヒノキ属やモミ属の針葉樹、コナラ属クヌギ節、

ブナ科、ニシキギ属およびカバノキ属の落葉広葉樹、さらにタケ亜科も温帯に分布する樹種である。

参考文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.



第150図 H39・41・51・52号住居址樹種同定図

表1 後家山遺跡における樹種固定結果 (1)

遺構名	結果 (和名/学名)	遺構名	結果 (和名/学名)
H39号住居址	No. 1 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus	H41号住居址	No. 6 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 2 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 7 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 3 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 8 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 4 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 9 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 5 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 10 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 6 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 11 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 7 ヒノキ属 Chamaecyparis		No. 12 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 8 ヒノキ属 Chamaecyparis		No. 13 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 9 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 14 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 10 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 15 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 11 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 16 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 12 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 17 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 13 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 18 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 14 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 19 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 15 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 20 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 16 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 21 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 17 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 22 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 18 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 23 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 19 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 24 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 20 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 25 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 21-1 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 26 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 22 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 27 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 23 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 28 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 24 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 29 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 25 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 30 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 26 ブナ科 Fagaceae		No. 31 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 27 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 32 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	No. 28 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus		No. 33 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
			No. 34 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
			No. 35 コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus

表1 後家山遺跡における樹種固定結果 (3)

遺跡名	No.	結果 (和名/学名)	遺構名	No.	結果 (和名/学名)	
H51号住居址	22	コナラ属コナラ節		52	コナラ属コナラ節	
	23	コナラ属コナラ節		53	コナラ属コナラ節	
	24	コナラ属コナラ節		54	コナラ属コナラ節	
	25	コナラ属コナラ節		55	コナラ属コナラ節	
	26	コナラ属コナラ節		56	コナラ属コナラ節	
	27	コナラ属コナラ節		57	コナラ属コナラ節	
	28	コナラ属コナラ節		58	コナラ属コナラ節	
	29	コナラ属コナラ節		59	コナラ属コナラ節	
	30	コナラ属コナラ節		60	コナラ属コナラ節	
	31	コナラ属コナラ節		61	コナラ属コナラ節	
	32	コナラ属コナラ節		62	コナラ属コナラ節	
	33	コナラ属コナラ節		63	コナラ属コナラ節	
	34	コナラ属コナラ節		64	コナラ属クスギ節	
	35	コナラ属コナラ節		65	モミ属	
	36	コナラ属コナラ節		66	ニシキ半属	
	37	コナラ属コナラ節		67	ニシキ半属	
	38	コナラ属コナラ節		H52号住居址	22	コナラ属コナラ節
	39	コナラ属コナラ節			23	コナラ属コナラ節
	40	コナラ属コナラ節			24	コナラ属コナラ節
	41	コナラ属コナラ節			25	コナラ属コナラ節
	42	コナラ属コナラ節			26	コナラ属コナラ節
	43	コナラ属コナラ節			27	コナラ属コナラ節
	44	コナラ属コナラ節			28	コナラ属コナラ節
	45	コナラ属コナラ節			29	コナラ属コナラ節
	46	コナラ属コナラ節			30	コナラ属コナラ節
	47	コナラ属コナラ節			31	コナラ属コナラ節
	48	コナラ属コナラ節			32	コナラ属コナラ節
	49	コナラ属コナラ節		33	コナラ属コナラ節	
	50	コナラ属コナラ節		34	タケ唯科	
	51	コナラ属コナラ節		35	コナラ属コナラ節	

表1 後家山遺跡における樹種固定結果(4)

遺構名	№	結果(和名/学名)	遺構名	№	結果(和名/学名)
H52号住居址	36	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	66	コナラ属コナラ節
	37	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	67	コナラ属クヌギ半節
	38	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	68	コナラ属コナラ節
	39	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	69	コナラ属コナラ節
	40	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	70	コナラ属コナラ節
	41	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	71	コナラ属コナラ節
	42	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	72	コナラ属コナラ節
	43	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	73	コナラ属コナラ節
	44	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	74	コナラ属コナラ節
	45	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	75	コナラ属コナラ節
	46	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	76	ブナ科
	47	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	77	コナラ属コナラ節
	48	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	78	コナラ属コナラ節
	49	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	79	コナラ属コナラ節
	50	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	80	コナラ属コナラ節
	51	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	81	コナラ属コナラ節
52	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	82	コナラ属コナラ節	
53	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	83	コナラ属コナラ節	
54	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	84	コナラ属コナラ節	
55	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	85	コナラ属コナラ節	
56	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	86	コナラ属コナラ節	
57	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	87	コナラ属コナラ節	
58	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	88	コナラ属コナラ節	
59	ヒノキ属	Chamaecyparis	89	コナラ属コナラ節	
60	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	90	コナラ属コナラ節	
61	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	91	コナラ属コナラ節	
62	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	92	コナラ属コナラ節	
63	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	93	コナラ属コナラ節	
64	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	94	コナラ属コナラ節	
65	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	95	コナラ属コナラ節	

表1 後家山遺跡における樹種固定結果 (5)

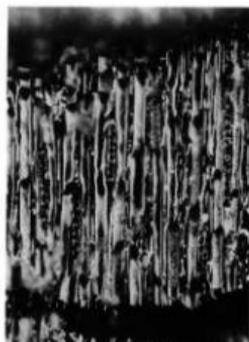
遺構名	No.	結果 (和名/学名)
H52号住居址	96	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	97	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	98	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	99	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	100	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	101	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	102	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	103	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	104	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	105	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	106	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	107	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	108	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	109	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	110	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	111	コナラ属クヌギノ節 Quercus sect. Aegilops
	112	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	113	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	114	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	115	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
	116	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
117	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus	
118	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus	
119	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus	
120	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus	
121	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus	



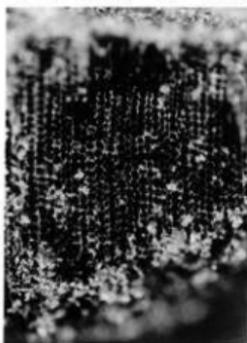
横断面 ————— :0.4mm
1. H51号住居址 No.64 モミ属



放射断面 ————— :0.1mm



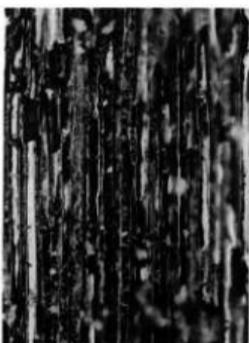
接線断面 ————— :0.2mm



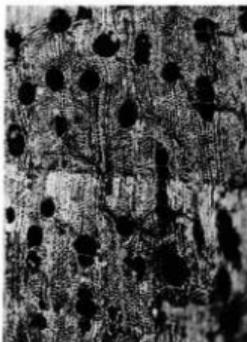
横断面 ————— :0.4mm
2. H41号住居址 No.64 ヒノキ属



放射断面 ————— :0.1mm



接線断面 ————— :0.2mm



横断面 ————— :0.4mm
3. H41号住居址 No.47 カバノキ属



放射断面 ————— :0.2mm



接線断面 ————— :0.2mm



横断面 :0.4mm



放射断面 :0.2mm



接線断面 :0.2mm

4. H41号住居址 №41 コナラ属コナラ節



横断面 :0.4mm



放射断面 :0.4mm



接線断面 :0.4mm

5. H51号住居址 №26 コナラ属コナラ節



横断面 :0.4mm



放射断面 :0.4mm



接線断面 :0.4mm

6. H51号住居址 №56 コナラ属コナラ節

後家山遺跡の炭化材Ⅲ



横断面 :0.4mm

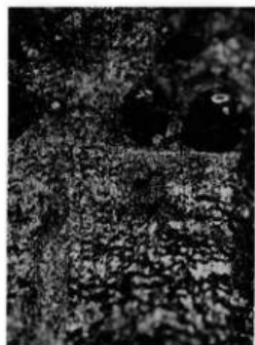


放射断面 :0.4mm



接線断面 :0.4mm

7, H52号住居址 №82 コナラ属コナラ節



横断面 :0.4mm

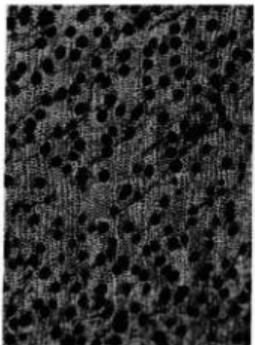


放射断面 :0.2mm



接線断面 :0.4mm

8, H52号住居址 №67 コナラ属クスギ節



横断面 :0.4mm



放射断面 :0.2mm



接線断面 :0.2mm

9, H51号住居址 №66 ニシキギ属

(3) 後家山遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料	採取地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	H51住居址 (平線)	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.2	H39住居址 No.8	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.3	H39住居址 No.19	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.4	H39住居址 No.21	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.5	H41住居址 No.47	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.6	H41住居址 No.64	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.7	H41住居址 No.56	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.8	H51住居址 No.63	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.9	H51住居址 No.64	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.10	H51住居址 No.66	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.11	H52住居址 No.34	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.12	H52住居址 No.95	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法
No.13	H52住居址 No.67	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS (加速器質量分析) 法

2. 測定結果

試料	14C年代 (年BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No.1	2000±40	-26.1	1980±40	交点: AD 30 1σ: BC 30 ~ AD 70 2σ: BC 50 ~ AD 100	176710
No.2	2130±40	-22.6	2170±40	交点: BC 200 1σ: BC 350 ~ 300, : BC 220 ~ 170 2σ: BC 370 ~ 100	176711
No.3	1990±40	-25.0	1990±40	交点: AD 20 1σ: BC 40 ~ AD 60 2σ: BC 60 ~ AD 90	176712
No.4	2000±40	-25.7	1990±40	交点: AD 20 1σ: BC 40 ~ AD 60 2σ: BC 60 ~ AD 90	176713
No.5	2120±40	-26.5	2100±40	交点: BC 110 1σ: BC 180 ~ 50 2σ: BC 200 ~ 30	176714
No.6	2000±40	-23.4	2030±40	交点: BC 40 1σ: BC 60 ~ AD 20 2σ: BC 160 ~ AD 60	176715

試料	14C年代 (年BP)	$\delta 13C$ (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No.7	2040±40	-25.8	2030±40	交点: BC 40 1σ: BC 60 ~ AD 20 2σ: BC 160 ~ AD 60	176716
No.8	1890±40	-26.9	1860±40	交点: AD 130 1σ: AD 100 ~ 220 2σ: AD 70 ~ 240	176717
No.9	1930±40	-24.7	1930±40	交点: AD 70 1σ: AD 40 ~ 110 2σ: BC 10 ~ AD 140	176718
No.10	1940±40	-26.9	1910±40	交点: AD 90 1σ: AD 60 ~ 130 2σ: AD 20 ~ 220	176719
No.11	1680±40	-10.3	1920±40	交点: AD 80 1σ: AD 50 ~ 120 2σ: AD 10 ~ 150	176720
No.12	2030±40	-26.2	2010±40	交点: BC 10 1σ: BC 50 ~ AD 40 2σ: BC 100 ~ AD 70	176721
No.13	1980±40	-27.6	1940±40	交点: AD 70 1σ: AD 30 ~ 100 2σ: BC 30 ~ AD 130	176722

1) 14C年代測定値

試料の14C/12C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。14Cの半減期は、国際慣例に従って5568年を用いた。

2) $\delta 13C$ 測定値

試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比(13C/12C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正14C年代値

$\delta 13C$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には、年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と14C年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前 暦年代の交点とは、補正14C年代値と暦年代校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ(68%確率)・2σ(95%確率)は、補正14C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

(4)後家山遺跡出土のガラス玉の分析

小泉 好延 (武蔵野文化財修復研究所)

1.はじめに

後家山遺跡出土のガラス玉16試料の材質分析を行った。本遺跡は弥生時代後期の遺跡であり、この時代に出土するガラス玉の主成分と着色剤成分が明らかとなる。また、同時代の他遺跡から出土するガラス玉の材質や製造技術などの類似性が検討出来る。特にこの時代の東日本の遺跡から出づるガラス玉は、基礎ガラスが鉛ガラスとアルカリ石灰ガラス系ソーダ石灰ガラスに属するものがほとんど出せず、アルカリ石灰系カリ石灰ガラスに属するものが大部分である。一方、同時代の北九州では3つに大別される基礎ガラスが出土しており、東日本とは違った様相を示している²⁾。本試料の基礎ガラス成分はこれまでの東日本の結果と同様になるか否かが注目される。また、本試料の青、青緑色の着色原理と着色剤は従来から明らかにされている技術によって行われていると思われるが、本分析によって確認されるであろう。

2.分析方法

非破壊分析法であるPIXE法を使用した。この分析法は荷電粒子励起X線分析、Particle Induced X-ray Emissionを略してPIXE法と呼ばれている。加速器により陽子や α 粒子を高エネルギーに加速し、分析試料に照射して、試料の含有元素から発生する特性X線のエネルギースペクトルを半導体型放射線検出器で測定、解析する非破壊分析法である。PIXE法の特長は試料破損が無く放射線による着色が生じないこと、多元素を同時に分析できることにある。本報告者はPIXE法をナトリウムから錫、バリウム、ウランまで同時に分析できるよう改良し、考古遺物のガラス玉、青銅、真鍮金属、陶磁器などの材質分析に使用している。

分析条件は加速器による照射エネルギーと粒子が3MeVのプロトン、照射ビーム径は0.5mm、照射電流値は0.5~1ナノアンペア(nA)、照射電荷量200~1000ナノクーロン(nC)である。X線検出器は高純度Si半導体検出器とCZT半導体検出器の両者を同時に使用し、特性X線のエネルギースペクトル(PIXEスペクトル)解析と標準資料により定量を行った³⁾。

3.分析試料と前処理

後家山遺跡の木棺墓と住居址から出土したガラス玉数は54で、ほぼ3.2mm前後、色調が青、緑青の小玉であり、遺構1号木棺墓12、住居址H2,H4各2の16試料を分析した。一部の試料は半円片化しているが多くの試料は完形である。表面がやや腐食している試料も存在する。この色調を持つガラス玉は紺色のガラスと共に、全国の多くの弥生時代遺跡から出土している。2001年に発掘された東京大学本郷構内遺跡武田先端知ビル地点の方形溝墓3:体部から紺色、赤色管玉と共に青色ガラス玉が出土しているが⁴⁾、東京、埼玉、神奈川、千葉、長野県の遺跡でも同様な出土状況である⁵⁾。

試料の前処理は、エタノール：蒸留水 1：1の溶液、超音波洗浄器を用い、3分間試料を洗浄した後、エタノール液で洗い洗浄、真空乾燥を行った。その後PIXE分析ホルダーに装着した。

5.分析結果

分析の結果、得られたPIXEスペクトルを高純度Si半導体検出器、CZT半導体検出器の検出器別に図1~4に例示した。PIXEスペクトル図には検出された主な元素を各ピーク上に記した。横軸は各元素が示す特性X線エネルギー、縦軸は指数で表示された計数値である。NBS、地質調査所、試験測定などの標準試料を用いた分析結果を表に示した。分析値はガラス分析表面が不定形のためNa(ナトリウム)~Pb(鉛)までを解析し、それらの酸化物濃度の合計を100として、重量パーセント(wt%)で示した。なお、3試料は表面に腐食があるため参考値とする。

分析結果によれば、13試料のナトリウム(Na₂O)、CaOは0.8wt%以下、0.3wt%以下と低い濃度である。カリウム(K₂O)は多くの試料で8~10wt%であることから、これらの基礎ガラスは全てアルカリ石灰系カリ石灰ガラスである。また、基礎ガラス成分ではなく、着色剤として用いられたとは思えない鉛(PbO)が0.1~0.5wt%検出された。

着色剤成分は銅(CuO)、鉄(Fe₂O₃)、チタン(TiO₂)、マンガン(MnO)が検出されているが、濃度が高い銅、鉄が青、青緑色の着色剤である。

腐食のために参考値とした3試料もK₂O濃度が低いことを除けば、基礎ガラス、着色剤ともに同類のガラスである。

後家山遺跡出土のガラス玉 PIXE スペクトル

図1-1 試料 後家山遺跡1号木棺墓-3 色調 青 (PureSi検出器)

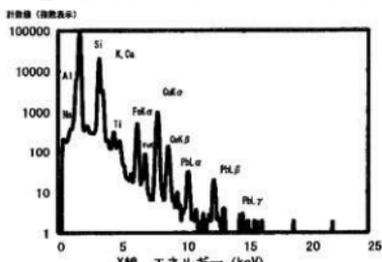


図1-2 試料 後家山遺跡1号木棺墓-3 色調 青 (CZT検出器)

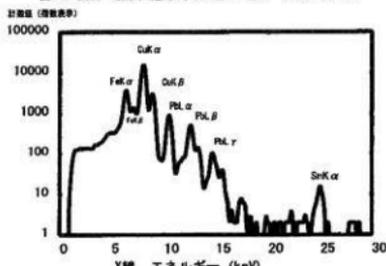


図2-1 試料 後家山遺跡1号木棺墓-16 色調 青 (PureSi検出器)

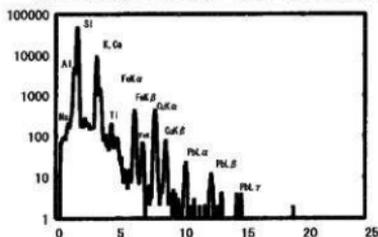


図2-2 試料 後家山遺跡1号木棺墓-16 色調 青 (CZT検出器)

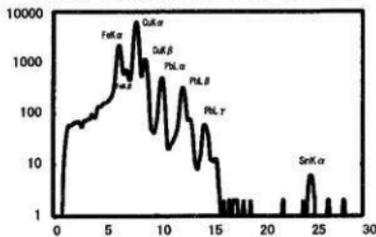


図3-1 試料 後家山遺跡2号住居址ふるい色調緑青 (PureSi検出器)

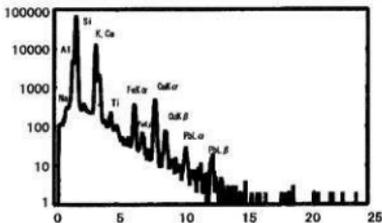


図3-2 試料 試料 後家山遺跡2号住居址ふるい色調緑青 (CZT検出器)

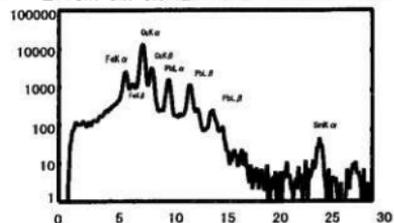


図4-1 試料 後家山遺跡4号住居址I区 色調緑青 (PureSi検出器)

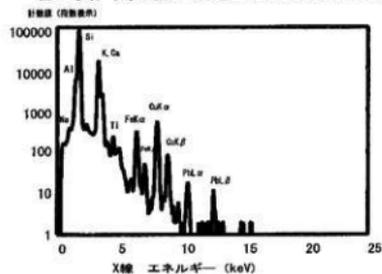


図4-2 試料 後家山遺跡4号住居址I区 色調緑青 (CZT検出器)

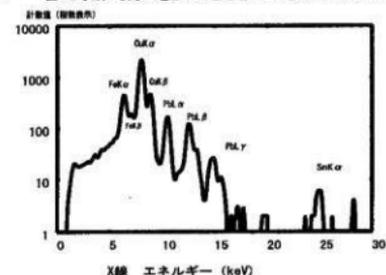


表1. 後家山遺跡出土のガラス玉材質分析結果

酸化物重量パーセント (wt%)

試料名	色調	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	SnO ₂	形態・遺構	サイズ
1号木棺蓋-2	青	0.52	0.56	6.31	80.82	9.43	0.16	0.19	0.01	0.55	nd	1.06	0.31	0.08	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-3	青	0.42	0.50	5.91	79.51	10.47	0.15	0.17	0.01	0.61	nd	1.65	0.40	0.10	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-8	青	0.61	0.43	5.62	83.72	5.57	0.33	0.20	0.02	0.80	nd	2.09	0.52	0.08	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-16	青緑	0.51	0.51	8.65	77.86	9.17	0.13	0.27	0.02	1.00	nd	1.39	0.41	0.07	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-17	青	0.75	nd	9.38	78.77	7.75	0.28	0.16	0.02	0.64	nd	1.78	0.37	0.09	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-20	青	0.64	0.90	6.98	80.72	7.19	0.32	0.19	0.03	0.79	nd	1.63	0.53	0.08	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-32	青	0.37	0.36	5.46	80.64	9.56	0.24	0.14	0.01	0.67	nd	2.00	0.50	0.05	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-38	青	0.46	0.49	6.16	81.61	8.67	0.22	0.19	0.02	0.62	nd	1.33	0.17	0.05	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-50	青	0.56	0.00	7.05	85.20	5.96	0.09	0.15	0.01	0.37	nd	0.49	0.11	0.02	完形・木棺蓋	3mm径
H2-ふらい	青	0.72	0.55	6.45	80.47	9.19	0.17	0.17	0.01	0.62	nd	1.18	0.40	0.06	完形・住居址	3mm径
H2-P29 半磨片	青	0.61	0.46	5.16	79.98	10.67	0.13	0.20	0.01	0.66	nd	1.67	0.41	0.04	半形・住居址	3mm径
H4-Ⅲ区	青	0.38	0.31	5.57	82.84	9.06	0.07	0.16	0.02	0.42	nd	0.95	0.16	0.05	完形・住居址	3mm径
H4-I K 以下参考値	青	0.44	0.42	7.10	78.83	10.46	0.08	0.21	0.02	0.83	nd	1.25	0.34	0.02	完形・住居址	3mm径
1号木棺蓋-18	青緑	0.36	0.38	4.67	89.53	1.29	0.24	0.13	0.02	0.94	nd	2.03	0.35	0.05	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-33	青	0.67	0.53	7.69	85.12	2.40	0.36	0.19	0.02	0.99	nd	1.29	0.69	0.05	完形・木棺蓋	3mm径
1号木棺蓋-53	青緑	0.58	0.51	5.68	90.73	0.91	0.19	0.07	0.01	0.45	nd	0.77	0.09	0.01	完形・木棺蓋	3mm径

nd:検出限界値以下、酸化物濃度 wt%はNa~Pbまでを100とした値である。

図5 後家山遺跡出土のガラス
SiO₂ & K₂O, CaO, Na₂O 相関

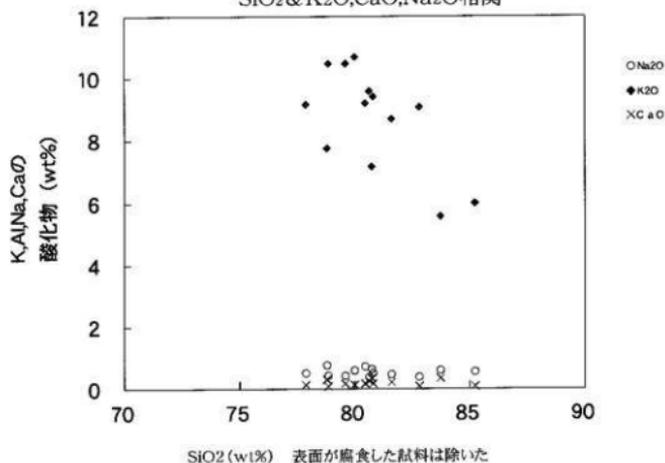
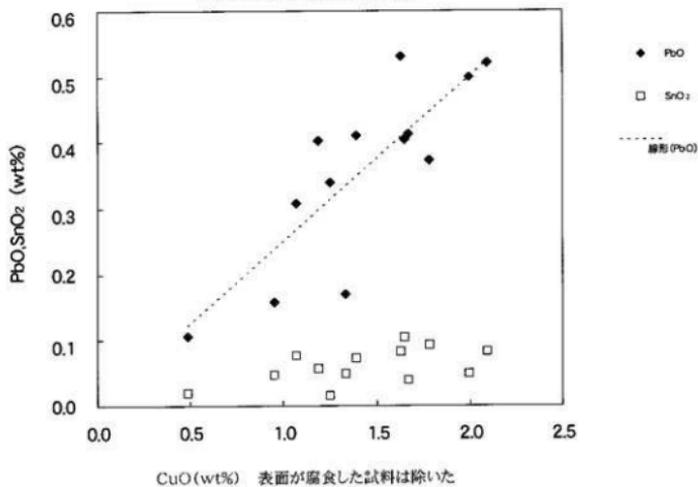


図6 後家山遺跡出土のガラス
CuO & PbO, SnO₂ 相関



6. 考察と結論

考察

遺跡の年代確定は遺構のみならず出土遺物を考察する上で極めて重要である。本遺跡は遺構形態や出土土器などから弥生時代後期に同定されているが、さらにC-14年代による年代確定が行われれば、他の遺跡出土遺物との比較、類似性などの考察が、より明確に検討できる。幸い、住居址(H2)遺構から炭化した木材が出土していることから、AMS法によるC-14年代測定を行った。C-14測定による遺構年代の詳細な結果は別稿で述べるが、ガラス玉が供出した遺構出土のコナラ節材の暦年代は、西暦20年～125年(確率68.2%)との結果となった。樹齢を考慮しても本遺構は弥生時代中期後半から後期であることが確認された。したがって、分析したガラス玉は明確にこの時代の遺構から出土した試料と断定できる。

表面が腐食した3試料を除き、分析結果をわかりやすいように、基礎ガラス成分と着色成分、鉛と錫(Pb,Sn)微量成分の相関を図5,6に示した。本ガラス試料の基礎ガラスは主成分SiO₂が80wt%前後、K₂Oが6～11wt%のシリカ石灰ガラスであり、銅(Cu)による着色である。検出された鉛(Pb)は銅と正の相関があり(相関係数0.83)、着色に使われた銅材に含有されていたと考えられる。銅に対してその約25%前後の濃度である鉛は、着色に関与する成分として銅に調合されたか、銅原料の不純物であるか、銅・鉛合金材が利用されたかは判断できない。しかし、銅によるガラスの緑色着色の要因として、鉛の存在が関与することが知られている。結果としてガラスに含まれる鉛は、本試料の一部に認められる青緑色ガラスの緑色調に関与しているものと思われる。

なお、銅によるガラスの着色原理は銅イオンの原子価の基本平衡、還元Cu⁺(無色)←→酸化Cu²⁺(青色)によって着色する。Cu²⁺(青色)は溶解温度が高いため、銅濃度が高いため、起分極性の高い鉛(Pb)を共存させることで、青色から濃緑色へ変化することが知られている³⁰。

本試料の多くは青色であるが、青緑色ガラスも存在する。しかし、それらの成分分析結果では基礎ガラスやPb濃度、着色成分のCu濃度に大きな差異が無い。したがって、ガラス玉の原料は同一であるが、製造過程で溶融温度が部分的に高温となり、Pbの存在も関与して、青色にやや緑色が混在したガラス玉が造られたものと思われる。

他の遺跡出土の青色ガラス玉との関係はどのようであろうか。弥生時代の遺跡である東京大学本郷構内遺跡の方形週溝溝、長野県榎田遺跡などから出土した青色ガラス玉では、基礎ガラス成分がシリカ石灰ガラスで、着色と微量成分は銅(CuO)1～2wt%、鉛(PbO)0.2～0.5wt%のものが多く、本試料と極めて類似している。また、古墳時代前期遺跡である東京都大田区宝来山古墳出土の青、青緑色ガラス玉でも、ほぼ同じシリカ石灰ガラスで着色成分も同様である。1.2.4.5.6)

結論

本試料は弥生時代から古墳時代前期の遺跡で出土する青、青緑色ガラスと同じ種類のガラス玉である。弥生時代の北九州地域ではアルカリ石灰系シリカ石灰ガラス、ソーダ石灰ガラス、鉛ガラスが出土している³¹。古墳時代中期から後期以降になると東日本でもソーダ石灰ガラス、鉛ガラスで色調も多様化したガラス玉が出土するが^{12,27}、この時代の東日本では、アルカリ石灰系シリカ石灰ガラスで、マンガン鉱物(微量のコバルトを含有している場合が多い)を着色剤とする紺色系統と銅を着色剤とした青・緑色系統の2種類のガラス玉が大部分である³²。本試料でも確認されたように、何故、これらの地域で弥生時代から古墳時代前期にかけて、ほぼ同一の基礎ガラスと2種類の着色技術によって製造されたガラスが大平を占めているのであろうか。当時、先進的なガラス技術を持っていた西アジア、あるいはインド洋沿岸、中国南部と東アジアなどからの流通が考えられよう。日本の弥生時代における海外のシリカ石灰ガラス製造地域の同定や、国内での分布がこのガラス玉の流通経路を明らかにしてくれるであろう。

参考資料

- 1.藤田 等 「弥生時代ガラスの研究—考古学的方法—」 名著出版 1994.
- 2.小泉好延、小林紘一 「弥生・古墳時代のガラス材質」 1999.12第 1回考古科学シンポジウム
- 3.伊藤彰 一ガラスにおける—「炎と色の技術」 アグネ技術センター 1997
- 4.小泉好延、小林紘一 「榎田遺跡より出土したガラス玉の材質分析」 長野県埋蔵文化財センター発掘報告書、1999.3
- 5.小泉好延、原祐一 「東京大学本郷構内武田元彌加ビル地点出土のガラス玉材質分析」 第3回考古科学シンポジウム、2001.12
- 6.小泉好延、小林紘一 「宝来山古墳から出土したガラス玉の材質分析」 大田区立郷土博物館紀要第7号、1996
- 7.小泉好延、小林紘一 「聖塚27号墳から出土のガラス玉の材質分析」 埼玉県江岸町埋蔵文化財調査報告書12集、1999.3
- 8.K.Kobayashi,Y.Koizumi,C.Nakano,S.Hatori,Y.Sunohara [Dual detector system for PIXE measurement covering a wide element range,Nuclear Instrument and methods 1999 144-149p

(5)後家山遺跡H2号住居址に残された木材による年代測定の結果

小泉 好延 (武蔵野文化財修復研究所)

後家山遺跡H2号住居址遺構に残存していた炭化木材をAMS法によるC-14年代測定を行った。なお、この住居址遺構からはガラス小玉2、管玉1が出上している。また、本遺跡では6遺構で合計65のガラス小玉、8の管玉が出上している。

炭化木材は全て小片で、樹種同定を行った結果、数種の木材が含まれていたが、コナラコナラ材を試料として年代分析を行った。

AMS法によるC-14年代測定の結果、表に示すLibby ageが得られた。その結果に基づき暦年代の補正計算を行い、紀元20年～125年(信頼度68.2%)となった。なお、信頼度56.6%では紀元20年～85年である。したがって、本遺構は信頼度91.5%で、紀元元年～紀元130、信頼度95.4%では紀元前40年～紀元130年である。

なお、Libby ageとはC-14年代と呼ばれ、例えば、Libby age 1000±40yrBPが得られると、この値は1950年を基準として表示されたもので、その1000年前、つまりC 14年代はAD950年であること示している。また測定の誤差が±40年である。従来、C-14年代が遺跡や遺物の年代として用いられたが、現在では年代の明確な資料から年代とC-14濃度の校正データに基づく補正を行い、より正確な暦年代を求めている。本報告ではLibbyageの測定結果から、評価の高いOxCal Program, Calibration Data Files, (IntCal98 and data files) を用いて、暦年代補正計算を行い、各資料の暦年代を求めた。

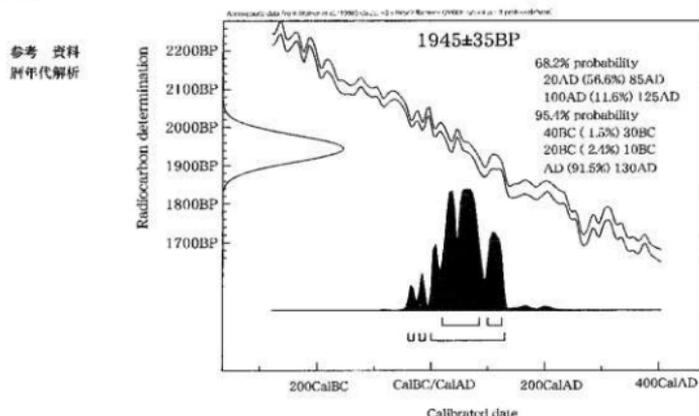
表1. 年代測定結果

試料名	*年代 Libby age (年) 1950年を基準	** 暦年代 (年)	
		信頼度68.2%	信頼度95.4%
後家山遺跡H2住居址遺構 ブナ材	1945±35BP	20AD(56.6%)85AD 100AD(11.6%)125AD	0 AD(91.5%)130AD 20BC(2.4%) 10BC 40BC(1.5%) 30BC

**歴史年代への補正はOxford Radiocarbon Accelerator Unit が公開している補正プログラムを使用して算出した。

参考資料

- 小林紘「加速器質量分析法-考古学から宇宙科学まで」日本物理学会誌Vol.53.No.12 (1998) 903-910
- 小林紘「炭素14年代測定法」第一回考古学シンポジウム(1999)於東京大学
- 中村俊夫他「名古屋大学炭素14年代測定システムと考古文化財」同上



(6)後家山遺跡H2号住居址出土炭化材樹種

植田弥生(パレオ・ラボ)

1. はじめに

放射性炭素年代測定用の試料には、小さな炭化材破片が多数あった。実体顕微鏡で各破片の横断面を予察したところ、複数の分類群が含まれていた。従って、年代測定に用いる破片は、樹種同定と年代測定用の量が確保できる破片を選び使用した。なお、年代測定用には、コナラ節の小破片2点を用いている。ここではコナラ節を含め、検出された分類群の樹種同定結果を報告する。試料は一括採取されたものと思われ複数の分類群が含まれていたことから、出土遺構の性格と関連性を考える必要があり、また当遺跡で利用されていた樹種であることから、記録資料として報告しておく。

2. 試料と方法

1年輪以上を含む同定可能な大きさの破片について、以下の手順で同定を行った。

まず横断面(木口)を手で削り実体顕微鏡で観察し分類群のおおよその目安をつけ、次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で材組織を拡大して観察を行ない同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

年代測定に使用したコナラ節以外の残りの炭化材破片は、各分類に分けて返却保管されている。

3. 結果

同定結果の一覧を表1に示し、各分類群(樹種)の同定根拠を記載し材組織の走査電子顕微鏡写真を提示した。

表1後家山遺跡出土炭化材樹種同定結果

検出分類群	破片数	備考
クマシデ属 (カバノキ科)	1	
コナラ属コナラ節 (ブナ科)	2	年代測定実施
クリ (ブナ科)	1	
クスノキ科?	3	
ブドウ属 (ブドウ科)	1	

同定された樹種の材組織記載

クマシデ属 *Carpinus* カバノキ科 図版1 1a-1c

小型の管孔が放射方向に2~3個重複し分布する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密着、穿孔は単穿孔と横槽数が5~10本の階段穿孔、らせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、1~3細胞幅、道管との壁孔は交互状である。小破片であるため集合放射組織の有無は不明である。

クマシデ属は暖帯および温帯の山地に生育する落葉高木または大形低木である。イヌシデ節には山野に普通のイヌシデとアカシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。クマシデ節には山地の谷沿いに多いサワシバとクマシデがある。いずれの材も丈夫で有用である。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版 1 2a-2c

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部は薄壁で孔口が角形の非常に小型の管孔が火炎状や放射状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースが発達している。放射組織はほぼ同性、単列と広放射組織がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

年輪の始めに普通の樹種で人手しやすいこともあり利用頻度が高く、遺跡からは加工木や炭化材としてもよく出土する樹種である。堅果は食用となる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. Et Zucc. ブナ科 図版1 3a-3b

年輪の始めに大型の管孔が1~3層ほど配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。放射組織は単列同性のみである。放射断面の形質は、前述のコナラ節と同様である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木で、果実は食用になり、材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

クスノキ科? Lauraceae? 図版2 4a-4c

やや厚壁の中型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合し散在する散孔材。道管の壁孔は交互状で一部対列状、穿孔は単穿孔である。放射組織は異性、2細胞幅、上下端や単独で大きく膨らんだ油細胞と思われるものが見られる。小破片のこともあり年輪界が不明瞭でまた節部の破片であるらしい。

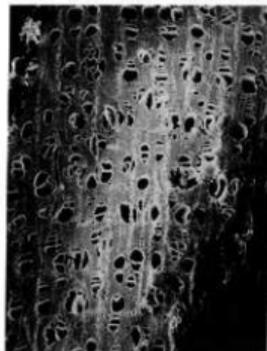
管孔が大きく、油細胞の出現頻度の高いクスノキ以外の樹種である可能性が高い。

ブドウ属 *vites* 図版2 5a-5c

中型から小型の管孔が単独または2~3個が不規則に複合し、年輪始めの1層の管孔は大きく、小型の管孔は至なものが多い半環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は5~10細胞幅で細胞高が高く、主に平伏細胞からなる。

ブドウ属は主に蔓性落葉樹で、山地に普通のヤマブドウ・エビズル・サンカクヅルなどがある。果実は食用となるものが多く、蔓は連結用材や編んで蓑などに使用される。

図版1 後家山遺跡H2住居址出土炭化材樹種



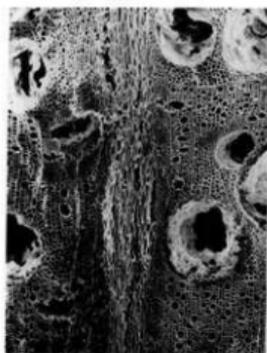
1a クマシデ属 (横断面)
bar:0.5mm



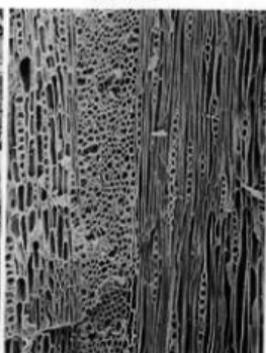
1b クマシデ属 (接線断面)
bar:0.1mm



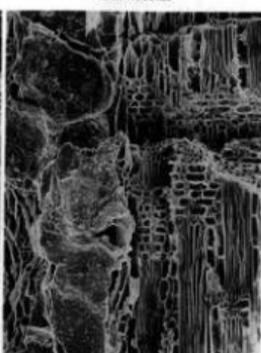
1c クマシデ属 (放射断面)
bar:0.1mm



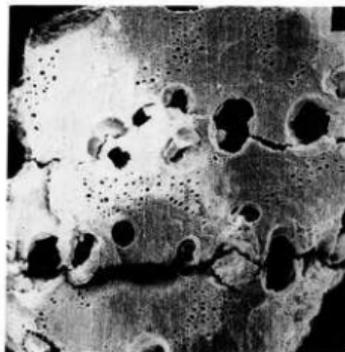
2a コナラ節 (横断面)
bar:0.5mm



2b コナラ節 (接線断面)
bar:0.1mm



2c コナラ節 (放射断面)
bar:0.1mm

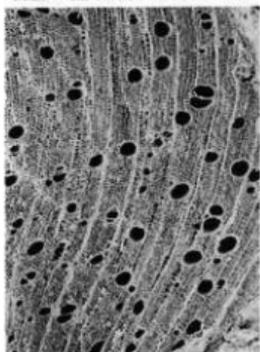


3a クリ (横断面)
bar:1.0mm

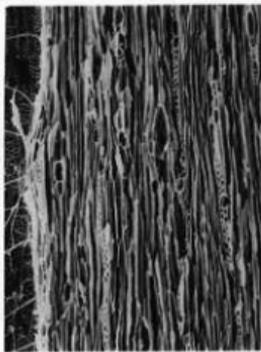


3b クリ (接線断面)
bar:0.5mm

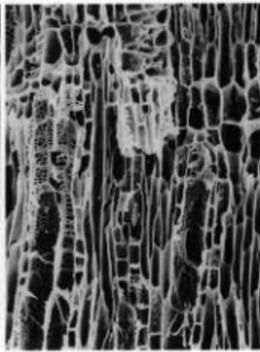
図版2 佐久市後家山遺跡出土炭化材樹種



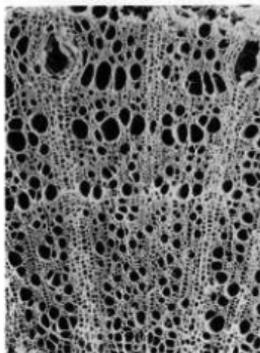
4a クスノキ科? (横断面)
bar: 0.5mm



4b クスノキ科 (接線断面)
bar: 0.1mm



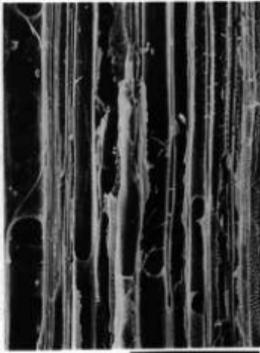
4c クスノキ科 (放射断面)
bar: 0.1mm



5a ブドウ属 (横断面)
bar: 0.5mm



5b ブドウ属 (接線断面)
bar: 0.1mm



5c ブドウ属 (放射断面)
bar: 0.1mm

(7) 後家山遺跡出土 鉄剣の自然科学的調査

財団法人 元興寺文化財研究所
菅井裕子 井上美知子 尼子奈美枝
株式会社 九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己

1. はじめに

後家山遺跡から出土した鉄剣について、保存処理の事前調査として自然科学的調査を行う機会を得たので報告する。調査対象は後家山遺跡の木棺墓（弥生時代後期後半）から出土した鉄剣である（写真1）。遺物の状態確認および保存処理は尼子奈美枝が、付着布の調査は井上美知子が、鉄剣の金属学的調査は大澤正己が、試料測定および取りまとめは菅井裕子が担当した。

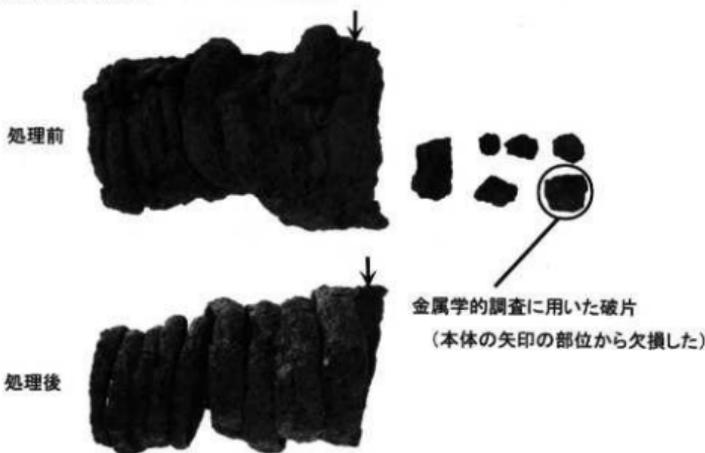
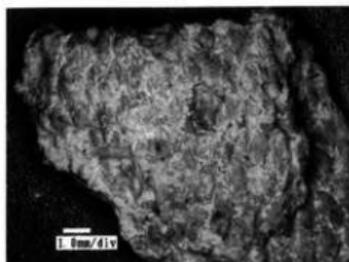


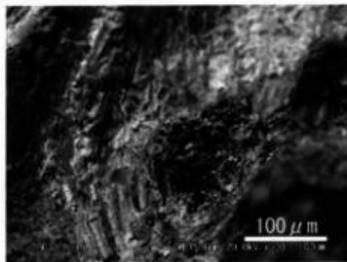
写真1 保存処理前後の鉄剣

2. 付着布の調査

保存処理中に鉄剣の内側に布が付着しているのが確認されたので、布の状態および繊維の種類について調査した。用いた装置はマイクロスコープ（脚キーエンス製VH-7000）、および走査型電子顕微鏡（以下SEM）（株式会社日立製作所製S-3500N）を用いて調査した。付着布の外観と繊維断面SEM写真とを写真2に示した。布は平織りで、右巻りの糸が用いられていることが確認できた。しかし布や糸の形状は維持されているものの繊維の成分は失われて鉄サビと置き換わっており、大変脆い状態であった。絹ではなく、植物性繊維であるとみられるが、断面形状観察による繊維種同定はできなかった。



布の表面



縦横断面 (SEM)

写真2 附着布の顕微鏡写真

3. 金属学的調査

3-1 試料

調査に用いた試料は写真1に示した破片である。試料履歴と調査項目は表1のとおりである。

表1 試料の履歴と調査項目

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目		
				大きさ(mm)	重量(g)	マクロ組織	顕微鏡	EPMA
1	1号木棺墓	鉄剣	弥生後期後半	17×15×2	1.84	○	○	○

保存処理前に断面形状を調べたところ、この破片は鉄剣本体と繋がるものであることが確認できた。そのため、この破片を用いて鉄剣の金属学的調査を実施することが可能であると判断し、これを試料とした。

3-2 調査項目および方法

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見である。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の10倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3μと1μで仕上げた上で光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄は5%ナイトル(硝酸アルコール液)で、腐食(Etching)している。

(4) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

3-3 調査結果

試料は逆離破片であるが本体に附着する。鉄剣は右側の装着が想定できる状況で出土した。形状はほぼ円形を保ち、出土時の観察では、8~9本の鉄輪が確認された。保存修復前で明言できないまでも、2つのパターンが提言できる。まず4本が円環で残り部分が螺旋状という形態の異なる鉄剣が存在するか、或いは1枚の帯状鉄板が螺旋状に繋がる。帯状鉄板は幅広部分から徐々に狭まり、尚かつ径も小さくなる。(注1)以上の外観をもつ鉄剣の端部破片が試料となる。

マクロ組織を写真3に示す。金属鉄の残存はまったくなくて完全に錆化している。断面は鍛接線が見当らず、鉄中非金属介在物の剥落痕もなく、清浄な鉄である。断面形状は不整形ながら平行四辺形を呈し、一辺が8mm前後で厚みは2mmを測る。この断面マクロ組織は、鉄鋼の帯状素材の磨食前の形状を察知できる1つの手掛りになる。

写真4に顕微鏡組織を示す。マクロ組織で述べた様に全体に自然磨食が進み、非金属介在物は少なく、鍛接線の痕跡も見当らない。該品が繰返し折り曲げ鍛接がなされたのか、丸鍛え的な加工品なのか不明瞭な錆化鉄組織である。また鉄の素性を知る上で重要な、人間のDNA（細胞の遺伝子）に相当する鉄中の非金属介在物（鉄鋼中に介在する固形体の非金属性不純物、つまり鉄やマンガ、珪素および燐などの酸化物、硫化物、珪酸塩などの総称物）の検出



写真3 鉄鋼のマイクロ組織

も困難な状況である。そんななかで⑥⑦にみられる分断された3つの介在物片らしき微小異物が発見できたのでEPMA分析にかけた。分析結果を写真5に示す。COMP（反射電子像）に1の番号をつけた部分で70.5%FeO組成が得られた。一見、酸化第1鉄のヴスタイト（Wustite: FeO）に同定できる組成であるが、分析結果をよくみるとTotalが77.0%で減減値である。介在物を構成する物質は既に欠落した可能性を窺っている。非常に清浄な鉄なので低温還元直接製鋼法の塊練鉄ではなくて、高温還元間接製鋼法の炒鋼製品に分類すべきかも知れない。炒鋼法とは紀元前1世紀頃中国で開発された製鋼技術である。鉄鉄を加熱溶融し、空气中で攪拌して脱炭した鉄塊である。脱炭された鉄塊は更に鍛打して酸化物を絞り出すので大型の夾雑物（FeO、2FeO・SiO₂）を含まない。内蔵するのは珪酸塩系の小型介在物で小さく散在するといわれる。(注2) 形状的には写真4⑧の介在物欠落度でおかしくない。

次は鉄中の炭素量である。⑥⑦はフェライト基地に極く少量のパーライト斑跡を示す。パーライトはフェライトとセメントイトが交互に重なり合って構成された層状組織である。このパーライトは占める面積により炭素含有量が推定できる。焼ならし状態では0.4%前後で約半分、0.77%で全面パーライトとなる。この面積率で⑥⑦をみると0.1%以下の炭素量となる。この鉄中の炭素量の増加で材質は硬質となり引張強さも増加するが、伸びや衝撃値は減少する。鉄鋼の材質は極軟鋼に分類されて加工のしやすい材質だったと推定される。

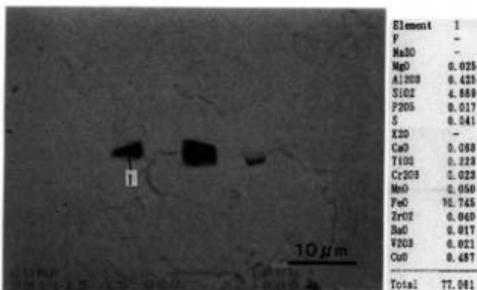


写真5 鉄鋼組織中の非金属介在物（反射電子像）と分析結果

3-4 まとめ

弥生時代後期後半代に属する後家山遺跡出土の鉄剣は、高温還元間接製鋼法にもとづく炒鋼製品の可能性が高い。鉄中の非金属介在物は非常に少なく辛じて検出された異物は鍛打で分断されたガラス質珪酸塩が想定される。ただし、現実の介在物個所は、内容物を欠落した後の形状を残すのみで、EPMA分析では母材の酸化鉄の減衰値を示す情報しか得られなかった。

次に鉄中の炭素含有量は、0.1%以下の軟質材で螺旋状加工は比較的容易にできたと推定される。なお、鉄剣に充当された鉄板は断面が2mm前後の厚みで、長辺長さ8mm程度の平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が窺われた。炒鋼製品は3世紀代に入れば、朝鮮半島側での生産は十分に可能性はあったと考えられる。(注3)

一方、過去に弥生時代中期後半に比定される鉄剣の調査を行っている。同じ佐久市所在、鳴沢遺跡群の五里田遺跡出土品である。こちらも錆化が激しくて、塊錬鉄か炒鋼製品かの特定は出来ず、材質の種別鋼の確認がとれた。(注4)

更に5世紀前半の古墳時代の鉄剣として北九州市所在の蒲生寺中古墳から出土したものがある。こちらは塊錬鉄製品の極軟鋼で、帯状鉄板は2枚の合せて丁寧な仕上げ加工の痕跡が認められた。(注5)

注)

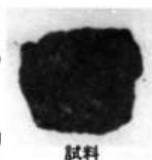
- (1) 佐久市教育委員会『平成13年度後家山遺跡調査概要』2001
- (2) 韓汝「中国における早期鉄器の冶金学的特徴」『東アジアの古代鉄文化～その起源と伝播～』(1993年たたら研究会国際シンポジウム予稿集)たたら研究会1993.11
- (3) 大澤正己「環日本海地域の鉄の金相学的調査～弥生の鉄の「様相」～」『環日本海地域の鉄文化の展開』(人間・社会・環境との新しい調和を求めて-X)社会鉄鋼工学部会1999
- (4) 大澤正己「鳴沢遺跡群五里田遺跡出土の鉄剣・鉄剣の冶金学的調査」『鳴沢遺跡群五里田遺跡』(佐久市埋蔵文化財調査報告書第74集)長野県土地開発公社、佐久市教育委員会1999.3
- (5) 大澤正己・山口信義「蒲生寺中古墳出土の鉄剣調査」『北九州市埋蔵文化財調査室紀要』2003

後家山遺跡 鉄剣

①～⑤ 錆化鉄
(ゲーサイト)

⑥⑦ 炭化物痕跡

⑧⑨ 非金属介在物



試料

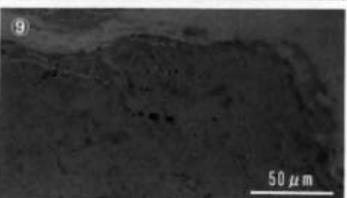
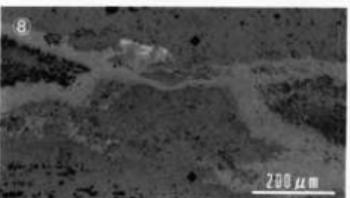
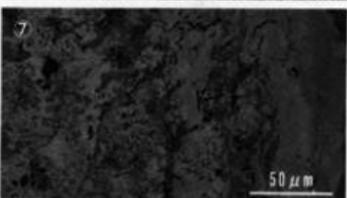
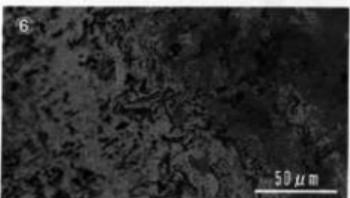
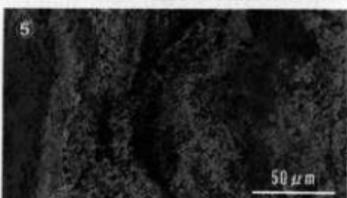
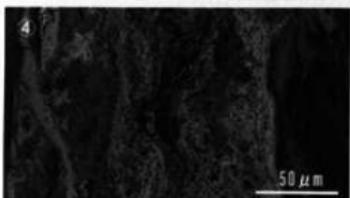
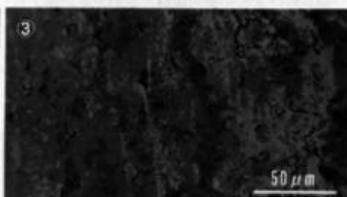
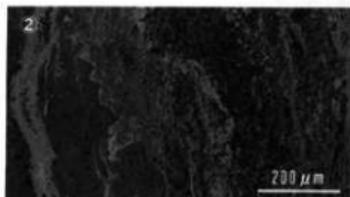
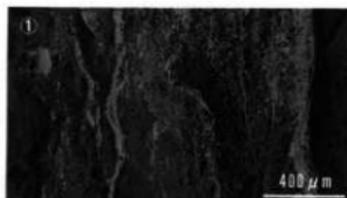


写真4 鉄剣の顕微鏡組織

(8) X線マイクロアナライザによる石材の岩石種の同定について

フォッサマグナミュージアム
館長補佐 宮島 宏

1. はじめに

佐久市後家山遺跡から出土した弥生時代と考えられる勾玉2点について石材の岩石種の同定を行った。

2. 試料

試料は、H2号住居址出土の№17勾玉とH3号住居址出土の№7勾玉である。いずれも弥生時代後期に位置づけられる資料である。

3. 方法

依頼された資料の石質の同定は、肉眼・ルーペによる観察と、エネルギー分散型X線マイクロアナライザによる定性化学分析による元素の種類とおおよその量より判断しました。

4. 使用した機器

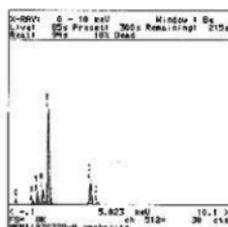
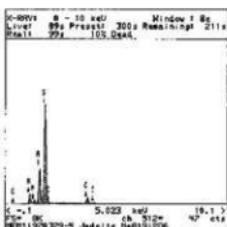
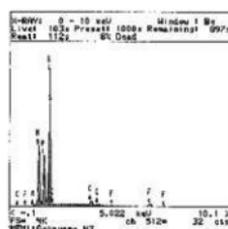
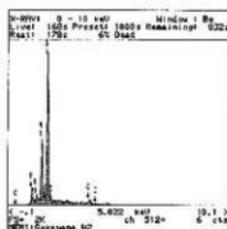
定性化学分析に使用したエネルギー分散型X線マイクロアナライザは、フォッサマグナミュージアムの日本電子製JSM-6300走査型電子顕微鏡にoxford社製Link Qx2000エネルギー分散型X線スペクトロメーターを取り付けたものです。

5. 測定条件

加速電圧15kV、分析領域0.5mm×0.4mm、ワーキングディスタンス39mmです。分析場所は各資料につき任意に選んだ1点です。

6. 結果

H2号住居址の勾玉はヒスイ輝石であり、H3号住居址はヒスイ輝石ではない。



第4節 小結

本節では、後家山遺跡より検出された弥生後期集落68軒の住居址について遺構として住居址を、遺物として出土器をそれぞれ若干の整理を行い小結としたい。

遺 構 (住居址)

まず弥生後期の住居址は丘陵尾根筋を中心に調査区全体で検出された。これら住居址の要素として、床面積と坪址について各住居址の立地も含めまとめてみたい。住居址の規模としての床面積であるが、床面積を推定も含め測定できたものが52軒ある。これらの数値をまとめると以下ようになる。後家山遺跡の弥生後期住居址は4つのランクに分けることが可能と考える。

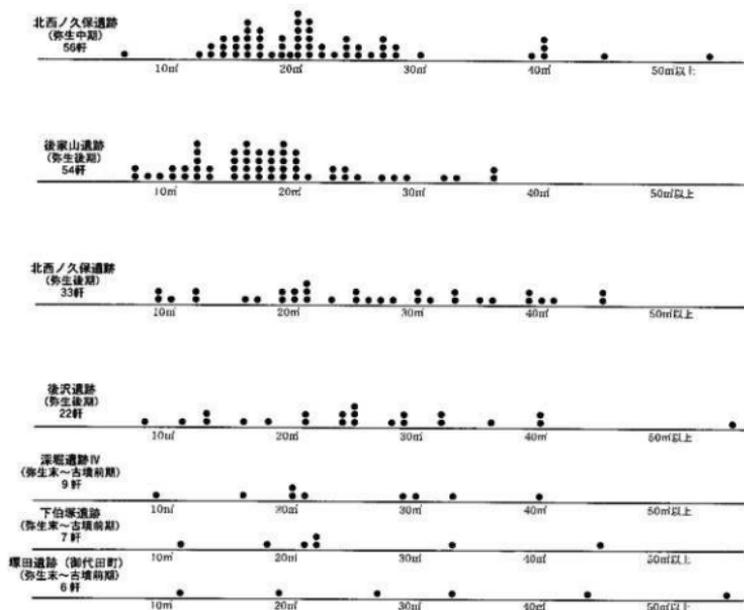
小タイプ (15㎡以下) H29, H44, H56, H15, H16, H33, H38, H45, H47, H48, H54, H64, H69, H70

中タイプ (16~23㎡未満) H1, H6, H8, H19, H14, H18, H20, H21, H22, H24, H30, H34, H35, H36, H37, H39, H40, H41, H42, H43, H49, H50, H53, H55, H67, H73, H74

大タイプ (23~31㎡未満) H3, H4, H5, H7, H26, H31, H62, H65

特大タイプ (31㎡~) H2, H11, H52, H75

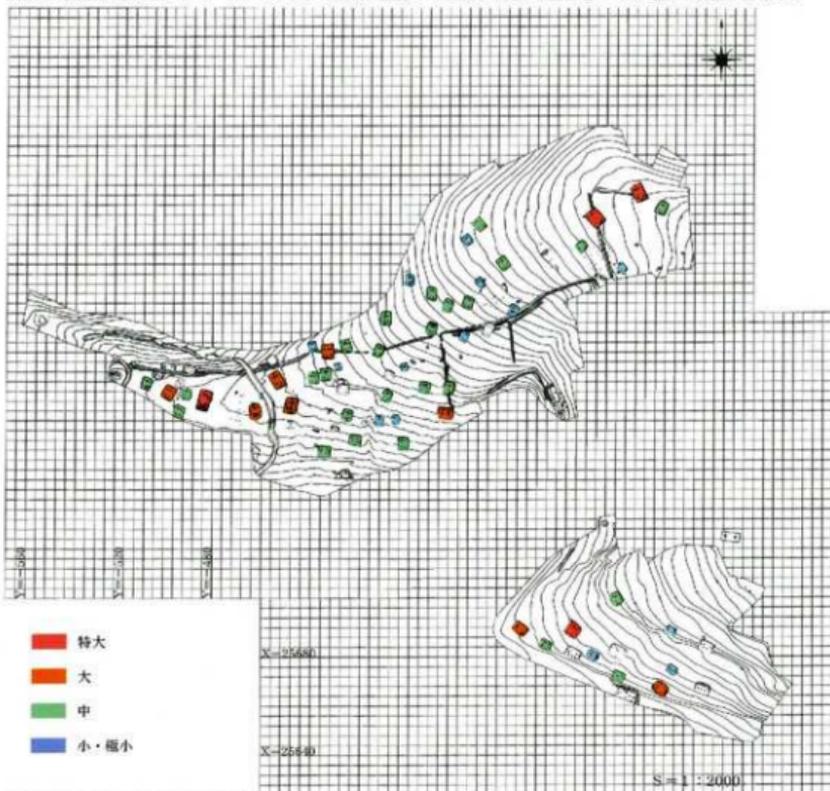
小タイプ14軒 (27%)、中タイプ 27軒 (51%)、大タイプ8軒 (15%)、特大タイプ4軒 (7%)という結果となる。この事から後家山遺跡の弥生後期住居址規模は約半数が中規模、その他1/4ずつが小型の住居と大型の住居に分けられる。ではこれらの規模がいかなる理由によるか考えてみたい。まず参考となるのが同時代の他の集落との比較、或いは弥生時代中期や弥生時代末から古墳時代初頭の集落との比較である。それらを比較したのが第151図である。た



第151図 佐久地域の弥生時代住居址規模分布図

だこれらの表の作成に当たっては、集落域全体を調査できた資料に限られるため比較検討資料としては、弥生時代中期・後期の集落として北西の久保遺跡、弥生後期の集落として後沢遺跡、弥生末から古墳時代初頭として深堀遺跡と下伯母塚遺跡を取り上げた。ただ深堀遺跡については集落域全体の調査とは言えず参考数値としたい。

この図より、一見すると後家山遺跡の住居規模は北西の久保遺跡中期の集落規模分布とよく似る事が判る。それとは対照的に北西の久保遺跡の弥生後期集落と後沢遺跡の集落規模分布が似る。弥生時代終末から古墳時代初頭の集落とした深堀遺跡と下伯母塚遺跡については軒数も少なく、住居の規模分布をどのように捉えるかは難しい。しかし、御代田町塚田遺跡の6軒の集落遺跡から考えると均等に分布するその形が当該期の普遍的な集落のあり方のように解釈でき、弥生時代末から古墳時代初頭の集落においては弥生時代後期の規模分布を継承しつつ集落規模が縮小するという可能性が指摘できる。とすると後家山遺跡の弥生後期集落は弥生中期の集落形態を継承していた後期の集落なのであろうか。ただ、ここで考えなければならないのが遺跡の立地地形である。北西の久保遺跡は台地の先端で平坦部に展開した集落であり、後沢遺跡も夢科山麓から突きだした丘陵の先端部に位置するが、尾根上部は比較的平坦で、平地のような地形である。これに対し後家山遺跡は丘陵の尾根上及び斜面地に展開する遺跡である。自ずと住居建築時の平坦部面積は少ない。現に住居配置を見ると、尾根上部の平坦部と尾根先端の比較的傾斜が緩くなった斜面部に大型住居は配されている。この事から後家山遺跡の小型及び中型の住居が多いのは地形の制約によるもの



第152図 後家山遺跡住居規模分布図

() 推定 () 残存

No	横山位階	平面形状	面積 (m ²)				延長方位	坪数	柱	柱間	備考			
			非壁長	壁長	壁長	壁長								
H11	B-4-12-13	長方形	3.88	3.62	4.76	4.23	4-22	17.7	N-11° E	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.52×2.24	包込内土杭	
	B-9-12-13													
H12	B-7-13-14	長方形	4.70	4.26	8.00	7.98	11-17	37.3	N-15° E	E	高倉 半平の伊羅行	主柱穴 4 入口部 2	1.76×4.04	貯蔵穴 棟持柱
	B-11-13-14													
H13	F-5-16	隅丸長方形	4.22	(5.23)	(4.34)	4.74	1-25	(25.4)	N-3° W	E	杉板石	主柱穴 4 入口部 2	1.8×2.56	
	F-10-16													
H4	F-7-11-12-13	長方形	4.43	4.23	6.57	6.67	11-45	30.0	N-31° W	E	複蓋伊	主柱穴 4 入口部 2	1.72×3.2	貯蔵穴 棟持柱
	F-7-12													
H5	F-13-14-15-16	平行四辺形	4.30	4.45	6.95	5.97	13-21	28.7	N-14° E	E	複蓋伊	主柱穴 4 入口部 2	1.76×2.82	貯蔵穴 棟持柱
	F-14-15-16													
H6	F-7-11-12	長方形	4.12	(3.72)	(4.73)	4.71	1-47	(18.4)		E	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.44×2.3	貯蔵穴 壁外柱穴
	F-7-11-12-13													
H7	B-7-13-14	長方形	4.35	4.52	5.00	5.33	2-14	25.2	N-32° E	E	地床	主柱穴 6 入口部 1	2.04×2.3	棟持柱
	B-9-13-14													
H8	B-9-15-16	長方形	3.76	(3.98)	(4.47)	(4.19)	1-8.3	(3.60)	N-20° E	E	地床	主柱穴 4	1.64×2.44	
	B-10-15-16													
H9	B-9-13-14	長方形	(3.21)	(3.10)	(4.30)	(4.15)	1-6	(16.3)	N-14° E	E	地床	主柱穴 4 入口部 1	1.6×2.24	貯蔵穴
	B-10-13-14													
H10	B-9-12-13	隅丸長方形	(3.27)	(3.24)	(2.84)	(2.86)	1-4	(12.7)	N-19° E	E	地床	主柱穴 4	1.8×2.24	
	B-10-12-13													
H11	B-9-12	隅丸長方形	-	3.57	(2.05)	(3.24)	1-32.5	(11.1)	N-23° E	E	地床	主柱穴 4	1.84×1.56	
	B-10-12													
H12	B-10-11	方形	-	(5.50)	(2.04)	(1.79)	1-32.5	(12.7)		E	地床	主柱穴 2	2.84×	
	B-9-11													
H13	B-9-11-12	方形	-	4.04	(1.72)	(3.14)	1-37	(12.4)	N-14° E	E	地床	主柱穴 7 入口部 9	2.08×2.12	
	B-10-11-12													
H14	F-7-18-19	長方形	4.60	(4.47)	(3.13)	(3.55)	18-37	0.70	N-7° E	E	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.52×2.28	
	F-7-18-19													
H15	F-7-16-17	長方形	(3.28)	(3.15)	(3.82)	(3.40)	1-11	(3.0)	N-7° E	E	地床	主柱穴 4	1.12×2.06	
	F-7-16-17													
H16	F-7-16-17	長方形	2.94	(2.74)	(3.13)	(3.26)	1-12	(2.6)	(N)	E	地床	主柱穴 4	1.46×1.36	
	F-7-16-17													
H17	F-7-19-20	長方形	3.72	(4.56)	(4.02)	(4.10)	1-21	(7.4)	N-3° E	E	地床	主柱穴 4 入口部 1	1.58×2.42	貯蔵穴 壁外柱
	F-7-19-20													
H18	F-7-17	?	3.13	-	(1.66)	(0.59)	1-20.5	(3.97)	N-23° E	E	地床	-	-	包込内土杭
	F-7-17													
H20	F-7-18-19	長方形	3.88	(3.77)	(4.83)	(4.52)	1-20	(21.0)	N-2° W	E	地床	主柱穴 4 入口部 1	1.82×2.56	
	F-7-18-19													
H21	F-7-15-16	長方形	3.56	(3.40)	(4.38)	(4.27)	1-34.5	(16.3)	N-11° E	E	杉板石	主柱穴 4 入口部 1	1.24×2.12	
	F-7-15-16-17													
H22	F-7-13-14	長方形	3.62	(3.30)	(2.23)	(4.35)	1-31	(7.3)	N-21° E	E	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.66×2.14	隅状遺構
	F-7-13-14													
H23	F-7-16-17	?	(2.95)	-	1.12	1.33		(4.8)		E	地床	-	-	1.36×
	F-7-16-17													
H24	F-7-13	長方形	3.78	(3.78)	(4.15)	(4.27)	1-27.5	(18.1)	N-7° E	E	地床	主柱穴 6	2.08×1.98	壁外柱穴
	F-7-13													
H25	F-7-22	?	(1.73)	-	(1.40)	-	1-18.5	(2.5)		E	地床	-	-	2.08×1.98
	F-7-22													
H26	F-7-15-16	長方形	6.00	(5.72)	(4.60)	(4.25)	1-28.5	(13.5)	N-86° W	E	複蓋伊	主柱穴 4	1.92×3.1	包込内土杭
	F-7-15-16													
H27	F-7-12-13	長方形	3.44	-	(1.51)	(2.61)	1-16	(8.7)	(N-22° E)	E	地床	-	-	2.41×2.42
	F-7-12-13													
H28	F-7-11-12	?	4.04	-	(0.95)	(1.39)	1-16	(8.0)	N-7° W	E	地床	-	-	1.1×2.12
	F-7-11-12													
H29	F-7-11	長方形	2.60	(2.45)	(2.80)	(2.97)	1-30	(8.0)	N-7° W	E	地床	-	-	1.1×2.12
	F-7-11													
H30	F-7-12-13	長方形	(3.80)	(3.52)	(4.23)	4.65	1-17.5	(17.9)	N-7° W	E	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.84×2.3	棟持柱
	F-7-12-13													
H31	F-7-9-10	長方形	4.60	4.68	5.57	6.08	3-25	26.7	N-5° W	E	地床	主柱穴 4 入口部 2	2.5×2.84	貯蔵穴 壁外柱
	F-7-9-10													
H32	F-7-13	長方形	4.42	-	(1.46)	(1.44)	1-38	(6.6)		E	地床	主柱穴 4	1.64×2.66	貯蔵穴
	F-7-13													
H33	F-7-8-9	長方形	3.03	(2.73)	(3.47)	3.68	1-30.5	(17.4)	N-7° W	E	伊羅行	主柱穴 4	1.42×2.34	貯蔵穴
	F-7-8-9													
H34	F-7-9-10	長方形	(3.55)	4.10	4.94	5.12	1-36	(20.1)	N-12° W	E	コノ半伊羅行	主柱穴 4 入口部 3	1.56×2.32	貯蔵穴 棟持柱
	F-7-9-10													
H35	F-7-9-10	長方形	3.67	(3.74)	(4.92)	(4.40)	1-40	(19.9)	N-27° E	E	伊羅行 上層部	主柱穴 4	2.0×2.6	
	F-7-9-10													
H36	F-7-9-10	長方形	3.80	(3.73)	(4.70)	(4.29)	1-47	(20.0)	N-27° E	E	地床	-	-	-
	F-7-9-10													
H37	F-7-6-7-8	長方形	(3.50)	(3.20)	(4.73)	(4.50)	1-24	(8.1)	N	E	コノ半伊羅行	主柱穴 4 入口部 2	1.64×2.20	貯蔵穴 棟持柱
	F-7-6-7-8													
H38	F-7-6-7-8	長方形	3.44	(3.66)	(4.68)	(4.73)	1-28	(18.8)	N-16° E	E	杉板石	主柱穴 4 入口部 2	1.52×2.24	貯蔵穴 棟持柱
	F-7-6-7-8													
H39	F-7-2-3	長方形	(3.62)	(3.05)	(4.32)	4.37	1-49	(14.3)	N-1° E	E	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.3×2.04	
	F-7-2-3													
H39	F-7-4-5	長方形	3.20	(3.20)	(5.03)	(4.90)	1-21	(7.3)	N-20° E	E	地床	主柱穴 4	1.38×2.96	
	F-7-4-5													

第82表 後家山遺跡住居址一覽表 (1)

No.	機出位置	平面形状	境 界 (m・m)						長軸方位	傾 斜 カマド	柱 穴	住 間	備 考
			北壁長	南壁長	西壁長	東壁長	最 高	延 床					
H40	F-7-7・8 F-7-7・8	方 形	3.82 (3.80)	(3.83)	(3.90)	1~33 (16.6)	(12.9)	N-16° E	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.16×1.96	障持柱	
H41	F-7-3・4 F-7-3・4	平行四辺形?	3.62	3.51	4.98	3.14	25~61.5	18.8	N-5° E	コノ字扉縁石	主柱穴 4 入口部 2	1.44×2.72	障持柱
H42	F-7-4・5 F-7-4・5	方 形	3.80	3.79	4.52	4.47	1~39	18.3	N-18° E	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.8×2.84	貯蔵穴
H43	F-12-13-14 F-12-13-14	長方形	4.00	(3.97)	(4.72)	4.80	1~69	(20.2)	N-9° E	障壁加 上階	主柱穴 4 入口部 2	1.72×2.52	貯蔵穴
H44	F-7-5 F-7-5	長方形?	3.02	(2.98)	(3.40)	(3.35)	—	(8.6)	N-18° E	地床	主柱穴 4 入口部 1	1.46×2.02	
H45	F-7-5 F-7-5	長方形?	3.02	(2.98)	(4.30)	(4.16)	1~13.5	(14.3)	N-21° E	地床	主柱穴 4 入口部 1	1.4×2.2	住居内土炕
H46	F-7-7・8 F-7-7・8	?	(3.92)	3.06	(4.90)	(4.92)	1~17.5	(18.2)	N-31° E	—	主柱穴 4	1.34×2.84	
H47	F-7-3・3 F-7-3・3	長方形	2.88	2.84	(3.80)	3.82	1~31	(11.9)	N-42° W	伊藤石	主柱穴 4 入口部 1	1.2×2.2	貯蔵穴 障壁内
H48	F-7-37-38-39 F-7-37-38-39	方 形	(3.80)	3.07	(3.75)	3.67	1~29.4	(12.6)	N-39° W	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.3×1.76	貯蔵穴
H49	F-7-36-37 F-7-36-37	?	(3.70)	(3.94)	(4.50)	(4.40)	1~8	(19.3)	N-45° E	地床	主柱穴 4	1.6×2.5	貯蔵穴
H50	E-7-34-35-36 E-7-34-35-36	長方形	3.93	3.80	4.68	4.52	1~42	18.5	N-40° W	伊藤石	主柱穴 4 入口部 1	1.76×2.18	貯蔵穴 障持柱
H51	E-7-35-36-37 E-7-35-36-37	長方形	5.50	5.50	6.78	6.50	1~53.2	37.1	N-43° W	伊藤石	主柱穴 4 入口部 3	2.9×3.86	貯蔵穴 障持柱
H52	T-7-34 T-7-34	長方形	(1.48)	4.50	(6.50)	(6.88)	1~55	(32.9)	N-27° W	地床	主柱穴 4 入口部 3	2.9×3.56	貯蔵穴 障持柱
H53	E-7-38-39 E-7-38-39	長方形	(4.23)	(3.83)	(3.36)	3.64	1~13	(13.6)	N-43° E	炭燻炉	主柱穴 4 入口部 2	1.54×3.0	
H54	J-7-1 J-7-1	方 形	(3.37)	(3.20)	(3.00)	3.02	1~13.5	(11.0)	N-48° E	地床	入口部 2	?	貯蔵穴 壁障柱穴
H55	J-7-34-35 J-7-34-35	長方形	(3.67)	3.90	(5.62)	4.97	15~37.5	(20.6)	N-24° E	伊藤石	主柱穴 4 入口部 2	1.52×2.2	貯蔵穴
H56	F-7-11 F-7-11	—	(2.2)	(2.24)	(3.25)	(3.25)	—	(8.1)	N-8° W	地床	主柱穴 4 入口部 2	1.12×1.96	
H61	J-7-36-37 J-7-36-37	—	5.13	—	(6.45)	(6.32)	1~19	(2.3)	—	—	—	—	
H62	F-7-37-38 F-7-37-38	長方形?	5.50	(5.80)	(4.43)	(4.15)	1~19	(24.2)	N-49° W	伊藤石	主柱穴 4	2.0×2.6	貯蔵穴
H63	F-7-37-38 F-7-37-38	長方形?	5.58	(6.36)	(3.78)	(3.55)	1~36	(23.4)	N-38° W	伊藤石?	主柱穴 1	1.92×3.22	
H64	K-7-2 K-7-2	長方形	3.90	3.84	3.10	2.86	1~18.5	(12.5)	N-59° W	炭燻炉	主柱穴 4 入口部 1	1.6×1.96	
H65	K-7-3・4 K-7-3・4	長方形	5.04	(5.72)	3.96	(4.30)	1~81	(24.3)	N-53° W	伊藤石	主柱穴 4 入口部 2	1.88×2.78	
H66	J-7-39-40 J-7-39-40	長方形	(6.50)	(6.20)	(2.47)	—	1~19	(8.1)	N-61° W	—	—	—	
H67	K-7-2・3 K-7-2・3	方 形	4.85	(4.33)	(3.94)	(4.73)	1~24	(20.9)	N-60° W	地床	主柱穴 4	1.96×3.1	
H68	J-7-39-40 J-7-39-40	長方形?	5.50	—	(2.94)	(2.14)	1~59.4	(11.6)	—	—	主柱穴 2 入口部 1	2.8×—	
H69	F-7-39-40 F-7-39-40	長方形	3.93	(3.87)	2.91	(3.02)	1~18.5	(13.5)	N-59° W	炭燻炉	主柱穴 4 入口部 2	1.2×1.84	貯蔵穴 障持柱
H70	J-7-38 J-7-38	長方形	3.52	(3.55)	(2.96)	(2.85)	1~29	(11.3)	N-60° W	地床	主柱穴 2	0.92×2.0	貯蔵穴
H71	K-7-3・4 K-7-3・4	長方形?	3.32	—	(2.47)	(2.64)	1~14	(16.6)	N-71° W	地床	主柱穴 2	3.2×—	障壁内
H72	K-7-4・5 K-7-4・5	長方形?	(8.28)	—	(4.17)	13.88	—	(37.8)	—	地床	—	—	
H73	J-7-34-35 J-7-34-35	隅丸長方形	4.86	(4.76)	(4.25)	(3.68)	1~29	(22.1)	N-29° W	地床	主柱穴 4	1.36×1.96	
H74	F-7-39-40 F-7-39-40	長方形	4.18	(4.23)	(3.62)	(3.78)	1~12.6	(17.7)	N-61° W	地床	主柱穴 4	2.2×2.2	
H75	F-7-37-38 F-7-37-38	方 形	5.37	(5.28)	(6.00)	(5.83)	1~7	(12.1)	N-39° E	地床	主柱穴 6	2.52×3.0	
H117	F-7-22 F-7-22	方 形	3.10	3.35	3.10	3.10	1~44	10.4	N-87° W	支脚石+柱土	—	1.84×2.6	住居内土炕

第83表 後家山遺跡住居一覧表 (2)

とも考えられる。

この2点の結論はどちらを採るべきなのか現段階で判断に苦しむが、北西の久保遺跡の同一条件下で時期により住居規模の分布に偏りの違いが見られることは事実であり、この事が何に起因するのかが重要な検討課題である。或いは集落内の社会構造を反映しているのもちろんであるが、佐久地域における弥生中期と後期の生業の変化を示しているとも考えられ、その事が後家山遺跡と後沢遺跡・北西の久保遺跡の集落差異に結びついている可能性も今回は指摘しておきたい。

次に炉址についてであるが、弥生時代後期の炉形態については千曲川を対峙して地域による差異が存在することは先学により指摘されている。所謂、「千曲川左岸は地床炉が90%を占め、これに対して右岸は地床・石使用・土器使用がそれぞれ均一に採用されている」というものである。今回もこれらの成果を買って形態分類した。

1. 「地床炉」 床面を備かに掘り窪めて火床としたもの。
2. 「地床炉+炉縁石」 火床部分に石を配置する形態で、一本の「一」、二本の「L」、三本の「コ」がある。
3. 「土器敷炉」 火床面に土器の甑や甕を使用し、胴部を利用して数くものとI縁部をそのまま置く形態がある。

後家山遺跡の後期住居址で炉の形態の判るものは67基で、内訳は1の地床が49基（73%）、2の石使用で石一本が12基（18%）、「L」が1基（1%）、「コ」が3基（5%）で合わせて24%、3の土器使用が2基（3%）である。この結果を受けて佐久地域内で比較すると、旧来の千曲川右岸・左岸のどちらとも合致せず、傾向で考えると左岸タイプに近いことは指摘できる。この結果は後家山遺跡の遺跡のみで結論を導くのは早計かもしれないが、佐久地域の中において千曲川左岸・右岸といった二極の対峙ではなく、「湯川・濁川周辺の浅間南麓」「片貝川流域と蓼科山麓の低丘陵」そして「志賀川・滑津川の沖積微高地と後背山麓」といった3つのエリアの相違を考えた方がよいのかもしれない。今回の結論は炉址だけの特徴より導き出したものであるが、従来から言われている千曲川をはさんでの土器要素の相違にもこの3つのエリアが検証できるのか今後の課題と言えよう。ひいては、その結果によっては先に述べた住居規模分布の違いも説明付けがなされるのかもしれない。

遺物（土器）

ここでは、後家山遺跡出土の所謂「箱清水式土器」について若干の整理を行い、後家山遺跡の編年の位置づけを行ってみたい。ただ、後家山遺跡は強粘土や斜面地での住居址ということもあり、良好な土器組成を判断できる資料は少なかった。よって住居址一括資料を判断資料の基本とするが、一部は先学の編年研究を援用して欠落している器種については補っていききたい。まず、後家山遺跡から出土した土器について住居址出土のものを中心に器種ごと形態分類を行った。結果が第153～156図である。

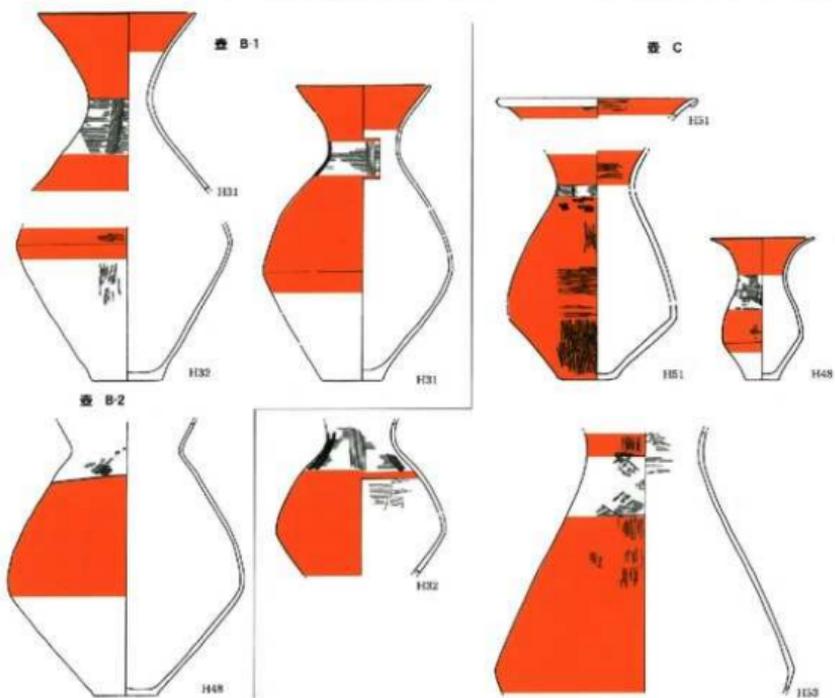
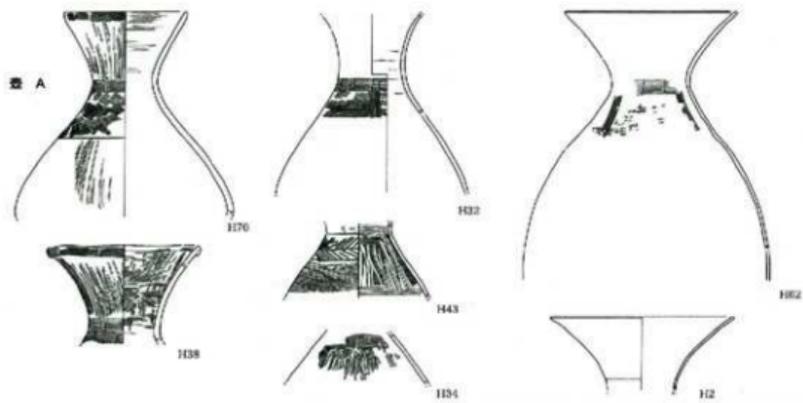
甑は大分類で4種に分類した。

- A 無彩の甑であり、器形と施文のパラエターがある。
- B-1 赤彩された甑で、最大径が胴部中位にあるもの。（H31・32の資料は推定で参考資料）
- B-2 赤彩された甑で、Bよりも胴部が太い。
- C 赤彩された甑で、最大径が胴部下位にあるもの。
- D 赤彩された甑で、頸部が短く所謂「広口甑」と呼ばれるタイプのもの。

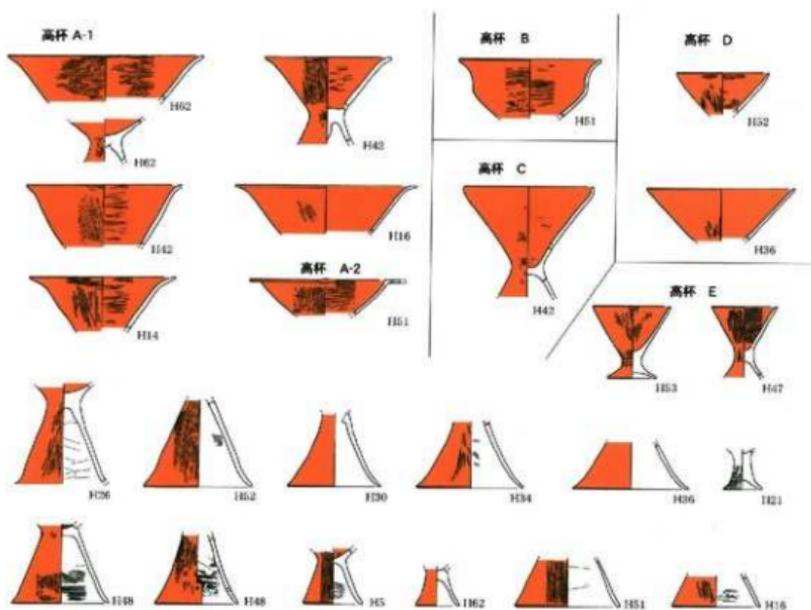
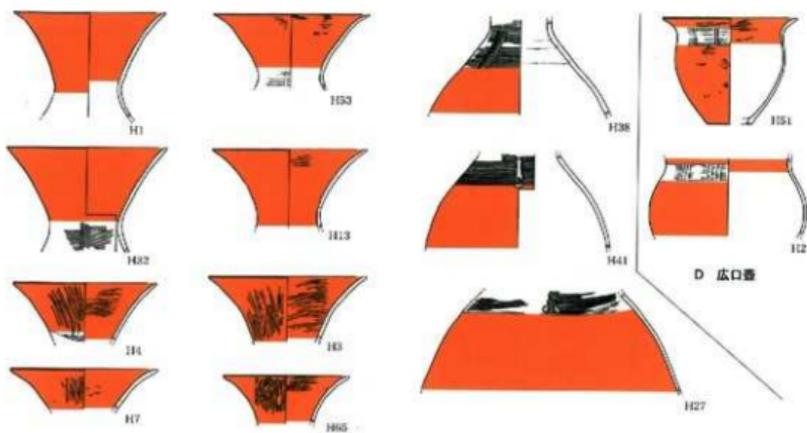
高坏は大分類で5種に分類した。

- A-1 坏部口縁部が先端で外反する。
- A-2 坏部I縁部が先端で外反し、I唇部に突起がつくもの。
- B 坏部が体部中程で屈曲し、I縁部は先端で外反する。
- C 坏部口縁部先端が直線的に開く。
- E 小型で坏部が急角度で直線的に開く。

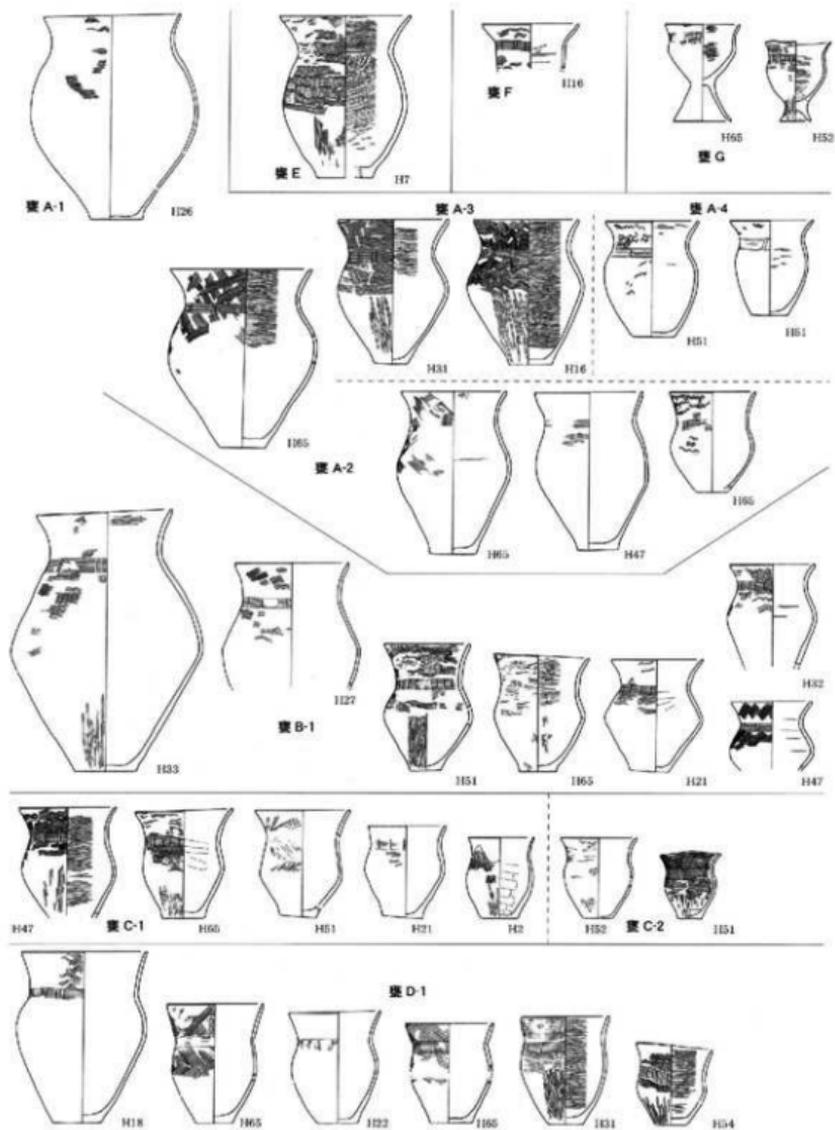
脚部については、H21号住居址の無彩の小型品が特異であるが、その他については形態の変化はあまり捉えられなかった。また、円形もしくは三角形の透かしのある物は確認されなかった（H48号住居址の資料は透かしとは判断できない）。



第153圖 壺分類圖 (S=1/8)



第154图 卣·高杯分类图 (S=1/8)



第155圖 壺分類圖 (S=1/8)

鉢は本遺跡中でも出土資料が多く、大分類として7種に分類した。

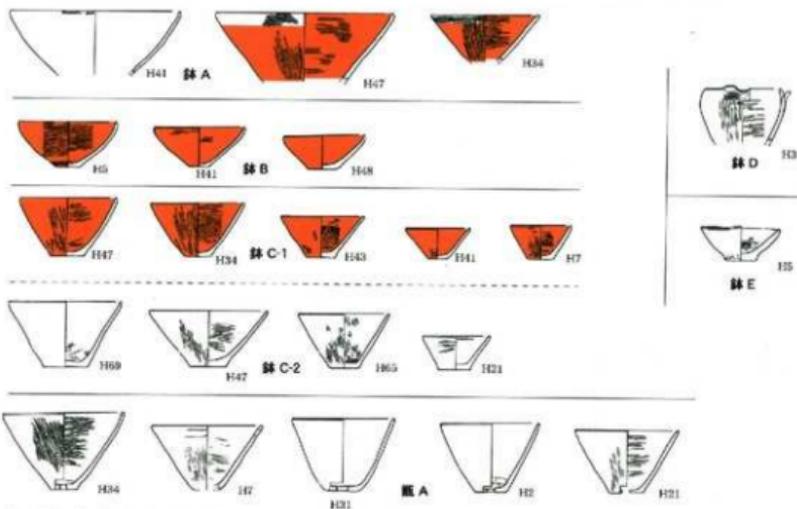
- A-1 最大径が胴部中位にあり、口縁部が器高全体に対して短い。
- A-2 最大径が胴部上位にあり、口縁部は緩やかに外反する。
- A-3 最大径が胴部上位にあり、口縁部が緩やかに外反するが、口唇部で僅かに内わんする。
- A-4 最大径が胴部上位にあり、口縁部が緩やかに外反するが、口唇部で僅かに内わんする。胴部下半がA-3に比べて球胴となる。
- B 最大径が胴部中位にあり、くびれ度が強く「算盤玉」状を呈する。口縁部は緩やかに外反する。
- C-1 最大径が口縁部にあり、口縁部は緩やかに外反する。
- C-2 最大径が口縁部にあり、C-1に比べ頸部の屈曲度がきつい。
- D 最大径が口縁部にあり、口縁部は直線的に広がる。

鉢は法量的に大型・中型・小型の三種類が確認された。なお「坏」という名称使用についての問題はこの場で判断せず、別殿としたい。

- A 口縁部外面に施文のある物、無彩と赤彩がある。
- B 赤彩された物で、口唇部が内わんする。
- C-1 赤彩された物で、口縁部が直線的に立ち上がる。
- C-2 無彩のもので、口縁部が直線的に立ち上がる。
- D 片口を呈する。
- E 器厚が厚く、小型品。

飯はいずれも単孔、形態や法量もほぼ均一であった。

以上のように形態分類を行い、後家山遺跡の住居址で土器出土が比較的多く組成が判るものを一覧にまとめた。



第156図 鉢・飯分類図 (S=1/8)

種別	項目	道 橋 名												
		H70	H2	H32	H43	H27	H31	I148	H21	H51	H7	H16	H47	H65
壺	A	●	●	●	●	●	●							
	B-1		●	●	●	●	●							
	B-2							●						
	C			●				●	●	●				
	D		●						●					
高杯	A-1										●			
	A-2								●					
	B								●					
	C													
	D													
甗	E											●		
	A-1												●	
	A 2	●	●	●	●	●	●	●				●	●	
	A 3						●					●		
	A 4								●	●				
	B 1			●		●			●	●		●	●	
	C 1		●	●	●	●			●	●		●	●	
	C 2								●	●				
	D-1						●	●					●	
	F										●			
鉢	F										●			
	G												●	
	A											●		
	B							●				●		
	C-1										●		●	
甗	C 2								●			●	●	
	D											●		
	E													
	A	●					●				●	●		

第84表 後家山遺跡住居址出土器組成表

13軒を資料サンプルとして掲げた。内、H2号住居址からH51号住居址まで9軒が壺・甗の出土があり比較的良好な組成が観察できた。次にこれら住居址の特に壺形態について先学の研究成果である所謂「時代変遷に伴い壺・甗共に胴部の球脚化傾向」という指摘を加味し、近年の調査成果である西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳや深堀遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅴなどの後期初頭に位置づけられる資料の検出を加え、新たに箱清水式土器の変遷観を試案した。結果は以下に示すように6段階に区分した。タイプ名は後家山遺跡の分類名を示す。

- 第1段階 Aタイプ無彩の壺を主体とし、形態は栗林式土器の壺と同じく胴部下半に最大径を有する。
 第2段階 A無彩の壺とBタイプ赤彩の壺が供伴する。赤彩の壺は胴部中位に最大径を有する。
 第3段階 B赤彩の壺を主体とし、形態は胴部中位に最大径を有する。
 第4段階 B赤彩の壺を主体とし、形態は胴部中位に最大径を有する物と、Cタイプの胴部下半に最大径を有し、屈曲が顕著となるタイプのものが供伴する。
 第5段階 Cタイプ赤彩の壺を主体とし、形態は胴部下半に最大径を有し、屈曲が顕著となるタイプのものが多数を占める。
 第6段階 Cタイプ赤彩の壺を主体とし、形態は胴部下半に最大径を有し屈曲が顕著となるタイプであるが、肩部に球形に近くなるタイプが多くなる。後家山遺跡では典型的なものは出土していない。

後家山遺跡の住居址群に当てはめると、以下のようになる。

- | | | | |
|------|-------------|------|----------|
| 第1段階 | H70 | 第4段階 | H48 |
| 第2段階 | I12・H34・H43 | 第5段階 | I121・H51 |
| 第3段階 | I127・H31 | 第6段階 | 該当なし |

これらの結果は、住居址の重複関係と矛盾しない。また、この変遷観から壺の形態であるが、甗については形態分類

の不的確さからか、あまり明瞭な変化は追えなかった。しかし、全体的にはAタイプについては1から4への変化が、またCタイプについては1から2への変遷が指摘できるようなのである。また、これらの変遷が容認されるとすると後家山遺跡の住居址群は当初考えていたよりも長い期間かけて構築された集落であることが判る。また、時期の判明した住居址を見ると、その配置が段階の早い住居ほど低位置にあり段階が進むにつれて、丘陵斜面をあがっていく傾向にあることが指摘できる。ただ、住居址全体のうち時期が判明している物は少なく詳細については不明確な部分も多いが、先に分類した大型住居址に関しては、その傾向が顕著である。なお、『遺物編』の報告書が未刊行の為、詳細は不明であるが、後家山遺跡の丘陵西に広がる沖積地に展開する樋村遺跡の弥生後期17軒の集落はほぼ第1段階から第2段階に比定できるようなのである。

では、ここでこの段階設定が佐久地域の他の遺跡においてはどのように当てはまるのかを考えてみたい。一括的に高い資料をピックアップして考えると以下のようになると考える。

時代区分	段階設定	遺跡・遺構名
弥生後期初頭	第1段階	西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ H41号住所址
弥生後期前半	第2段階	北西の久保遺跡2次 Y66号住所址
	第3段階	後家山遺跡 H31号住所址
弥生後期後半	第4段階	上直路遺跡 H1号住所址
	第5段階	後沢遺跡 Y24号住所址
弥生末～古墳初頭	第6段階	下伯母塚遺跡 H3号住所址

これら資料をみると、各段階の特徴としてはまず第1段階は旧来より言われる所謂「吉田式土器」に範疇が求められる可能性のある土器群である。近年、佐久平では当該期やこの前段階と考えられる資料が蓄積されつつあり、栗林式土器から箱清水式土器への変遷がより詳細に検討することが可能となってきた。ただ、これらの土器群がすぐに北信地域で言われる「吉田式」とイコールにならない事は先学の研究でも明らかであり、今後地域の土器様相を詳しく検討していく必要がある期である。次に第2段階以降が典型的な「箱清水式土器」と呼ばれる段階である。ただ今回このように段階設定をしたが、第4段階の上直路遺跡には無彩の甕が含まれたりと段階設定の脆弱さも露呈している。この第2段階から第5段階も先の第1段階と同じく設定基準の見直しや、裏の形態研究により設定根拠の補強を行う必要がある。第6段階は先に提示した下伯母塚遺跡H3号住居址には見られないが、同時期と考えられる周辺の住居址から「小型器台」が既に出土しており、所謂「小型精製土器」の一群や「東海系土器」といった土器群が地域内に流入してくる時期と考えられる。

今回、非常に荒っぽい手法により、後家山遺跡出土土器群の分析を通して地域内の「箱清水式土器」の変遷を試算したが、先に述べたとおり設定根拠の脆弱さや新たな課題を提示した部分も多く、今後これらの課題と成果を踏み台によりいっそう地域内の弥生後期土器群の理解が深まればと考える。最後に地域内の弥生土器研究に多大な成果を残す小山氏の編年との平行関係を次項の表に示しておく。奇しくも同一区画となり当てはめている住居址資料も共通する部分も多いが、先に示した筆者の胆略的な虚変化などの要素ではなく、周辺部の地域変化や各器種の形態変化など詳細な検討のもと小山編年はくまれていることを付記しておきたい。

以上、後家山遺跡の調査成果として弥生時代後期を中心として遺構である住居と遺物である土器について若干のまとめをおこなったが、後家山遺跡の調査成果は先の概要でも触れたとおり「中期の環濠集落」「高地性集落」等多岐に及ぶ。執筆者の力不足でこれらを本報告の中で扱えなかった事を自戒とし、小結としたい。

編年関係表

試案	第1段階		第2段階	第3段階	第4段階		第5段階	第6段階
	I期		II期	III期古	III期新		IV期	V期
小山	北平1期		北平2期		北平3期		北平4期	
青木	1	2	3		4		5	6
	箱清水Ⅰ式		箱清水Ⅱ式		箱清水Ⅱ式		箱清水Ⅱ式	
他地域			1段階		2段階		3段階	
					法仏		月影・廻間Ⅰ	
								廻間Ⅱ

本表は小山氏の佐久平編年と青木氏の長野盆地南部の編年を後家山遺跡の段階設定試案も含めて比較したものであるが、各段階の平行関係は筆者の解釈による物で小山、青木両氏の見解を示す物ではない。

参考文献

遺構関係

- 林 幸彦 花岡 弘 1983「弥生時代の柵」『信濃』35-4
 助川朋広 1990「弥生時代の柵再考」-佐久地方を中心として『赤い土器を追う』佐久考古学会
 石川日出志 1998「弥生時代中期関東の4地域の併存」『駿台史学』第102号

遺物関係・土器

- 小山岳夫 1990「佐久地方中期後半～後期の弥生土器編年」『赤い土器を追う』佐久考古学会
 『伊勢海岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』-土器・墓・村にみる面相と地域間交流
 1999「佐久地方の弥生土器」99シンポジウム『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
 2001「長野県後期弥生土器の地域圏」『長野県考古学会誌』93.94 長野県考古学会
 青木一男 1999「長野盆地南部の後期土器編年（発表メモ）」
 99シンポジウム『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
 石川日出志 2002 栗林式土器の成立過程。『長野県考古学会誌』99.100 長野県考古学会
 2003「神保富上塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第27号 土曜考古学研究会
 直井雅尚 1999「T字紋とJ字紋」-松本地域における弥生後期帯形土器紋様の「様相」
 『長野県考古学会誌』89 長野県考古学会

遺物関係・鉄製品

- 大村 直 1984「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』第17号
 村上幸造 2003「弥生時代の鉄鏃」古墳時代初頭まで『考古資料大観』7 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品
 青木一男 1998「長野県出土鉄鏃の基礎的整理」『松原遺跡 弥生総論6』
 長野市内その3-上付越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5
 野澤誠一 2002「銅鏃・鉄鏃からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』第8号

各報告書に関しては紙面の都合上割愛させて頂いた。ご容赦願いたい。



後家山遺跡、東久保遺跡、宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ 遠景（左端千曲川、右上中央丘陵が遺跡）



遺跡遠景（中央を流れるのが滑津川、中央丘陵先端が調査遺跡）



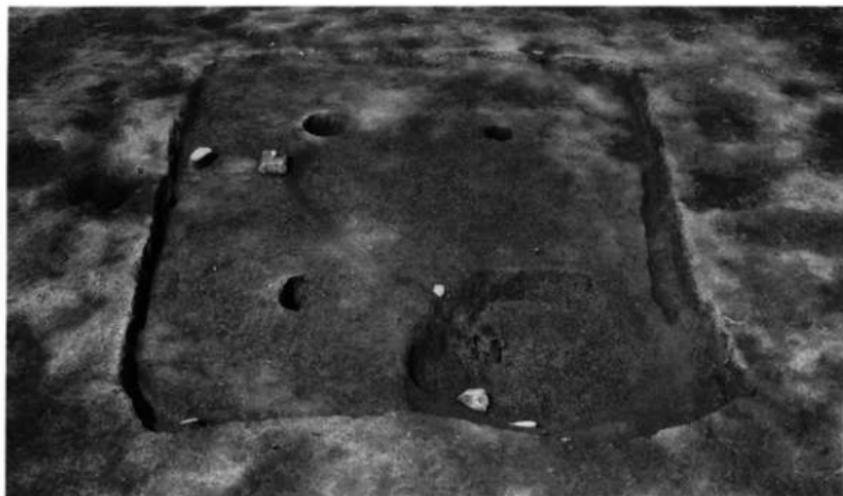
後家山遺跡近景（北より）



調査区近景（北より）



後家山遊跡全景 (手前がII地点、奥がI地点)



H1号住居址全景（南より）



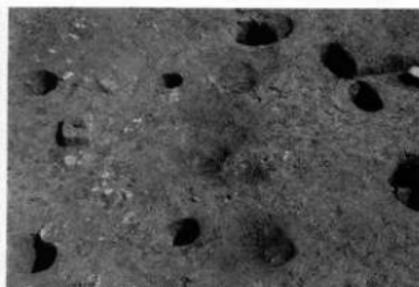
H2号住居址全景（南より）



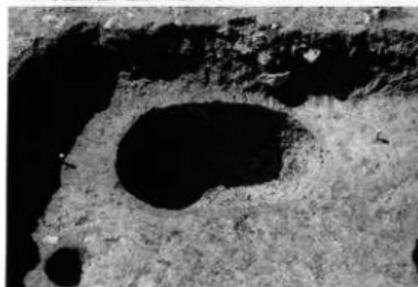
H2号住居址入り口部ビット近景 (南西より)



H2号住居址卵全景 (南より)



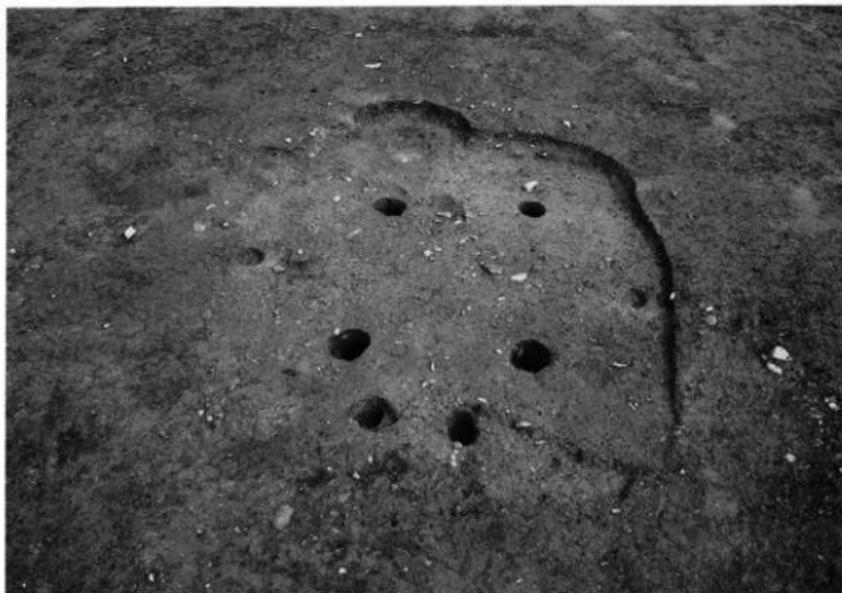
H2号住居址入り口部炉全景



H2号住居址南東コーナー土坑 (北より)



H2号住居址入り口部焼土範囲



113号住居址全景（南より）



114号住居址全景（南より）

H5号住居址全景
(南より)



H5号住居址貯蔵穴近景 (東より)



H5号住居址貯蔵穴内遺物出土状況



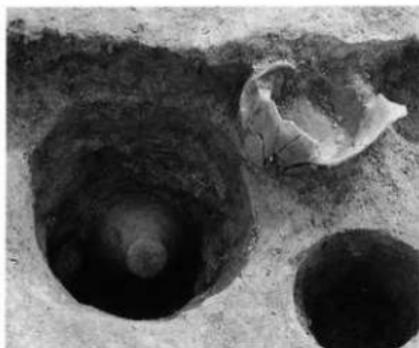
H5号住居址遺物出土状況



H5号住居址石製紡錘車出土状況



H6号住居址全景
(南より)



H16号住居址遺物出土状況

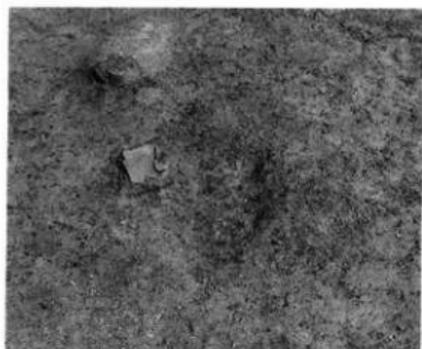
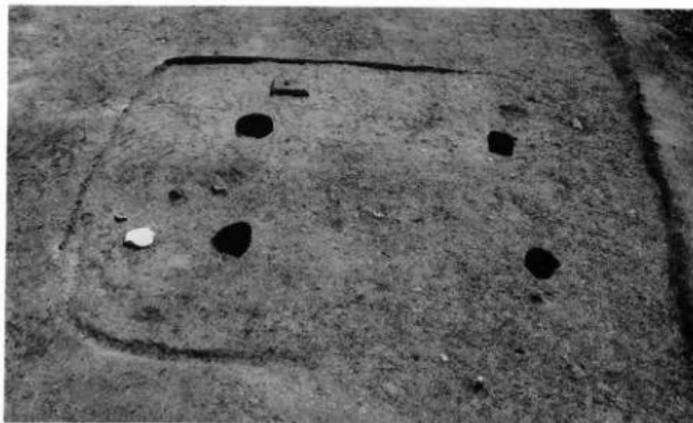


H17号住居址遺物出土状況



H17号住居址全景
(南より)

H18号住居址全景
(西より)

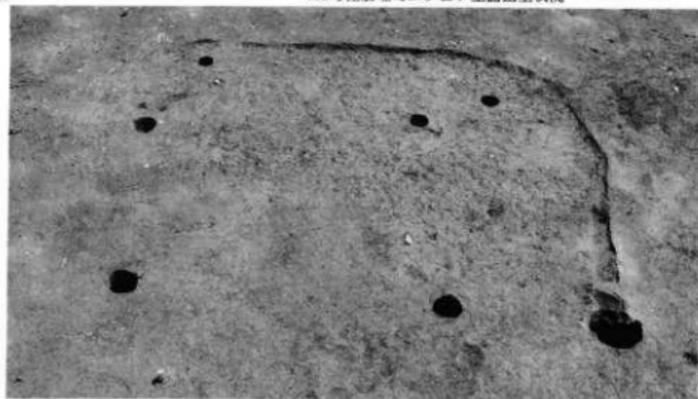


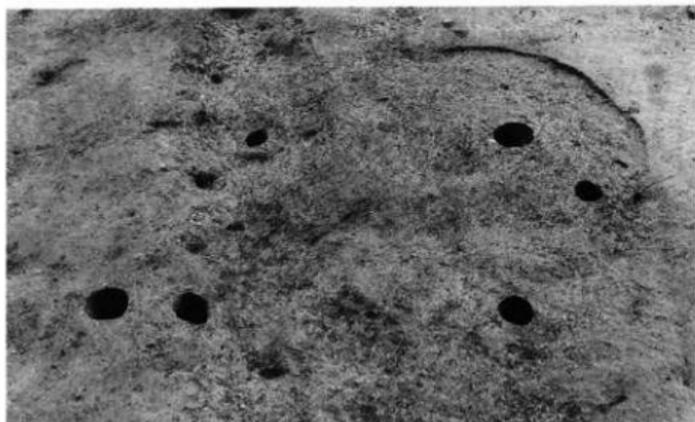
H18号住居址伊皿景



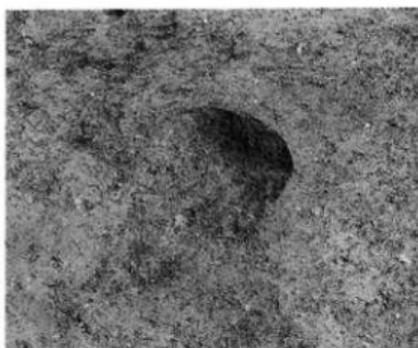
H18号住居址ミニチュア土器出土状況

H19号住居址全景
(西より)





H10号住居址全景
(西より)



H10号住居址炉全景

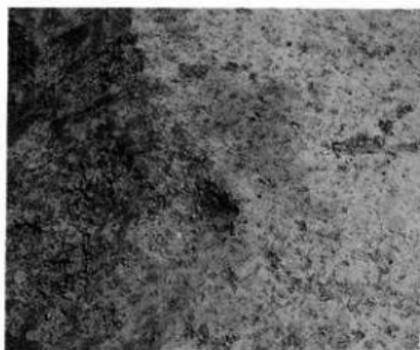


後家山遺跡I地点近景(東より)



H11号住居址全景
(西より)

H12号住居址全景
(西より)



H12号住居址炉全景



H13号住居址遺物出土状況

H13号住居址全景
(西より)

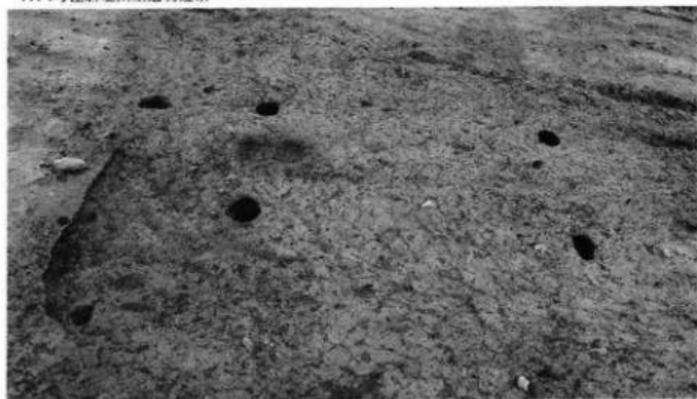




H14号住居址全景
(東より)

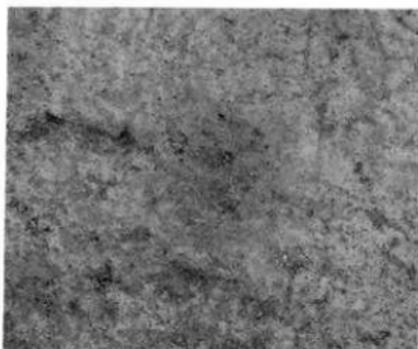
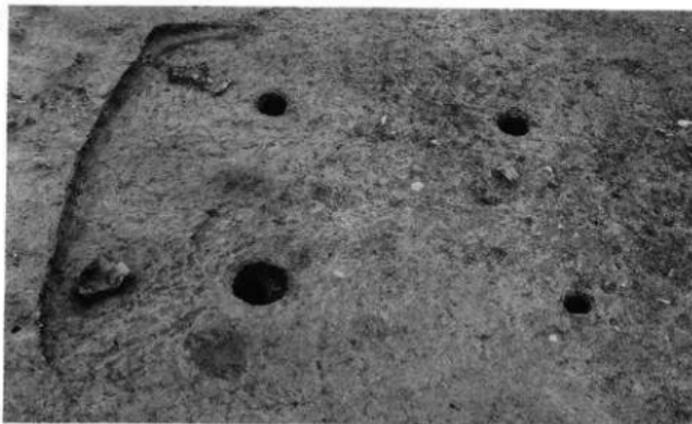


H14号住居址出土遺物近景



H15号住居址全景
(西より)

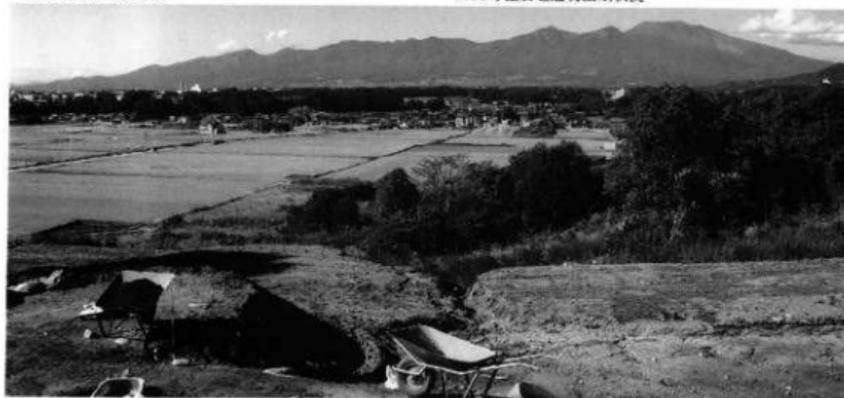
H16号住居址全景
(西より)



H16号住居址伊皿



H16号住居址遺物出土状況



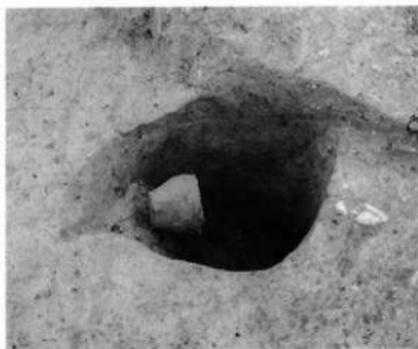
後家山遺跡より浅間山麓を望む



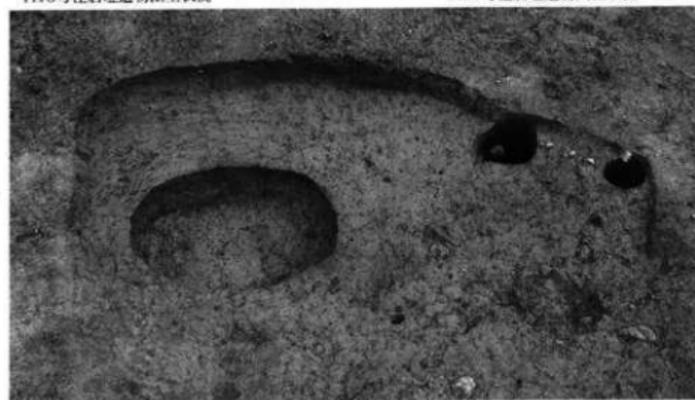
H18号住居址全景
(東より)



H18号住居址遺物出土状況



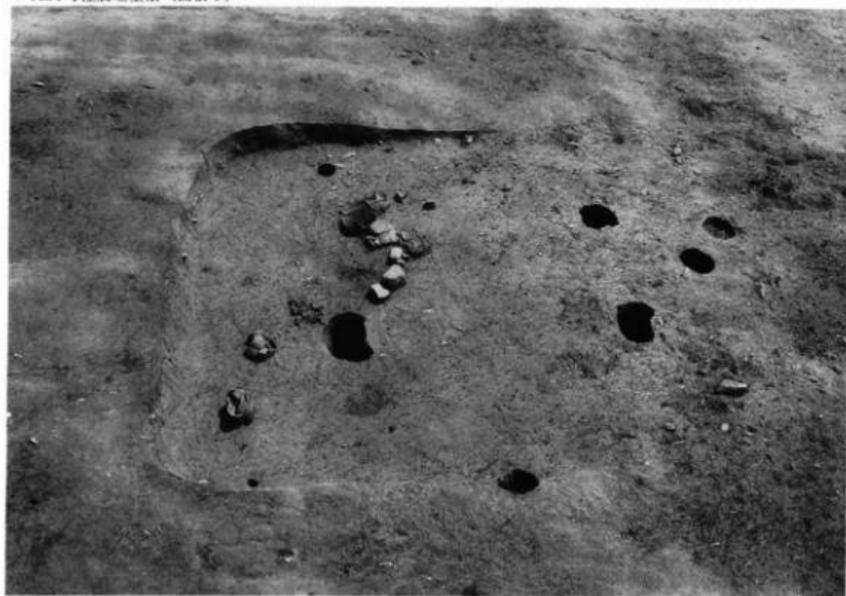
H19号住居址遺物出土状況



H19号住居址全景
(南より)



H20号住居址全景（西より）



H21号住居址全景（西より）

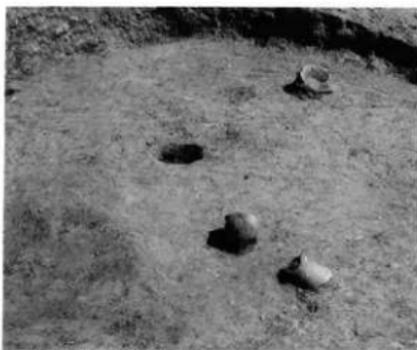
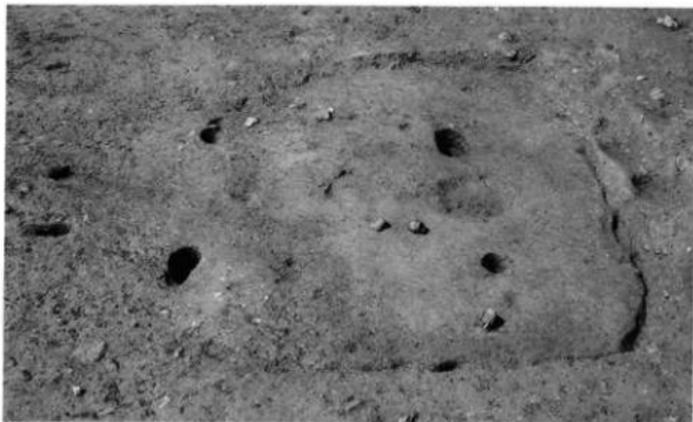


H21号住居址遺物出土状況

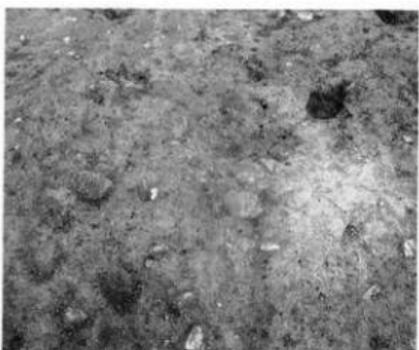


H21号住居址遺物出土状況

H22号住居址全景
(東より)

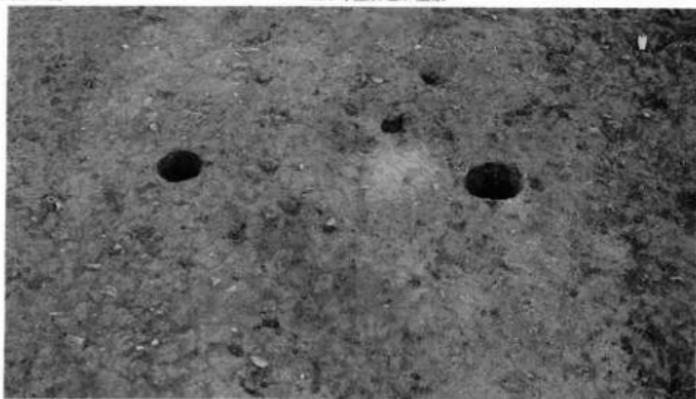


H22号住居址遺物出土状況



H23号住居址跡全景

H23号住居址全景
(南より)

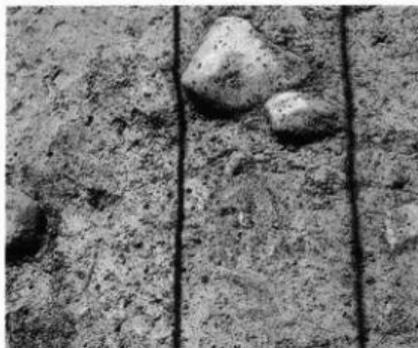




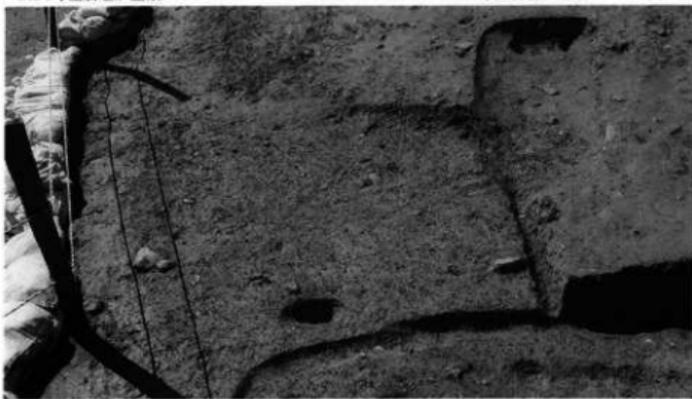
H24号住居址全景
(西より)



H24号住居址炉全景



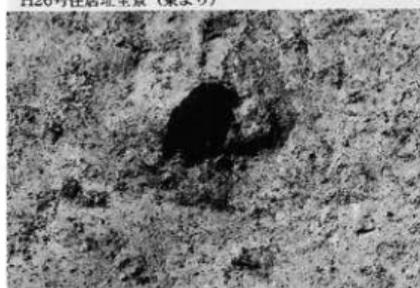
H25号住居址炉全景



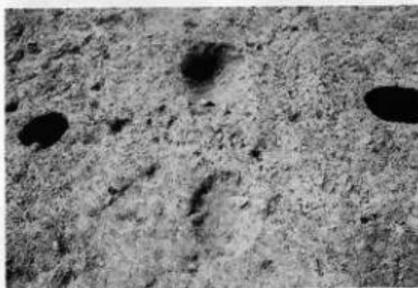
H25号住居址全景
(東より)



H26号住居址全景（東より）



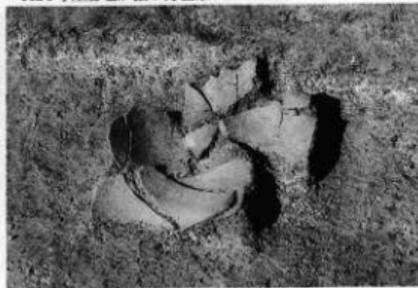
H26号住居址炉全景



H26号住居址炉掘り方全景

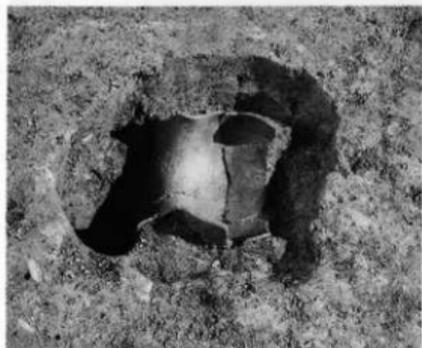
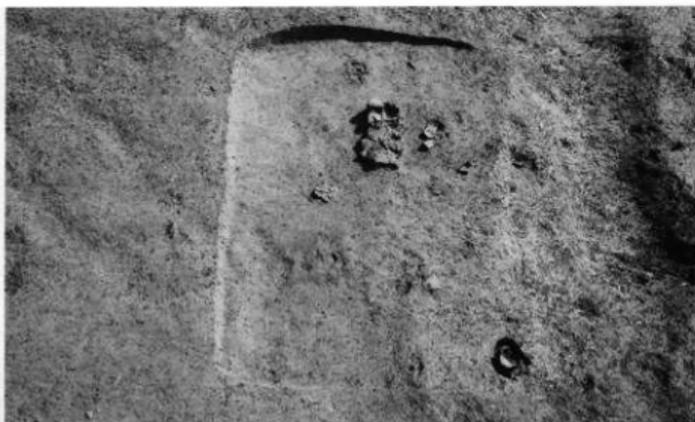


H26号住居址遺物出土状況



H26号住居址遺物出土状況

H27号住居址全景
(西より)



H27号住居址遺物出土状況



H27号住居址調査風景



H27号住居址
遺物出土状況

H28号住居址全景
(西より)



H28号住居址遺物出土状況



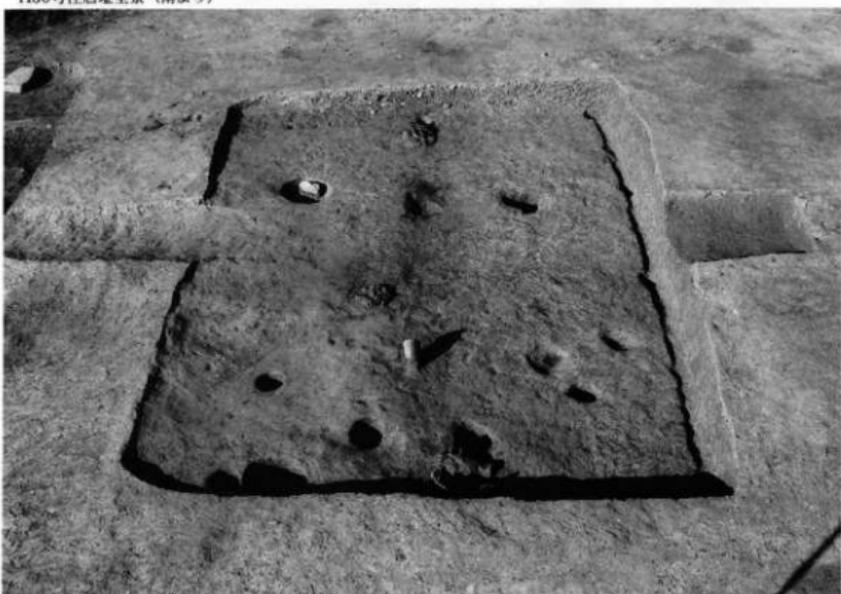
H28号住居址遺物出土状況



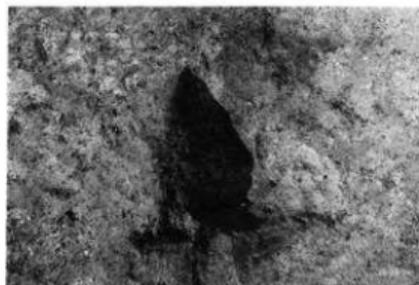
H29号住居址全景
(西より)



H30号住居址全景（南より）



H31号住居址全景（南より）



H31号住居址炉全般



後家山調査風景



H31号住居址入りロビット内状況



H31号住居址遺物出土状況



H31号住居址遺物出土状況



H31号住居址遺物出土状況



H31号住居址遺物出土状況



H31号住居址遺物出土状況



H32号住居址遺物出土状況（西より）



H32号住居址全景（西より）



H32号住居址遺物出土状況近景



H33号住居址全景（南より）



H33号住居址炉全景



H33号住居址か堀り方



H33号住居址遺物出土状況



H33号住居址磨り台石出土状況



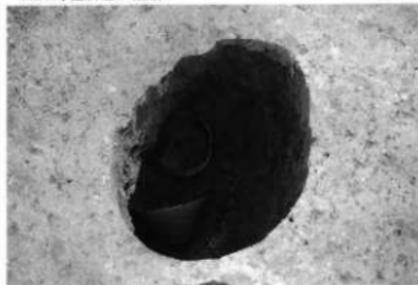
H34号住居址全景（南より）



H34号住居址全景



H34号住居址の堀り方



H34号住居址貯蔵穴内状況



H34号住居址覆土堆積状況



H35号住居址全景（南より）



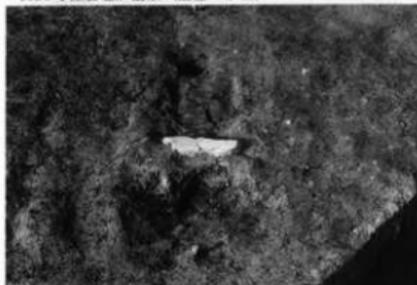
H35号住居址全景（東壁拡張前の住居址分）



H35号住居址炉全景 (土器+炉石)



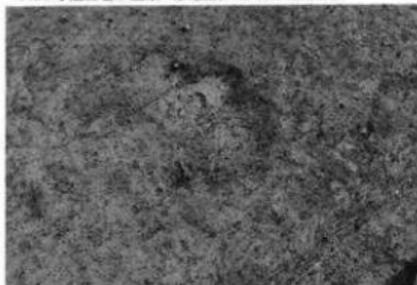
H35号住居址炉全景 (土器下は良く焼けていた)



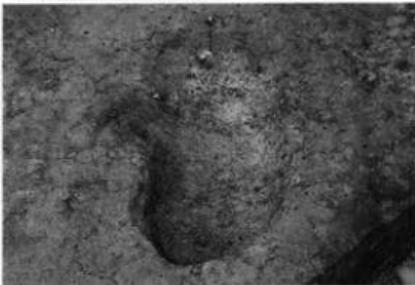
H35号住居址炉全景 (狐蛋前の炉石がある炉)



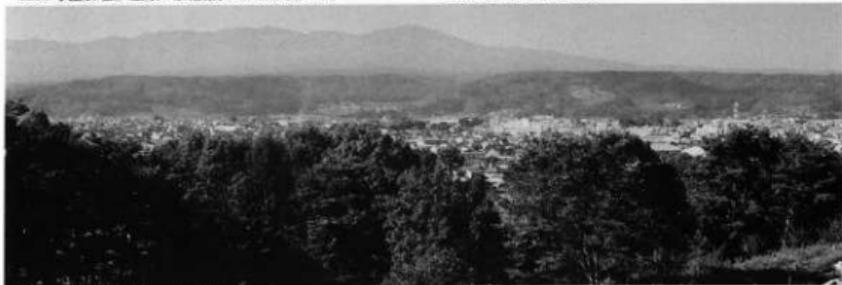
H35号住居址覆土堆積状況



H35号住居址が全景 (狐蛋前の炉石が無い炉)



H35号住居址が掘り方



後家山道跡より蓼科山麓を望む

H36号住居址全景
(南より)

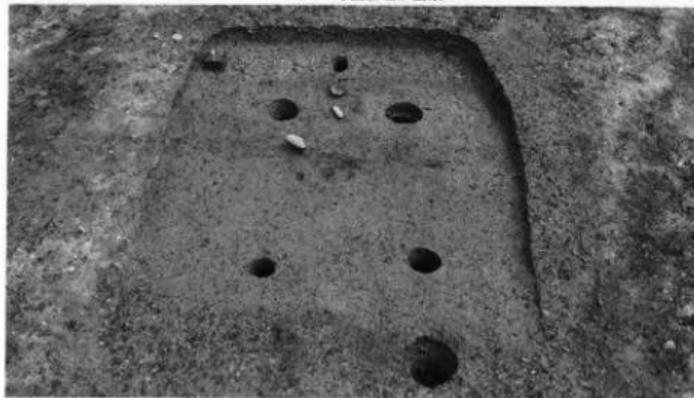


H36号住居址が全景



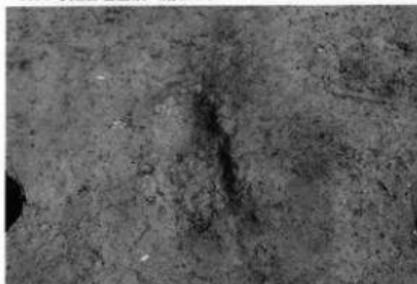
H37号住居址が全景

H37号住居址全景
(南より)





H38号住居址全景（南より）



H38号住居址炉全景



H38号住居址磨り台石出土状況



H38号住居址遺物出土状況

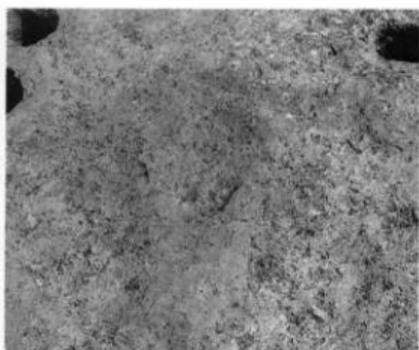


H38号住居址遺物出土状況

H39号住居址全景
(南より)



H39号住居址炭化材出土状況



H40号住居址畑全景

H40号住居址全景
(南より)





H41号住居址全景
(南より)



H41号住居址
炭化材出土状況



H41号住居址覆土堆積状況

H41号住居址
炭化材出土状况



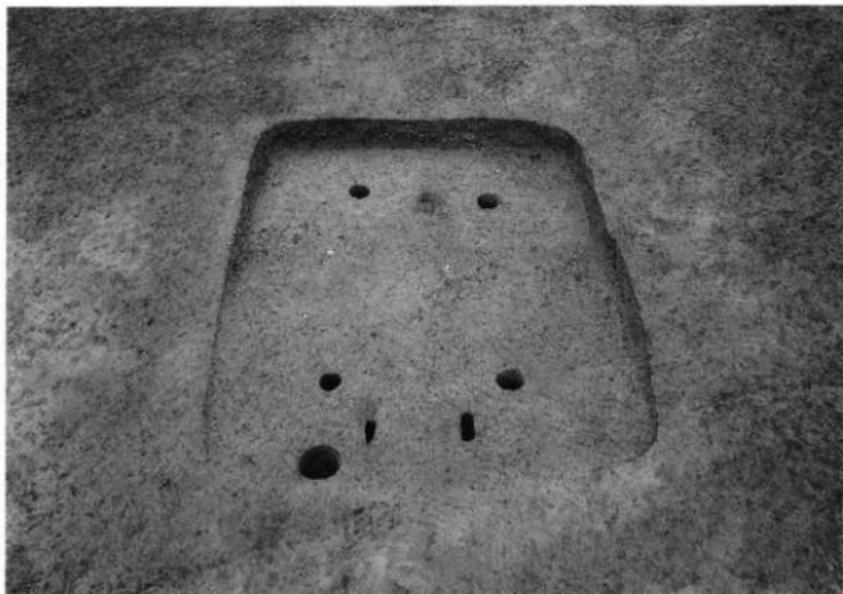
H41号住居址
炭化材出土状况



H41号住居址炉全景



H41号住居址壁烧失状况



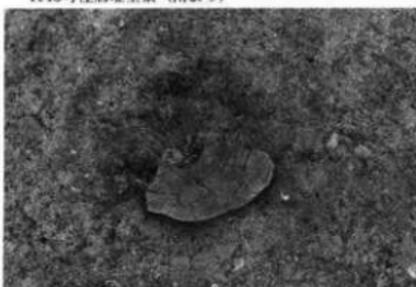
H42号住居址全景 (南より)



後家山遺跡住居跡調査風景



H43号住居址全景（南より）



H43号住居址炉全景



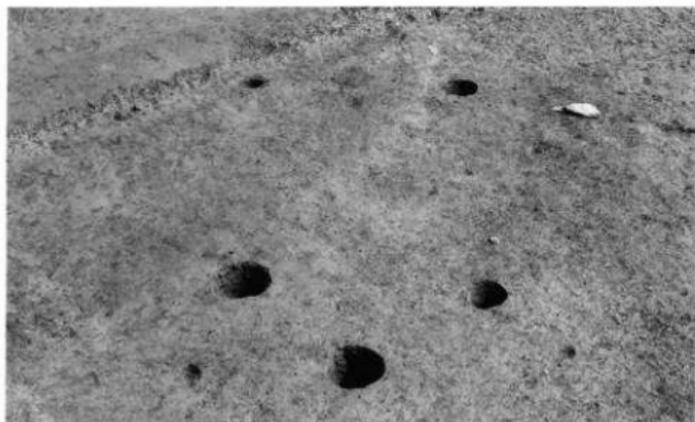
H43号住居址貯藏穴内状況



H43号住居址遺物出土状況



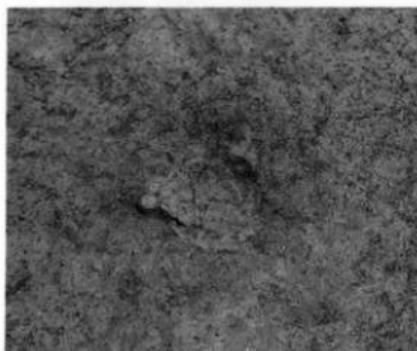
H43号住居址遺物出土状況



H44号住居址全景
(南より)



H45号住居址全景
(南より)



H45号住居址炉全景



H45号住居址遺物出土状況

H46号住居址全景
(南より)



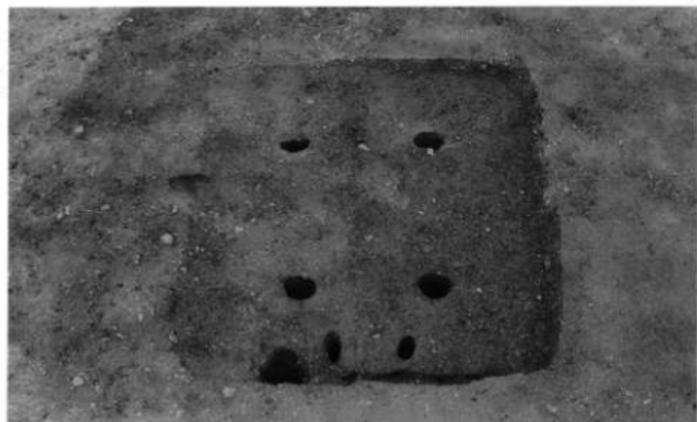
H47号住居址全景
(南東より)



H47号住居址炉全景



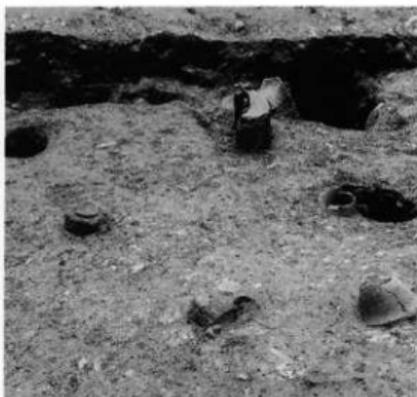
H47号住居址遺物出土状況



H48号住居址全景
(南東より)



H48号住居址炉全景



H48号住居址遺物出土状況

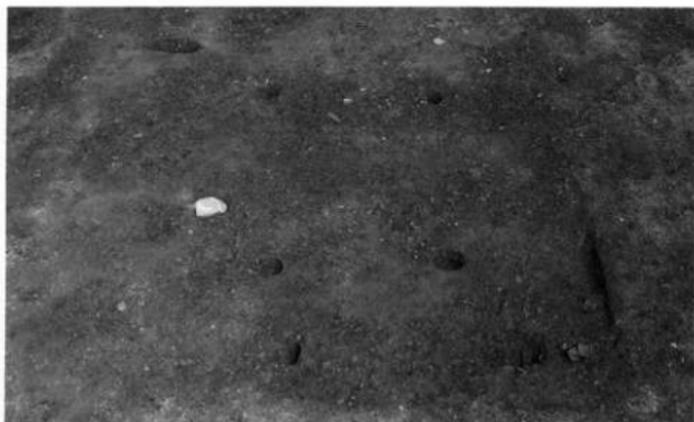


H48号住居址遺物出土状況



H48号住居址遺物出土状況

H49号住居址全景
(南東より)



H50号住居址全景
(南東より)



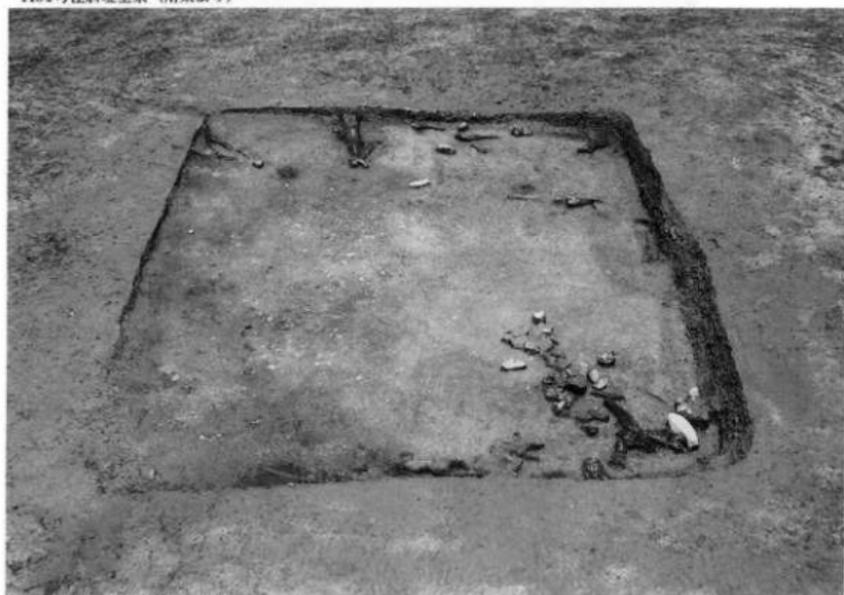
H50号住居址炉全景



H50号住居址掘出土状況



H51号住居址全景（南東より）



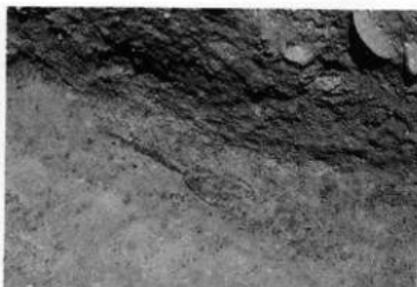
H51号住居址炭化材出土状況



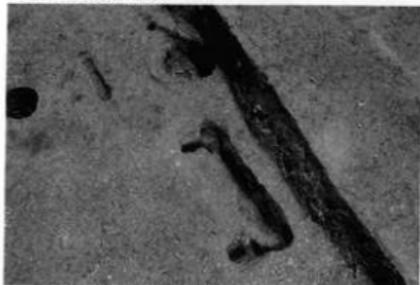
H51号住居址遺跡出土状況



H51号住居址炉全景



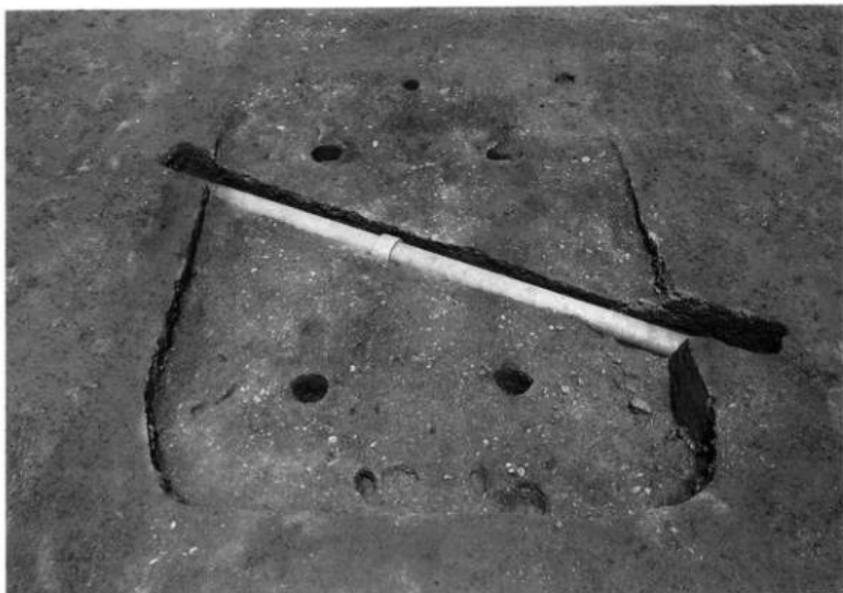
H51号住居址「曲柄装着平鍬」出土状況



H51号住居址入り口部近景



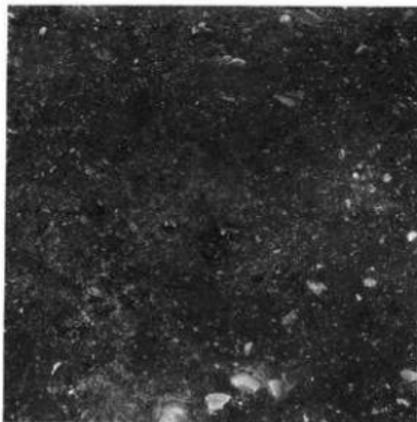
H51号住居址遺跡出土状況



H52号住居址全景（南東より）



H52号住居址炭化材出土状況



H52号住居址炉全景



H52号住居址入り口部近景



H52号住居址炭化材出土状況



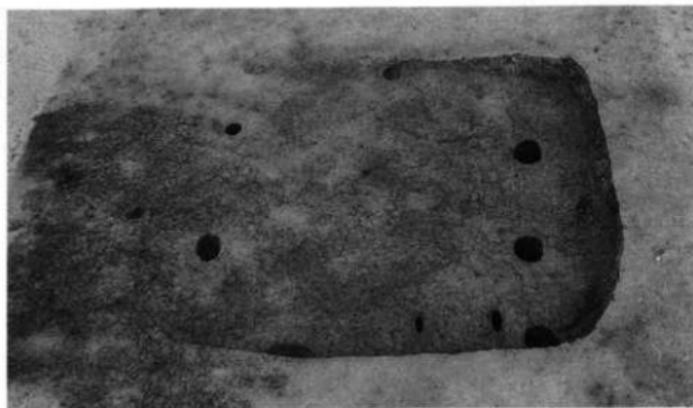
H52号住居址炭化材出土状況



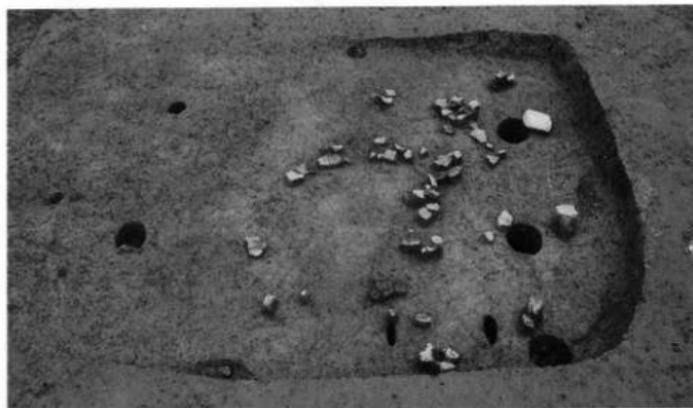
H52号住居址遺物出土状況



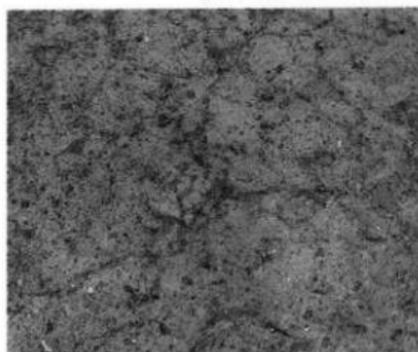
H52号住居址遺物出土状況



H53号住居址全景
(南東より)



H53号住居址
遺物出土状況

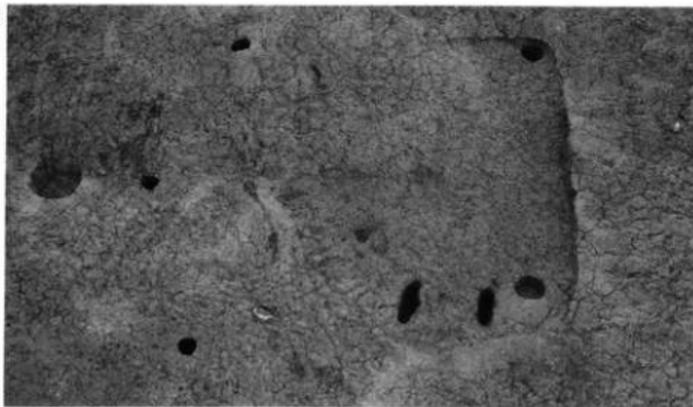


H53号住居址炉全景

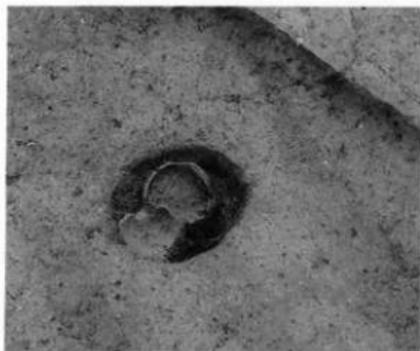


H53号住居址遺物出土状況

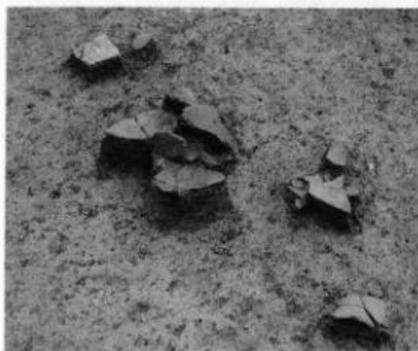
H54号住居址全景
(南東より)



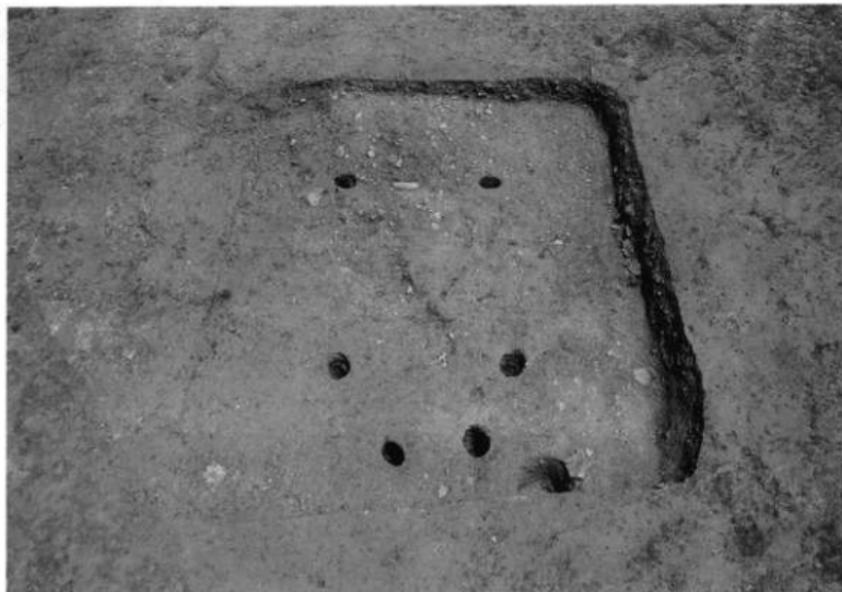
H54号住居址
遺物出土状況



H54号住居址炉遺物出土状況



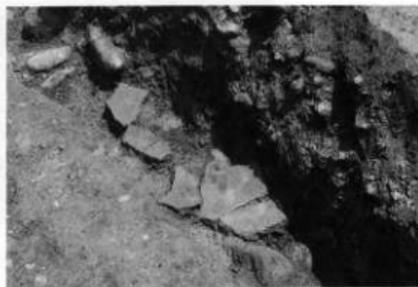
H54号住居址遺物出土状況



H55号住居址全景（南東より）



H55号住居址全景



H55号住居址遺物出土状況



H55号住居址遺物出土状況

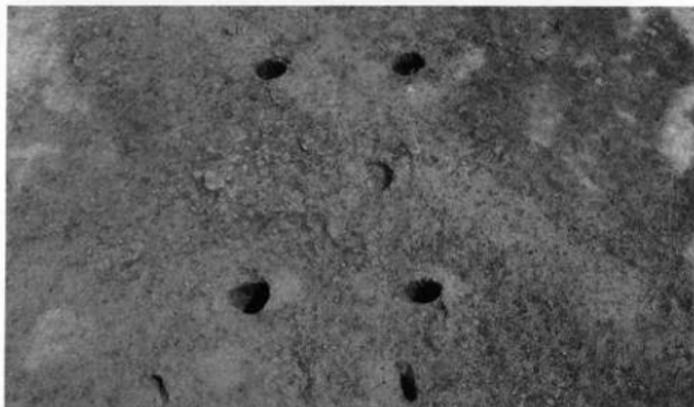


H55号住居址遺物出土状況

後家山遺跡
Ⅱ地点を望む



H56号住居址全景



H56号住居址炉全景



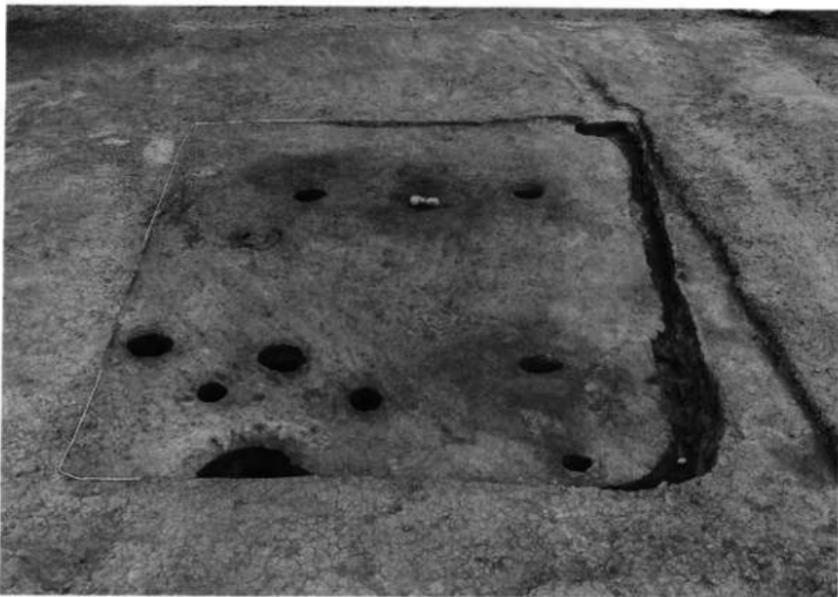
H56号住居址遺物出土状況



1161号住居址全景（南西より）



後家山遺跡Ⅱ地点調査区遠景



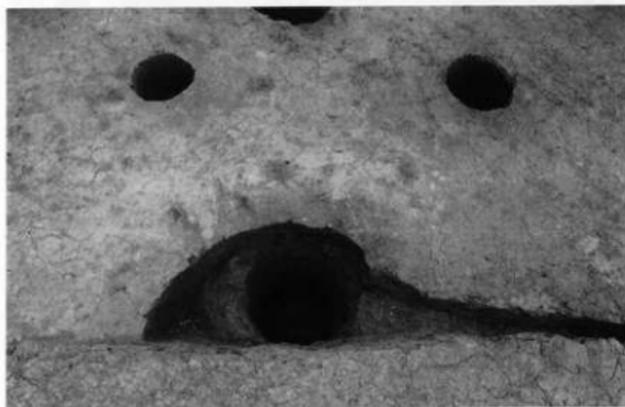
H62号住居址全景（東より）



H62号住居址遺物出土状況（南より）



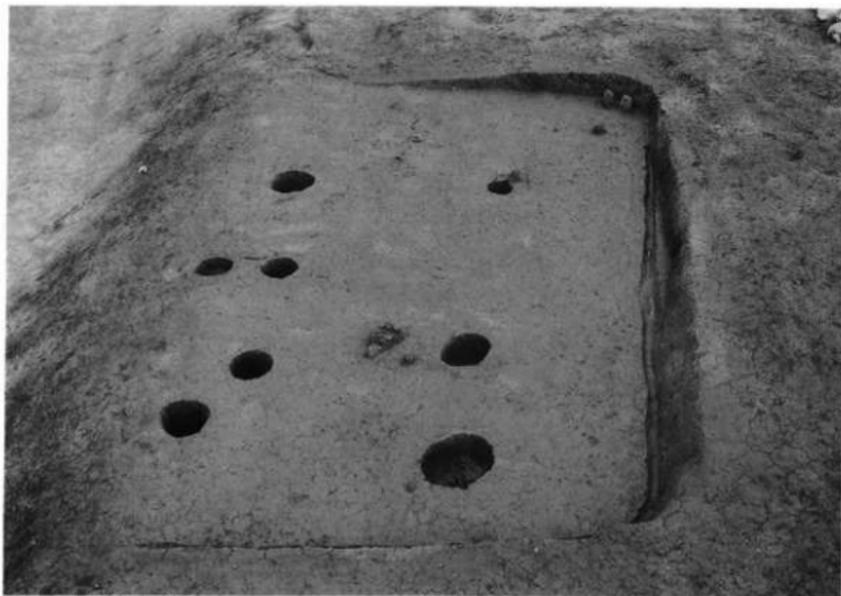
H62号住居址炉全景



H62号住居址入り口部
近景



H62号住居址遺物
出土状況



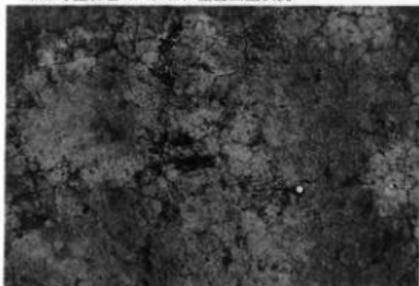
H63号住居址全景（東より）



H63号住居址ミニチュア土器出土状況



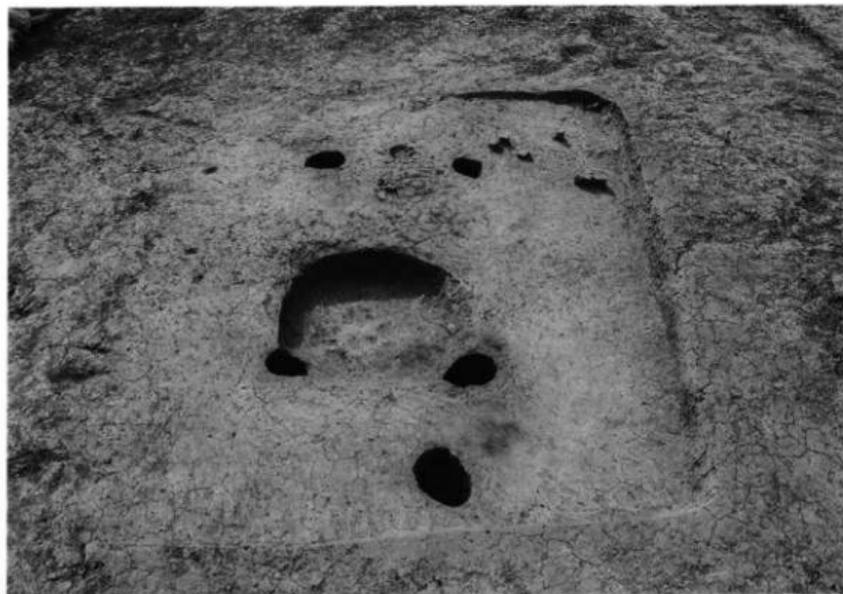
後家山遺跡II地点調査風景



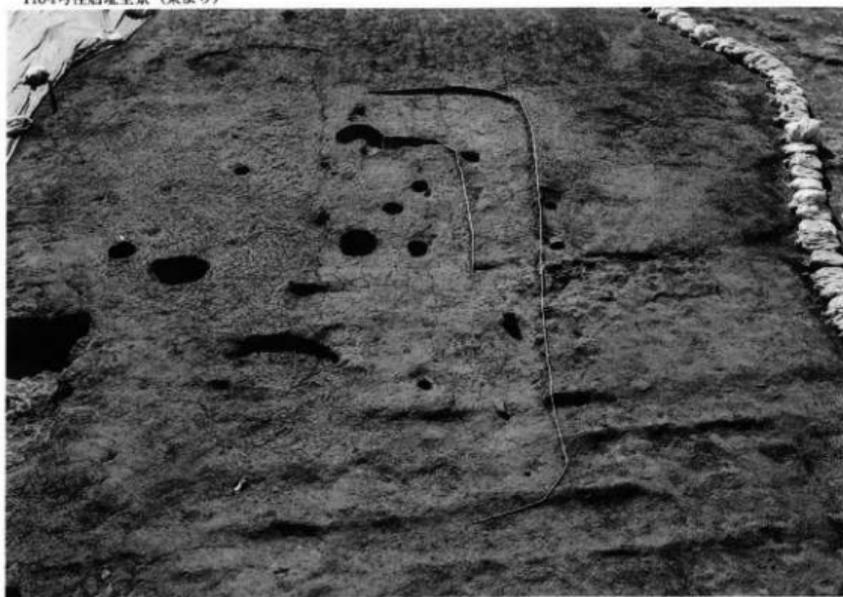
H63号住居址炉全景



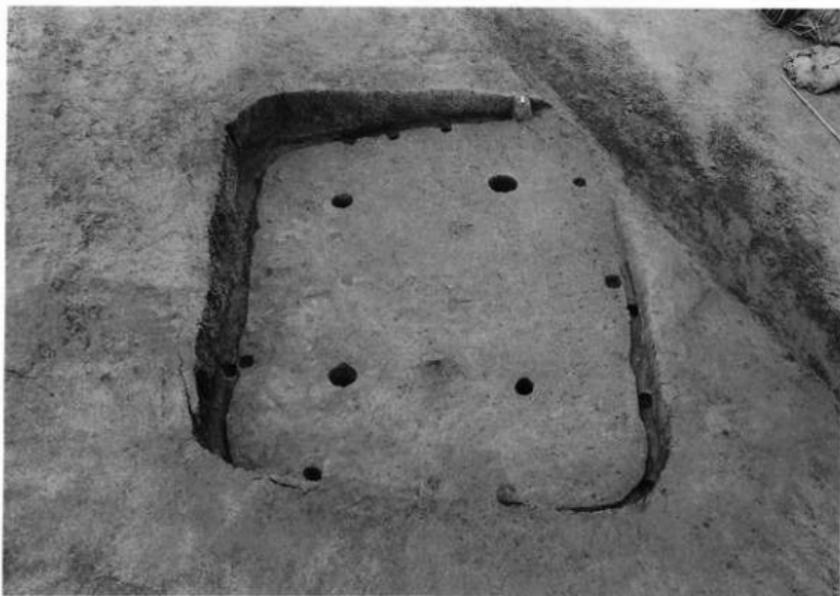
H63号住居址遺物出土状況



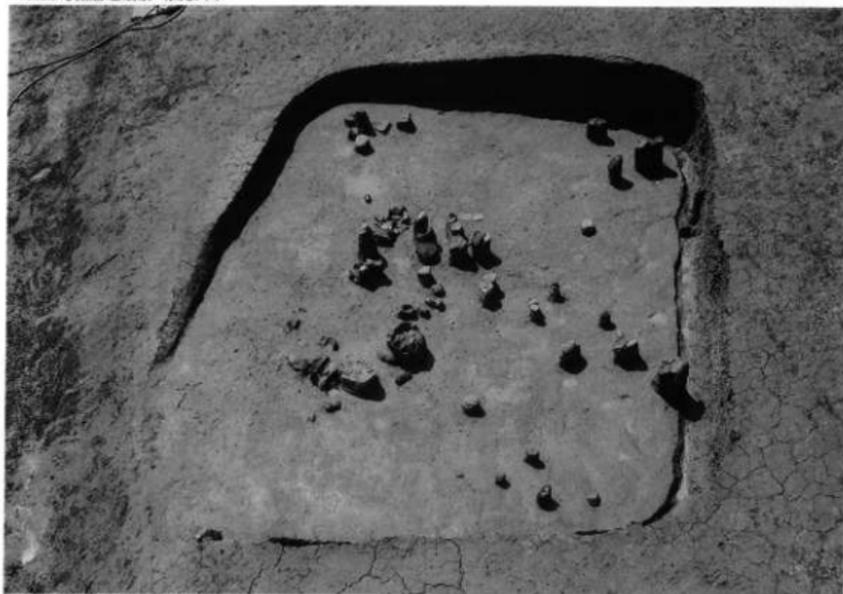
H64号住居址全景（東より）



H66号住居址全景（東より）



H65号住居址全景（西より）



H65号住居址遺物出土状況（東より）



H65号住居址遺物出土状況



H65号住居址炉全景



H65号住居址遺物出土状況

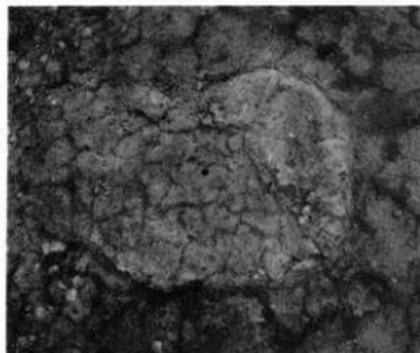


H65号住居址土製品出土状況



H65号住居址土製品出土状況

H67号住居址全景
(南より)



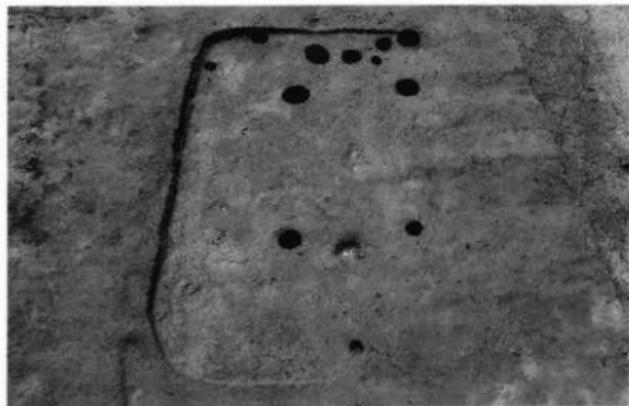
H67号住居址跡全景



H68号住居址遺物出土状況

H68号住居址全景
(南より)





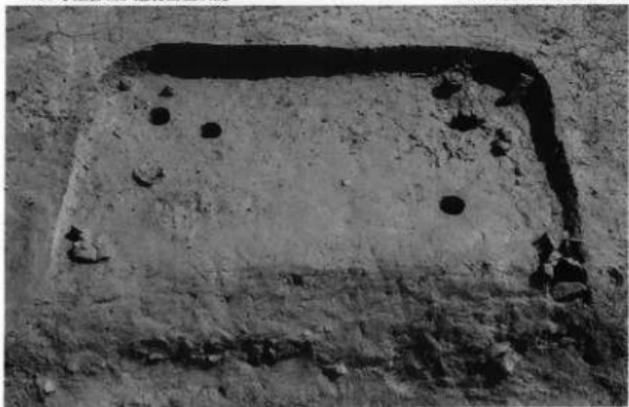
H69号住居址全景
(西より)



H69号住居址の遺物出土状況



H70号住居址遺物出土状況



H70号住居址全景
(南より)

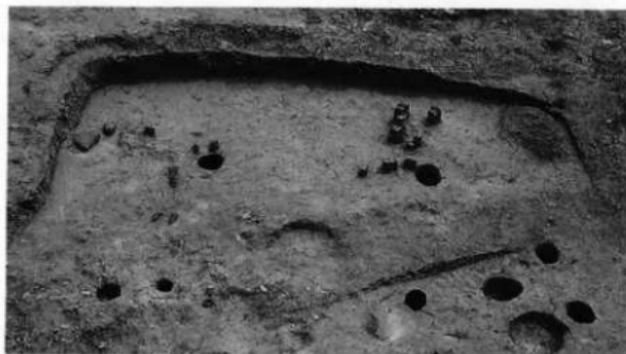
H71号住居址全景
(西より)



H72号住居址全景
(西より)



H73号住居址全景
(南西より)





H174号住居址全景（南より）



H75号住居址全景（南より）

H17号住居址全景
(西より)



H17号住居址
カマド全景



H17号住居址内土坑



H17号住居址遺物出土状況



T1特殊遺構全景
(西より)

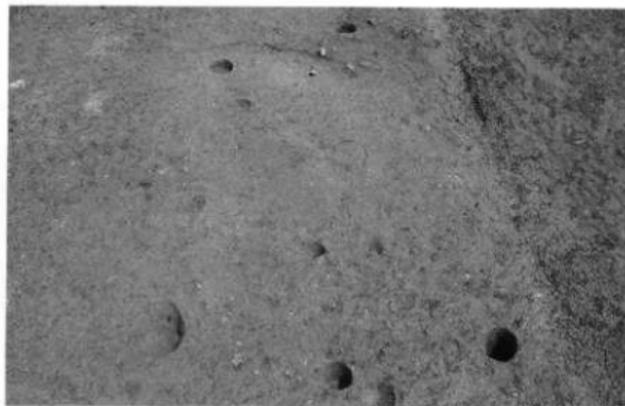


T2特殊遺構全景
(東より)

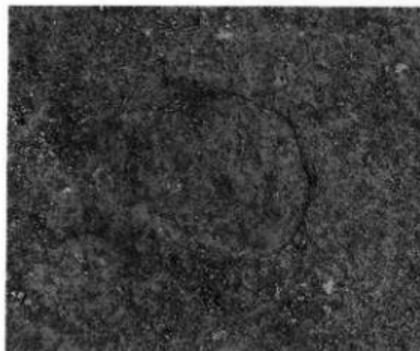


T3特殊遺構全景
(西より)

T4特殊遺構全景
(南より)



T5特殊遺構全景
(東より)



T4特殊遺構地土範囲



後家山遺跡II地点調査風景



1号木棺墓全景（小口調査前）



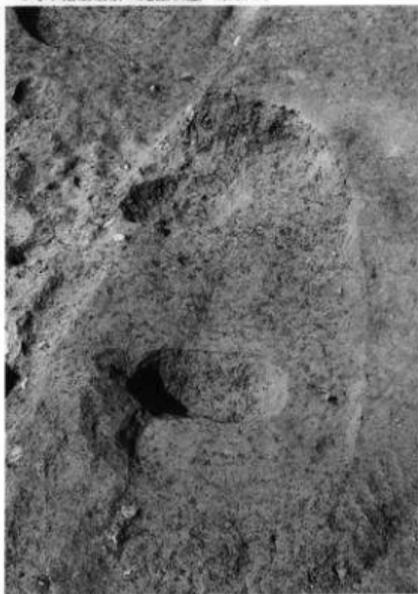
1号木棺墓全景（完備状態・東より）



1号木棺墓鉄鎖出土状況

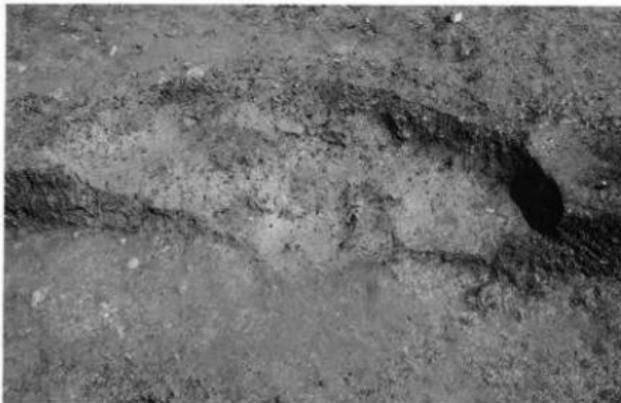


1号木棺墓出土鉄鎖（保存処理前）



2号木棺墓全景（南より）

D1号土坑
(西より)



D2号土坑
(北より)



D3号土坑
(西より)

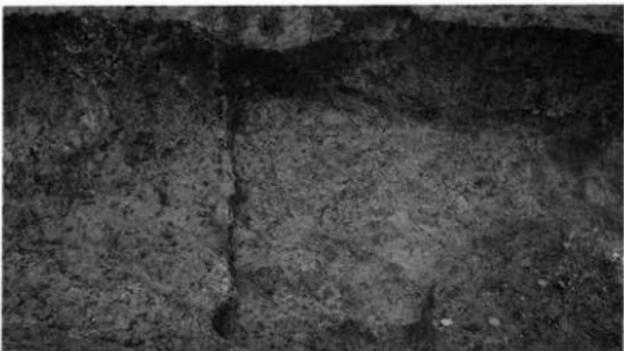




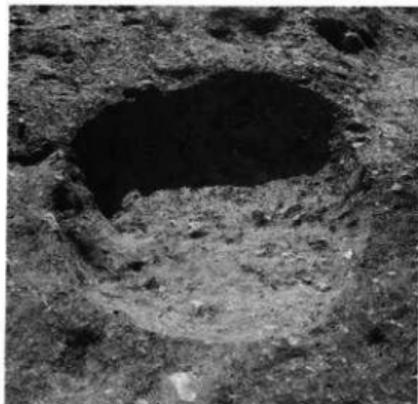
D5号土坑
(南より)



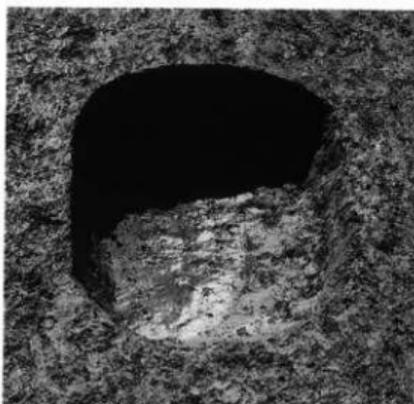
D6号土坑
(東より)



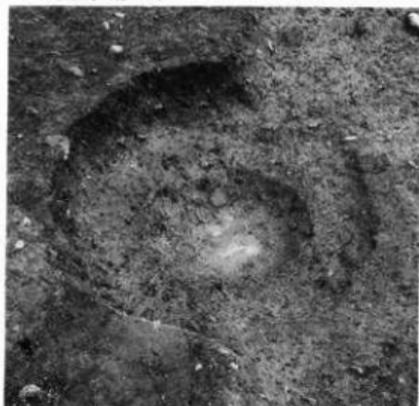
D8号土坑
(西より)



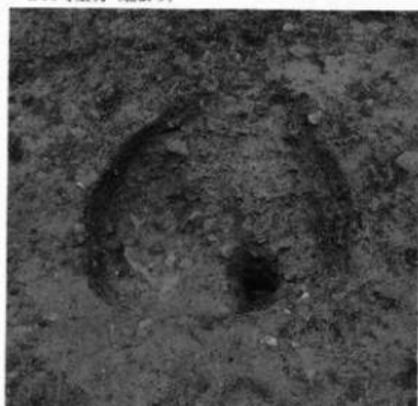
D9号土坑 (北より)



D10号土坑 (北より)



D11号土坑 (西より)



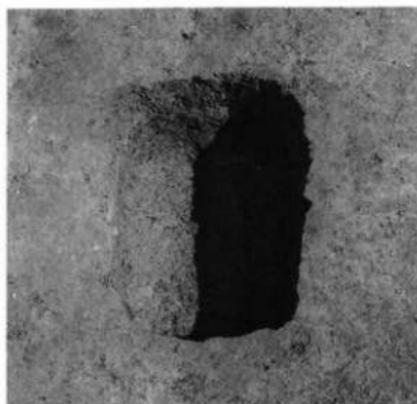
D12号土坑 (南より)



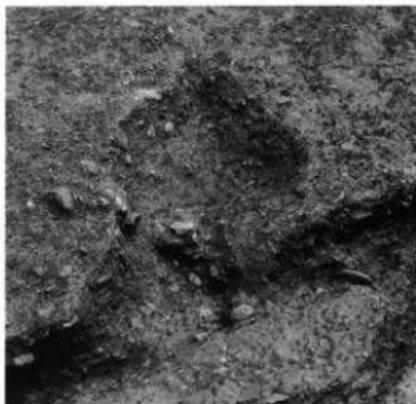
D13号土坑 (南より)



D14号土坑 (南より)



D15号土坑 (南より)



D17号土坑 (南より)



D16号土坑堆積状況



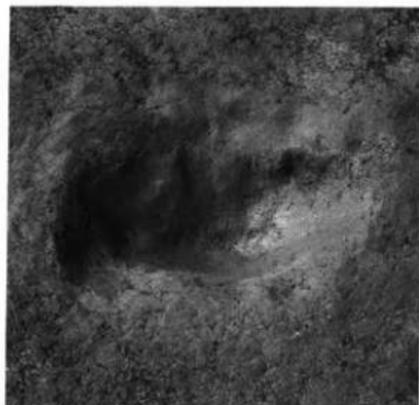
D16号土坑 (南より)



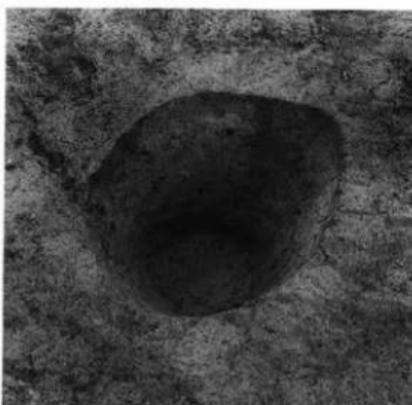
D18号土坑 (西より)



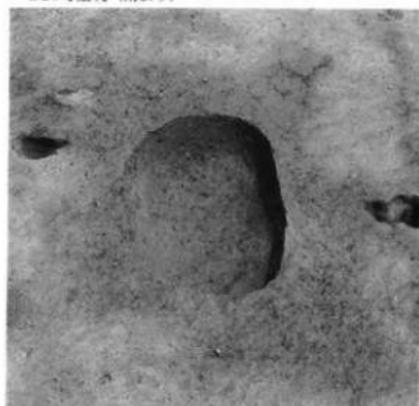
D19号土坑 (西より)



D20号土坑（南より）



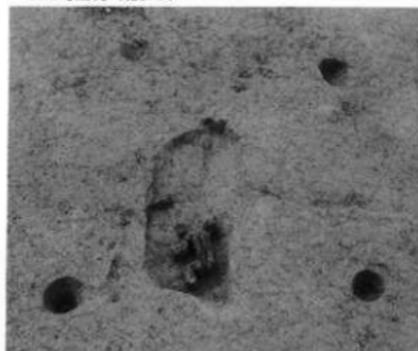
D21号土坑（南より）



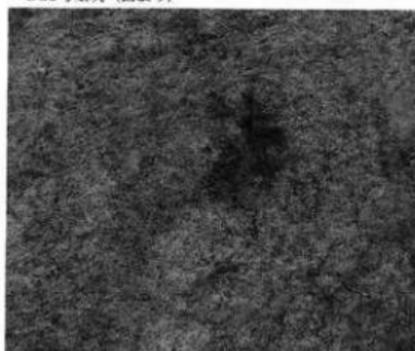
D22号土坑（北より）



D23号土坑（西より）



D24号土坑（西より）



D25号土坑（南より）



D26号土坑 (南より)



D27号土坑 (南西より)



D28号土坑 (南より)



D30号土坑 (西より)



D31号土坑 (南より)



D32号土坑 (西より)



M1号溝状遺構全景（南より・丘陵先端に巡る溝がM1号）



M1号溝状遺構全景（北側より・南側は調査区域外）



M1号溝状遺構全景（垂直・写真上方向が北）

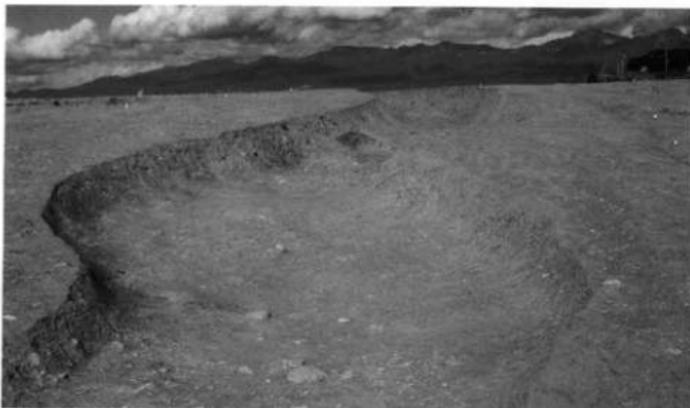


M1号溝状遺構全景（東より・尾根方向に走るのはM2号溝状遺構）

M1号溝状遺構
(尾根切断部)



M1号溝状遺構
(南側斜面部分)



M1号溝状遺構
(南側斜面部分)





M1号溝状遺構
(尾根先端部分)



M1号溝状遺構
(北側斜面部分)



M1号溝状遺構
(尾根切断部分
覆土堆積状況)

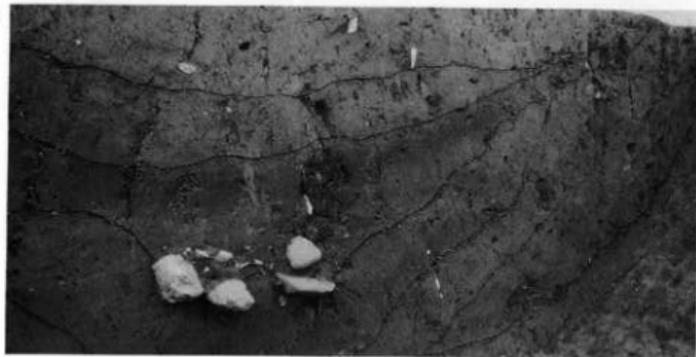
M1号溝状遺構
(遺物出土状況)



M1号溝状遺構
(遺物出土状況)



M1号溝状遺構
(覆土堆積状況)

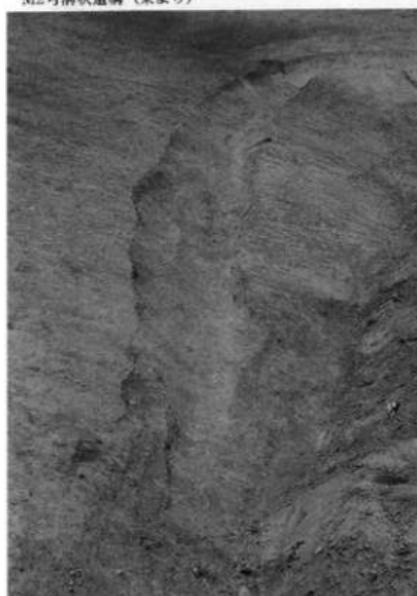




M2号溝状遺構 (東より)



M3・4号溝状遺構 (西より)



M6号溝状遺構 (西より)



M10号溝状遺構 (南より)

後家山2号墳
(調査前)
(北東より)



後家山2号墳
(表土除去)
(北東より)



後家山2号墳
周溝検出状況
(南より)





後家山2号墳周溝完備状況（東より）



周溝内礎出土状況



周溝内遺物出土状況



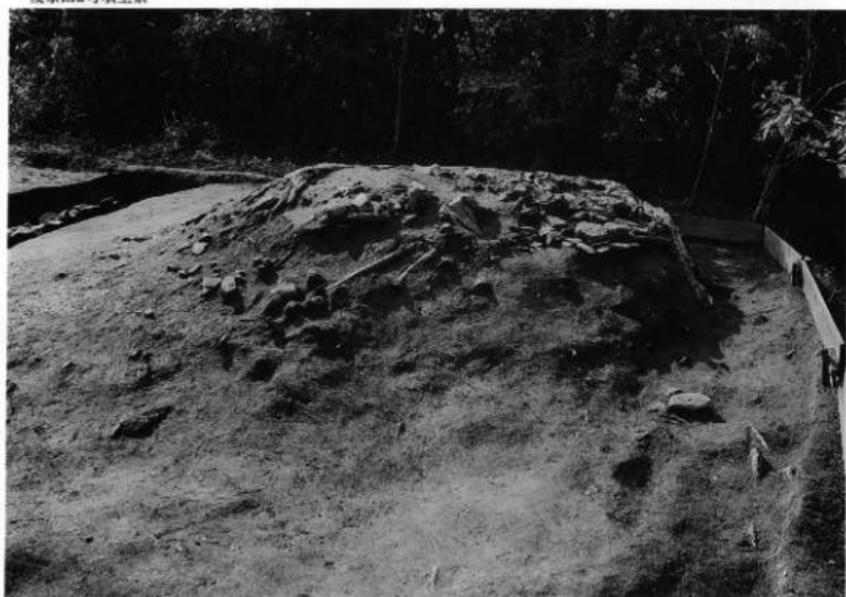
墳丘検出状況（西から）



墳丘上樹木状施設（北より）



後家山2号墳全景



後家山2号墳石室検出状況（北より）



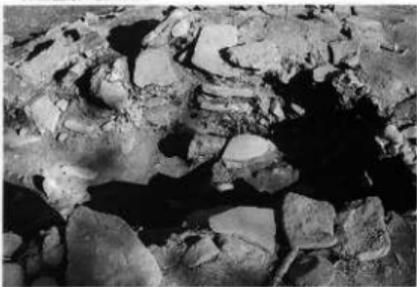
石室検出状況（西より）



石室全景（西より）



石室東壁状況



石室北壁状況



石室南壁状況



石室西側部分検出状況



後家山2号墳石室掘り方全景



後家山2号墳石室掘り方近景



後家山2号墳墳丘削平状況（東より）



後家山2号墳墳丘盛土状況（西より）



塚 (OT2)全景



調査前風景 (東より)



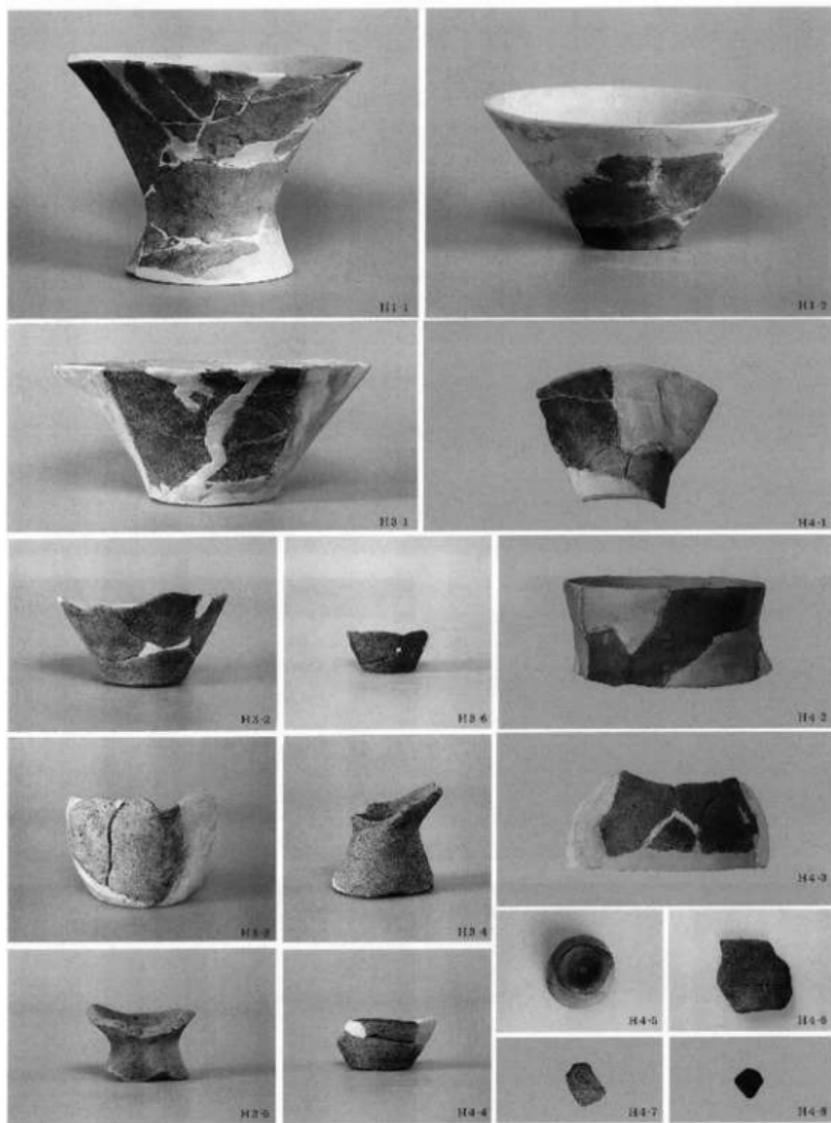
東側掘検出状況



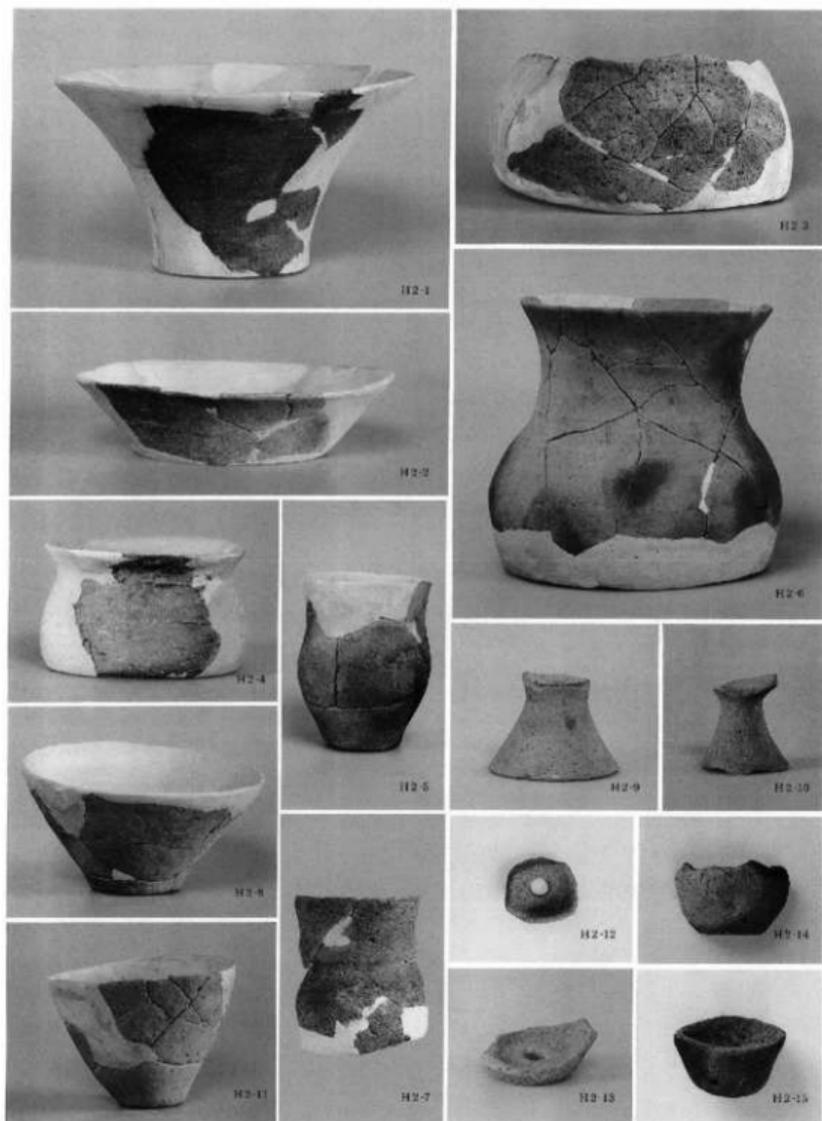
盛土状況 (北側より)



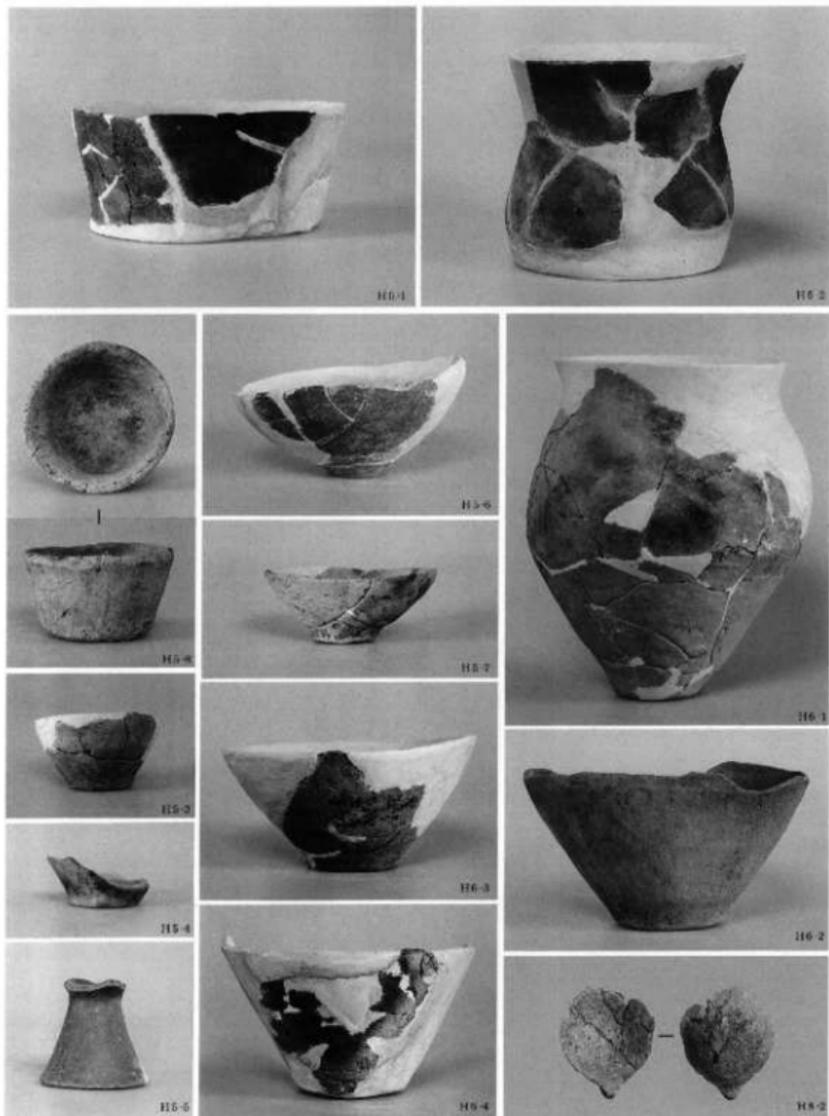
盛土状況 (東より)



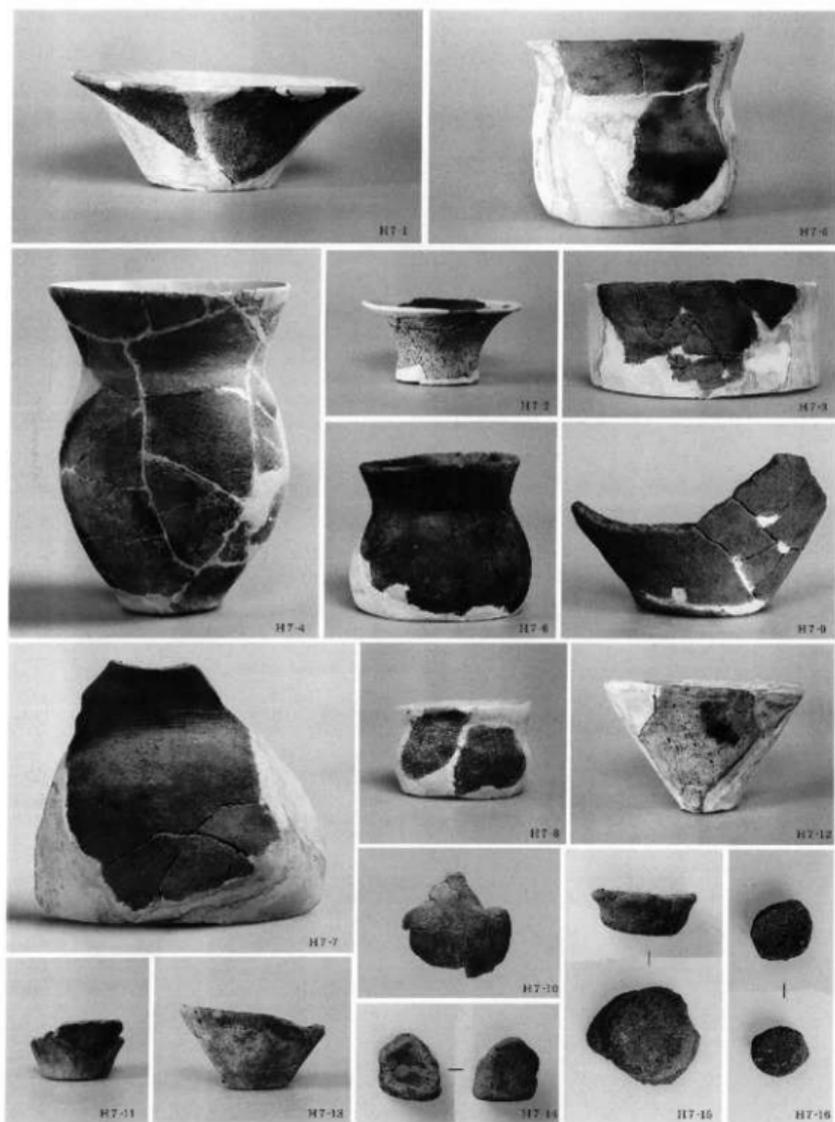
H1・H3・H4 出土遺物



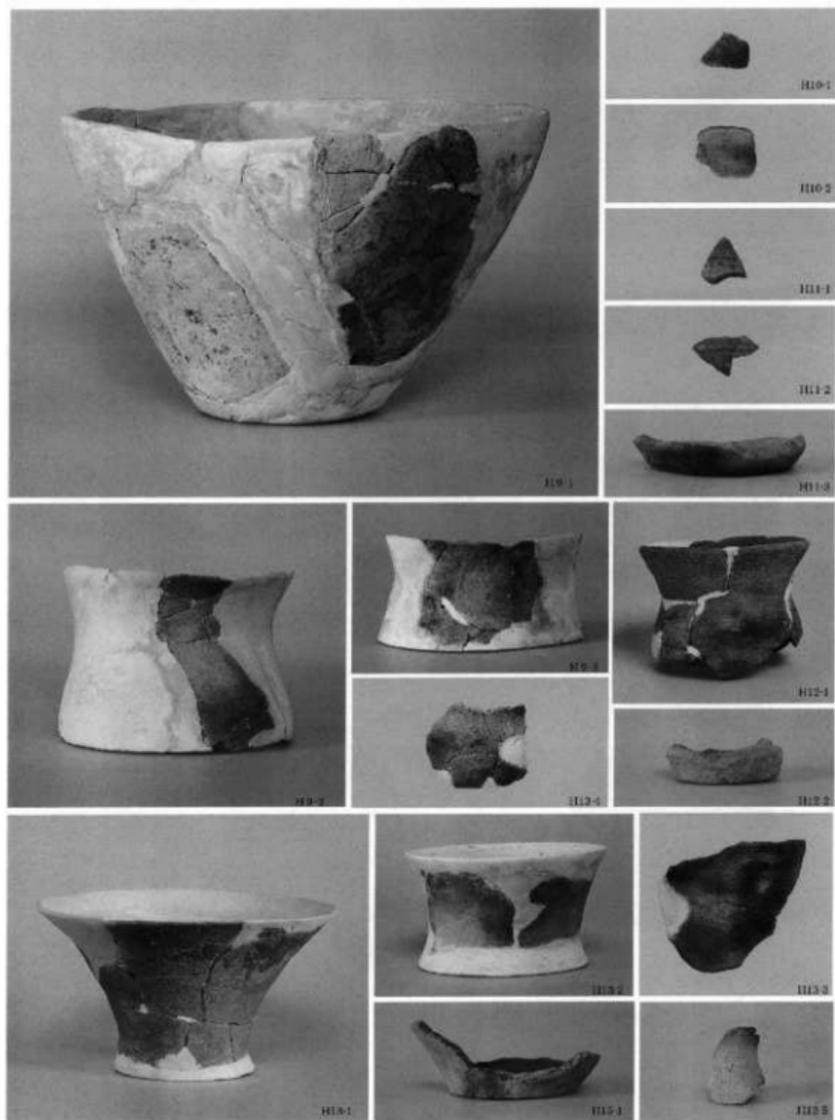
H2 出土遺物



H5・H6・H8 出土遺物



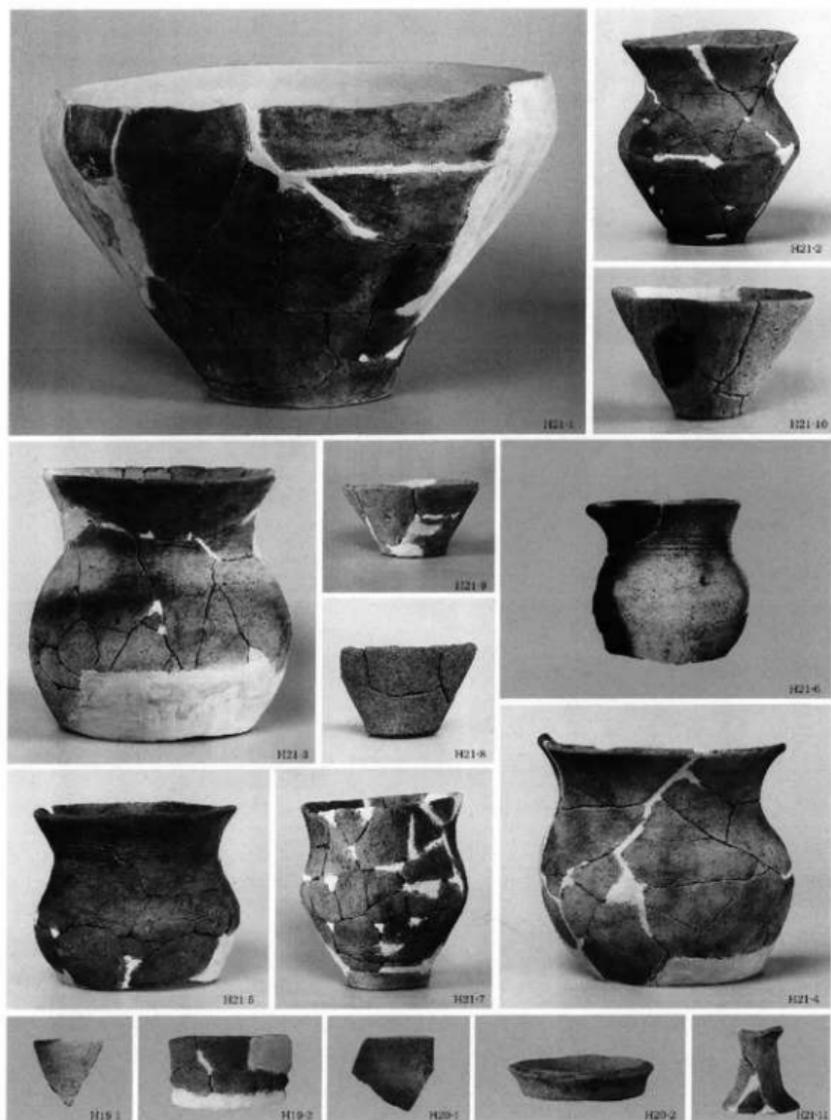
H7 出土遺物



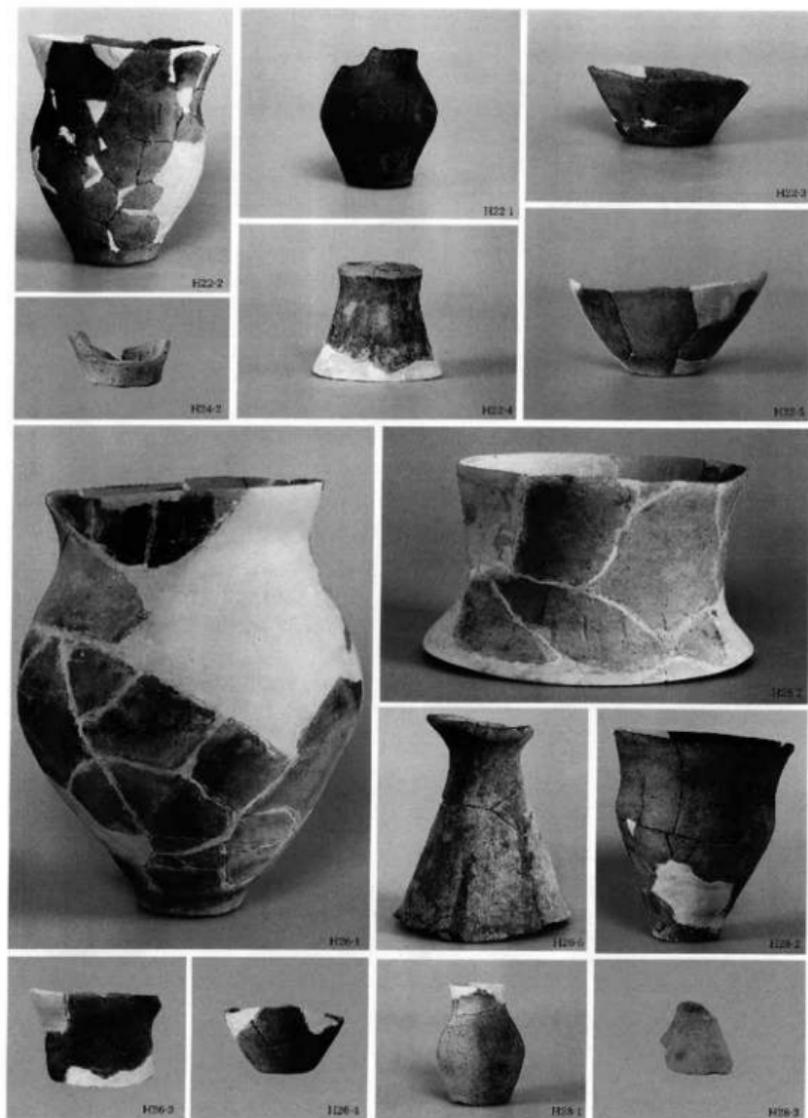
H9~H13・H15 出土遺物



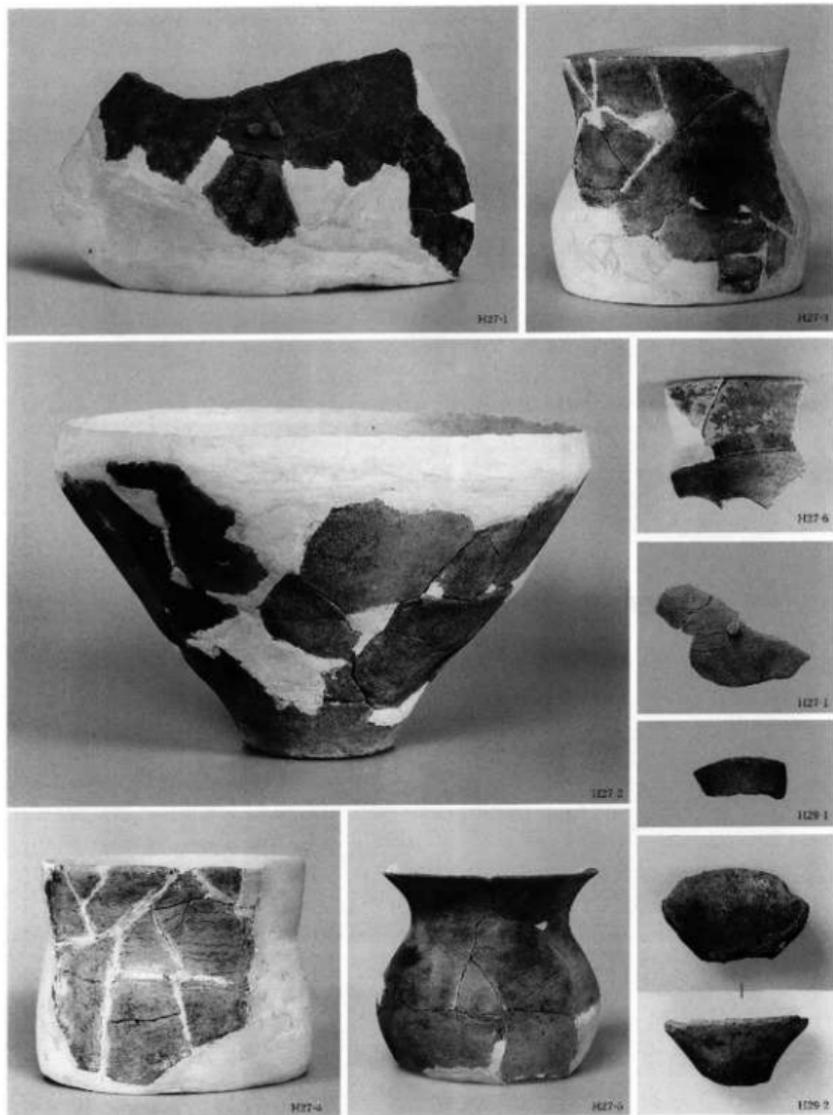
H14・H16・H18 出土遺物



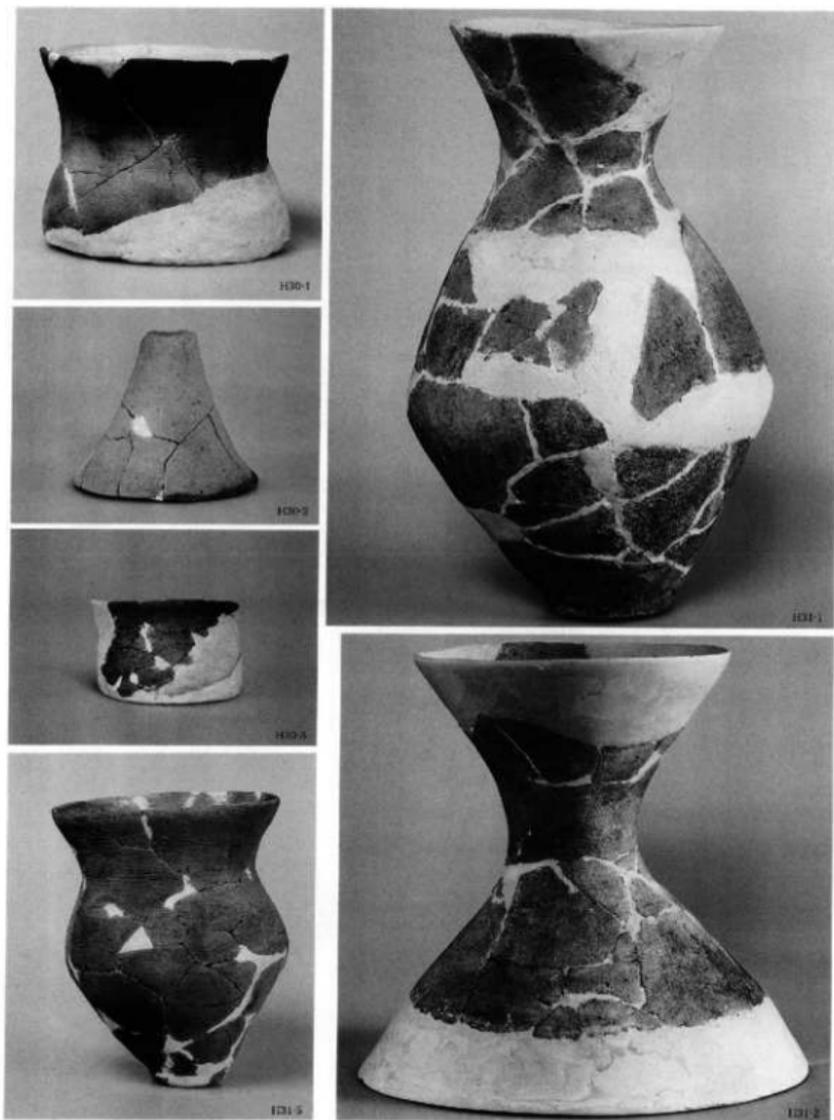
H19~H21 出土遺物



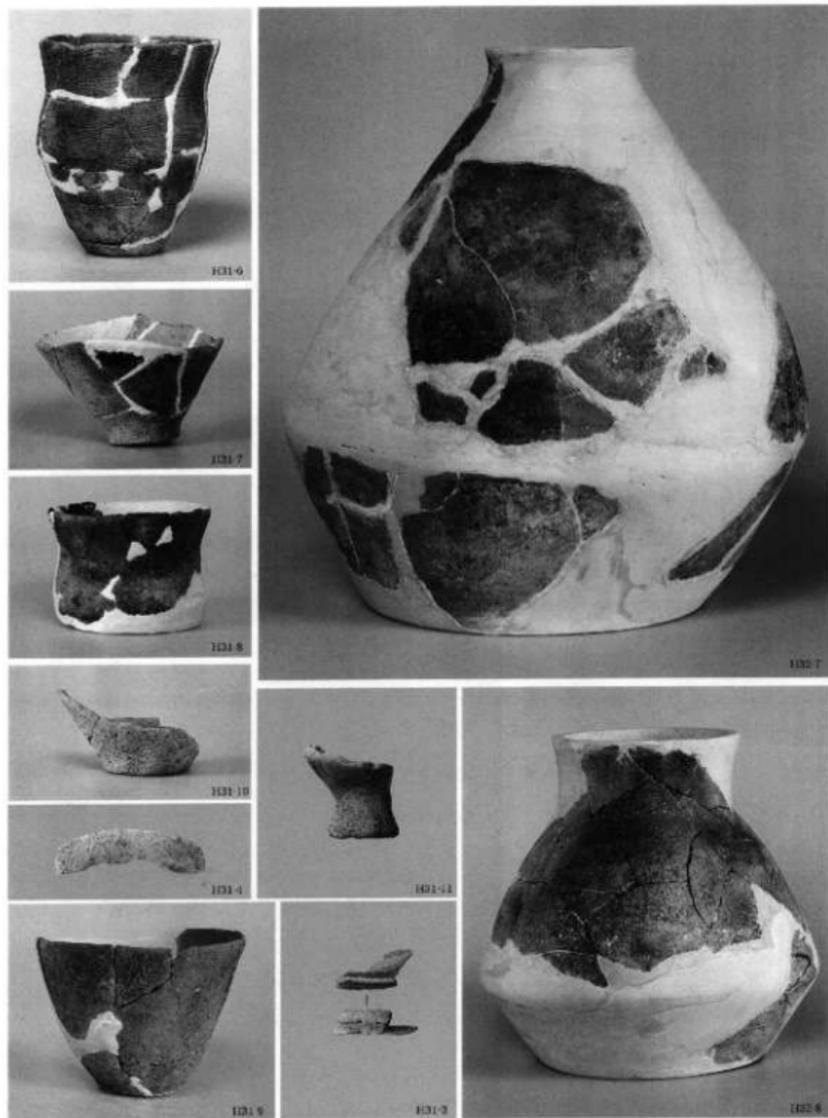
H22・H24・H26・H28 出土遺物



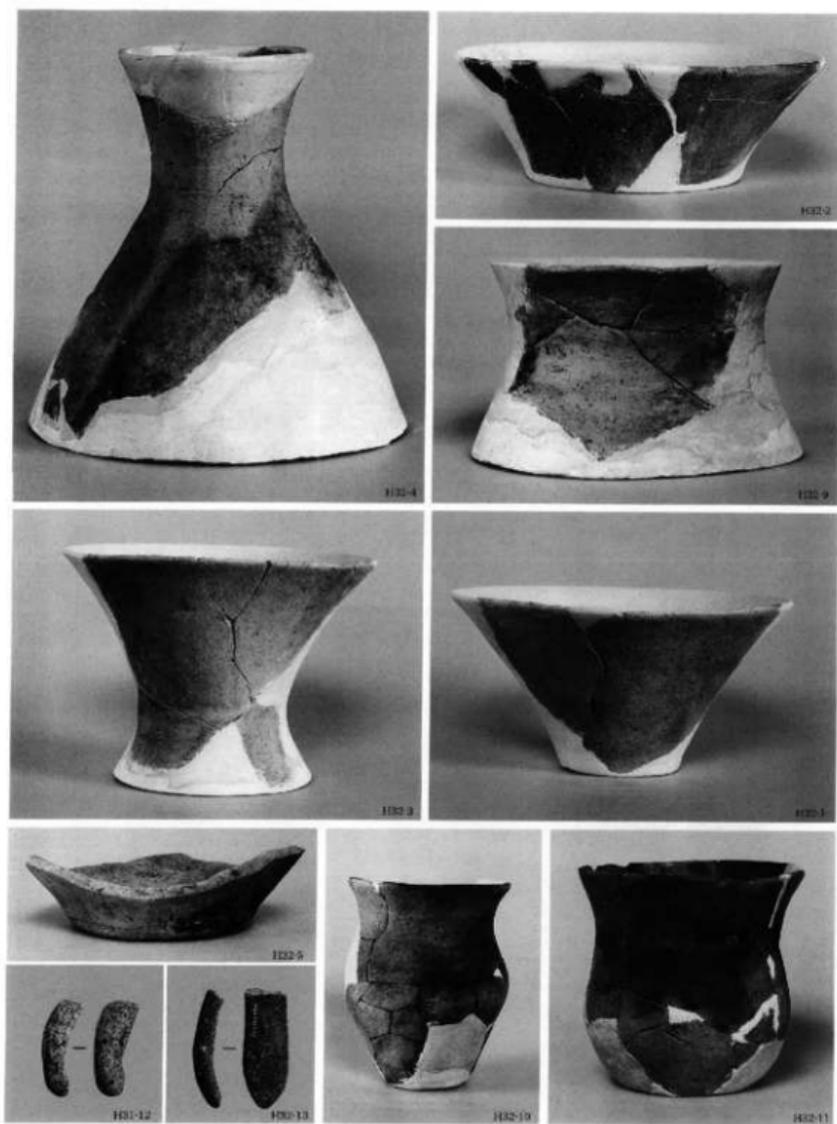
H27・H29 出土遺物



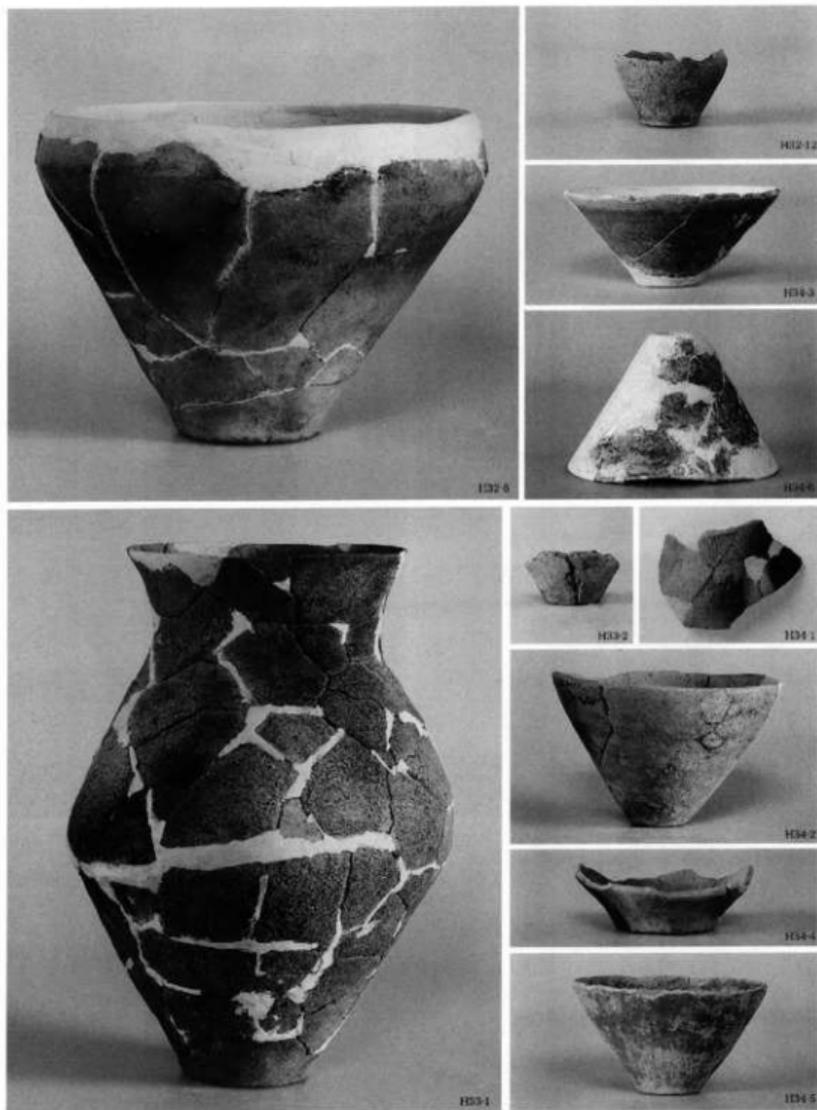
H30・H31 出土遺物



H31・H32 出土遺物



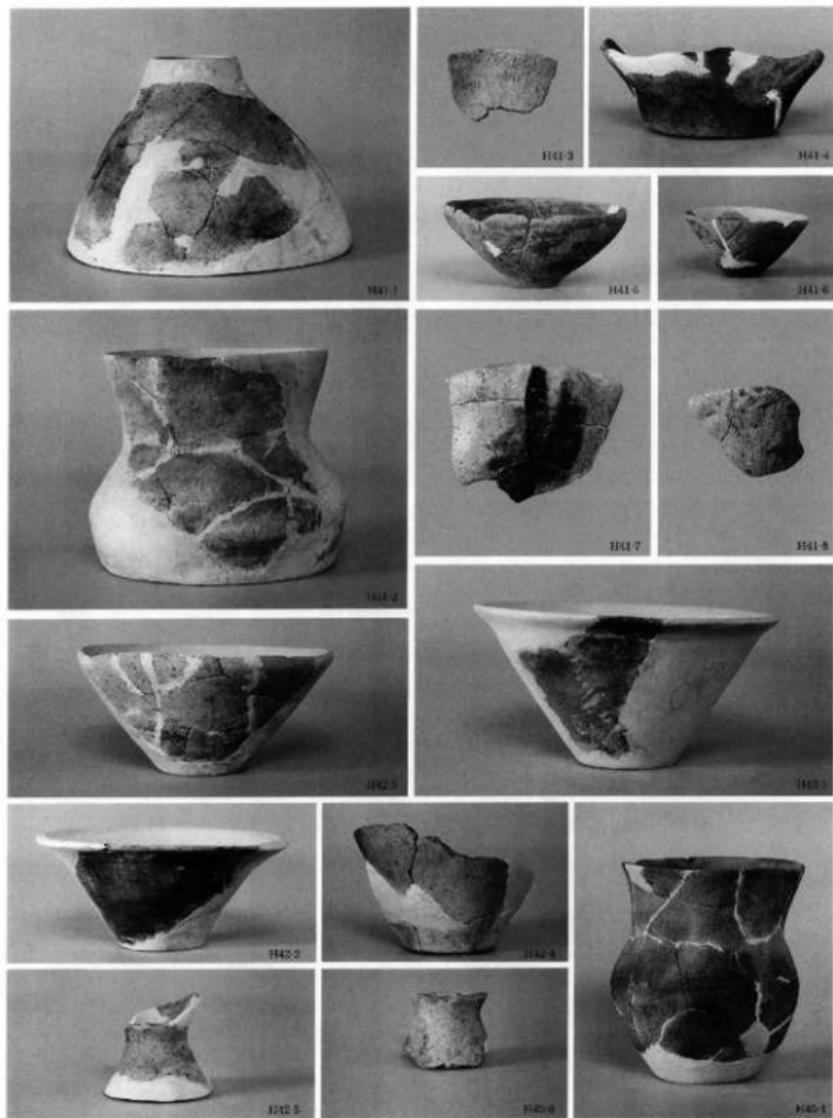
H31・H32 出土遺物



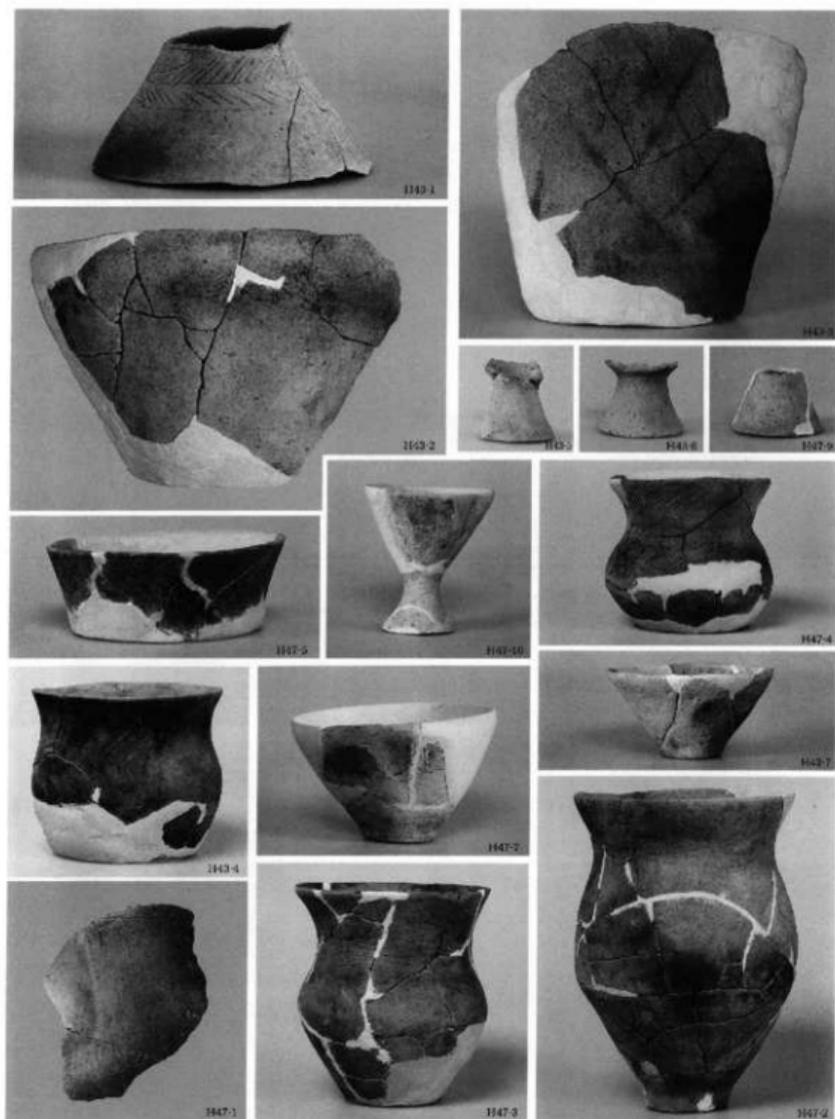
H32~H34 出土遺物



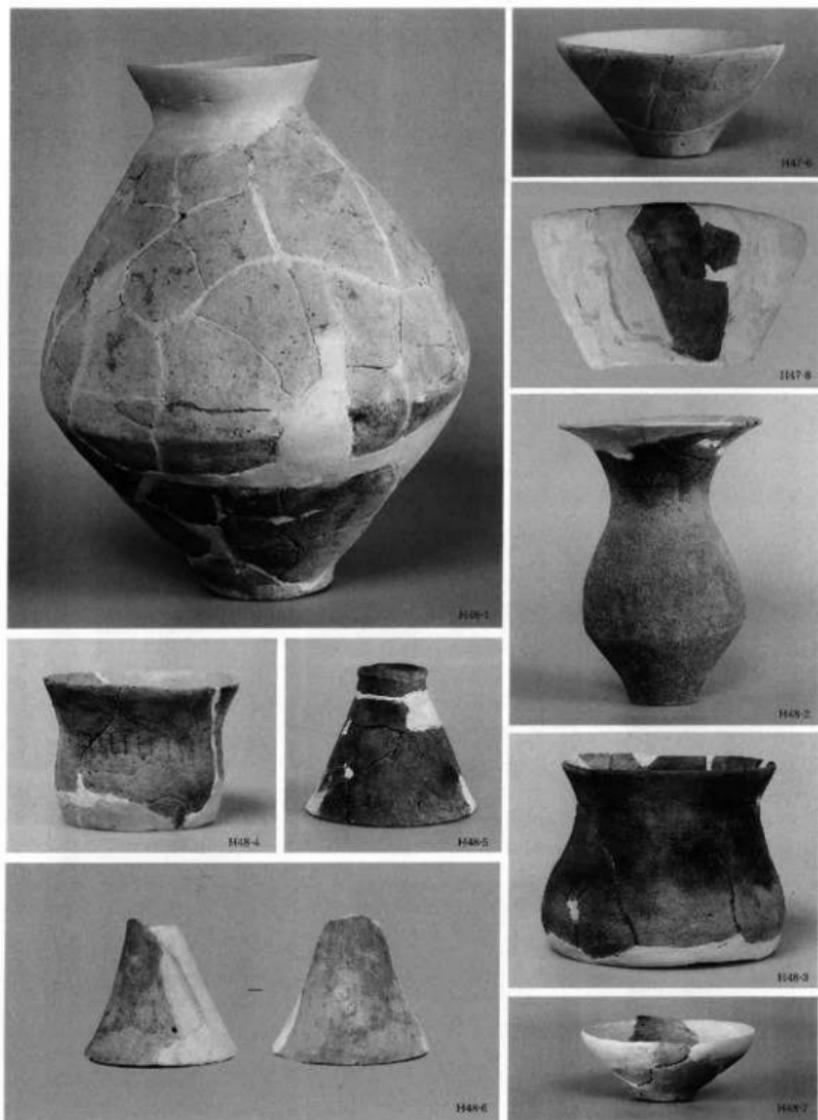
H35~H38 出土遺物



H41・H42・H45 出土遺物



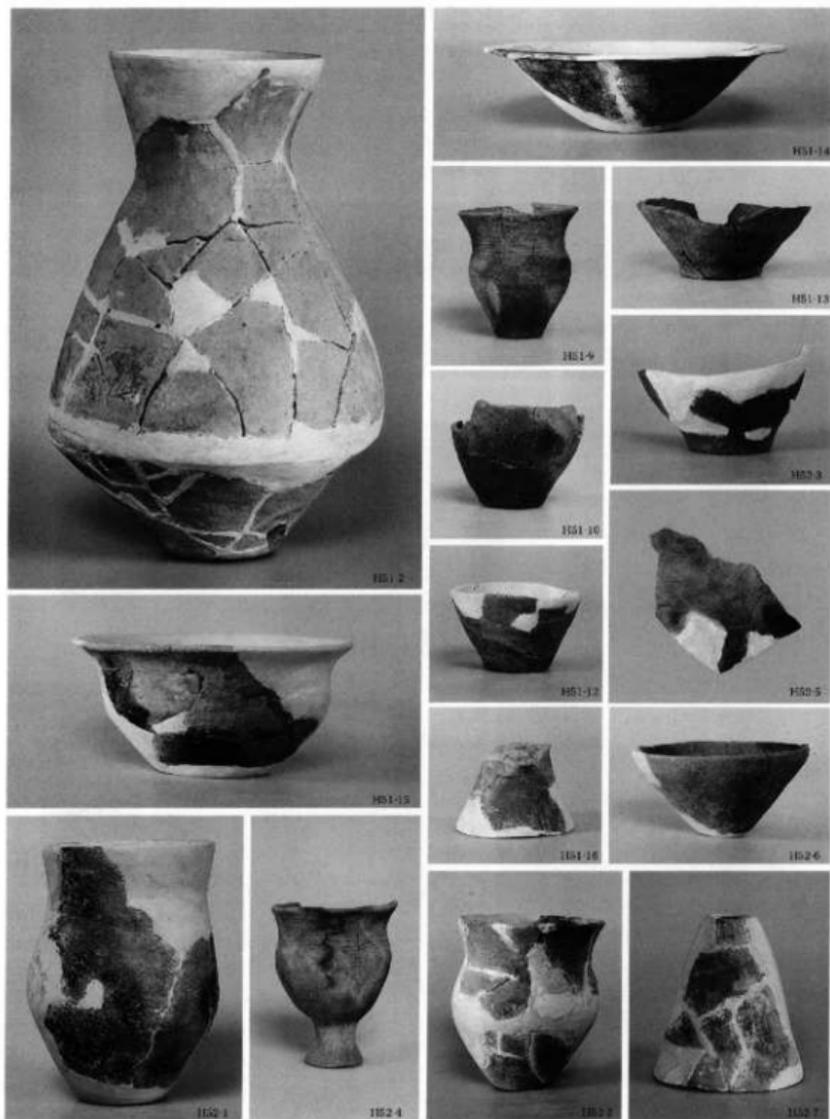
H43・H47 出土遺物



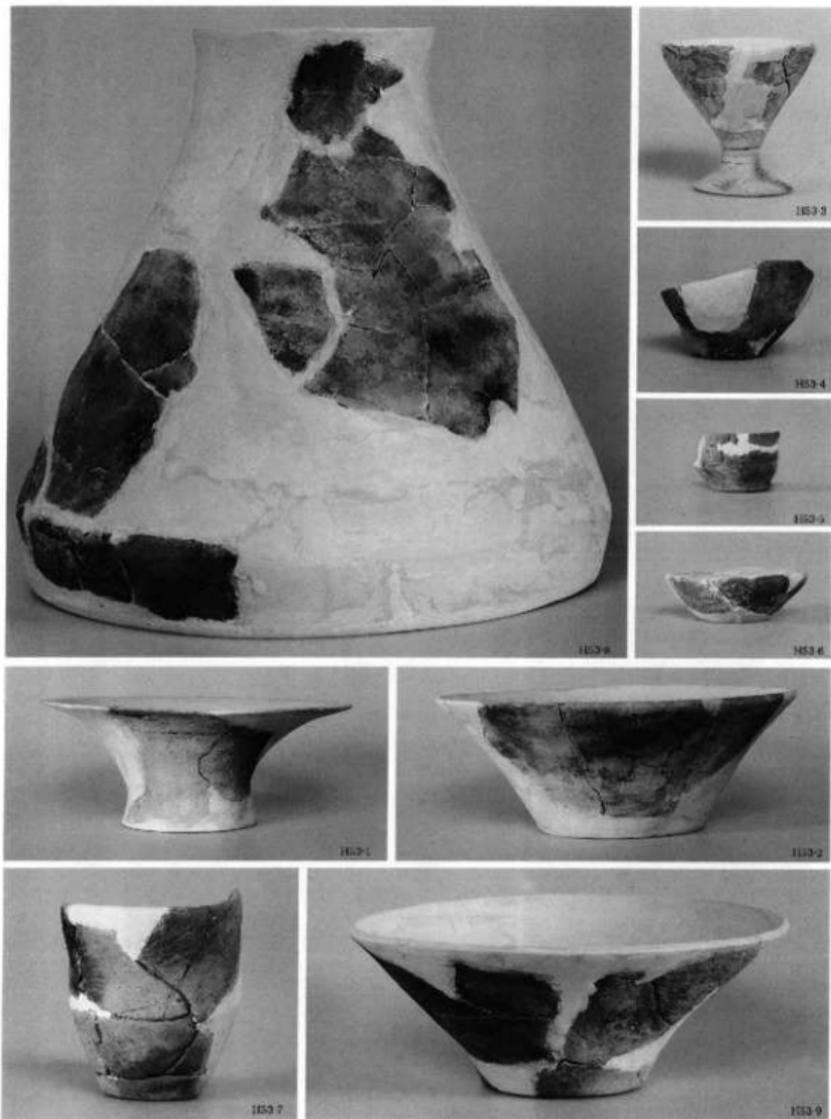
H47・H48 出土遺物



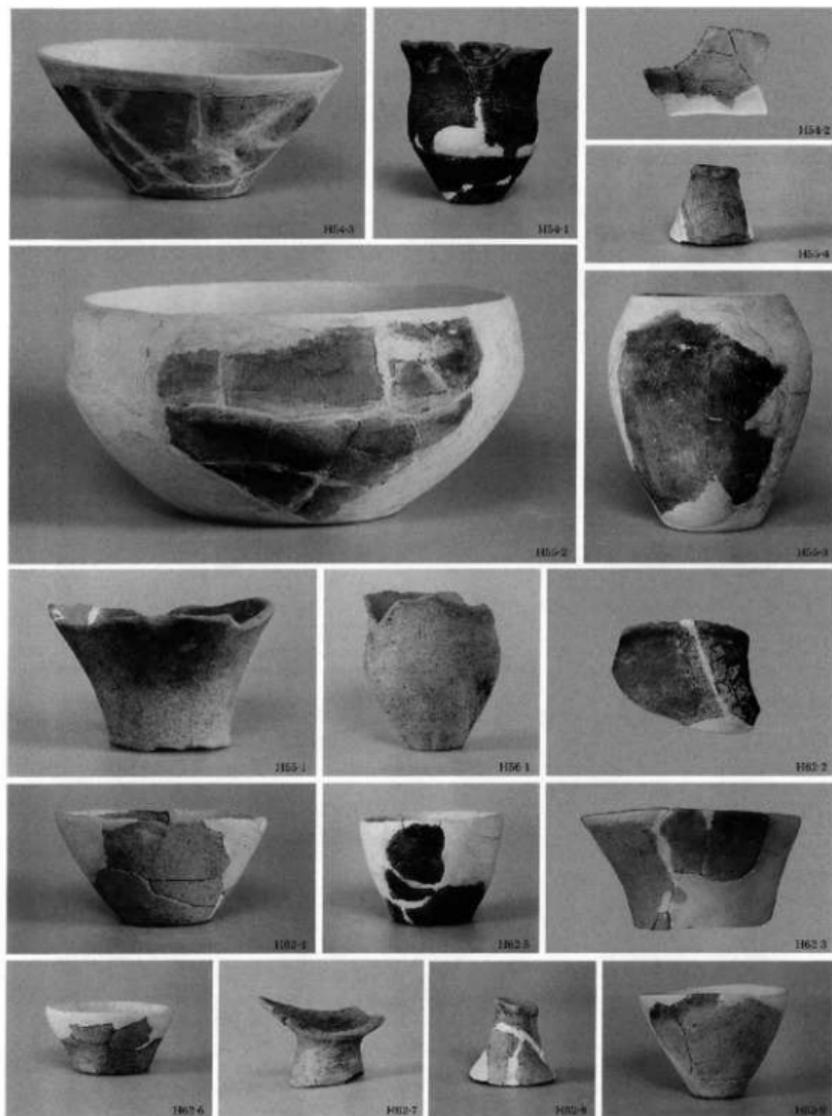
H49~H51 出土遺物



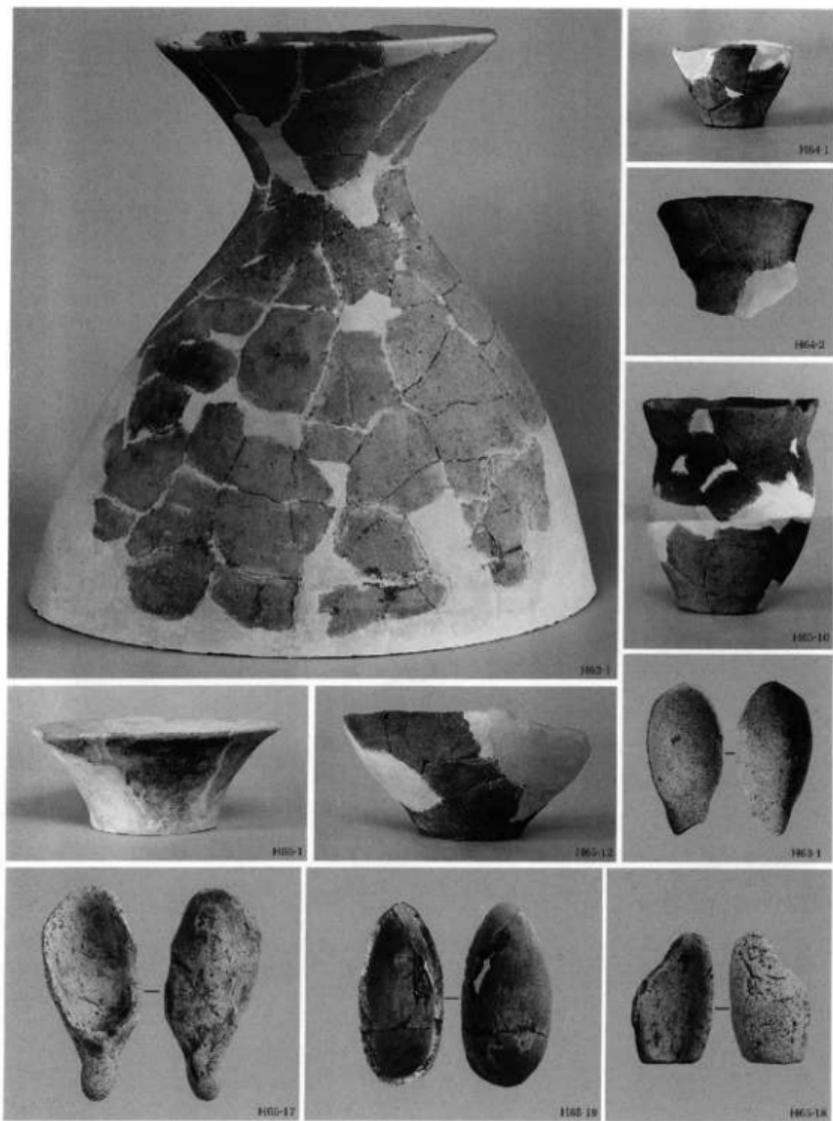
H51・H52 出土遺物



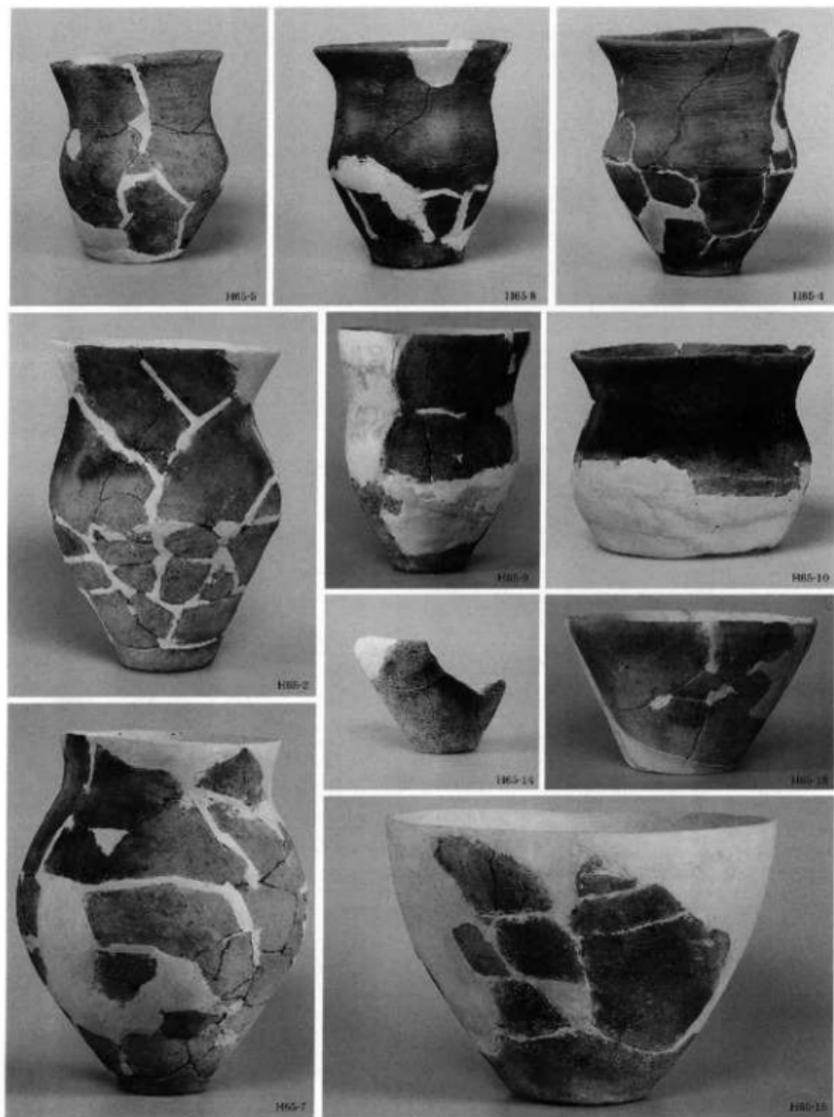
H53 出土遺物



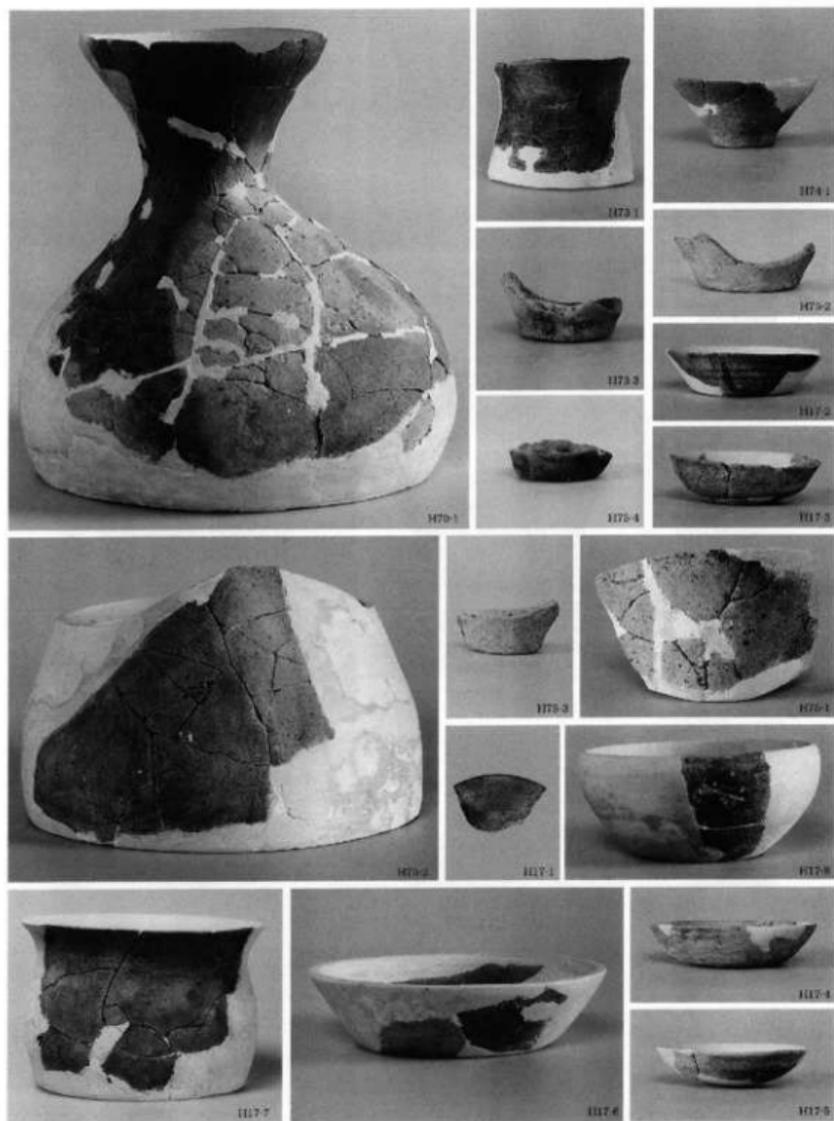
H54~H56・H62出土遺物



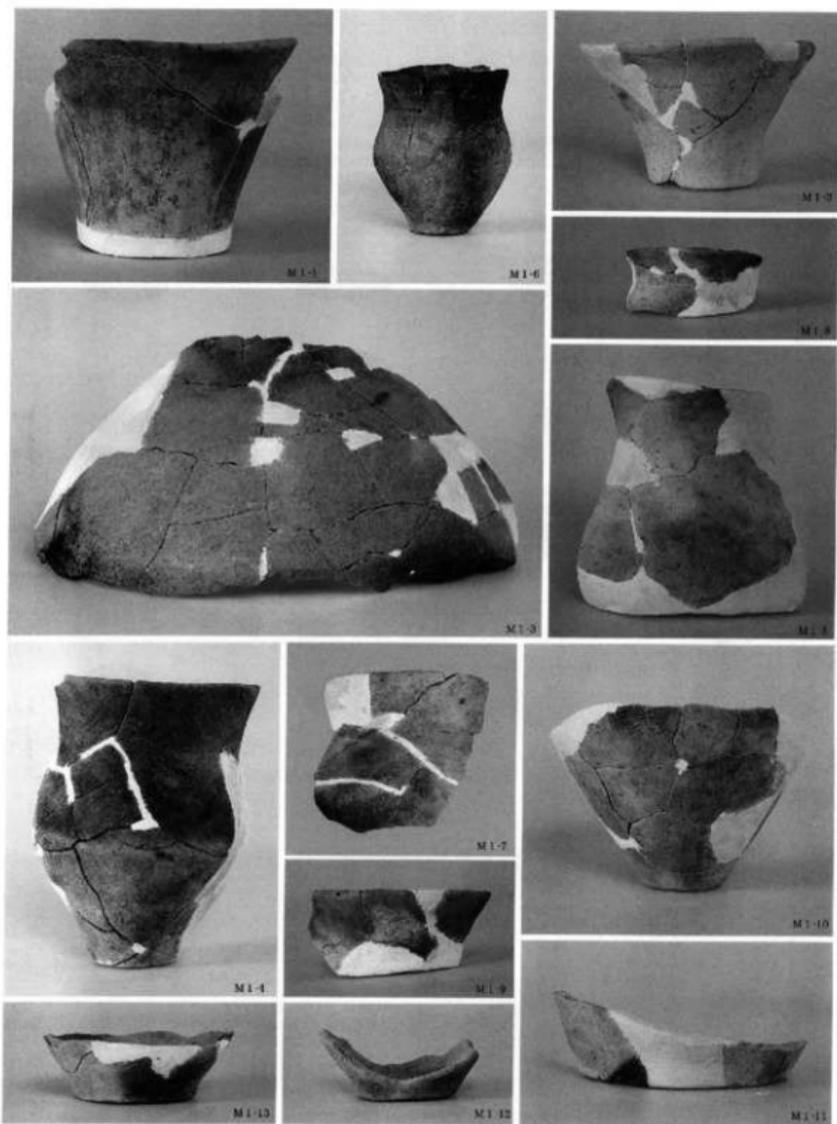
H62~H65 出土遺物



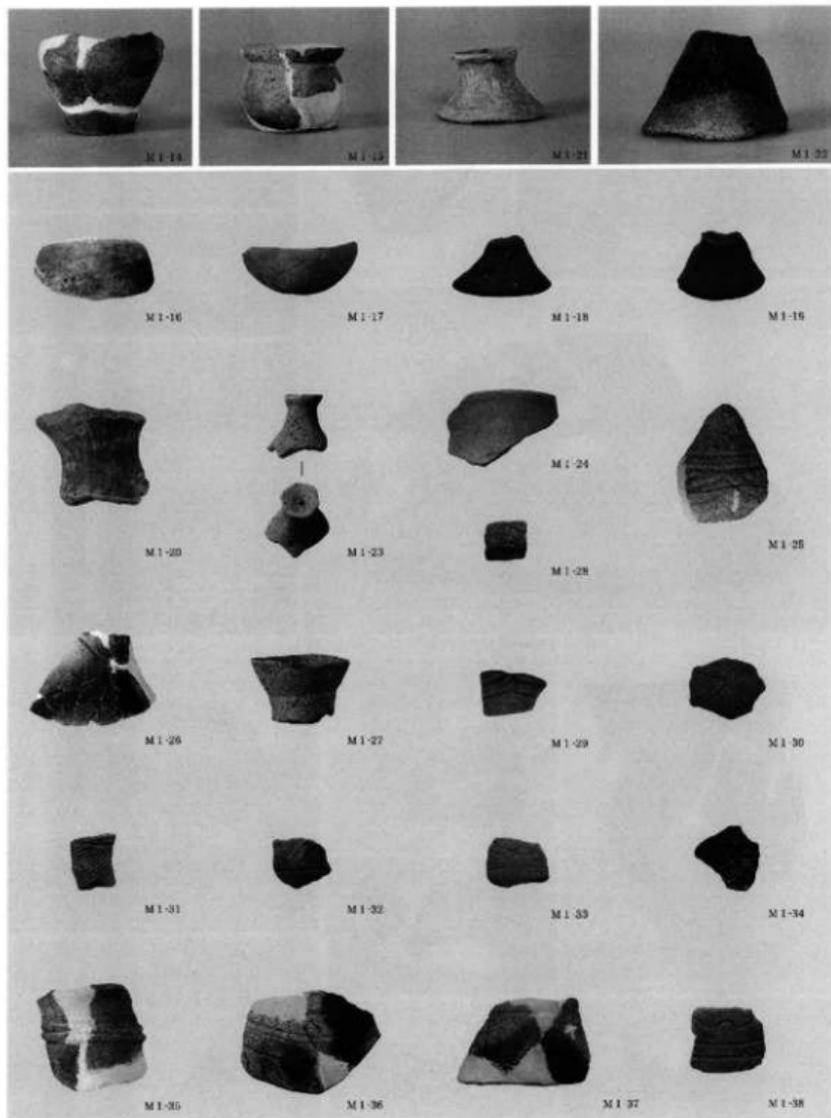
1165 出土遺物



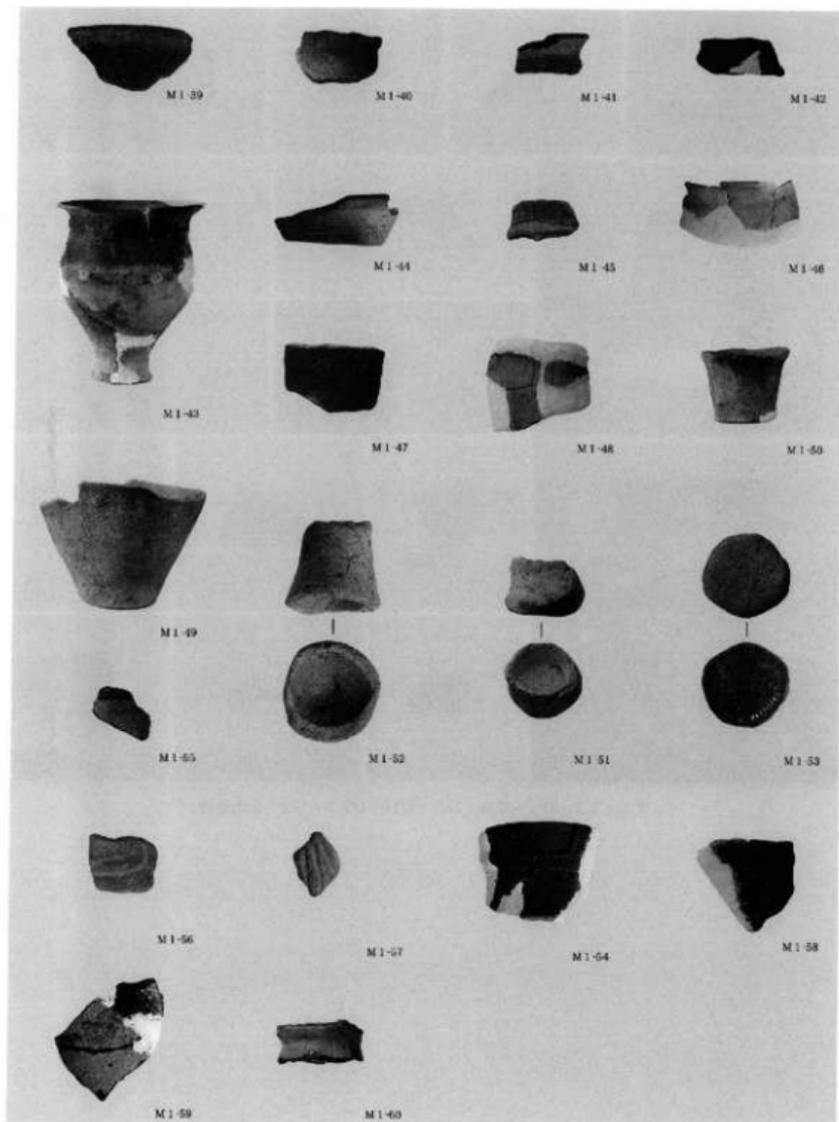
H17・H170・H173~H175 出土遺物



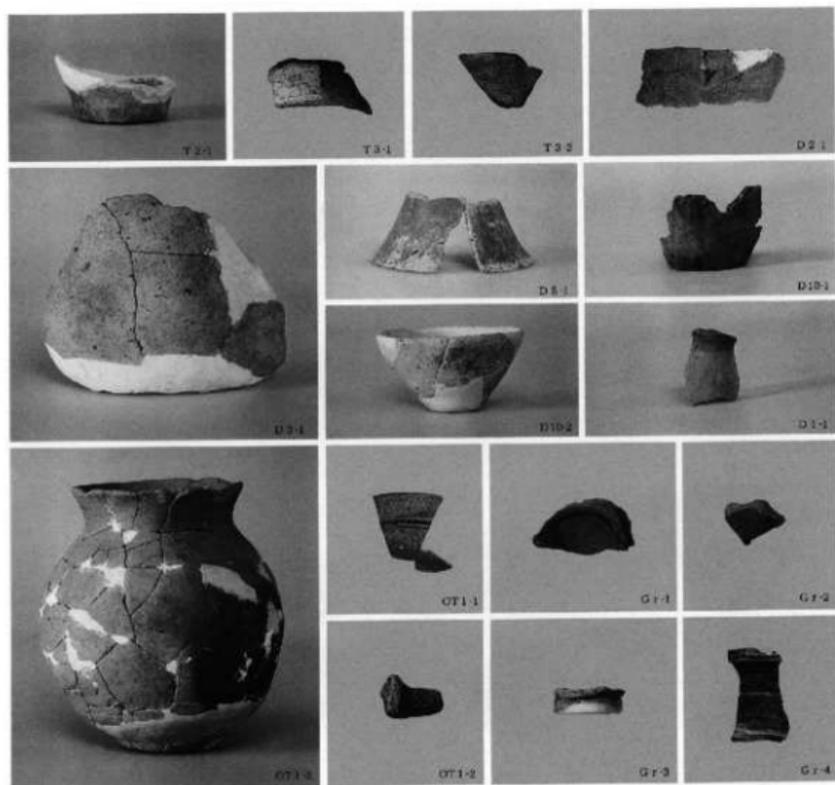
M1 出土遺物



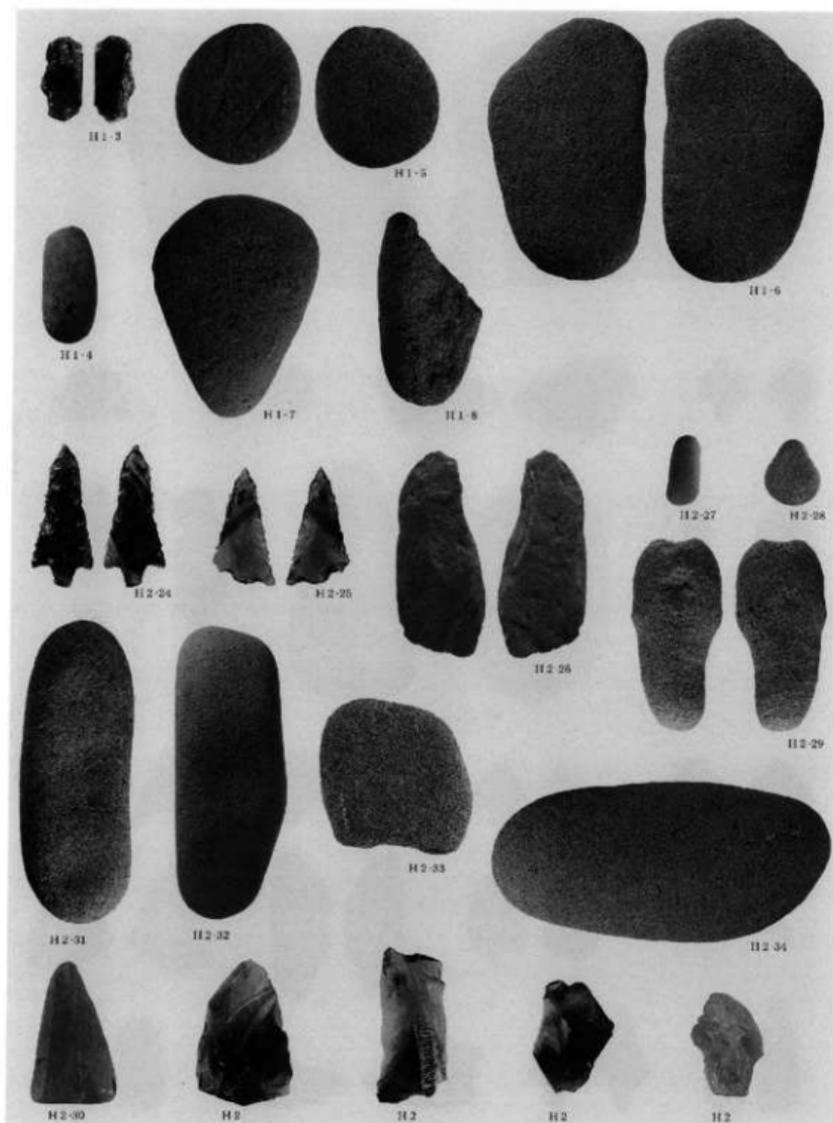
M1 出土遺物



M1 出土遺物



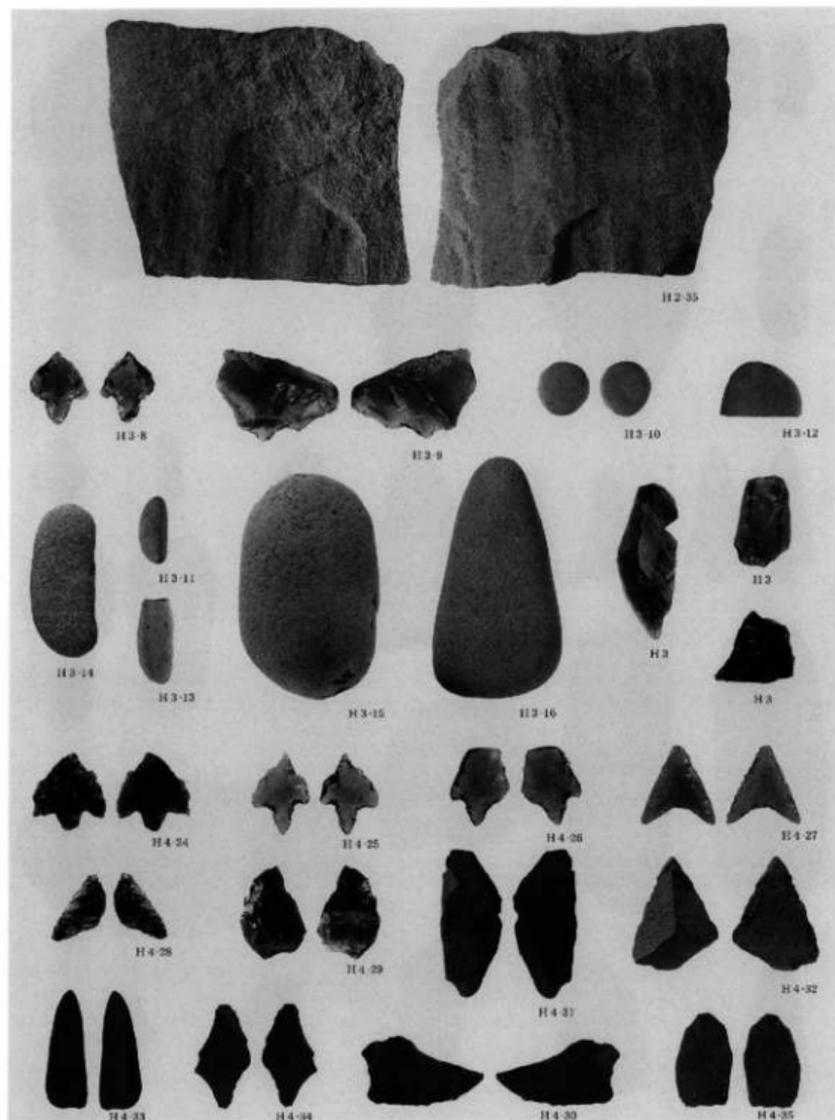
T2・T3・D1～D3・D5・D10・OT1・Gr 出土遺物



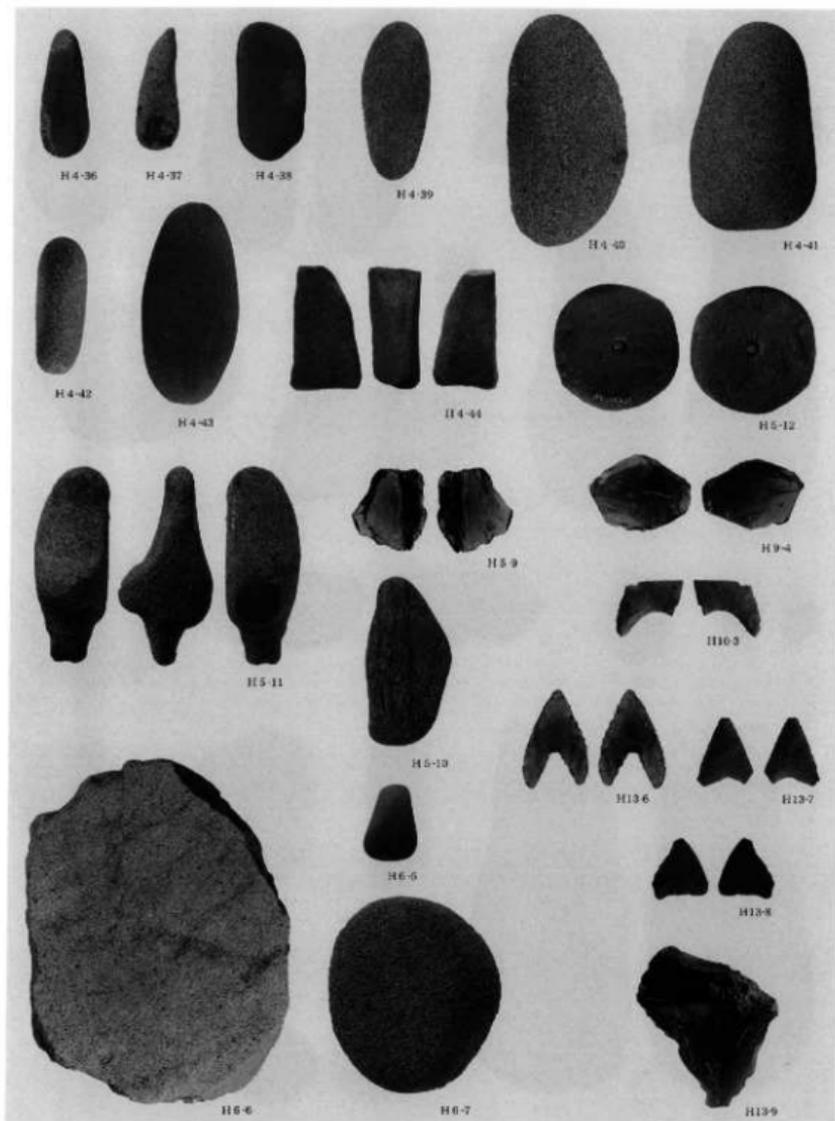
H1・H2出土遺物

(1・3) H1-3, H2-24・25

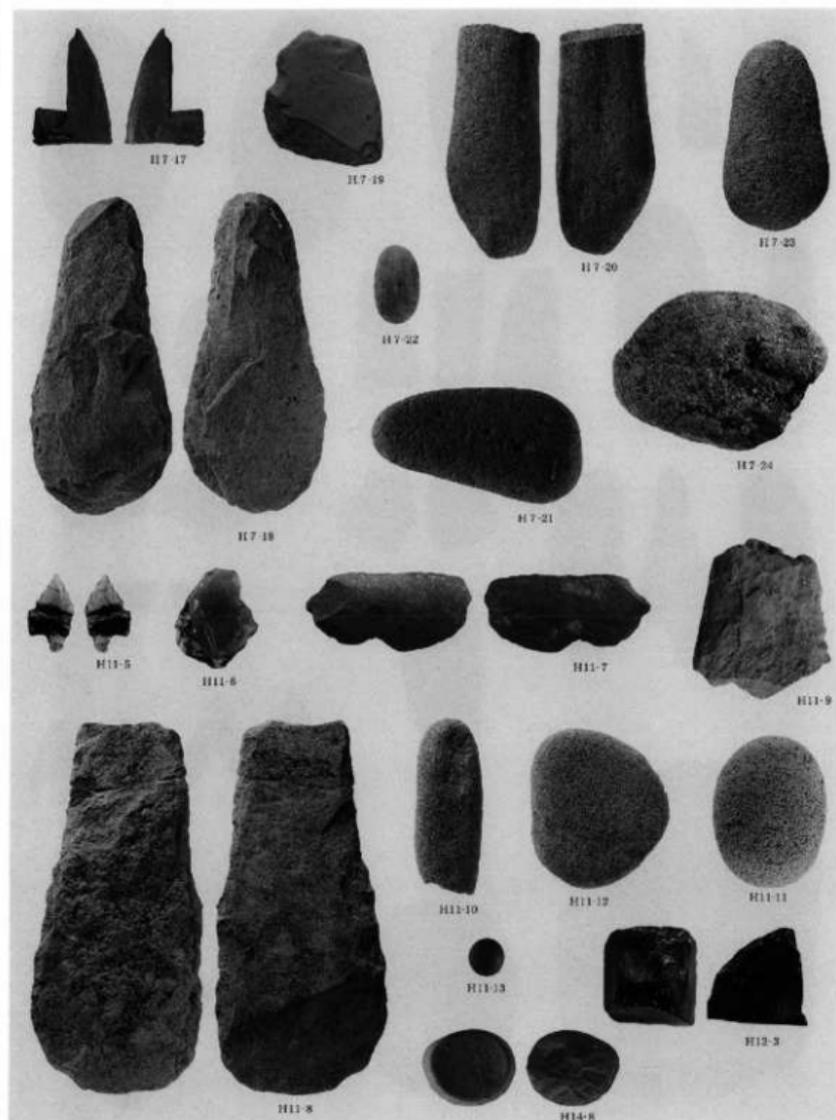
(1・3) H1-4・5・7・8, H2-26-30・33
(1・4) H1-6, H2-31・32・34



H2・H3・H4 出土遺物 (1:1) H3-8・9, H4-30~31・32 (1:2) H4-34
(1:3) H3-10~14, H4-33・35 (1:4) H3-35, H3-15・16

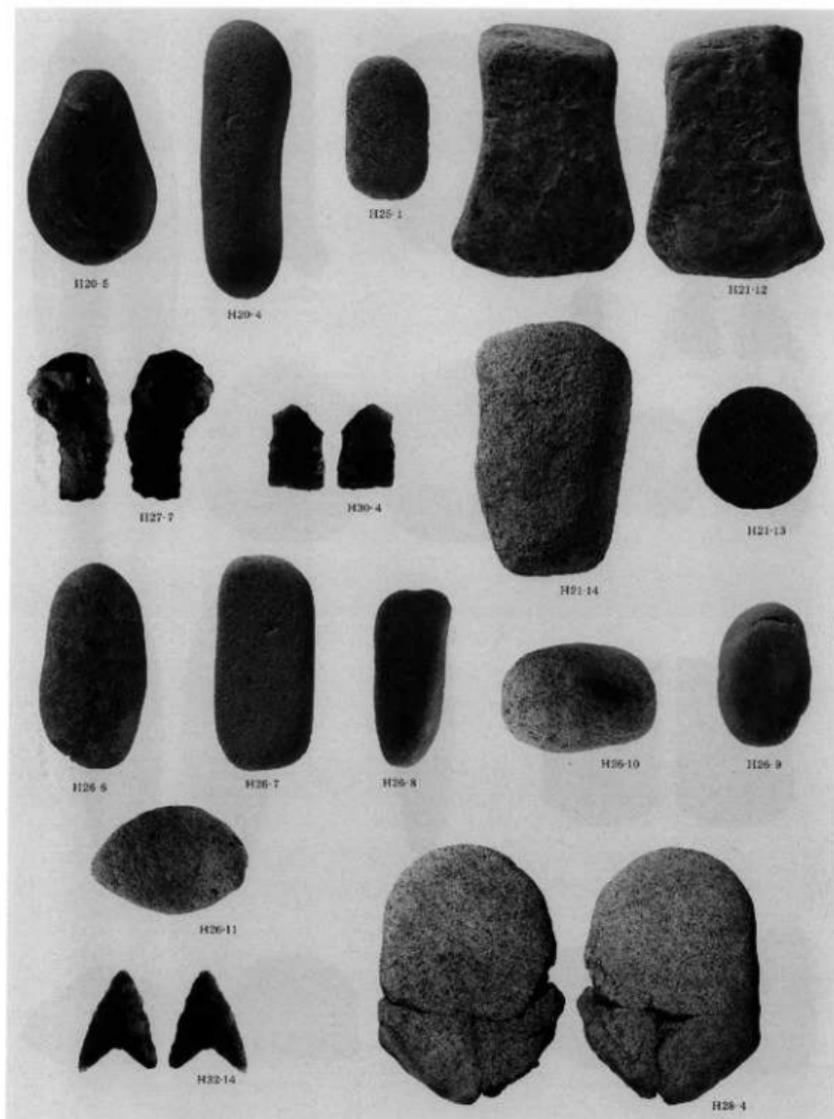


H4・H5・H6・H9・H10・H13 出土遺物 (1: 1)H9-9, H9-4, H10-3H13-6-9
 (1: 2)H5-11・12 (1: 3)H4-36-44, H5-10, H6-8
 (1: 4)H6-9・7

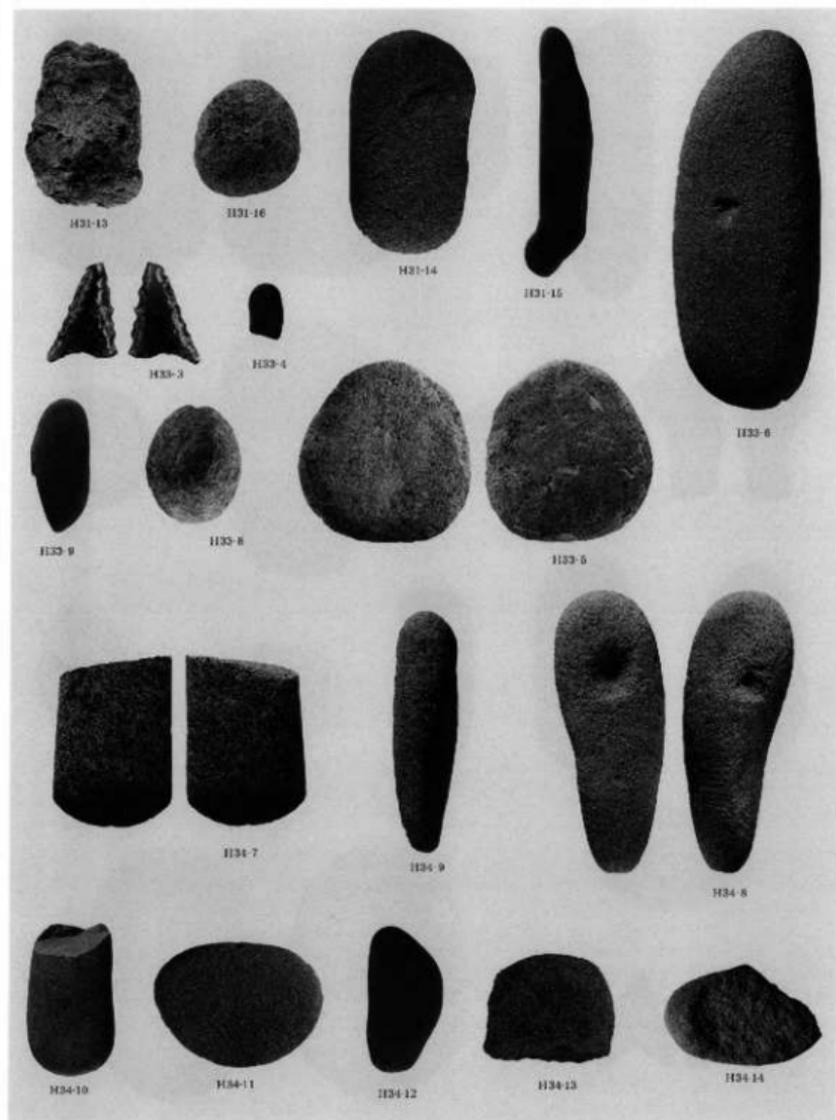


H7・H11・H12・H14 出土遺物

(1:1)H11-5・6 (1:2)H7-17, H11-13, H12-1
(1:3)H7-18-24, H11-7~12, H14-8

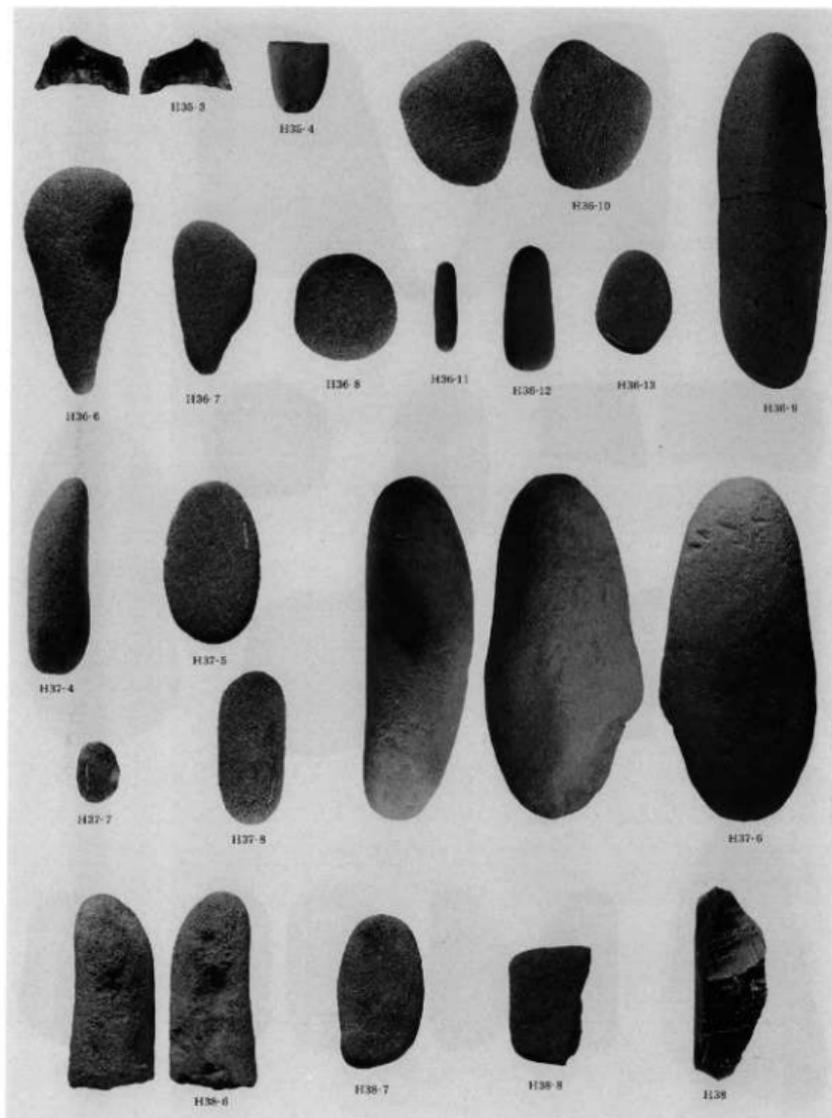


H20・H21・H25・H26・H27・H28・H30・H32 出土遺物 (1 : 1) H27-7, H30-4, H32-14 (1 : 6) H28-4
(1 : 3) H20-5, H21-12~14, H25-1, H26-6~11

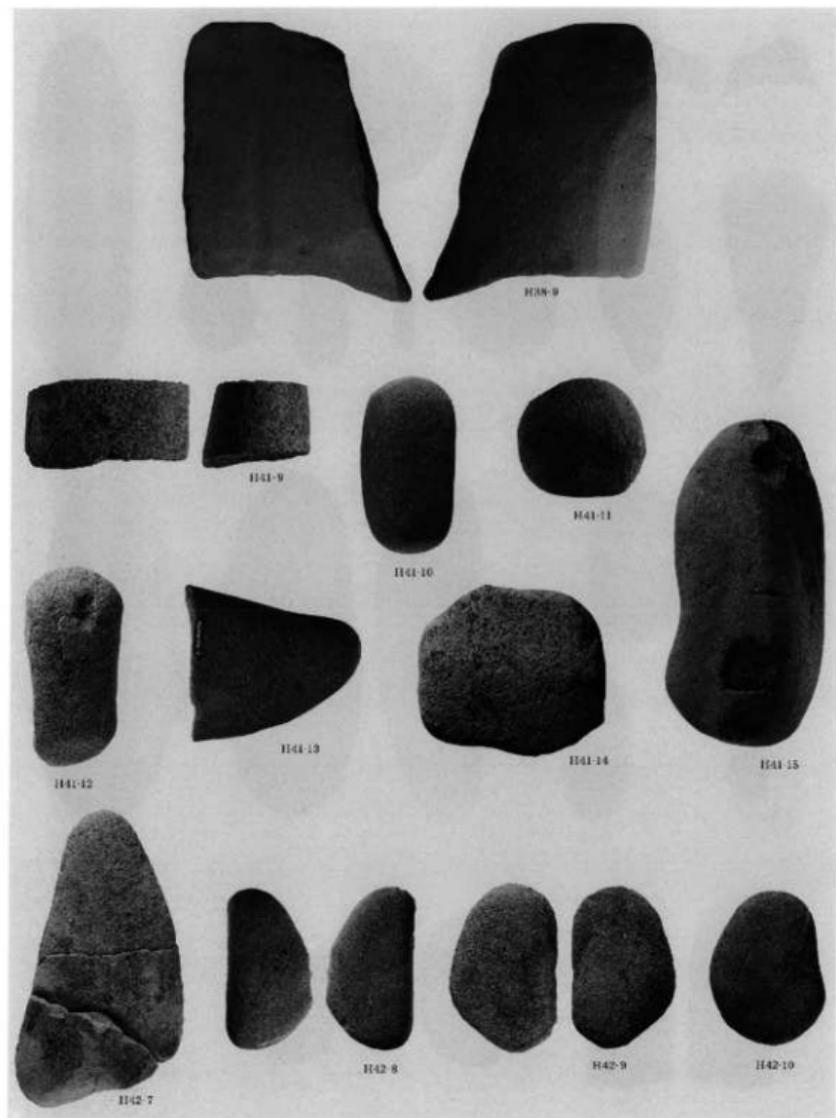


H31・H33・H34 出土遺物

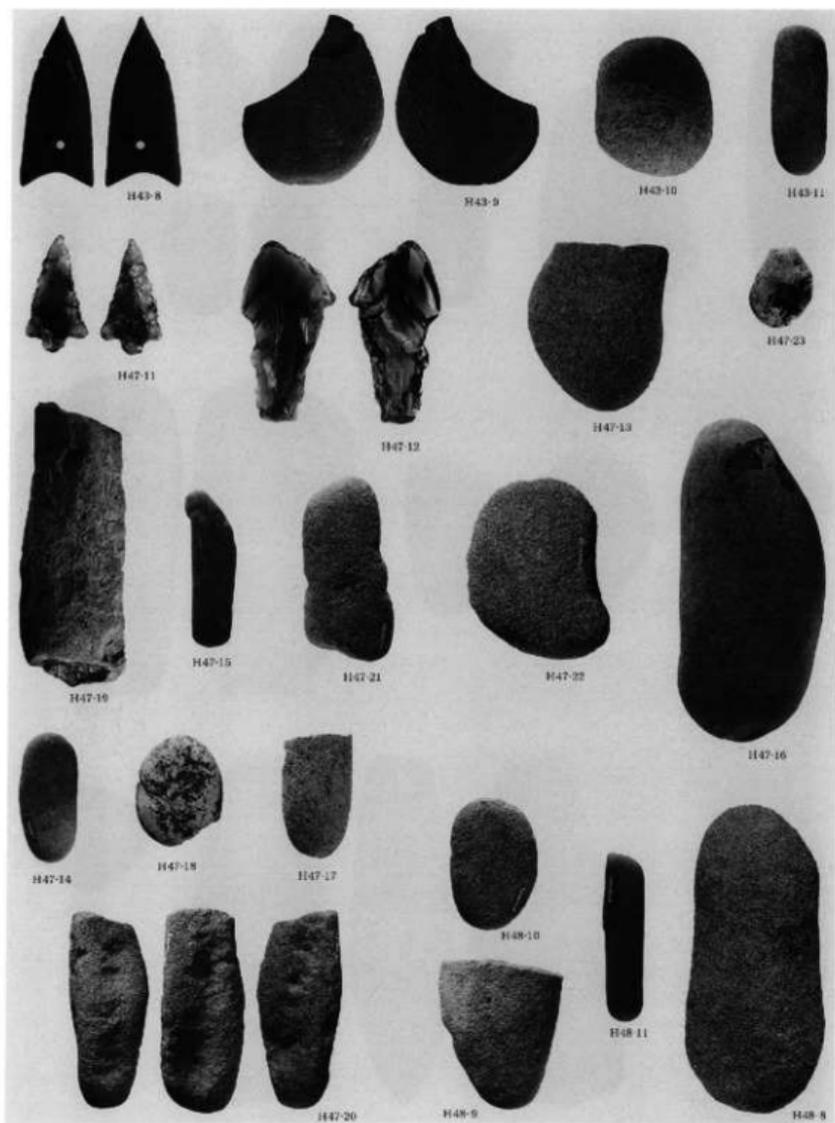
(1 : 1) H33-3 (1 : 2) H34-7
 (1 : 3) H31-13~16, H33-4~6・8・9, H34-8~14



H35・H36・H37・H38 出土遺物 (1:1) H35-3, H38 (1:4) H37-6
(1:3) H35-4, H36-6-13, H37-4・5・7-8, H38-6-8

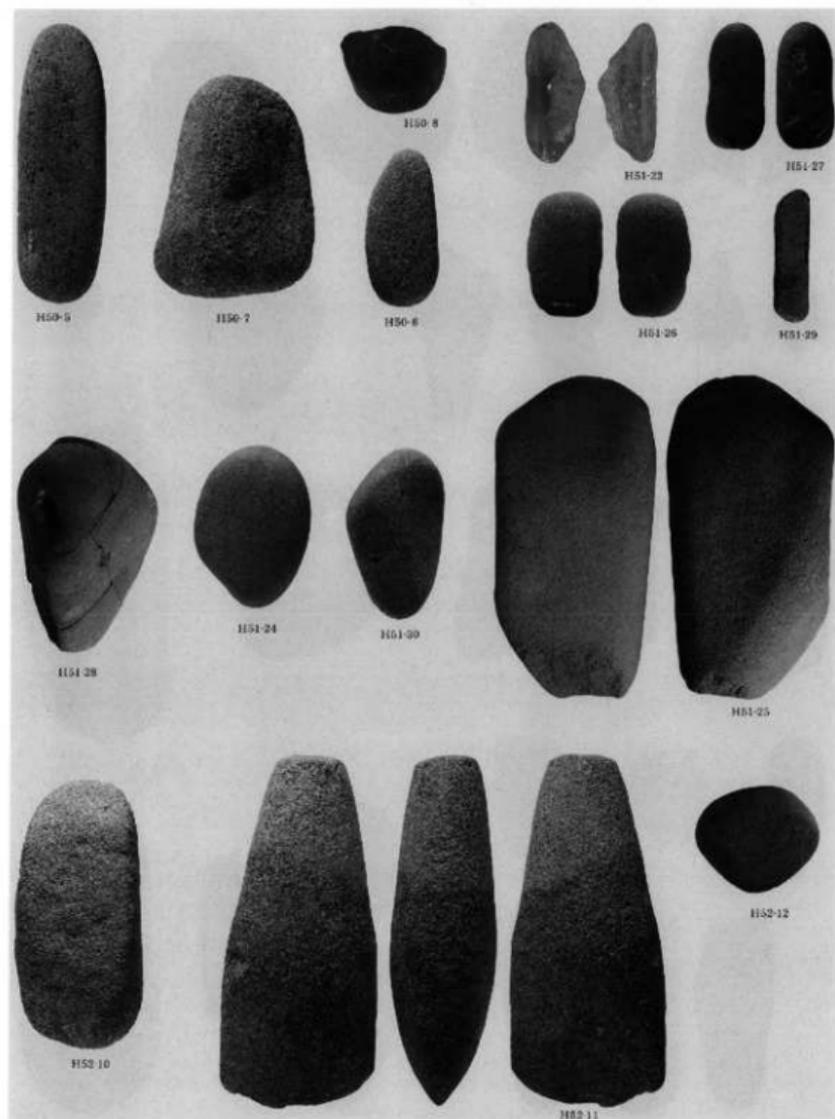


H38・H41・H42 出土遺物 (1:2) H41 9-10, (1:3) H41 11-15, H42 7-10
(1:6) H38 9



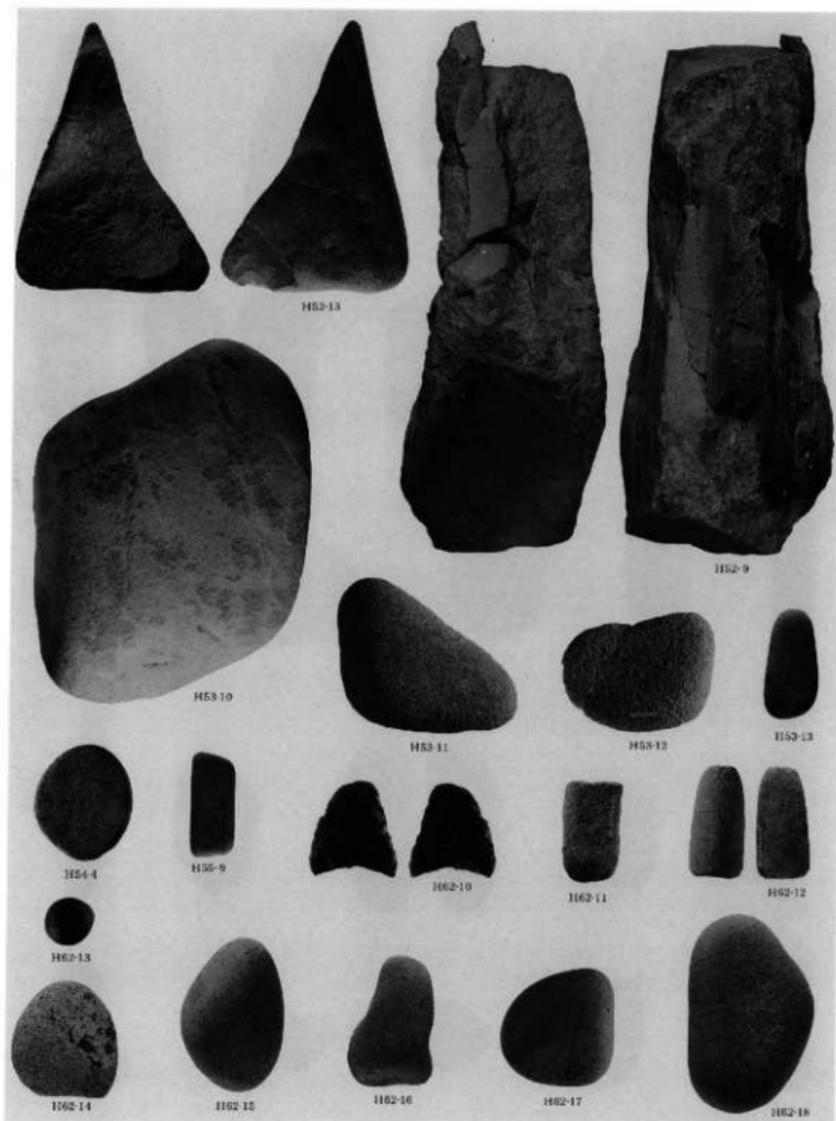
H43・H47・H48 出土遺物

(1・3) H43-8, H47-11・12 (1・2) H43-9, H47-18,
(1・3) H43-10・11, H47-13・17・19・23, H48-8・11

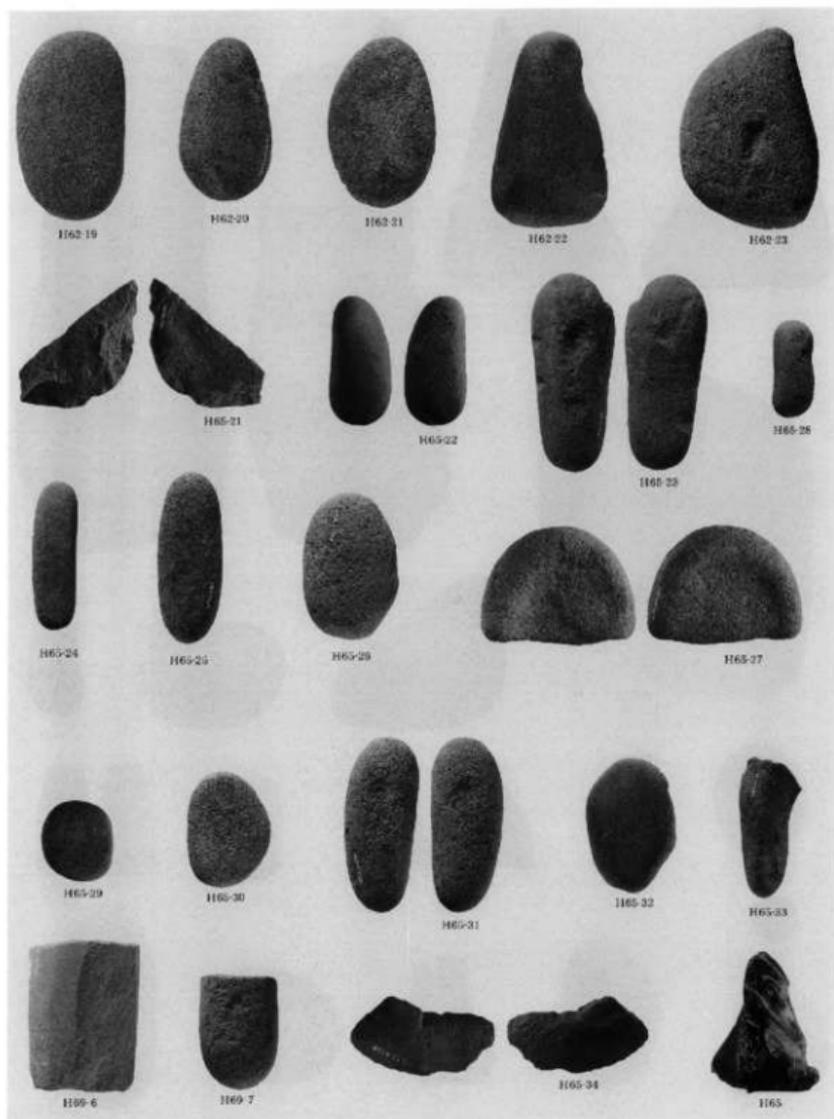


H50・H51・H52 出土遺物

(1 : 1) H51-25 (1 : 2) H52-11, H51-29
 (1 : 3) H50-5~8, H51-26~28・30, H52-13
 (1 : 4) H52-10 (1 : 4) H51-25



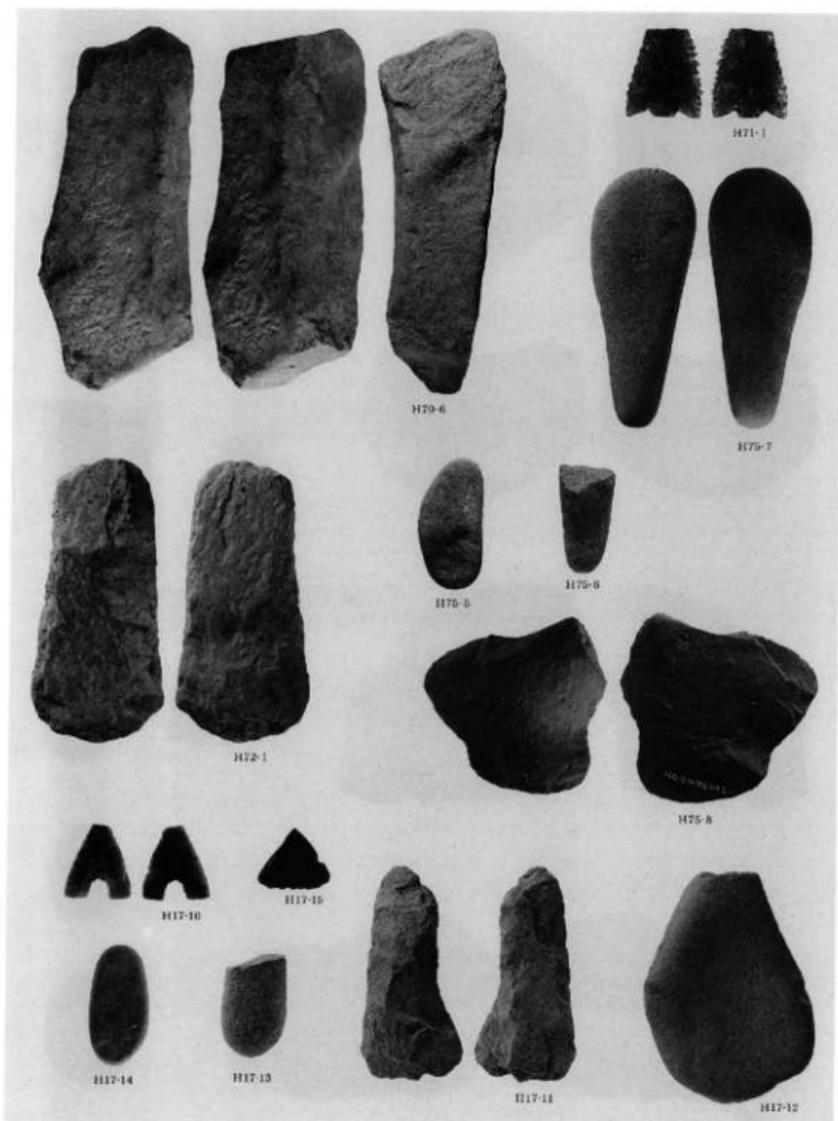
H52・H53・H54・H55・H62 出土遺物 (1:1) H62-10 (1:2) H54-4, H62-18
 (1:3) H53-11~13, H55-9, H62-11・12・14~18
 (1:4) H52-9・13, H53-10



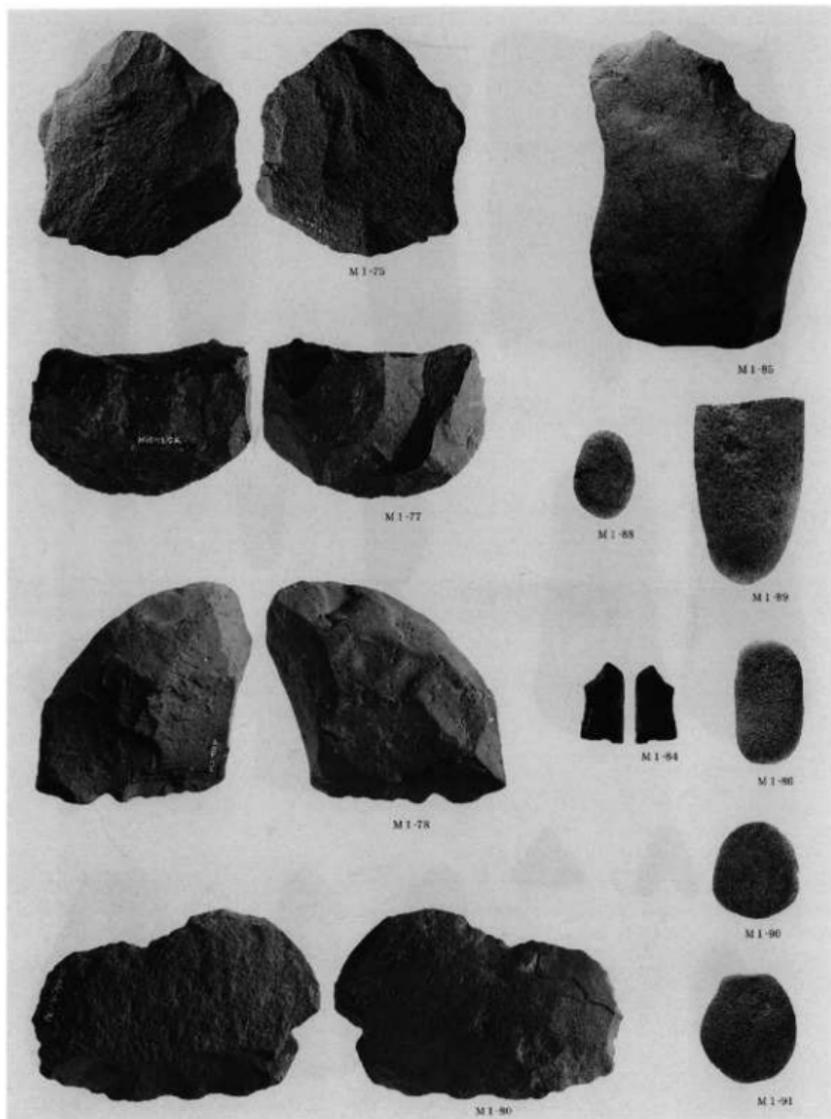
H62・H65・H69 出土遺物

(1・2) H65-22・34

(1・3) H62-19・23, H65-21・23-33, H69-6・7

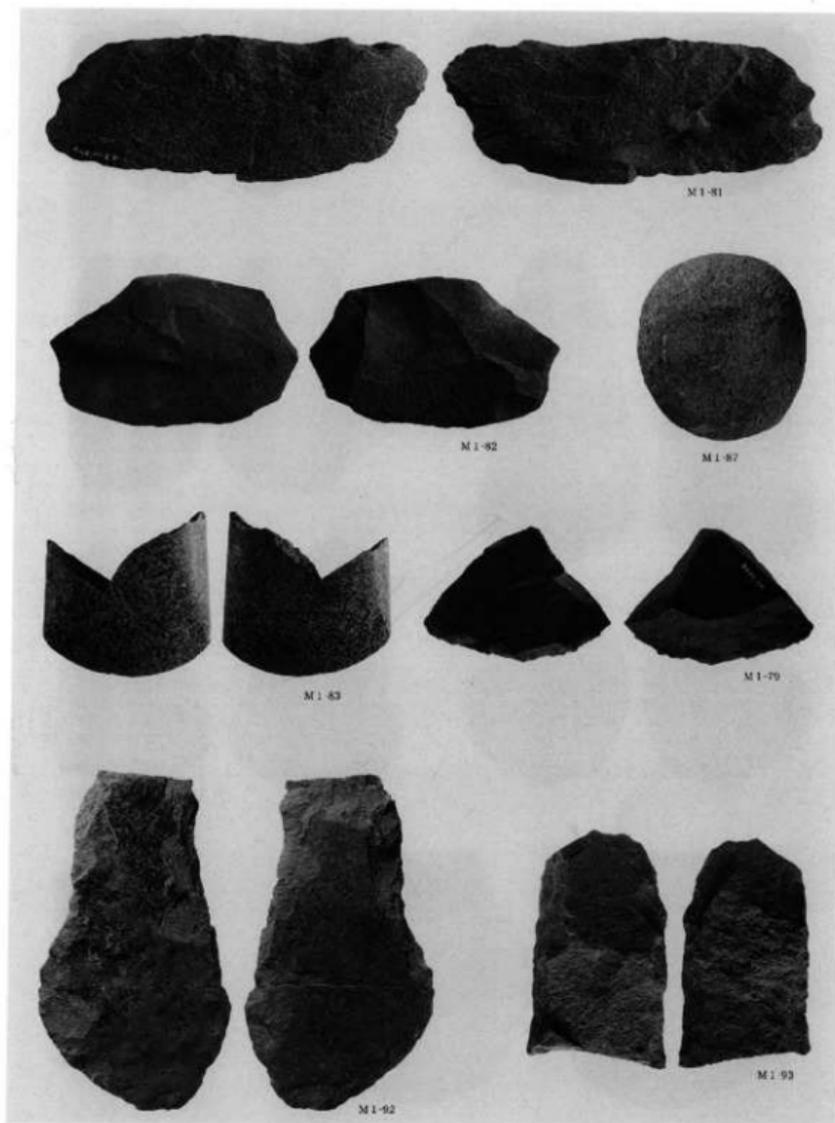


H70・H71・H72・H75・H17 出土遺物 (1:1) H17-10, H71-1 (1:2) H17-11 (1:3) H17-11-14
 H72-1, H75-5-7 (1:4) H70-6 (1:5) H75-8



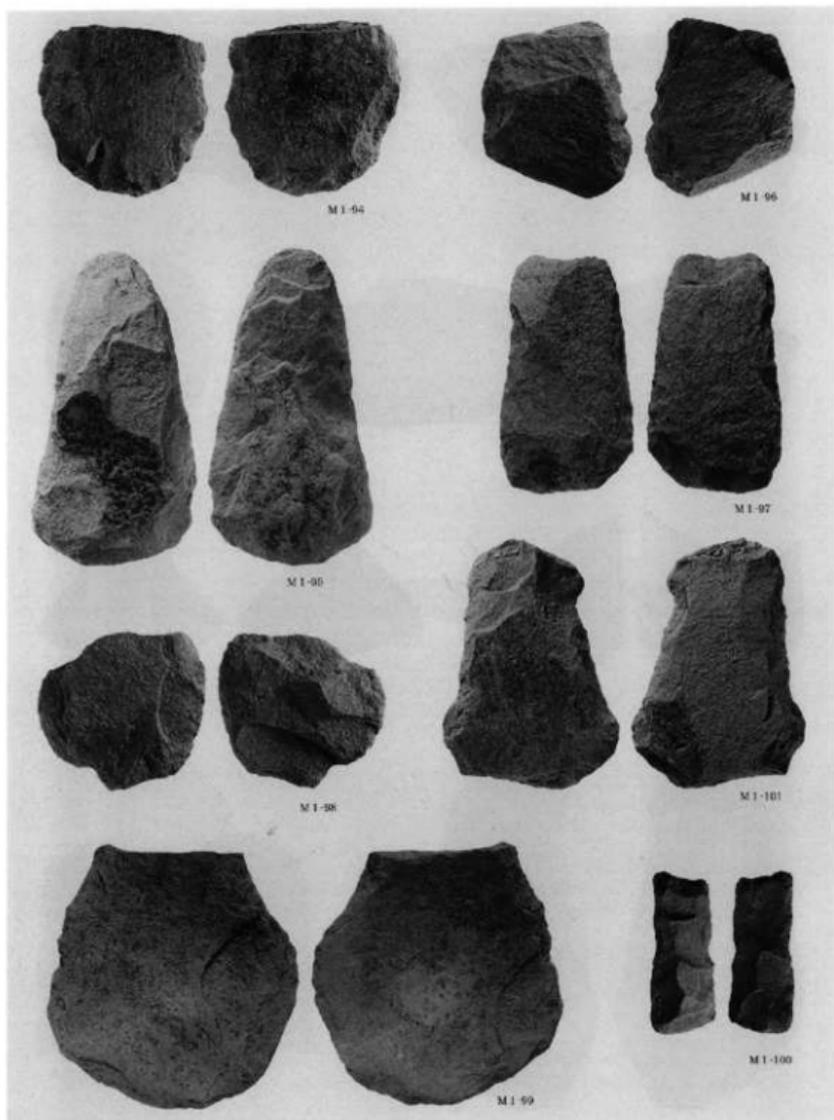
M1 出土遺物

(2・3) 75・77・78・80 (1・2) 84 (1・4) 85
(1・3) 86・88・89・90・91



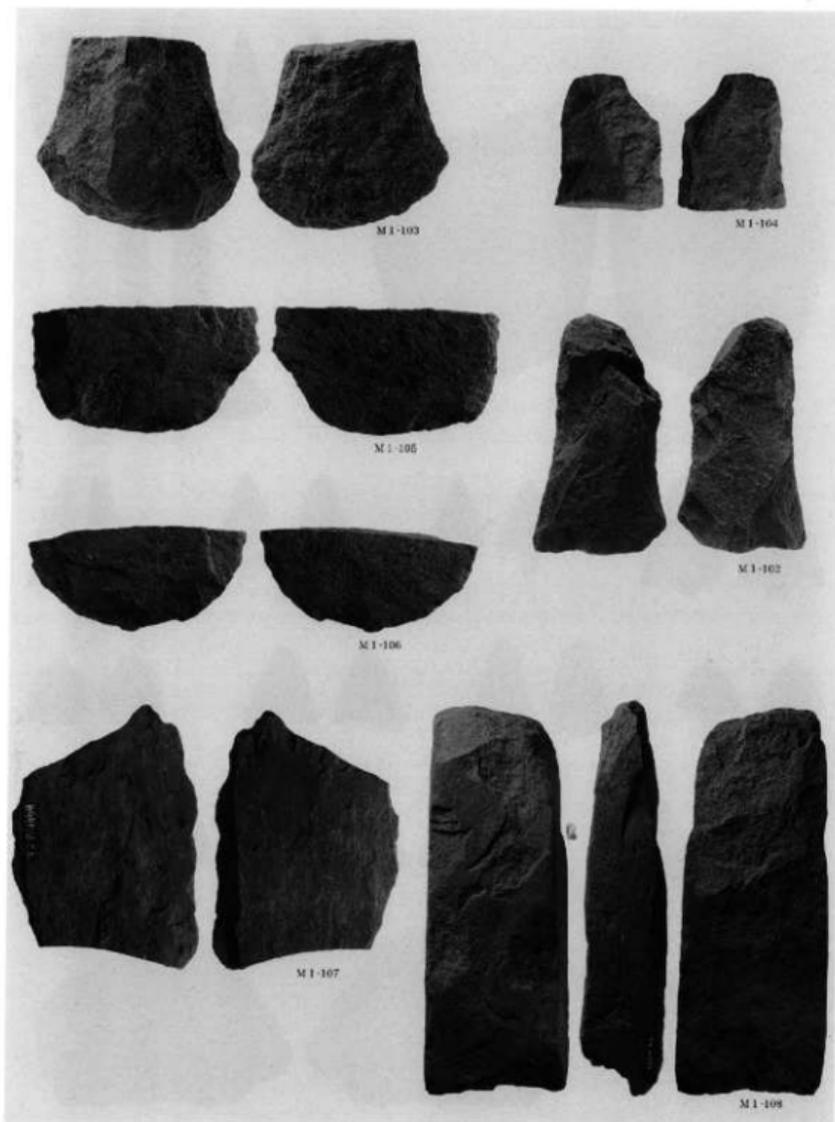
M1 出土遺物

(1:2) 83 (1:3) 87・90・92 (2:2) 79・81・82



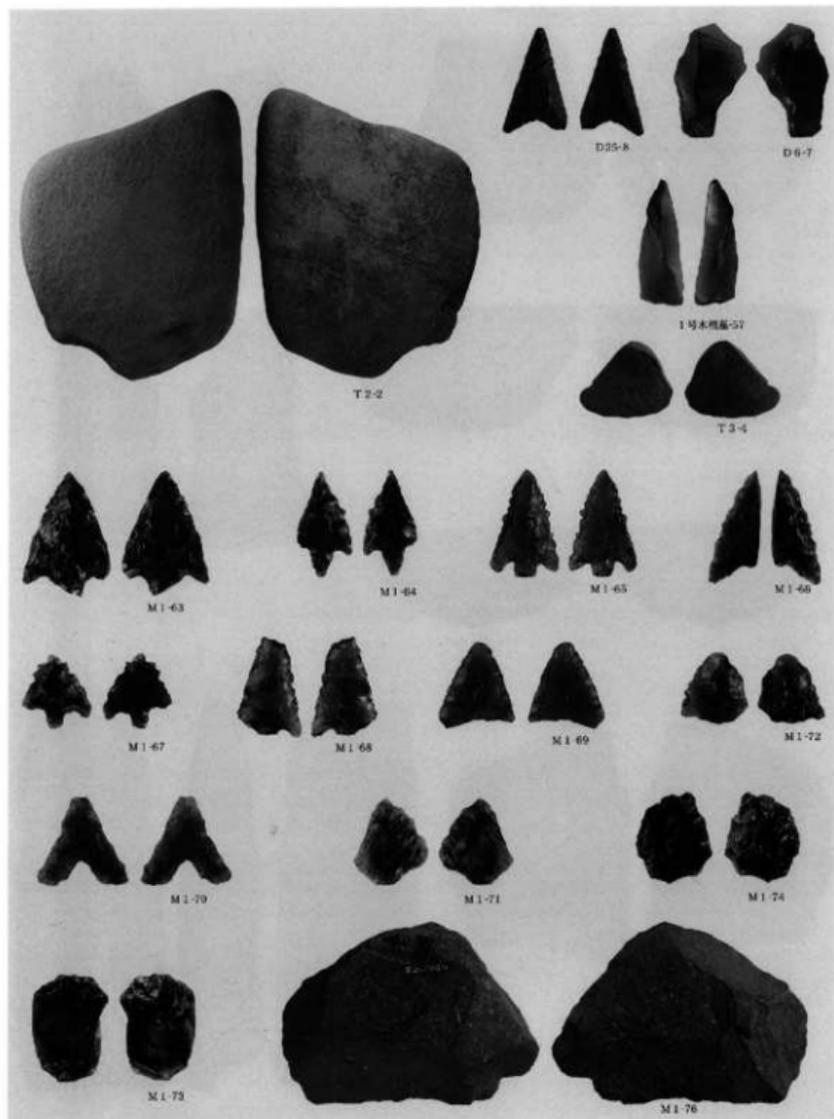
M1 出土遺物

(1 : 2) 94-101



M1 出土遺物

(2: B) 107 (1: B) 102~106・108

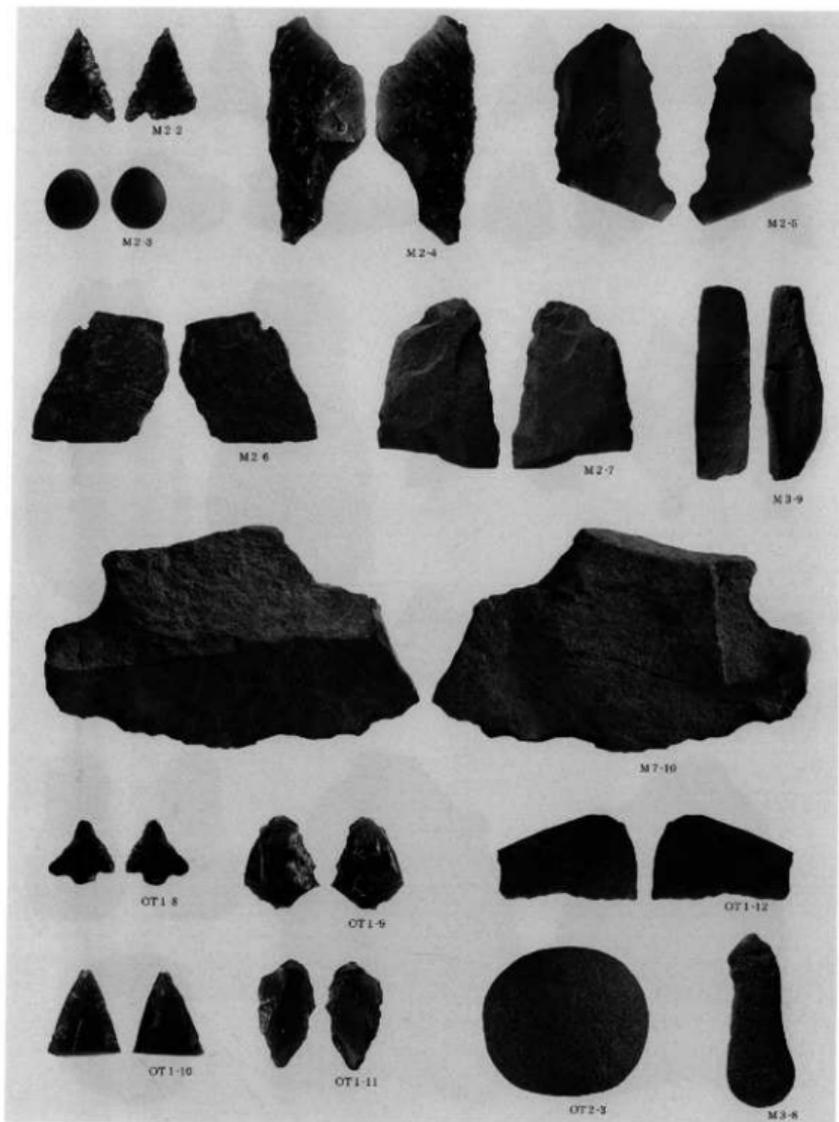


T2・T3・D6・D25・1号木棺蓋・M1 出土遺物

(1・1) D6-7, D25-a, M1-63~74

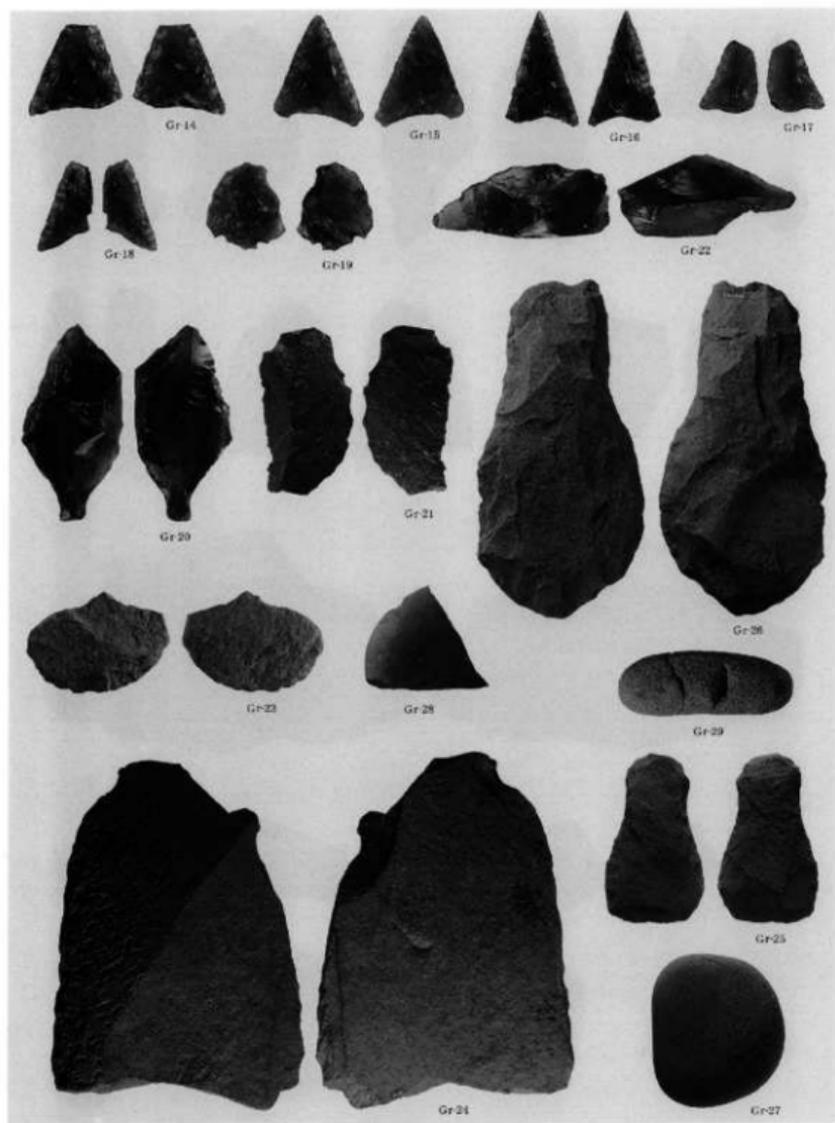
(1・3) T3-4 (1・5) T2-2

(2・3) 1号木棺蓋-57・M1-76



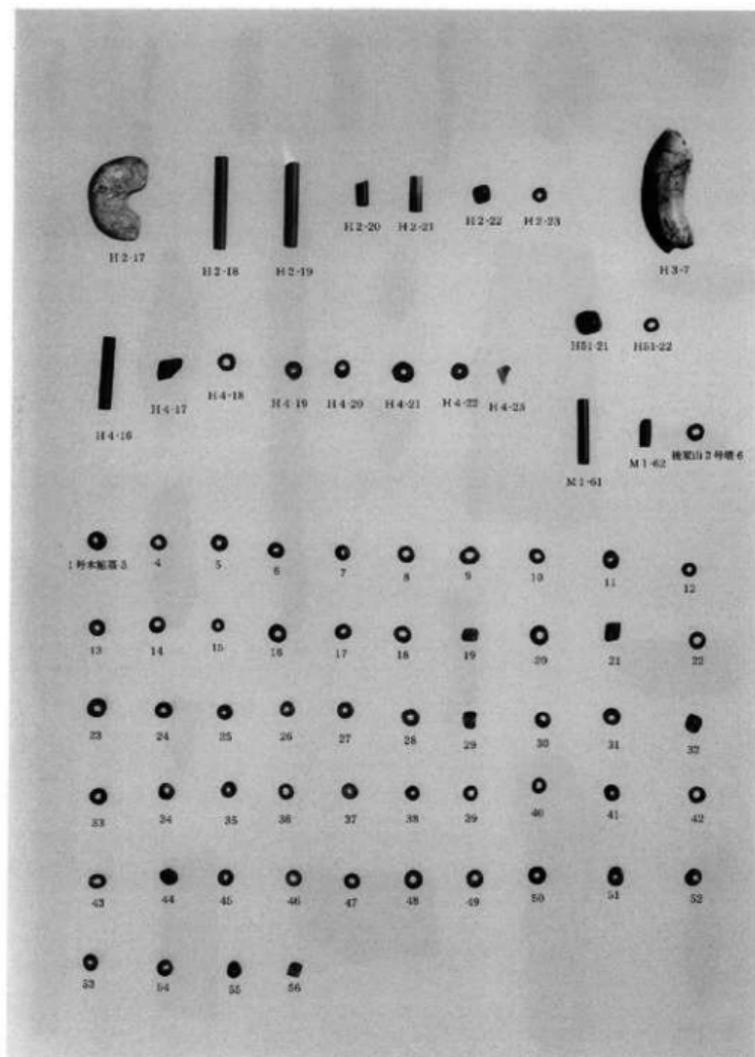
M2・M3・M7・後家山2号墳(OT1)・OT2 出土遺物

(1・1) M2-4, OT1-8-11
 (1・3) M2-3-5-7, M3-8-9, OT2-3
 (2・5) M7-10, OT1-12 (1・2) M2-6



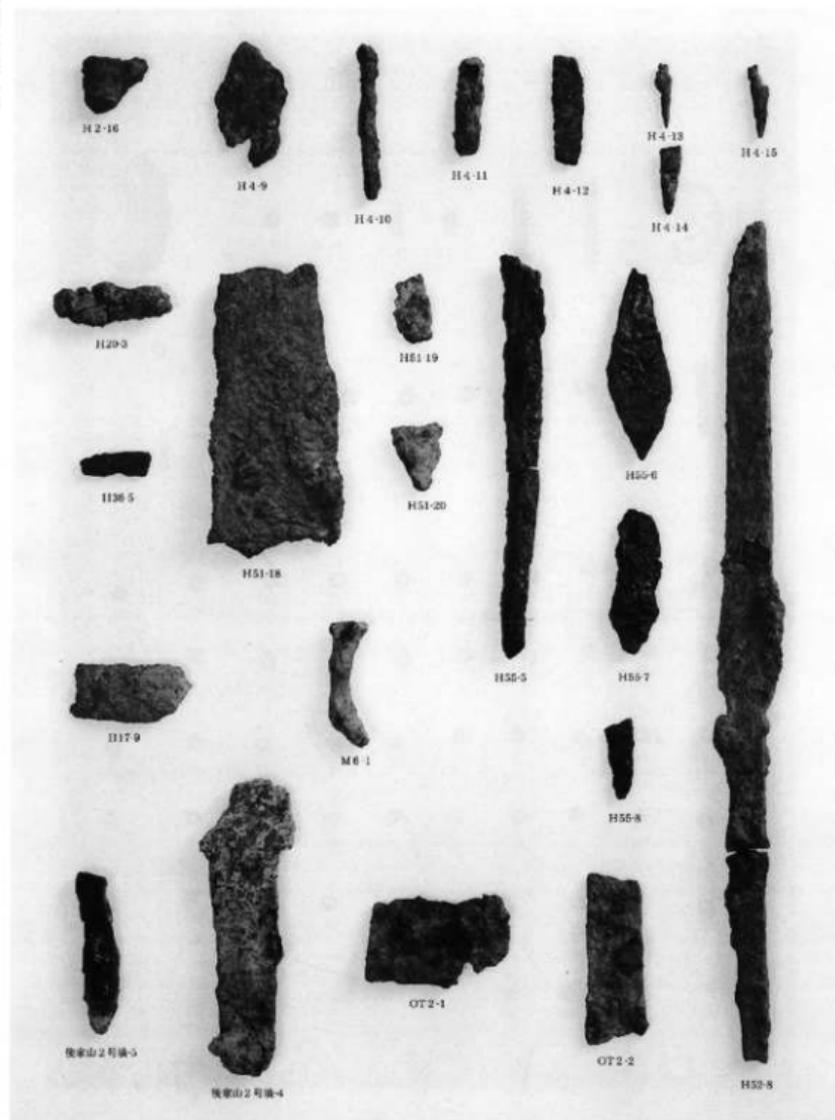
遺構外出土遺物

(1 : 1) 14-20-22 (2 : 2) 21 (1 : 4) 24
(1 : 3) 23-26-28



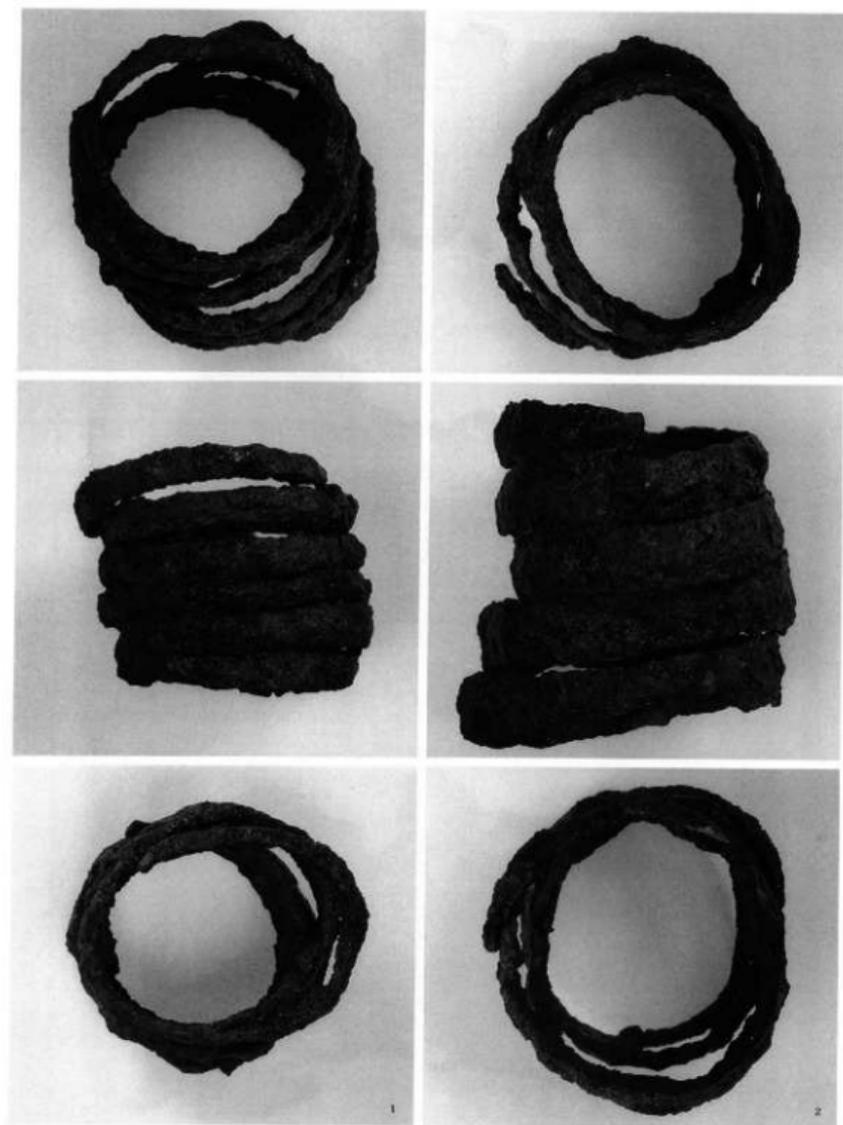
出土玉器

(1 : 1)



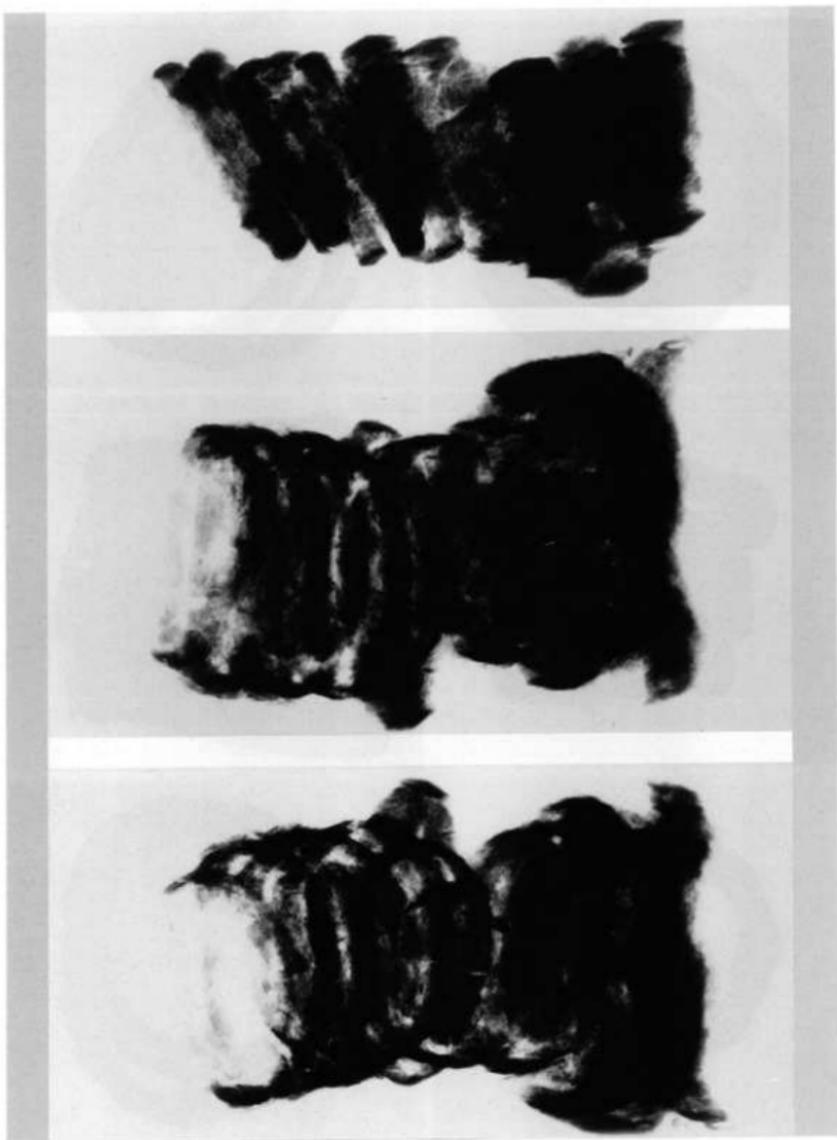
出土鉄製品

(1:1)

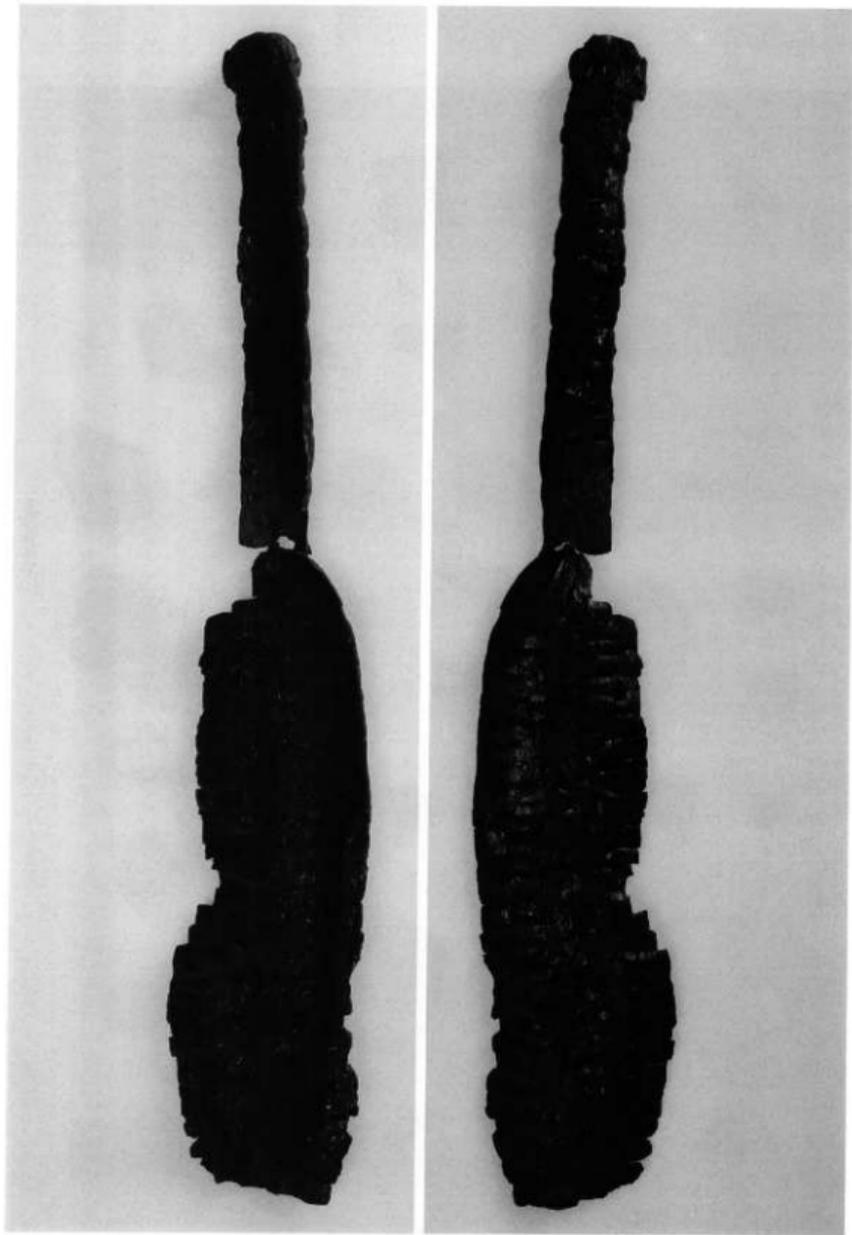


1号木棺墓出土螺旋型铁镯

(1:1)

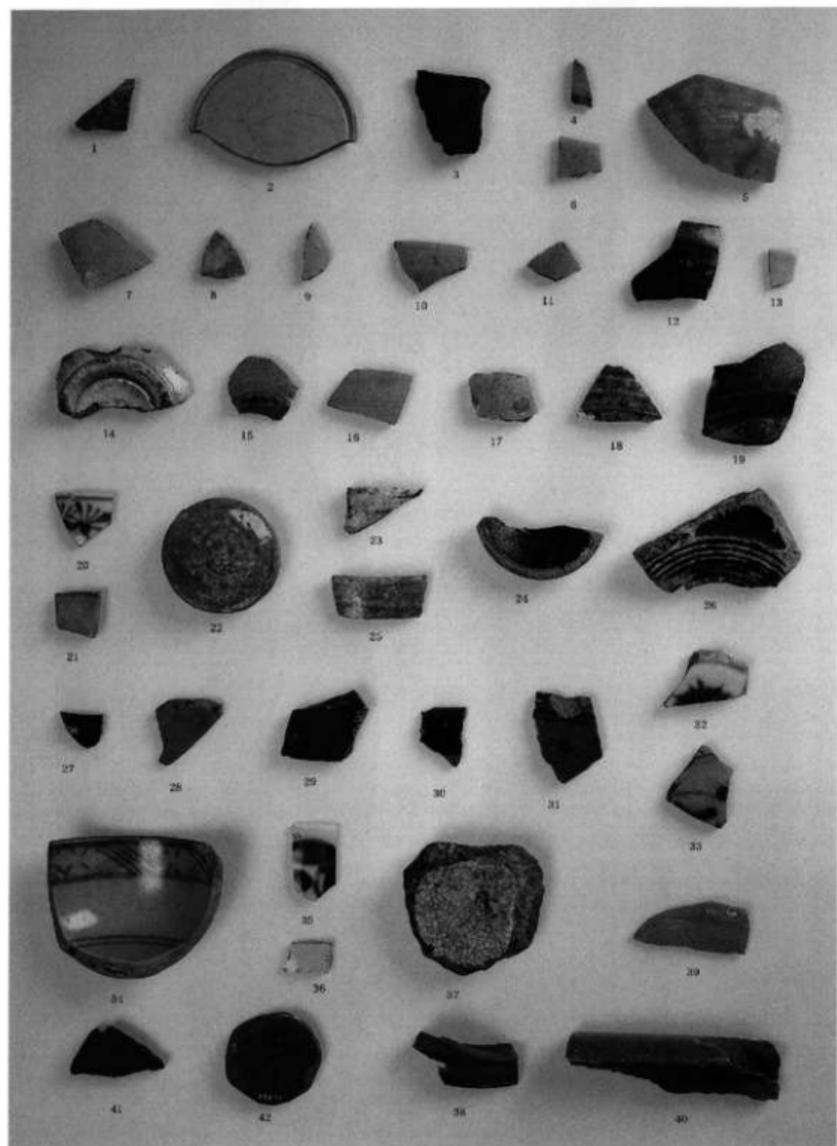


1号木棺墓出土螺旋型铁剑X线写真(出土状态)



H51 出土器物 (曲柄装着平刃)

(1:2)

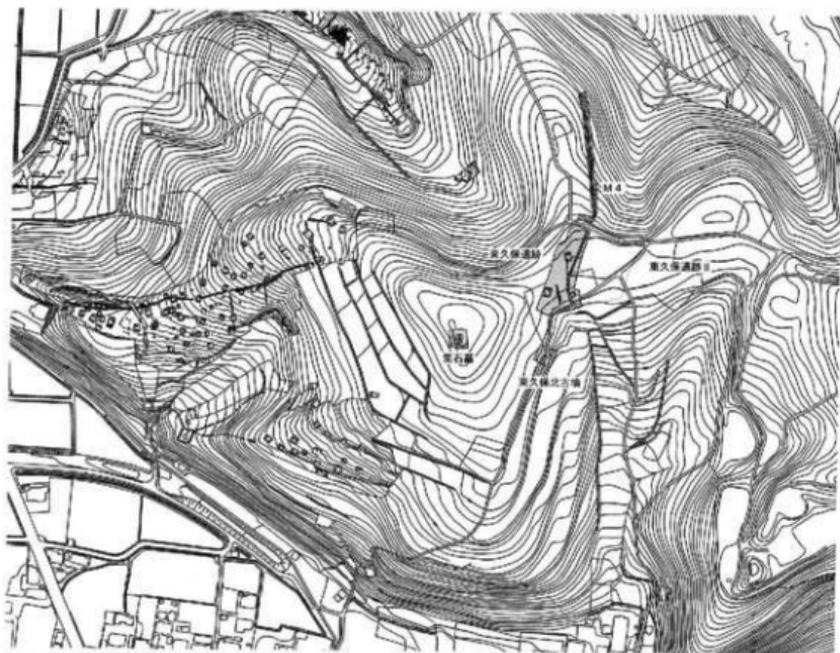


出土陶磁器類

(1:2)

東久保遺跡

第V章 東久保遺跡



第1図 東久保遺跡位置図 (1:4,000)

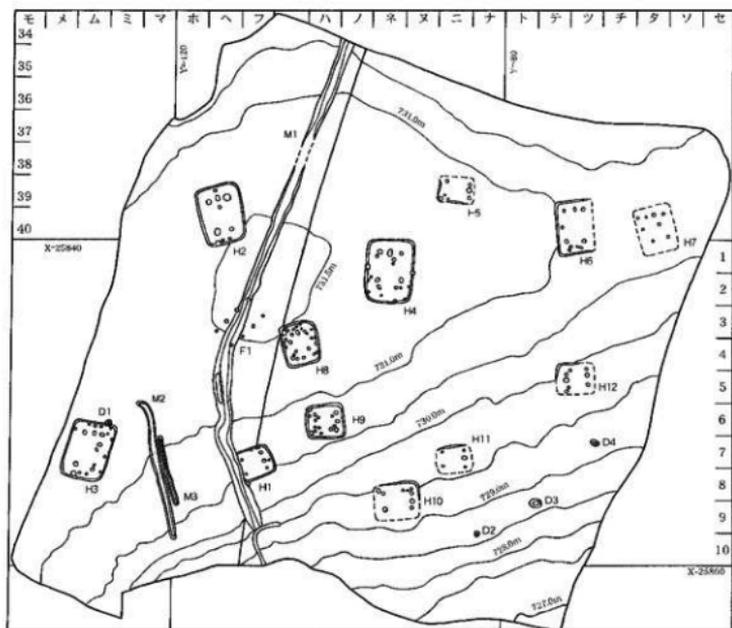
凡 例

1. 本章は東久保遺跡部分の遺構・遺物を取り上げた。なお、東久保北古墳は本章に掲載した。
2. 遺構の略記号は、住居址(H)・孤立柱建物址(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)である。
3. 挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
 竪穴住居址・孤立柱建物址1/80 炉1/30 土坑1/60 古墳・周溝墓1/80,1/100
 土器1/4 石器1/3, 2/3
4. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
5. 土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
6. 遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。
7. 調査区グリッドは全体の凡例で述べた遺跡全体の区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
8. 住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、かば面積に含め計測してある。
9. 遺構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。
10. 各遺構の計測及び出土土器の施文分類は後家山遺跡の凡例に従った。
11. 挿図中のカクーンは後家山遺跡の凡例に従い、異なる物については各図面に記載した。
12. 出土遺物観察表の記載方法は後家山遺跡と同じであるが、ミガキは両欠印で表現した。

第1節 東久保遺跡の概要

東久保遺跡は後家山遺跡の所在する主尾根根奥に位置する。尾根標高は730mを測る。遺跡東側には市道建設に伴い発掘調査が行われた東久保遺跡Ⅱが存在する。遺跡が立地する尾根部は長軸200m・短軸45～60mの平坦部を有する。この平坦部の面積は約5,000㎡を測る。この内、東久保遺跡で2,270㎡、東久保遺跡Ⅱで2860㎡が調査されている。検出された遺跡は、弥生時代後期（箱清水期）住居址3軒、掘立柱建物址1棟、土坑1基、溝状遺構4本、古墳時代終末期の古墳址1基、尾根最高地点に中世と考えられる集石墓1基である。出土遺物としては、後家山遺跡と同じく弥生後期住居址よりガラス小玉と鉄線類が出土している。

この内特に注目される発見は弥生時代後期の集落址の発見である。住居址は東久保遺跡Ⅱにおいて9軒が調査され、木遺跡も含めると12軒が調査されている。東久保の尾根上には地形も考慮すると20軒以上の集落展開が想定される。これら集落はその配置も等間隔を示し、上器形態の変化もあまり見られないことから単一時期の集落と考えられる。これら集落の立地であるが滑津川に広がる沖積地との標高差は45mを測り、佐久平で検出されている弥生時代集落としては沖積地と最も高低差のある立地を示している。また、沖積地からは西側が尾根最高地点、南北が支尾根が盾となり、沖積地から集落が日視しづらい位置に選地している。これらの事を考えると後家山遺跡の概要でも述べたが、東久保遺跡こそが所謂『高地性集落』の問題について検討すべき遺跡と考えられた。しかし、選地以外では他の弥生時代後期集落との差異を明らかにすることは難しく、現段階では後家山遺跡集落の拡強か或いは関東・中部地方で起こる弥生後期集落の高地への進出と軌道を同一にした動きと考えられる。



第2図 東久保遺跡Ⅰ・Ⅱ全体図

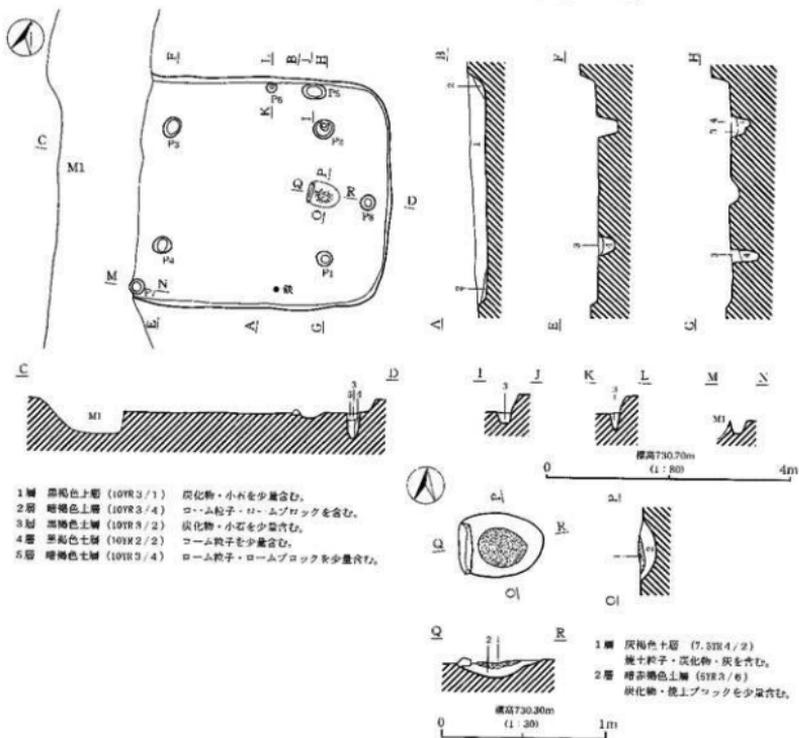
第2節 遺構と遺物

1. 竪穴住居址

(1) H1号住居址 (第34図, 写真図版三)

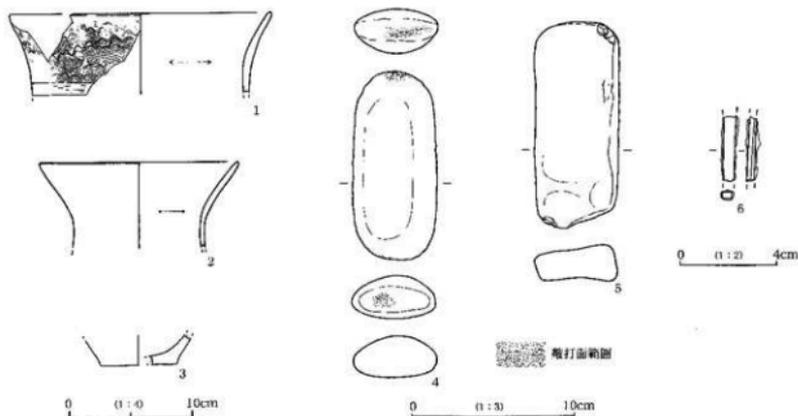
本住居址は、調査区の南斜面であるOーヒー7・8、Oーフー7・8、Oーへー7・8Grに位置する。残存状態はM1号溝状遺構により西側を削平されている。M1号溝状遺構との重複関係は本址の方が古い。形態は東西方向に長軸をもつ長方形の住居地で、住居址東側主柱穴間に炉が造られている。規模は北壁残存3.64m・南壁残存3.40m・東壁3.30mで、壁高さは北壁よりで30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-74°-Eを示す。住居址の床面積は残存で14.1㎡を測る。覆土は柱穴も含め5層に分れる。床は住居址伊周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は8個が検出された。規模はP1が径26cm・深さ46cm、P2が径32cm・深さ24.3cm、P3が径36cm・深さ36cm、P4が径30cm・深さ28cm、P5が径38cm・深さ18cm、P6が径16cm・深さ26cm、P7が径24cm・深さ20cm、P8が径26cm・深さ44cmを測る。ピットの検出位置よりP1~P4が主柱穴、P8が棟持ち柱と考えられる。

炉は東壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。形態は楕円形であり、長軸と直交するように炉石が配されていた。規模は長軸50cm・短軸40cmで焼土の厚さは1.5cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。



第34図 H1号住居址尖測図

本址の遺物は全体として少量で覆土より主に出土した。器種は1～3が甕である。1は口縁部に櫛歯波状文と頸部に櫛歯状文が施されている。2は頸口縁部であるが器面が荒れていて詳細は不明、3は壺底部と考えられる。4と5は甕石である。4は上下に轍き痕が顕著である。6は鉄製品で住居址南壁よりから出土した。形態より鉄鍔蓋と考えられる。これらの出土遺物より本址は弥生後期に位置づけられる。



第4図 H1号住居址出土遺物実測図

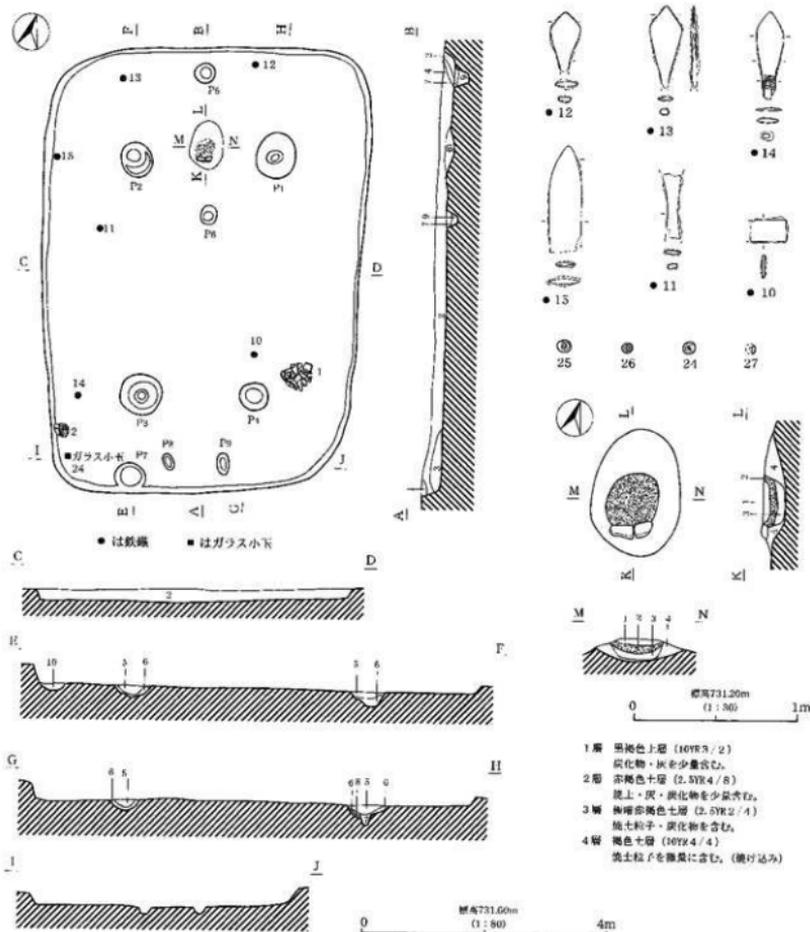
No.	器種	法 量		外 形・構造・文様		備 考
		口径(高)	底径(厚)	外 形	内 面	
1	甕	(21.3)	—	(6.6)	櫛歯状文、櫛歯状文	※17ト
2	甕	(16.2)	—	(7.0)	ナデ、器面が荒れている	※17ト、器面が荒れている
3	甕	—	(6.3)	(2.1)	ナデ	ナデ
4	甕石	11.6	5.2	2.7	上下部に轍打痕あり	227g
5	甕石	12.7	5.3	2.8	上部正中央部に轍打痕 下部裏面斜角、轍打によるものか	223g
6	鉄製品	(2.6)	—	—	—	鉄鍔蓋の可能性あり

第1表 H1号住居址出土遺物観察表

(2) H2号住居址 (第5～7図、写真図版四五)

本住居址は、調査区西よりの台地平坦部であるN-フ-40、N-ヘ-39・40、N-ホ-39・40、O-ヘ-1Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北方向に長軸をもつ長方形を呈する。炉は住居址北側主柱穴間に造られている。規模は北壁4.80m・南壁4.20m・西壁6.55m・東壁6.60mで、堀高さは南壁際で30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上る。主軸方位はN-15°-Wを示す。住居址の床面積は33.8㎡を測る。覆土は10層に分れる。床は全体に硬質であり、貼り床は確認されず地山を露いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は9個が検出された。規模はP1が径74cm・深さ32cm、P2が径58cm・深さ24cm、P3が径67cm・深さ18cm、P4が径46cm・深さ17cm、P5が径34cm・深さ22cm、P6が径32cm・深さ18cm、P7が径50cm・深さ10cm、P8が径28cm・深さ10cm、P9が径36cm・深さ10cmを測る。これらのピットの内、使用目的が推察されるものとして、主柱穴のP1・P2・P3・P4、入り口施設のピットとしてP8・P9、挟持柱としてP5が考えられる。また、P7は浅いが検出位置的には貯蔵穴と考えられる。

伊址はP1とP2の柱穴間に検出された。形態は楕円形であり、焚1側に炉石が検出された。規模は長軸78cm・短軸54cmで焼土の厚さは5cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。



1層 黄褐色土層 (10YR 6/6) 粘性あり。

2層 黄褐色土層 (10YR 3/2) 炭化物を少量含む。

3層 褐色土層 (10YR 4/6) 粘粒多。

4層 黄褐色土層 (10YR 5/8) 炭上粒 ρ を多量に含む。

5層 黄褐色土層 (10YR 3/2) 炭化物・ローム粒子を少量含む。

6層 黄褐色土層 (10YR 3/1) ロームブロックを少量含む。

7層 黄褐色土層 (10YR 2/2) 炭化物を少量含む。

8層 暗褐色土層 (10YR 3/4) 粘土ブロックを少量含む。

9層 黄褐色土層 (10YR 3/2) ローム粒子を少量含む。

10層 黄褐色土層 (10YR 3/2) 炭化物を少量含む。

1層 黄褐色土層 (10YR 3/2)

炭化物・灰を少量含む。

2層 黄褐色土層 (10YR 4/6)

炭上・灰・炭化物を少量含む。

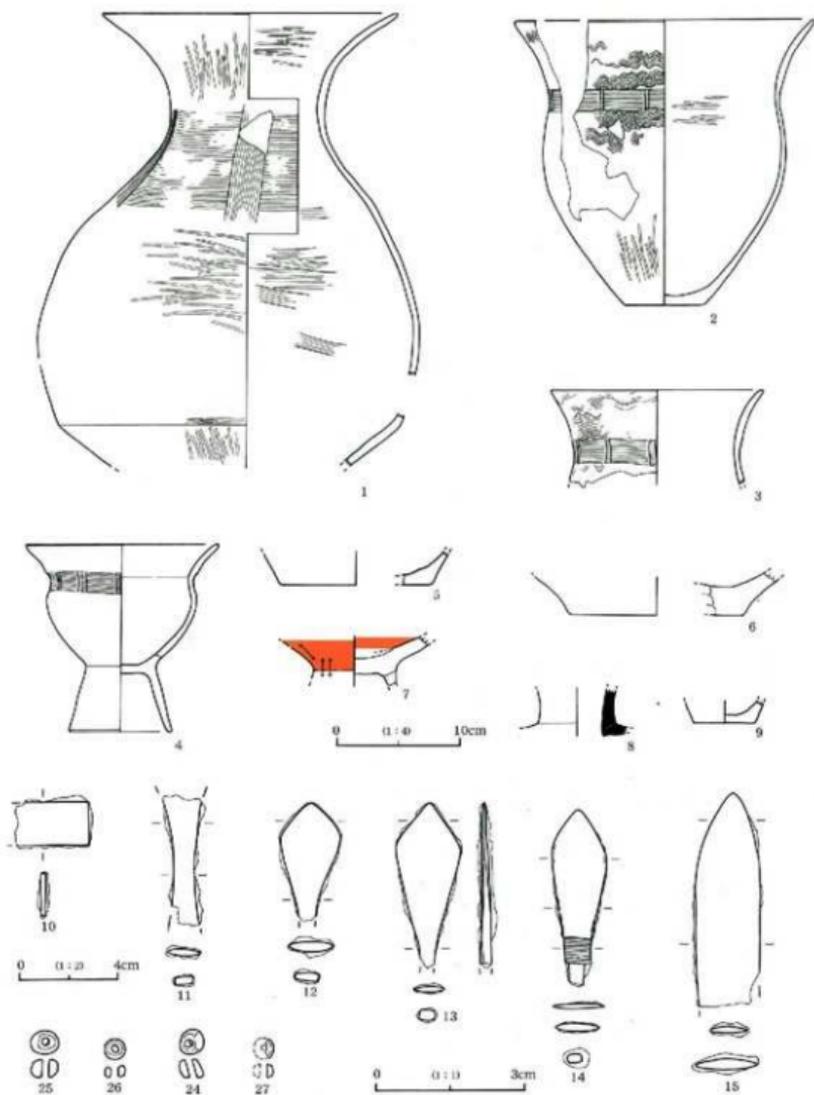
3層 黄褐色土層 (10YR 2/4)

粘土粒子・炭化物を含む。

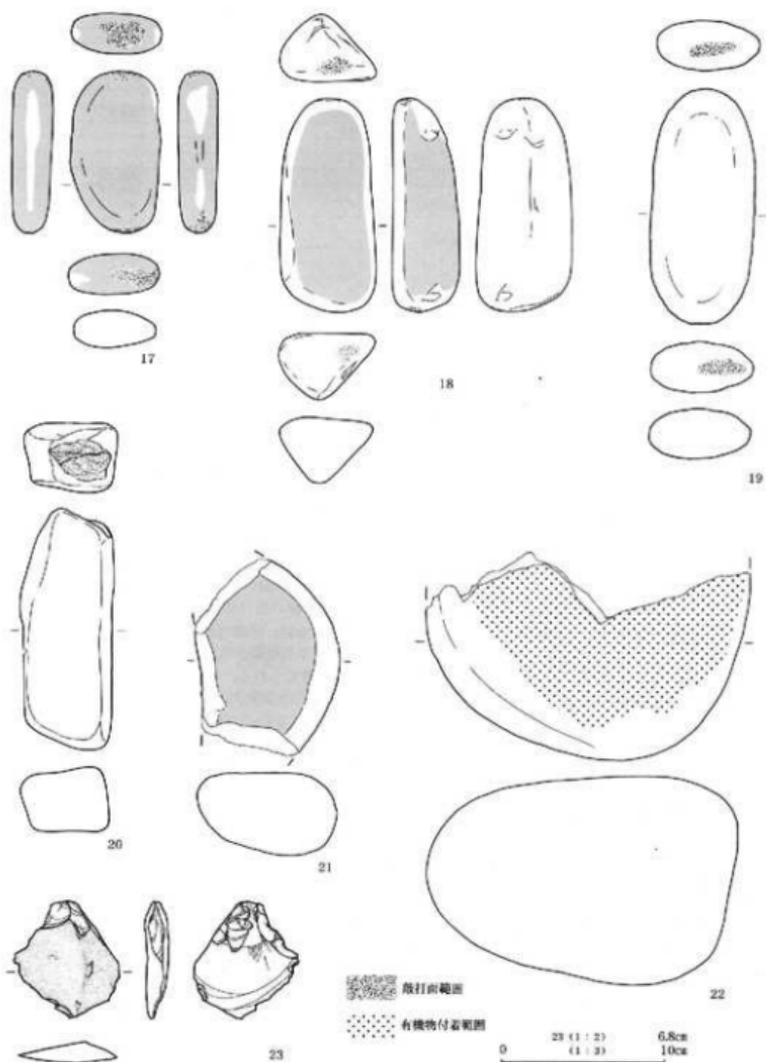
4層 褐色土層 (10YR 4/4)

炭土粒 ρ を多量に含む。(盛り込み)

第5図 H2 坪住跡実測図



第6图 H2号住居址出土器物插图(1)



第7区 H2号住居址出土遺物実測図 (2)

No.	器物	供給	製法		成形・調製・文様		備考
			口形(長)	底形(短)	外	内	
1	壺	24.1	50.9	▽12号、柳指線横文、腰線垂下文	▽11号、赤色硝子		
2	甕	24.8	6.5	23.1、▽12号、柳指線横文、柳指線横文、10条	▽12号		
3	甕	17.8	-	8.0、柳指線横文、柳指線横文(2連止め)	ナデ		
4	付付甕	(15.6)	(8.3)	15.3	ナデ、10本の柳指線横文(3連止め)	ナデ	
5	甕	-	(12.0)	9.8	ナデ	ナデ	
6	甕	-	(14.1)	3.6	ナデ	ナデ	
7	高杯	-	-	51.0	▽12号、赤色硝子、腰線ナデ	▽12号、赤色硝子	
8	長徳心	-	-	3.6	口ナデ	口ナデ	須恵器
9	甕	-	(4.9)	1.9	ナデ	ナデ	
10	鉄製品	(3.1)	-	(1.7)			
11	鉄製品	(2.7)	-	-			
12	鉄線	(2.4)	-	-	全体きびくべ		柳葉式?
13	鉄線	(3.6)	-	-			柳葉式?
14	鉄線	(3.6)	-	-	側部分が残り、矢張り此のための欠?残り		柳葉式?
15	鉄線	(4.3)	-	-			柳葉式?
17	手持ち砥石	10.0	5.6	2.5	側面に顕著な縦方向のすり		214c
18	砥石	13.2	5.9	4.0	上と下に顕著なすり		434c
19	砥石	14.4	6.5	3.1	上と下中央部にすり		389c
20	磨石	14.8	5.8	4.3	全体に奇りか、すり痕跡のためか、上側の縦線は磨きによるものか		570c
21	砥石	(12.1)	(9.0)	6.4	上と下、正面中央部すり		(670) c
22	付付	(12.7)	(19.9)	(13.7)	上部尖角、正面中央有機的付表により黒い		(3.890) c
23	硝子	4.8	4.3	0.9			156c
24	ガラス小玉	0.18	-	0.39			紺色
25	ガラス小玉	0.48	-	0.35			紺色
26	ガラス小玉	0.12	-	0.21			紺色
27	ガラス小玉	-	-	-			スカイブルー

第2表 112号住居址出土遺物観察表

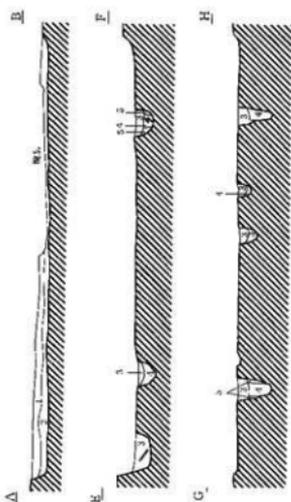
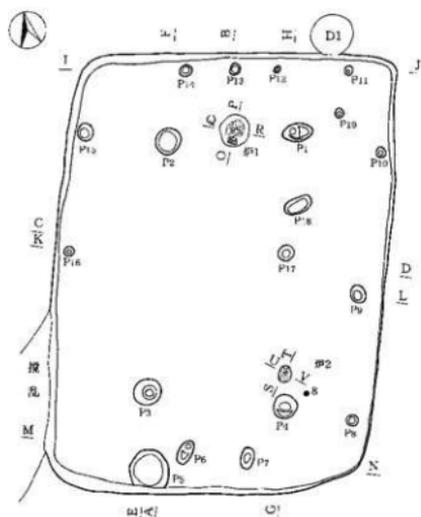
本址の遺物はやや多く、土器・須恵器9点、鉄製品6点、ガラス小玉4点、石器類7点を図示した。1は壺で、底部を欠損するがほぼ全容を把握できる。P4の胎床面より出土した。無彩の甕であるが、口縁部内面に僅かに赤く変色している部分があり、或いは発色しなかったとも考えられる。頸部に柳指線横文と垂下文を施す。2は甕で住居址南西コーナー部の床面から出土した。頸部に柳指線横文、11線部と胴部に柳指線横文を施す。3は甕口縁部で頸部に柳指線横文、口縁部と胴部に柳指線横文を施す。4は付付甕で脚部と胴部を欠損するがほぼ全容を把握できる。頸部に柳指線横文を施す。11線部と胴部は無紋と判断するが、器面が荒れている部分が多く、弱い波状文が施文されているようにも観察でき確認を得ない。5と6は甕の底部と考えられる。7は高杯の杯部と脚部の接合部分で内外面赤彩が施されている。8は甕と考えられる須恵器壺部である。9は小型甕の底部と考えられるが、詳細は不明である。

10~15は鉄製品である。住居址実測図に出し位置を記載したのが、やや壁際からの出土傾向が伺える。10と11は種別は不明であるが、10はやや台形で鉄線の方頭弁筒形式の鐵身部とも考えられる。12~15は鉄線と考えられ、15は柳葉式、12~14は圭頭筒形式とも捉えられるが、錆のひどい物もあり今回は柳葉式の範疇で捉えておきたい。なお、15は他の鉄線に比べ鐵身部が大きく、或いは鉋式の鉄製品の可能性もある。24~27はガラス小玉で、24が住居址南西コーナーより、その他の3点は床面の土壌をふるいにかけて検出した。色調は24~26が紺、27のみ後家山遺跡1号木棺蓋と同じ薄青である。形態は21がやや長く歪な管状を呈する。25と26は所謂『ビーズ状』で、27は欠損して1/3しか残存しておらず不明である。17は表面に顕著な横方向のすり、側面に顕著な縦向きすりがある。特に長辺の側面は刃物傷の様な横方向の擦痕が顕著である。この事から17は手持ち砥石の可能性が高い。18は磨石と砥石の両方の機能をもちあわせた磨である。19と20は砥石で上と先端に顕著な縦向きすりがある。21は磨石である。22は図に示した範囲に煤のような黒い付着物がある。23は黒曜石の石錐と考えられ先端を欠損している。

本址はこれらの出土遺物より弥生後期に位置づけられる。

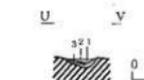
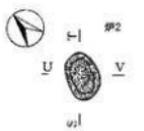
(3) H3号住居址 (第8.9図、写真図版六七)

本住居址は、調査区西端の尾根平坦面であるOーミー6~8、Oーミー6~8Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北方向に長軸をもつ長方形を呈する。住居址北側主柱穴間に如が造られている。規模は北壁5.00m・南壁4.84m・西壁6.74m・東壁6.56mで、壁高さは南壁中央で30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-15°-Eを示す。住居址の床面積は35.4㎡を測る。覆土は6層に分れる。床は全体に硬質であり、貼り床は確認されず地山



0 標高731.10m (1:80) 4m

- 1層 黒褐色土層 (10YR 2/3) 炭化物・ロームブロックを少量含む。
- 2層 暗褐色土層 (10YR 3/4) 炭化物・ローム粒子を少量含む。
- 3層 黒褐色土層 (10YR 3/2) 炭化物・ローム粒子を少量含む。
- 4層 暗褐色土層 (10YR 3/3) ローム粒子を少量含む。
- 5層 褐色土層 (10YR 4/4) ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
- 6層 黒褐色土層 (10YR 3/2) 炭化物・ローム粒子を少量含む。

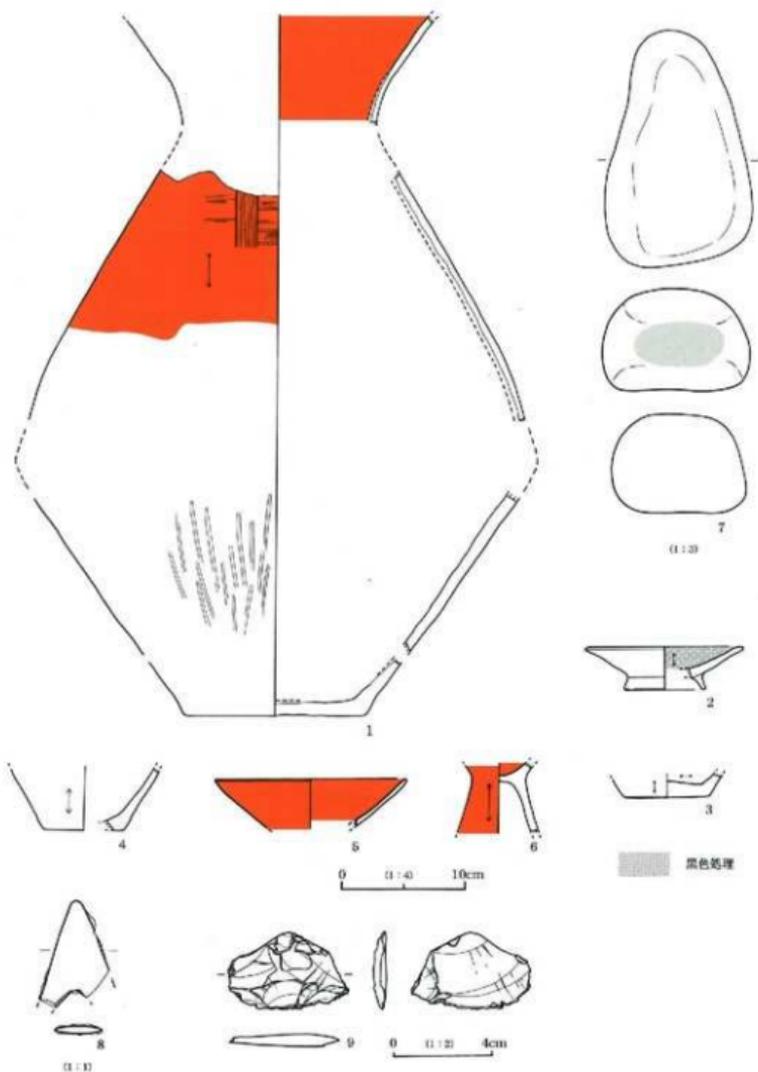


- 1層 黒褐色土層 (10YR 2/3) 灰・炭化物・焼土粒子を少量含む。
- 2層 暗褐色土層 (2.5YR 3/6) 焼土のカケカチに富み、層。
- 3層 暗褐色土層 (2.5YR 3/3) 炭土粒を多量に含む。
- 4層 黒い赤褐色土層 (2.5YR 4/3) 焼土粒子を多量に含む。



0 標高731.10m (1:200) 1m

第8図 I13号住居址実測図



第9图 H3号住居址出土器物复原图

を被いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは19個が検出された。規模はP1が径50cm・深さ56cm、P2が径46cm・深さ28cm、P3が径46cm・深さ28cm、P4が径40cm・深さ54cm、P5が径65cm・深さ26cm、P6が径40cm・深さ22cm、P7が径36cm・深さ27cm、P8が径20cm、P9が径30cm、P10が径18cm、P11が径16cm・深さ36cm、P12が径14cm・深さ28cm、P13が径20cm・深さ32cm、P14が径20cm・深さ28cm、P15が径30cm、P16が径17cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4は半柱穴、P6とP7が入り口施設、P13が棟持ち柱、P5が貯蔵穴、P8～P16は支柱穴と考えられる。

炉址は2カ所検出され、まず主の炉址は北壁よりP1とP2の柱穴間に検出された。形態はほぼ円形であり、中央部に焚口側に炉石が検出された。規模は径52cmで焼土の厚さは10cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。次にP4脇の炉は形態が楕円形で、規模は長軸28cm・短軸19cmで、焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址の遺物は全体として少量で覆土内より出土した。土器は6点、石器2点、鉄製品1点を図示した。1は壺であり器面の剥落が激しいが赤彩が確認できる。P5の貯蔵穴より胴部が、11線部と底部は床面上より散らばって出土した。2は土師器皿で内面黒色処理されている。混入品と考えられる。3と4は甕底部と考えられる。5は鉢か高坏部で内外面ともに赤彩されている。6は高坏脚部で赤彩が施されている。5と6は同一個体の可能性がある。7は磨石で下部一面に磨りが確認できる。9は剥片石器で一部刃こぼれが観察できる。8は鉄製品で、P4脇の床面より出土した。種別は無茎三角飯盃と考えられるが欠損部分が多く不確定要素がある。

本址はこれらの遺物より弥生後期に位置づけられる。

No.	種別	位置			形状・材質・文様	内面	備考
		経度(東)	緯度(北)	高さ(米)			
1	壺	-	14.7	(57.0)	※13 4. 樽形押縁文、樽形中下文 赤色塗彩	剥落	
2	付付皿	(12.8)	(6.6)	(2.5)	ナデ	※13 4. 黒色処理	土師器内入
3	甕	-	6.9	(1.8)	体・底部ヘラミガキ	※13 4	
4	甕	-	(6.4)	(4.9)	ヘラミガキ	※13 4	
5	鉢 (内)	(13.4)	-	(4.0)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	6と同 制作の可能性
6	高坏	-	-	(5.7)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	5と同 制作の可能性
7	磨石	14.6	9.1	6.3	ヘラミガキ、赤色塗彩、磨面ナデ	ヘラミガキ、赤色塗彩	1.250g
8	鉄物	(2.2)	-	-	-	-	-
9	剥片	3.1	4.8	0.5	下部の割断は使用痕か	-	8.9g

第3表 H3号住居址出土遺物観察表

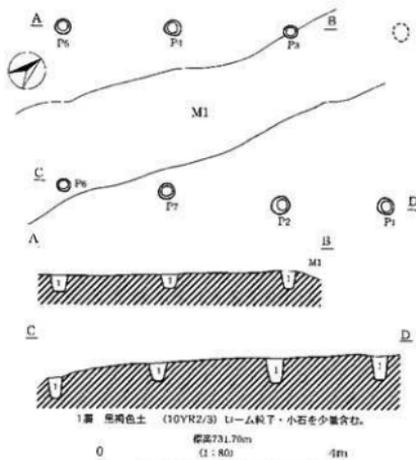
2. 掘立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址

(第10図, 写真図版八)

本住居址は、調査区中央部の尾根平坦面であるO-フ-2~4、O-ヘ-2~4Grに位置する。

M1号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。形態は東西方向に桁をもつ梁間1間×桁行3間の掘立柱建物址である。桁行方位はN-43°-Eを示す。規模は梁間2.60m、桁行5.26mで、桁行の間隔は平均1.7mを測る。ピット規模はP1が径26cm・深さ40cm、P2が径30cm・深さ40cm、P3が径22cm・深さ30cm、P4が径28cm・深さ22cm、P5が径24cm・深さ28cm、P6が径22cm・深さ34cm、P7が径26cm・深さ30cmを測る。北東角のピットは検出できなかった。本址からの出土遺物はなく、所産時期は不明である。



第10図 F1号掘立柱建物址実測図

3. 土坑

(1) D1号土坑 (第11圖)

本址は、調査区中央部の尾根平坦面であるO-ム-6Grに位置する。H3号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。形態は円形で、規模は径68cm・深さ28cmを測る。本址よりの出土遺物はなく、所産時期は不明である。



第11圖 D1号土坑実測図

4. 溝状遺構

(1) M1号溝状遺構 (第12圖, 写真図版八九)

本址は、調査区中央部の尾根上に検出された。H1号住居址とF1号掘立柱建物址と重複関係にあり、新旧関係は古い方よりH1号住居址→本址→F1号掘立柱建物址である。検出状況は尾根を南北に横断するように検出された。北側はやや北東から南西方向に向けて溝は掘られており、途中4mほど自然の地形により削平されとざれている。溝は南斜面にかかる部分よりやや西に走行軸を向け南斜面を下り、南端は畑境溝と自然の傾斜により削平されている。溝底面は平坦で、走行向きが変わる部分でテラス状の段が検出されている。規模は検出長65mで、北側幅1.50m・深さ38cm、中央部幅1.95m・深さ49cm、南側幅2.1m・深さ56cmを測る。

本址からの出土遺物は弥生後期(箱清水式)の土器である壺・甕片と図示した須恵器片が出土した。1は須恵器壺片と考えられ、底部付近で、ロクロ成形である。2は須恵器甕胴部片で、外面に平行筋による格子目状の成形痕がある。3は須恵器甕肩部破片である。本址の所産時期は不明確であるが、遺構の新旧関係や出土遺物により現段階では古代から中世の広い幅で捉えておきたい。

(2) M2号溝状遺構 (第12圖, 写真図版八)

本址は、調査区南斜面に検出された。検出状況は北側で西に緩やかに曲り自然に立ち上がっている。南側は自然地形の傾斜により消滅している。溝底面は平坦で、規模は検出長18mで、北側幅1.0m・深さ48cm、中央部幅80cm・深さ22cmを測る。本址からの出土遺物はなく所産時期は不明であるが、本址が現在の地籍境と重なる事から近世以降の構築の可能性はある。

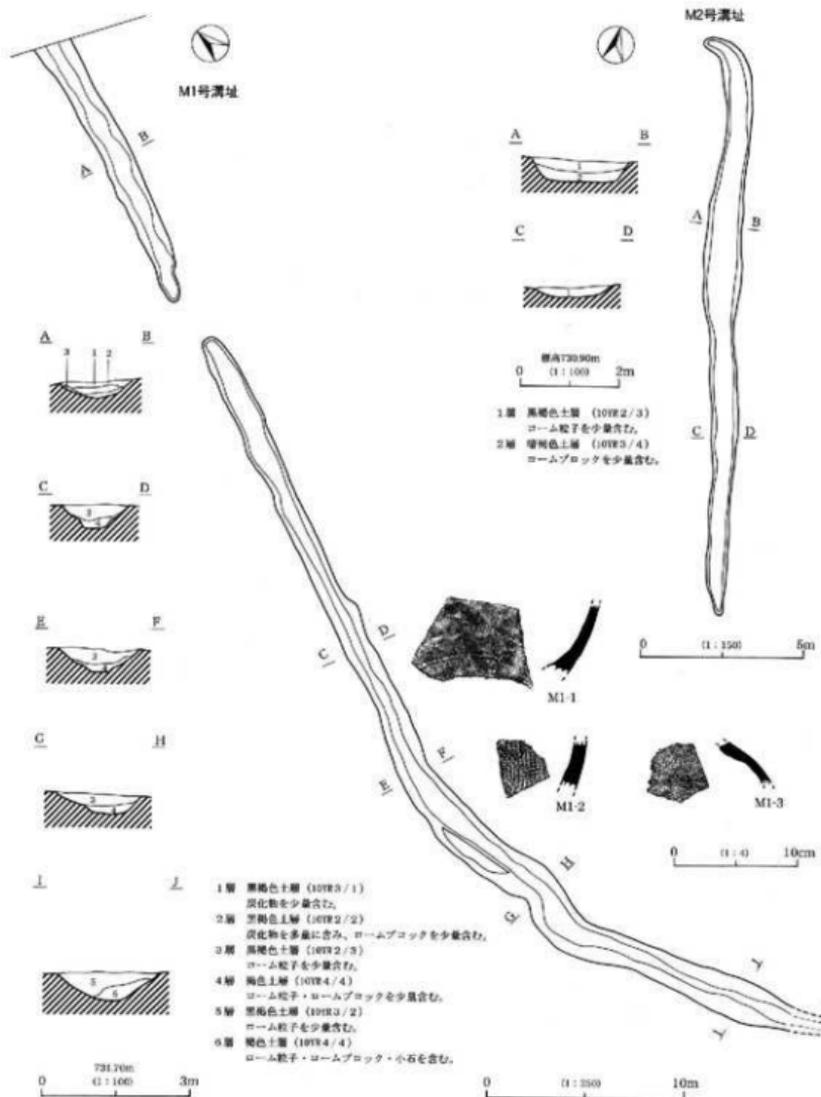
(3) M3号溝状遺構 (第13圖, 写真図版八)

本址は、調査区南斜面に検出された。検出状況は北側と南側で緩やかに立ち上がり消滅している。M2号溝状遺構と併走する形を取る。溝底面は平坦で、規模は検出長9.1mで、北側幅37cm・深さ6cm、中央部幅37cm・深さ4cmを測る。本址からの出土遺物はなく所産時期は不明であるが、M2号溝状遺構に隣接して構築され、走行方向も同じであることからM2号溝状遺構と同じく近世以降の構築の可能性はある。

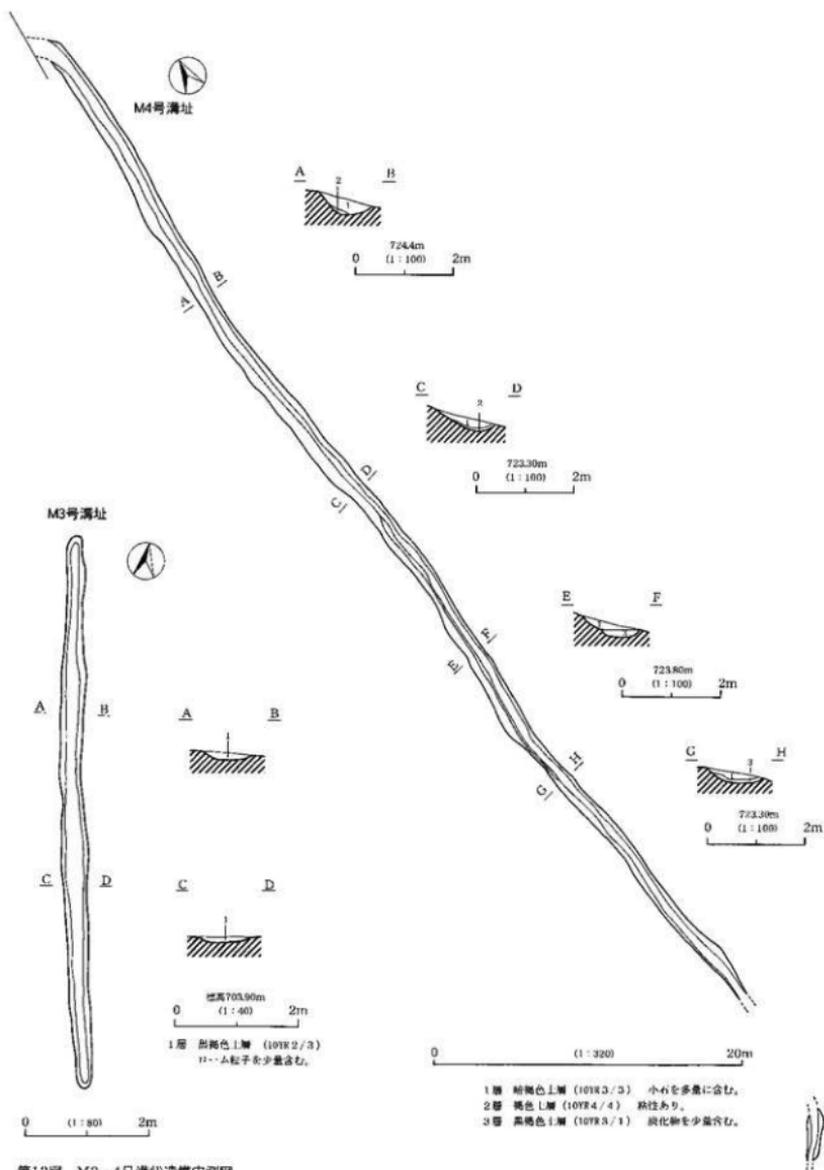
(4) M4号溝状遺構 (第13圖, 写真図版九)

本址は、調査区北側の宮田地籍に飛び出した尾根の東斜面に検出された。検出状況は尾根斜面を南北方向に、北に行くに従い斜面を降りるように検出された。北端はやや北西側に曲り消滅していた。南側は一部とざれる部分があるが、南端に検出された部分も同一遺構と判断すると西に緩やかに曲がってこちらも検出できなくなった。溝の形態は逆台形であり、底の形状は平坦で一部に道状の硬質面も確認できた。規模は検出長89.8mで、北側幅1.08m・深さ47cm、中央部幅1.20m・深さ40cm、南側幅1.12m・深さ30cmを測る。

本址からの出土遺物は須恵器片が1片出土したのみである。これらの事から本址の所産時期も不明であるが、遺構の性格として、本址の検出位置の南側延長線上には道路で横断されて検証はできなかったが、M1号溝状遺構が直なる事、また北側は斜面を徐々に下っている事、硬質面が確認できた事、本址の検出された尾根東側斜面の北端には斜面を登ってくる赤線が現在も存在する事、これらの理由により、M1号とM4号溝状遺構は同一遺構で、瀬戸地籍から平賀地籍に抜ける尾根越えの古道と推定する。



第12図 M1・2号溝状遺構実測図



第13図 M3・4号溝状遺構平面図

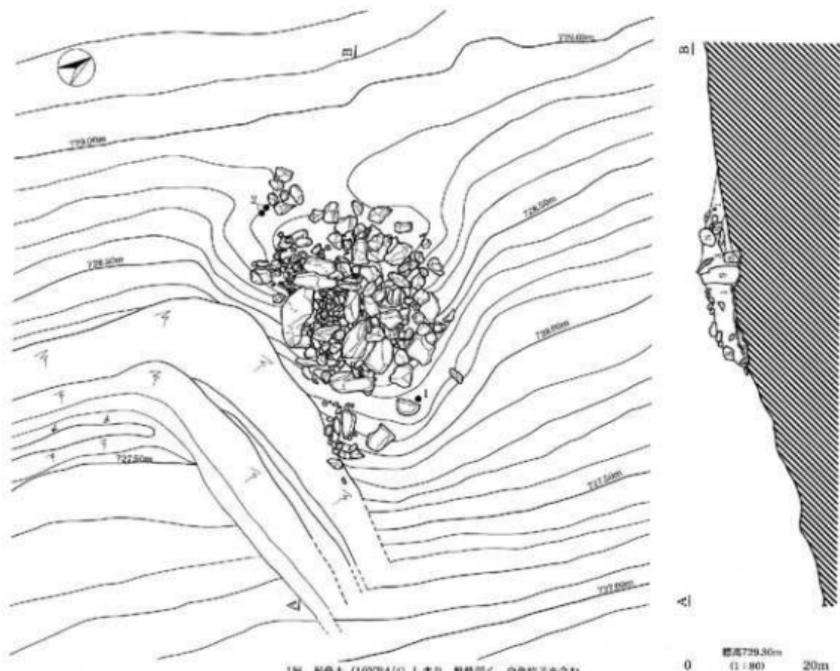
5. 古墳跡

(1) 東久保北古墳 (OT2) (第14~16図, 写真図版十二~十五)

本墳は、東久保遺跡の調査区南側の東斜面であるO-ム-20Grに位置する。本古墳は未周知の古墳であり、今回試掘調査により発見された。東久保遺跡の丘陵下に東久保古墳群が存在するが本古墳との群構成は不明瞭であったため、本古墳の名称は新たに東久保北古墳と命名した。検出された位置の標高は728.5mを測る。残存状況は南側が畑地境による溝で、また石室羨道部は自然地形の傾斜により壊され、一部は耕作時の不要な礫の集め場となっていた。検出状態は、石室奥壁の先端が僅かに表土上に露出しており、また古墳北側は農道だったため、盛土と碎石が行われていた。

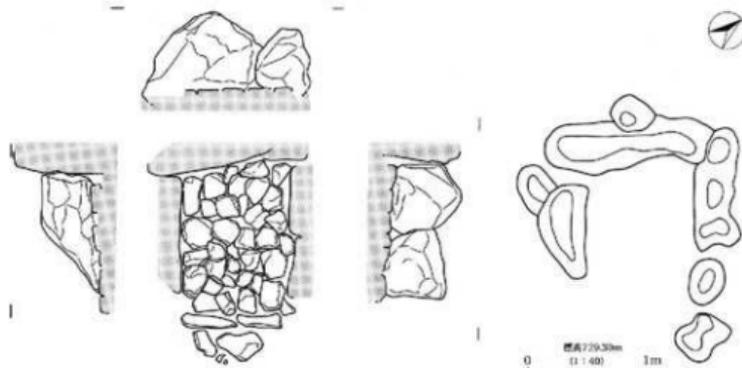
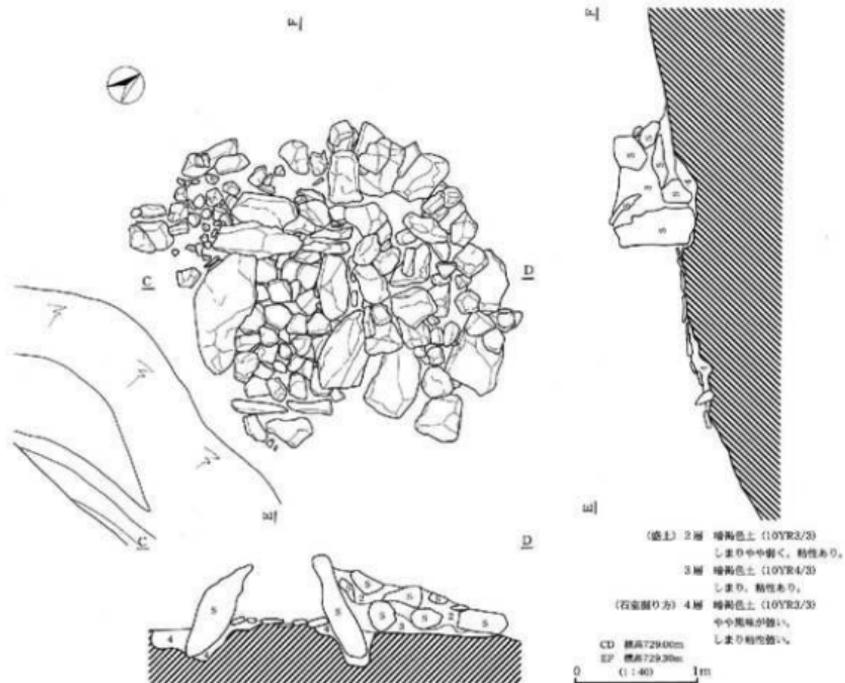
調査の結果、本古墳からは周溝が検出されなかったが、墳丘を押さえる所謂「外溝列石」が北東側を中心に良好に残存していたため、墳形は円墳と考えられる。規模は直径約3mを測る。墳丘は40cmほどが残存していたが、盛土は礫と土の混合土で、第14図の平面図では礫が積まれたような所謂「石積塚」の様であるが、断ち割り図にも示したように等間隔に配置した礫の中に土を充填し、また礫を積み土を盛り上げるといった版築の状況が観察できた。なお、墳丘の残存部分が少なかったため、所謂「第一次墳丘」のみしか確認できなかった。

主体部は南開口の横穴式石室で、形態は羨道部と玄室部の境に仕切り石を持ち、倒れていたが袖石と考えられる礫も確認できたことから、両袖形横穴式石室と推定される。玄室の規模は玄室長1.20m・幅0.88mで、奥壁・側壁は礫最大面を使う「腰石」的な積み方である。棺床面は手のひらぐらいの大振りな礫を一旦に敷き詰めていた。石室の掘り方は側壁と奥壁部に確認できた。特に側壁の掘り込みは強く、薄い石材を立てるための掘りと考えられる。玄室内の覆土は既に何度かの擾乱を受け、ぼそぼそした表土に近い土であった。

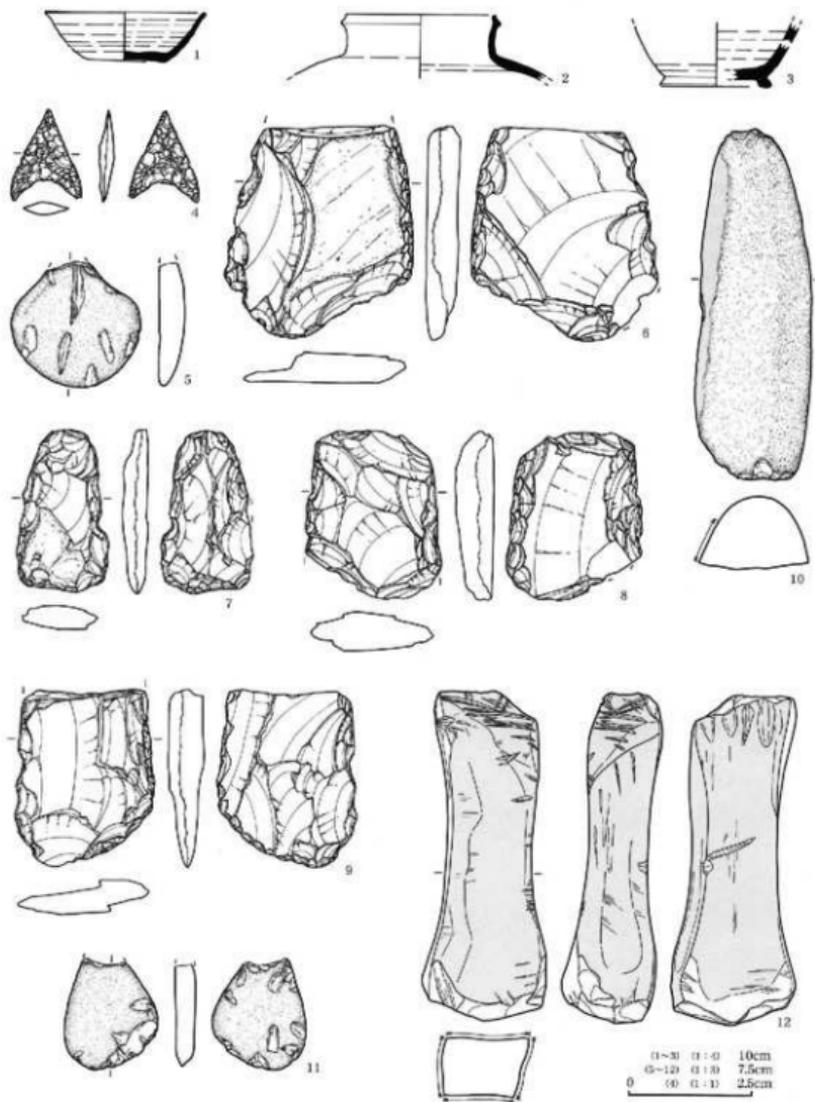


第14図 東久保北古墳検出状況図

1線 褐色土 (10YR4/0) しまり、礫散在、白色数字を含む。



第15図 東久保北古墳全体及び石室展開図



第16图 東久保北古墳出土遺物実測図

本墳からの出土遺物は、墳丘確認時に出土した須恵器類と墳丘に積まれた後世の礫中に混じって石器類が出土した。玄室内からは奥壁際から粉状態の骨が一部出土したが、部位等は不明である。須恵器3点と石器9点を図示した。1の須恵器杯は石室開口部脇の墳丘縁の間から出土した。口縁部を欠損するがほぼ完形である。2は須恵器短頸壺の口縁部で石室北西側の礫群中より出土した。これら2点はその特徴より9世紀前半代の所産と考えられる。3は須恵器壺底部で表土に近い礫群中よりの出土である。4は黒曜石の石鏃である。5と11はスプーン状の礫で後家山遺跡においても同様の形状の物が出土しているため掲載した。ただこれらの礫についた傷は耕作時の機械や鉄製農具による傷と考えられる。6～9は打製石斧で7のみ小型で挟りが入り形態が異なる。10は磨石と磨石の機能を両方持った礫で磨きは上下先端に顕著に確認される。12は大型の砥石である。表土近くの礫群中より出土したので帰属時期は不明確であるが、本遺跡から北方向の別尾根に所在し調査された寄山古墳や、近年調査された東久保古墳群1号墳より礫石が出土しており、特に寄山古墳は墳丘整地地面より出土している。因って本古墳の資料も帰属の問題は類例の確認の後判断したい。

本古墳の構築時期であるが、出土遺物の中に築造或いは埋葬時期を推定できる物はない。先に述べた須恵器2点も9世紀前半代の資料であり、寄山古墳でも指摘されているように墓前供養かその他の目的による古墳への末訪時間と同のため、本古墳の埋葬時期を示す物ではないと考えられる。因って、古墳の築造形態と石室形態から判断すると、まず、山傾面に造られた周溝も省略する古墳である。次に石室規模が非常に小規模であること。玄室長1.20m・幅0.88mの規模は現在までの佐久地方の横穴式石室の規模のうち最小である(実測図が発表されている石室の内)。玉類・鉄製品の出土が無い。以上、省力化と小規模化の2点を助案すると、古墳終末期でも最も遅い時期である8世紀段階を想定できると考える。

No.	品 類	規 格			形 態・測 量・文 様		色 澤	出 土 位 置	備 考
		口径(長)	底径(幅)	高さ(厚)	外 観	内 観			
1	須恵器 杯	12.8	6.2	4.0	口縁ナデ 底面彫刻あり	口コナデ	7.5Y6/1 (R)	完全実物	
2	須恵器 短頸壺	(12.0)	—	(5.2)	口縁ナデ 自然磨行著	口コナデ	7.5Y6/1 (R)	同様実物	
3	須恵器 壺	—	(5.0)	(0.9)	口コナデ 底面高台彫刻	口コナデ	7.5Y6/1 (R)	同様実物	活
No.	品 類	高 寸	残存寸	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置
4	石鏃	黒曜石	完形	9.0	9.0	3.0	0.30	鋼ヤソフハンマーによる押圧痕	
5	礫石 Y (スプーン状)	砂岩	基部欠損	76.0	79.0	18.0	128.20	広面に大きな刃物状の条痕。基部は磨きによる痕跡でもごく微に有り	押積
6	打製石斧	安山岩	刃部欠損	126.5	122.0	18.0	355.50	刃部が二枚付	
7	打製石斧 (他人)	安山岩	完形	98.4	56.3	14.5	98.30	刃部が二枚付	活
8	打製石斧	安山岩	断片	101.7	84.0	23.7	249.70	刃部が二枚付	活
10	磨石・砥石	砂岩	完形 Y	214.0	(67.0)	(44.0)	880.00	片側面に磨り、上下先端に磨き	押積
11	磨石・砥石 (スプーン状)	砂岩	完形	68.0	56.0	7.0	57.50	両面に大きな刃物状の条痕	活
12	砥石	砂岩	完形	201.0	33.0	36.0	920.00	縦溝数4、一面に深い条痕あり	活

第4表 東久保北古墳出土遺物観察表

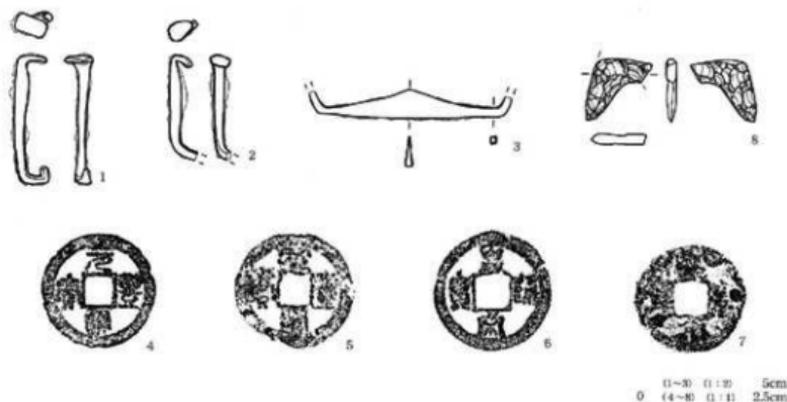
6. 集石墓

(1) OT1号墓 (第17,19回 図版十一)

本址は調査対象地内の最高位である標高739mより検出された。グリットは「サー16・17Gr」である。遺構の残存状況は良好である。本址の検出状況は、まず東西・南北8m四方に準大の礫が「ヤックラ」状に積み上げられていた。その礫の厚みは最大60cmを測り、形状は円錐形を呈していた。これらの小粒の礫を取り除くと中心部から人頭ほどの大型の礫を不規則に集め積んだ様な状態の部分が検出された。これら礫の状況は北東に長軸をとり、規模は長軸360cm・短軸210cmを測る。これら大型の礫群を取り除くと礫下から長軸198cm・短軸171cmの不整形の土坑が検出された。土坑深さは25cm前後を測り、覆土中には礫が多く混ざっていた。また、土坑中央部からは人骨の一部が出土した。

出土遺物は非常に少なく、図示した鉄製品と古銭・石器があったのみである。出土位置は1は土坑内から、2は土坑覆土、3はヤックラ状の小石の間からそれぞれ出土した。1と2は鉤状に両端が曲げられた角釘と考えられる。1はほぼ完形、2は先端が欠損している。3は火打金と考えられる。4～7は古銭である。出土位置は4～6が土坑内、7は礫群中より出土した。4と5は「元豊通寶」(北宋1078)、6は「皇宋通寶」(北宋1038)、7は不明であった。8は黒曜石の凹基石鏃である。最大長1.3cm・最大幅1.35cm・最大厚0.25cm・重量0.3gを測る。先端が欠損している。細文の石鏃の可能性もある。

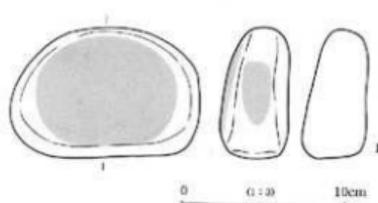
これらの状況より本址は中世に造られた集石墓の一類型と考えられる。



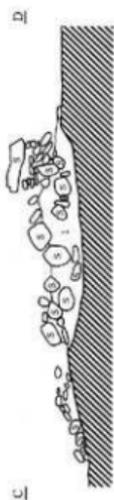
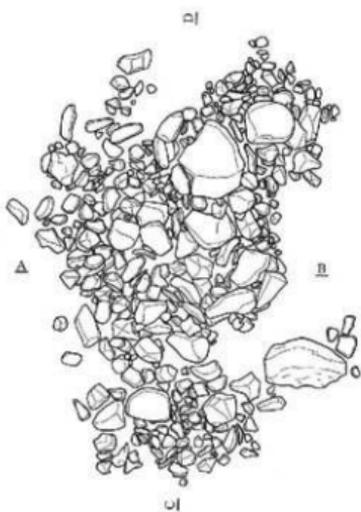
第17回 OT1号墓出土遺物実測図

7. 遺構外出土遺物

石器1点を図示した。1は磨石と考えられ、調査区の表採資料である。形態は楕円形の川原石であり、最大面2面と側面に擦りが観察できる。重量は660gを測る。



第18回 遺構外出土遺物実測図



1層 暗褐色土 (15YR3/2) しまり、粘性ややあり。

標高728.70m
(1 : 40) 1m



石の範囲

第19図 OT1号墓実測図

第3節 科学分析

(1) 集石墓〔OT1〕、東久保北古墳〔OT2〕出土の人骨について

バリノ・サーヴェイ株式会社

管理者 楠木 真吾

担当者 千葉 博俊

分析者 金井 慎司

1. 東久保遺跡の出土骨

はじめに

長野県佐久市平賀に所在する東久保遺跡は、内山川沿いに延びる丘陵上部の尾根に位置している。本遺跡では、弥生時代後期の住居跡が多数検出されており、地形・立地等から高地性集落の可能性があると推定されている。また、横穴式石室をもつ円墳や中世の集石墓が検出されている。円墳は、検出状況や遺物から8世紀代に造葬が行われたことが確認されている。

本報告では、集石墓及び円墳の石室内から出土した人骨とみられる骨片の鑑定を行い、その種類や部位等を明らかにする。

1. 試料

各試料の概要を以下に示す。

・OT1

集石墓(OT1)からは、遺構中央付近から古銭とともに骨片(No.3)がまとまって検出されている。当遺構からは、この他に釘?なども出土している。骨片は、いずれも遺存状態が悪く、植物根による穿孔もみられる。また、大半の骨片が細片となっており、最も大きな骨片でも約3×5cm程度である。

・OT2

石室内から白色を呈する骨粉状のものが土塊(No.6)とともに採取されている。

2. 分析方法

・OT1

骨片を土壌中から抽出し、乾いた刷毛等によって、表面に付着した土壌を除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼あるいは双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴から種類および部位を同定する。なお、同定は、東京慈恵会医科大学解剖学講座第1の竹内修二氏の協力を得ている。

・OT2

骨粉状の試料のため、水洗すると白色物質そのものが溶解、消失する恐れがあったことから、土壌中より抽出を行わず、現状の状態で実体顕微鏡により観察を行う。

3. 結果および考察

・OT1

OT1から出土した骨片は、ヒトの頭骨片である。これらの骨片のうち、縫合部が見られる骨片が確認された。縫合は外板で明瞭であるが、内板でほとんど確認されない。馬場編著(1998)によると、頭蓋の縫合は、外板と内板で変化の程度が異なること、個体差が大きいなどの理由によって精度の高い年齢推定の指標とならないとされる。ただし、

一般的な状況から、20代では、縫合の消失が全くみられないか、あってもごく僅かである（馬場編著,1998）。試料の保存状態が悪く、破片試料であることから詳細な検討は不可能であるが、縫合の状況から、本人件は成人、少なくとも壮年(20-39歳)以上の可能性がある。

・OT2

OT2に認められた白色物質は、1-2mm程度の大きさで、可溶性の物質であった。顕微鏡下での観察では、結晶化した状態にあるものと判断される。緻密質や海綿質などの組織構造が認められないことから、骨と断定することはできなかった。そこで、この白色物質を抽出し塩酸処理を行った結果、反応が認められたことから、カルシウムを主成分とする物質の可能性がある。当試料の出土状況等も考慮すると、骨粉の可能性が示唆されるが、同定に耐えうる形態的特徴は観察されないことから、分析による種類・部位等について言及することはできない。

引用文献

馬場 悠男(編著),1998,考古学と自然科学① 考古学と人類学,同成社,191p.



東久保遺跡全景
M1号溝状遺構を抜き、左側が東久保遺跡、右側が東久保遺跡Ⅱ



東久保遺跡遠景（東より）



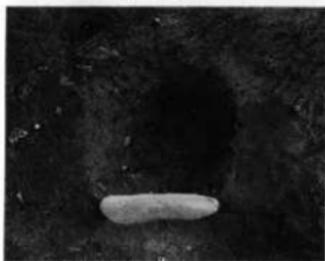
東久保遺跡ⅠとⅡ（Ⅱ地点は試掘状況）



H1号住居址



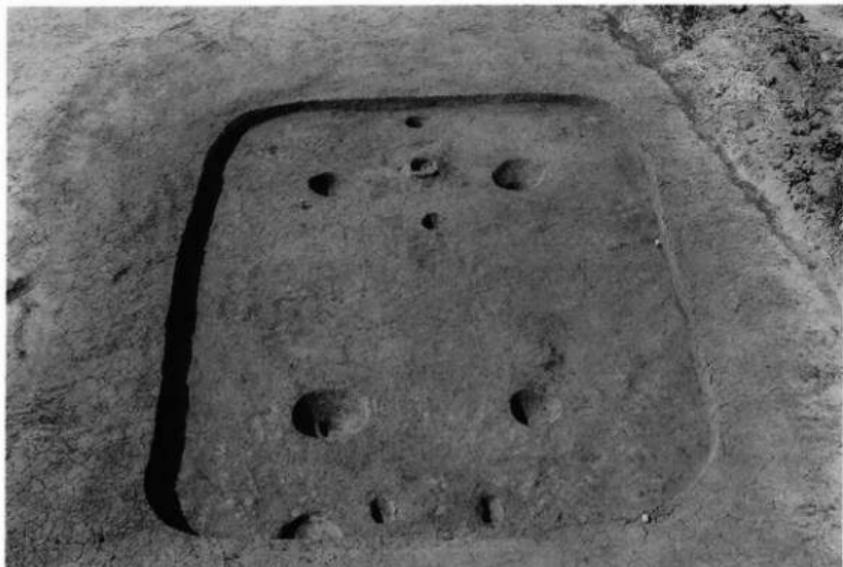
H1号住居址炉検出状況



H1号住居址炉掘り方



H1号住居址遺物出土状況



H12号住居址



H12号住居址 遺物出土狀況



H2号住居址炉検出状況



H2号住居址如壺方



H2号住居址遺物出土状況



H2号住居址遺物出土状況



H2号住居址鉄鍬出土状況



H2号住居址鉄鎌出土状況



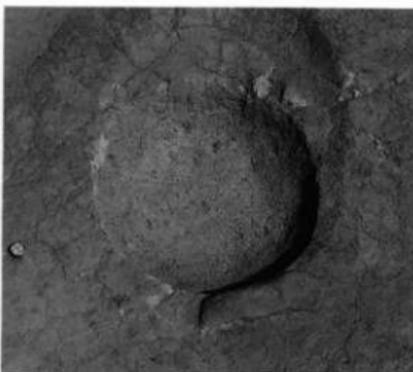
H3号住居址



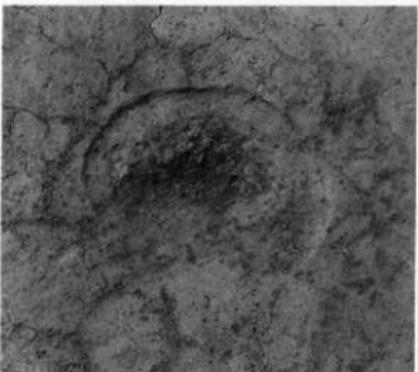
H3号住居址遺物出土狀況



H3号住居址炉1検出状況



H3号住居址炉1掘り方



H3号住居址炉2出土状況



H3号住居址炉2掘り方



H3号住居址遺物出土状況



H3号住居址遺物出土状況



F1号独立柱建物址



M2·M3号沟状道槽



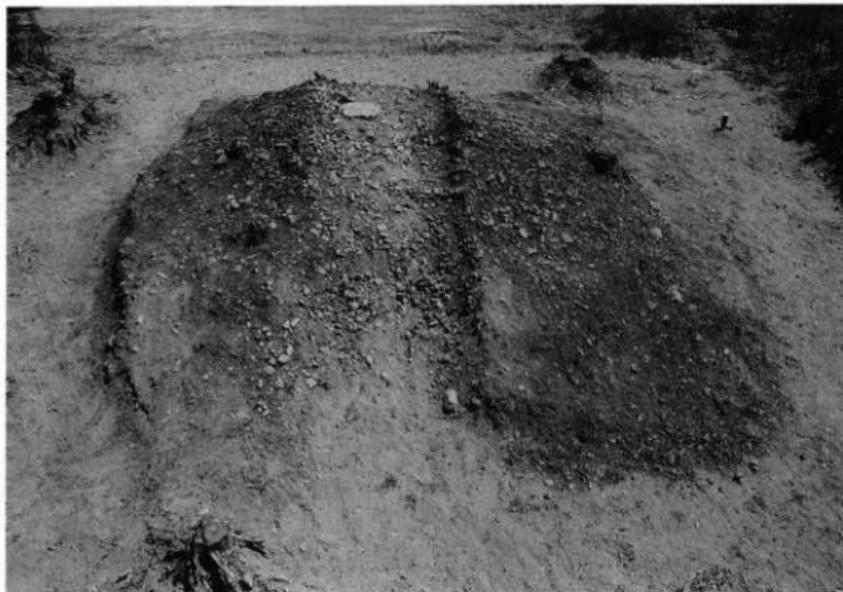
M1号沟状道槽



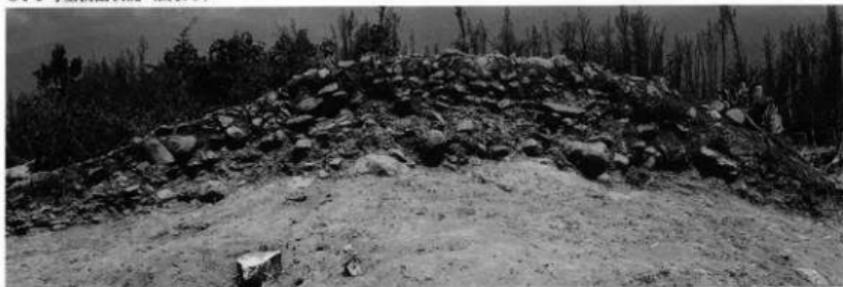
M1号溝状遺構



M4号溝状遺構



OT1号墓検出状況（西より）



OT1号墓表土断ち割り状況（南より）



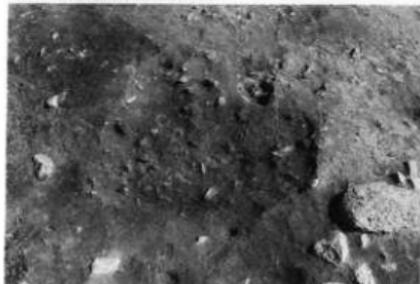
OT1号墓表土断ち割り状況（北より）



OT1号墓全景 (南より)



OT1号墓側面全景 (西より)



OT1号墓土坑全景 (南より)



OT1号墓土坑内出土遺物状況



東久保北古墳検出状況（東より）



東久保北古墳全景（東より）



東久保北古墳石室全景



墳丘掘り下げ風景



東久保北古墳遺物出土状況



外護列石検出状況（東より）



奥壁構築状況



墳丘控積み状況



墳丘控積み新ち割り状況



石室及び列石検出状況（東より）



外環列石検出状況（北より）

石室全景
(東より)



奥壁全景



右側壁全景





H1-1



H1-2



H2-7



H1-3



H2-2



H2-1



H2-4



H2-3



H2-6



H2-5



H2-9



H2-8



H3-1



H3-5



H3-4



H3-2



H3-3



H3-6

H3-1~6 (1:10)



H2-25



H2-26



H2-24



H2-27



H2-15



H2-14



H2-13



H2-12



H2-11



H1-6



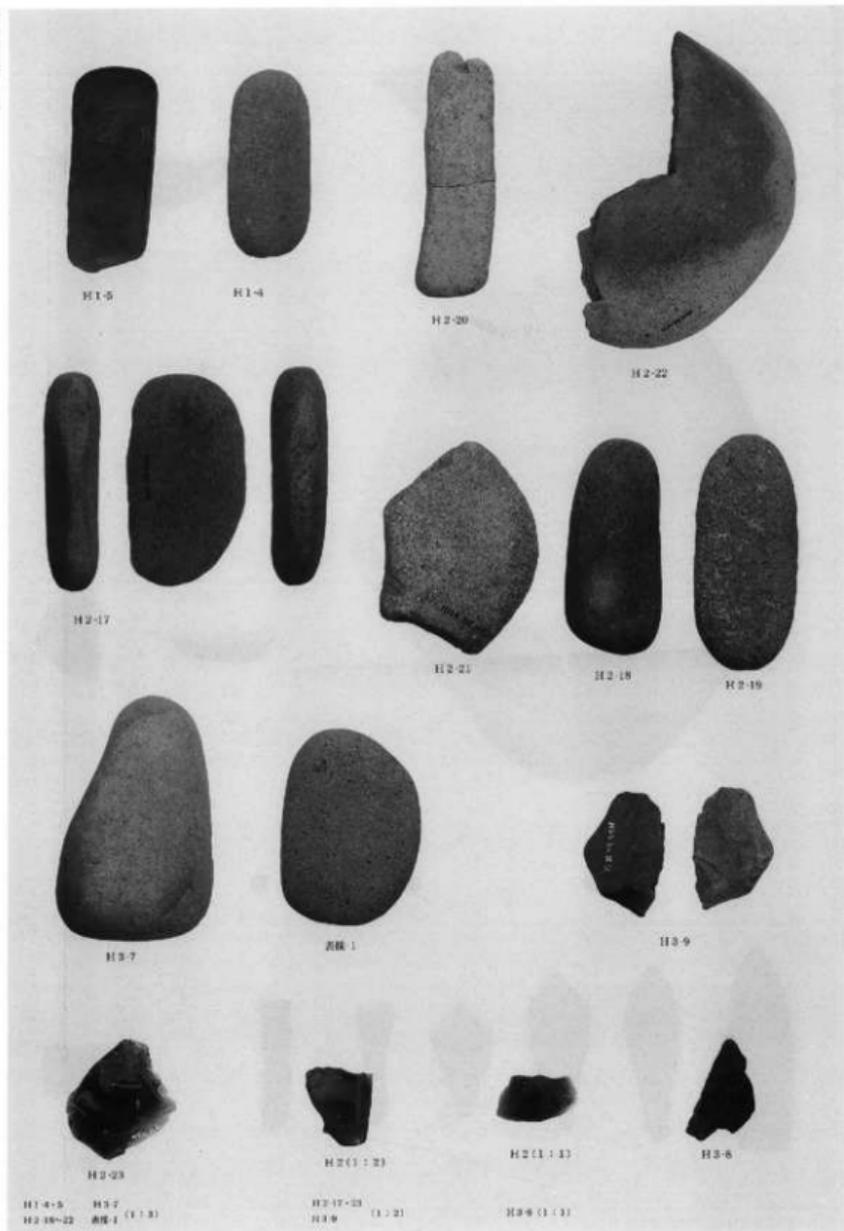
H2-10

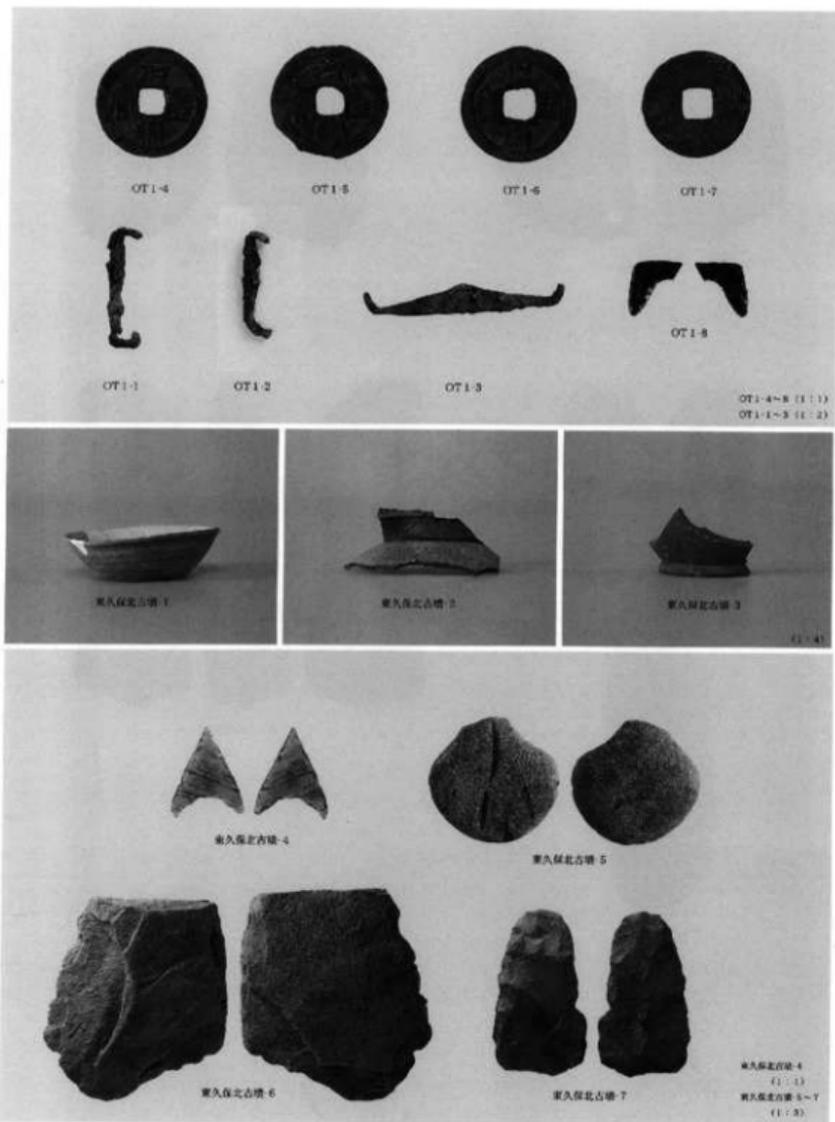
H1-6

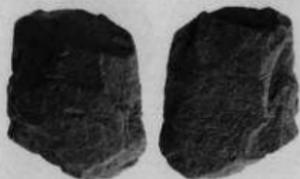
H2-11~15

H2-24~27 (1:1)

H3-10 (1:2)



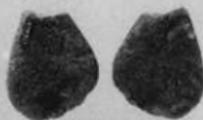




聚久保北古墳 8



聚久保北古墳 9



聚久保北古墳 11



聚久保北古墳 10



聚久保北古墳 12

宮田遺跡 I・III



1 号劍水坑 (D56) 53-1
57-6
劍頭殘片 青銅質
(12c 表)
素正文



11-33
劍頭殘片 青銅質
(13c)
素正文



D-19
劍頭殘片 青銅質
(12c)



2 号劍水坑 (D64)
劍頭殘片 青銅質
素正文 (13c)



M-2
劍頭殘片 青銅質
(15c 表-15b)



D-21
劍頭殘片 青銅質
素正文



M9 53-3 60-6
大劍頭殘片
(13c 表-14b) (北段遺物)



D-24
空劍中 劍室
(14c 中斷部)



D-25
空劍中 劍室
(15-16c)



D-25
空劍中 劍室 大頭
(16c 中斷部
大頭上段以後)



M9 54-4
60-9 空劍室 (中斷)



M15
空劍室 (中斷)



Z
空劍室 (中斷)



M20
空劍室 (中斷)



1 号劍水坑 (D56)
空劍室 (中斷)

0 (1:2) 5cm



16

D-子25 54-6
65-22
青磁 黄绿
（中野 中国産小）



17

M20
瀬戸瓦器産地用 丸網
（17c 野）



18

M20
赤澤 山崎・平崎
（17c 関手～18c）
（注）赤磁



19

M4 54-7 60-17
赤澤 高野・平崎
（17c 関手～18c）
（野）片割



20

D-Z
瀬戸瓦器産地用 赤
（18c 木田野）



21

M4
瀬戸瓦器産地用 赤
（18c 木田野）



22

Z
伊万里・赤
（18c）
（足利古野野）



23

M20
瀬戸瓦器産地用 輪竹流
（18c）



24

M20 53-2
60-11
赤澤流 赤竹流
（18c 15野 白山焼？）



25

M4
赤澤流 赤竹流
（18c 15野 白山焼？）



26

Z 54-6
69-2
伊万里 赤
（18c～19c野）
赤一平野



27

D区Z
伊万里 青
（16 野）



28

D区Z
伊万里 赤
（16 野）



29

D-子 22
伊万里 赤
（16 野）



30

M30
瀬戸瓦器産地用 式野丸網
（16 野）
赤澤子野網不明



31

D区Z
瀬戸瓦器産地用 同輪丸網
（16 野）



32

M20
赤澤流？土敷赤一平野
赤澤流一平野



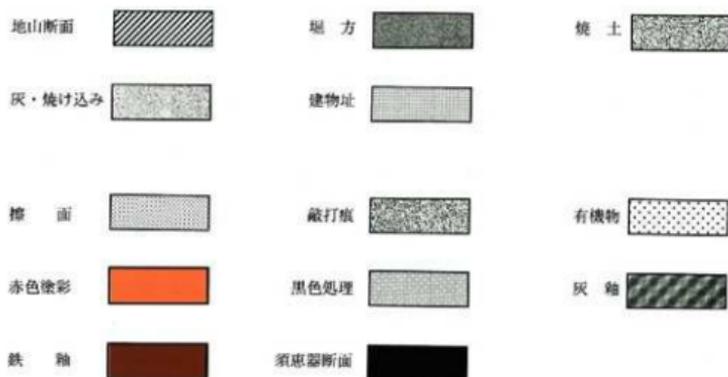
33

M20
赤澤流 赤竹流
（16野赤一平野 白山焼？）

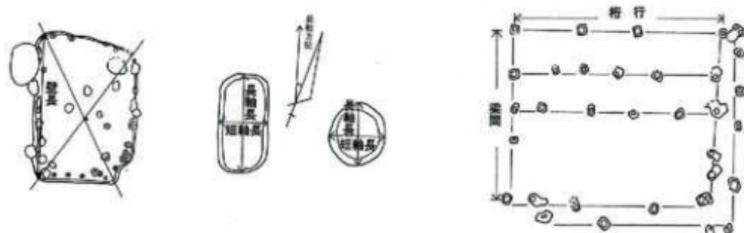
0 (1:1) 5cm

凡 例

1. 遺構の略記号は、竪穴状遺構 (Ta)・掘立柱建物址 (F)・土坑 (D)・溝状遺構 (M) である。
2. 挿図の縮尺は次のとおりである。竪穴状遺構・掘立柱建物址 1/80と 1/150 土坑 1/80 以上が基本的なものであるが、これ以外の遺構や遺物も含めて、挿図中にその縮尺を示した。
3. 各一覧表の数値について、不明は一、現在値は〈 〉、推定値は()とした。
4. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
5. 土層・遺物胎土の色調は1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
6. 遺物の挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。また、本文中の遺物番号は全て共通である。
7. 調査区グリッドは公共座標に従い、間隔は4×4 mに設定した。
8. 竪穴状遺構の面積は床面積(下端範囲)を測定した。
9. 第2節の第39図～第47図に示した『土坑』73基の中で、第2節(5)～③で扱う「その他の土坑」40基については、土坑名称の脇に(③その他の土坑)と()書きにして表示した。〔例〕D 1号土坑(③その他の土坑)
10. 挿図中のスクリーンパターンは以下のことを示す。



11. 各遺構の計測は次の凡例に従った。



第VI章 宮田遺跡 I・III

第1節 宮田遺跡 I・III地点の概要

宮田遺跡 I・III地点は佐久市大字瀬戸に所在する。I地点は同じく調査が行われた後家山遺跡・東久保遺跡が存在する後家山の尾根（丘陵）に添った谷地に所在する。また、III地点はこの谷地の西側に当たり、後家山遺跡が展開する尾根の裾野が水田と接する平坦部に位置しており、本地点から前方西側は佐久の穀食地帯を担う水田地帯が広がっている（第1図）。周辺の遺跡としては、丘陵西側の水田面に古墳時代後期の大集落が検出された榎村遺跡、谷田を越えた北側の丘陵には縄文時代中期の集落が調査された奇山遺跡等がある。

調査の結果、宮田遺跡は谷地地形に営まれた中世の生産領域を残す遺跡であることが確認された。調査区 I 地点の谷の出口付近に居住区を構え、上に谷が狭まる調査区中央から上方部にかけて農耕生産が行われた畝（畑）が検出された他、当周辺からは何らかの生産活動が行われた事を示す施土・炭化物を含む土坑が26基確認された。

此等各遺構の検出状況を見ると建物址群、更には畝（畑）などは溝状の遺構によって区画されていることが窺われた（第10図）。また、佐久市根岸に所在する「極名平遺跡」で看られた『集水的な遺構』と同形態を示す『集水坑』が今回の調査によって5基確認されている。こうした溝状遺構によって区画される遺構、或いは、意図的に水を溜めた集水坑等については極名平遺跡の報告書により指摘されつつあったが今回の調査によって再確認されたと言える。

他に検出された遺構の中で注目すべき遺構に先の「施土・炭化物を含む土坑」がある。本形態を示す土坑は26基が看取され、その総てが調査区 I 地点から検出された。これらの土坑の分布は谷状の地形が東から西に広がる東端部の周辺から多く確認され、特に大型の土坑はD19・20号土坑のように裾野の急傾斜地、若しくはD9号土坑が確認された若干傾斜が緩くなる谷の始まる（谷の奥まった）地点から検出されている。此等土坑から検出された炭化物の材質は科学分析の結果コナラ・クスギの材質が大半を占めているが、D10号土坑からは「藤」の木のみが材質として使用されている事が明らかとなった。こうした遺構について現代の見方からすると、「炭を焼いた遺構」として直断し得るかもしれない。しかし、中世における本遺構が、どのような性格を持った遺構であったのかを積極的に窺われる資料を筆者の力が及ばず得ることができなかった。このため本谷地地形に展開した中世の農業生産を営む人々と、本遺構がどのような関わりをもち、また、どのような生産機能がなされた遺構であったのかを窺い知ることができなかった。ところで過去調査が行われた佐久平における中世集落遺跡の立地は、東五里田遺跡・柳堂遺跡、或いは、筒村A・B遺跡、外のように主に平坦地、或いは、山間地に確認される遺跡がその大半であった。しかし、今回調査が行われた宮田遺跡は谷地地形（谷状地形）に遺跡が展開しており、過去に確認された中世集落址とは立地する地形に大きな違いが窺われた。こうした点からであろうか、検出された遺構においても上記したように何点かに注意すべき遺構が観察された。

<検出遺構>

宮田遺跡 I 地点

竪穴状遺構	5棟
建物址群	6棟
ピット群	谷の出口（西側）・谷の奥まった（東側）付近の2ブロックに密集する
井戸址	3基
焼土・灰が含まれる土坑	26基
集水坑	4基
上坑	40基
溝状遺構	14基
畝（畑）	4基

<出土遺物>

輸入陶磁器
国産陶磁器
土鍋
土師質土器（カワラケ）
石臼
石製品
鉄製品（釘他）
縄文土器
石器類

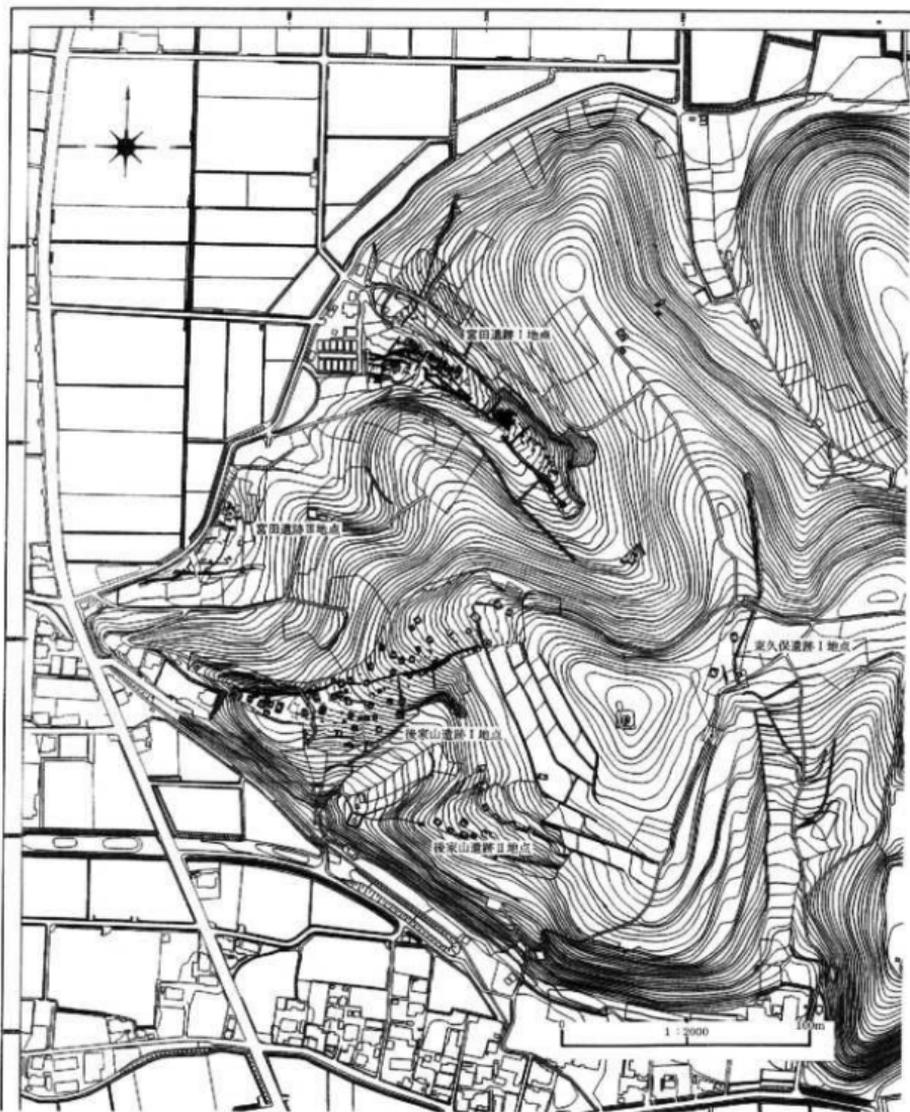
<検出遺構>

宮田遺跡 III 地点

掘立柱建物址	2棟
ピット群	調査区北側のみに密集する
集水坑	1基
土坑	16基
溝状遺構	4基

<出土遺物>

輸入陶磁器
国産陶磁器
土鍋
土師質土器（カワラケ）
石製品・鉄製品（釘他）
有舌尖頭器



第1図 宮田遺跡 I・II地点、後家山、東久保遺跡位置図

第2節 検出遺構

1 竪穴状遺構

宮田遺跡 I・IIからは5基の竪穴状遺構が検出され、その総てが宮田遺跡1地点から確認された。これら竪穴状遺構の時期決定については共存する遺物が無く正確な時期決定はなされない。しかし、中世に偏属すると考えられる建物址群・土坑等の覆土の整合性、また、調査時における当遺構の検出状況などから推し、これらの竪穴状遺構は中世であることが考えられる。

因みにTa4号内の土坑からは打製石斧・ナイフ型石器（第63図）が出土しているが遺構と共存する可能性は低く、此の2点は混入遺物と考えられる。

Ta1号竪穴状遺構（第2図、図版三）

本址は調査区西側のD-ツ・テ-24グリッドに位置し、東壁・西壁の一部が攪乱を受けている。形態は東壁に比べ西壁が若干長い「不正方形」を呈している。規模は北壁長4.0m、東壁長2.12m、西壁長（3.20m）南壁長（4.16m）を測る。壁高は8～16cmと浅く、また覆土の残存状況からも著しく削平されている様子が窺われる。床面は平坦で、ピットは9個確認された。形状はいずれも楕円形を呈し、この内P7は北壁のほぼ中央部に配され規模32×40cm、深さ約40cmを測り、主柱穴の一つと考えられる。覆土は床面直上の1層（第2図）が僅かに残存しており、炭化物が少量混入することが認められた。

Ta2号竪穴状遺構（第2図、図版三）

本址は調査区西側のD-ケ20グリッドに位置する東斜面から検出された。残存状態は整地の際に受けたと思われる破壊・削平の影響を受け（第2図B-B'）、北壁から西壁の一部、及び床面がわずかに確認されたのみである。よって本址全体の旧状形態は把握できなかった。残存する壁長は北壁長が約4.4m、西壁長2.8mを測る。壁高は北壁高16cm・西壁高8cm前後であった。周溝が北壁直下に添って配され、北西・北東コーナー付近で立ち上がる。西壁の状況から推し住居址を一週しない溝であることが考えられる。幅約16cm、深さ約8cmの溝である。ピットは西壁の直下より1個確認された。形状は円形を呈し、規模32×32cm、深さ約16cmを測る。覆土は2層に分割され、1層中からは炭化物が少量混入することが認められた（第2図）。

Ta3号竪穴状遺構（第3図、図版三）

本址は調査区西側のD-キ・ク-25・26グリッドに位置する。北東コーナーの一部が近世と思われるピットによって破壊を受けている。形態は隅丸方形を呈し、南東コーナーがわずかに張り出している。規模は東壁・西壁・南壁・北壁共に約2.8m前後を測る。壁高は24～40cmを測り、床面から緩やかに立ち上がる。床面は中央付近が堅くしまっておりほぼ平坦ではあるが、僅かに「皿状」を呈し中央部に向かって傾斜している。覆土は3層に分割されプライムラリ一な堆積状況を示し、I・II層中には炭化物が少量混入する（第3図）。ピットは検出されなかった。

Ta4号竪穴状遺構（第3図、図版四）

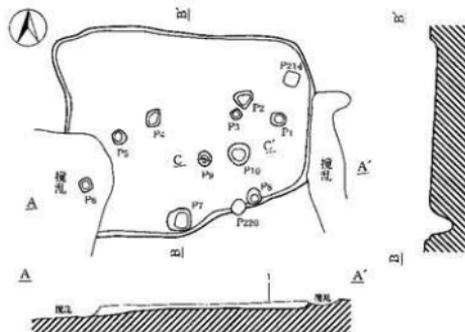
本址は調査区西側のD-オ・カ-25・26グリッドに位置する。形態は隅丸方形を呈し、北西コーナーに張り出し部を有する。規模は東壁長3.4m、西壁長約2.6m前後、南壁長3.4m・北壁長4.1m前後を測る。壁高は東西南北の各壁共に56～72cmを測り、東・西壁ともに床面から緩やかに立ち上がる。また、南・北壁の上部は「ラッパ状」に開いた張り込みがなされていることが確認される。北西コーナーの張り出し部形状は「円形の土坑状」で、確認面よりの深さは約80cmを測る。尚、当北壁の直下で径24cm、深さ約20cm前後のピットが1個確認された。床面は中央付近が堅くしまっておりほぼ平坦であるが、張り出し底部は床面より僅かに窪み、「皿状」を呈している。覆土は7層に分割されプライムラリ一な堆積状況を示す。ピットは検出されなかった。

Ta5号竪穴状遺構（第3図、図版四）

本址は調査区東側のI-ヌ・ネ-9グリッドに位置する東斜面より検出された。残存状況は整地の際に受けたと思われる破壊、及び削平の影響を著しく受け、確認されたプランは、北壁及び西壁の一部が検出されたのみである。

残存する壁長は、北壁長2.4m・西壁長約1.0m、東壁長約0.9mを測る。壁高は10~20cmを測り、北・東・西壁はともに床面からはほぼ垂直に立ち上がる。床面は比較的堅く、ほぼ平坦面を呈すると思われる。本遺構の北側中央付近から多量の焼土・炭化物が検出され、覆土1層中には焼土粒子が多量に混入していた。そしてその直下からは32cm×40cm、深さ約16cmに掘り窪められたピット状の穴が認められる。

Ta1号竪穴状遺構



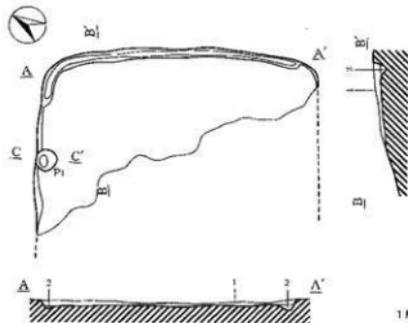
第1表 Ta1号竪穴状遺構 計測表 標高669.10m

遺構番号	Ta1	検出位置	D-ケー-24グリッド
遺構形状	P21a-P20	平面形状	不整形方形
面積		長方形	N-24-6
		長さ	幅
北壁	400mm		16mm
東壁	212mm		12mm
南壁	220mm		16mm
西壁	416mm		20mm
覆土の状態	自然堆積	壁面の状態	ほぼ平地
柱穴	中央に3本 中央より真上側に4本 南壁に2本 西側に1本	出土遺物	なし
備考			
測量番号	第7回	図紙番号	二-1



1層 赤褐色土層 (10YR3/1) 炭化物を少量含む。

Ta2号竪穴状遺構



第2表 Ta2号竪穴状遺構 計測表 標高669.90m

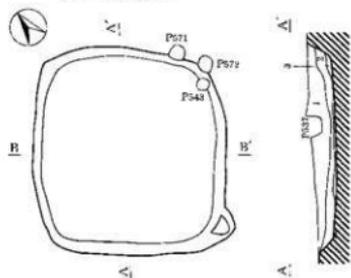
遺構番号	Ta2	検出位置	D-ケー-20-21グリッド
遺構形状	---	平面形状	(方形)
面積		長方形	幅
		長さ	幅
北壁	400mm		20mm
東壁	350mm		20mm
南壁	1700mm		16mm
西壁	---		---
覆土の状態	3層 自然堆積	壁面の状態	中央部に浅かいや中掘削(確認)する
柱穴	西側に1本	出土遺物	なし
備考	考古学部に送って用済みが認められる。		
測量番号	第2回	図紙番号	三-2

- 1層 赤褐色土層 (10YR3/2) コム粒子・小石・炭化物を少量含む。
- 2層 赤褐色土層 (10YR4/3) コム粒子を多量に含む。
- 3層 暗褐色土層 (10YR3/3) コム粒子・コムブロックを含む。

0 (1:80) 4m

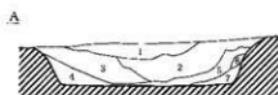
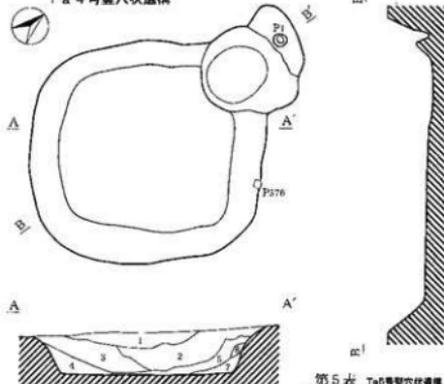
第2図 Ta1・2号竪穴状遺構実測図

Ta3号竪穴状遺構



- 1層 黒褐色土層 (10YR2/2)
小石・炭化物を少量含む。
2層 黒褐色土層 (10YR2/3)
小石・炭化物・焼土を少量含む。
3層 黒褐色土層 (10YR3/1)
ロームブロックを含む。

Ta4号竪穴状遺構



第3表 Ta3号竪穴状遺構 計測表

遺構番号	Ta3	検出位置	コナークワ-25-20グリッド
構造層別	P543-P571-P572	平面形状	方形
深さ	3.0m	長軸方向	N-40-E
北-南	2.5m	短軸	—
東-西	2.60m	深さ	3.0m
西-東	2.59m	—	—
深さ	3.0m	—	—
遺土の状態	自然堆積	床面の状態	中央部にかけて若干傾斜(段状)する
柱	穴なし	出土遺物	なし
備考			
調査番号	第3回	図面番号	三-3

第4表 Ta4号竪穴状遺構 計測表

遺構番号	Ta4	検出位置	Dオカ-25-20グリッド
構造層別	P570	平面形状	楕円形
深さ	3.0m	長軸方向	N-45-E
北-南	4.15m	短軸	2.4m
東-西	2.88m	深さ	3.0m
西-東	3.00m	—	—
深さ	3.04m	—	—
遺土の状態	自然堆積	床面の状態	平坦
柱	穴径90mmに1本	出土遺物	赤銅打撃器 石製ナイフ石器
備考			
調査番号	第3回	図面番号	四-1

- 1層 濃い黄褐色土層 (10YR5/3) 白色粒子を含む。
2層 緑褐色土層 (10YR3/3) 暗褐色土ブロック・にぶい
黄褐色土ブロックを含む。
3層 暗褐色土層 (10YR3/3) 暗褐色土ブロックを含む。
4層 黒色土層 (10YR3/1) 褐色土が帯状に散在。
5層 暗褐色土層 (10YR3/4) 砂・白色粒子を含む。
6層 暗褐色土層 (10YR3/1) 褐色土がブロック状に散在。
7層 暗褐色土層 (10YR3/4) 下部に水浸性の土層あり。

第5表 Ta5号竪穴状遺構 計測表

遺構番号	Ta5	検出位置	1-ヌ-0グリッド
構造層別	P130	平面形状	方形
深さ	—	長軸方向	—
北-南	2.04m	短軸	2.0m
東-西	1.95m	深さ	1.0m
西-東	1.90m	—	1.55m
深さ	—	—	—
遺土の状態	多量の焼土及び炭化物を含む自然堆積	床面の状態	—
柱	穴なし	出土遺物	なし
備考			
調査番号	第3回	図面番号	四-2-3

Ta5号竪穴状遺構



- 1層 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土粒・炭化物を少量含む。
表土 (5YR2/4) 炭化粒子を少量含む。

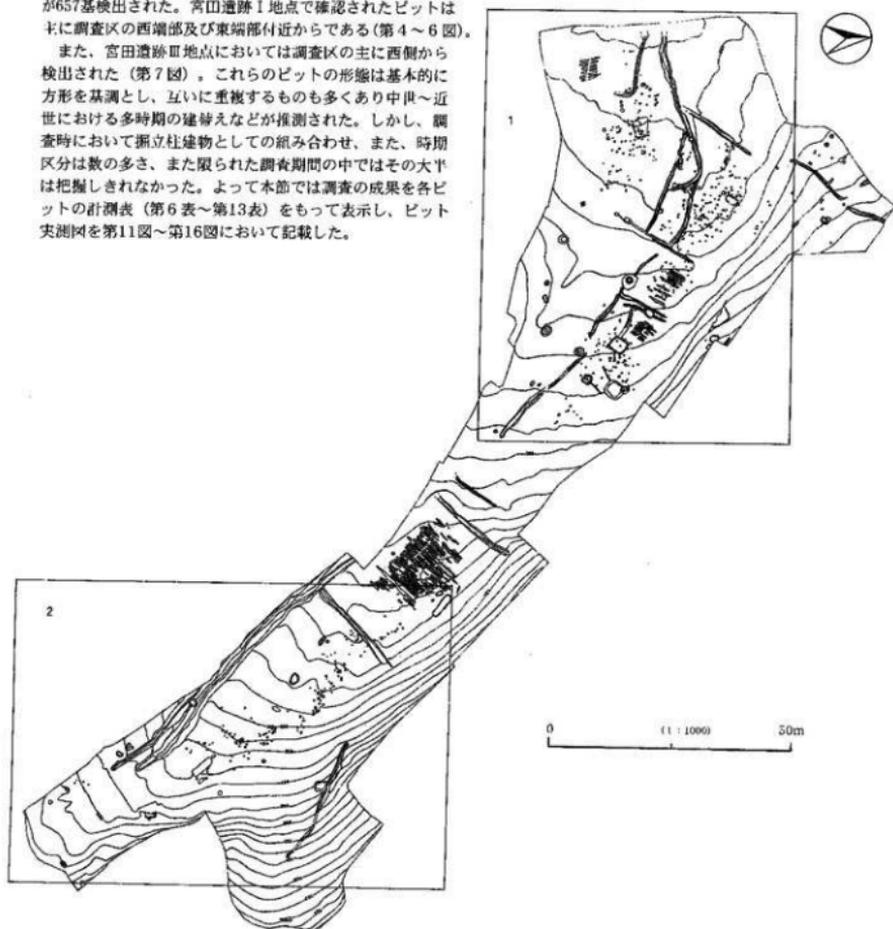
0 (1:80) 4m

第3回 Ta3・4・5号竪穴状遺構実測図

2 ビット群 (第4~8, 10図 図版五、二十四・二十五)

宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ地点の調査区から中世と考えられるビットが657基検出された。宮田遺跡Ⅰ地点で確認されたビットは主に調査区の西端部及び東端部付近からである(第4~6図)。

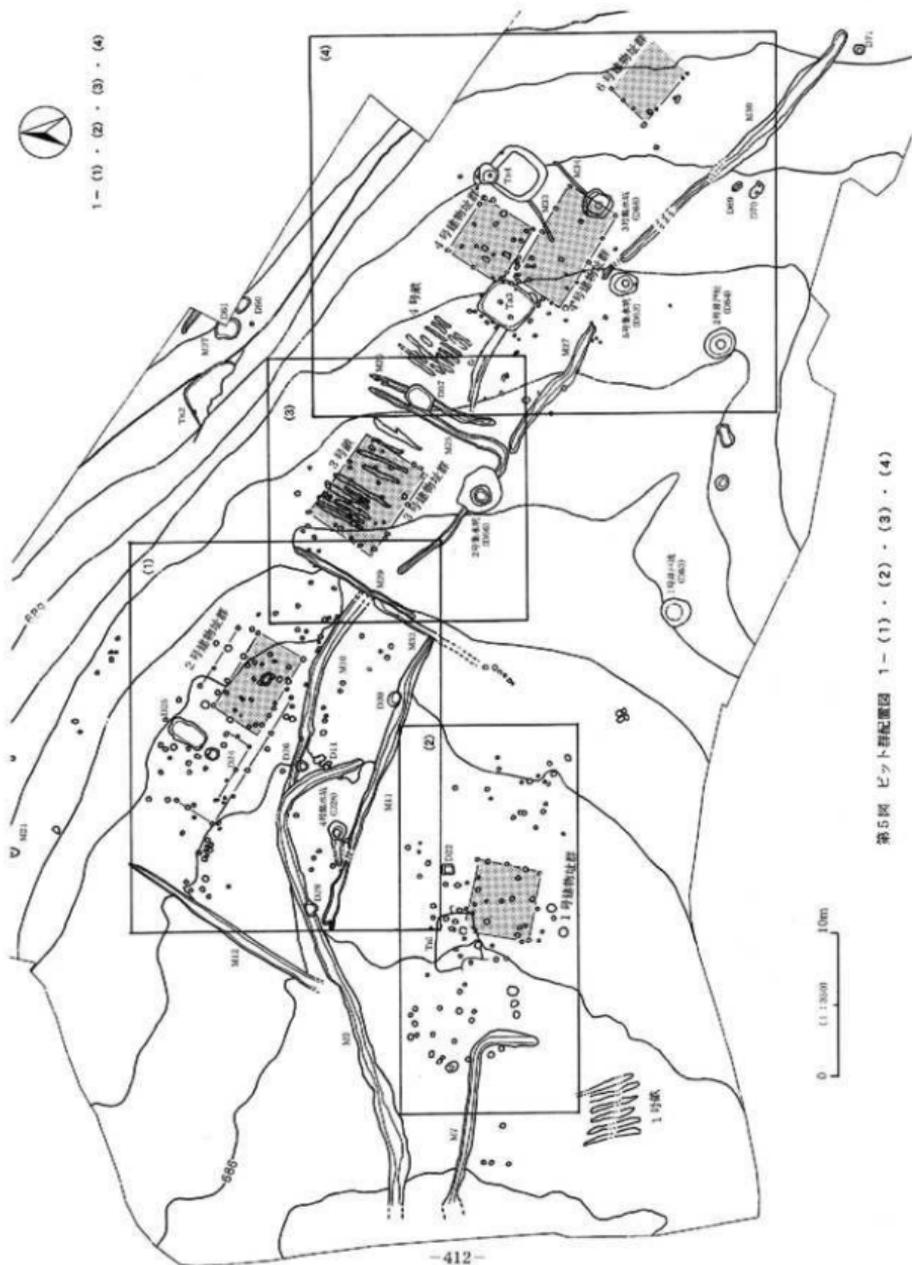
また、宮田遺跡Ⅲ地点においては調査区の主に西側から検出された(第7図)。これらのビットの形態は基本的に方形を基調とし、互いに重複するものも多くあり中世~近世における多時期の建替えなどが推測された。しかし、調査時において掘立柱建物としての組み合わせ、また、時期区分は数の多さ、また限られた調査期間の中ではその大半は把握しきれなかった。よって本節では調査の成果を各ビットの計測表(第6表~第13表)をもって表示し、ビット尖測図を第11図~第16図において記載した。



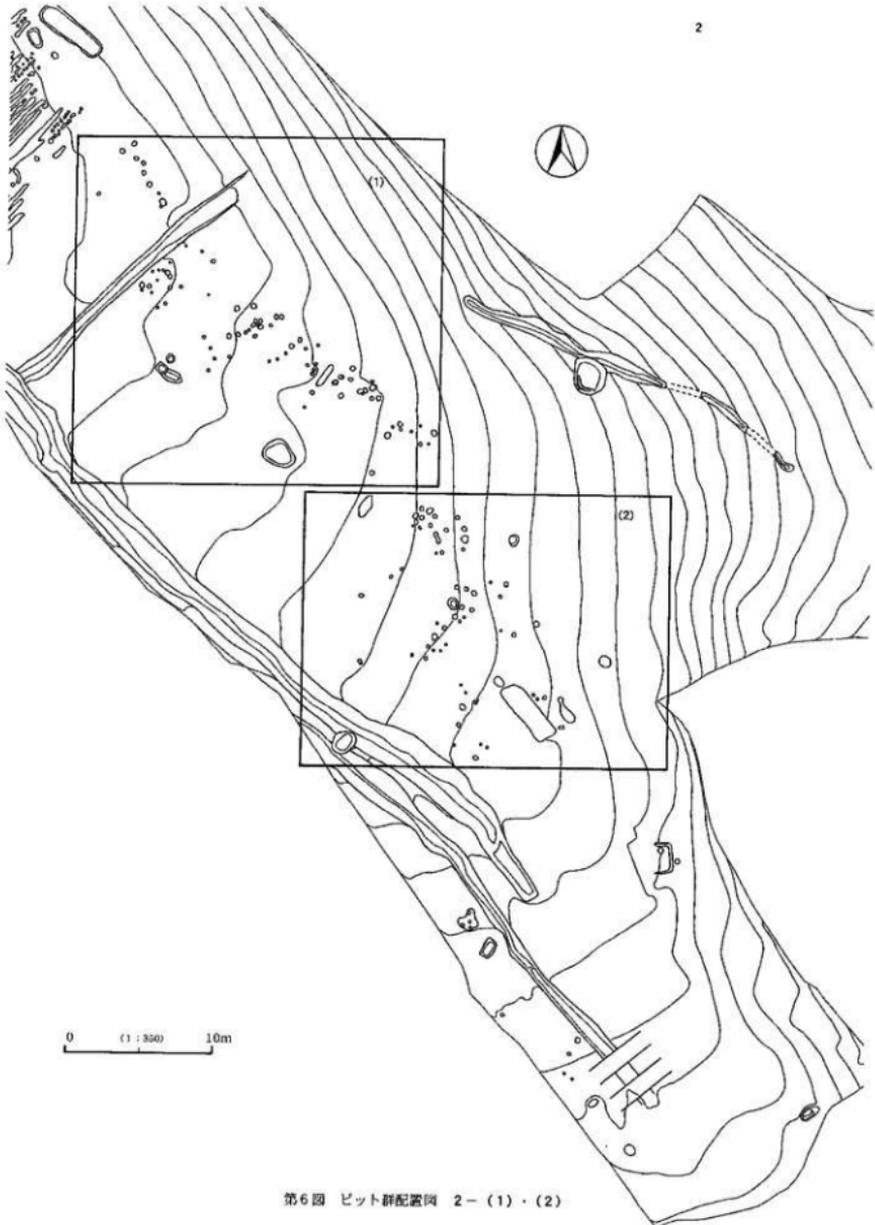
第4図 宮田遺跡Ⅰ地点ビット群配置図1・2



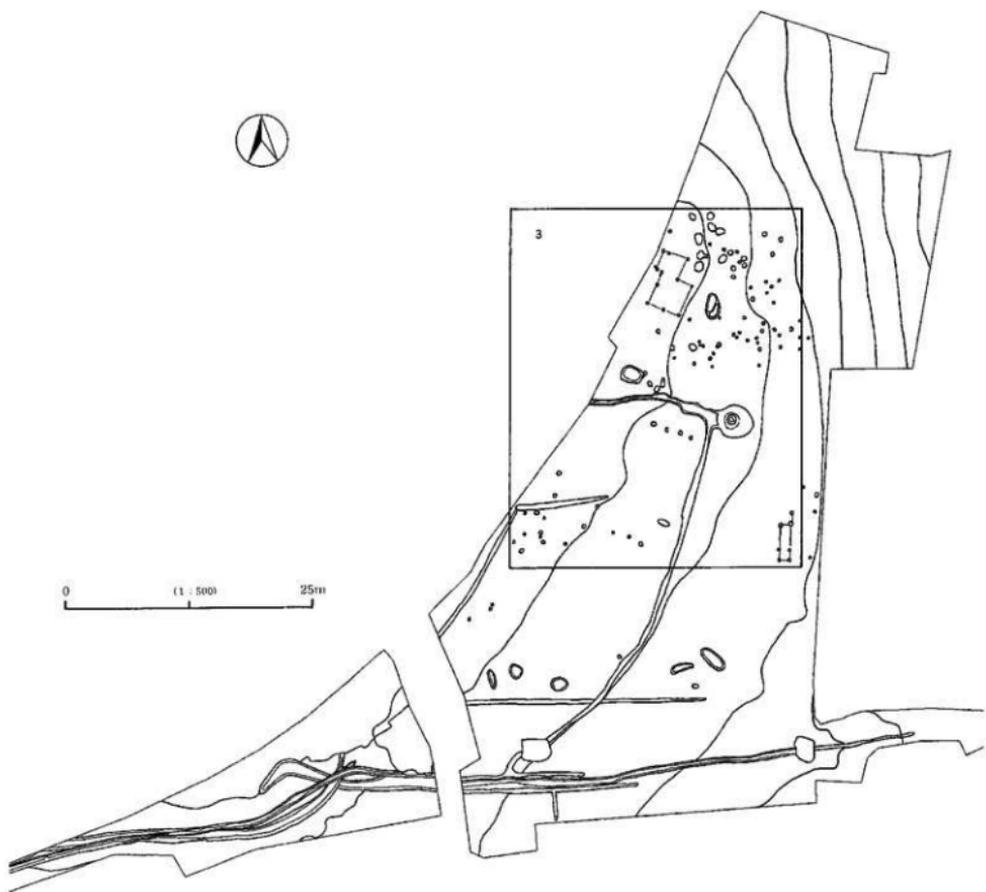
1 - (1) - (2) - (3) - (4)



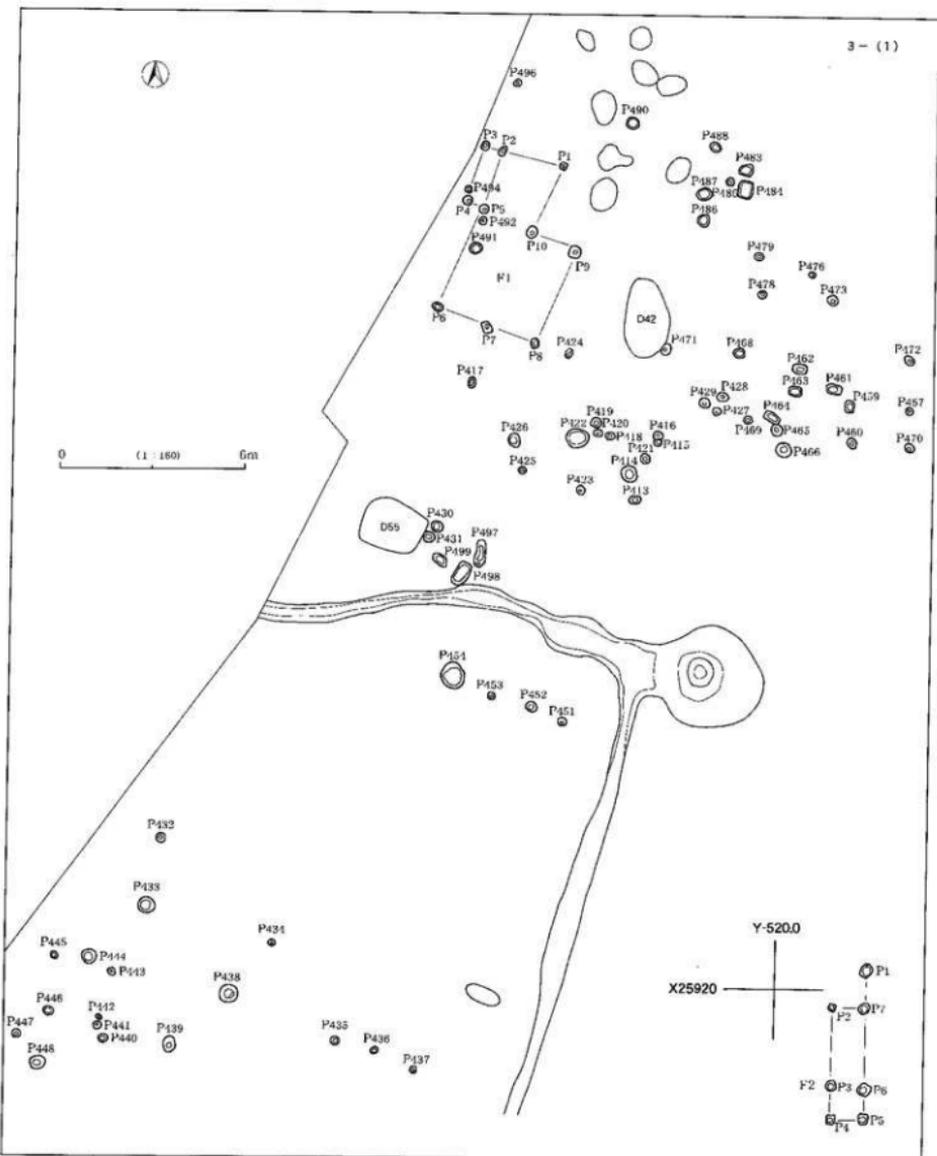
第5回 ヒット館配置図 1 - (1) - (2) - (3) - (4)



第6図 ビット群配置図 2-(1)・(2)



第7図 宮田遺跡Ⅲ地点 F1・2号掘立柱建物址・ピット群配図 3



第8図 F1・2号独立柱建物址・ピット群配図 3 - (1)

3 建物址群

本節では先に述べたピット群から建物址を推定復元した遺構について述べる。宮田遺跡Ⅲ地点の調査区においては、2棟の中世掘立柱建物址が調査時において確認できた。しかし、調査区1地点から検出されたピットは調査段階において掘立柱建物址としての整合性を見極めながら調査すべきであったが、先に述べた様な事情によりそれらができなかった。よって整理作業の段階で中世掘立柱建物址として認められるピットを抽出し建物址を復元した。

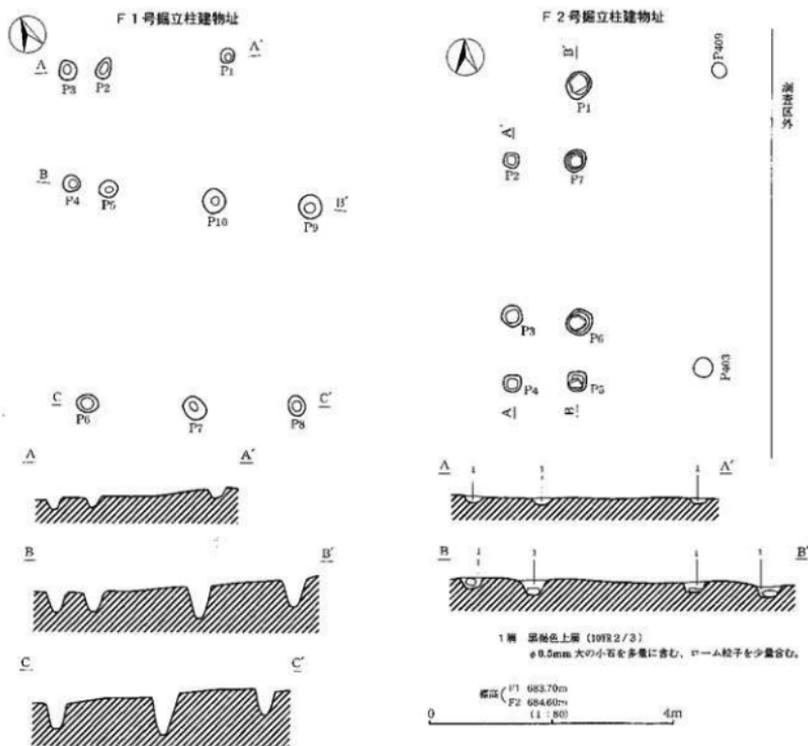
抽出の条件としてはまず覆土の色調が同一のもの、そしてその中から規則的な配列を示しているかを見極め、且つ建物址を区画する溝状遺構との兼ね合いを考慮して組み立てたのが第10図に示した建物址群である。

その結果本節では、調査時において確認された2棟の建物址(第8・9図)を「掘立柱建物址」とし、整理の段階で建物址として整合性が認められた6棟を「建物址群」として扱うことにした。

① 掘立柱建物址

F 1号掘立柱建物址 (第8・9図、図版5)

本址は宮田遺跡Ⅲ地点から検出されグリッドし・す-14・15に位置する。形態は変則的な3間×3間の側柱式の建



第9図 F1・2号掘立柱建物址実測図

物址で主軸方位は北東方向を示す。ピットに囲まれた面積は約25㎡である。規模は桁行5.28m・梁間3.52mで桁行柱間は2.8m～3.2m・梁間柱間は約1.6m～2.8m前後をそれぞれ測る。

本建物址の平面形態は「L」字的なピットの配列が窺われ、P4・P5・P10ピットの北に張出す様にしてP1・P2・P3のピットが確認された。本址の周辺遺構には北側に土坑群があり、この土坑群の外側にピット群が本建物址をとり囲むように検出された。

F2号掘立柱建物址(第8・9図、図版五)

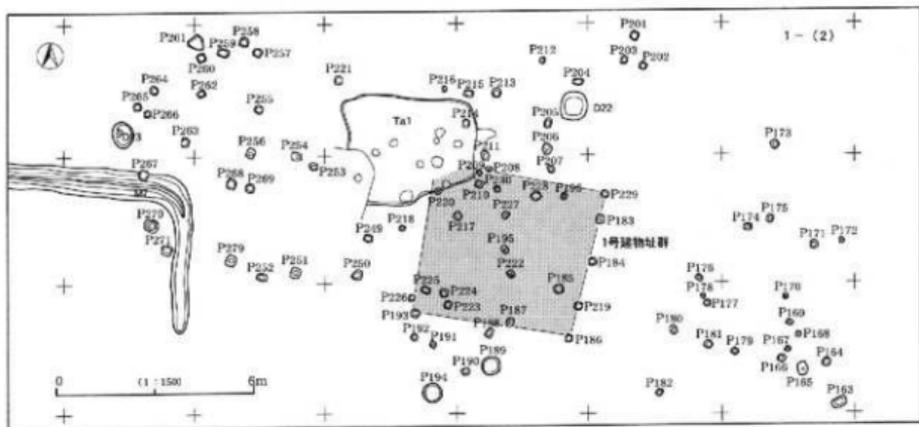
F2号掘立柱建物址は宮田遺跡Ⅲ地点から検出されグリットこー20・21に位置する。本址の東側は調査区域外となり遺構全体の様子は確認されなかった。残存する形態は3間×2間の側柱式の建物址で主軸方位は真北方向を示すことが考えられる。検出されたピットP1・P5～P7の深さは16cm～24cmを測り、各ピットの底面には厚さ約10cm前後の平坦な礎石が配されていた。ピットに囲まれた残存面積は約10㎡である。規模はP5～P7・P1間の長さ4.8m、柱間は約1.6m～2.8m前後をそれぞれ測り当間口は4間であることが確認できた。また、4間の各柱間を見るとP5・6及びP1・7の柱間は1.2m前後を測り共に短い間取りである。これに対してP6・7の2本の柱間は約2.4mと倍の長さの間取られていることが窺われる。つまり間口4間の中央2本の柱間幅は、両側2本の柱よりの倍の長さで構築された建物址であったことが推測された。そして、F1号掘立柱建物址に看られた「張出し状」のピットP2・P3・P4がP5～7の北側に確認された。本址の周辺遺構は西側約9mの位置に集水坑と考えられるD56号土坑があり、この土坑と関連することが考えられるM15号溝状遺構が位置している。

② 建物址群

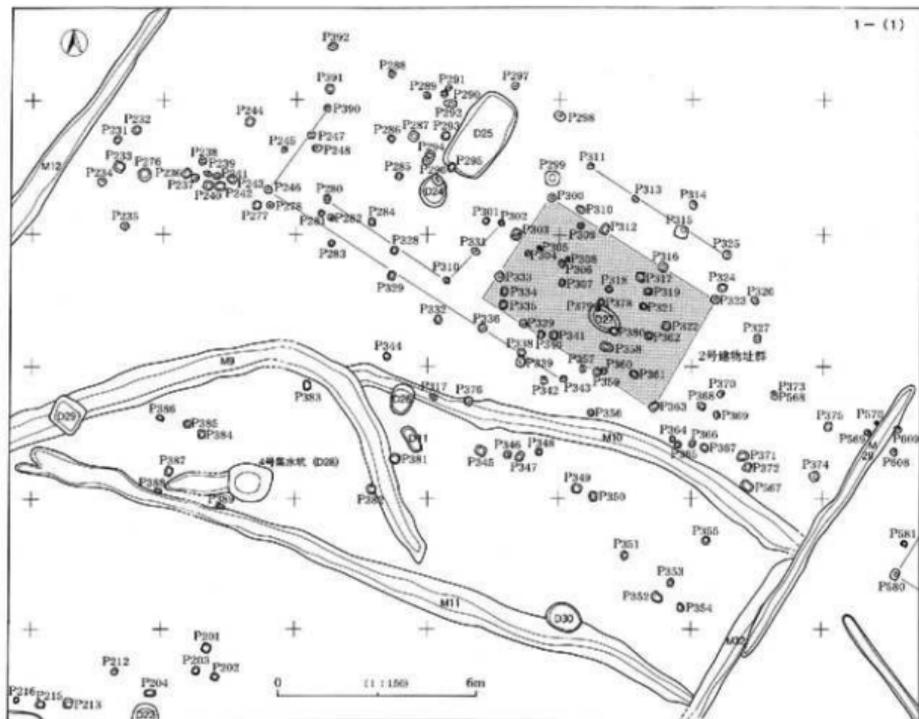
1号建物址群(第11図)

本址は宮田遺跡Ⅰ地点から検出されグリットちへー25・26に位置する。本建物址はT a 1号竪穴状遺構と重複関係にあり、本址がT a 1号竪穴状遺構を破壊している。形態は変則的な3間×5間の建物址で主軸方位は北西方向を示す。ピットに囲まれた面積は約23.2㎡である。規模は桁行4.8m・梁間4.5mで、桁行柱間は1.8～3.0m・梁間柱間は約0.75～1.5m前後をそれぞれ測る。

本建物址の平面形態は「逆台型」を呈し北側の間口に比べ西側の間口が若干短い。ピットに囲まれた内側にはP185号の他12個のピットが認められるが、これらのピット中からも本址と関連するピットがある可能性が考えられる。本址の周辺遺構には第11図に示したピット群がある。



第11図 1号建物址群・ピット群実測図 1 - (2)



第12図 2号建物址群・ピット群実測図 1- (1)

2号建物址群 (第10・12回)

本址は宮田遺跡I地点から検出されグリットす〜そ-20〜22に位置する。本建物址の形態は4間×2間の建物址で主軸方位は北西方向を示す。ピットに囲まれた面積は約22.6㎡である。規模は桁行約6.2m・梁間約3.7mで、桁行柱間は60cm〜2.0m・梁間柱間は約2.4m前後をそれぞれ測る。

本建物址の平面形態は「長方形」を呈する。ピットに囲まれた北側壁には本址と共有するかのようP311・P313・P315・P325の4本のピットが柱列をなして検出された。ピットに囲まれた内側にはP304〜309号他のピットが看られ、これらのピット中からも本址と関連するピットがある可能性が考えられた。

また本址の西側約1m隣接して「L」字状に柱列されるピットが6本確認された。形態は変則的な3間×3間の建物址と考えられ、規模は桁行4.5m・梁間2.4mで、桁行柱間は1.5〜2.5m・梁間柱間は約1.2m前後をそれぞれ測る。更に、本建物址の外側には「一」型に柱列されるピットが6本確認され、その形状は2号建物址群までを囲むかのように長く直線的に延びている。規模は桁行11.1m・梁間3.15mで、桁行柱間は1.35〜4.64m・梁間柱間は約1.5〜2.10m前後をそれぞれ測る。

此の2号建物址群と関連することが考えられる「L」字状、及び、「一」型に柱列される建物址は、M11・12号及びM32号溝状遺構の3条の溝によって「L」型に囲まれた中にある(第17図)。よって、2号建物址及び関連すると思わ

れる2基の建物址は、溝によって区画されていることが推測される。

本址の時期は、出土遺物等がなく正確な時期決定はなされない。しかし、本址と共有関係にあると考えられるM11号溝状遺構から土銅（16世紀代）、火打金、鉄軸碗などが出土していること、また、M11号溝状遺構と関連するM32号溝状遺構はM29号溝状遺構（中世）によって破壊されていることなどから、本2号建物址群は16世を越らない中世遺構であったことが推察される。

3号建物址群（第13図）

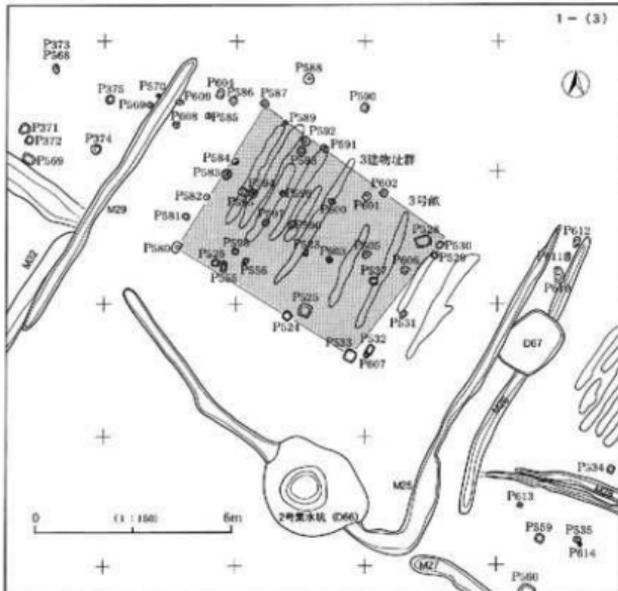
本址は宮田遺跡1地点の西端部から検出され、グリットこへし-22~24に位置する。本建物址は畝3号址と重複関係にあり、本址が畝を破壊している。形態は4間×3間の建物址で主軸方位は北西方向を示す。ピットに囲まれた面積は約22.6㎡である。規模は桁行約6.3m・梁間約5.1mで、桁行柱間は2.3m~4.0m・梁間柱間は約2.7m前後をそれぞれ測る。

本建物址の平面形態は「長方形」を呈する。ピットに囲まれた内側にはP525号他18個のピットが看られ、これらのピット中からも本址と関連するピットがある可能性が考えられた。

また本址と関連することが考えられるM29号溝状遺構が西側約2.4m接して確認され、建物址の東側約3.2mにはM25号溝状遺構が「L」字状に延びていることが認められた。よって本建物址は、M29号・25号溝状遺構により「L」型に囲まれた中から検出され、3号建物址は溝によって区画されていることが推察された。

本址の時期は3号建物址群及びM25号、M29号溝状遺構とも出土遺物がなく正確な時期決定はなされない。しかし、3号建物址は中世と考えられるM25号溝状遺構と2号集水坑（D66号土坑）、及びM29号溝状遺構と同じ覆土状況であることなどから推し、中世に帰属することが考えられる。

尚、M29号溝状遺構とM32号溝状遺構とは重複関係にあり、M29号溝状遺構が2号建物址を区画するM32号溝状遺構（16世紀を越らない）を破壊している。このことからM25号・M29号溝状遺構の「L」内側から確認された3号建物址群のほうがM11・12・32号溝状遺構内から確認された2号建物址よりも同じ中世の時期の中でも若干新しい時間差が認められる。



第13図 3号建物址群・ピット群実測図 1-(3)

4号建物址群

（第14図）

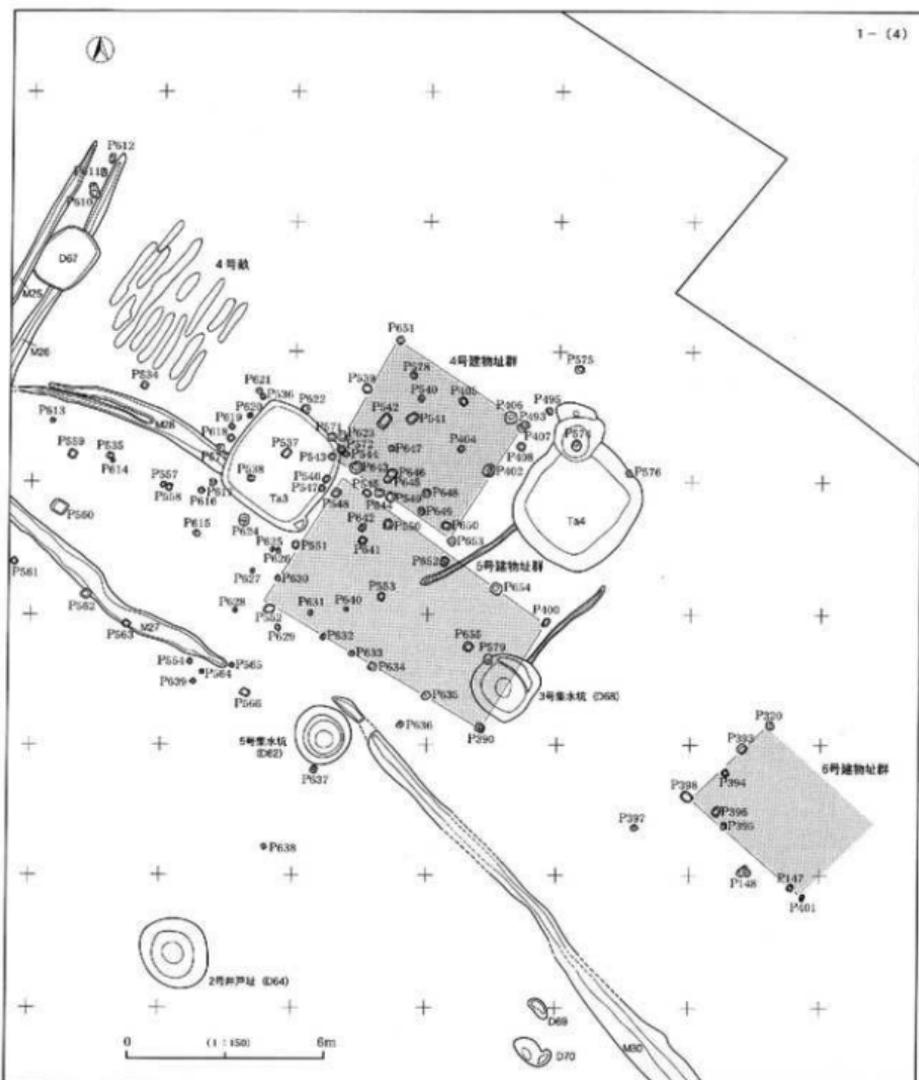
5号建物址群

（第14図）

6号建物址群

（第14図）

4号建物址群は宮田遺跡1地点の調査区中央やや西側付近から検出され、グリットこへし-24~26に位置する。本址はTα4号竪穴状遺構と重複関係にあり、本址が竪穴状遺構を破壊している。形態は変則的な4間×4間の建物址で主軸方位は北西方向を示す。

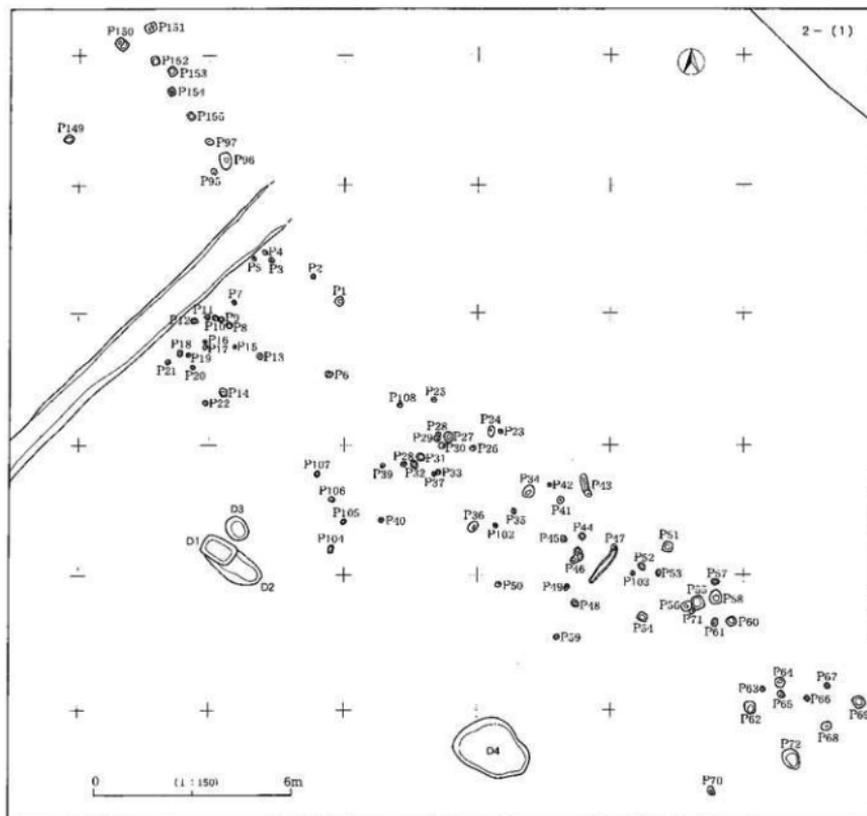


第14図 4・5・6号建物址群・ピット群実測図 1 - (4)

ピットに囲まれた面積は約17.8㎡である。規模は桁行約4.5m・梁間約4.2mで、桁行柱間は0.3m～2.2m・梁間柱間は約0.7～1.8m前後をそれぞれ測る。本建物址の平面形態は「方形」を呈する。ピットに囲まれた内側にはP404号他13個のピットが看られ、これらのピット中からも本址と関連するピットがある可能性が考えられた。

5号建物址群(第14図)は宮田遺跡I地点の調査区中央やや西側付近から検出され、グリッドか～く-26・27に位置する。本址は4号建物址群の隣にあり、その間は約70cmと近接して建てられていることから本址と4号建物址群とは同時期の建物址である可能性が窺われる。また、3号集水坑(D68)も本址と関連する遺構であることが考えられる。

5号建物址の形態は変則的な6間×4間の建物址で主軸方位は北西方向を示す。ピットに囲まれた面積は約31.1㎡である。規模は桁行約7.5m・梁間約4.4mで、桁行柱間は0.7m～1.9m・梁間柱間は約1.1～2.0m前後をそれぞれ測る。本建物址の平面形態は「長方形」を呈する。ピットに囲まれた内側にはP550号他7個のピットが看られ、これらのピット中からも本址と関連するピットがある可能性が考えられた。



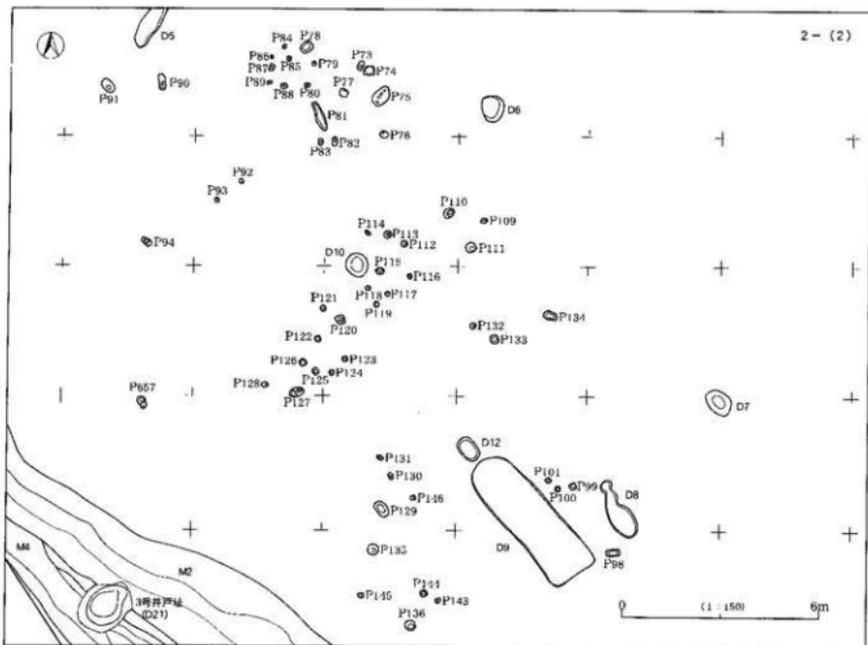
第15図 ピット群実測図 2-(1)

6号建物址群(第14図)は宮田道跡1地点の調査区中央やや西側付近から検出され、グリッドエー-27~29に位置する。本址は5号建物址から東へ約6.7mの位置にある。なお 建物址の東側梁間及び北側の桁行間のピットは削平の影響を受け確認されなかった。形態は変則的な4間×4間の建物址で主軸方位は北西方向を示す。ピットに囲まれた面積は約12.4㎡である。規模は桁行約4.5m・梁間約3.3mで、桁行柱間は0.4m~2.7m・梁間柱間は約0.9~1.3m前後をそれぞれ測る。本建物址の平面形態は「長方形」を呈するものと考えられる。ピットに囲まれた内側にはP396号ピットが看られ、このピットも本址と関連するピットである可能性が考えられた。

この4号・5号・6号の各建物址群、及び、先述した故4号址は、本址等と関連することが考えられるM26号・M27号・M30号溝状遺構によって「L」字状に区画される内側から検出された。

本建物址3棟の時期は、4号・5号・6号建物址、及び、M26号・M27号溝状遺構ともに出土遺物がなく正確な時期決定はなされない。しかし、中世と考えられる周辺遺構の配置状況、また、M25号溝状遺構(中世)がD67号土坑を破壊し、更に、D67号上坑はM26号溝状遺構を破壊している様子などを鑑みると、本建物址と関連するM26号・M27号溝状遺構は中世の時期の中でも若干古い時間差が認められる。こうした重複関係から先述したM25号・M29号溝状遺構に囲まれたD3号建物址及びピット群よりも、このM26号・M27号溝状遺構に囲まれた4号・5号・6号建物址の方が中世の時期の中でも若干古い時間差が認められる。

また、本建物址群と関連するM26号溝状遺構のすぐ東側く・け-24グリッドに4号畝がある。この畝の脇には4号・5号建物址が位置しているが、重複関係は認められず4号畝址は2棟の中世建物址と同一時期に溝によって区画された内に存在していた可能性もあり得る。



第16図 ピット群実測図 2-(2)

第6表 ビット計測表

番号	検出位置	規模	深度	色別	備考	番号	検出位置	規模	深度	色別	備考
P1	ミ 390D	25×26	28.5	10YR3/1黒褐色土	炭化物微量含む	P46	マ 40GD	(16)×20 (24)×48	30	10YR3/1黒褐色土	
2	ミ 390D	13×14	17	10YR3/1黒褐色土		47	マ 400D	14.3×22	17.5	10YR3/1黒褐色土	
3	△ 380D	15×18	17.5	10YR3/1黒褐色土		48	マ 400D	20×24	16.5	10YR3/1黒褐色土	
4	△ 380	16×18	26.5	10YR3/1黒褐色土		49	マ 400D	15×22	7.5	10YR3/1黒褐色土	
5	△ 380D	12×12	15.5	10YR3/1黒褐色土		50	マ 400D	16×20	13.8	10YR3/1黒褐色土	粘土・炭化物微量含む
6	ミ 400D	20×26	18.5	10YR3/1黒褐色土		51	マ 400D	28×30	33.5	10YR3/1黒褐色土	
7	△ 380	13×14	17	10YR3/1黒褐色土		52	マ 400D	18×25	8.5	10YR3/1黒褐色土	
8	△ 380D	19×22	10.3	10YR3/1黒褐色土		53	マ 400H	14×17	9.5	10YR3/1黒褐色土	
9	△ 390D	17×18	11	10YR3/1黒褐色土		64	ヘ 10D	27×30	47	10YR3/1黒褐色土	
10	△ 390D	19×20	8	10YR3/1黒褐色土		55	ヘ 10D	38×40	67	10YR3/1黒褐色土	
11	ミ 390D	16×19	31	10YR3/1黒褐色土		56	ヘ 10D	34×44	52.5	10YR3/1黒褐色土	
12	ミ 390D	16×22	9.5	10YR3/1黒褐色土		57	ヘ 10D	19×24	24.8	10YR3/1黒褐色土	
13	△ 390D	18×19	18.5	10YR3/1黒褐色土		58	ヘ 10D	36×40	52.5	10YR3/1黒褐色土	
14	△ 390D	22×24	28	10YR3/1黒褐色土		59	マ 400D	16×16	6.5	10YR3/1黒褐色土	
15	△ 390D	10×11	13.5	10YR3/1黒褐色土		60	ヘ 10D	27×29	8.1	10YR3/1黒褐色土	粘土・炭化物微量含む
16	ミ 390D	12×13	16	10YR3/1黒褐色土		61	ヘ 10D	20×24	47.5	10YR3/1黒褐色土	
17	ミ 390D	12×14	8	10YR3/1黒褐色土		62	フ 10D	34×39	44.5	10YR3/1黒褐色土	
18	ミ 390D	15×18	9	10YR3/1黒褐色土		63	フ 10D	14×14	1.5	10YR3/1黒褐色土	
19	ミ 390D	12×12	7.5	10YR3/1黒褐色土		64	フ 10D	27×28	29.5	10YR3/1黒褐色土	
20	ミ 390D	12×13	17	10YR3/1黒褐色土		65	フ 10D	17×23	29.5	10YR3/1黒褐色土	
21	ミ 390D	14×17	14.5	10YR3/1黒褐色土		66	フ 10D	14×16	13.5	10YR3/1黒褐色土	
22	ミ 390D	14×15	11.5	10YR3/1黒褐色土		67	フ 10D	14×16	14	10YR3/1黒褐色土	
23	マ 400D	14×15	6	10YR3/1黒褐色土	炭化物微量含む	68	フ 10D	30×32	38.8	10YR3/1黒褐色土	
24	マ 400D	20×33	26.5	10YR3/1黒褐色土	炭化物微量含む	69	フ 10D	37×38	37	10YR3/1黒褐色土	
25	ミ 400D	14×15	8	10YR3/1黒褐色土		70	ヘ 20D	19×24	16.5	10YR3/1黒褐色土	
26	ミ 400D	24×38	23	10YR3/1黒褐色土		71	ヘ 10D	12×22	29	10YR3/1黒褐色土	
27	ミ 400D	26×32	33	10YR3/1黒褐色土		72	ヘ 20D	48×62	59	10YR3/1黒褐色土	漆跡 鉄釘
28	ミ 400D	(14)×(16)	20	10YR3/1黒褐色土		73	ヒ 40D	18×28	15.5	10YR3/1黒褐色土	
29	ミ 400D	17×18	17.5	10YR3/1黒褐色土		74	ヒ 40D	30×34	16	10YR3/1黒褐色土	
30	ミ 400D	18×20	29	10YR3/1黒褐色土		75	ヒ 40D	41×64	27	10YR3/1黒褐色土	
31	ミ 400D	24×25	14.5	10YR3/1黒褐色土		76	ヒ 40D	22×34	3b	10YR3/1黒褐色土	
32	ミ 400D	23×24	26.5	10YR3/1黒褐色土		77	ヒ 40D	25×28	29	10YR3/1黒褐色土	
33	ミ 400D	14×15	10.5	10YR3/1黒褐色土		78	フ 20D	33×40	37	10YR3/1黒褐色土	
34	マ 400D	32×42	42	10YR3/1黒褐色土		79	フ 40D	14×14	14.5	10YR3/1黒褐色土	
35	マ 400D	16×19	15.5	10YR3/1黒褐色土		80	フ 40D	13×19	8	10YR3/1黒褐色土	
36	ミ 400D	26×38	23	10YR3/1黒褐色土		81	フ 40D	20×(28) 30×(26)	16 15.5	10YR3/1黒褐色土	
37	ミ 400D	13×14	10	10YR3/1黒褐色土		82	ヒ 40D	18×25	6	10YR3/1黒褐色土	
38	ミ 400D	16×19	21.5	10YR3/1黒褐色土		83	フ 40D	13×20	15.5	10YR3/1黒褐色土	
39	ミ 400D	11×14	12	10YR3/1黒褐色土		84	フ 40D	13×15	11.5	10YR3/1黒褐色土	
40	ミ 400D	15×16	19	10YR3/1黒褐色土		85	フ 40D	14×14	10	10YR3/1黒褐色土	
41	マ 400H	18×22	23	10YR3/1黒褐色土		86	フ 40D	11×12	10.5	10YR3/1黒褐色土	
42	マ 400H	12×13	10.5	10YR3/1黒褐色土		87	フ 40D	18×18	12	10YR3/1黒褐色土	
43	マ 400D	23×27	8	10YR3/1黒褐色土	粘土を含む	88	フ 40D	15×18	16	10YR3/1黒褐色土	
44	マ 400D	18×19	16	10YR3/1黒褐色土		89	フ 40D	12×17	10.3	10YR3/1黒褐色土	
45	マ 400D	18×19	23	10YR3/1黒褐色土		90	ヘ 30D	32×68	31.5	10YR3/1黒褐色土	

第7表 ビット計測表

番号	絶縁材質	縦径	横径	長さ	色 調	備考	品目	標準位置	縦径	横径	長さ	色 調	備考
P91	ハ-30D	32×44	5		10YR3/1黒褐色上	炭化物を含む	P136	ヒ-80D	30×35	23		10YR3/1黒褐色上	
92	ハ-30D	12×13	14.5		10YR3/1黒褐色上		137	チ-100D	60×70	43		10YR3/1黒褐色上	
93	ハ-30D	14×16	44.5		10YR3/1黒褐色上		138	ネ-100D	68×92	28.5		10YR3/1黒褐色上	炭化物を含む
94	ハ-40D	22×32	46		10YR3/1黒褐色上		139	ソ-140D	24×26	14.5		10YR3/1黒褐色上	
95	△-380D	15×16	18		10YR3/1黒褐色上		140	ソ-140D	26×28	16		10YR3/1黒褐色上	炭化物を含む
96	△-380D	35×55	15		10YR3/1黒褐色上		141	ソ-130D	24×25	21.5		10YR3/1黒褐色上	
97	△-380D	16×22	19.3		10YR3/1黒褐色上		142	ソ-130D	18×22	16		10YR3/1黒褐色上	
98	ハ-70D	20×42	38		10YR3/1黒褐色上		143	ヒ-80D	18×19	15		10YR2/3黒褐色上	
99	ハ-70D	18×18	39.5		10YR3/1黒褐色上		144	ヒ-80D	18×21	11		10YR2/3黒褐色上	炭化物を含む
100	ハ-70D	16×18	33		10YR3/1黒褐色上		145	ヒ-80D	17×18	21		10YR2/3黒褐色上	
101	ハ-70D	16×18	30		10YR3/1黒褐色上		146	ヒ-70D	16×19	15.5		10YR2/3黒褐色上	
102	マ-550D	13×16	16		10YR3/1黒褐色上		147	オ-290D	18×21	5.5		10YR2/3黒褐色上	
103	マ-400D	13×16	13.5		10YR3/1黒褐色上		148	オ-290D	(1)19×20 (2)30×36	21.5 30		10YR3/1黒褐色上	炭化物を含む
104	ミ-400D	14×21	13.5		10YR3/1黒褐色上		149	ム-370D	28×28	16.5		10YR3/3黒褐色上	
105	ミ-400D	14×16	9.5		10YR3/1黒褐色上		150	ム-370D	32×40	31		10YR3/3黒褐色上	
106	ミ-400D	14×17	12		10YR3/1黒褐色上		151	ム-370D	28×36	28		10YR3/3黒褐色上	
107	ミ-400D	15×19	16		10YR3/1黒褐色上		152	ム-370D	26×27	23.5		10YR3/3黒褐色上	スケレパー
108	ミ-400D	12×14	9.5		10YR3/1黒褐色上		153	ム-370D	26×28	16		10YR3/3黒褐色上	
109	ヒ-50D	14×22	10.5		10YR3/1黒褐色上		154	ム-370D	21×24	25.5		10YR3/3黒褐色上	
110	ヒ-50D	30×36	21.5		10YR3/1黒褐色上		155	ム-370D	22×25	11.5		10YR3/3黒褐色上	
111	ヒ-50D	28×30	28		10YR3/1黒褐色上		156	セ-230D	36×36	12		10YR4/1褐色上	
112	ヒ-50D	18×20	17		10YR3/1黒褐色上		157	セ-250D	30×34	-		10YR4/1褐色上	
113	ヒ-50D	17×26	27		10YR3/1黒褐色上		158	セ-250D	28×33	20		10YR4/1褐色上	
114	ヒ-50D	12×22	17.5		10YR3/1黒褐色上		159	セ-250D	20×20	17		10YR4/1褐色上	
115	ヒ-50D	20×25	32.5		10YR3/1黒褐色上		160	セ-250D	28×30	17		10YR4/1褐色上	
116	ヒ-50D	12×17	9.5		10YR3/1黒褐色上		161	セ-250D	14×16	18		10YR4/1褐色上	
117	ヒ-50D	14×18	16		10YR3/1黒褐色上		162	セ-250D	22×27	19.5		10YR4/1褐色上	
118	ヒ-50D	12×14	21.5		10YR3/1黒褐色上		163	チ-260D	30×47	16		10YR4/1褐色上	
119	ヒ-50D	14×19	34		10YR3/1黒褐色上		164	チ-260D	24×35	12		10YR4/1褐色上	
120	ヒ-50D	24×32	36.5		10YR3/1黒褐色上		165	チ-260D	31×42	18.5		10YR4/1褐色上	
121	ヒ-50D	16×18	29.5		10YR3/1黒褐色上	炭化物を含む	166	チ-260D	24×26	22.5		10YR4/1褐色上	
122	ヒ-50D	16×22	9		10YR3/1黒褐色上		167	チ-260D	18×19	17		10YR4/1褐色上	
123	ヒ-50D	12×20	17		10YR3/1黒褐色上		168	チ-260D	18×18	12.5		10YR4/1褐色上	
124	ヒ-50D	14×20	24		10YR3/1黒褐色上		169	チ-260D	17×20	12.5		10YR4/1褐色上	
125	ヒ-50D	20×24	12		10YR3/1黒褐色上		170	チ-260D	14×18	16.5		10YR4/1褐色上	
126	ヒ-50D	20×24	16		10YR3/1黒褐色上		171	タ-250D	22×26	15.5		10YR4/1褐色上	
127	ヒ-50D	30×42	37.5		10YR3/1黒褐色上		172	タ-250D	16×18	13		10YR4/1褐色上	
128	ヒ-50D	18×18	17.5		10YR3/1黒褐色上		173	チ-250D	24×25	19		10YR4/1褐色上	
129	ヒ-70D	35×52	18.5		10YR3/1黒褐色上		174	チ-250D	20×23	16.5		10YR4/1褐色上	
130	ヒ-70D	15×21	17		10YR3/1黒褐色上		175	チ-250D	20×24	18		10YR4/1褐色上	
131	ヒ-70D	15×20	21		10YR3/1黒褐色上		176	チ-260D	18×24	13.5		10YR4/1褐色上	
132	ヒ-50D	17×20	16		10YR3/1黒褐色上		177	チ-260D	22×23	20		10YR4/1褐色上	
133	ヒ-50D	26×30	6.5		10YR3/1黒褐色上		178	チ-260D	12×14	12		10YR4/1褐色上	
134	ヒ-50D	(1)19×26 (2)30×30	12 9.5		10YR3/1黒褐色上		179	チ-260D	21×23	15		10YR4/1褐色上	
135	ヒ-80D	34×35	16		10YR3/1黒褐色上		180	チ-260D	20×26	13		10YR4/1褐色上	

第8表 ビット計測表

品目	輸出位置	規格	深さ	色調	備考	品目	輸出位置	規格	深さ	色調	備考
P181	チ 26(D)	23×26	14.5	10YR4/1褐色土		P236	チー26(D)	18×20	31.6	10YR4/1褐色土	
182	チ 26(D)	19×21	15.5	10YR4/1褐色土		227	チー25(D)	15×22	18	10YR4/1褐色土	
183	ツー25(D)	26×27	29	10YR4/1褐色土		228	ツー25(D)	29×29	11.5	10YR4/1褐色土	
184	ツー25(D)	20×24	20	10YR4/1褐色土		229	ツー25(D)	21×22	25	10YR4/1褐色土	
185	ツー26(D)	26×29	20.5	10YR4/1褐色土		230	チー25(D)	18×20	10	10YR4/1褐色土	
186	ツー36(D)	21×22	17	10YR4/1褐色土		231	ツー23(D)	22×24	26.5	10YR4/1褐色土	
187	ツー26(D)	22×28	34	10YR4/1褐色土		232	ツー23(D)	34×26	19	10YR4/1褐色土	
188	ツー26(D)	21×28	27.5	10YR4/1褐色土		233	ツー23(D)	30×33	20	10YR4/1褐色土	炭化物・粘土含む
189	ツー26(D)	58×58	24.5	10YR4/1褐色土		234	ツー23(D)	25×27	21.5	10YR4/1褐色土	
190	ツー26(D)	21×25	21	10YR4/1褐色土		235	ツー23(D)	34×26	20.5	10YR4/1褐色土	
191	チー26(D)	17×19	22	10YR4/1褐色土		236	ツー23(D)	24×30	17	10YR4/1褐色土	
192	チー26(D)	20×22	22	10YR4/1褐色土		237	チー25(D)	20×25	22	10YR4/1褐色土	
193	チー26(D)	28×30	42	10YR4/1褐色土		238	チー23(D)	24×24	18	10YR4/1褐色土	炭化物含む
194	チー26(D)	60×61	28.5	10YR4/1褐色土		239	チー25(D)	20×24	21	10YR4/1褐色土	
195	チー25(D)	19×25	38	10YR4/1褐色土		240	チー23(D)	28×31	23	10YR4/1褐色土	
196	ツー23(D)	16×18	16	10YR4/1褐色土		241	チー23(D)	22×22	20.5	10YR4/1褐色土	
197	ツー28(D)	(23)×(27)	18	10YR4/1褐色土		242	チー23(D)	28×31	21.5	10YR4/1褐色土	土質土層
198	ツー29(D)	24×28	16	10YR4/1褐色土		243	チー23(D)	25×27	21	10YR4/1褐色土	
199	ツー29(D)	(24)×(26)	25.5	10YR4/1褐色土		244	チー23(D)	26×30	21	10YR4/1褐色土	
200	ツー28(D)	24×26	20	10YR4/1褐色土		245	チー23(D)	18×19	16	10YR4/1褐色土	
201	ソー24(D)	23×26	29.5	10YR4/1褐色土		246	チー23(D)	24×25	17.5	10YR4/1褐色土	
202	ソー24(D)	21×24	34.5	10YR4/1褐色土		247	タ 23(D)	19×23	20	10YR4/1褐色土	
203	ソー24(D)	19×25	24.5	10YR4/1褐色土		248	ター23(D)	21×27	27	10YR4/1褐色土	
204	ソー24(D)	18×28	8.5	10YR4/1褐色土		249	チー23(D)	22×24	17.5	10YR4/1褐色土	
205	ソー24(D)	23×26	11	10YR4/1褐色土		250	チー23(D)	(12)×(14) (20)×(30)	12.5 1.7	10YR4/1褐色土	
206	ソー24(D)	(6)×(4) (26)×(29)	33.5 11	10YR4/1褐色土		251	チー26(D)	30×32	—	10YR4/1褐色土	黄色粘土ブロック
207	ツー25(D)	18×19	30.5	10YR4/1褐色土		252	チー28(D)	21×31	26	10YR4/1褐色土	褐色粘土ブロック
208	チー25(D)	19×20	14.5	10YR4/1褐色土		253	チー24(D)	21×22	42.5	10YR4/1褐色土	褐色粘土ブロック
209	チー25(D)	14×18	12	10YR4/1褐色土		254	チー24(D)	24×32	36.5	10YR4/1褐色土	褐色粘土ブロック
210	チー25(D)	22×24	18	10YR4/1褐色土		255	チー24(D)	22×22	26.5	10YR4/1褐色土	
211	チー25(D)	23×32	51.5	10YR4/1褐色土		256	チー24(D)	33×29	32	10YR4/1褐色土	黄色粘土ブロック
212	ソー24(D)	16×20	17.5	10YR4/1褐色土	黄色粘土ブロック含む	257	チー24(D)	26×27	12	10YR4/1褐色土	
213	チー24(D)	26×28	33	10YR4/1褐色土	黄色粘土ブロック含む	258	チー24(D)	23×28	8	10YR4/1褐色土	
214	チー24(D)	22×24	38	10YR4/1褐色土	褐色粘土ブロック含む	259	チー24(D)	23×30	8	10YR4/1褐色土	
215	チー24(D)	21×26	30.5	10YR4/1褐色土		260	チー24(D)	26×28	10	10YR4/1褐色土	
216	チー24(D)	17×19	34	10YR4/1褐色土		261	チー24(D)	(22)×(48) (26)×(24)	1.0 7	10YR4/1褐色土	
217	チー25(D)	25×30	34	10YR4/1褐色土		262	チー24(D)	20×24	10	10YR4/1褐色土	
218	チー25(D)	16×18	17.5	10YR4/1褐色土		263	チー24(D)	(8)×(20) (17)×(21)	30 31	10YR4/1褐色土	黄色粘土ブロック
219	ツー26(D)	23×23	20.5	10YR4/1褐色土		264	チー24(D)	25×26	10	10YR4/1褐色土	
220	チー25(D)	18×21	15	10YR4/1褐色土		265	チー24(D)	21×22	5	10YR4/1褐色土	
221	チー24(D)	24×26	9	10YR4/1褐色土		266	チー24(D)	20×21	7.5	10YR4/1褐色土	
222	チー25(D)	24×27	35.5	10YR4/1褐色土		267	チー24(D)	29×30	37	10YR4/1褐色土	黄色粘土ブロック
223	チー26(D)	21×24	29	10YR4/1褐色土		268	チー24(D)	28×30	17	10YR4/1褐色土	
224	チー26(D)	24×24	14	10YR4/1褐色土		269	チー24(D)	22×23	20	10YR4/1褐色土	
225	チー26(D)	19×26	9.5	10YR4/1褐色土		270	ニ 25(D)	42×37	38.5	10YR4/1褐色土	黄色粘土ブロック

第9表 ビット計測表

番付	検出位置	幅	横	深さ	色調	備考	番号	検出位置	幅	横	深さ	色調	備考
P271	セ-26(D)	28×31	37		10YR4/1褐色土		2916	セ-22(D)	28×29	30.5		10YR4/1褐色土	
272	ヌ-26(D)	30×32	27		10YR4/1褐色土		317	セ-22(D)	26×30	27		10YR4/1褐色土	
273	ヌ-25(D)	28×28	40		10YR4/1褐色土		318	セ-22(D)	17×20	26.5		10YR4/1褐色土	
274	ヌ-29(D)	1180×22 (28)×36	31.5		10YR4/1褐色土		319	セ-22(D)	21×26	27.5		10YR4/1褐色土	
275	ヌ-26(D)	26×27	22		10YR4/1褐色土		320	セ-22(D)	22×24	43		10YR4/1褐色土	
276	ツ-20(D)	40×41	20		10YR4/1褐色土		321	セ-22(D)	20×22	28		10YR4/1褐色土	
277	チ-20(D)	24×25	12		10YR4/1褐色土		322	セ-22(D)	26×27	33		10YR4/1褐色土	
278	チ-20(D)	20×20	22		10YR4/1褐色土		323	セ-22(D)	24×26	27		10YR4/1褐色土	
279	チ-26(D)	30×32	18		10YR4/1褐色土		324	セ-22(D)	24×26	21.5		10YR4/1褐色土	
280	ター-20(D)	21×29	11		10YR4/1褐色土		325	セ-22(D)	34×25	30.5		10YR4/1褐色土	
281	ター-20(D)	18×18	9		10YR4/1褐色土		326	セ-22(D)	19×23	21		10YR4/1褐色土	
282	ター-20(D)	22×22	17.5		10YR4/1褐色土		327	セ-22(D)	21×24	42		10YR4/1褐色土	
283	ター-21(D)	17×18	22.5		10YR4/1褐色土		328	ター-21(D)	22×23	26.5		10YR4/1褐色土	
284	ター-21(D)	20×23	16		10YR4/1褐色土		329	ター-21(D)	22×24	25		10YR4/1褐色土	
285	ター-21(D)	22×23	15.5		10YR4/1褐色土		330	ター-21(D)	16×21	32.5		10YR4/1褐色土	
286	ター-21(D)	20×22	24		10YR4/1褐色土		331	ター-21(D)	22×23	34		10YR4/1褐色土	
287	ター-21(D)	28×30	29.5		10YR4/1褐色土		332	ター-21(D)	24×25	34		10YR4/1褐色土	
288	ター-20(D)	18×22	27.5		10YR4/1褐色土	黄土・褐色物多量含む	333	ター-21(D)	26×29	54		10YR4/1褐色土	
289	ター-20(D)	19×20	14		10YR4/1褐色土		334	ター-21(D)	20×25	25.5		10YR4/1褐色土	
290	ター-20(D)	19×23	19.5		10YR4/1褐色土		335	ター-21(D)	24×27	20.5		10YR4/1褐色土	
291	ツ-20(D)	15×16	13		10YR4/1褐色土		336	ター-21(D)	21×26	39.5		10YR4/1褐色土	
292	ツ-20(D)	26×40	28.5		10YR4/1褐色土		337	ター-21(D)	23×25	40.5		10YR4/1褐色土	
293	ツ-20(D)	25×27	22		10YR4/1褐色土		338	ター-21(D)	23×24	23		10YR4/1褐色土	
294	ツ-20(D)	26×28	34		10YR4/1褐色土		339	ター-21(D)	26×29	35		10YR4/1褐色土	
295	ツ-20(D)	19×27	43		10YR4/1褐色土		340	ター-21(D)	22×26	27.5		10YR4/1褐色土	
296	ター-20(D)	30×38	17		10YR4/1褐色土		341	ター-21(D)	26×26	28		10YR4/1褐色土	
297	ター-20(D)	20×20	38		10YR4/1褐色土		342	ター-20(D)	19×22	33		10YR4/1褐色土	
298	ター-20(D)	28×36	31.5		10YR4/1褐色土		343	ター-20(D)	21×21	53		10YR4/1褐色土	
299	ター-21(D)	44×44	58		10YR4/1褐色土		344	ター-21(D)	18×21	16		10YR4/1褐色土	
300	ター-21(D)	24×26	37		10YR4/1褐色土		345	ター-20(D)	29×32	27		10YR4/1褐色土	
301	ター-21(D)	17×22	7		10YR4/1褐色土		346	ター-20(D)	23×24	31		10YR4/1褐色土	
302	ター-21(D)	17×18	10		10YR4/1褐色土		347	ター-20(D)	22×31	29		10YR4/1褐色土	
303	ター-21(D)	28×36	20		10YR4/1褐色土		348	ター-20(D)	20×22	32.5		10YR4/1褐色土	黄土・褐色物多量含む
304	ター-21(D)	15×16	11		10YR4/1褐色土		349	ター-21(D)	27×28	16.5		10YR4/1褐色土	
305	ター-21(D)	14×14	14		10YR4/1褐色土		350	ター-21(D)	24×29	16		10YR4/1褐色土	
306	ター-21(D)	20×22	25		10YR4/1褐色土		351	ター-21(D)	22×26	32.5		10YR4/1褐色土	
307	ター-21(D)	19×20	29.5		10YR4/1褐色土		352	ター-21(D)	1130×22 (22)×32	15.5 16.5		10YR4/1褐色土	
308	ター-21(D)	14×15	27.5		10YR4/1褐色土		353	ター-21(D)	18×24	19		10YR4/1褐色土	
309	ター-21(D)	17×20	25.5		10YR4/1褐色土		354	ター-21(D)	21×23	21.5		10YR4/1褐色土	
310	ター-21(D)	20×28	23		10YR4/1褐色土		355	ター-21(D)	23×24	28.5		10YR4/1褐色土	
311	ター-20(D)	20×22	38		10YR4/1褐色土		356	ター-20(D)	18×19	20.5		10YR4/1褐色土	
312	ター-21(D)	26×32	35		10YR4/1褐色土		357	ター-20(D)	16×23	11.5		10YR4/1褐色土	
313	ター-21(D)	16×19	34		10YR4/1褐色土		358	ター-20(D)	26×38	33.5		10YR4/1褐色土	
314	ター-21(D)	22×26	33.5		10YR4/1褐色土		359	ター-20(D)	21×26	36		10YR4/1褐色土	
315	ター-21(D)	36×40	40		10YR4/1褐色土		360	ター-20(D)	21×(23)	11.5		10YR4/1褐色土	

第10表 ビット計測表

番号	検出位置	面積	深さ	色調	備考	機号	検出位置	規模	深さ	色調	備考
P361	セ-22(D)	20×25	33	10YR4/1褐色土		F406	カ-26(D)	36×37	39	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む
362	セ-22(D)	20×22	31	10YR4/1褐色土		407	カ-27(D)	(20)×(26)	27	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む
363	セ-22(D)	26×31	28	10YR4/1褐色土		408	カ-28(D)	23×25	19	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む
364	セ-22(D)	15×19	21	10YR4/1褐色土		409	コ-21(D)	17×18	13	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む
365	セ-22(D)	20×30	40	10YR4/1褐色土		410	コ-20(D)	58×64	24	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む
366	セ-22(D)	19×22	24.5	10YR4/1褐色土		411	コ-20(A)	36×43	23.5	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む
367	ヌ-22(D)	22×24	20	10YR4/1褐色土		412	シ-23(A)	34×50	20	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む
368	ヌ-22(D)	22×25	27.5	10YR4/1褐色土		413	ヌ-17(A)	28×38	14	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む
369	ヌ-22(D)	16×19	29.5	10YR4/1褐色土		414	ヌ-17(A)	46×50	19	—	
370	ヌ-22(D)	17×21	35	10YR4/1褐色土		415	シ-17(A)	(26)×(28)	14.5	—	
371	ヌ-22(D)	30×31	28	10YR4/1褐色土		416	シ-17(A)	26×26	18.5	—	
372	ヌ-22(D)	23×24	14	10YR4/1褐色土		417	ス-17(A)	28×32	10	—	
373	ヌ-22(D)	19×27	35	10YR4/1褐色土		418	ヌ-17(A)	22×30	20	10YR3/3暗褐色土	褐色ロームブロック 少量含む
374	ヌ-22(D)	26×27	27	10YR4/1褐色土		419	ヌ-17(A)	28×34	21	10YR3/3暗褐色土	褐色ロームブロック 少量含む
375	ヌ-22(D)	25×28	24	10YR4/1褐色土		420	ス-17(A)	21×24	18	—	
376	ソ-20(D)	23×27	28.5	10YR4/1褐色土		421	シ-17(A)	29×30	26.5	10YR3/3暗褐色土	褐色ロームブロック 少量含む
377	ソ-20(D)	18×18	14	10YR4/1褐色土		422	ヌ-17(A)	64×80	10	—	
378	セ-22(D)	18×19	21.5	10YR4/1褐色土		423	ヌ-17(A)	28×31	19	—	
379	セ-22(D)	13×14	21	10YR4/1褐色土		424	ヌ-16(A)	24×34	34	—	
380	セ-22(D)	24×26	27	10YR4/1褐色土		425	ヌ-17(A)	23×24	9	—	
381	タ-23(D)	32×33	9.5	10YR4/1褐色土		426	ス-17(A)	36×44	9	10YR3/3暗褐色土	褐色ロームブロック 少量含む
382	タ-23(D)	30×31	18	10YR4/1褐色土		427	シ-16(A)	22×26	—	—	
383	タ-21(D)	21×28	12.5	10YR4/1褐色土		428	シ-16(A)	28×36	93.5	—	
384	ソ-22(D)	21×24	11	10YR4/1褐色土		429	シ-16(A)	32×36	38.5	—	
385	ソ-22(D)	23×24	10	10YR4/1褐色土		430	セ-17(A)	38×38	14.5	—	
386	ソ-22(D)	17×21	15.5	10YR4/1褐色土		431	セ-17(A)	36×44	11	—	
387	チ-23(D)	24×27	9	10YR4/1褐色土		432	タ-20(A)	30×31	31	—	
388	チ-23(D)	16×23	8.5	10YR4/1褐色土		433	タ-20(A)	54×56	17	—	
389	チ-23(D)	18×25	8	10YR4/1褐色土		434	ソ-21(A)	22×23	10.5	10YR3/3暗褐色土	
390	タ-20(D)	21×22	31	10YR4/1褐色土		435	ソ-21(A)	22×28	15	10YR3/3暗褐色土	
391	タ-20(D)	26×28	31	10YR4/1褐色土		436	セ-21(A)	24×26	18	10YR3/3暗褐色土	
392	タ-20(D)	24×28	34	10YR4/1褐色土	粘土・炭化物を含む	437	セ-21(A)	24×26	9.5	10YR3/3暗褐色土	
393	オ-28(D)	24×28	33	10YR3/1暗褐色土		438	ソ-21(A)	56×60	43	10YR3/3暗褐色土	
394	オ-28(D)	20×20	10.5	10YR4/1褐色土		439	タ-21(A)	40×54	39	10YR3/3暗褐色土	
395	オ-28(D)	18×25	6.5	10YR4/1褐色土		440	チ-21(A)	31×32	10	10YR3/3暗褐色土	
396	オ-28(D)	22×30	12.5	10YR4/1褐色土		441	チ-21(A)	26×27	37	10YR3/3暗褐色土	
397	オ-28(D)	18×20	40.5	10YR4/1褐色土		442	チ-21(A)	17×20	15	10YR3/3暗褐色土	
398	オ-26(D)	28×36	9.5	10YR3/3暗褐色土		443	チ-21(A)	22×22	30	10YR4/1褐色土	小石多量含む
399	カ-27(D)	26×28	30	10YR4/1褐色土		444	チ-21(A)	46×46	32	10YR4/1褐色土	小石多量含む
400	カ-27(D)	19×26	28	10YR4/1褐色土		445	ヌ-21(D)	26×26	18	10YR4/1褐色土	小石多量含む
401	エ-28(D)	13×20	6	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む	446	チ-21(A)	30×30	27	10YR4/1褐色土	小石多量含む
402	カ-26(D)	34×37	49	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む	447	チ-21(A)	27×27	19	10YR4/1褐色土	小石少量含む
403	コ-22(D)	30×35	13	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む	448	チ-21(A)	44×53	22	10YR4/1褐色土	小石少量含む
404	キ-25 (1)	18×20	31	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む	449	チ-23(A)	38×48	22	—	
405	キ-25 (D)	22×26	29	10YR2/3暗褐色土	小石多量含む ローム層少量含む	450	チ-23(A)	24×25	9	—	

第11表 ビット計測表

番号	設置位置	規格	深さ	色調	備考	番号	設置位置	規格	深さ	色調	備考
P451	ス-19(A)	23×24	9	—		P496	ス-14(A)	22×24	7	—	
452	ス-19(A)	32×34	8	—		497	ス-17(A)	30×(50) 38×(32)	12 13	—	
453	ス-19(A)	32×24	10	—		498	ス-17(A)	50×80	10	—	
454	ス-19(A)	78×86	18	—		499	ス-17(A)	34×50	7.3	—	
455	サ-15(A)	64×66	23	10YR3/2黒褐色土	小石粘土ブロック 設置	500	ソ-15(D)	30×32	15	—	
456	コ-16(A)	28×28	25	—		501	ソ-14(D)	46×52	14	10YR3/2黒褐色土	ローム粘土ブロック 設置
457	コ-16(A)	28×33	20	—		502	セ-15(D)	42×42	7	10YR3/2黒褐色土	ローム粘土ブロック 設置
458	コ-16(A)	20×22	9	—		503	セ-15(D)	22×26	16	10YR3/2黒褐色土	ローム粘土ブロック 設置
459	サ-16(A)	30×40	24	—		504	ソ-16(D)	14×20	36	—	
460	サ-16(A)	31×32	27	—		505	ソ-17(D)	20×38	28.5	10YR3/4暗褐色土	
461	サ-16(A)	32×48	26	—		506	ソ-14(D)	18×20	8	—	
462	サ-16(A)	30×44	28	—		507	ソ-16(D)	20×24	13	10YR3/4暗褐色土	
463	サ-16(A)	30×40	19	—		508	ソ-16(D)	20×24	16	10YR4/1暗褐色土	
464	サ-17(A)	28×54	18	—		509	ソ-15(D)	22×26	16	10YR4/1暗褐色土	
465	サ-17(A)	38×40	20	—		510	ソ-16(D)	10×16	30.5	10YR4/1暗褐色土	
466	サ-17(A)	42×32	22	—		511	ソ-16(D)	10×11	28.5	10YR4/1暗褐色土	
467	サ-17(A)	32×34	24	—		512	ス-19(D)	24×28	16.5	10YR4/1暗褐色土	
468	サ-16(A)	32×42	21	—		513	セ-19(D)	20×24	11	10YR4/1暗褐色土	
469	サ-17(A)	26×28	25	—		514	セ-18(D)	18×21	3.5	10YR3/3暗褐色土	
470	コ-16(A)	24×31	25	—		515	セ-18(D)	15×22	15	10YR3/3暗褐色土	
471	シ-16(A)	31×36	16.5	—		516	セ-18(D)	12×16	13	10YR3/3暗褐色土	
472	コ-16(A)	26×26	31	—		517	ソ-18(D)	(14)×(14) (20)×(30)	7.5 23	10YR3/3暗褐色土	
473	サ-15(A)	30×32	36	—		518	ソ-18(D)	26×26	21.5	10YR3/3暗褐色土	
474	サ-15(A)	21×24	19	—		519	セ-18(D)	40×64	7.5	10YR3/3暗褐色土	
475	サ-16(A)	16×17	17	—		520	セ-15(D)	22×34	7	10YR4/1暗褐色土	
476	サ-15(A)	18×20	39	—		521	ソ-17(D)	34×36	9	10YR4/1暗褐色土	
477	サ-15(A)	23×26	36	—		522	ケ-21(D)	25×32	10	10YR4/1暗褐色土	
478	サ-15(A)	26×30	31.5	—		523	サ-23(D)	14×16	24	10YR4/1暗褐色土	
479	サ-15(A)	22×29	10.5	—		524	サ-23(D)	24×24	11	10YR4/1暗褐色土	
480	コ-14(A)	28×30	10	—		525	サ-23(D)	36×38	22	10YR4/1暗褐色土	
481	サ-14(A)	24×26	23	—		526	サ-23(D)	21×24	29	10YR4/1暗褐色土	
482	サ-14(A)	34×36	17	—		527	サ-23(D)	20×24	—	10YR4/1暗褐色土	
483	サ-12(A)	34×34	11	—		528	サ-23(D)	32×40	35	10YR4/1暗褐色土	
484	サ-15(A)	48×56	15	—		529	サ-23(D)	16×16	14	10YR4/1暗褐色土	
485	サ-15(A)	24×24	13	—		530	サ-23(D)	18×22	11	10YR4/1暗褐色土	
486	サ-15(A)	38×40	24	—		531	サ-23(D)	16×22	24	10YR3/3暗褐色土	
487	サ-15(A)	42×46	3	—		532	サ-23(D)	20×30	23	10YR3/3暗褐色土	
488	サ-15(A)	30×33	12	—		533	サ-23(D)	34×36	31	10YR3/3暗褐色土	
489	シ-14(A)	26×34	10	—		534	ケ-23(D)	20×22	25	10YR3/3暗褐色土	
490	シ-14(A)	38×38	10	—		535	ケ-25(D)	18×19	11	10YR3/3暗褐色土	
491	ス-15(A)	32×34	14	—		536	ケ-23(D)	12×17	11	10YR3/3暗褐色土	
492	ス-15(A)	23×24	16	—		537	ケ-25(D)	30×30	17	10YR3/3暗褐色土	ローム粘土・小石を含む
493	カ-26(D)	20×26	27	10YR3/1暗褐色土		538	ケ-25(D)	16×18	19	10YR3/3暗褐色土	ローム粘土・小石を含む
494	ス-15(A)	20×21	15	—		539	キ-25(D)	28×28	18	10YR3/1暗褐色土	ローム粘土・小石を含む
495	カ-26(D)	20×23	24	10YR3/1暗褐色土		540	キ-25(D)	18×20	13	10YR3/1暗褐色土	

第12表 ビット計測表

品名	換出位置	規格	深さ	色調	備考	番号	掘削位置	層	深さ	色調	備考
PS41	キ-25(D)	28×38	20	10YR3/1黒褐色土		F286	シ-25(D)	22×23	21.5	-	
542	キ-25(D)	30×48	28	10YR3/1黒褐色土		587	シ-23(D)	22×26	33	-	
543	キ-25(D)	20×21	41	10YR3/3暗褐色土		588	シ-22(D)	30×30	26.5	-	
544	キ-25(D)	18×20	12	10YR3/3暗褐色土	ロ-ム瓦下石を含む	589	シ-23(D)	14×13	11	-	
545	キ-25(D)	18×26	37	10YR3/3暗褐色土	ロ-ム瓦下石を含む	590	サ-23(D)	28×28	28	-	
546	キ-25(D)	18×26	30	10YR3/3暗褐色土	ロ-ム瓦下石を含む	591	サ-23(D)	22×26	36	-	
547	キ-25(D)	19×20	29	10YR4/1黒褐色土		592	サ-23(D)	24×23	40	-	
548	キ-25(D)	24×28	41	10YR3/3暗褐色土	ロ-ム瓦下石を含む	593	サ-23(D)	24×26	33.5	-	
549	キ-25(D)	26×28	44	10YR3/3暗褐色土		594	シ-23(D)	22×24	36	-	
550	キ-25(D)	26×32	34	10YR3/3暗褐色土	ロ-ム瓦下石を含む	595	シ-23(D)	26×-	7.5	-	破り切れている
551	キ-27(D)	20×24	12	10YR3/3暗褐色土		596	シ-23(D)	14×15	12.5	-	
552	キ-27(D)	24×33	16	10YR3/3暗褐色土		597	シ-23(D)	70×-	6.5	-	破り切れている
553	キ-27(D)	20×22	18	10YR3/3暗褐色土		598	シ-23(D)	16×18	26.6	-	
554	ク-27(D)	14×14	11	10YR3/3暗褐色土		599	シ-23(D)	18×26	34.6	-	
555	サ-28(D)	16×33	21	10YR3/1黒褐色土		600	サ-23(D)	16×20	30	-	
556	サ-28(D)	14×20	12	10YR3/1黒褐色土		601	サ-23(D)	22×22	43	10YR4/1黒褐色土	
557	ケ-27(D)	10×16	16	10YR3/1黒褐色土		602	サ-23(D)	20×21	32.5	-	
558	ケ-27(D)	15×21	13	10YR4/1黒褐色土		603	サ-24(D)	16×17	13.5	10YR3/3暗褐色土	しまり、粘りあり
559	ケ-27(D)	24×25	15	10YR4/1黒褐色土		604	シ-23(D)	(12)×14 22×(28)	13.5 18.5	10YR4/1黒褐色土	
560	ケ-27(D)	42×46	14	10YR4/1黒褐色土		605	サ-23(D)	20×24	13	10YR3/3暗褐色土	
561	ケ-27(D)	18×19	13	10YR4/1黒褐色土		606	サ-23(D)	20×21	10.5	10YR3/3暗褐色土	
562	ク-27(D)	34×26	21	10YR4/1黒褐色土		607	サ-24(D)	(14)×17 22×(23)	11	10YR4/1黒褐色土	
563	ケ-27(D)	19×22	14	10YR4/1黒褐色土		608	シ-23(D)	18×19	22	10YR4/1黒褐色土	
564	ケ-27(D)	12×14	13	10YR4/1黒褐色土		609	シ-23(D)	18×24	23	10YR4/1黒褐色土	
565	ケ-27(D)	12×14	12	10YR4/1黒褐色土		610	ケ-27(D)	(10)×22 (30)×20	18 11	10YR4/1黒褐色土	
566	ケ-27(D)	24×26	20	10YR4/1黒褐色土		611	ケ-28(D)	16×26	7	10YR4/1黒褐色土	
567	ス-23(D)	26×38	15	10YR4/1黒褐色土		612	ケ-24(D)	19×31	12.5	10YR4/1黒褐色土	
568	ス-23(D)	20×21	39	10YR3/3暗褐色土		613	コ-25(D)	13×14	12	10YR4/1黒褐色土	
569	ス-23(D)	17×18	8	10YR3/3暗褐色土		614	コ-25(D)	12×14	15.5	10YR4/1黒褐色土	
570	ス-23(D)	12×12	16	10YR3/3暗褐色土		615	ケ-27(D)	19×20	15	10YR4/1黒褐色土	
571	キ-25(D) ケ-25(D)	20×22	21	10YR3/3暗褐色土		616	ケ-28(D)	16×18	17.5	10YR3/1黒褐色土	
572	キ-25(D) ケ-25(D)	23×24	26	10YR3/3暗褐色土		617	ケ-26(D)	20×20	24.5	10YR3/1黒褐色土	白色粒を含む
573	セ-18(D)	16×30	4.5	10YR4/1黒褐色土		618	ケ-25(D)	20×22	29.5	10YR3/1黒褐色土	白色粒を含む
574	キ-25(D)	30×30	36	10YR4/1黒褐色土		619	ケ-25(D)	16×18	30.5	10YR3/1黒褐色土	白色粒を含む
575	カ-25(D)	24×23	23	10YR4/1黒褐色土		620	ケ-26(D)	12×14	16	10YR3/1黒褐色土	白色粒下を含む
576	キ-25(D)	16×20	20.5	10YR4/1黒褐色土		621	ケ-26(D)	15×16	16	10YR3/1黒褐色土	白色粒下を含む
577	ケ-25(D)	24×24	27	10YR3/3暗褐色土		622	ケ-26(D)	28×28	31.5	10YR3/1黒褐色土	白色粒下を含む
578	キ-25(D)	18×12	35.5	10YR3/3暗褐色土		623	ケ-26(D)	24×30	32	10YR3/1黒褐色土	白色粒下を含む
579	カ-27(D)	25×30	32	10YR4/1黒褐色土		624	ケ-27(D)	32×36	27	10YR3/1黒褐色土	白色粒下を含む
580	シ-24(D)	24×36	36	10YR3/1黒褐色土	黄土・炭化物・鉄を含む	625	ケ-27(D)	12×13	17	10YR3/1黒褐色土	白色粒下を含む
581	シ-23(D)	18×20	10	10YR3/3暗褐色土	しまり、粘り強い	626	ケ-27(D)	14×18	17	10YR3/1黒褐色土	白色粒下を含む
582	シ-23(D)	16×16	26.5	10YR4/1黒褐色土	炭化物を含む	627	ケ-27(D)	14×16	18	10YR4/1黒褐色土	
583	シ-23(D)	29×30	49	-		628	ケ-27(D)	14×18	13	10YR4/1黒褐色土	
584	シ-23(D)	16×20	31.5	-		629	ケ-27(D)	16×16	11	10YR3/3暗褐色土	
585	シ-23(D)	17×18	18	-		630	ケ-27(D)	16×16	16	10YR4/1黒褐色土	炭化物を含む

第13表 ビット計測表

番号	掘削位置	規模	深さ	色調	備考	番号	掘削位置	規模	深さ	色調	備考
P631	ク-27D9	14×15	21	10YR4/1褐灰色土		P645	ク-26D9	20×24	29.5	10YR3/3暗褐色土	
632	ク-27D9	15×17	14	10YR4/1褐灰色土		646	ク-26D9	30×30	30	10YR3/3暗褐色土	
633	キ-27D9	14×15	17.5	10YR4/1褐灰色土	炭化物含む	647	ク-26D9	14×18	26.5	10YR3/3暗褐色土	
634	キ-27D9	23×24	21	10YR3/1黒灰色土	粘土・炭化物含む	648	ク-26D9	22×22	25.5	10YR3/3暗褐色土	
635	キ-27D9	24×26	27	10YR4/1褐灰色土	粘土・炭化物含む	649	ク-26D9	22×22	28	10YR3/3暗褐色土	
636	キ-28D9	18×21	15	10YR3/1黒褐色土		650	キ-25D9	22×24	26	10YR3/3暗褐色土	
637	ク-28D9	19×24	23.5	10YR3/3暗褐色土		651	キ-25D9	21×22	30	10YR4/1黒灰色土	
638	ク-29D9	12×15	12	10YR3/3暗褐色土		652	キ-27D9	24×26	27	10YR4/1褐灰色土	
639	ク-27D9	13×15	18	10YR3/1黒褐色土		653	キ-27D9	23×24	37	10YR4/1褐灰色土	
640	ク-27D9	12×14	18	10YR4/1褐灰色土		654	ク-27D9	32×34	41	10YR4/1褐灰色土	
641	ク-27D9	22×24	24	10YR3/3暗褐色土		655	ホ-27D9	28×28	24.5	10YR4/1黒灰色土	
942	ク-27D9	18×26	29	10YR3/3暗褐色土		656	モ-35D9	43×66	9	10YR4/1褐灰色土	
652	ク-26D9	30×30	27	10YR3/3暗褐色土		657	ヘ-6D9	(18)×20 (22)×26	29.5 41	10YR4/1褐灰色土	
644	ク-26D9	26×30	33	10YR3/3暗褐色土							



宮田遺跡Ⅰ地点上空より

谷の出口付近から西側は水田地帯が開け始める

4 溝状遺構（図版十八～二十四）

本節では中・近世の溝状遺構について記載する。時期決定に関しては遺構内からの出土遺物及び調査時における他遺構との関連性を踏えて決定した。なお、時期不明の溝状遺構も本節でまとめて記した。

検出された溝状遺構は第18図～第28図に記載した34基である。これらの中には、①建物址及びピット群、また、②竈、などを区画すると思われる溝状の遺構がある。よって本節では、①・②の各遺構と関連があると考えられる溝状遺構については個々に述べることにする。

① 建物址及びピット群を区画する溝状遺構（M7、M11・12・32、M25・29、M26・M27）

M7号溝状遺構（第17・20図）

本址は、宮田遺跡1地点が調査区域外となる最西端部、な～ぬ-24～26グリッドより検出された。当地点は谷地地形の出口にあたり、調査区の中では最も平坦な広がりが見られる処である。検出状況は近・現代と思われる耕作などの影響を受け、著しく本遺構の周辺は削平されている様子が窺われた。

本遺構は残存状況より西～東へ伸びる溝状遺構であるが、な-25グリッド付近で「一状」に方向を換えて南に延びている。しかし、グリッドな-26付近での溝は削平の影響を受け消滅していることが窺われる。この「一状」に延びる溝状遺構の内側の位置からは7基のピットが確認され、これらのピットを囲むかのようにM7号溝状遺構が検出された。よって、削平を受けている本周辺遺構の検出状況を鑑みると、この箇所には「ピット群」の存在が推察され、M7号溝状遺構はこれらのピット群（建物址）を囲む遺構であったことが考えられる。

規模は、全長約16mを測り、幅約80～90cm、深さは6～18cmである。出土遺物は土鍋2点、砥石、敲石、打製石斧などがある。この内の打製石斧・石錐類（第61図）は、混入遺物である。本溝状遺構の時期は中世であったと考えられ、残存するピットは本溝状遺構と同時期に共有関係にあった何らかの遺構と推察される。

M11・12・32号溝状遺構と2号建物址群（第17・21・27図）

本溝状遺構は、宮田遺跡1地点の西端部付近から検出され、2号建物址群、及び、ピット群を囲む溝と思われる。先述したM7号溝状遺構から北側へ約12m離れた、し～つ-22～25グリッドの位置にある。当地点は谷地地形の出口にあたり、調査区の中では最も平坦な広がりが見られる処である。検出状況は近・現代と思われる耕作などの影響を受け、著しく本遺構の周辺は削平されている様子が窺われた。

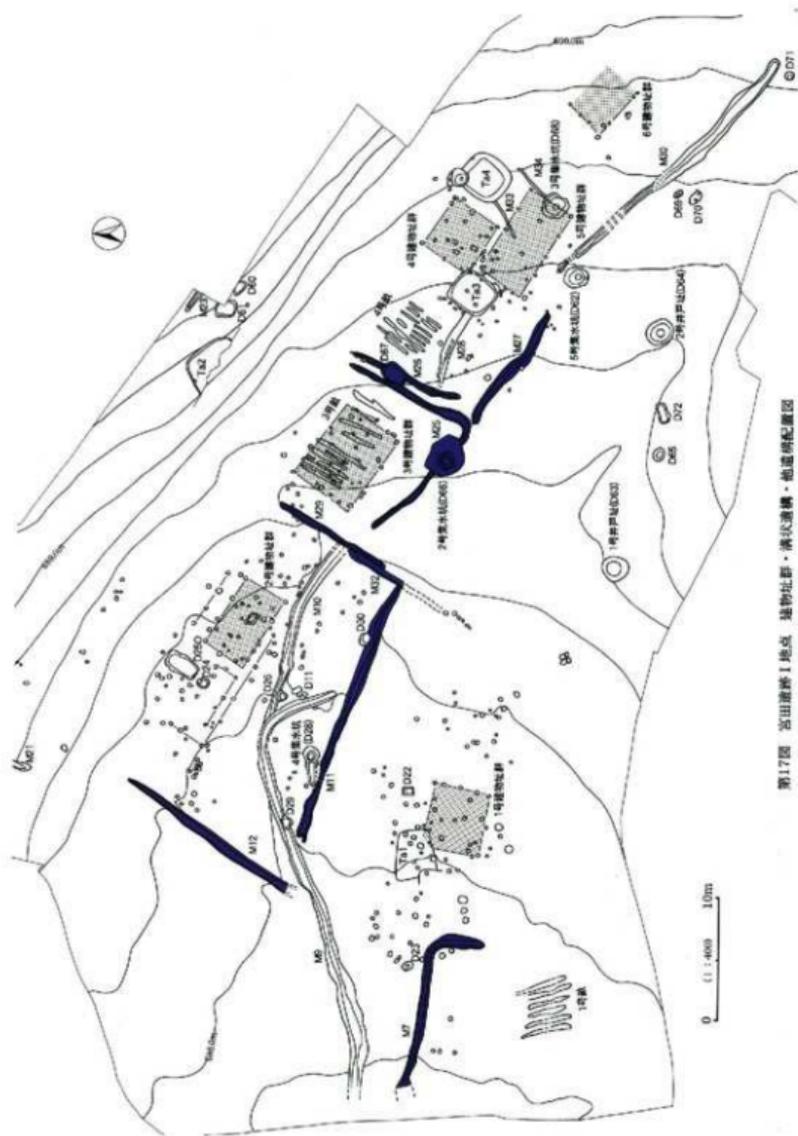
11号溝状遺構は残存状況より東～西へ延びる溝状の遺構で、規模は長さ21.7m、幅48cm～112cm、深さ8～12cmを測る。そして、す-24グリッド付近でM32号溝状遺構と合流する。このM32号溝状遺構は南北方向に延びる溝でグリッドす-24付近でM29号溝状遺構によって破壊されており当地点から北側は消滅していることが窺われる。残存するM32号溝状遺構の規模は長さ9.2m、幅32～64cm、深さは8～11cmを測る。M12号溝状遺構は東～西へ延びるM11号溝状遺構の西脇を北西方向に延びる溝状遺構で、グリッドつ～て-19～22に位置し、規模は長さ約16m、幅48～96cm、深さ5～10cmを測る。このM11号・M12号・M32号溝状遺構を組合わせた3条の溝は「L」型状に延びており、この溝の内側には2号建物址群及びピット群が確認された。なお、此のM11号・M32号溝状遺構については調査時において別遺構として扱ったが、整理作業の中で2号建物址群及び他遺構との配置状況、更に、M29号・32号溝状遺構との重複関係などを鑑みると同一遺構として認められた。

出土遺物はM11号溝状遺構より土鍋、火打金、鉄精碗などがある。溝状遺構の所属期は、M11号溝状遺構から出土した土鍋（16世紀）また、中世と考えられるM29号溝状遺構によってM32号溝状遺構は破壊されていることなどから、本溝状遺構は中世後半と考えられ、建物址及びピット群は本溝状遺構と同時期に共有関係にあった遺構と推察される。

M25・29号溝状遺構と3号建物址群（第17・26・27図）

本址は調査区中央からやや北西にある地点より検出され、3号建物址及びピット群を囲む溝と思われる。

M29号溝状遺構は先述したM32号溝状遺構と同一方向に延びる遺構でM32号溝状遺構を破壊している。確認された位置はし・す-22～24グリッド内からで、南西方向に直線的に延びている。規模は長さ約10m、幅30cm前後、深さ約10cmを測る。M25号溝状遺構は此のM29号溝状遺構の東脇に接するかの様に東から西に延びており、こ-25グリッドの位置でほぼ直角に向きを変えて、北西方向に「J」状に延びている溝である。また、此のM25号溝状遺構は2号集水坑（D66号土坑）と調査区の中央やや北西寄りの、さ-25グリッドにおいて連結している。そして、M29号溝状遺構とM25号溝状遺構を組合わせた2条の溝の形状は「L」状を呈して延びており、その内側の位置からはF3号建物



第17図 宮田建設1地点 建設地部・清収溝構・地盤傾配置図

址及びピット群が確認された。規模・形態は全長23.2mを測り（東西方向約10m・北西方向約13.5m）、幅32cm～48cmを測る。深さは7cm～13cmと浅く、当部周辺は著しく削平されている様子が窺われる。

本址の時期はM25号溝状遺構・2号集水坑（D66）、そして、M29号溝状遺構とも出土遺物がなく正確な時期決定はなされない。しかし、本溝状遺構と共存関係にあると推される2号集水坑（D66）は、阿形態を示す中世と考えられる1号集水坑（D56）、3号集水坑（D68）・5号集水坑（D62）と同様な覆土状況であることなどから推し、M25号・M29号溝状遺構は中世に帰属することが考えられる。

尚、M29号溝状遺構とM32号溝状遺構とは重複関係にあり、M29号溝状遺構がM32号溝状遺構を破壊している。このことからM25号・M29号溝状遺構の「L」内側から確認された3号建物址・ピット群のほうがM11・12・32号溝状遺構内から確認された2号建物址・ピット群より中世の時期の中でも若干新しい時間差が認められる。

M26号・M27号・M30号溝状遺構と4・5号建物址群・4号畝・T a 3・4号竪穴状遺構（第17・26図）

本址が確認された位置は、調査区中央からやや北西にあたる地点で4号・5号建物址群、及び、4号畝を囲む溝と思われる。M26号溝状遺構は、け・こー23～25グリッドより検出され本址は南北方向にほぼ直線的に延びている遺構である。長さは約9.3m、幅約24cm前後で、深さは5～10cm前後を測る。検出状況は近・現代と思われる耕作などの影響を受け、著しく本遺構の周辺は削平されている様子が窺われた。また、本遺構の西端部はグリッドこー25付近で立上がる様子が窺われるが、当部から約1.5m西へ接してM27号溝状遺構が確認された。此のM27号溝状遺構は、く・こー25～27グリッドに位置し、東西方向に延びている溝で、規模は長さ10.5m、幅48～72cmで、深さは7～12cmを測る。そして、M26号・M27号・M30号溝状遺構を組合わせた形状は「L」状を呈して延びており、その内側の位置からは4号・5号建物址群、畝、T a 3・4号竪穴状遺構などが確認された。

本溝状遺構の時期はM26号・M27号溝状遺構ともに出土遺物がなく正確な時期決定はなされない。しかし、中世と考えられるM25号溝状遺構がD67号土坑を破壊し、本M26号溝状遺構はD67号土坑によって破壊を受けている様子などを鑑みると、M26号・M27号溝状遺構は同じ中世の時期の中でも若干古い時間差が推察される。

こうした重複関係から先述したM25号・M29号溝状遺構、及び、その「L」型に囲まれた溝の内側から確認された3号建物址・ピット群、よりも、本M26号・M27号溝状遺構に囲まれた4号・5号建物址群の方が同じ中世の時期の中でも若干古い時間差が認められる。

また、M26号溝状遺構のすぐ東内側く・けー24グリッドに4号畝がある。この畝の脇には4号・5号建物址群の2棟が位置しているが、共に重複関係は認められなかった。こうした検出状況から推しM26号・M27号溝状遺構に囲まれた内側には4号畝及び4・5号建物址群が共存していた可能性もあろう。

② 畝を区画する溝状遺構

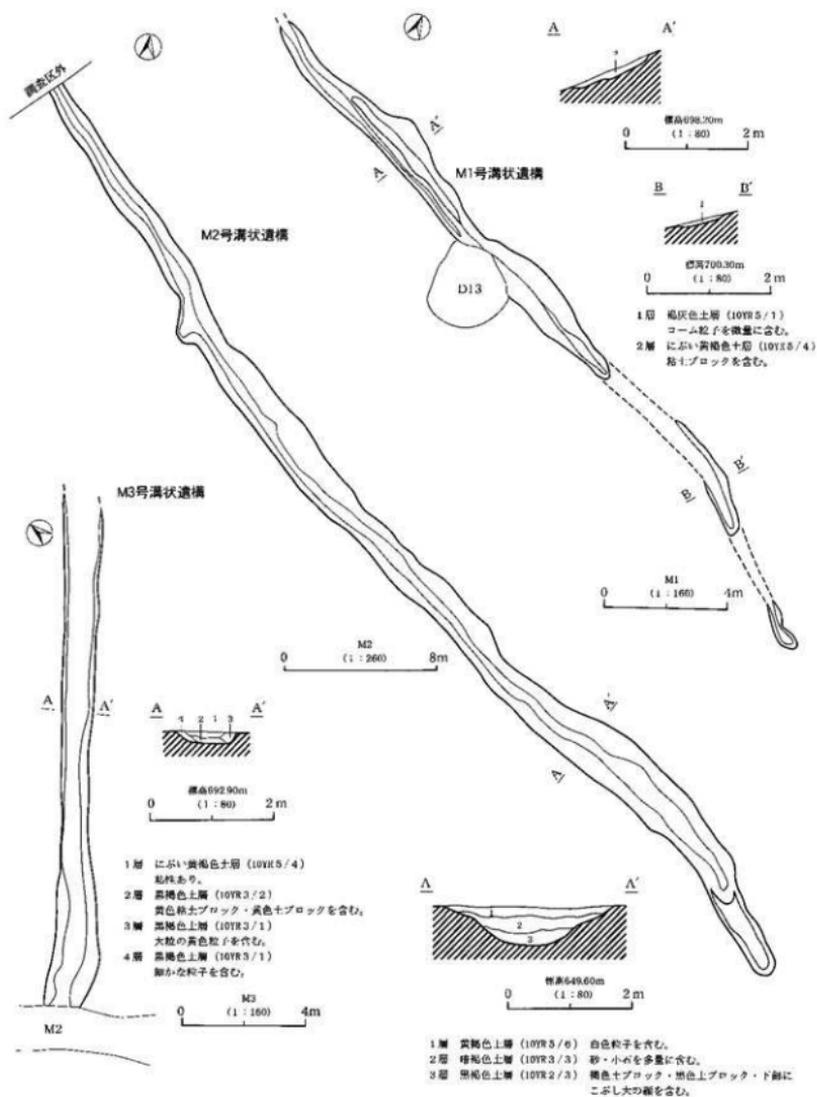
M 3号・19号溝状遺構と2号畝（畑）（第71・18・24図）

本溝状遺構は、宮田遺跡1地点のほぼ中央付近にあたり、当地点が最も谷地が狭まっている処である。M 3号溝状遺構の検出地点は、ま～もー37～40グリッドに位置し2号畝を囲む1条で南北方向を軸とする溝である。規模は長さ16.6m、幅約96～160cm、深さは12～17cmを測る。M 3号溝状遺構はM 2号溝状遺構と重複関係にあり、M 2号溝状遺構（中世）によって破壊されている。一方、M19号溝状遺構の検出地点は、ゆ～りー31～35グリッドに位置し南北方向を軸とする溝である。規模は長さ18.8m、幅約56～120cm、深さは5～14cmを測る。M19号溝状遺構はM20号溝状遺構と重複関係にあり、M20号溝状遺構（近世）によって破壊されている。そして、此の2条の溝状遺構によって囲まれるかのように2号畝があり、両溝状遺構は此の畝と同一方向に並走する溝である。

畝は約20cm間隔で33本前後の畝が、南北方向に延びて構成されており、検出された4箇所の中での最も構成範囲が広く確認される畝である。近接する遺構には大型で多量の炭・焼土が検出されたD51号土坑が畝の北側に、そしてその西脇にはD52号土坑が所在している。

出土遺物はM 3号溝状遺構より須恵磨器、磁石、鍛石などがあり、またM3号溝状遺構を破壊するM2号溝状遺構からは青磁碗（14C後半～15C前半）、銅物石がある。M19号溝状遺構からは鉄鋤車の手杵と思われる鉄製品などが出土した。

本溝状遺構の時期は、M 3号・M19号溝状遺構はM 2号溝状遺構と重複関係にあり、青磁碗が出土したM 2号溝状遺構（14C後半～15C前半）による破壊を受けている。よって、M 3号・M19号溝状遺構及び、この2条の溝によって、区画された2号畝は中世の時期の中でもM 2号溝状遺構より若干新しい時期に帰属することが考えられる。

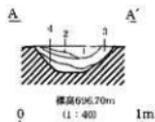


第18図 M1・2・3号溝状遺構実測図

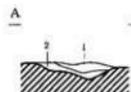
調査区

M5号溝状遺構

M4号溝状遺構

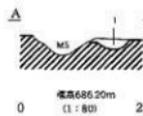
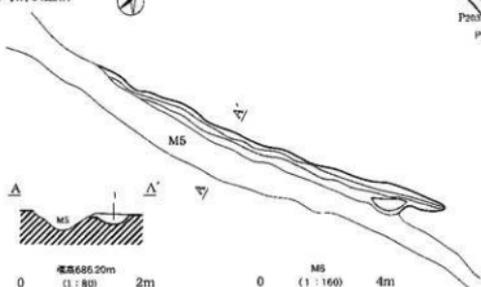


- 1層 暗褐色土層 (10YR 3/3)
粗い砂を少量含む。
- 2層 黒褐色土層 (10YR 3/2)
粗い砂を少量含む。
- 3層 黒褐色土層 (10YR 2/2)
粗い砂を少量含む。
- 4層 にぶい黄褐色土層 (10YR 4/3)
粗い砂を少量含む。



- 1層 黒褐色土層 (10YR 3/1) 下部に砂を含む。
- 2層 黒褐色土層 (10YR 3/1) 褐色土ブロックを含む。
- 3層 褐色土層 (10YR 4/6) 褐色土ブロック多量に含み、砂を少量含む。
- 4層 にぶい黄褐色土層 (10YR 4/3) 下部に砂を含む。

M6号溝状遺構

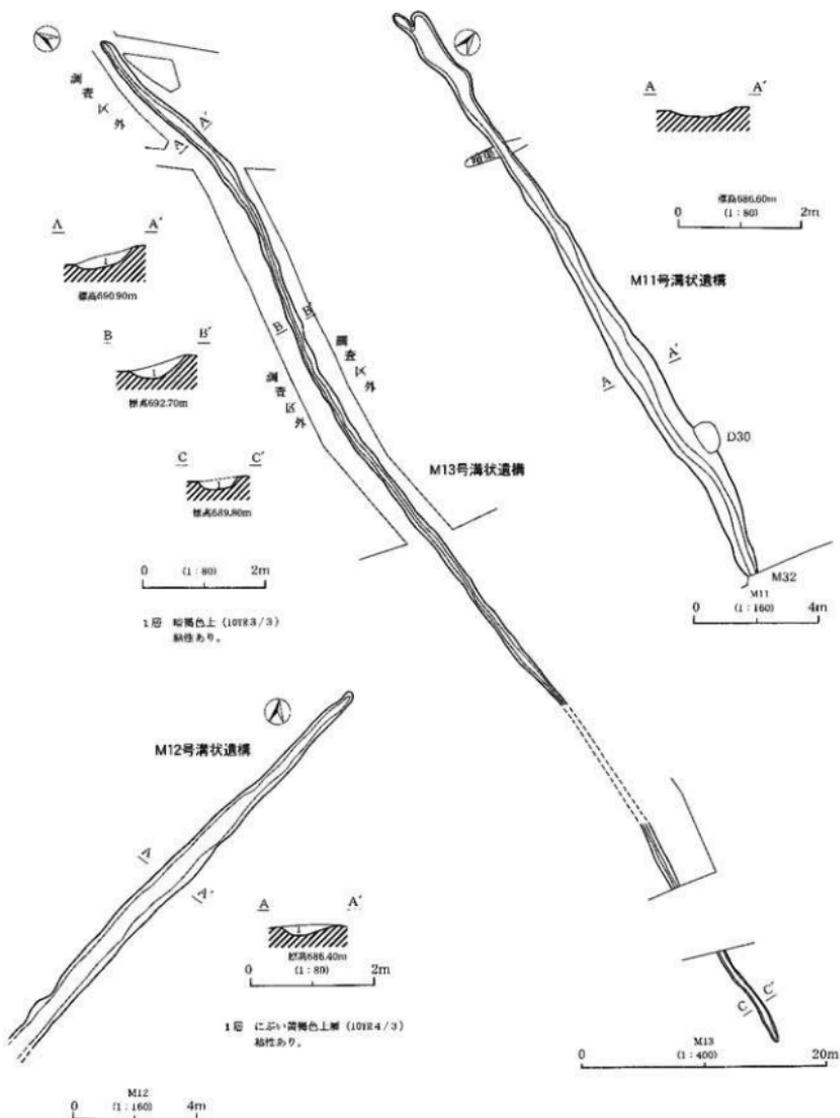


- 1層 褐色土層 (10YR 4/6)
褐色土ブロックを多量に含み、砂を少量含む。

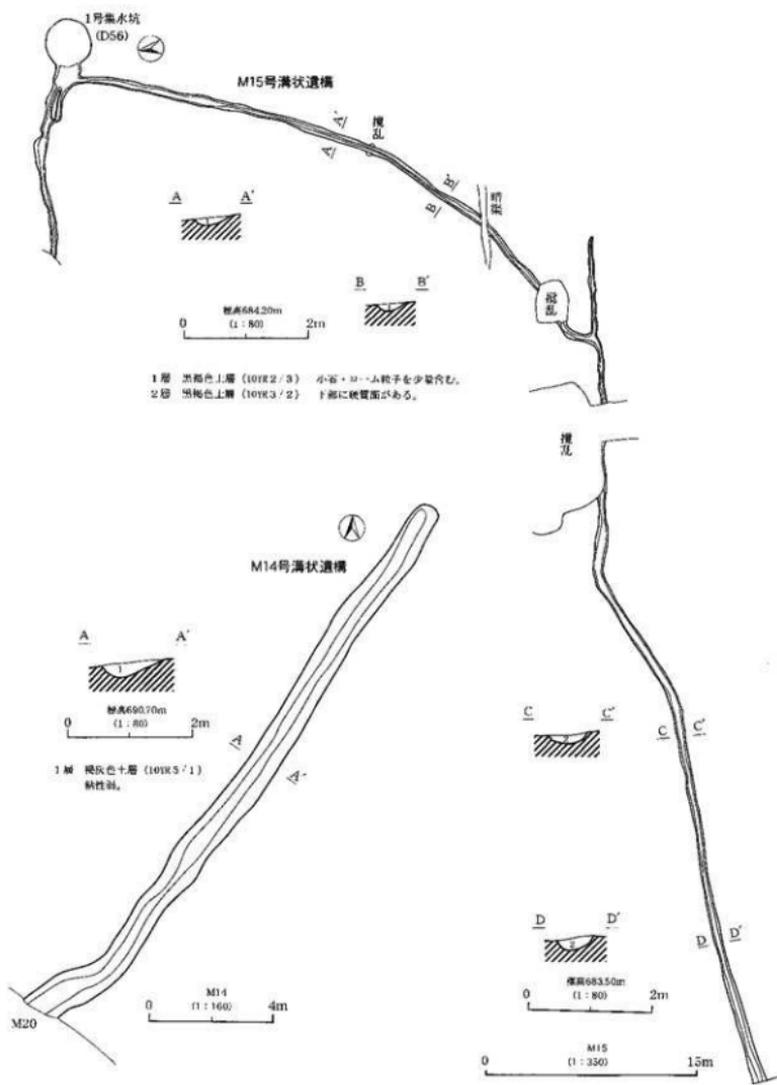
M4 (1:1300) 4m

M5 (1:1600) 4m

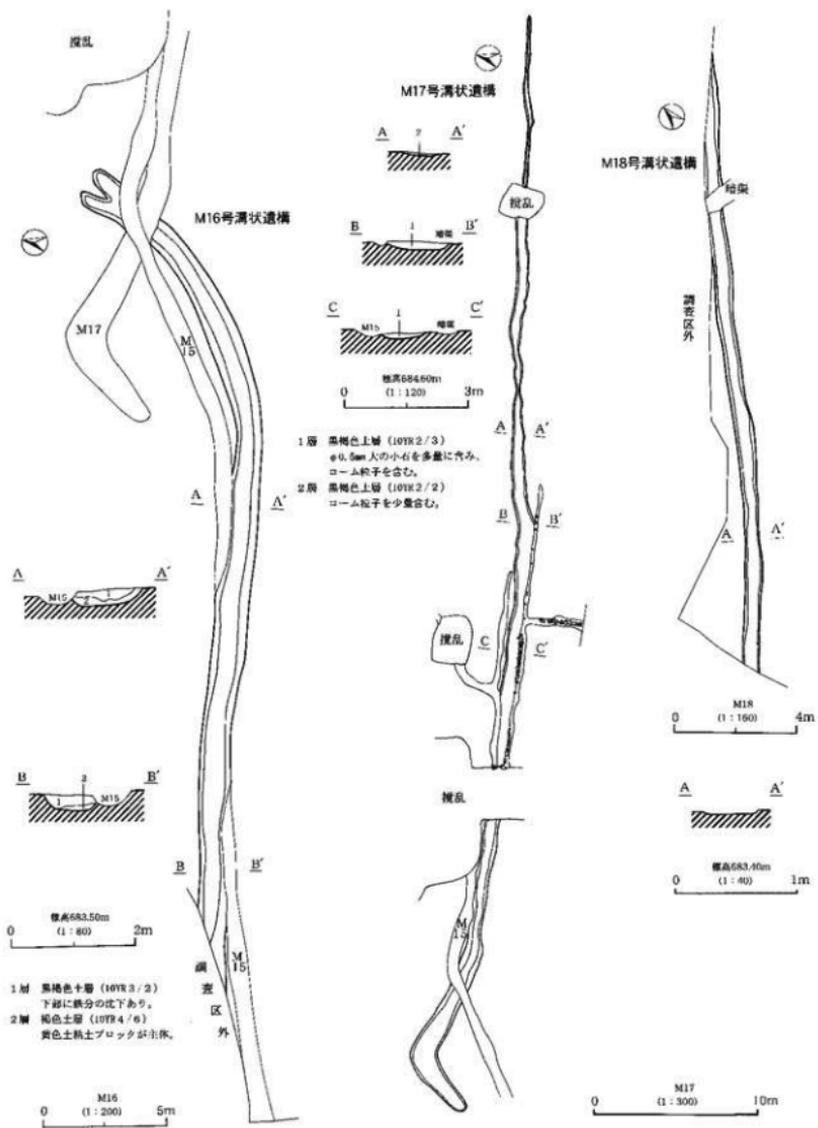
第19図 M4・5・6号溝状遺構実測図



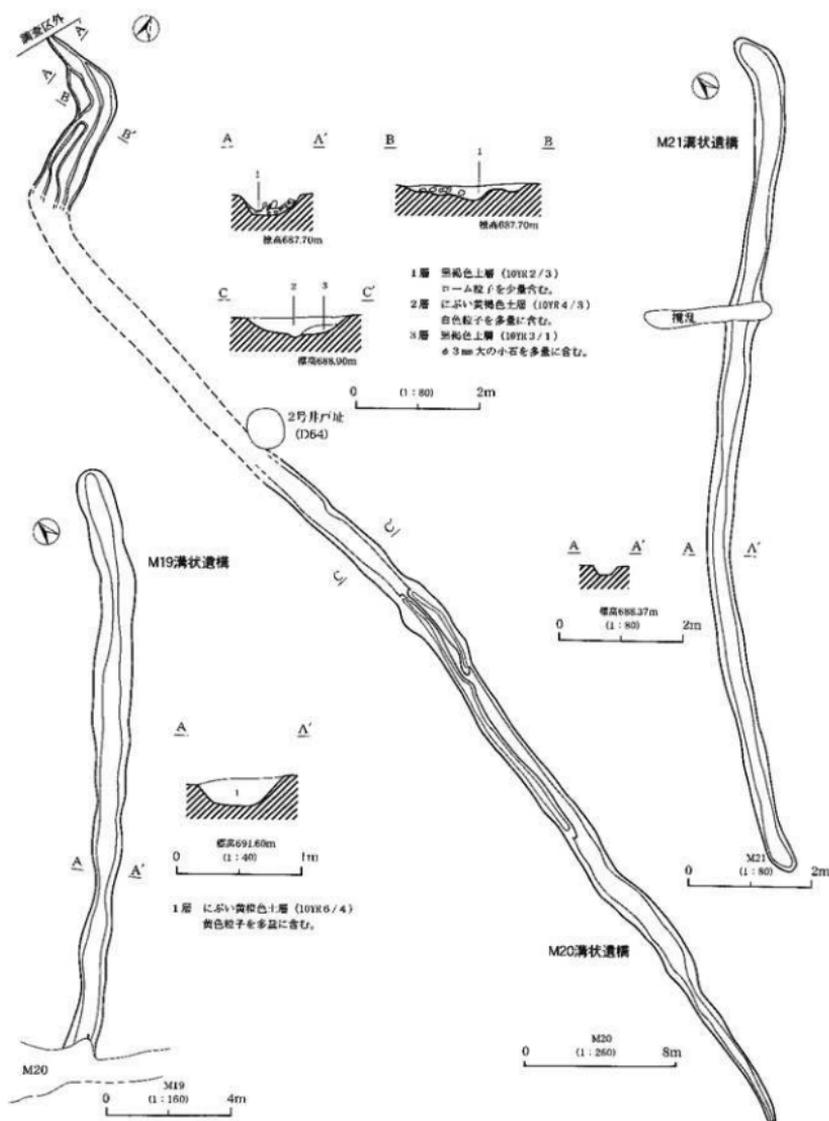
第21図 M11・12・13号溝状遺構実測図



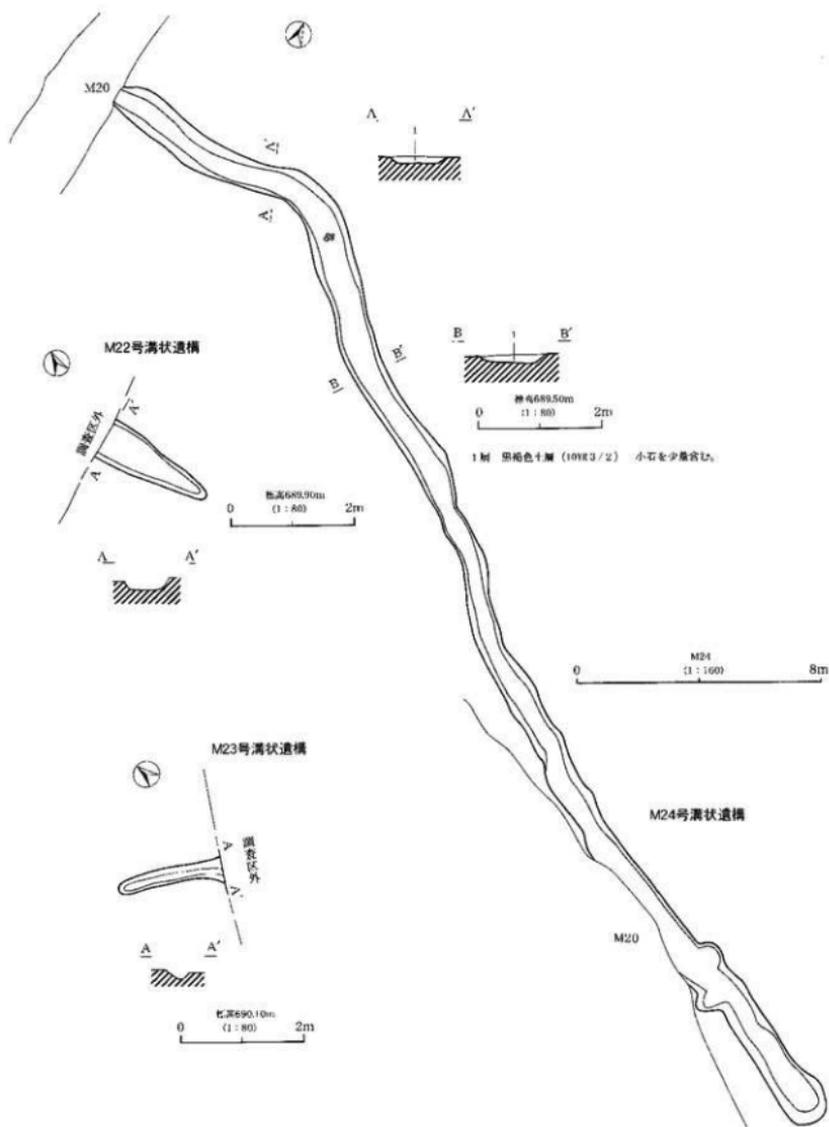
第22図 M14・15号溝状遺構実測図



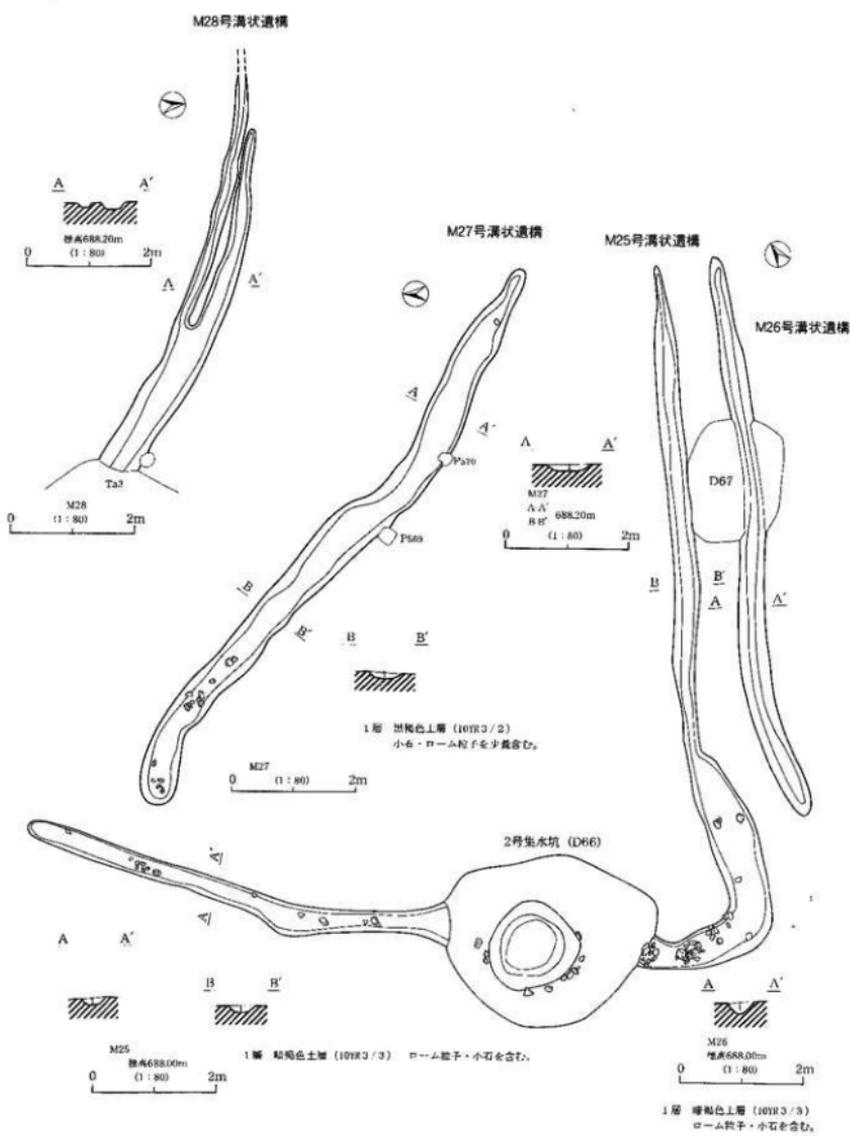
第23図 M16・17・18号溝状遺構実測図



第24図 M19・20・21号溝状遺構実測図

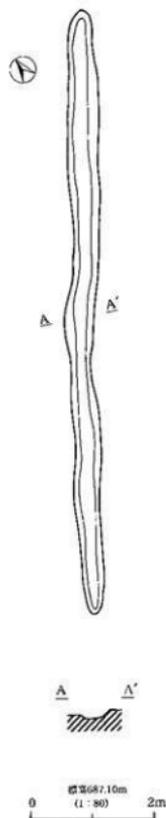


第25図 M22・23・24号溝状遺構実測図

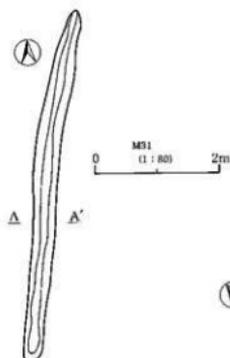


第26図 M25・26・27・28号溝状遺構平面図

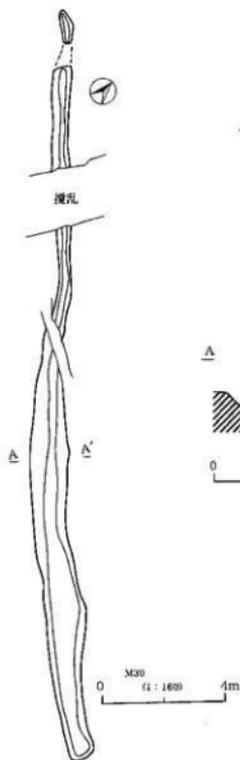
M29号溝状遺構



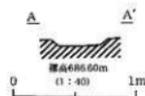
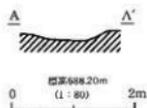
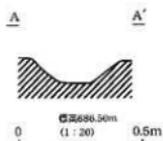
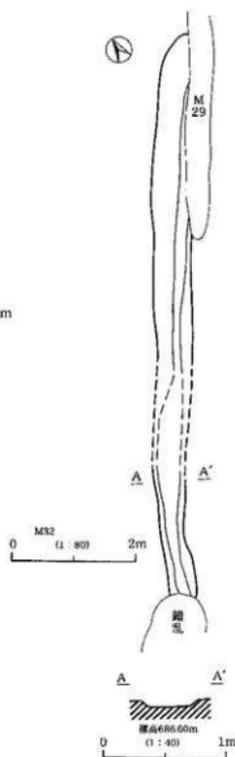
M31号溝状遺構



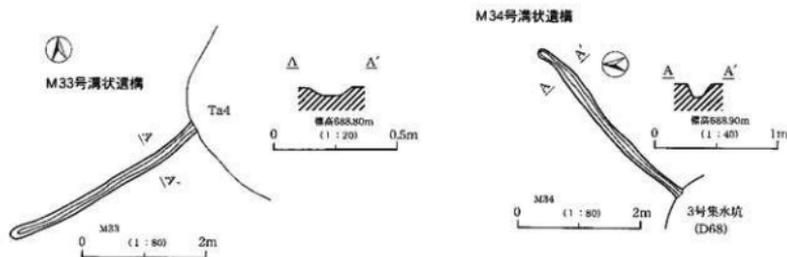
M30号溝状遺構



M32号溝状遺構



第27図 M29・30・31・32号溝状遺構実測図



第28図 M33・34号溝状遺構実測図

第14表 溝状遺構計測表

遺構名	検出位置	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	断面形	出土遺物	備考
M1	III-ナヘヒ-39-2	26.4	64~144	10~21	角底状		
M2	HI-ノヘヤ-39-10	61.1	130~260	29~56	すり鉢状	谷村鉢 陶物石 打製石片 石礫 青磁碗 (14c後~15c前)	中世
M3	H-メモ-37-40 I-キ-1	16.64	96~160	12~17	逆台形	網意銅鏡 磁石 磁石	中世
M4	H-ネ-ホ-7-13	17.81	39~117	16~30	舟底状	打製石片 (17c後~18c) 打製石片 瀬戸瓦器類 (18c以降)	中世
M5	D-ソ-ネ-22~24	36.8	48~144	13~39	舟底状		中世 (M9の破壊を受ける)
M6	D-チ-テ-23	12.32	32~96	8~17	舟底状	土鍋1点 打製石片	中世
M7	D-チ-ヌ-24~26	33.6	80~90	8~18	W状		中世
M8	D-チ-ヌ-25~26	13.6	112~208	3~5			中世
M9	D-ソ-ネ-21~23	39.52	80~176	8~36	舟底状	土鍋1点 鉢 土製内輪 磁石	中世
M10	D-ス-ター-21~22	14.56	48~96	14~21	逆台形		中世 (M9の破壊を受ける)
M11	D-ス-ター-22~24	21.76	48~112	6~10		土鍋1点 火打石 鉄鋤頭	中世
M12	D-ツ-テ-19~22	16	48~96	8~12	舟底状	土鍋2点	中世
M13	C-D-ネ-ソ-31~14	98.8	80~140	4~19	舟底状		中世 (検出状況より推定?)
M14	II-ラ-リー-32~33 D-ア-33	29.8	80~128	6~21	舟底状		
M15	A-シ-ホ-17-29	109.9	32~70	6~16	舟底状	常滑壺	中世
M16	A-ナ-フ-26-29	32.6	30~140	29~35	逆台形		中世 (M17の破壊を受ける)
M17	A-キ-ヌ-26~27	69	30~150	6~21			中世 (M15の破壊を受ける)
M18	A-タ-ツ-19~23	20.32	48~64	3~6			中世 (検出状況より)
M19	H-ユ-リー-31~35	18.8	56~120	5~14	逆台形	初級車心棒	中世 (2号坑と共有関係か)
M20	I-ヨ-リ-34~35 D- ア-ヌ-24~34	7.3, 3.2	7.8~23.4	9~23		鉄軸刺 石鏃 鉄製品 常滑瓦 瀬戸瓦器 唐瓦類 打製石片 瀬戸瓦器類ハタケ 土製の平石 すり鉢 瀬戸瓦器類土器付土器	中世~近世
M21	D-ソ-チ-14~17	12.68	32~48	7~13	逆台形		
M22	D-ター-13	1.92	32~72	9~23	逆台形		
M23	D-ク-20	1.68	24~40	11~13	舟底状		
M24	D-エ-シ-27~32	41.76	64~176	4~10	逆台形	土鍋1点 縄文土器 土製瓦土器 (縄文) 打製石片	中世
M25	D-ケ-シ-23~25	23.2	23~76	8~12	逆台形		
M26	D-ケ-コ-23~25	9.28	24~48	5~15	舟底状		中世 (D66瓦坑と共有関係)
M27	D-ク-コ-24~26	10.56	48~72	7~12	逆台形		中世 (検出状況より)
M28	D-ク-コ-24~25	7.36	20~64	8~13	逆台形		
M29	D-シ-ス-22~23	9.92	32~52	4~11	逆台形		中世 (3号検出位置と共有関係か)
M30	D-ワ-キ-27-31	24.64	40~144	11~24		鉄製品 瀬戸瓦器瓦礫 灰胎	近世
M31	D-ソ-24-28	6.76	32~64	3	逆台形		
M32	D-ス-セ-23-24	9.2	32~64	8~11	逆台形		中世 (M29の破壊を受ける)
M33	D-カ-25	3.52	16	5			中世 (Ta4号の破壊を受ける)
M34	D-オ-カ-26-7	3.28	8~24	5	逆台形		中世 (Ta3号の破壊を受ける)

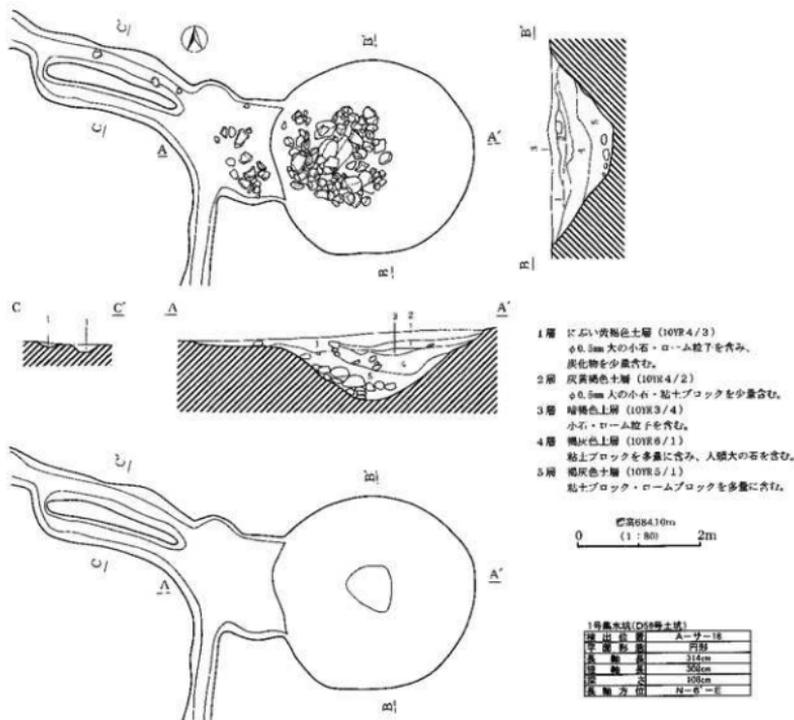
5 土 坑

本節では中世と考えられる土坑について記載する。時期決定に関しては遺構覆土内からの出土遺物及び中世と考えられる遺構覆土の色調との整合性、また周辺中世遺構との関連を鑑みて決定した。

宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ地点から73基の中世土坑が検出された。地区別に看ると「調査区Ⅰ地点」からは16基、「調査区Ⅲ地点」からは57基の土坑が検出され、その約8割はⅠ地点から検出された。この調査時において上坑として扱った遺構（第39図～第47図）には注意する上坑が何基か認められた。このため整理の段階で詳細に分析すると次の三種類に分類される。

- | | |
|---------------------------|-----|
| ① 雨水・沢水等を溜めたと考えられる集水的な土坑 | 5基 |
| ② 土坑内及び覆土中に煤土・炭（炭化物）を含む土坑 | 26基 |
| ③ 「その他の土坑」 | 39基 |
| ④ 井戸址 | 3基 |

よって本節においては①～②の土坑について記すことにし、井戸址は本節の（6）で述べ、その他の上坑39基については（5）の③「その他の上坑」の第39図～第47図に記載した図及び計測表を主に参照されたい。



第29図 1号集水坑実測図 (D56)

① 雨水・沢水等を溜めたと考えられる集水的な土坑 5基

本形態を示す土坑は5基が採取され、調査区I地点から4基(D28・D62・D66・D68)、調査区III地点から1基(D56)が検出された。これら5基の遺構の検出状況には次の1)・2)・3)の3点にいずれも共通する点が窺われる。

- 1) 溝状の遺構と連結すること。(D56=M15、D28=溝状遺構、D66=M25、D68=M34)
- 2) 断面形状は「大きく逆ハの字状に開き」、すり鉢状、若しくは、堰根鉢状を呈すること。
- 3) 礫が混在していること。

こうした点は2)、3)の土坑、また(6)で述べる井戸址とは違った形態を示すことが感知された。そして本土坑は、調査時における検出状況、及び、覆土の状態などから先述した「溝状遺構」と伴関係をもった遺構であることが推察される。つまり、検出された5基の遺構(土坑)は、雨水・沢水等を溜めたと考えられる集水的な性格をもった遺構であり、各遺構(土坑)と連結される溝状遺構は集水的な遺構に水を集めるため、若しくは、溜まりえた水を排水するための溝であったことが窺われた。(これ以後「集水的な遺構」の名称を本報文中では「集水坑」と記す。)

1号集水坑(D56)【第29図-図版十三】

本遺構は調査区III地点、サー18グリッドより検出された。断面形状は大きく「逆ハの字状」に開きすり鉢状で、底部はほぼ平坦である。規模・形態は、長軸長3.14m、短軸長3.08mで深さは1.08mを測る。検出された5基の集水坑の中では最も大きく、ほぼ円形を呈している。覆土中には多量の礫が含まれていたが、底面付近で確認された礫は出土状況より溝(M15)が連結する南西側壁面から底面にかけて人為的に敷き詰められたものと考えられる。

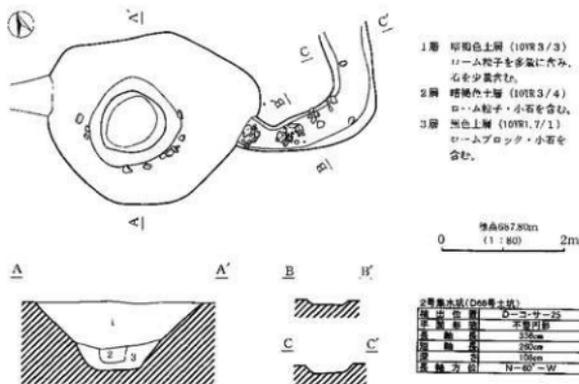
[本土坑と連結するM15号溝状遺構] (第7図)

M15号溝址は調査区III地点のほぼ中央付近を西北方向に「緩やかな弓状」を呈して縦断する溝である(第7図)。対象地の中央やや北寄りより1号集水坑(D56)と連結し、当地点から方向はほぼ直角に西方向へと変わり調査区外へ延びている。一方本址の南側は、M16号、M17号溝状遺構を併接して調査区外へと延びている。

規模・形態は全長109.9mを測り集水坑に関連する溝の中では最も良い溝である。幅は0.35~0.70mで、土坑と溝とが連結する箇所においては1.6mの幅を有し、当箇所は溝状遺構の幅からすると倍以上と幅広く施されている。深さは0.06~0.16mを測り、連結する箇所では0.08mと浅く、当箇所は著しく削平されている様子が窺われる。

出土遺物は1号集水坑(D56)より青磁碗(12世紀)・常滑甕(中世)などが出土し(第55図-1・15)、本溝状遺構からは常滑の甕(第55図-12)が確認された。

これらの出土遺物から本土坑・溝址の所産期は、中世(12世紀を遡らない)に帰属するであろう。



第30図 2号集水坑実測図(D66)

2号集水坑 (D66) (第30図、図版十四)

本遺構は調査区1地点の北西付近に位置し、こ・さ-25グリッドより検出された。断面形状は大きく「逆ハの字状」に開き底部の約40cm上から急角度に掘り込まれて底面に達している。形状は「ラバ状」を呈し、底部はほぼ平坦である。規模・形態は、長軸長3.36m、短軸長2.6mで深さは1.08mを測る。検出された5基の集水坑の中では先述した1号集水坑(D56)とほぼ同規模で、形状は円形に近い楕円形を呈している。覆土中には礫が含まれていたが、1号集水坑で確認された壁面に人為的に敷き詰められたと思われる礫は認められず、素掘りのままであったことが考えられる。

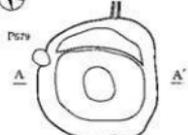
本土坑からの出土遺物はなかった。また、本址は下記するM25号溝状遺構と伴関係にあり、対象地の中央やや北西寄りのさ-25グリッドの位置で連結している。そして、隣接したすぐ東側には第3号竈址が溝に囲まれる形で存在する。

【本土坑と連結するM25号溝状遺構】 (第30・10図)

M25号溝状遺構は、調査区1地点の北西付近を東から西に延び、こ-25グリッドの位置でほぼ直角に向きを変えて、北西方向に「L字状」に延びる溝である(第10図)。2号集水坑(D66)とは対象地の中央やや北西寄りのさ-25グリッドにおいて連結する。規模・形態は全長23.2mを測り(東西方向約10m・北西方向約13.5m)、幅0.32~0.48mで、深さは0.07~0.13mと浅く、当部周辺は著しく削平されている様子が窺われる。なお、本M25号溝状遺構と2号集水坑(D66)とが連結するすぐ手前の溝の状況は「L字状」となるが、当部に接するかの様にM27号溝状遺構が存在している。因みに、M25・M27号溝状遺構は著しく近接した位置にあること、また、当部周辺は著しく削平されている様子が窺われることなどを鑑みると、M25・M27号溝状遺構は同一遺構であった可能性も考えられる。本M25号溝状遺構からの出土遺物はなかった。

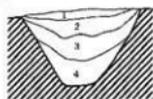
本址の時期は2号集水坑(D66)・M25号溝状遺構とも出土遺物がなく正確な時期決定はなされない。しかし、中世と考えられる3号遺物址群は本址と関連することが推察されることが、また、同形態を示し中世と思われる1号集水坑(D56)との覆土色調の整合性などから推し、2号集水坑(D66)及びM25号溝状遺構は中世に帰属することが考えられる。

3号集水坑 (D68) (第31図、図版十五)



- 1層 黄褐色土層 (10YR3/1)
粘土あり。
- 2層 暗褐色土層 (10YR3/3)
ロームブロックを多数に含む。
- 3層 茶褐色土層 (10YR3/1)
中間にローム色の砂を含む。
- 4層 黒褐色土層 (10YR3/2)
砂を含む。

幅長0.885m
(1:80) 2m



3号集水坑(D68号土坑)	
出土位置	D-カ-27
形状	楕円形
幅長	0.885m
短軸長	0.66m
深さ	1.05m
方位	N-50°-W

第31図 3号集水坑実測図 (D68)

mを測り北から西側へ延びているがD56・D66号土坑に共有したM15号・M25号溝状遺構の規模からするとかなり小型を呈する溝である。幅約0.16m、深さは0.05mと浅く、当部周辺は著しく削平されている様子が窺われる。本M34号溝状遺構からの出土遺物はなかった。

本址の時期は3号集水坑(D68)・M34号溝状遺構とも出土遺物がなく正確な時期決定はなされない。しかし、中世と考えられる5号遺物址群は本址と関連することが推察されることが、また、同形態を示し中世と推される2号集水坑(D66)との覆土の整合性などから推し、本3号集水坑(D68)・M34号溝状遺構は中世に帰属する遺構であろう。

本遺構は調査区1地点の中央やや北西付近に位置し、か-27グリッドより検出された。断面形状は「逆ハの字状」に開き、比較的水平な角度をもって底部に達している。形状は「すり鉢状」を呈し、底部はほぼ平坦である。規模・形態は、長軸長1.96m、短軸長1.92mで、深さは1.24mを測る。形状は円形に近い隅丸方形を呈し、北側の壁は若干ふくらんで張り出している。当部壁面には確認面より約30cmの深さで最大幅約40cmの三日月状のテラスが看られる。また、北西コーナーの一部はビット579号による破壊を受けている。覆土は4層に分割され、プライマリーな堆積状況を示す。本土坑からの出土遺物はなかった。

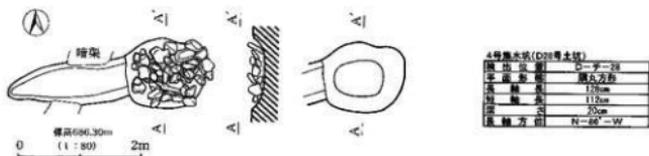
また、本址は下記するM34号溝状遺構と伴関係にあり、対象地の中央やや北西寄りのさ-25グリッドの位置で連結している。また、本址が位置する約4m北西側にも同形態を示す5号集水坑(D62)が存在している。

【本土坑と連結するM34号溝状遺構】

M34号溝状遺構址は、3号集水坑(D68)の北壁部と連結している溝である。規模は、長さ約3.28

4号集水坑 (D 28) 【第32図、図版九】

本遺構は調査区Ⅰ地点の北西端部付近に位置し、ち-28グリッドより検出された。本址周辺は著しく削平されており底部のみが残存していた。よって、壁部の断面形状などは把握できなかったが、残存する底部の形状が幅広く「船底状」を呈していることから、壁体は「逆八の字状」に開き、比較的緩やかな角度をもって確認面に達することが推察された。また残存する底部の平面形状は隅丸方形に近い楕円形を呈し、当底部からは人頭大の礫が多量に検出された。規模は長軸長1.28m、短軸長1.12mで深さは0.20mを測る。本土坑からの出土遺物は、底部の礫の中から石焼き臼が1点出土した(第57図-8)。また、本集水坑は調査時において、下記する約2.0mの規模をもつ溝状の遺構を伴っていることが窺われた。

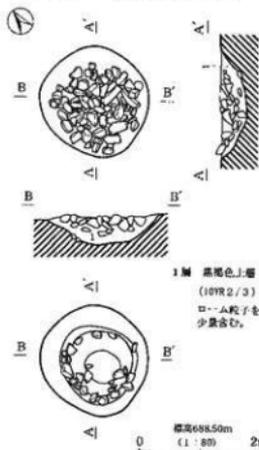


第32図 4号集水坑実測図 (D28)

【本土坑に伴う溝状遺構】

本溝状遺構は、4号集水坑 (D28) の西壁部から西側へ延びる長さ約2.0mを測る遺構である。遺構中央部の壁体が擾乱によって破壊されている。幅約0.80m、深さは約0.15mで規模からすると小型を呈する溝状の遺構である。当部周辺は著しく削平されており、旧状の溝状遺構はさらに西側へ延びていたことが考えられる。

本址の時期は石焼き臼が1点出土したのみで正確な時期決定はなされない。しかし、出土した石焼き臼は中世と考えられること、また、周辺の中世遺構の関連などから推し、中世に帰属するであろう。



第33図 5号集水坑実測図 (D62)

5号集水坑 (D 62) 【第33図、図版十四】

本遺構は調査区Ⅰ地点の中央やや北西付近に位置し、き-27・28グリッドより検出された。本址周辺は著しく削平されており底部のみが残存していた。よって、壁部の断面形状などは把握できなかった。しかし残存する底部の形状が幅広い「船底状」を呈していることなどを鑑みると壁体は「逆八の字状」に開き、比較的緩やかな角度をもって確認面に達することが推察される。また残存する底部の平面形状は円形に近い楕円形を呈し、当底部には多量の礫が含まれていた。また、南西側壁面から底面にかけては人為的に敷き詰められたと思われる礫が認められた。

規模は長軸長1.72m、短軸長1.62mで深さは0.44mを測る。本土坑からの出土遺物はなかった。

【本土坑に伴う溝状遺構】

本土坑に伴う溝状遺構は調査時において検出されなかった。しかし、本遺構の周辺は耕作等による著しい削平を受けていること、また、同形態を示す4基の集水坑などの類例からすると本土坑に伴う溝・溝状遺構は存在した可能性も推察される。だが、一時的に水を溜めるだけの簡易的な性格を持った遺構であるならば、あえて溝状遺構を備える必要がなかったことも考えられる。従って本5号集水坑 (D62) は後者の当初より溝等を兼ね備えていなかった土坑であることが推考される。

本址の時期は遺物等がなく正確な時期決定はなされない。しかし、本址と同形態を示す2号及び3号集水坑と覆土色調が同様であるなどから推し、本集水坑は中世に帰属することが考えられる。

②土坑内及び覆土中に、焼土・炭化物(木炭)を含む遺構(図版六～十五)

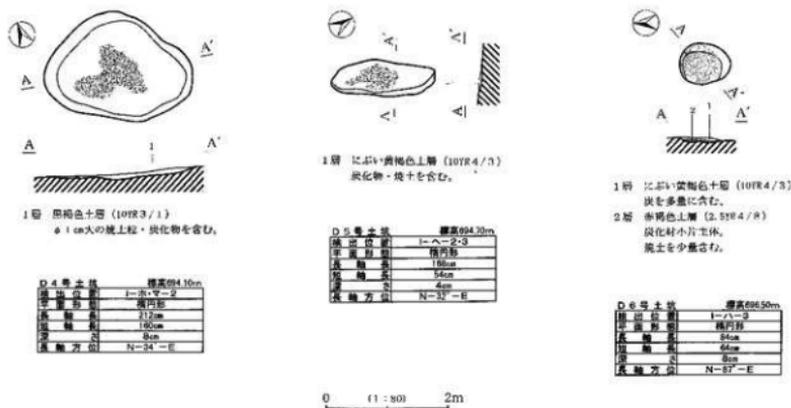
本形態を示す土坑は26基が看取され、その総てが調査区1地点から検出された。これらの大半は著しく削平されており底部のみが僅かに残存しているものが多く、旧形状態を正確に把握できたものは少ない。このためか出土遺物は極めて少なかった。この26基の土坑を大別すると次の(ア)・(イ)の2形態に分けられる。

(ア) 小型で楕円形若しくは不正円形を呈する土坑 [20基]	(イ) 大型で隅丸長方形を呈する土坑 [6基]
遺構 D4・D8・D10・D12・D13・D17・ D18・D24・D26・D28・D31・D33・ D52・D54・D69・D70・D72 [20基]	D9・D19・D20・D25・D32・D51 [6基]
焼土・炭を含む D4 他 7基	6基いずれも焼土・炭を含む
炭のみを含む D7 他 11基	
出土遺物 D24 (内耳土器)	D21 (須恵器蓋) D25 (擦石・礫石、台石)

(ア) 小型で楕円形若しくは不正楕円形を呈する土坑 [20基] (第34図～36図)

上記したこの2形態の土坑には、特に「規模」、及び「遺構に内在する焼土・炭(炭化材)」の出土状況に顕著な差異が認められる。つまり(ア)の楕円形を基調とする土坑20基はいずれも長軸長が0.8m前後と『小型の土坑』である。そして、この小型に属する土坑には「焼土・炭化物が共に含まれる」ものと、「炭化物のみ」のものがあり、焼土・炭を含む土坑は8基が認められ、中でもD4・D5・D6号土坑においてはこうした傾向が顕著で、焼土と炭がブロック状に固まって内在している(第34図)。次の、炭化材のみが含まれる遺構は12基が確認され、D7号土坑にこうした様子が顕著に窺われる(第35図)。

(ア)の形態を示す土坑からの出土遺物は極めて少なく、20基の土坑中、D24号土坑から内耳土器が出土したのみであった。



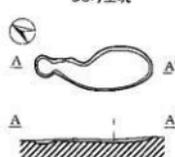
第34図 D4・5・6号土坑実測図

D7号土坑



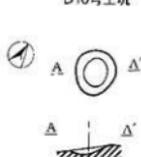
- 1層 褐色土層 (10YR4/4)
炭化物を多数に含む。

D8号土坑



- 1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
炭の薄片を多数に含む。

D10号土坑



- 1層 黒褐色土層 (10YR2/3)
炭質小片を含む。

D12号土坑



- 1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
炭化物を多数に含む。焼土を少量含む。

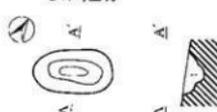
D7号土坑		標高492.20m
掘出位置	1-7-6	
平面形状	楕円形	
長軸長	95cm	
短軸長	66cm	
深さ	6cm	
方位	N-54-W	

D8号土坑		標高499.80m
掘出位置	1-7-6	
平面形状	不整形円形	
長軸長	192cm	
短軸長	57cm	
深さ	6cm	
方位	N-29-W	

D10号土坑		標高499.60m
掘出位置	1-7-6	
平面形状	円形	
長軸長	72cm	
短軸長	64cm	
深さ	6cm	
方位	N	

D12号土坑		標高499.30m
掘出位置	1-7-6	
平面形状	楕円形	
長軸長	90cm	
短軸長	72cm	
深さ	7cm	
方位	N-64-W	

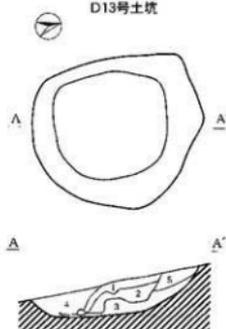
D17号土坑



- 1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
炭化物を少量含む。

D17号土坑		標高499.80m
掘出位置	1-7-6	
平面形状	楕円形	
長軸長	130cm	
短軸長	89cm	
深さ	57cm	
方位	N-50-E	

D13号土坑



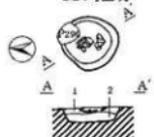
D18号土坑



- 1層 黒褐色土層 (10YR4/1)
焼土粒子・炭化物を含む。
焼土 (2.3YR3/4)

D18号土坑		標高497.90m
掘出位置	1-7-6	
平面形状	不整形	
長軸長	160cm	
短軸長	64cm	
深さ	56cm	
方位	N-19-E	

D24号土坑



- 1層 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
炭化物を含む。
2層 暗褐色土層 (10YR3/3)
黒褐色土ブロックを多数に含む。

D24号土坑		標高496.90m
掘出位置	D-7-29	
平面形状	不整形	
長軸長	92cm	
短軸長	90cm	
深さ	24cm	
方位	N-30-E	

- 1層 黄褐色土層 (10YR5/6) 褐色粘土ブロック主体。
2層 赤褐色土層 (10YR2/3) 炭化粒子・褐色粘土粒子を少量含む。
3層 褐色土層 (10YR4/6) 褐色粘土土体。
4層 黄褐色土層 (10YR3/2) 炭化粒子を少量含む。
5層 暗褐色土層 (10YR3/4) 褐色粘土ブロック・炭質小片を少量含む。

D13号土坑		標高491.20m
掘出位置	N-7-40 1-7-1	
平面形状	不整形	
長軸長	270cm	
短軸長	244cm	
深さ	58cm	
方位	N	

0 1:80 2m

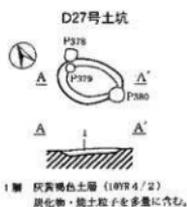
D26号土坑



- 1層 灰黄褐色土層 (10YR5/3)
炭化物・焼土を含む。

D26号土坑		標高491.60m
掘出位置	D-7-29	
平面形状	楕円形	
長軸長	92cm	
短軸長	64cm	
深さ	8cm	
方位	N-19-E	

第35図 D7・8・10・12・13・17・18・24・26号土坑実測図



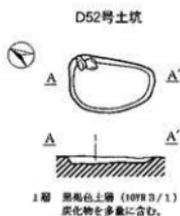
D 27号土坑	標高693.00m
掘出位置	D-27-21
平面形状	不規則形
長軸長さ	100mm
短軸長さ	70mm
深さ	80mm
発掘方位	N-31°-W



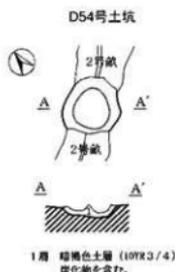
D 31号土坑	標高690.20m
掘出位置	D-31-2
平面形状	ほぼ円形
長軸長さ	80mm
短軸長さ	60mm
深さ	30mm
発掘方位	N-31°-E



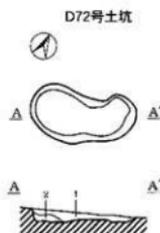
D 33号土坑	標高692.20m
掘出位置	D-33-11
平面形状	不規則多角形
長軸長さ	150mm
短軸長さ	60mm
深さ	15mm
発掘方位	N-22°-W



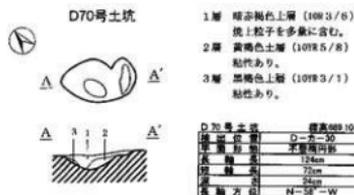
D 52号土坑	標高692.70m
掘出位置	H-52-23
平面形状	不規則形
長軸長さ	140mm
短軸長さ	80mm
深さ	13mm
発掘方位	N-29°-W



D 54号土坑	標高691.90m
掘出位置	H-54-14
平面形状	(不明)円形
長軸長さ	92mm
短軸長さ	90mm
深さ	20mm
発掘方位	N-50°-W



D 72号土坑	標高688.30m
掘出位置	D-72-20
平面形状	不規則多角形
長軸長さ	170mm
短軸長さ	70mm
深さ	20mm
発掘方位	N-54°-E



D 70号土坑	標高689.10m
掘出位置	D-70-30
平面形状	ほぼ円形
長軸長さ	124mm
短軸長さ	72mm
深さ	24mm
発掘方位	N-55°-W



D 69号土坑	標高689.10m
掘出位置	D-69-30
平面形状	不規則形
長軸長さ	80mm
短軸長さ	60mm
深さ	20mm
発掘方位	N-57°-E

第36図 D27・31・33・52・54・69・70・72 土坑実測図

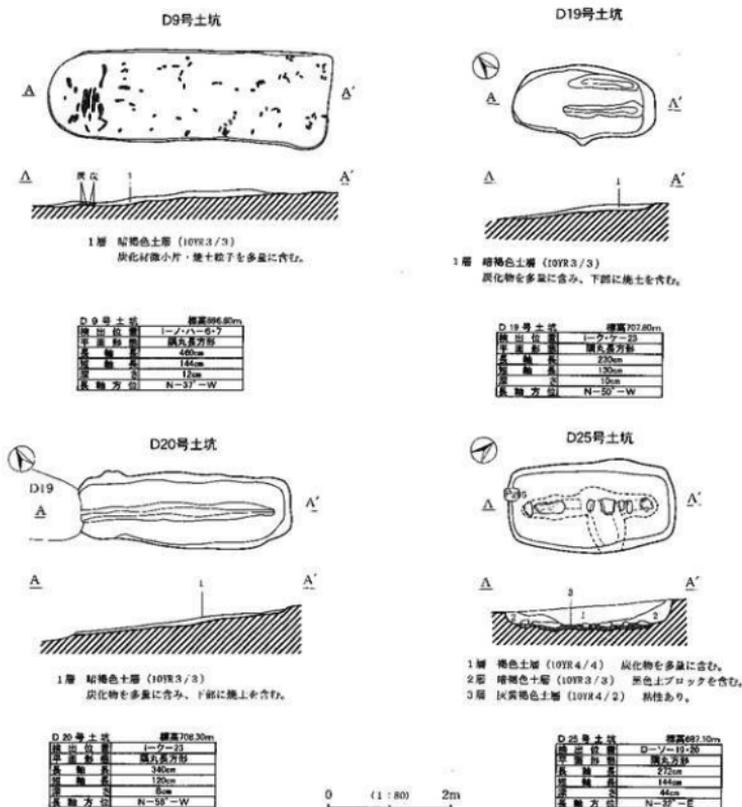
0 (1:80) 2m

(イ) 大型で 隅丸長方形を呈する土坑【6基】（第37・38図）

先述した小型の土坑に対し、(イ)の隅丸長方形を呈する土坑は長軸長がいずれも2.4~5.4mと『大型の規模』を呈し、いずれも『焼土と炭が伴って』検出されている。こうした形態の土坑は6基が確認され、中でもD9号土坑からは焼土と炭が最も多く検出された。

規模的にはD51号土坑が最も大型を呈し、長軸長約5.4m・幅1.6m内外を測る。この6基の底面は、D25号土坑を除く5基の底部が平坦ながらも緩やかな傾斜を有している（D9・D19・D20・D32・D51）。またD19号土坑底部には2条、D20号・D25号土坑には各1条の溝状の堀込みが観察される。D32号土坑の底部は段差を有しており南側の底面面に比べ北側の面が1段低く掘り窪められており、底部の断面形状はスプーン状である。この1段低く掘り窪められた箇所には人頭大の石が敷き詰められており、当該周辺は火熱による焼け込みが認められる。

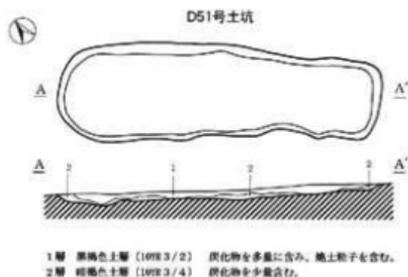
出土遺物は本形態を示す6基の土坑の内、D25号土坑から台石、擦石・敲石が出土したのみである。



第37図 D9・19・20・25号土坑実測図



D32号土坑 側面は火熱による焼け込みが認められる



D51号土坑		標準図10m
構造番号	D-51-1-1	
位置	324m	
深さ	118cm	
傾斜	95°	
方位	N-54°-W	

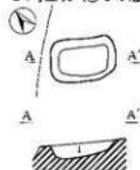
0 1:100 2m

第38図 D32・51号土坑実測図

③ その他の土坑

本項では、調査時において中世土坑として扱った73基総てを第39図～第47図に示した。此の73基の中には第3節で述べた① 雨水・沢水等を溜めたと考えられる集水的な土坑、② 土坑内及び覆土中に焼土・炭(炭化物)を含む土坑、更に、(6)で述べる井戸址が含まれている。よって、本項で扱う「その他の土坑」40基については、第39～第47図の土坑名称の脇に(③その他の土坑)と()書きにして表示した。[例] D1号土坑(③その他の土坑)尚、本項で扱う「その他の土坑」については、掲載した図及び計測表をもって記した。

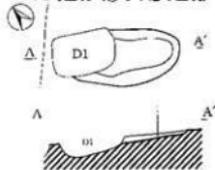
D1号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10FR3/3)
褐色土ブロックを含む。

D1号土坑		標高693.30m
検出位置	H-ミ-40	
平面形状	楕円長方形	
長軸長	108cm	
短軸長	70cm	
深さ	2cm	
長軸方位	N-69°-W	

D2号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10FR3/1)
褐色土主体。

D2号土坑		標高693.30m
検出位置	H-ミ-40・I-ミ-1	
平面形状	楕円長方形	
長軸長	104cm	
短軸長	92cm	
深さ	12cm	
長軸方位	N-60°-W	

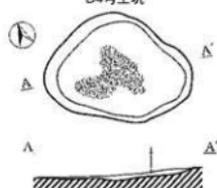
D3号土坑 (③その他の土坑)



1層 褐色土層 (10FR4/6)
こぶし大の石を含む。

D3号土坑		標高693.30m
検出位置	H-ミ-40	
平面形状	楕円形	
長軸長	78cm	
短軸長	60cm	
深さ	20cm	
長軸方位	N-65°-E	

D4号土坑



1層 暗褐色土層 (10FR3/1)
φ1cm大の焼土粒・炭化物を含む。

D4号土坑		標高694.10m
検出位置	I-ホ・ア-2	
平面形状	楕円形	
長軸長	212cm	
短軸長	160cm	
深さ	8cm	
長軸方位	N-34°-E	

D5号土坑



1層 灰白・黄褐色土層 (10FR4/3)
炭化物・焼土を含む。

D5号土坑		標高694.70m
検出位置	I-ハ-2・3	
平面形状	楕円形	
長軸長	108cm	
短軸長	54cm	
深さ	4cm	
長軸方位	N-32°-E	

D6号土坑



1層 灰白・黄褐色土層 (10FR4/3)
炭を多量に含む。
2層 赤褐色土層 (2.5FR4/8)
炭化材小片主体。
焼土を少量含む。

D6号土坑		標高696.50m
検出位置	I-ハ-3	
平面形状	楕円形	
長軸長	84cm	
短軸長	64cm	
深さ	8cm	
長軸方位	N-87°-E	

D8号土坑



1層 暗褐色土層 (10FR3/3)
炭の塊片を多量に含む。

D8号土坑		標高696.80m
検出位置	I-ノ-6	
平面形状	不規則楕円形	
長軸長	192cm	
短軸長	52cm	
深さ	6cm	
長軸方位	N-23°-E	

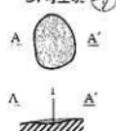
D9号土坑



1層 暗褐色土層 (10FR3/3)
炭化材微小片・焼土粒子を多量に含む。

D9号土坑		標高696.60m
検出位置	I-ノ-ハ-6・7	
平面形状	楕円長方形	
長軸長	490cm	
短軸長	144cm	
深さ	12cm	
長軸方位	N-37°-W	

D7号土坑



1層 褐色土層 (10FR4/4)
炭化物を多量に含む。

D7号土坑		標高697.50m
検出位置	I-ノ-5	
平面形状	楕円形	
長軸長	96cm	
短軸長	64cm	
深さ	6cm	
長軸方位	N-54°-W	

0 (1:80) 2m

第39回 D1～9号土坑実測図



1層 黒褐色土層 (10YR3/3)
炭微小片を含む。

D10号土坑		標高636.60m
検出位置	I-1-4	
平面形態	円形	
長軸長	72cm	
短軸長	64cm	
深さ	8cm	
長軸方位	N (真北)	

D11号土坑 (③その他の土坑)



D11号土坑		標高636.60m
検出位置	D-2-2-2	
平面形態	楕円長方形	
長軸長	88cm	
短軸長	40cm	
深さ	8cm	
長軸方位	N - 42° - W	

D14号土坑 (③その他の土坑)



1層 黒褐色土層 (10YR3/1)
炭化灰子・白色微小ハビミスを少量含む。

D14号土坑		標高638.60m
検出位置	I-1-7-14	
平面形態	楕円形	
長軸長	84cm	
短軸長	64cm	
深さ	24cm	
長軸方位	N - 53° - W	

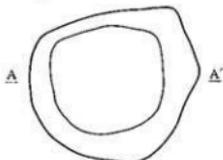
D12号土坑



1層 黒褐色土層 (10YR3/3)
炭化物を多量に含む、焼土を少量含む。

D12号土坑		標高636.30m
検出位置	I-1-6	
平面形態	楕円形	
長軸長	90cm	
短軸長	56cm	
深さ	12cm	
長軸方位	N - 44° - W	

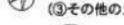
D13号土坑



D13号土坑		標高638.20m
検出位置	R-1-40・I-1-1	
平面形態	不整形	
長軸長	272cm	
短軸長	244cm	
深さ	56cm	
長軸方位	N (真北)	

- 1層 黄褐色土層 (10YR5/6) 褐色粘土ブロック主体。
- 2層 黒褐色土層 (10YR2/3) 炭化灰子・褐色粘土粒子を少量含む。
- 3層 褐色土層 (10YR4/6) 褐色粘土主体。
- 4層 黒褐色土層 (10YR3/2) 炭化灰子を少量含む。
- 5層 緑褐色土層 (10YR3/4) 褐色粘土ブロック・炭微小片を少量含む。

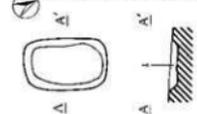
D15号土坑 (③その他の土坑)



1層 黒褐色土層 (10YR3/2)
炭化灰子を少量含む。

D15号土坑		標高638.90m
検出位置	I-1-14	
平面形態	円形	
長軸長	92cm	
短軸長	88cm	
深さ	32cm	
長軸方位	N - 5° - E	

D16号土坑 (③その他の土坑)



1層 黒褐色土層 (10YR3/2)
炭化灰子を少量含む。

D16号土坑		標高637.30m
検出位置	I-1-11	
平面形態	楕円長方形	
長軸長	136cm	
短軸長	84cm	
深さ	14cm	
長軸方位	N - 24° - E	

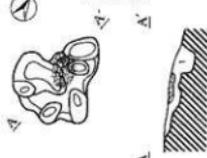
D17号土坑



1層 黒褐色土層 (10YR3/3)
炭化物を少量含む。

D17号土坑		標高639.89m
検出位置	I-1-14	
平面形態	楕円長方形	
長軸長	130cm	
短軸長	98cm	
深さ	32cm	
長軸方位	N - 50° - E	

D18号土坑

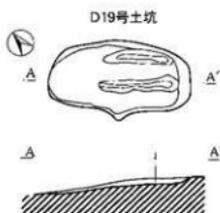


1層 黒褐色土層 (10YR3/1)
焼土粒子・炭化物を含む。
焼土 (2.5YR3/4)

D18号土坑		標高637.10m
検出位置	I-1-10	
平面形態	不整形	
長軸長	160cm	
短軸長	64cm	
深さ	38cm	
長軸方位	N - 18° - E	

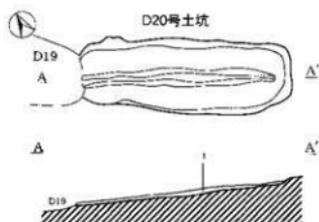
第40図 D10~18号土坑実測図

0 (1:80) 2m



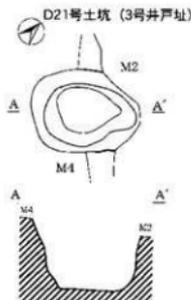
1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
炭化物を多量に含み、下部に硬土を含む。

D19号土坑		標高707.90m
検出位置	I-ク-ケ-23	
平面形態	楕円長方形	
長軸長	240cm	
短軸長	130cm	
深さ	10cm	
長軸方位	N - 50° - W	



1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
炭化物を多量に含み、下部に硬土を含む。

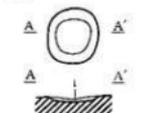
D20号土坑		標高708.30m
検出位置	I-ク-ケ-23	
平面形態	楕円長方形	
長軸長	340cm	
短軸長	120cm	
深さ	8cm	
長軸方位	N - 50° - W	



D21号土坑(3号井戸址) 標高895.20m

検出位置	I-ヘ-7
平面形態	不整形
長軸長	172cm
短軸長	135cm
深さ	105cm
長軸方位	N - 40° - E

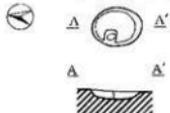
D22号土坑 (③その他の土坑)



1層 灰黄褐色土層 (10YR5/2)
赤色粒を含む。

D22号土坑		標高896.30m
検出位置	D-ソ-ケ-24	
平面形態	楕円形	
長軸長	85cm	
短軸長	80cm	
深さ	6cm	
長軸方位	N (真北)	

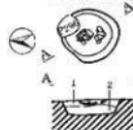
D23号土坑 (③その他の土坑)



1層 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
砂を含む。

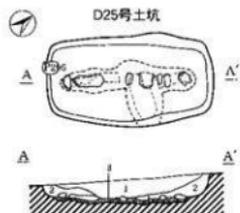
D23号土坑		標高898.30m
検出位置	D-ソ-ケ-24	
平面形態	楕円形	
長軸長	82cm	
短軸長	64cm	
深さ	12cm	
長軸方位	N - 20° - W	

D24号土坑



1層 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
炭化物を含む。
2層 暗褐色土層 (10YR3/3)
暗褐色土ブロックを多量に含む。

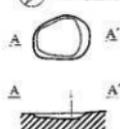
D24号土坑		標高898.30m
検出位置	D-ソ-ケ-20	
平面形態	不整形	
長軸長	92cm	
短軸長	80cm	
深さ	24cm	
長軸方位	N - 30° - E	



1層 褐色土層 (10YR4/4) 炭化物を多量に含む。
2層 暗褐色土層 (10YR3/3) 黒色土ブロックを含む。
3層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 粘性あり。

D25号土坑		標高897.10m
検出位置	D-ソ-19-20	
平面形態	楕円形	
長軸長	272cm	
短軸長	144cm	
深さ	44cm	
長軸方位	N - 32° - E	

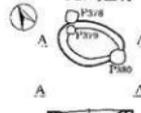
D26号土坑



1層 赤い黄褐色土層 (10YR5/8)
炭化物・硬土を含む。

D26号土坑		標高898.60m
検出位置	D-ター-22	
平面形態	不整形	
長軸長	82cm	
短軸長	64cm	
深さ	8cm	
長軸方位	N - 18° - E	

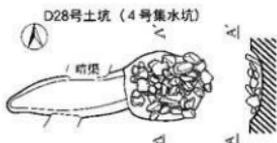
D27号土坑



1層 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
炭化物・硬土粒子を多量に含む。

D27号土坑		標高897.00m
検出位置	D-セ-21	
平面形態	楕円形	
長軸長	105cm	
短軸長	70cm	
深さ	8cm	
長軸方位	N - 51° - W	

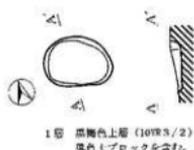
第41図 D19~27号土坑実測図



D28号土坑 (4号集水坑) 標高636.30m

検出位置	D-ター28
平面形態	楕円形
長軸長	126cm
短軸長	112cm
深さ	20cm
長軸方位	N - 86° - W

D30号土坑 (③その他の土坑)



D30号土坑 標高636.70m

検出位置	D-ター23
平面形態	楕円形
長軸長	112cm
短軸長	86cm
深さ	16cm
長軸方位	N - 68° - W

D33号土坑



D33号土坑 標高639.70m

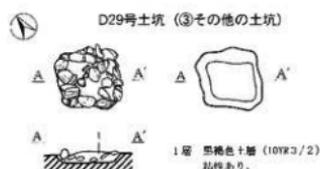
検出位置	D-ター13
平面形態	不規則長方形
長軸長	196cm
短軸長	64cm
深さ	18cm
長軸方位	N - 36° - W

D36号土坑 (③その他の土坑)



D36号土坑 標高711.30m

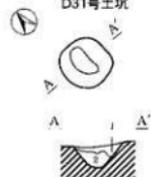
検出位置	H-ター18・19
平面形態	楕円長方形
長軸長	218cm
短軸長	100cm
深さ	48cm
長軸方位	N - 15° - W



D29号土坑 標高649.10m

検出位置	D-ター22
平面形態	楕円形
長軸長	100cm
短軸長	92cm
深さ	20cm
長軸方位	N - 48° - W

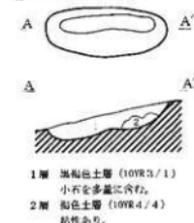
D31号土坑



D31号土坑 標高630.70m

検出位置	D-ター9
平面形態	楕円形
長軸長	80cm
短軸長	76cm
深さ	32cm
長軸方位	N - 81° - E

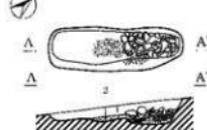
D34号土坑 (③その他の土坑)



D34号土坑 標高635.10m

検出位置	D-ター12
平面形態	楕円長方形
長軸長	196cm
短軸長	80cm
深さ	32cm
長軸方位	N - 60° - E

D32号土坑



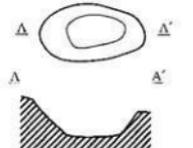
D32号土坑 標高632.80m

検出位置	D-ター5
平面形態	楕円長方形
長軸長	216cm
短軸長	72cm
深さ	38cm
長軸方位	N - 40° - E

D35号土坑 (③その他の土坑)

検出位置	D-ター5
平面形態	楕円長方形
長軸長	216cm
短軸長	72cm
深さ	38cm
長軸方位	N - 40° - E

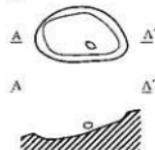
D35号土坑 (③その他の土坑)



D35号土坑 標高713.00m

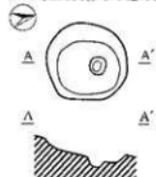
検出位置	H-ター21・22
平面形態	楕円長方形
長軸長	168cm
短軸長	92cm
深さ	52cm
長軸方位	N - 28° - E

D37号土坑 (③その他の土坑)



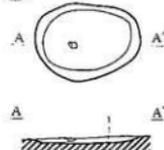
D37号土坑 標高700.49m	
検出位置	H-オー-12
平面形態	楕円形
長軸長	140cm
短軸長	90cm
深さ	18cm
長軸方位	N - 12° - W

D38号土坑 (③その他の土坑)



D38号土坑 標高701.80m	
検出位置	H-オー-14
平面形態	楕円形
長軸長	132cm
短軸長	120cm
深さ	39cm
長軸方位	N - 10° - E

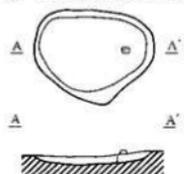
D39号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
ロームブロックを少量含む。

D39号土坑 標高684.10m	
検出位置	A-ン-ター-25
平面形態	楕円形
長軸長	172cm
短軸長	124cm
深さ	10cm
長軸方位	N - 82° - E

D40号土坑 (③その他の土坑)



1層 黒褐色土層 (10YR3/2)
ローム粒・小石を少量含む。

D40号土坑 標高683.90m	
検出位置	A-ター-24
平面形態	不整形円形
長軸長	192cm
短軸長	148cm
深さ	18cm
長軸方位	N - 73° - W

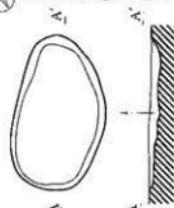
D41号土坑 (③その他の土坑)



1層 黒褐色土層 (10YR2/2)
ローム粒・小石を少量含む。

D41号土坑 標高683.80m	
検出位置	A-ター-24
平面形態	楕円形
長軸長	226cm
短軸長	80cm
深さ	24cm
長軸方位	N - 18° - E

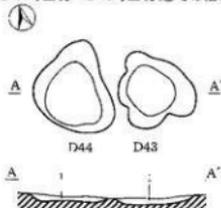
D42号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
小石・粘土ブロックを少量含む。

D42号土坑 標高683.60m	
検出位置	A-シー-15
平面形態	楕円形
長軸長	248cm
短軸長	148cm
深さ	16cm
長軸方位	N - 10° - E

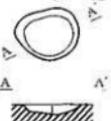
D44号土坑・D43号土坑 (③その他の土坑)



1層 黒褐色土層 (10YR3/2)
小石・粘土ブロックを少量含む。

D44・43号土坑 標高683.70m		
検出位置	A-シー-14	
平面形態	不整形円形	不整形円形
長軸長	132cm	140cm
短軸長	100cm	98cm
深さ	12cm	12cm
長軸方位	N - 64° - W	N - 30° - E

D45号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10YR3/4)
ロームブロックを少量含む。

D45号土坑 標高683.80m	
検出位置	A-シー-12
平面形態	不整形円形
長軸長	104cm
短軸長	80cm
深さ	16cm
長軸方位	N (真北)

D46号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10YR3/4)
ロームブロックを少量含む。

D46号土坑 標高683.80m	
検出位置	A-シー-15
平面形態	円形
長軸長	96cm
短軸長	86cm
深さ	12cm
長軸方位	N - 82° - W

第43図 D37号~46号土坑実測図

D47号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10PR3/4)
ロームブロックを少量含む。

D47号土坑		標高693.80m
検出位置	A-サー13	
平面形態	不規則円形	
長軸長	88cm	
短軸長	60cm	
深さ	10cm	
長軸方位	N - 35° - W	

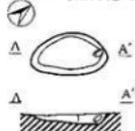
D48号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10PR3/4)
ロームブロックを少量含む。

D48号土坑		標高694.90m
検出位置	A-サー14	
平面形態	楕円長方形	
長軸長	120cm	
短軸長	90cm	
深さ	12cm	
長軸方位	N - 45° - W	

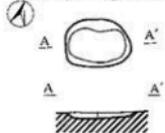
D49号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10PR3/4)
ロームブロックを少量含む。

D49号土坑		標高695.60m
検出位置	A-サー13	
平面形態	楕円形	
長軸長	124cm	
短軸長	68cm	
深さ	16cm	
長軸方位	N - 27° - E	

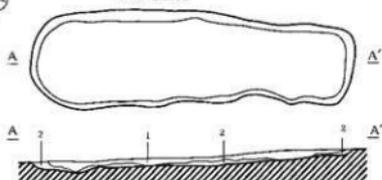
D50号土坑 (③その他の土坑)



1層 暗褐色土層 (10PR3/4)
ロームブロックを少量含む。

D50号土坑		標高695.70m
検出位置	A-サー13	
平面形態	不規則方形	
長軸長	104cm	
短軸長	76cm	
深さ	8cm	
長軸方位	N - 70° - E	

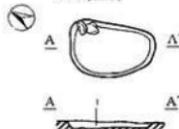
D51号土坑



1層 黒褐色土層 (10PR3/2) 炭化物を多量に含む。種子殻を含む。
2層 暗褐色土層 (10PR3/4) 炭化物を少量含む。

D51号土坑		標高699.10m
検出位置	H-メ-モ-34 H-メ-35	
平面形態	楕円長方形	
長軸長	524cm	
短軸長	148cm	
深さ	18cm	
長軸方位	N - 54° - W	

D52号土坑



1層 黒褐色土層 (10PR3/1)
炭化物を多量に含む。

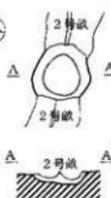
D52号土坑		標高699.70m
検出位置	H-メ-34・35	
平面形態	楕円形	
長軸長	140cm	
短軸長	84cm	
深さ	12cm	
長軸方位	N - 25° - W	

D53号土坑 (③その他の土坑)



D53号土坑		標高691.80m
検出位置	H-ユ-37	
平面形態	円形	
長軸長	60cm	
短軸長	50cm	
深さ	12cm	
長軸方位	N - 10° - E	

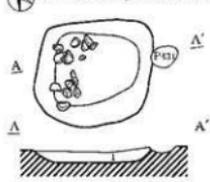
D54号土坑



1層 暗褐色土層 (10PR3/4)
炭化物を含む。

D54号土坑		標高691.90m
検出位置	H-ユ-34	
平面形態	(不規則円形)	
長軸長	92cm	
短軸長	92cm	
深さ	20cm	
長軸方位	N - 50° - W	

D55号土坑 (③その他の土坑)



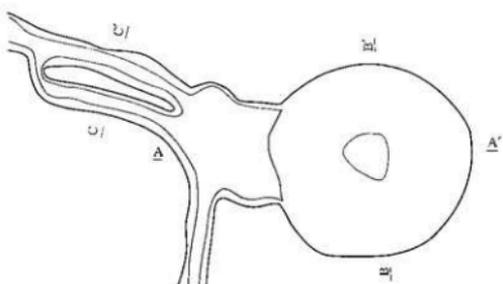
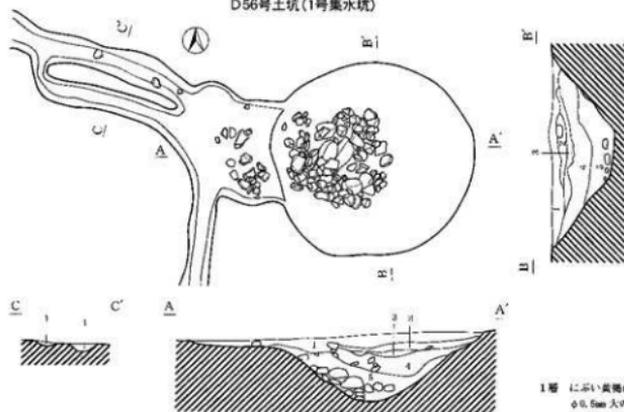
1層 黒褐色土層 (10PR2/3)
ローム粒子・ロームブロックを含む。

D55号土坑		標高689.60m
検出位置	A-サー17	
平面形態	楕円長方形	
長軸長	184cm	
短軸長	172cm	
深さ	20cm	
長軸方位	N - 60° - W	

0 (1:80) 2m

第44図 D47号~55号土坑実測図

D56号土坑(1号集水坑)

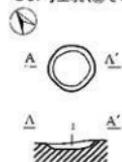


- 1層 灰褐色土層 (10YR 4/3)
φ0.5mm 大小の小石・ローム粒子を含む、炭化物を少量含む。
- 2層 灰褐色土層 (10YR 4/2)
φ0.5mm 大小の小石・粘土ブロックを少量含む。
- 3層 暗褐色土層 (10YR 3/4)
小石・ローム粒を含む。
- 4層 暗灰色土層 (10YR 6/1)
粘土ブロックを多量に含む、人頭人の石を含む。
- 5層 褐色土層 (10YR 5/1)
粘土ブロック・ロームブロックを多量に含む。

D58号土坑(1号集水坑) 標高684.10m

検出位置	A-サー15
平面形態	円形
長軸長	314cm
短軸長	308cm
深さ	108cm
長軸方位	N-6°-E

D57号土坑(③その他の土坑)



- 1層 暗褐色土層 (10YR 3/3)
ローム粒を少量含む。

D57号土坑 標高688.10m	
検出位置	D-ツ-15
平面形態	円形
長軸長	72cm
短軸長	68cm
深さ	12cm
長軸方位	N-75°-E

0 (1:80) 2m

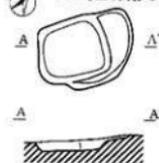
D58号土坑(③その他の土坑)



- 1層 暗褐色土層 (10YR 3/3)
ローム粒を少量含む。

D58号土坑 標高688.20m	
検出位置	D-チ-16
平面形態	楕円形
長軸長	30cm
短軸長	54cm
深さ	8cm
長軸方位	N-38°-E

D59号土坑(③その他の土坑)

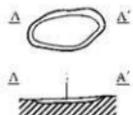


- 1層 暗褐色土層 (10YR 3/3)
ローム粒子・ロームブロックを含む。

D59号土坑 標高690.50m	
検出位置	D-セ-15
平面形態	不整形八角方形
長軸長	156cm
短軸長	116cm
深さ	16cm
長軸方位	N-41°-E

第45図 D56号~59号土坑実測図

D60号土坑(③その他の土坑)



1層 黒褐色土層 (10YR3/2)
ローム粒子を少量含む。

D60号土坑 標高690.30m

検出位置	D-ク-ケ-21
平面形態	楕円形
長軸長	126cm
短軸長	84cm
深さ	8cm
長軸方位	N-58°-W

D61号土坑(③その他の土坑)

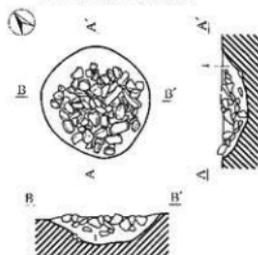


1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
ロームブロックを少量含む。

D61号土坑 標高688.30m

検出位置	D-ク-田-21
平面形態	不整形円形
長軸長	190cm
短軸長	128cm
深さ	20cm
長軸方位	N-8°-W

D62号土坑(5号集水坑)

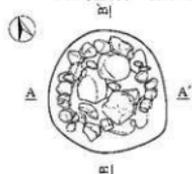


1層 黒褐色土層 (10YR2/3)
ローム粒を少量含む。

D62号土坑(5号集水坑)標高688.56m

検出位置	D-キ-27-28
平面形態	円形
長軸長	172cm
短軸長	160cm
深さ	44cm
長軸方位	N-29°-W

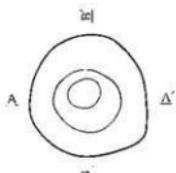
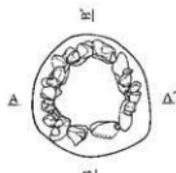
D63号土坑(1号井戸址)



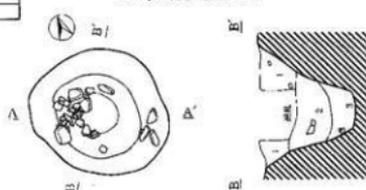
- 1層 黒褐色土層 (10YR2/2)
ローム粒子を少量含む。
- 2層 黒褐色土層 (10YR3/3)
ローム粒子・ロームブロック
少量含む、5~10cm大の石を
含む。
- 3層 褐色土層 (10YR4/4)
ローム粒子を多量に含む、黒
色土 (10YR2/1)ブロックを
含む。

D63号土坑(1号井戸址)標高687.68m

検出位置	D-ス-28-29
平面形態	不整形円形
長軸長	200cm
短軸長	176cm
深さ	84cm
長軸方位	N-22°-E



D64号土坑(2号井戸址)



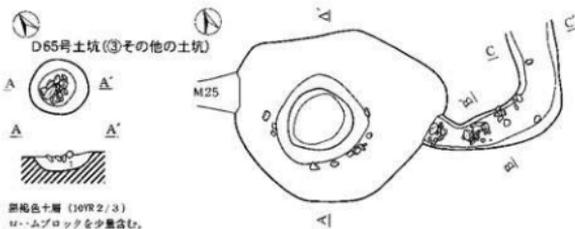
- 1層 黒褐色土層 (10YR2/3)
小石・φ5cm大の石を少量含む。
- 2層 黒褐色土層 (10YR2/2)
φ5~20cm大の石を多量に含む。
- 3層 黒褐色土層 (10YR2/4)
小石・粘土ブロックを少量含む。

D64号土坑(2号井戸址)標高688.20m

検出位置	D-ク-ケ-29
平面形態	不整形円形
長軸長	232cm
短軸長	196cm
深さ	156cm
長軸方位	N-47°-W

1 : 80 2m

第46図 D60号~64号土坑実測図



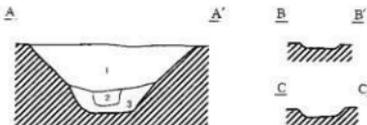
D66号土坑(2号集水坑)

- 1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム粒子を多量に含む、
石を少量含む。
- 2層 暗褐色土層 (10YR3/4)
ローム粒子・小石を含む。
- 3層 黒色土層 (10YR1/1)
ロームブロック・小石を
含む。

- 1層 黒褐色土層 (10YR2/3)
ロームブロックを少量含む。

D65号土坑 標高688.10m

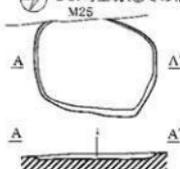
検出位置	D-サー-23
平面形状	円形
長軸長	96cm
短軸長	82cm
深さ	24cm
長軸方位	N - 65° - W



D66号土坑(2号集水坑) 標高687.90m

検出位置	D-コ-サー-25
平面形状	不規則円形
長軸長	35cm
短軸長	26cm
深さ	16cm
長軸方位	N - 60° - W

D67号土坑(3号其他の土坑)

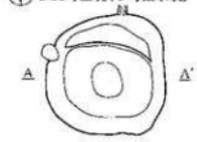


- 1層 暗褐色土層 (10YR3/4)
ローム粒子を多量に含む。

D67号土坑 標高688.10m

検出位置	D-サー-24
平面形状	隅丸長方形
長軸長	195cm
短軸長	152cm
深さ	8cm
長軸方位	N - 40° - E

D68号土坑(3号集水坑)



- 1層 黒褐色土層 (10YR3/1)
粘性あり。
- 2層 暗褐色土層 (10YR3/3)
ロームブロックを多量に含む。
- 3層 黒褐色土層 (10YR3/1)
中間にローム色の砂を含む。
- 4層 黒褐色土層 (10YR3/2)
砂を含む。

D69号土坑



- 1層 暗褐色土層 (10Y3/6)
粘土粒子を多量に含む。

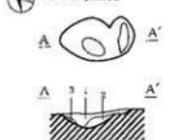
D69号土坑 標高689.10m

検出位置	D-カー-29・30
平面形状	楕円形
長軸長	80cm
短軸長	40cm
深さ	12cm
長軸方位	N - 47° - E

D68号土坑(3号集水坑) 標高688.80m

検出位置	D-カー-27
平面形状	隅丸長方形
長軸長	196cm
短軸長	152cm
深さ	12cm
長軸方位	N - 45° - W

D70号土坑

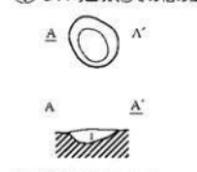


- 1層 暗褐色土層 (10Y3/6)
粘土粒子を多量に含む。
- 2層 黒褐色土層 (10YR5/8)
粘性あり。
- 3層 黒褐色土層 (10YR3/1)
粘性あり。

D70号土坑 標高689.10m

検出位置	D-カー-30
平面形状	不規則円形
長軸長	124cm
短軸長	72cm
深さ	24cm
長軸方位	N - 58° - W

D71号土坑(3号其他の土坑)

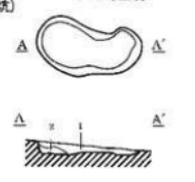


- 1層 暗褐色土層 (10YR3/2)
粘性あり。

D71号土坑 標高689.80m

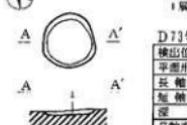
検出位置	D-カー-32
平面形状	楕円形
長軸長	89cm
短軸長	72cm
深さ	22cm
長軸方位	N - 4° - E

D72号土坑



- 1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
粘土粒子・灰化物を多量に含む。
- 2層 黒色土層 (10YR2/1)
粘土ブロックを含む。

D73号土坑(3号其他の土坑)



- 1層 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム粒子を少量含む。

D73号土坑 標高688.20m

検出位置	D-サー-15
平面形状	円形
長軸長	89cm
短軸長	80cm
深さ	8cm
長軸方位	N - 28° - E

D72号土坑 標高688.30m

検出位置	D-コ-サー-29
平面形状	不規則円形
長軸長	172cm
短軸長	78cm
深さ	20cm
長軸方位	N - 64° - E

第17図 D65号~73号土坑実測図

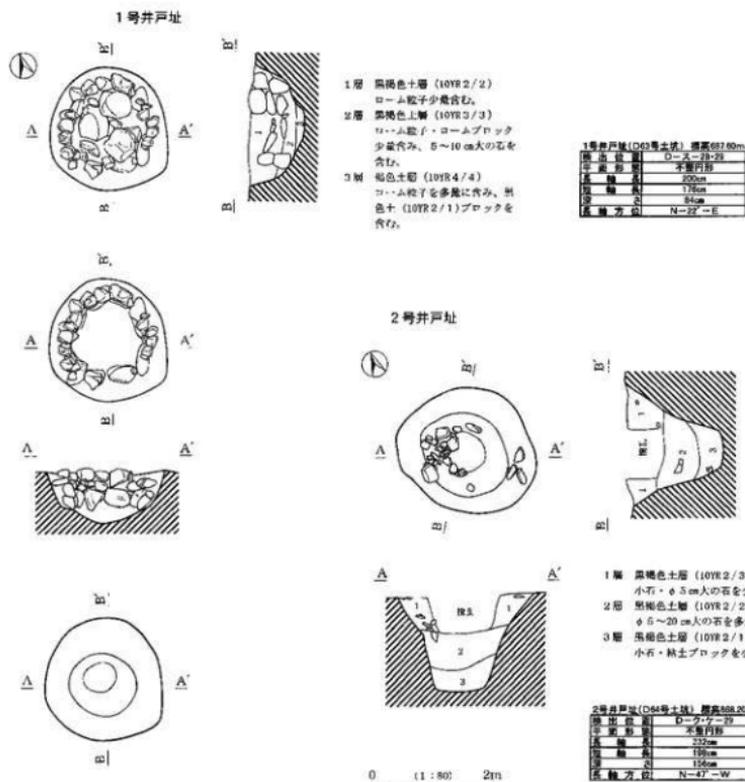
6 井戸址

宮田遺跡からは3基の井戸が検出され、いずれも調査区1地点から検出された。この内の2基(1・2号井戸址)は調査区1地点の中央やや北西付近に位置し、3号井戸址は調査区的最東端部に近い位置より検出された。

1号井戸址(D63)【第48図 図版十四】

本井戸址は、調査区の中央やや北西付近に位置し、す-28・29グリッドより検出された。当遺構の東側約8mの位置にはD65号・D72号土坑が、また隣接する地点には2号井戸址(D64)が確認された。

平面形態は円形を呈し、長径2m、短径1.76mで、深さは84cmを測る。底部の断面形状は確認面より約60cm下がった壁面の下部で一旦テラス状となり、当部から更に約24cm掘り進められて「船底状」となっている。よって、本址の断面形状は「湯呑み茶碗状」である。覆上は3層からなり5~50cm大の石がほぼ底部から遺構全体に埋まっていた。



第48図 1・2号井戸址実測図(D63・64)

この大量の石は、その検出状況から本井戸址の石組みとして使用されたものとは考え難く、設置されたものと推測される。此の設置された石を取り除くと、底部より約25cm上がった一旦テラス状となる部分から、壁面に添って石組みが構築されていることが看取された。しかし、第48図で示したように一旦テラス状となり、更に当部から「船底状」に約24cm掘り窪められている箇所には、石組みがなされていないことが認められた。そして、此の石組みがなされていない「船底状」に掘り窪められた部分については、調査時において井戸水の水脈を意識して掘り窪められた可能性が高いことが推測された。

出土遺物は、第57・58図に示した内耳土器、土師質土器、編物石、多孔石（ハチの巣石）などが出土した。本址の所産期は、15世紀後半～16世紀代であろう。

2号井戸址（D64）【第48図、図版十四】

本井戸址は、調査区の中央やや北西付近に位置し、く・け-29グリッドより検出された。当遺構の第1層中央部は攪乱による破壊を受けている。本址の周辺遺構としては、西側約4mの位置にD72号・D65号土坑が、また隣接する地点にはD63号井戸址が確認された。

平面形態は円形を呈し、長径2.32m、短径1.98mで、深さは1.56mを測る。断面形状は確認面より約56cm下がった壁面で急な角度で底部面に達して「ラッパ状」となっている。覆土は3層からなり5～30cm大の石が上部から下部にかけて埋まっていた。これらの石は検出状況から本井戸址の石組みとして使用されたものとは考え難く、設置された様子が窺われた。

出土遺物は、青磁碗、石摺り鉢、などが出土した。この内、第55図-4は蓮弁文が施される青磁碗で13世紀代に比定される。また、底部面より出土した石摺り鉢の底部には、ノミ状工具によって「I」字状に刻まれた痕が看取された（第57図-7）。この施された意図については明らかでないが、石摺り鉢を製作するにあたって設計的目的として設けたものなのか、或いは、物を摺る際の安定度を保つために設けられたことが推測される。白磁湯呑み（近代）については、本址の上部が攪乱を受けており、この際の混入遺物と考えられる。

本址の所産期は、中世（13世紀代を過ぎない）としか言えない。

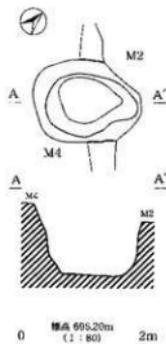
3号井戸址（D21）【第49図、図版八】

本井戸址は、調査区の北西端付近に位置し、へ-7グリッドより検出された。本址の東側壁はM2号溝状遺構の破壊を受け、本D21号井戸址はM4号溝状遺構を破壊している。

当遺構の東側約12mの位置にはD18号・D16号土坑が、また東側に約8m接して第16図に示した「ピット群2-（2）」が確認された。

平面形態は、東側壁がM2号溝状遺構の破壊を受けているため旧状は把握できない。しかし、残存状況から推して隅丸方形を呈していたことが考えられる。残存する規模は、長径172cm、短径136cmで、深さは108cmを測る。断面形状は、北側の壁面は確認面より急な角度で底部面に達しているのに比べ、南側の壁は底部より緩やかな角度で確認面に達しており形状は「楕円状」となっている。

本址の所産期は遺物等がなく正確な時期決定はなされない。しかし、同形態を示す中世と考えられる1号井戸址（D63）、及び、2号井戸址（D64）などの覆土色調が同様であったことなどから推し、本3号井戸址（D21）も中世に帰属すると考えられる。



3号井戸址(D21)土坑	
掘出位置	へ-7-3
平面形状	実測方形
長径	172cm
短径	136cm
深さ	108cm
掘出方位	N-60°-E

第49図 3号井戸址実測図(D21)

7 畝 (畑)

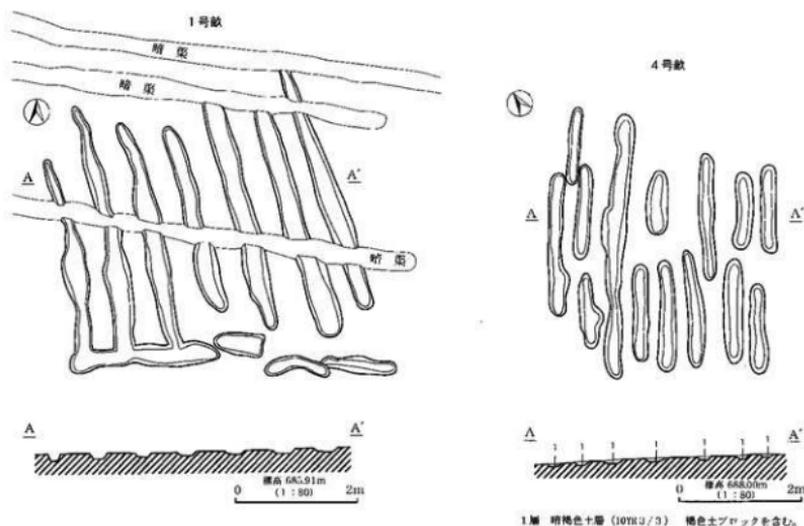
畝として認識した遺構は、第50図～第52図で示した浅く細長い掘り込みで、一定の間隔をおいて何本も溝状に並走しているものを、「畝」として感知した。把握された畝は4箇所から確認され、総て谷地に展開する調査区1地点から検出された。本館においては4箇所を確認された畝を各1号～4号畝として記載する。

本畝の時期決定については共存する遺物が無く正確な時期決定はなされない。しかし、中世に帰属すると考えられる土坑、並びに他遺構などの覆土色調と本遺構が近似していること、また、本址と周辺の中世遺構等との関連などが推し、1号～4号畝址は中世であることが考えられる。

1号畝 (第50図、図版十六)

本遺構が検出された位置は、谷地に東から西へ展開される宮田遺跡1地点の最西端部より検出された。当地点は谷地地形の出口にあたり、調査区の中では最も平坦な広がりが見られる処であり、ここから約70m前方には佐久平の穀倉地帯を担う水田が広がりはじめ。

検出状況は現代と思われる耕作などの影響を受け、かなり削平されている様子が窺われた。また本址の中央部、北側先端部は擾乱によって破壊されている。本遺構は約30cm～40cmの間隔で7本の畝が、南北方向に延びて構成されている。しかし、本址周辺は著しく削平されていることから畝は西側へ更に存在していた可能性が考えられる。最も長い畝は1条約4.8mで、先端部が擾乱されている。各畝幅は40cm前後で、残存する深さは8cm～15cmである。また、畝全体の東西間隔は4.8mで、各畝が南北方向に延びて構成されている畝の南端部に東西方向に走る1本の畝が認められる。よって、本1号畝は南北方向に走る7本の畝と、東西方向に走る1本の畝とによって構成されている様子が窺われた。また、この1号畝から北へ約4mの位置にピットが3基確認されるが、検出状況から推してこの箇所には「ピット群」の存在が推察された。確認された3基のピットに接した北にはM7号溝状遺構が認められる。だがこの溝は、グリッドな-26付近で削平のため消滅しており明確に遺構の様子を把握することはできなかった。しかし、残存していたと思われるピット群を囲むかの様に、な-25グリッド付近で「L字状」に方向を換え、更に、本遺構に向かっているこ



第50図 1・4号畝址実測図

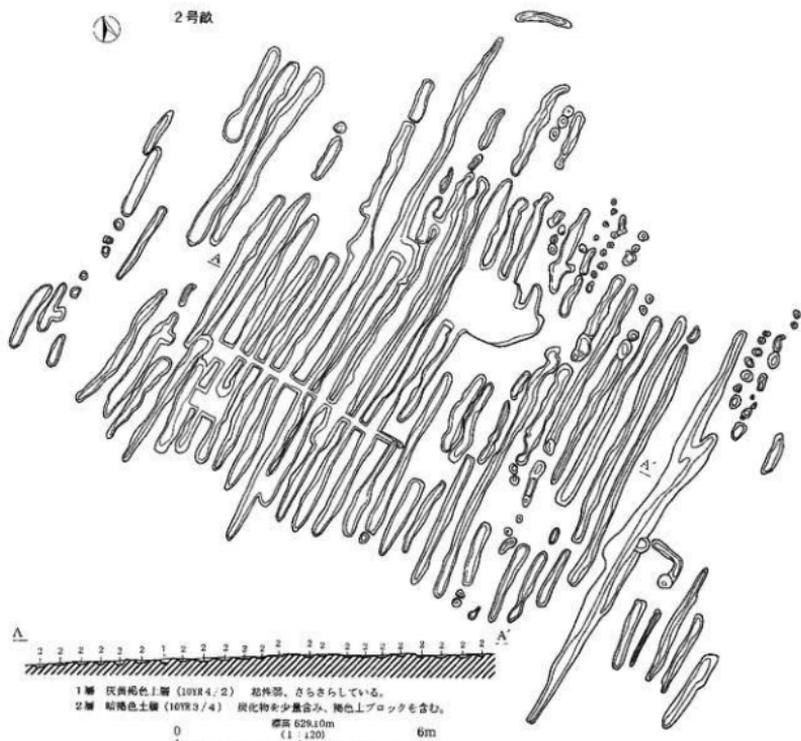
とが窺われる。こうした様子からM7号溝状遺構は本畝址及びピット群を区画していた溝とも考えられる。

2号 畝 (第51図、図版十六)

本遺構が検出された位置は、谷地地形に東から西へ展開される遺跡の中央部にあたり、当地点が最も谷地が狭まっている地点である。検出状況は近・現代と思われる耕作などの影響を受け、かなり削平されている様子が窺われた。従って、確認された畝の大半は断続的にとぎれて確認された(第51図)。特に畝を構成している西サイドの畝は、著しい削平のためか掘込まれた畝壁部の旧状は把握できなかった。本遺構は約20cm間隔で33本前後の畝が、南北方向に延びて構成されている。最も長い畝は1条約14.4mで、畝幅は30cm前後を測り、残存する深さは5cm~12cmである。2号畝全体の東西間は18.36mで、確認された4箇所(点)の畝の中では最も畝の構成範囲が良好な遺構であった。そして、この2号畝を挟むかのように西側にM19号溝状遺構が、東側にはM3号溝状遺構がそれぞれ畝と同一方向に並走していることが認められる。こうした状況からこの2本の溝状遺構は本畝址を囲む道構であることが窺われた(第71図)。

3号 畝 (第52図、図版十七)

本遺構が検出された位置は、調査区中央からやや北西にあたる地点である。検出状況は耕作などの影響を受け、か



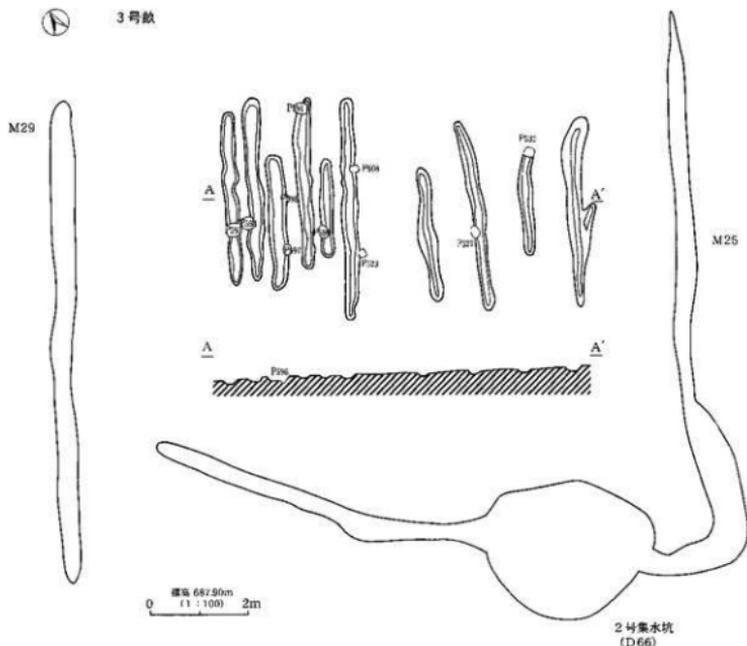
第51図 2号畝址実測図

なり削平されている様子が窺われる。よって確認された畝の大半は先端部が剥ぎ取られていることが窺われた。本遺構は約10cm～80cmの間隔で10本の畝が、南北方向に延びて構成されている。この3号畝の間隔は西側半分が短い間隔で約10cm前後、東側半分は80cm前後と対称的な間隔を持って構成されている(第52図)。最も長い畝は1条約4.56mを測り、各畝幅は20cm～30cm前後で、残存する深さは8cm～15cmである。また、本畝址全体の東西間は7.4m前後を測る。

この3号畝は3号建物址群と重複関係にあり、建物址による破壊を受けている。こうしたことを鑑みると下図に示したM25・29号溝状遺構は先項で述べた3号建物址群を区画する溝であることが考えられる。しかし、この溝に時間的な幅を持たせることができるならば、本3号畝をも区画する機能を持った溝であるとも言えるかもしれない。

4号畝(第50図、図版十七)

本遺構が検出された位置は、調査区中央からやや北西にあたる地点である。本址はく・け-24グリッドに位置し、検出状況は耕作などの影響を受け、かなり削平されている様子が窺われる。従って、確認された畝の大半は断続的にとぎれた状態で確認された(第50図)。本遺構は約16cm～24cm間隔で9～10本前後の畝が南北方向に延びて構成されている。最も長い畝は1条約4.1mで、畝幅は24cm前後を測り、残存する深さは5cm～12cmである。4号畝全体の東西間は3.6mで、確認された4箇所の中の最も畝の構成範囲が小規模な遺構であった。近接する遺構は畝の脇に4・5号建物址群の2棟が位置している。そして本址も2号・3号畝と同じようにM26・27号溝状遺構に囲まれた内側から確認された(第10図)。こうした検出状況から推し4号畝及び4・5号建物址群は2条の溝状遺構に囲まれた内側で共存していた可能性もあり得る。



第52図 3号畝址平面図

第 3 節 出土遺物

本節では出土遺物の中で陶磁器類については器種及び時期を中心に一括して述べ、これ以外の遺物については各遺構別に記載した。なお、陶磁器類の遺物については市川氏のご教示によるところが大きい。

1 陶磁器類 (第55・56図)

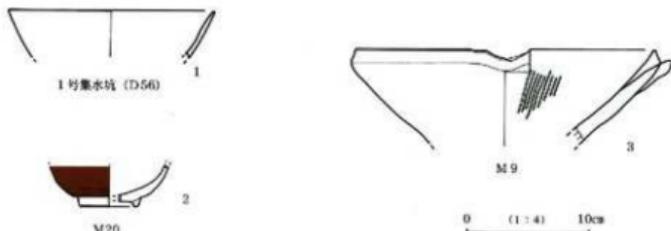
宮田遺跡Ⅰ・Ⅱからは陶磁器類33点が出土した。内訳としては中世の所産として17点、17世紀以降の近世・近代の所産として16点があった。しかし確認された遺物の中には明らかに近代以降と思われる物もありこれらは除外し19世紀代の遺物に止めた。この内実測可能な物として7点を図示し(第53・54図)、これらを含め出土した陶磁器は第55～56図の写真で示した。詳細な内容は遺物観察表に記したが、中世の品として先ず輸入陶磁器の青磁がある。青磁は1～6・16の7点があり時期としては12世紀後半の1、13世紀の2～4、13世紀後半～15世紀代の5がある。器種は碗1～6が6点、他に香炉16が1点のみで、皿類などは確認できなかった。

次に中世国産品としては、先ず北信産と思われる13世紀末～14世紀前期の瓦質すり鉢7があり、中瀬瀬戸として14世紀の却皿8が1点出土した。この他には中瀬瀬戸若しくは大塚製品と思われる15～16世紀の皿9があり、瀬戸・美濃若しくは大塚製品と考えられる16世紀中期以後の丸皿10が出土した。次に常滑としては16世紀代の甕11～15が5点出土した。このように13世紀代の在地窯及び14～16世紀中期における古瀬戸系と、16世紀代の常滑系との2時期に大別できるが主体は16世紀代の品が多い。器種としては瀬戸系は皿・常滑系は甕などが出土した。

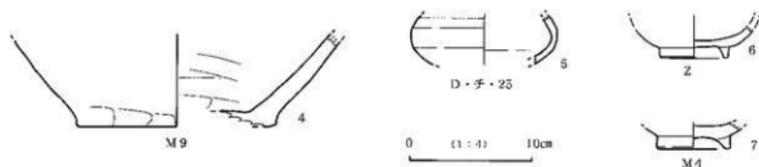
近世の遺物としては17世紀～18世紀代に該当するものとして、瀬戸・美濃製品は4点ある。内訳は丸碗17・碗20・21・輪竹皿23などがある。伊万里は染付け碗22が1点出土し、唐津は呉器手碗18・19が2点であった。前山焼と思われる18世紀代の在地窯製品として鉄軸碗24・25が2点あった。また次に瀬戸・美濃製品として灰釉丸碗30・31が2点あり、伊万里製品としては4点あり内訳は碗が26～28の3点、29の皿が1点であった。

以上見てきたように本遺跡の陶磁器類は大きく3つの時期に分けられると考える。即ち輸入陶磁器を主体とする13～14世紀代、次に国産陶磁器を主体に14世紀後半～16世紀代、国産陶磁器特に常滑、瀬戸・美濃、伊万里が主体を占める17世紀後半以降である。そして、輸入陶磁器の特徴として窺われることはその器種組成において食器の碗に偏り、該期の調理具・供前具が出土していないことである。このことは当遺跡の性格を把握する上で注意すべき点であると共に、15～16世紀代は輸入陶磁器の出土量が極端に少なくなり13～14世紀代と15～16世紀代の間で遺跡に住む人々の中で何かの変化が起こっていることが推定できる。

陶磁器の出土分布は輸入陶磁器はグリッドな19・20付近からおもに検出され、宮田遺跡Ⅰ地点の最西端部にあたる。当地点は谷地形の出口にあたり、調査区の中では最も平坦な広がりが見られる處で当地周辺には中世建物址群が確認される。また、14世紀後半～16世紀代の古瀬戸・美濃も輸入陶磁器とほぼ同じ分布範囲からの出土であることが認められる。17世紀以降のものに関しては遺跡全体に広がる傾向があるが、いずれの時期も出土遺構としては溝状遺構からの出土が目立ち次いで土坑が挙げられる。



第53図 中世・近世陶磁器類実測図



第54図 中世・近世陶磁器類実測図

第15表 陶磁器類観察表

番号	地区・遺構・グリット	器種	産地	時期	備考
1	D56	青磁碗	龍泉窯系	12c後	画花文
2	H-ヨ-33	青磁碗	龍泉窯系	13c	蓮弁文
3	D-ナー-19	青磁碗	龍泉窯系	13c	
4	D64	青磁碗	龍泉窯系	13c	蓮弁文
5	M2	青磁碗	龍泉窯系	13c後-15前	
6	D-ナー-21	青磁碗	龍泉窯系		蓮弁文
7	M9	瓦質すり鉢		13c末-14前	北信産か
8	D-ニ-24	却皿	古瀬戸	14c	中期様式
9	D-ニ-25	皿	古瀬戸か大窯	15-16c	小片で仔細不明
10	D-ナー-25	丸皿	瀬戸・美濃大窯	16c中以後	大窯2期以後
11	M9	甕	常滑	中世	
12	M15	甕	常滑	中世	
13	Z	甕	常滑	中世	
14	M20	甕	常滑?	中世	
15	D56	甕	常滑	中世	
16	D-チ-25	青磁 香炉		中世	中国産か
17	M20	丸碗	瀬戸・美濃連房	17c前	
18	M20	呉器手碗	唐津	17c後-18c	(Ⅲ) IV期
19	M4	呉器手碗	唐津	17c後-18c	(Ⅲ) IV期
20	D-Z	碗	瀬戸・美濃連房	18c末以降	鉄軸
21	M4	碗	瀬戸・美濃連房	18c末以降	鉄軸
22	Z	碗	伊万里	18c	見込五弁花
23	M20	輪ハゲ皿	瀬戸・美濃連房	18c	
24	M20	鉄軸碗	近在窯	18c後以降	(前山焼)
25	M11	鉄軸碗	近在窯	18c後以降	(前山焼)
26	Z	碗	伊万里	18c-19c前	IV-V期
27	D-Z	碗	伊万里	近世	
28	D-Z	小碗	伊万里	近世	
29	D-チ-22	皿	伊万里	近世	
30	M30	灰釉丸碗	瀬戸・美濃連房	近世	小片で仔細不明
31	D-Z	灰釉丸碗	瀬戸・美濃連房	近世	
32	M20	土瓶か行平鍋	近在窯?	近世末-近代	
33	M20	すり鉢	近在窯	近世末-近代	(前山焼)



1

1号集水坑 (D56) 53-1
57-5
龍泉系 青磁碗
(12c 後)
劃花文



2

H-日33
龍泉系 青磁碗
(13c)
劃花文



3

D-ナ19
龍泉系 青磁碗
(13c)



4

之野井戸址 (D64)
龍泉系 青磁碗
(13c)
劃花文



5

M2
龍泉系 青磁碗
(13c 後-15期)



6

D-ナ21
龍泉系 青磁碗
劃花文



7

M9 53-3 60-6
五野 平口鉢
(13c 末-14期 北信濃?)



8

D-二24
占部戸 磁器
(14c 中期様式)



9

D-二25
占部戸少大炊 鉢
(15-16c)



10

D-ナ25
瀬戸名産大式 瓦蓋
(16c 中以降 大塚2期以降)



11

M9 54-4
60-9
東濃 中 部



12

M15
東濃 中 部

0 (1:2) 5cm



13

Z
東濃 中 部



14

M20
東濃 中 部



15

1号集水坑 (D56)
東濃 中 部

第55圖 中世・近世陶磁器類



16
D一子25 54-6
65-22
青磁 香炉
(中世 中(後期))



17
H20
瀬戸瓦器造形 丸碗
(17c 前)



18
M20
赤津 汽野子断
(17c 後半~18c)
(瓦)片断



19
M4 54-7 60-17
青磁汽野子断
(17c 後半~18c)
(瓦)片断



20
D Z
瀬戸瓦器造形 碗
(18c 末以降)



21
M4
瀬戸瓦器造形 圓角碗
(18c 末以降)



22
Z
伊万里 碗
(18c)
(足込瓦器部)



23
M20
瀬戸瓦器造形 輪ハツ盆
(18c)



24
M20 53-2
60-11
近在京 鉄輪碗
(18c 以後
新山焼?)



25
M11
近在京 鉄輪碗
(18c 以降
新山焼?)



26
Z 54-6
69-2
伊万里 碗
(18c~19c 前)
N-V類



27
DK Z
伊万里 碗
(瓦 碗)



28
DK Z
伊万里 小碗
(瓦 碗)



29
D一子22
伊万里 碗
(瓦 碗)

0 (1:2) 5cm



30
M30
瀬戸瓦器造形 深和碗
(瓦 碗)
小片式(新山焼)



31
DK Z
瀬戸瓦器造形 深和碗
(瓦 碗)



32
M20
近在京+土器小行平碗
(近世末~近代)



33
M20
近在京 サリ鉢
(近世末~近代 新山焼?)

第56図 中世・近世陶磁器類

2 遺構別出土遺物

① 土坑出土遺物 (第57図～第59図)

中世・近世の土坑から出土した遺物は総数20点である。検出された土坑は73基であったが、その内からの出土遺物20点はやや少ないと言わざるを得ない。内訳は陶磁器類、土鍋、土師質土器、鉄製品、他、石製品などがある。

陶磁器は3点が確認された。検出された遺構はD56の集水坑と考えられる遺構から5の青磁の碗1点、及び、20の常滑の甕1点があり、2号井戸址 (D64) からは19の常滑の甕1点が出土した。

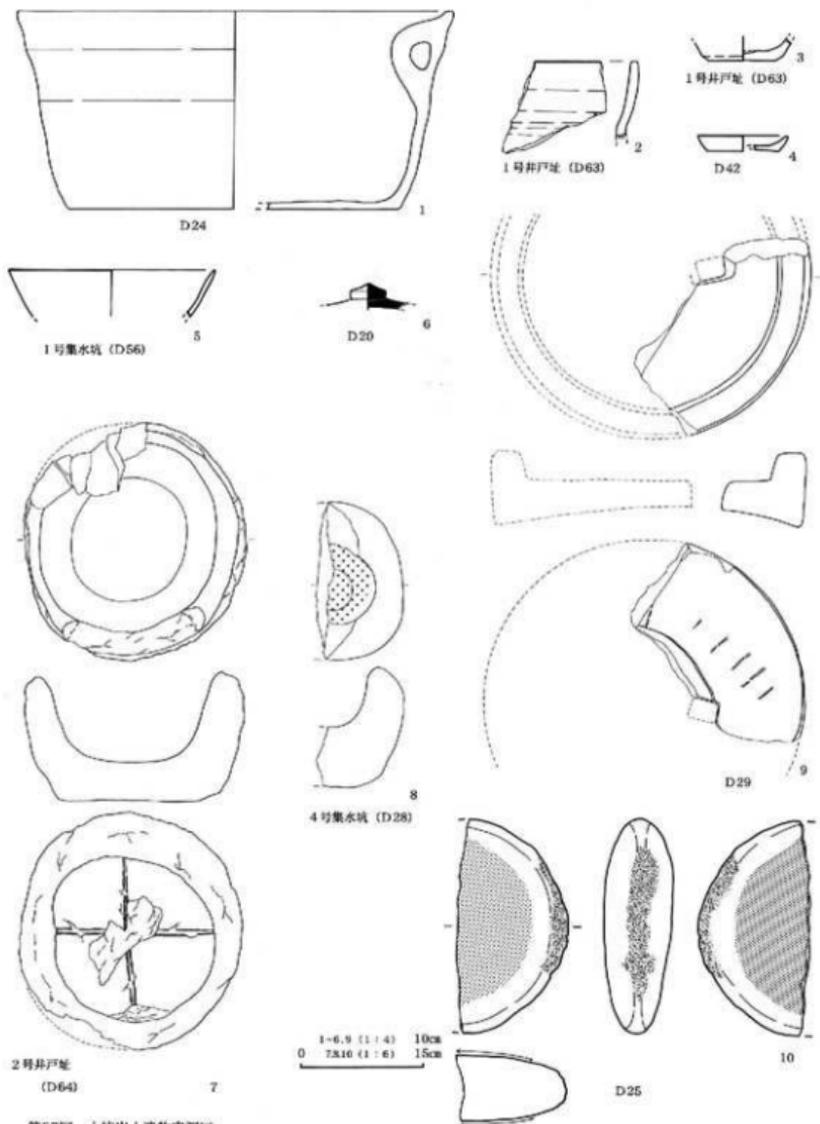
土鍋、土師質土器は4点が確認された。土鍋1はD24号土坑から出土し、器形の1/2以上が残存しており土鍋の中では最も残存率の良いものである。1号井戸址 (D63) からは2の土鍋片及び3の土師質土器が各1点ずつ出土した。他に、D42号土坑から4の土師質土器の1点が確認された。時期はいずれも16世紀代の所産と考えられる。

石製品には石臼、石臼鉢、揃き臼、砥石、多孔石 (蜂の巣石) などがあり、他に石器類として石錘・擦石・敲石がある。石臼9はD29号土坑から出土し、径約29cmの上臼で残存する器高は約6cmと著しく磨減している (第57図)。石臼鉢7は2号井戸址 (D64) 底部から出土した。径約24cmと大型を呈し石材は安山岩で外面底部には工具による「十」字に彫刻された跡がある。器面全体がザラザラとしており、内面の使用面も多用した様子は窺われなかった。揃き臼8が4号集水坑 (D28) から出土している。残存する使用面は径9.6cm、深さ約6.3cmで多用した様子が窺われ磨減している。本遺物は約1/2が残存しているものと考えられ意図的に割られた可能性がある。砥石13・14・16が3点出土し、13はD42号土坑、14はD14号土坑、16はD48号土坑から確認された。

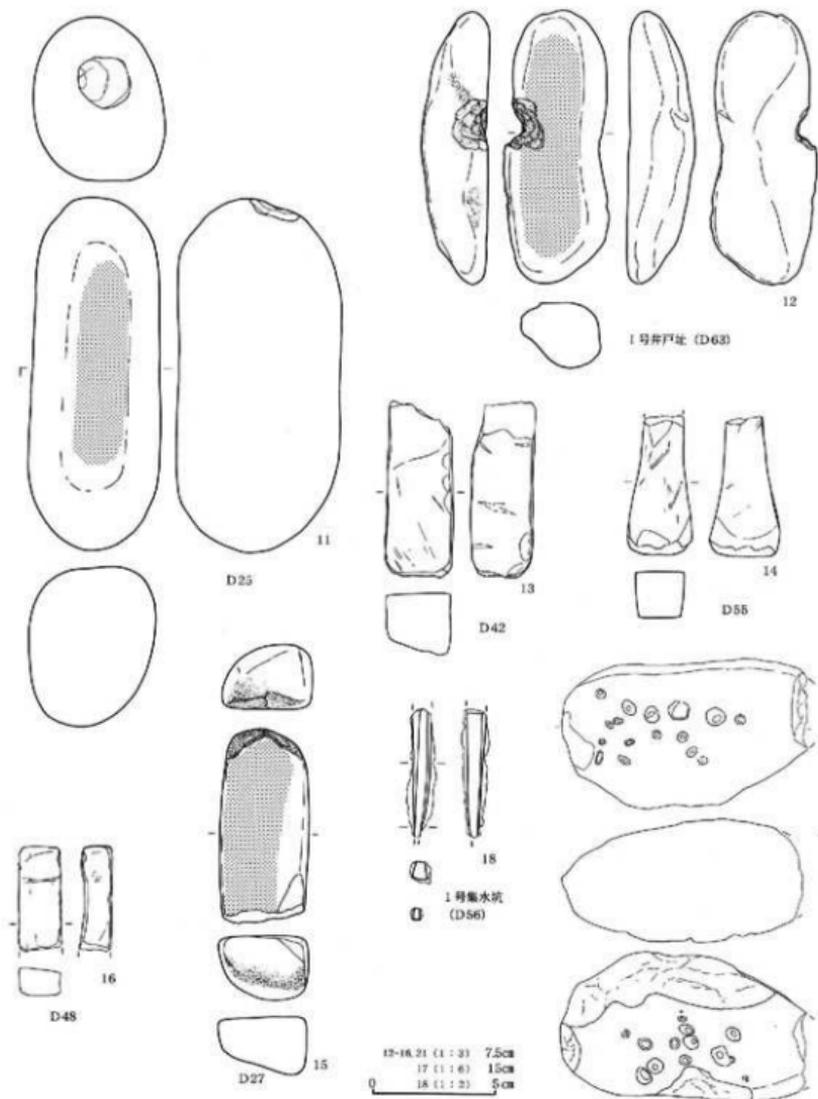
石器類としては、石錘・擦石・敲石がある。石錘12は1号井戸址 (D63) から出土したもので、器面の平坦部には捺痕が認められ、本遺物の用途は石錘と擦石・敲石を兼ねたものであったと考えられる。擦石・敲石が3点確認でき、10・11は炭化物を多量に含んだD25号土坑から検出され10は台石で、11は擦石・敲石である。他にD29号土坑から出土した15の擦石・敲石が1点ある。

鉄製品は18の角釘が1号集水坑 (D56) の底部から出土した。残存する長さは5.2cm、最大幅約6mmの角釘である。

No.	器 種	法 量 第16表 土坑出土遺物観察調査・文様			備 考		
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	土鍋	(35.2)	(27.0)	(16.1)	ナデ	ナデ	D24
2	土鍋	-	-	(7.4)	ナデ	ナデ	D63 外面にスチ付着
3	土師質土器	-	(5.4)	(1.5)			D63
4	土師質土器	(7.4)	(5.9)	(1.3)			D42
5	青磁碗	(16.8)	-	(3.9)	ロクロナデ 筋輪	ロクロナデ 筋輪	D56
6	蓋	-	-	(1.9)	ナデ	ナデ	D20
7	すり鉢	(31.5)	29.8	(18.4)			D64 正面の縁に欠損部分あり。裏面に「十」字の溝あり。内面はよく使われて新らかになっている。 即径タテ25、ヨコ23.9cm 最深12.5cm (9.690) g
8	石臼臼	-	(12.0)	(17.5)			D28
9	石臼 (上口)	(29.6)	-	6.8			D29 供給口形状 長方形
10	台石	(26.5)	(13.5)	(8.2)			D25 中央部押痕あり
11	擦石・敲石	21.7	7.7	9.9			D25 13c
12	磨物石・擦石	16.8	6.5	4.1			D63
13	砥石	(10.8)	(4.2)	(3.8)			D42 上部欠損。砥面数4。4面とも捺痕あり。内側面は粗のある糸痕。F面は砥面ではない。(286) g
14	砥石	(8.6)	(4.0)	(4.3)			D55 上部欠損。砥面数4。4面とも捺痕あり。下面は素材の面。砥面ではない。(160) g
15	擦石・敲石	(11.8)	(5.5)	(3.3)			D29
16	砥石	(6.5)	(2.7)	(1.7)			D48 下部欠損。正面のみ新らか。正面上部起し部あり。(51.2) g
17	蜂の巣石	29.8	17.5	15.0			D63
18	角釘	(5.2)	0.6	-			D38
19	青磁甕				逆井文		D64 甕身関係
20	常滑 甕						D56
21	白磁 湯呑						D64 瀬戸美濃

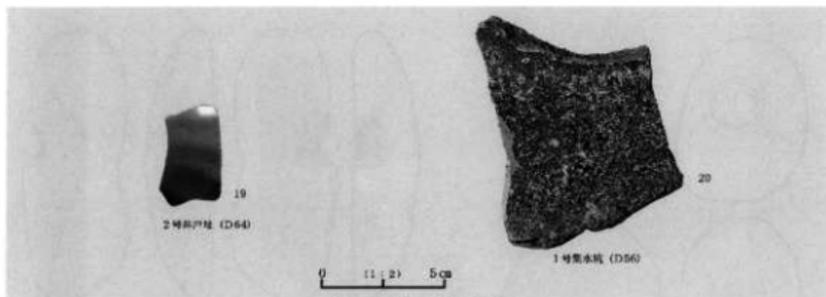


第57图 土坑出土器物实例图



第58图 土坑出土文物实图

1号井尸址 (D63) 17



第59図 土坑出土陶磁器類

② 溝状遺構出土遺物 (第60図～62図)

中世・近世及び近代と思われる溝状遺構から出土した遺物は総数48点である。内訳は陶磁器類、土鍋、土師質土器、拵鉢、台付鉢、縄文時代の深鉢、鉄製品、石製品、石器などがある。

陶磁器12点

M2号溝状遺構から37の青磁碗 (13c後半～15c前半) [第55図-5]

M4号溝状遺構から17の呉器手碗 (近世) 及び42の鉄釉碗 (近世) [第56図-19・21]

M9号溝状遺構から6の瓦質拵鉢 (13c末～14c前) 及び9の常滑甕 (中世) [第55図-7・11]

M15号溝状遺構から38の常滑甕 (中世) [第55図-12]

M20号溝状遺構から11の鉄釉碗 (近世)・39の常滑甕 (中世)・40の瀬戸・美濃丸碗 (中世)・41の唐津呉器手碗 (近世)・43の瀬戸・美濃連房の輪ハゲ皿 (近世)・46の近在窯土煎着しくは行平鍋 (近世)・47の近在窯深鉢 (近世～近代)・48の瀬戸・美濃土絵付急須 (近代) などがある。[第55・56図]

土鍋、土師質土器 先ず土鍋はM6・7 (2点)・9・11・12 (2点)・24号の各溝状遺構から8点が出土し、1～5・8・12・13に示した。土師質土器はM24号溝状遺構から15に示した1点が確認された。これらの時期は16世紀代の所産と考えられる。

次に6の瓦質拵鉢はM9号、7の台付鉢はM2号、10の土製円板はM9号の各溝状遺構から出土した。他に混入遺物と考えられる14・18の縄文時代深鉢がある。

石製品には、焼き臼、砥石などがある。30の石焼き臼はM7号溝状遺構から出土し、径18.5cm・器高12cmを測る。砥石は3点が確認され、M3・M7・M9号の各溝状遺構から検出され、24～26に示した。

石器類としては、石錘 (扁物石)、擦石・砥石の他に、打製石斧、石鎌、横刃型石器、スクレイパーがある。

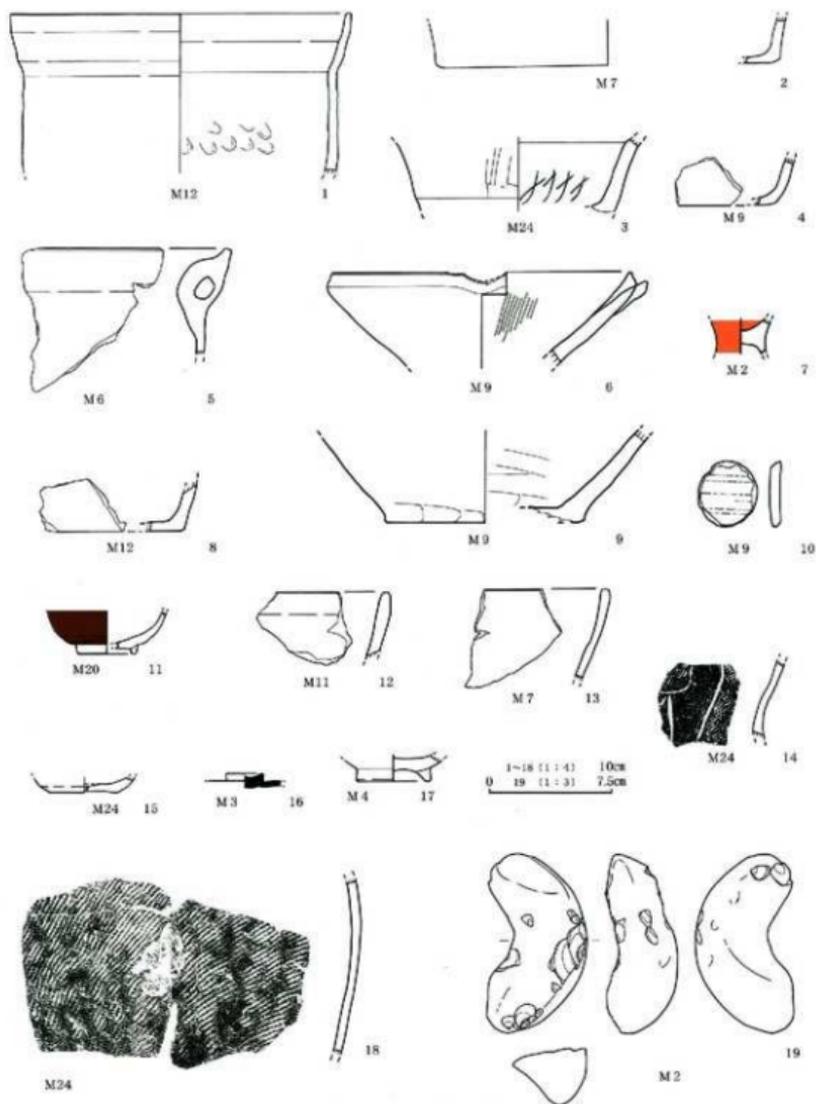
石錘 (扁物石) は19に示した1点があり、M2号溝状遺構から出土した。擦石・砥石は1点確認され、27はM3号溝状遺構から検出された。他に打製石斧は4点が出土し、20はM7号、21はM24号、22はM6号、23はM4号の各溝状遺構から検出された。石鎌は31・32に示した2点があり、31はM20号溝状遺構から出土した物で先端部が欠損している。28の横刃型石器はM2号溝状遺構から出土し、右端部が欠損している可能性もある。29のスクレイパーはM20号溝状遺構から出土した。

この中で石鎌・横刃型石器・スクレイパーは混入遺物と思われる。

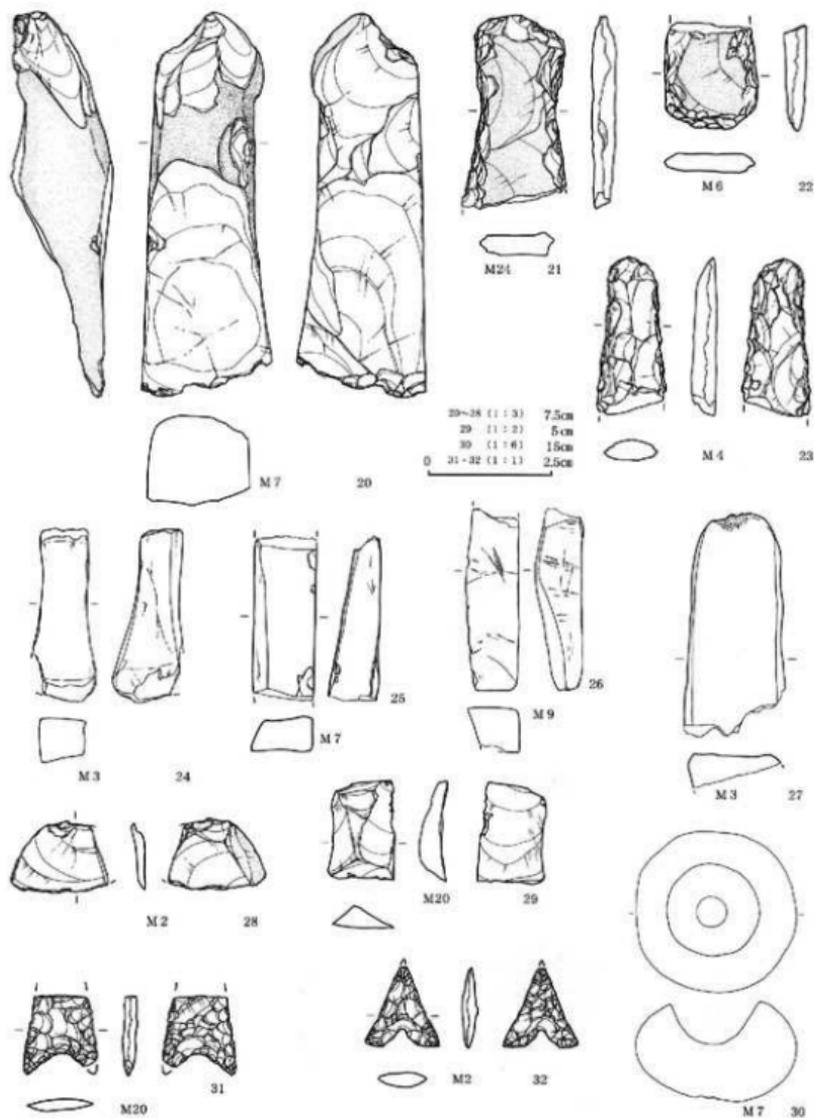
鉄製品には火打金、刃子、棒状鉄製品 (紡錘車心棒)、不明鉄製品などがある。33の火打金はM11号溝状遺構から出土したもので両端部が欠損している。34はM20号溝状遺構から出土した刃子の破片である。36はM19号溝状遺構から出土した棒状鉄製品 (紡錘車心棒) で、35は器種不明の鉄製品がM30号溝状遺構から出土した。

第17表 溝状遺構出土遺物観察表

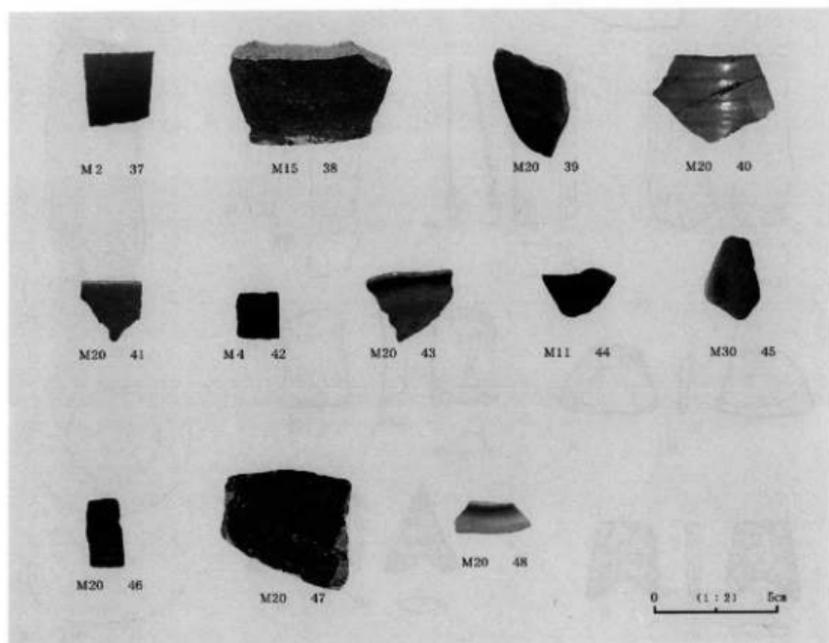
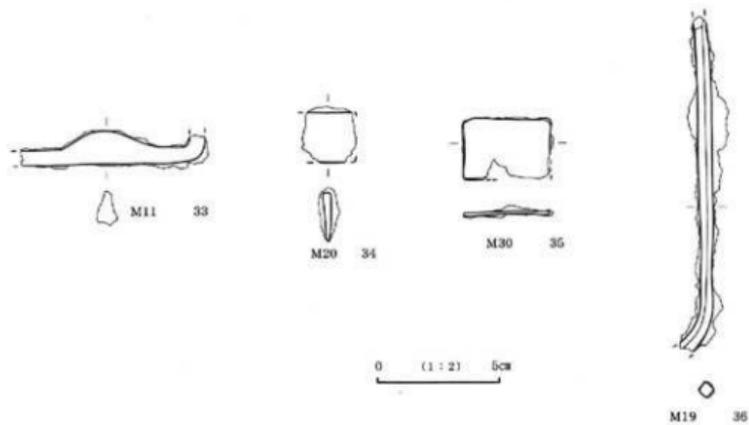
№	器 種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	土鍋	(27.7)	-	(13.0)	ナデ	ナデ 横線圧痕	M12
2	土鍋	-	-	(3.7)	ナデ		M7
3	土鍋	-	-	(6.0)	ヘラケズリ ナデ	ヘラ横文	M24
4	土鍋	-	-	(3.9)	ナデ	ナデ	M9
5	土鍋	-	-	(11.7)	ナデナデ		M6
6	スリ鉢	(24.4)	-	(7.8)			M9 スス焼
7	内付鉢	-	-	(2.9)			M2
8	土鍋	-	-	(4.2)	ナデ	ナデ	M12
9	甕常滑	-	(16.2)	(7.5)	ヘラナデ	ヘラナデ	M9
10	土製円板	4.8	5.4	0.9	ナデ	ナデ	M9
11	鉄雑陶器 前	-	(4.3)	(3.5)	施繪(鉄繪)ロクロナデ	施繪(鉄繪)ロクロナデ	M20
12	土鍋	(5.6)	-	-	ナデ	ナデ	M11
13	土鍋	-	-	(8.1)	ナデ	ナデ	M7
14	瓶文 深鉢	-	-	(6.6)	ヘラミガキ	ヘラ横沈線	ヘラミガキ M24 縄文中層
15	土師質土器	-	(5.6)	(1.2)			M24
16	酒志器 蓋	-	-	(1.2)	ナデ	ナデ	M3
17	貝器手前	-	(6.0)	(1.7)			M4
18	深鉢	-	-	(14.5)	縄文	ヘラミガキ	M24
19	編物石	11.0	6.1	4.4			M2
20	打製石斧	23.7	8.0	6.4	M7	M7 正面と両側に自然面が残る。上部からの剥離は使用のためか、下部の得くなった先端に剥離痕あり。刃部としての使用か。980g	
21	打製石斧	(11.9)	(6.3)	(1.4)	M24	M24 下部(刃部)欠損。両側に横し状の痕あり。(139)g	
22	打製石斧	(6.6)	(5.8)	(1.4)	M6	M6 上部欠損。正面中央部縦面。(84.6)g	
23	打製石斧	(9.7)	(4.3)	(1.6)	M4	M4 刃部欠損。(73.4)g	
24	砥石	10.7	(3.9)	(3.9)	M3	M3 正面上下部欠損。砥面数4。4面とも滑らか。(正裏左右)右側下部に線状痕あり。上部欠損後使用。(181.2)g	
25	砥石	(10.1)	(3.8)	(3.0)	M7	M7 上下欠損。砥面数4。両側に磨痕。裏面はあまり使われていない。(162)g	
26	砥石	(11.2)	(3.2)	(2.7)	M9	M9 上部欠損。砥面数5。5面とも磨痕あり。(129)g	
27	礫石・砥石	(13.5)	(5.3)	(2.0)	M3	M3 滑らかな磨き肌	
28	横刃型石器	4.4	(6.0)	(0.7)	M2	M2 左側自然面。右側欠損。(22.4)g	
29	スクレイパー	4.1	2.7	0.9	M20	M20 正面底部土製剥離面の同時割れ。9.4g	
30	掻き口	-	18.5	12.0	M7		
31	石鏃	(1.6)	(1.5)	(0.25)	M20	M20 先端、右側先端部欠損。裏に素材の面と思われる大きな面あり。(0.6)g	
32	石鏃	(1.6)	1.5	0.3	M2	M2 先端部欠損。(0.4)g	
33	火打金	(7.6)	-	(1.3)	M11		
34	鉄製品	(2.2)	-	(2.0)	M20		
35	鉄製品	(3.4)	-	(2.5)	M30		
36	(紡錘車心棒)??	(13.6)	-	-	M19		
37	青磁向				M2	温泉窯系	
38	夏 常滑				M15		
39	夏 常滑				M20		
40	丸罎				M20	瀬戸美濃連切	
41	汽缸手輪				M20	唐津	
42	罎				M4	瀬戸美濃連切 鉄軸	
43	輪ハゲ皿				M20	瀬戸美濃連房	
44	罎				M11	近在京 鉄軸	
45	丸罎				M30	瀬戸美濃連房 灰軸	
46	上瓶か行手輪				M20	近在京	
47	スリ鉢				M20	近在京	
48	上給付急須				M20	瀬戸美濃	



第60图 满汉遗址出土文物实物图



第61图 清江遗址出土文物实图



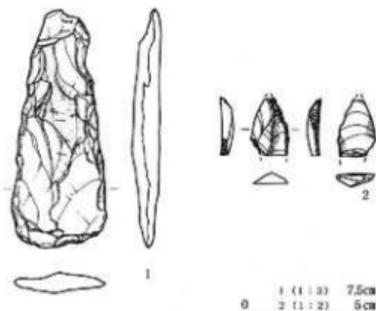
第62图 湾状遗址出土文物实例图

③ 堅穴状遺構出土遺物 (第63図)

堅穴状遺構は5棟が検出されたがいずれの遺構からも中世に帰属する遺物は出土しなかった。図示した石器は混入遺物と考えられる2点である。

1の打製石斧はTa4号堅穴状遺構から出土したもので全体が磨減しており、長さ14.6cm・幅5.9cm・厚さ1.6cmである

2は同じTa4号堅穴状遺構から出土したナイフ型石器で先端部及び基部が欠損している。また、右側辺と左基部にブランディング刃痕し加工を施す刃部が斜行している。茂呂型に分類できると思われる。



第63図 Ta4号堅穴状遺構出土遺物実測図

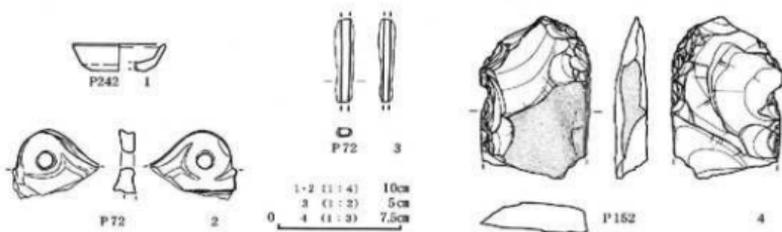
第18表 Ta4号堅穴状遺構出土遺物観察表

No	器種	法量			成形・調整・文様		備考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面	
1	打製石斧	14.6	5.9	1.6	外面	内面	正面中央部断面に横方向の磨減あり、全体に磨減。135.8g
2	ナイフ型石器	(2.4)	(1.6)	(0.45)	外面	内面	先端と基部欠損。縦長剥片と素材として右側辺と左基部にブランディング(刃痕し加工)を施す刃部が斜行していることから茂呂型に分類できるが、1.5g

④ ビット群出土遺物 (第64図)

本群のビットから出土した遺物で中世に帰属するものは1の土師質土器、及び、3の角釘のみである。

図示した2の縄文時代深鉢、4のスクレイパーは混入遺物と考えられる。



第64図 ビット出土遺物実測図

第19表 ビット出土遺物観察表

No	器種	法量			成形・調整・文様		備考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面	
1	土師質土器	(7.5)	(4.3)	(2.2)	底部回転糸切		P242
2	深鉢(取手)	—	—	(5.3)			P72 縄文中期中葉
3	角釘	(3.4)	—	—			P72
4	スクレイパー	(10.0)	(6.8)	(1.7)			P152 下部欠損(146.8)g

⑤ グリッド出土遺物（第65～68図）

グリッドから出土した遺物は総数67点である。内訳は陶磁器類、土鍋、土師質土器、甕、鉄製品、石製品、石器類、縄文時代の深鉢、有舌尖頭器、スクレイパーなどがある。

陶磁器類13点

陶磁器類は宮田遺跡1地点のグリッドつ〜に-18~25から多く出土した。当地点は谷地地形に展開する本道跡の中では最も平坦な面が広がる谷の出口付近である。陶磁器類が多く検出されたグリッド内からは遺構は確認されなかったが、隣接する周辺には溝状遺構によって囲まれていると考えられる2・3号建物址群、また、1号建物址群などが検出されている。出土した器種には56~58の青磁碗3点・22の香炉1点があり、56・58は蓮弁文が施される碗である。香炉は第65図22に図したもので中国産と考えられる青磁品である。63・66の2点は白磁であるがいずれも小片であり器種を把握することはできなかった。他に、国産陶磁器として瀬戸・美濃の皿があり、59・60は古瀬戸の却皿・皿で、62の伊万里の皿などが出土した。これら陶磁器類の時期は13世紀~近世の多時期に渡っている。

土鍋・土師質土器

グリッド内から出土した土鍋で図化できたものは17点あり、1~8・10~13・15~17・21・24に示した。土師質土器は14・20・23の3点が確認された。これら土鍋、及び、土師質土器が検出された位置は、陶磁器が多く確認されたグリッドつ〜に-18~25とほぼ同じ地点からの出土が多く、谷が狭まる東側からは極端に土鍋・土師質土器共に出土量が少ないことが認められた。これらの時期は16世紀代の所産と考えられる。

石製品

出土した石製品には、碁石状石製品、擦り石、砥石、擦石・敲石などがある。碁石状石製品は1点あり、37に示した。31の擦り石は長さ5.2cm・幅4.2cmで、形状は「卵子型」を呈している。本遺物は全体に磨減しており多用された様子が窺われる。砥石は29・30に示した2点があり、共に長さ7cm・幅4cmの大きさである。また、29の砥石の裏面には角状の線条痕、30の砥石の正面下部にも同じく線条痕が認められる。擦石・敲石は1点確認され28に図した。

鉄製品

鉄製品には火打金、刀子、角釘などがある。48の火打金は長さ約9.6cmを測る。本遺物には刃部が確認されず麻引金具とは形態が違うことが認められる。51は刀子で両端部が欠損している別個体の刀子が、共に刃部を内側に折り付いている。角釘が5本確認され49・52~55に示した。49の角釘は先端部が欠損していることが認められる。

中世以前の遺物

先ず土器の中で縄文時代の土器2点、弥生時代の土器1点が出土した。18は縄文時代中期~後期・賀曾利Eまたは称名寺に師属する深鉢の口縁部である。26は縄文時代中期中葉と考えられる深鉢の口縁部である。また、弥生時代の甕が1点あり、25に示したI縁部には波状文が施されている。

次に石器類としては、打製石斧、石鏃、スクレイパー、有舌尖頭器がある。

打製石斧は3点が出土し33・34・40に示した。この内33は打製石斧の剥片で下部の縁辺部には二次加工された痕跡が看られる。39は黒曜石の縦型石鏃で長さ約5.2cm・幅2.8cm・厚さ約1cmのもので鑿み部が欠損している。

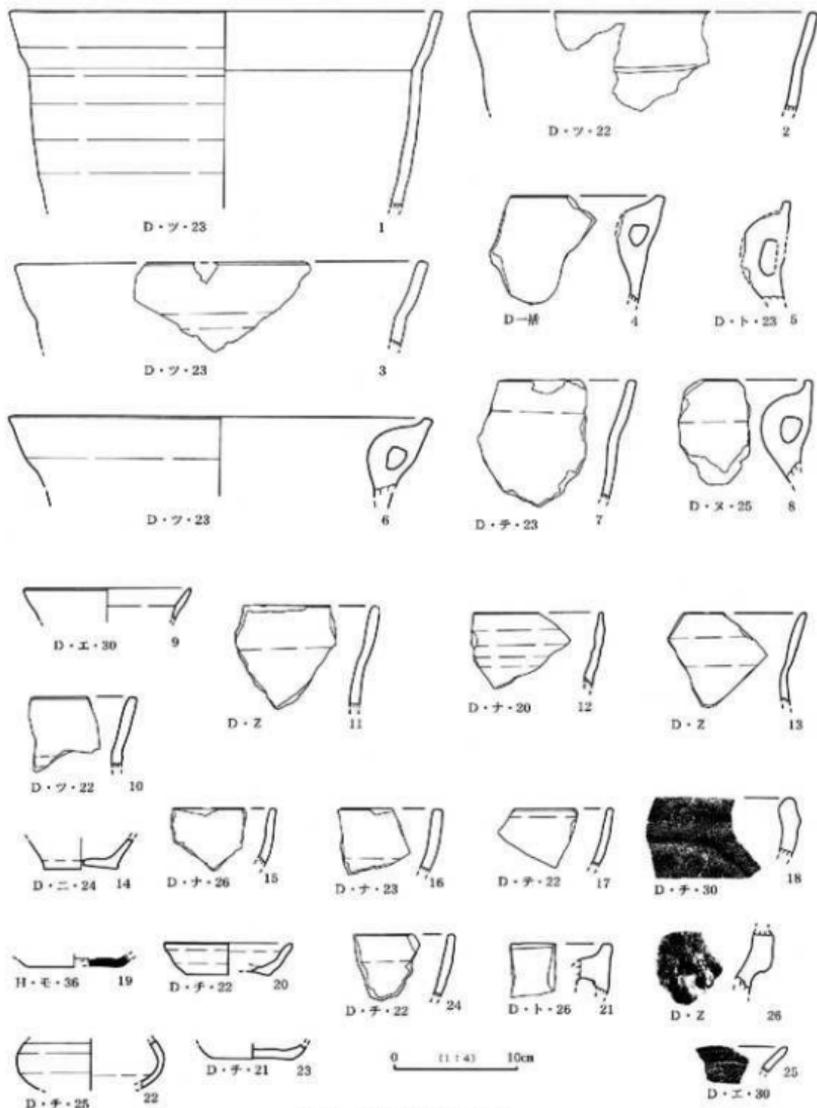
石鏃が7点あり41~47に図した。41の石鏃は長さ3.4cm・幅2.2cmのもので出土した石鏃のなかでは最も大型を呈している。他に38の石鏃未製品が1点ある。

スクレイパーは3点出上し32・35・36に示した。32に図したスクレイパーの正歯は自然面が残っている。35は周辺に剥離痕が認められ、一部に新しい剥離面が観察される。36のスクレイパーは両端部が欠損しているものである。

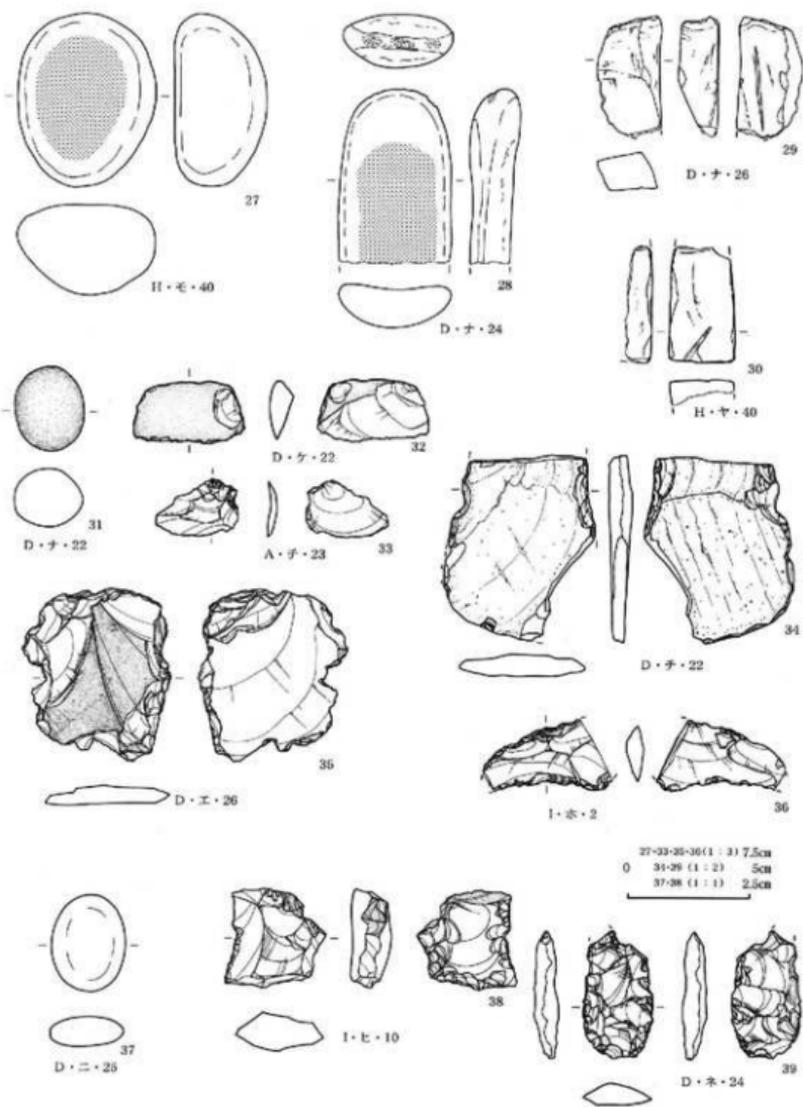
有舌尖頭器が調査区I地点の、グリッドA-17より検出された。この50に図した有舌尖頭器は長さ7.4cm・幅2.0cm・厚さ0.6cmの完形品で石質は頁岩である。弥生時代及び縄文時代の尖頭器の石材は、上に黒曜石が使用されるのが一般的であるが、本遺物の石材は頁岩が使用されており、石質から時期を看ると約12000年前（縄文時代前期）の遺物と考えられる。

第20表 グリッド州上遺物観察表

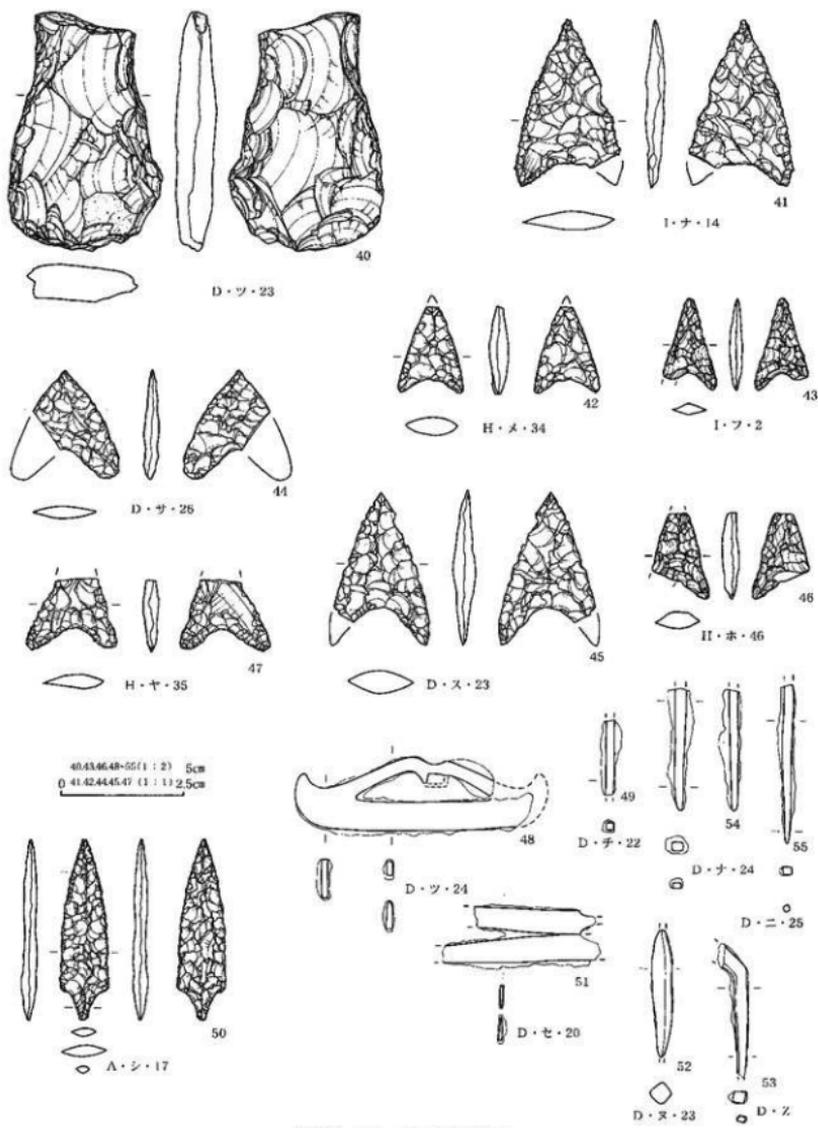
No	品 種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		(1個(個))	直径(㎝)	高さ(㎝)	外 面	内 面	
1	土鍋	(33.0)	-	(16.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	D-ツ 23
2	土鍋	(28.4)	-	(8.1)	ナデ	ナデ	D ツ 22
3	土鍋	(33.3)	-	(7.3)	ナデ	ナデ	D ツ-23
4	土鍋	-	-	(8.8)	ナデ	ナデ	DK 15
5	土鍋	-	-	(7.8)	ナデ	ナデ	D-ツ-23
6	土鍋	(34.4)	-	(6.5)	ナデ	ナデ	D-ツ23
7	土鍋	-	-	(10.3)	ナデ	ナデ	D ツ 23
8	土鍋	-	-	(8.5)	ナデ	ナデ	D ツ-25
9	甕	(11.6)	-	(2.7)	ナデ	ナデ	D ツ 30
10	土鍋	-	-	(5.8)	ナデ	ナデ	D ツ-22
11	土鍋	-	-	(8.5)	ナデ	ナデ	DK 15
12	土鍋	-	-	(6.2)	ナデ	ナデ	D-ツ-26
13	土鍋	-	-	(7.5)	ナデ	ナデ	Dツ-15
14	土師甕土器	-	(6.0)	(2.4)	ロクロナデ 底面名切	ロクロナデ	D-ツ-24
15	土鍋	-	-	(5.1)	ナデ	ナデ	D-ツ 26
16	土鍋	-	-	(5.4)	ナデ	ナデ	D ツ 23
17	土鍋	-	-	(4.8)	ナデ	ナデ	D ツ 22
18	甕鉢 (口縁部)	-	-	(6.5)	ナデ	ナデ	D ツ 22
19	鉢	-	(7.8)	(1.9)	ナデ 底面削り込み	ナデ	D-ツ 30 甕文中期～後期加納川又は若名子
20	土師甕土器	(10.4)	(6.5)	(2.5)	ロクロナデ 底面削り込み	ロクロナデ	D ツ-22
21	土鍋	-	-	(4.2)	ナデ	ナデ	D-ツ-26
22	甕鉢	-	-	(3.8)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ	D-ツ-25
23	土師甕土器	-	(6.6)	(1.0)	底面削り込み	ナデ	D-ツ-21
24	土鍋	-	-	(4.9)	ナデ	ナデ	D-ツ-22
25	甕	-	-	(3.1)	特種状文	ナデ	D-ツ 30
26	甕鉢 (口縁部)	-	-	-	-	-	D-ツ-15 甕文中期中型
27	磨石	10.6	8.5	3.6	-	-	H-ツ 30
28	磨石・取石	(11.6)	(3.1)	(3.7)	-	-	D-ツ-24
29	砥石	(7.4)	4.0	2.4	-	-	D-ツ-26 新田中央内院遺物館(76.9)g
30	磨石	(7.2)	(4.1)	(1.7)	-	-	H-ツ-40 下田下院遺物館(60.9)g
31	磨石	5.2	4.2	3.6	-	-	D-ツ-22 全体が磨り込んでいる。
32	スクレイパー	3.9	6.8	1.5	-	-	D ツ 27 土器自然面あり。3.7、1.6
33	打製石斧(細片)	(3.3)	(5.1)	(7.2)	-	-	A ツ-23 下部縁は二次加工あり。(7.2)g
34	打製石斧	10.9	9.1	1.1	-	-	D-ツ 22 165.5g
35	スクレイパー	10.7	9.1	1.2	-	-	D ツ 26 両面に削り込みあり。148.9g
36	スクレイパー	(4.3)	(7.9)	(1.1)	-	-	I ツ-2 両面欠損(30.3g)
37	磨石(製)	2.0	1.5	0.65	-	-	D-ツ-23 3.0g
38	石製木製品	(2.0)	(2.0)	(0.7)	-	-	I-ツ-10 石製と木製部分に二次加工あり。(3.0)g
39	石斧	(5.2)	(2.8)	(1.0)	-	-	D-ツ-24 上部欠損。基部に削り込みあり。(13.7)g
40	打製石斧	14.3	9.1	2.3	-	-	D-ツ-24 重量 350.6g
41	石鏃	(3.4)	(2.2)	0.4	-	-	I-ツ 14 左鏃部欠損(1.8)g
42	石鏃	(1.8)	1.3	0.4	-	-	H ツ 34 左鏃部欠損(0.7)g
43	石鏃	(2.0)	(1.1)	(0.28)	-	-	I-ツ-2 左鏃部欠損(0.4)g
44	石鏃	(2.2)	(1.8)	(0.3)	-	-	D-ツ 28 左鏃部欠損(0.7)g
45	石鏃	(3.1)	(2.0)	0.5	-	-	D ツ-23 左鏃部欠損(1.4)g
46	石鏃	1.8	1.17	0.35	-	-	H ツ-40 0.5g
47	石鏃	(1.5)	(1.8)	(0.3)	-	-	I-ツ-35 上部欠損。基部に削り込みあり。(0.6)g
48	火打石	(3.6)	-	(3.0)	-	-	D-ツ-24
49	角釘	(3.1)	-	-	-	-	D-ツ 22
50	角釘	7.4	2.0	0.6	-	-	A ツ-17 7.9g
51	角釘	(6.5)	-	(2.3)	-	-	D-ツ 22
52	角釘	(3.2)	-	-	-	-	D ツ 23
53	角釘	(5.3)	-	-	-	-	Dツ 24
54	角釘	(5.0)	-	-	-	-	D-ツ-21
55	角釘	(6.5)	-	-	-	-	D-ツ-25
56	青磁焼酎方文	-	-	-	焼酎文	-	H-ツ-33 遺棄品
57	青磁焼酎方文	-	-	-	焼酎文	-	D-ツ 19 遺棄品
58	青磁焼酎方文	-	-	-	焼酎文	-	D ツ 21 遺棄品
59	厚板	-	-	-	-	-	D ツ-24 古瀬戸
60	皿	-	-	-	-	-	D-ツ-24 古瀬戸か人笠
61	丸皿	-	-	-	-	-	D-ツ 25 瀬戸系遺物 人笠
62	皿 伊予型	-	-	-	-	-	D ツ-22
63	白磁	-	-	-	-	-	D-ツ-25 瀬戸系遺物
64	白磁	-	-	-	-	-	D-ツ-23 瀬戸系遺物
65	白磁不明	-	-	-	鉄種	-	D-ツ-21 瀬戸系遺物 タタラづくりか。
66	白磁	-	-	-	-	-	D-ツ-22
67	土器不明?	-	-	-	-	-	-



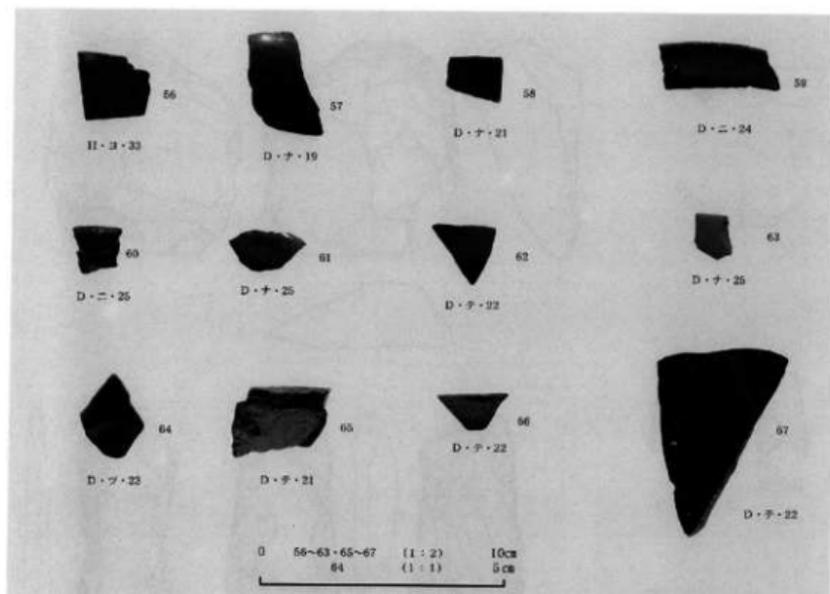
第65図 グリッド出土遺物実測図



第66図 グリッド出土遺物実測図



第67図 グリッド出土遺物実測図



第68回 グリッド出土陶磁器類

⑥ 表採遺物 (第69回)

表採遺物としては陶磁器、須恵器、磨製石鏃、打製石斧、スクレイパーなどがある。

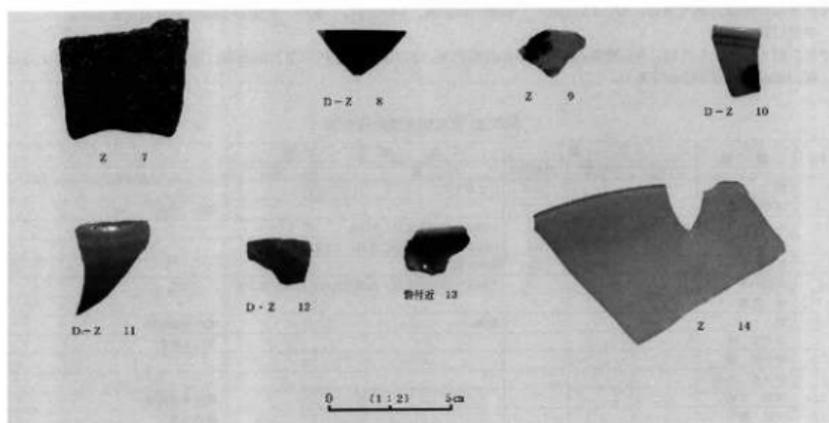
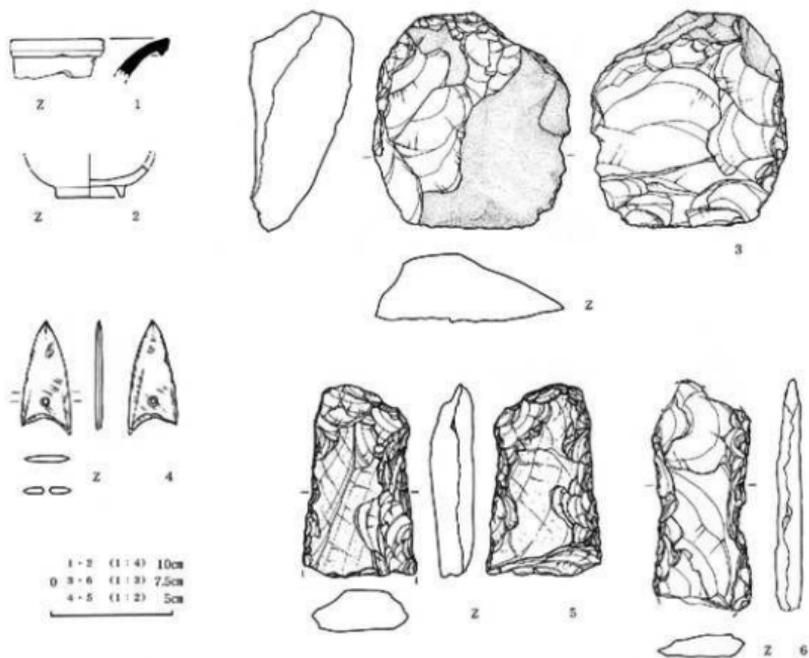
陶磁器は9点あり、2・9～11は伊万里製品の碗で、7は常滑の甕、8は瀬戸・美濃連房製品の碗、12は同じ瀬戸・美濃連房の灰軸丸碗である。他に13の瀬戸・美濃の青磁鉢、14の同じく瀬戸・美濃の上絵付鉢などがある。

中世以前の遺物

中世以前の遺物としては、4の磨製石鏃、5・6の打製石斧、3のスクレイパーなどがある。4の磨製石鏃は長さ約4.5cm・幅2.0cm、厚さ約0.3cmである。

第21表 表採出土遺物観察表

No.	品 種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	甕	—	—	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	
2	伊万里 碗	—	5.9	(3.2)			18c～19c頃
3	スクレイパー	13.4	12.1	6.1	左側に二次加工あり。99.0g		
4	磨製石鏃	(4.5)	2.0	0.3	右側先端欠損。両面に筋あり (2.6) g		
5	打製石斧	12.8	7.0	2.6	刃部欠損。257.3g		
6	打製石斧	(14.2)	(6.0)	(1.5)	上部2ヶ所刃部欠損。両側中央付近に遺し状痕あり。(158) g		
7	甕 常滑						
8	碗				鉄軸		
9	伊万里 碗						瀬戸美濃連房
10	伊万里 碗						足込五弁花
11	伊万里 小碗						
12	灰軸 丸碗						瀬戸美濃連房
13	青磁 鉢						瀬戸美濃
14	上絵付鉢						瀬戸美濃



第69图 表探出土遗物实照图

第 4 節 科学分析

宮田遺跡 I 地点 土坑出土炭化物の同定

古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、後家山遺跡において検出された土坑より出土した中・近世の炭化材18点である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な基本的断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を複製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

コナラ属クスギ節 *Quercusscct.Acgilops* ブナ科

図版1・2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独で、まばらに散在、ないし放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クスギ節に同定される。コナラ属クスギ節にはクスギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

フジ *Wisteria floribunda* D.C. マメ科

図版3

横断面：年輪のはじめに大型で丸い道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部ではごく小型の道管が多量集合して木部柔組織とともに接線方向の帯状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は同性に近い異性放射組織型で、1～8細胞幅である。

以上の形質よりフジに同定される。フジは本州、四国、九州に分布する。つる性の落葉木本である。

5. 所見

後家山遺跡のD 8、D 9、D 12、D 19、D 20号土坑から出土した炭化材は、いずれもコナラ属クヌギ節、D 10土坑から出土した炭化材はフジであった。コナラ属クヌギ節は、温帯下部の暖温帯に分布し、水はけのよい乾燥した台地や丘陵地に生育する落葉広葉樹であり、また二次林要素でもある。フジは本州、四国、九州に分布するつる性の落葉木木で、臨当たりのよい谷沿いなどに生育する。

参考文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48

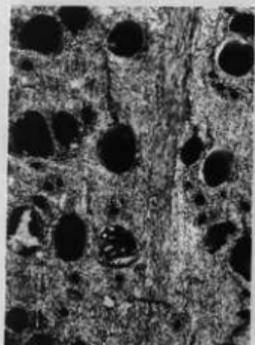
佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100

島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.1、はじめに

表 1 後家山遺跡における樹種同定結果

遺構	No.	結果 (和名/学名)	
D 8号土坑	1	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	2	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	3	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
D 9号土坑	1	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	2	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	3	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
D 10号土坑	1	フジ	<i>Wisteria floribunda</i> D.C.
	2	フジ	<i>Wisteria floribunda</i> D.C.
	3	フジ	<i>Wisteria floribunda</i> D.C.
D 12号土坑	1	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	2	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	3	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
D 19号土坑	1	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	2	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	3	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
D 20号土坑	1	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	2	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
	3	コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>

後家山遺跡の炭化材



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

1. D 8号土坑 No.1 コナラ属クスギ節



横断面 : 0.4mm

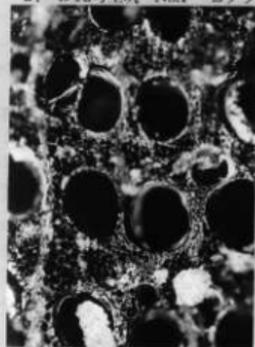


放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

2. D 12号土坑 No.1 コナラ属クスギ節



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

3. D 10号土坑 No.1 フジ

第5節 小 結

今回調査を行った宮田遺跡Ⅰ地点及び宮田遺跡Ⅲ地点は、中世の農業生産的な遺跡であることが考えられる。佐久平における中世集落遺跡の立地は、東五里田遺跡・柳堂遺跡、或いは、筒村A・B遺跡、を始め主に平坦地、或いは、山間地に確認される遺跡がその大半であった。

しかし、今回調査が行われた宮田遺跡Ⅰ地点は谷地地形（谷状地形）に遺跡が展開しており、過去に確認された中世集落址とは立地する地形に大きな違いが看られ、また、検出された遺構においても下記する①、②、③、④の点に注意すべき遺構が観察された。

(1) 《遺 構》

遺構を区画する溝状遺構

① 建物址を区画する溝状遺構（第70図）

2号建物址群は、M11・12及びM32号溝状遺構の3条の溝によって「I」型に区画された中に存在する。

3号建物址群は、M25及びM29号溝状遺構の2条の溝によって「I」型に区画された中に存在する。

4号建物址群

5号建物址群 } はM26・27及びM30号溝状遺構の3条の溝によって「L」型に区画された中に存在する。

6号建物址群

これらの外にM7号溝状遺構が建物址群を区画していると考えられる。本溝状遺構の周辺は近代と考えられる耕作等の著しい削平を受けている様子が窺われ、M7号溝状遺構の内側からは7基のピットが確認されたものの他のピットは削平されていることが考えられた。よって、削平を受けている本周辺の遺構検出状況を鑑みると、この溝の内側には「ピット群」の存在が推察され、本溝状遺構はこれらのピット群（建物址）を囲んでいることが推測された。

② 畝を区画する溝状遺構（第70・71図）

M3・19号溝状遺構と2号畝

本溝状遺構2条は、2号畝を区画していることが考えられる。遺構は宮田遺跡Ⅰ地点のほぼ中央付近に当たり、当地点が最も谷地が狭まっている処である。

M3号溝状遺構は2号畝を囲む東側の溝で、規模は長さ16.6m、幅約96～160cm、深さは12～17cmを測る。一方、M19号溝状遺構は畝を囲む西側の溝で、規模は長さ18.8m、幅約56～120cm、深さは5～14cmを測る。此の2条の溝状遺構によって囲まれるかのように2号畝が存在し、M3・19号溝状遺構は此の畝と同一方向に並走する溝状の遺構である（第71図）。畝は約20cm間隔で33本前後の畝が、南北方向に伸びて構成されており、検出された4箇所の中での最も構成範囲が広いことが認められる。

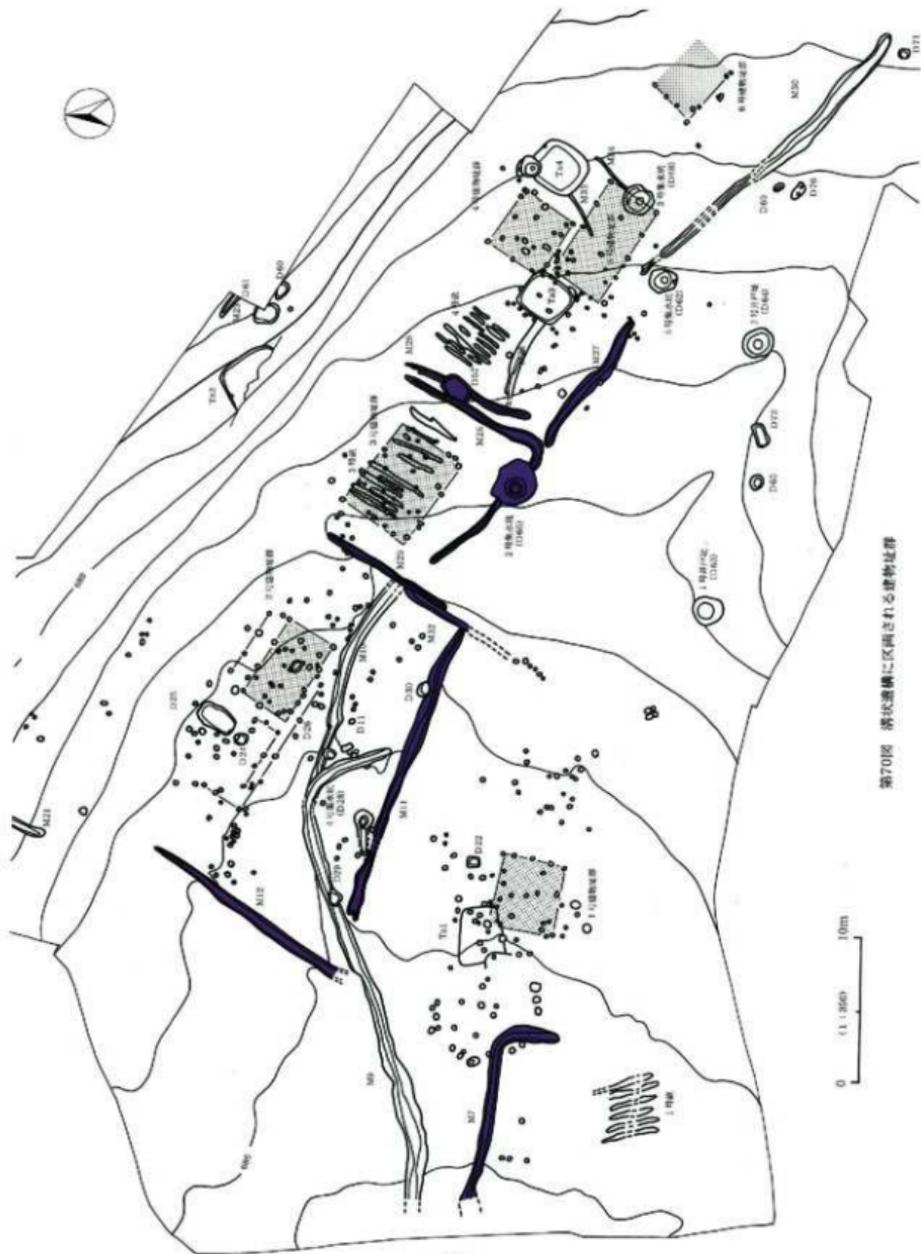
本溝状遺構の時期は、M3・19号溝状遺構とM2号溝状遺構は重複関係にあり、青磁碗が出土したM2号溝状遺構（14C後半～15C前半）による破壊を受けている。よってM3号及びM19号溝状遺構、更に本2条の溝状遺構により区画される2号畝は中世の該期の中でもM2号溝状遺構より若干新しい時期に帰属することが考えられる。

M26・M27号溝状遺構と4号畝（第70図）

本址が確認された位置は、調査区中央からやや北西にあたる地点で調査区全体から見ると、谷の出口付近に当たり、検出された3棟の建物址が集中している位置にあたる。M26・M27号溝状遺構は4号畝、及び4号・5号建物址群、を囲む溝と考えられる。

M26号溝状遺構の規模は、長さは約9.3m、幅約24～48cm前後で、深さは5～10cm前後を測る。M27号溝状遺構の規模は長さ10.5m、幅48～72cmで、深さは7～12cmを測る。このM26・M27号溝状遺構を組合わせた形状は「L状」を呈して延びている様子が窺われ、その内側から4号畝、4号・5号建物址群、などが確認された。こうした検出状況から推し4号畝、及び4号・5号建物址群はM26・M27号溝状遺構に囲まれた内側に共存していた可能性もあり得る。

本溝状遺構の時期はM26・M27号溝状遺構ともに出土遺物がなく正確な時期決定はなされない。しかし、中世と考えられるM25号溝状遺構がD67号上坑を破壊し、本26号溝状址はD67号土坑によって破壊を受けている様子などを鑑みると、M26・M27号溝状遺構は同じ中世の時期の中でも若干古い時間差が認められる。

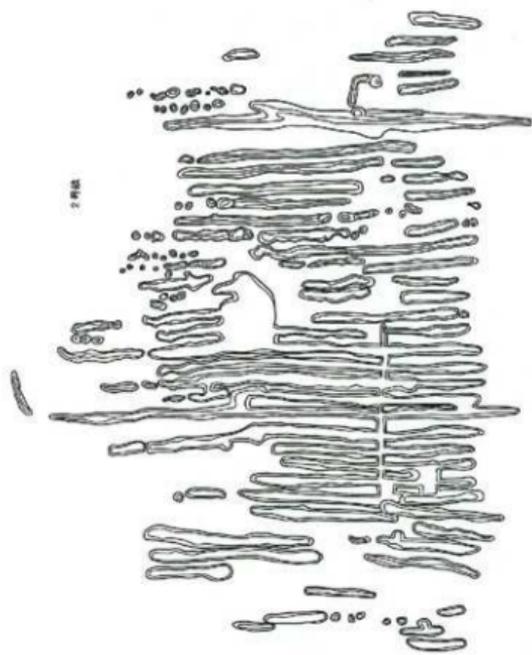


第701区 溝状遺構に区画される建物配置

0 1:1250 10m



M19



M20



M3



第71回 洋状図集に転写される2号紙(墨)

③ 雨水・沢水等を溜めたと考えられる集水的な土坑 5基 (第29図～第33図)

本形態を示す土坑は5基が採取され、調査区Ⅰ地点から4基、調査区Ⅱ地点から1基が検出された。これら5基の遺構には次の1)・2)・3)の3点にいずれも共通する点が窺われる。

- 1) 溝状の遺構と連結すること。(D56=M15、D28=溝状遺構、D66=M25、D68=M34)
- 2) 断面形状は「大きく逆8の字状」に開き、すり鉢状、若しくは、摺ね鉢状を呈すること。
- 3) 礫が混在していること。

こうした点は下記④の「焼土・炭化物が含まれる土坑」、また、第2節(5)で述べた「その他の土坑」40基とは違った形態を示すことが感知された。そして本土坑は、調査時における検出状況、及び、覆土の状態などから「溝」と伴関係をもった遺構であることが推察された。つまり、今回検出された5基の集水坑は、雨水・沢水等を溜めたと考えられる集水的な性格をもった遺構であり、各集水坑と連結される溝状遺構は、遺構に水を集水するため、若しくは、溜まりえた水を排水するための溝であったことが窺われた。

調査区Ⅰ地点から4基	2号集水坑(D66)とM25号溝状遺構	3号集水坑(D68)とM34号溝状遺構
	4号集水坑(D28)と溝状遺構	5号集水坑(D62)
調査区Ⅱ地点から1基	1号集水坑(D56)とM15号溝状遺構	

④ 焼土・炭化物が含まれる土坑 (第34図～第38図)

本形態を示す土坑は26基が採取され、その総てが調査区Ⅰ地点から検出された。この26基は規模的に長軸長が80cm内外と小型のものが20基、一方、長軸長が3m内外と大型のものが6基と2形態に大別でき、大型の土坑の総てからは「焼土と炭化物」が多く含まれて検出された。これらの土坑の分布は谷状の地形が東から西に広がる東端部の周辺から多く確認され、特に大型の土坑はD19・20号土坑のように傾野の急傾斜地、若しくはD9号土坑が確認された若干傾斜が緩くなる谷の始まる地点から検出されている。D19・20号土坑の検出状況は、表上から確認面までの深さが約2mと深く、また、傾斜が緩くなるD9号土坑周辺では、表上から確認面までの深さが約1.5m前後を測り当該地点の確認面は中世遺構が検出された層と同じ泥炭層上部で色調は黒色土であった。こうした検出状況から焼土・炭が含まれる土坑の所産期は中世と考えられ、他の中世遺構と同時期に機能した遺構といえよう。

現代の見方からするとこうした遺構については、「炭を焼いた遺構」として直断し得るかもしれない。しかし、中世における本遺構が、どのような性格を持った遺構であったのかを積極的に窺われる資料を筆者の力が至らざることができなかった。このため本谷地地形に展開した中世の農業生産を営む人々と、本遺構がどのような関わりをもち、また、どのような生産機能がなされた遺構であったのかを窺い知るには至らなかった。

(2) 遺物

出土遺物は陶磁器・土器・土師質土器・石製品・石器・鉄製品などがある。これらの中で時期決定がなされる主な遺物は陶磁器・土器・土師質土器(カワラケ)であり、陶磁器は12世紀後半～近世までの多時期に渡って出土している。また、土鍋・土師質土器は16世紀代であることが窺われる。

陶磁器・土鍋・土師質土器の出土状況は、グリッドからの出土数が最も多く、遺物の約2/3は東から西へ展開する谷地地形の西側にあたる谷の出口付近から検出された。当周辺からは1号及び2号建物址群他の遺構が確認されているが、遺物が多く出土した地点は調査区の最西端付近グリッドつ～ね-13～25からで、建物址群等が確認された位置から北西に隣接した地点である。当周辺からはいずれの遺構も検出されなかったが、この付近は著しく削平されており周辺遺構の検出状況から推し、当該位置の付近には建物址等の遺構の存在が感じられた。グリッドの次に遺物が多く確認された遺構は溝状遺構である。

竪穴状遺構の5棟からは伴件すると思われる遺物は1点もなく、また、建物址及びピット群等の遺構からの出土量も極めて少ない。石器類の遺物は多く、中でも第63図-2のナイフ型石器(旧石器)、更には、第67図-50に示した有尖頭器(縄文時代早期)などの出土遺物から、当宮田遺跡・後家山遺跡或いは東久保遺跡の周辺には当該期の遺構・遺跡が存在している可能性が考えられた。

また、出土した打製石斧は、宮田遺跡Ⅰ地点が展開する谷地の上方(山頂部)に後家山遺跡、及び、東久保遺跡Ⅰ・Ⅱが所在し、両遺跡からは弥生時代中期～後期の住居址が約70棟検出され、打製石斧も多く検出されている。よって、これらの遺跡に関連した遺構からの混入遺物であることが考えられる。

(3) 《遺 跡 の 性 格》

宮田遺跡Ⅰ地点は調査区が谷地地形に添って東西方向に展開する遺跡である(第4図)。検出された遺構は下記の(ア)～(ク)があり、これら各遺構の検出地点を、「谷の出口付近」、「谷の中央付近」、「谷の始まる付近」に大別すると次の通りである。

	谷の出口付近	谷の中央付近	谷の始まる付近
(ア) 竪 穴 状 遺 構 (5棟)	4棟	0	1棟
(イ) 建 物 址 群 (6棟)	6棟	0	0
(ウ) ビ ッ ト 群	密集	0	やや密集
(エ) 井 戸 址 (3基)	2基	0	1基
(オ) 焼土・炭化物が含まれる土坑 (26基)	7基	6基	13基
(カ) 集 水 坑 (4基)	4基	0	0
(キ) 溝 状 遺 構 (14条)	9条	3条	2条
(ク) 竈 (煙) (4基)	3基	1基	0

このことから竪穴状遺構・建物址群・ピット群を始め(エ)～(ク)の検出された遺構の約8割近くが「谷の出口付近」から検出されていることが認められる。また、「谷の中央付近」からは焼土・炭化物が含まれる土坑が6基、竈(煙)1基、溝状遺構が3条(この内の2条は竈を囲む溝状遺構)が確認され、「谷の始まる付近」からは、ピット群・そして焼土・炭化物が含まれる土坑13基が検出された。

こうした遺構の分布、及び、①～④の点を踏まえて宮田遺跡Ⅰ地点を概観すると、先述したように検出された遺構の大半が「谷の出口付近」から確認されている。そして本周辺のエリアから検出された遺構の多くは溝状の遺構によって区画された1号～6号建物址群・竪穴状遺構・ピット群などが集中している外、井戸址・集水坑が認められる。こうした遺構の検出状況及び配置状況から推し及ぶ周辺は人々の居住区であったことが推察される。これに対し、調査区の中央部付近から谷の始まる東側においては遺構が極端に少なくなるものの、当エリアからは、竈(煙)、そして④で述べた焼土・炭化物が含まれる土坑、ピット群が集中して検出され、農耕に関連する生産遺構が集中していることが注目される。また、谷の出口周辺のピット群の大半は溝状の遺構によって区画される1号建物址群～6号建物址群に関連するピット群であるのに対し、一方、「谷が始まる付近」から確認されたピット群は、溝状遺構によって区画されていないことが窺われた。こうしたピット群検出状況の差異、また、周辺遺構の性格などを鑑みると、当ピット群は生産物などを保管するための小規模な要因を持った施設であったことが想定され、居住建物址に関係したピットではないことが窺われた。

つまり、宮田遺跡Ⅰ地点を総て看ると、調査区の谷の出口付近は人々の居住空間が保たれたエリアであるのに対し、中央付近から東側は物を生産するためのエリアであったことが推察された。また、こうしたことを鑑みて調査区Ⅰ地点で確認された4基の集水坑の検出位置を見ると、いずれも居住区のエリア内から検出されており、各建物址に隣接している。こうした検出状況から本址は、日常生活に関連する何らかの施設が、若しくは生産活動に関連する施設であったことが考えられる。因みに佐久市根岸に所在する「標名平遺跡」からも本遺跡で確認された集水坑が3基検出されており、これらの遺構に隣等が含まれ、形状もほぼ同形態を示している。

また、宮田遺跡Ⅲ地点は、谷地に東から西へ展開される宮田遺跡Ⅰ地点の谷を挟んだ西側に所在し、後家山遺跡が展開する山裾が平坦部となり水田地帯に接する地点に位置する。そして、当地点は宮田遺跡Ⅰ地点の谷の出口が本遺跡に接して合流しており、ここから西方には佐久平の穀倉地帯を担う水田が広がり始める箇所でもある。

検出された遺構は孤立柱建物址、溝状遺構、集水坑、土坑、ピット群がある。これら検出された遺構の中でM15号溝状遺構は、調査区を南北に縦断して延びている遺構でグリッドさー18付近で集水坑(D56号)と連結する溝である。

本溝状遺構及び集水坑は、宮田遺跡Ⅰ地点から検出された4基の集水坑、また関連する溝状遺構を含めた中で最も大きな規模を有している。本溝状遺構並びに連結するD56号からは、共に中世と考えられる常滑の甕などが出土している。この2つの遺構は共に関連し、また、共有しながら本遺跡内で中世に営まれた人々の日常生活、若しくは生産活動に関連する施設であったことが考えられる。

さて、宮田遺跡Ⅲ地点から検出された遺構を見ると、宮田遺跡Ⅰ地点から検出された竈(煙)、及び、焼土・炭を伴った土坑は1基も確認されておらず、当調査区内からは畑作農耕に関連する遺構が検出されなかった。

こうした本エリア内の遺構検出状況、また、宮田遺跡Ⅰで記した①～④の点を総て今回調査が行われた宮田遺跡を看ると、谷地地形の谷の出口周辺に居住区を構えた中世農耕集落の様子が見てとれる。谷の中央部から上方にお

いては②、④に記した農耕に関連する生産遺構が認められ、当谷の狭まる付近では畑作を中心とする生産が営まれたことが窺われる。そして、一方宮田遺跡Ⅲの水田面に接する平坦部の地においては、先述したように畝（畑）、植土・炭を伴う遺構等の畑作農耕に関連すると思われる遺構が確認されなかったことなどを踏まえて看ると、当調査区の周辺においては、現在の水田の基となる水田耕作が営まれたエリアであったことが推察される。従って、この谷地の出口付近に居住した中世農耕集落の人々は、畑作と水田を共に営んでいたことが考えられる。因みに、宮田遺跡Ⅰ地点の西端部から西側は調査区外となり、現在藪合となっている。この谷の出口付近からは6棟の建物址群・溝状遺構他が検出され遺構密度の高い箇所であった。よってこの下には谷の出口に連続する建物址群、或いは、中世水田址の存在が推測されよう。

参考文献

- | | | |
|---------------|------|---|
| 財団法人かながわ考古学財団 | 1997 | 「かながわ考古学財団調査報告 19」
(『宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ 表の屋敷(No8)遺跡』) |
| 浅川滋男 箱崎和久 | 2001 | 奈良国立文化財研究所シンポジウム(『埋もれた中近世の住まい』) |
| 小野 正 敏 | 2001 | 『図解・日本の中世遺跡』 |
| 江戸遺跡研究会 | 2001 | 『図解 江戸考古学研究事典』 |
| 国立歴史民俗博物館 | 1998 | 『陶磁器の文化史』 |
| 佐久市教育委員会 | 2001 | 『佐久市埋蔵文化財調査報告書第84集』(『橋名平遺跡』) |
| 佐久市教育委員会 | 2004 | 『佐久市埋蔵文化財調査報告書第117集』(『東五里田遺跡』) |
| 佐久市教育委員会 | 1994 | 『佐久市埋蔵文化財調査報告書第29集』(『筒村遺跡B』) |
| 佐久市教育委員会 | 1994 | 『佐久市埋蔵文化財調査報告書第31集』(『筒村遺跡A』) |



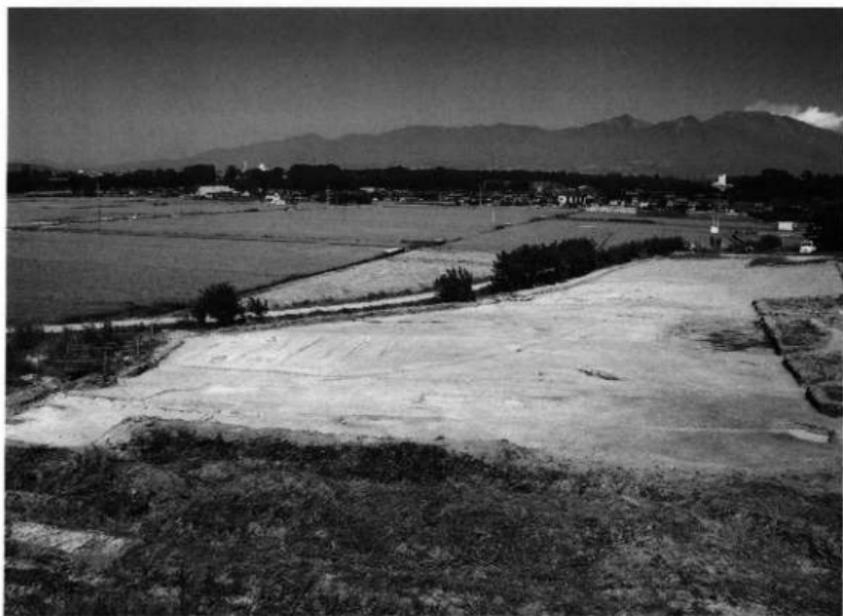
1 宮田遺跡 I 航空写真



2 宮田遺跡 I 本遺跡は丘陵に挟まれた谷地形に展開する。



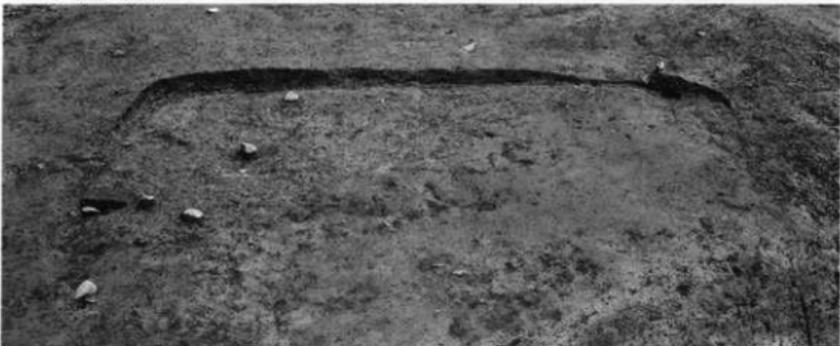
1 宮田遺跡Ⅰ 調査区近景 谷地地形の出口付近からは水田地帯が広がる。



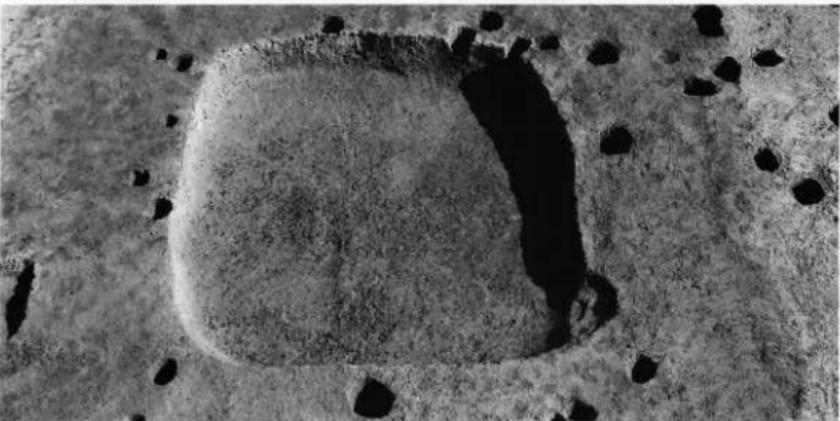
2 宮田遺跡Ⅲ 調査区近景 本遺跡の西側には水田地帯が広がる。



1 Ta1号竖穴状遗構



2 Ta2号竖穴状遺構



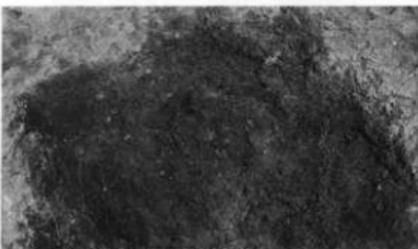
3 Ta3号竖穴状遺構



1 Ta4号竪穴状遺構



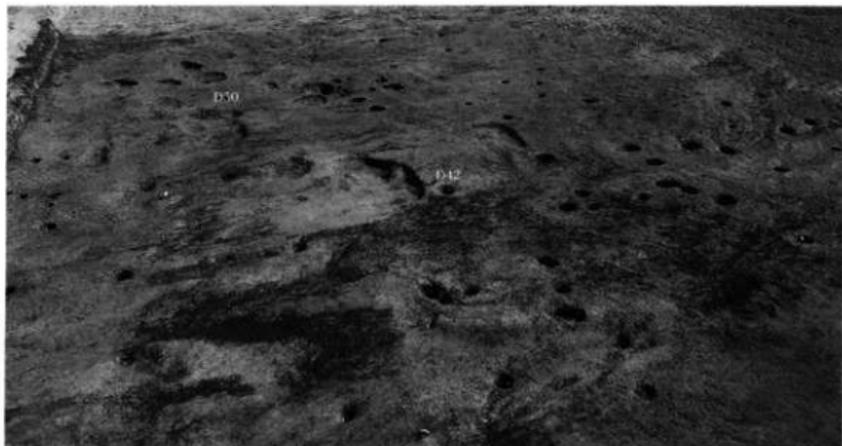
2 Ta5号竪穴状遺構



3 Ta5号竪穴状遺構焼土痕検出状況



4 M20号溝址調査スナップ



1 F1号堀立柱建物址・ピット群



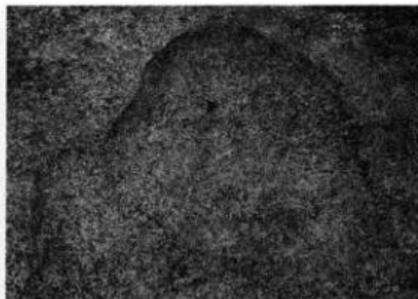
2 F2号堀立柱建物址



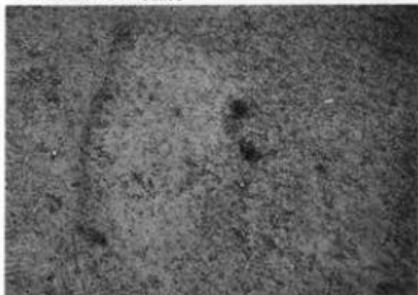
3 F2号堀立柱建物址 各ピットには礎石が配されている。



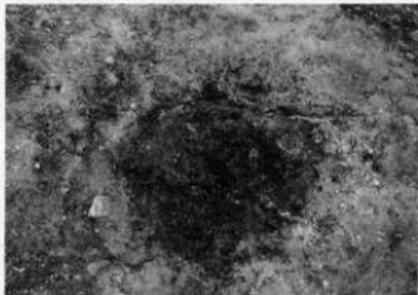
1 D1·D2·D3号土坑



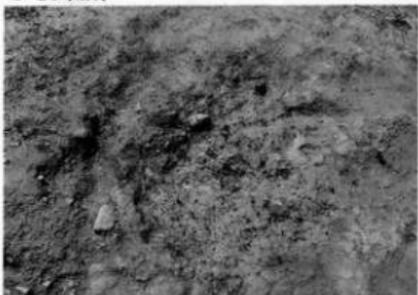
2 D4号土坑



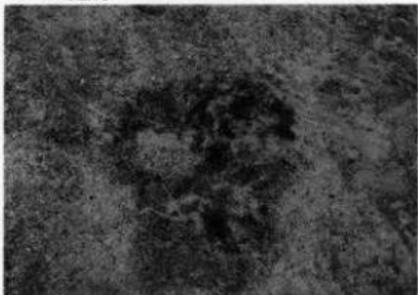
3 D5号土坑



4 D6号土坑



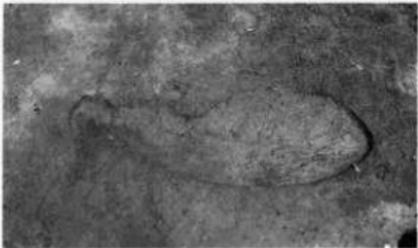
5 D6号土坑



6 D7号土坑



7 D7号土坑



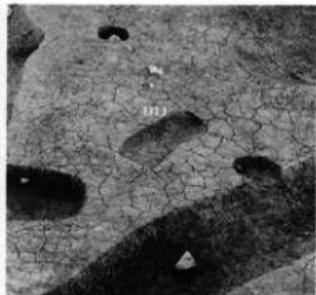
8 D8号土坑



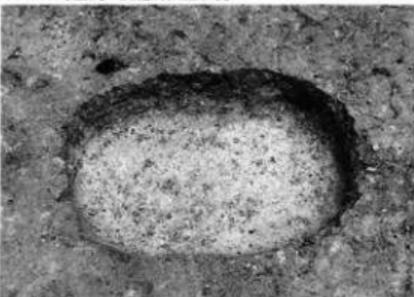
1 D9号土坑



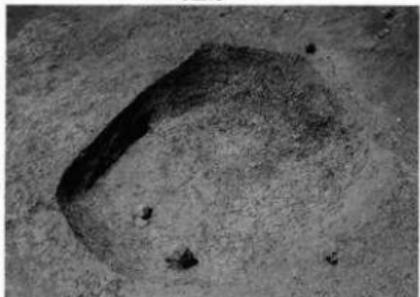
2 D9号土坑 炭化材出土状况



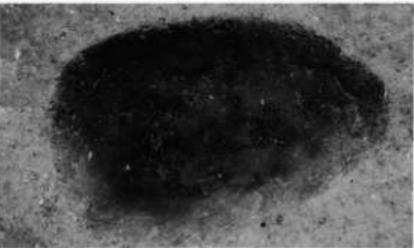
3 D11号土坑



4 D12号土坑



5 D13号土坑



6 D14号土坑



7 D16号土坑



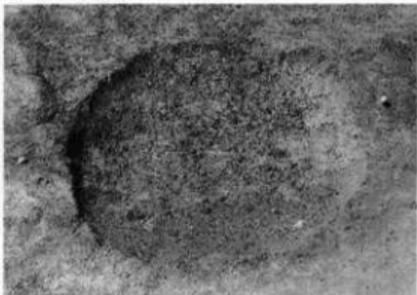
1 D17号土坑



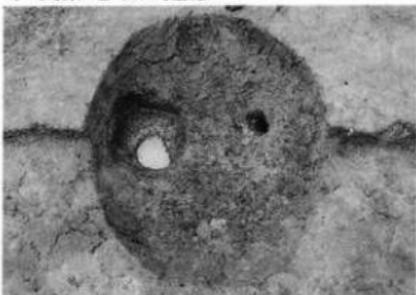
2 D18号土坑



3 3号井尸址 (D21号土坑)



4 D22号土坑



5 D23号土坑



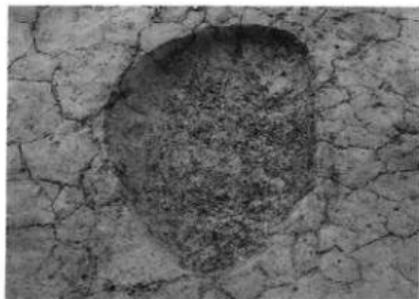
6 D24号土坑



7 D25号土坑



8 D26号土坑



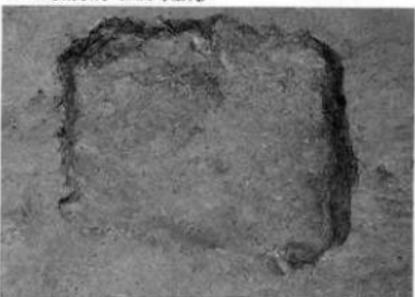
1 D27号土坑



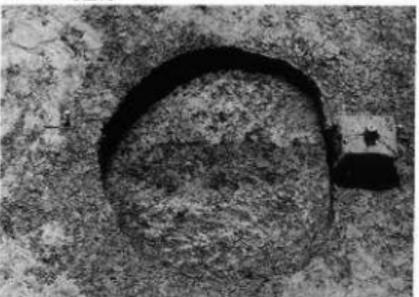
2 4号集水坑 (D28号土坑)



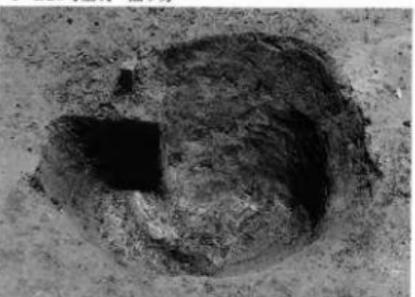
3 D29号土坑



4 D29号土坑 掘り方



5 D30号土坑



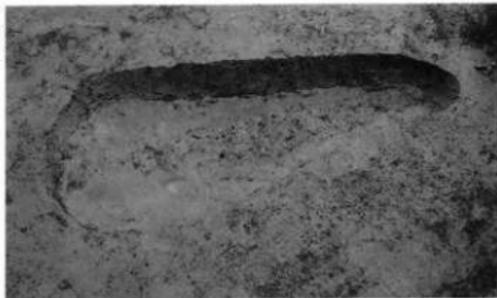
6 D31号土坑



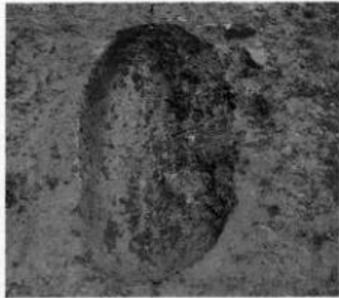
7 D32号土坑



8 D32号土坑 掘り方



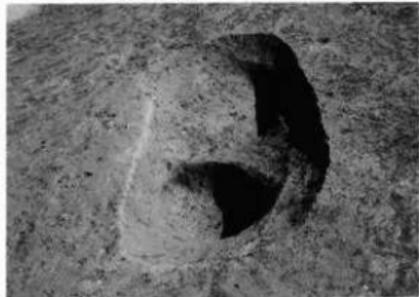
1 D33号土坑



2 D34号土坑



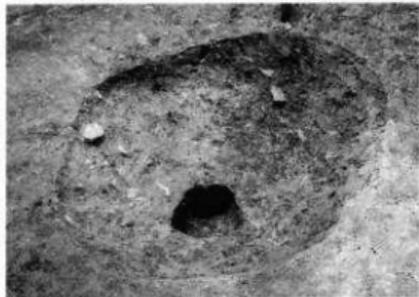
3 D35号土坑



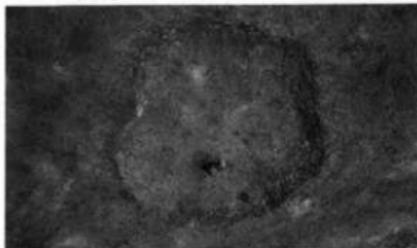
4 D36号土坑



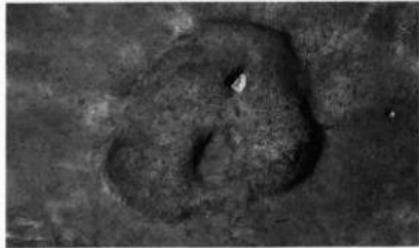
5 D37号土坑



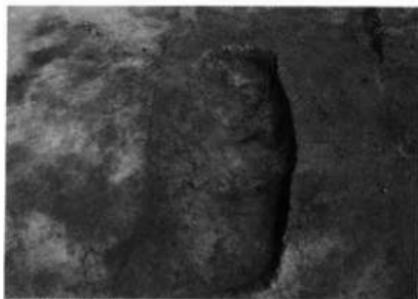
6 D38号土坑



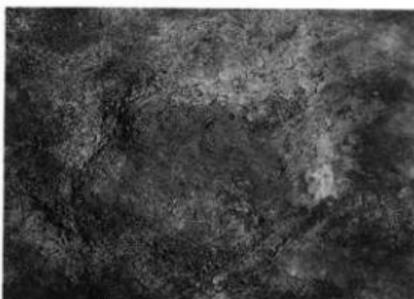
7 D39号土坑



8 D40号土坑



1 D41号土坑



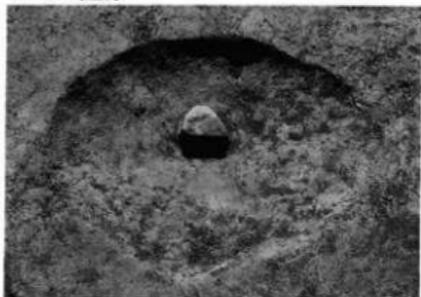
2 D43号土坑



3 D44号土坑



4 D45号土坑



5 D46号土坑



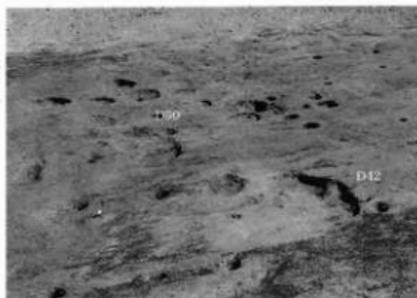
6 D47号土坑



7 D48号土坑



8 D49号土坑



1 D42・D50号土坑



2 D51号土坑



3 D52号土坑



4 D53号土坑



5 D54号土坑



6 D55号土坑



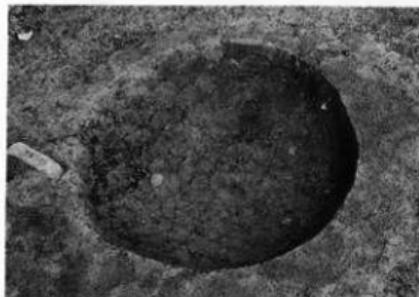
7 M5号村近調査スナップ



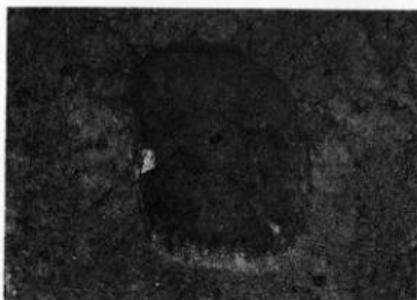
1 1号集水坑 (D56号土坑)



2 1号集水坑 (D56号土坑) 掘り方



3 D57号土坑



4 D58号土坑



5 D58・D59号土坑



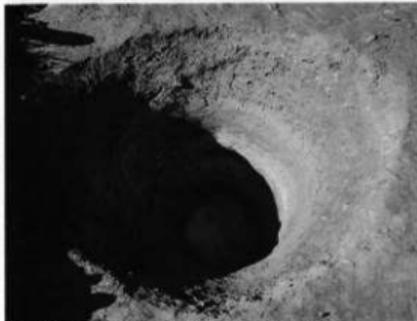
1 5号集水坑 (D62号土坑)



2 1号井戸址 (D63号土坑)



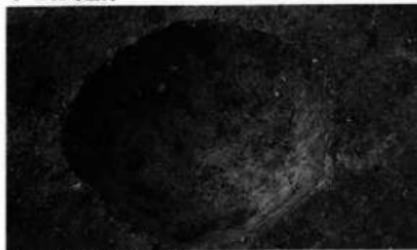
3 2号井戸址 (D64号土坑)



4 2号井戸址 (D64号土坑) 遺物出土状況



5 D65号土坑



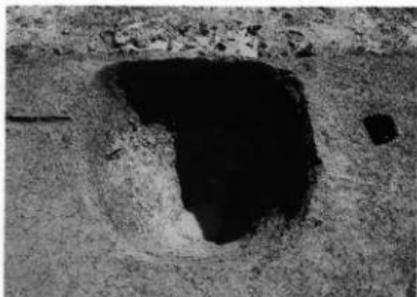
6 D66号土坑 掘り方



7 2号集水坑 (D66号土坑)



1 D67号土坑



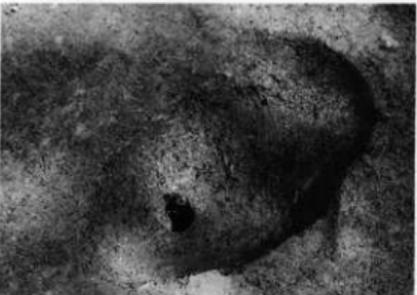
2 3号集水坑 (D68号土坑)



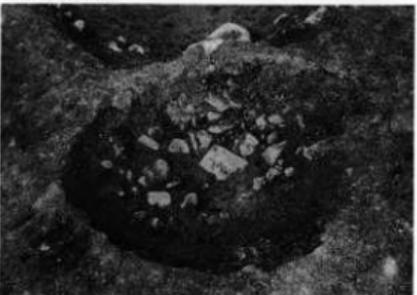
3 D69号土坑



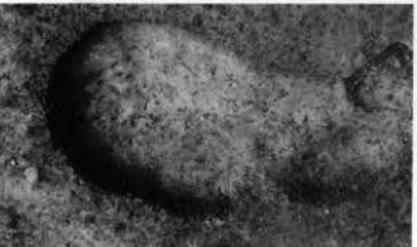
4 D70号土坑



5 D70号土坑



6 D71号土坑



7 D72号土坑



8 D73号土坑



1 1号龕



2 2号龕



1 3号墩



2 4号墩



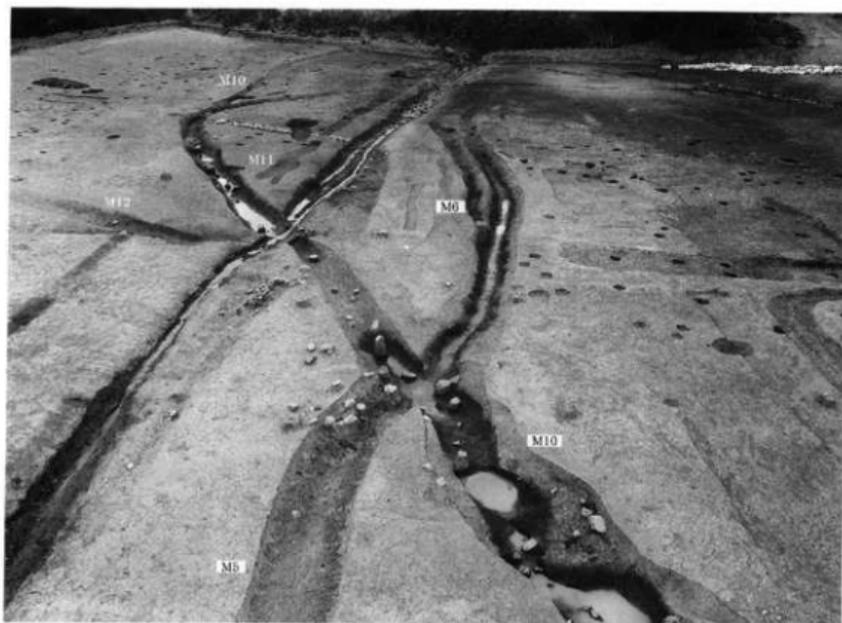
1 M1号溝状遺構



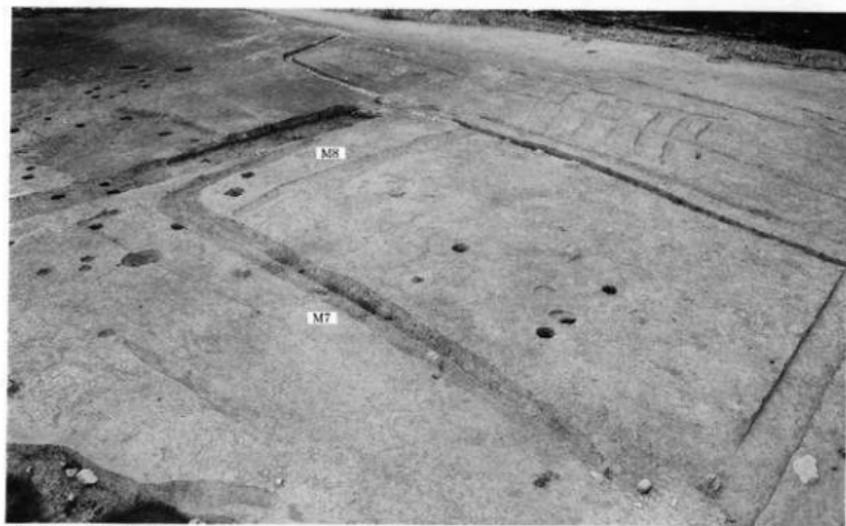
2 M3号溝状遺構



3 M2号・M4号溝状遺構



1 M5・6・9・10・11・12号溝状遺構



2 M7・8号溝状遺構



1 M7号满状遗物出土状况



2 M13号满状遗槽



3 M13号满状遗槽



4 M14号满状遗槽



5 M15号满状遗槽



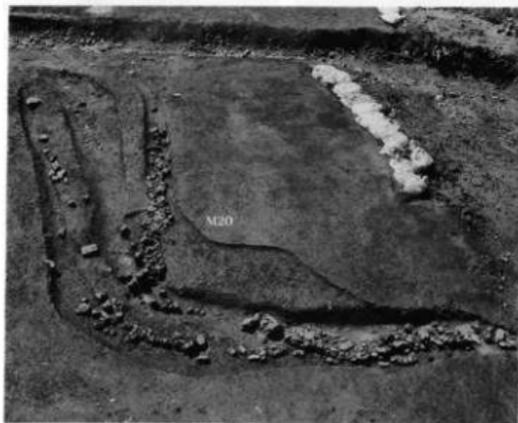
1 M15·16·17号溝状遺構



2 M19号溝状遺構



3 M15·18号溝状遺構



4 M20号溝状遺構



5 M20号溝状遺構遺物出土状況



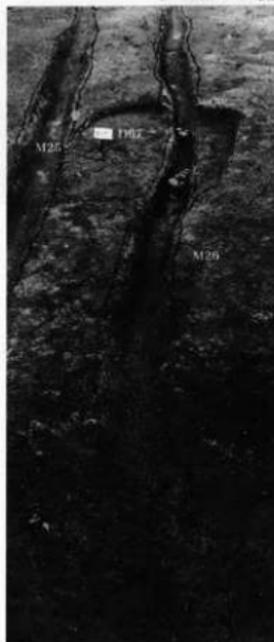
1 M21·22号沟状遗槽



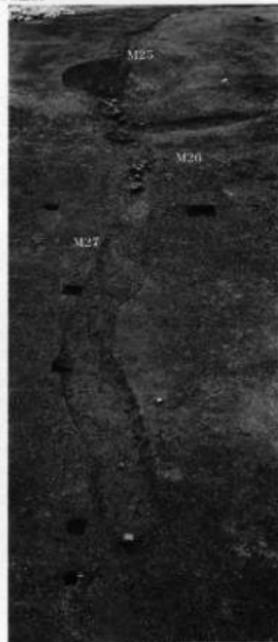
2 M20·24号沟状遗槽



3 M25号沟状遗槽



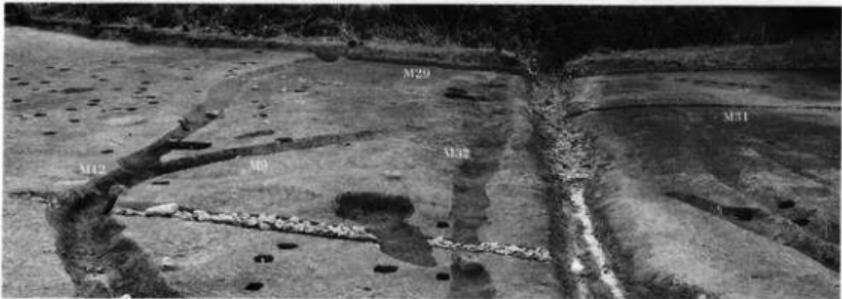
4 M25·26号沟状遗槽



5 M25·26·27号沟状遗槽



1 M28号溝状遺構



2 M29・31・32号溝状遺構



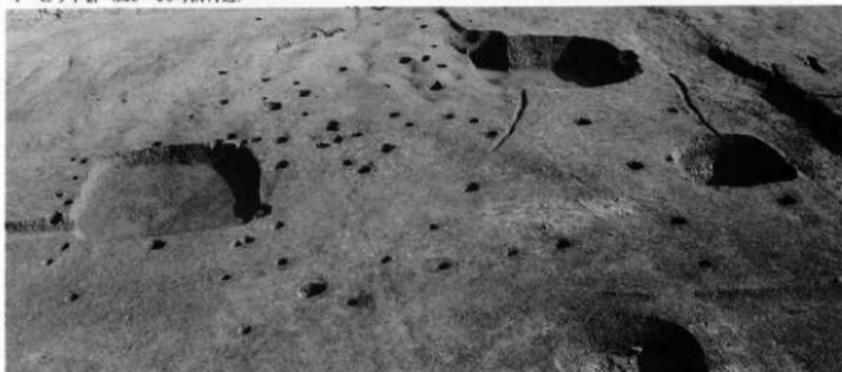
3 M33・34号溝状遺構



4 M30号溝状遺構



1 ビット群 (M9・10号溝付近)



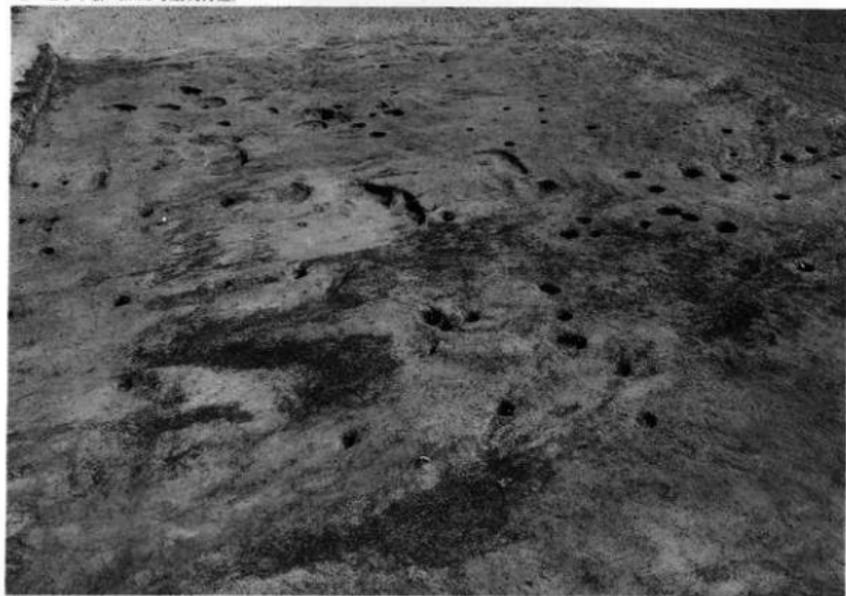
2 ビット群 (Ta3・4号竪穴状遺構付近)



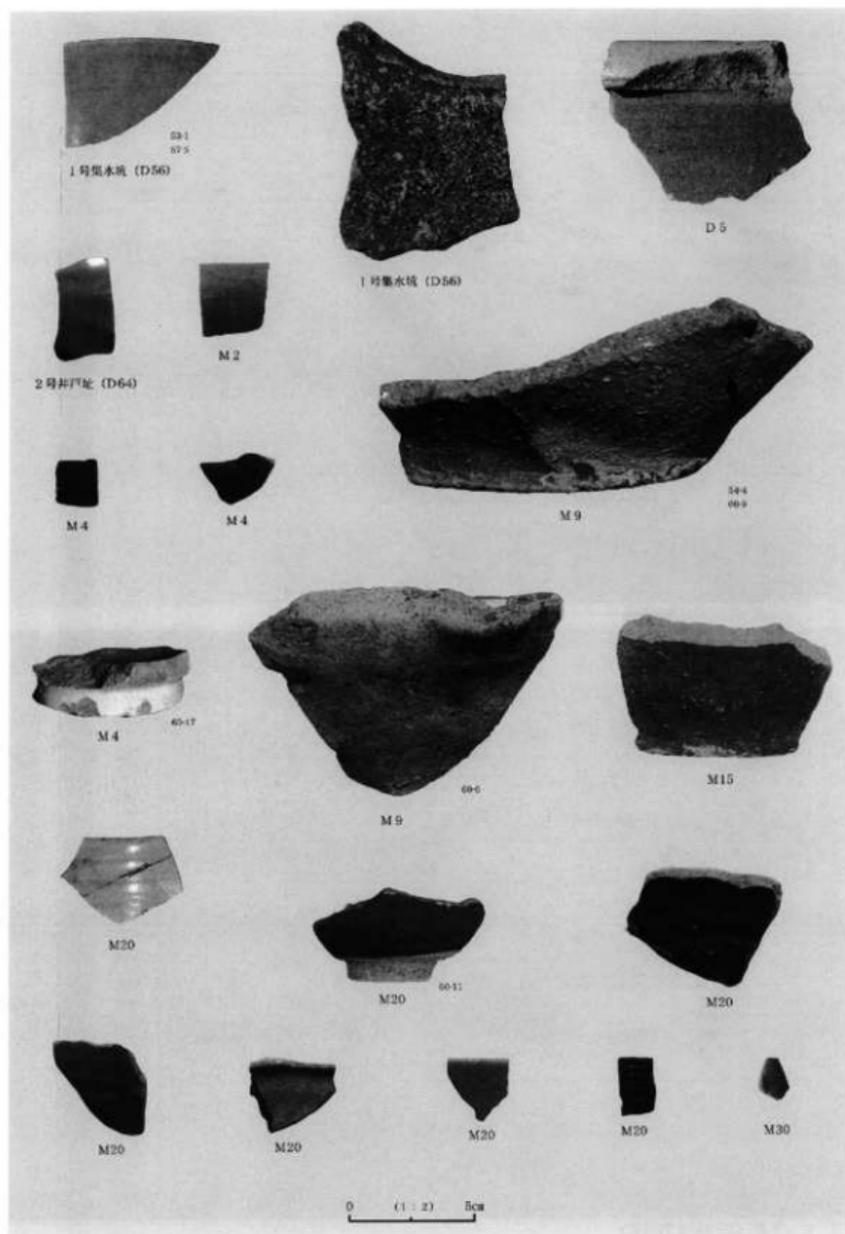
3 ビット群 (M2号溝址付近)



1 ピット群 (D10号土坑付道)



2 ピット群 (D10号土坑付道)





D-ア 22



D-チ 23 246



D-チ 21



D-チ 22



D-ナ 26



D-ナ 22



D-ナ 21



D-ナ 19



D-フ 23



D-ニ 24



D-ニ 25



D-ナ 25



H-III 23



D-一 既



D-一 既



D-一 既



D-一 既



D-一 既



Z



Z

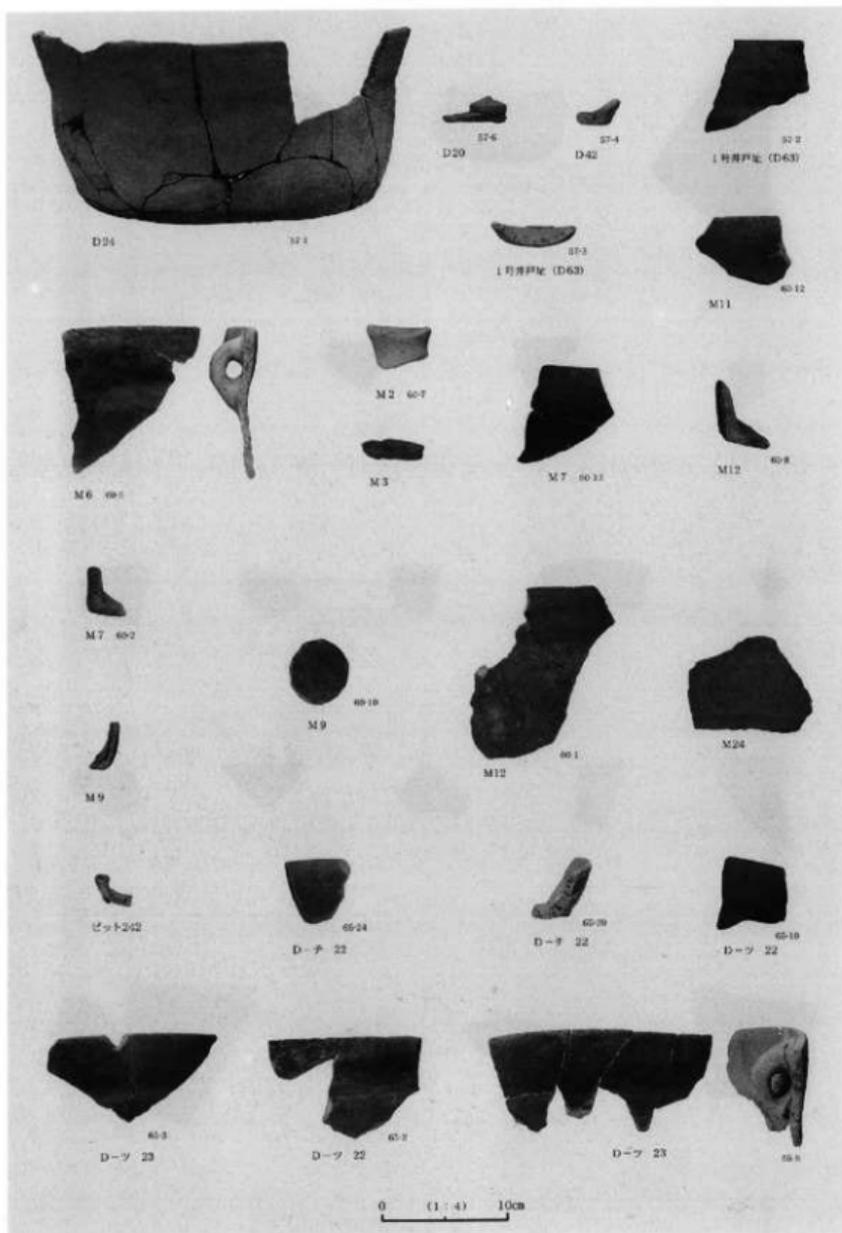


Z



Z

0 (1:2) 5cm





65-1
D-ア 23



65-7
D-ナ 23



D-テ 21



65-17
D-ナ 22



65-14
D-ニ 24



65-5
D-ト 22



65-12
D-ナ 26



65-16
D-ナ 23



65-8
D-ス 25



65-18
H-モ 36



D-ナ 28



65-13
D-ナ 26



D-Z



64-2
ビット72



65-15
D-Z



65-11
D-Z



65-26
D-Z



65-15
D-ナ 30



M24 65-18



65-11
M24



Z 69-1



65-23
D-ナ 21

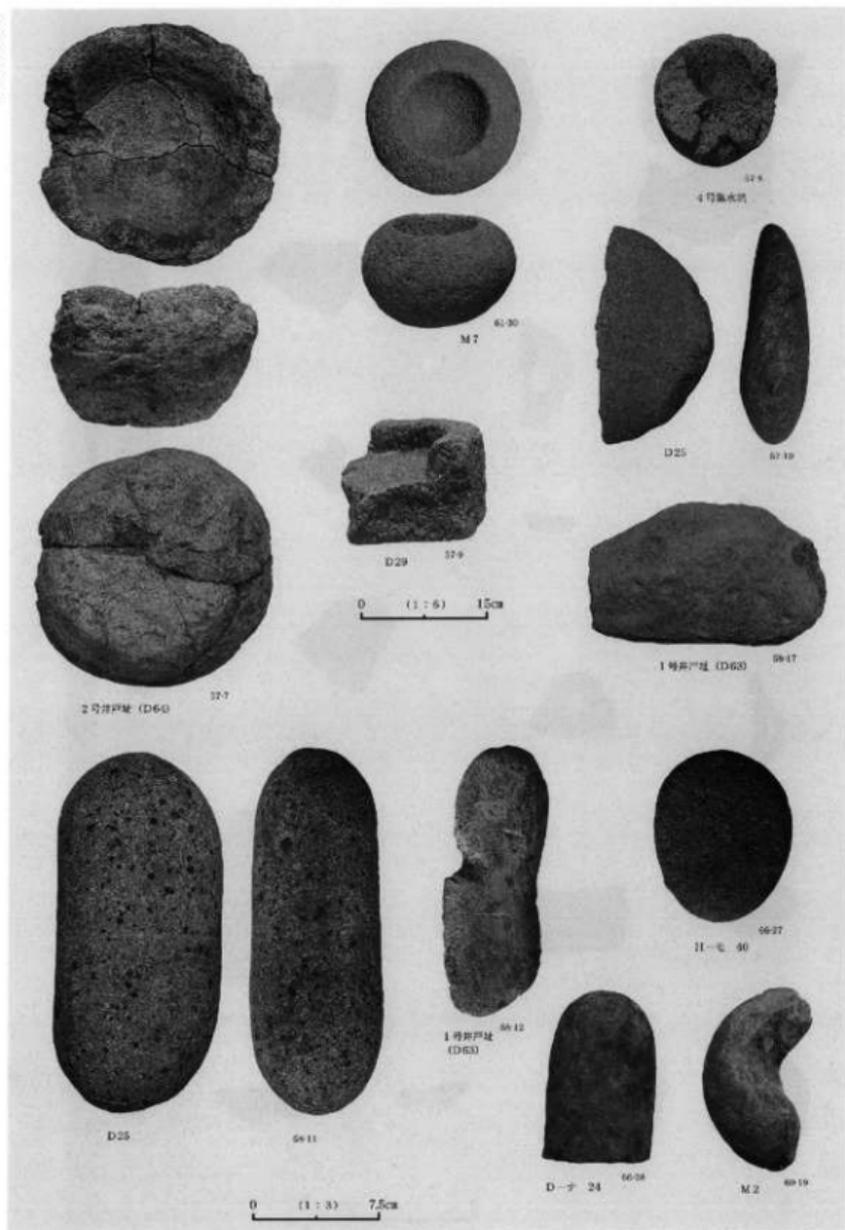


D-ス 30



65-25
D-ス 30

0 (1/4) 100μ





D29
29-15



D42
59-13



D48
58-18



D55
58-14



M3
61-21



M3
61-27



M7
61-35



M9



61-26



D-ナ 26



66-28



D-ニ 25
66-37

0 (1:3) 7.5cm



D-ナ 22
66-21



H-ヤ 40
66-36

0 (1:1) 2.5cm



Tn4



681



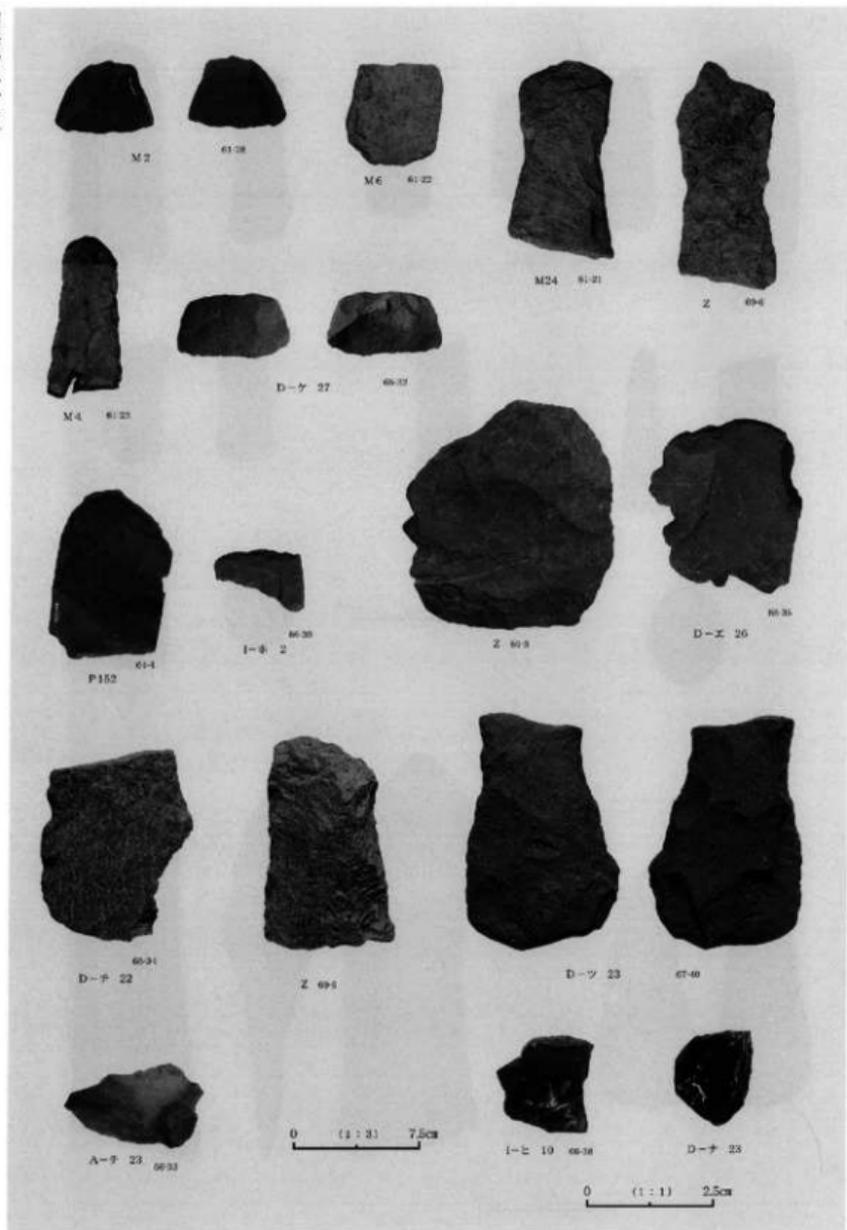
M7

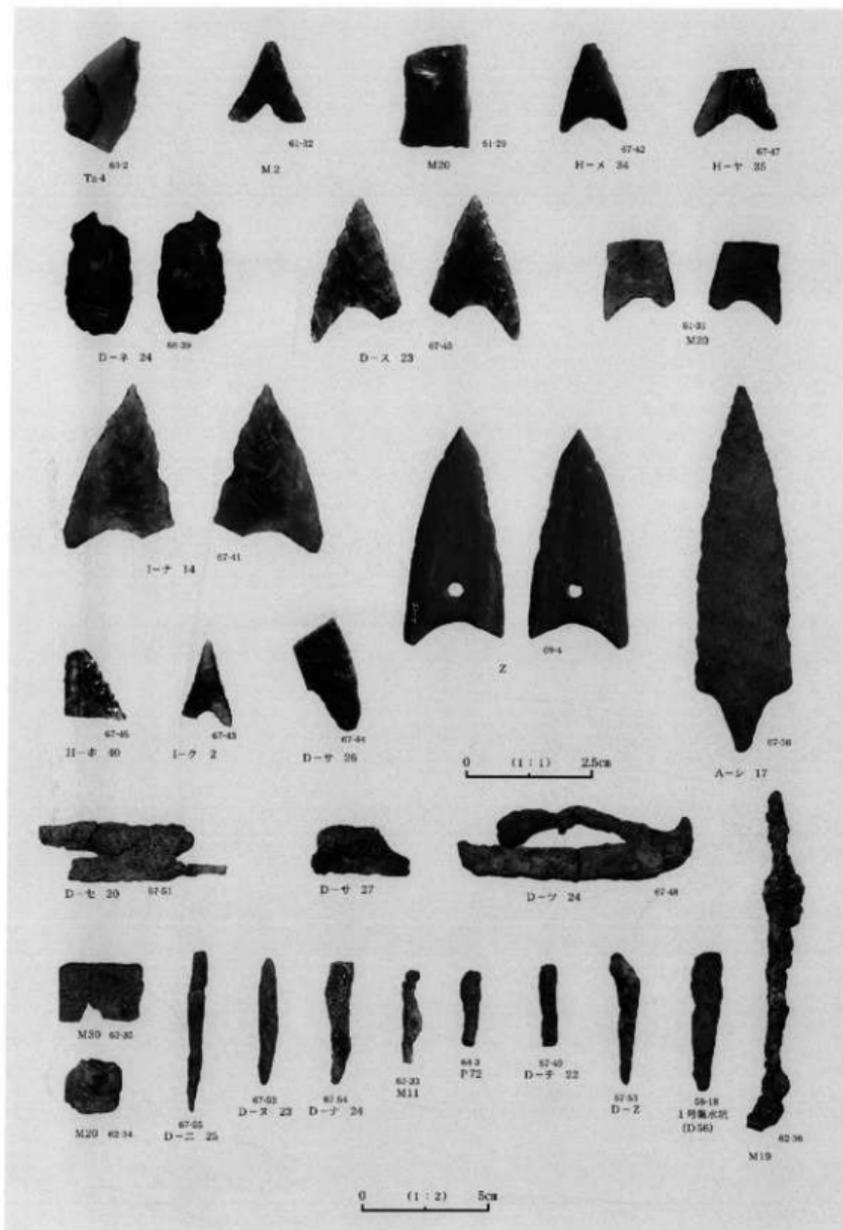


61-20



0 (1:3) 7.5cm





論 攷

第七章 考察

1. 佐久市出土のガラス玉材質分析

— 弥生時代後期から7世紀後半までのガラス玉類の材質分析 —

小泉 好延 (武蔵野文化財修復研究所)

1. はじめに

佐久市の弥生時代から古墳時代、7世紀後半までの17遺跡から出土したガラス玉類、94資料、約100点の材質分析を行い、その結果から基礎ガラスの種類、着色剤を考察した。筆者を含め従来のガラス試料分析は、一つの遺跡から出土したガラスについて行われ、それらのデータを繋ぎ合わせ、東日本、近畿、北九州周辺などの時代変遷を考察してきた。筆者も対馬における弥生時代後半の複数遺跡から出土したガラス玉の分析を除いて、同一地域における複数遺跡の試料を分析する機会は無であった。本試料の分析がきわめて重要な意義をもっている理由は、同一地域の17遺跡という多数の遺跡試料であること、更に、遺跡時期が弥生時代から7世紀後半までに及んでいることにある。同一地域における基礎ガラス材質や着色技術の変化、あるいは変化せず同一技術が継承されている様子などが解明できることとなる。その結果は東日本各地の遺跡から出土する試料の基本データとなり、また、これまでの各地の遺跡試料から得られた、基礎ガラス材質の変遷、あるいは着色剤の種類についての検証データとなる。

出土した大部分のガラスは小玉で色調が青、緑、紺系統である。5世紀後半の住居址や6世紀、7世紀初頭の円墳からは黄、黒色ガラスや色調が全く異なる二層のガラスも出土している。この時期になると黄色ガラス玉は各地で出土し、データも少なくないが、二層ガラス玉は極めて少なく貴重な知見となる。また、小玉ではなく棒状片の緑色ガラスが弥生時代の遺跡から出土した。住居址包含層から出土していることから、年代の同定と用途について検討余地があるが、東日本では事例の少ない試料である。なお、本分析はすべて非破壊法で分析を行っているので、ガラス資料の損耗はない。後家山遺跡出土のガラス玉については、本書の別稿で詳細に報告するので、参照して頂きたい。一部の資料については、既に「佐久市文化財 年報11」に掲載していることを付言する。

2. 分析方法と試料の前処理

PIXE分析法を用いた。この方法は非破壊分析法である。PIXEの分析法、前処理は別稿の後家山遺跡出土のガラス玉分析報告で詳述した通りである。

PIXE分析条件も同報告に記載した通り、加速器による照射エネルギーと粒子は3MeVのプロトン、照射ビーム径は0.5mm、照射電流値は0.5~1 nanoアンペア(nA)、照射電荷量200~1000 nanoクーロン(nC)である。X線検出器は高純度Si半導体検出器とCZT半導体検出器の両者を同時に使用し、特性X線のエネルギースペクトル(PIXEスペクトル)解析から定量を行った。

3. 分析結果

分析の結果、得られたPIXEスペクトルを高純度Si半導体検出器のスペクトル、CZT半導体検出器の図を例示した。また、定量結果はガラス分析表面が不定形のためNa(ナトリウム)~Pb(鉛)までを分析し、それらの合計を100パーセントとし重量パーセント(wt%)で示したものである。分析結果の定量値と高査で定量できない試料の参考値を表に示す。

分析したガラス玉、特殊な二層ガラス玉、棒状ガラス片試料は約100資料であるが、後家山遺跡の分析は別稿で報告しているので、本稿では16遺跡のガラス81資料の分析結果を表にした。出土ガラス類の遺跡年代区分と遺構は、弥生時代後期住居址、同後期円形周溝墓、弥生末から古墳前期の住居址、方形墳、前方後方墳と6世紀後半の円墳横穴式石室、7世紀初頭の円墳横穴式石室である。ガラス遺物の形状は大部分が3~10ミリメートルの小玉、丸玉類であるが、出土例が極めて少ない内層と外層の異なる色調と材質を有する二層玉と棒状ガラス片も存在する。色調は多彩で、弥生時代から通常出土する紺、青色系統ガラスに加え、5世紀後半の住居址や6世紀、7世紀初頭の円墳からは黄、黒色、薄い透明な茶黄、白色などである。

4. 考察

17遺跡から出土したガラスの材質分析の結果について考察を行った。なお、後家山遺跡出土試料については別稿で詳述するので、その報告を参照して頂きたい。

4-1. 弥生時代後半と弥生末、古墳時代前期の遺跡から出土した資料

○ 周防畑遺跡B、弥生時代後期、13試料 青色10試料、紺色3試料

青、紺色のガラスは主成分 SiO_2 （酸化珪素）が80wt%前後、 Na_2O （酸化ナトリウム）が0.3～1.3wt%と低く、 K_2O （酸化カリウム）3～9.6wt%である。 K_2O 濃度がやや低い試料もあるが、基礎ガラスはカリ石灰ガラスである。着色剤は微量された0.44～2.1wt%濃度から青色がCu、紺色がMn（マンガン）、Fe（鉄）、Co（コバルト）である。PbO（酸化鉛）は紺色試料には検出限界値以下であるが、青色ガラス試料に含まれている。CuOと強い相関（相関係数0.89）があることから、Cu原料に含まれたものである。

○ 五里山遺跡、弥生時代後期、3試料 青色試料

ガラスは主成分 SiO_2 が80wt%前後、 Na_2O が0.5～1.1wt%と低く、 K_2O が5.0～10.0wt%である。 K_2O 濃度がやや低い試料もあるが、基礎ガラスは周防畑B遺跡の試料と同じくカリ石灰ガラスである。着色剤はCuである。

○ 竹田峯遺跡 弥生時代後期 2試料 紺色試料

ガラスは主成分 SiO_2 が80wt%前後、 Na_2O が0.4～0.5wt%と低く、 K_2O が9.4～10.5wt%である。カリ石灰ガラスである。着色剤はMn、Fe、微量のCoである。Cuは検出限界値以下、あるいは0.02wt%と微量である。

○ 後家山遺跡 弥生時代後期 15試料 青色12試料 青緑色3試料

本ガラス試料の基礎ガラスは主成分 SiO_2 が80wt%前後、 K_2O が6～11wt%のカリ石灰ガラスであり、着色剤はCuである。詳細は本報告書の別稿「後家山遺跡出土のガラス玉分析」を参照していただきたい。

○ 直路遺跡II 弥生後期 1試料 青色試料

基礎ガラスはカリ石灰ガラス、着色剤はCuである。各成分は周防畑B遺跡、五里山遺跡出土の青色試料と同様な成分濃度である。

○ 下壱端遺跡II Y住居址 弥生時代後期 1試料 透過光で濃青色、反射光で紺紺色

基礎ガラスは Na_2O が4.2wt%とやや高く、 K_2O 濃度が低いことからソーダ石灰ガラスである。着色剤はMn、Fe、Co、Cuである。東日本の弥生時代後期の遺跡出土としては、基礎ガラスがソーダ石灰ガラスの事例は少ない。

○ 松ノ木遺跡 弥生末～古墳時代前期 1試料 青色試料

基礎ガラスはカリ石灰ガラス、着色剤はCuである。各成分は周防畑B遺跡、五里山遺跡、直路遺跡II出土の青色試料と同様な成分濃度である。

○ 瀬の峯古墳群2号墳 弥生末～古墳時代前期 1試料 青色試料

基礎ガラスはカリ石灰ガラス、着色剤はCuである。各成分は周防畑B遺跡、五里山遺跡、直路遺跡II、松ノ木遺跡出土の青色試料と同様な成分濃度である。

○ 根々井大塚古墳 弥生末～古墳時代前期 5試料 青色2試料、紺色3試料

基礎ガラスは5試料ともカリ石灰ガラスである。青色試料の着色剤は2.3～2.4wt%と濃度の高いCuである。紺色試料の着色剤は、Mn、Fe、微量のCoである。基礎ガラスは周防畑B遺跡、五里山遺跡、竹田峯遺跡、直路遺跡II、松ノ木遺跡、瀬の峯古墳群2号墳出土試料と同様であり、紺色の着色成分は竹田峯遺跡出土の紺色試料とほぼ同様である。

○ 藤塚古墳群4号墳 古墳時代前期 2試料 青色試料

基礎ガラスは Na_2O が8.3～11wt%高く、 K_2O 濃度が低いことからソーダ石灰ガラスである。青色の着色剤はCuである。基礎ガラスがソーダ石灰ガラスであるガラス資料が東日本の弥生後期～古墳時代前期の遺跡から出土する事例は下壱端遺跡IIと同じく少ない。

4-2. 5世紀後半から7世紀後半の遺跡から出土した資料

○ 下壱端遺跡II H住居址 5世紀後半 3試料 青色2試料、黒色1試料

基礎ガラスは青色1試料がソーダ石灰ガラス、青色2試料がカリ石灰ガラスである。黒色玉は Al_2O_3 15wt%、 Cu_2O 3.4wt%、 Fe_2O_3 9.1wt%と異常に高く、 SiO_2 が35.7wt%ときわめて低い濃度である。試料が不透明なこと、各成分濃度からガラスでは無くこれらの成分の原料を焼結した玉と思われる。

○ 久瀬遺跡 6世紀後半 1試料 青色試料

基礎ガラスはカリ石灰ガラスである。着色剤はCuである。

○ 家地頭1号墳 6世紀後半 11試料 青、紺、紺青、黒、緑色玉試料、切子ガラス、金鳳丸玉

青、紺、紺青色の基礎ガラスはソーダ石灰ガラスである。着色剤は青色がCu、紺色がMn、Fe、微量Co、Cuである。紺青色は紺色と同様であるが、Mn濃度が低い。黒色ガラスの基礎ガラスは Na_2O 、 K_2O 濃度が低く、 Al_2O_3 20～27wt%、 Fe_2O_3 8～13wt%と極めの高濃度であり、ソーダ石灰、カリ石灰ガラスなどのアルカリ石灰ガラスには分類できない。高濃度の Al_2O_3 、 Fe_2O_3 の存在のため黒色となっているのであろう。下壱端遺跡II H住居址出土のガラスと思われる。

ない黒色玉と類似している成分もあるが、本遺跡出土の黒色玉はガラス玉である。

緑色丸玉は表面が腐蝕と埋藏環境による成分変化で白濁化が著しく、定性分析もできなかった。切子ガラスは水晶である。内孔に固着した赤い粉末成分は水銀が無く鉄の濃度が高いことから弁柄である。表面黒色の丸玉は金属製であるが、確認のため表面のさび部を採取し分析した。銅、鉛、亜鉛が検出され青銅あるいは真鍮金属である。後世の遺物が混入したと思われる。

○ 蛇塚古墳1号墳 7世紀初頭 25試料 色調は以下のように多彩な小玉、二層の玉

青色5、紺色5、緑色1、薄い黄緑3、黄色7、黒1試料、二層ガラス玉（外層、薄い茶黄色、内層、白色）

3試料・青色、緑色、薄い黄緑色試料の基礎ガラスはソーダ石灰ガラス、着色剤はCuである。黄緑色試料では2wt%前後のPbOを含有し、発色に関与していると思われる。

・紺色試料の基礎ガラスは4試料がソーダ石灰ガラス、1試料がカリ石灰ガラスに分類される。ソーダ石灰ガラス4試料の着色剤はFe、微量のCo、CuでMn濃度は低く、カリ石灰ガラスの着色剤はMn、Fe、微量のCoである。

・黄色試料は透明性がある。基礎ガラスはソーダ石灰ガラスで、着色は高濃度のPb、やや濃度の高いFeも関与していると思われる。

・黒色ガラスの基礎ガラスはソーダ石灰である。透過光では紫色、反射光では黒色に見える事例では高濃度のMnで着色されている場合があるが、本試料のMn濃度は低い。着色剤は不明であるが、やや濃度の高いFeの化学状態が巧みしているのかも知れない。

・二層ガラス玉は内層が白色でかなりの気泡孔を有している。外層には透明性の高い茶黄色ガラスが被覆されている。7世紀の遺跡でもこの形状のガラス玉出土は少ない。外層、内層別に分析を行い、また、一部試料では層の接合面で剥離していたため、各層を個別に分析できた。その結果、外層の茶黄色部は基礎ガラスがソーダ石灰ガラス、着色剤はFeである。内層の白色部はNa₂OとK₂O濃度が低いこと、PbOが検出限界値以下であること、SiO₂濃度が高いが透明性が無くガラス状態であることが確認できない。CZT検出器ではSr（ストロンチウム）と微量のAg（銀）が検出されている。前者はSi鉱物の不純物であるが、Agは微量であり、白色の着色を意図して付加されたのか否かは判断できない。セラミックの可能性が否定できない。試料採取による結晶分析やマイクロ観察によって明らかになるだろう。

○ 蛇塚古墳3号墳 7世紀中葉 8試料 青色2試料、青緑色3試料、紺色3試料

青色、青緑色試料の基礎ガラスはソーダ石灰ガラスである。着色はCuである。紺色ガラスはNa₂O濃度が低いCaO濃度が高く基礎ガラスがソーダ石灰ガラスである。着色剤はMn、Fe、微量のCo、Cuである。

4.3.表面の腐食状態から定性分析とした試料

○ 藤塚古墳群8号墳 7世紀後半 2試料 緑色

PbO濃度が高く、表面腐食が著しい。表面腐食とPbOが30wt%を超えるガラス標準試料を所有していないことから定量を行わず定性分析とし、各成分の値は参考値とした。参考値によれば表面の相対濃度はSiO₂が50wt%前後で、PbOが30wt%を超え、基礎ガラスは鉛ガラスである。着色剤はCuであるがPbも関与していると思われる。

○ 北西の久保遺跡 遺跡は弥生時代中期遺跡、出土試料は包含層から出土、

1試料（棒状片、分析は5ヶ所）

弥生時代中期の住居址出土の棒状ガラス片は、表面腐食が著しく、定性分析とした。参考値としたPbOは24～32wt%と高く、基礎ガラスは鉛ガラスである。着色剤はCuであるがPbも関与していると思われる。表面は腐食のため白色化していたため、腐食部をわずかに採取して分析したが同様な成分を示した。2mm径サイズで軽い研磨を行い分析したが、PbOは30wt%であった。Cuが約0.6～0.8wt%検出されていることから、Cuが着色剤である。なお、表面の腐食が顕著なことから、厳密な成分比率は確定できない。今後、類似形状のガラスから、年代や用途などを検討する必要がある。

5.まとめ

遺跡名、時期、基礎ガラス分類、色調などを表7に示した。従来の知見では、東日本において弥生時代から古墳時

代前期までは、基礎ガラスはカリ石灰ガラスが大多数を占め、ソーダ石灰ガラスは例外的にしか存在しないこと、古墳時代中期以降になるとソーダ石灰ガラスが増大し、鉛ガラスも出上り、相対的にカリ石灰ガラスが減少することが明らかにされている。また、着色剤は、青色ガラスに銅と微量の鉛や微量の錫 (Sn) を含有する場合がある材料が用いられ、紺色ガラスには微量のコバルトを含有するマンガン鉱物を用いられ、いずれも時代変遷が無いことが明らかにされている。基礎ガラスにおけるこの時代変遷は北九州では成り立たないが、近畿周辺でも同様な傾向にあることが明らかにされている。また、古墳時代中期以降になると黄色や青と紺などの色調が多彩となることも明らかである。

本分析結果は従来の知見と合致するのだろうか。整理した表7に示したように、弥生時代後半から古墳時代前期ではカリ石灰ガラスが41試料、ソーダ石灰ガラスが3試料、5世紀後半以降では、カリ石灰ガラスが3試料に対してソーダ石灰ガラスが43試料、鉛ガラスが2試料である。なお、時代同定が確定できない鉛ガラス1試料は除く。この結果は、従来の知見による基礎ガラスの時代変遷と極めて良い一致を見せている。多彩な色調のガラス玉の出現時期や着色剤の成分もほぼ一致している。

約100試料弱の弥生時代後期から7世紀後半までの遺跡出土のガラス材質分析は、同一地域のガラス材質の変遷を明らかにし、従来の東日本各地の試料分析から得られた時代変遷と合致した。この結論はガラスの流通伝播、経路、交易などの考古学上の考察に資するものであろう。

謝辞 このような分析機会を与えてくれた佐久市教育委員会と加速器による分析に協力していただいた原祐一氏、中野忠一郎氏、松崎浩之氏、長年共同研究者として協力していただいた小林祐一氏に感謝いたします。

参考資料は「後家山遺跡出土のガラス材質分析」に掲載しました。

佐久市17遺跡出土のガラス材質分析結果 表1

遺跡名	時期	資料記号	色調	融化物重量パーセント(wt%)											*微量定性確認		
				Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	SnO ₂	ZnO
周防畑遺跡①	弥生後期	No7	青	1.18	0.42	6.37	81.6	7.91	0.17	0.17	0.01	0.83	nd	1.30	0.22	*	nd
	弥生後期	No8	青	1.28	0.43	6.15	81.3	8.04	0.25	0.21	0.01	0.65	nd	1.40	0.33	nd	nd
	弥生後期	内土坑	青	0.78	0.33	6.66	81.9	9.08	0.02	0.14	0.01	0.44	nd	0.44	0.20	nd	nd
	弥生後期	No2	青	1.19	0.39	5.97	79.9	8.62	0.20	0.28	0.01	0.59	nd	1.48	0.37	nd	nd
	弥生後期	No3	青	0.83	0.47	5.81	84.2	6.91	0.26	0.20	0.01	0.45	nd	0.79	0.11	**	nd
	弥生後期	No4-1	青	0.83	0.51	6.22	82.6	7.39	0.28	0.13	nd	0.86	nd	1.33	0.26	nd	nd
	弥生後期	No5	青	1.20	0.41	5.87	81.8	6.55	0.45	0.25	0.04	0.97	nd	2.06	0.35	*	nd
	弥生後期	D216	青	0.95	0.27	5.44	85.8	3.96	0.33	0.17	0.01	0.61	nd	2.11	0.43	*	nd
	弥生後期	Y14	青	1.09	0.27	4.63	87.8	3.34	0.34	0.10	0.01	0.84	nd	1.45	0.33	*	nd
	弥生後期	No4	紺	0.30	0.44	3.18	88.0	2.98	1.17	0.23	2.09	1.56	0.06	0.02	nd	nd	nd
	弥生後期	No1	紺	0.88	0.80	4.37	76.8	8.80	0.83	0.25	2.52	2.10	0.02	nd	nd	nd	nd
	弥生後期	TM2	紺	0.63	0.60	3.81	83.4	8.26	0.61	0.31	1.28	0.96	0.03	nd	nd	nd	nd
五重田遺跡	弥生後期	D-1-1	青	0.53	0.42	4.93	80.7	10.07	0.22	0.16	0.02	0.80	nd	1.75	0.59	*	nd
	弥生後期	D-1-2	青	0.90	0.45	5.09	80.8	9.45	0.26	0.95	0.04	0.57	nd	1.43	0.24	**	nd
	弥生後期	D-1-3	青	1.11	0.60	5.65	83.50	5.20	0.40	0.22	0.02	0.78	nd	2.05	0.36	*	nd
竹田峯遺跡	弥生後期	T2-1	紺	0.54	0.54	3.55	85.1	7.56	0.57	0.13	1.10	0.91	nd	0.02	nd	nd	nd
	弥生後期	T2-2	紺	0.40	0.73	2.99	82.8	8.25	1.23	0.21	1.91	1.84	0.04	nd	nd	nd	nd
貫路遺跡Ⅱ	弥生後期	東IV区	青	1.21	0.49	5.76	78.0	10.91	0.15	0.20	0.02	0.70	nd	1.87	0.73	*	nd
下聖洲遺跡Ⅱ	弥生後期	Y4	黒紺青	4.15	2.82	8.57	72.3	2.61	5.95	0.37	0.32	2.56	0.13	0.23	0.15	nd	nd

nd: 検出限界値以下 *定量は困難であるが定性的に確認できた場合、**0.05wt%以下

表2

遺跡名	時期	資料記号	色調	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	SnO ₂	ZnO
松ノ木遺跡 瀧の家古墳群 2号墳	弥生末～ 古墳前期	目録	青	0.74	0.34	5.66	81.8	8.78	0.24	0.15	0.02	0.62	0.04	1.40	0.16	*	nd
	弥生末～ 古墳前期	ふんい	青	1.01	0.54	6.27	80.1	8.85	0.21	0.22	0.03	0.77	nd	1.57	0.39	*	nd
根々井大塚 古墳	弥生末～ 古墳前期	No15	青	0.41	0.64	5.38	82.2	7.28	0.37	0.21	0.03	0.70	nd	2.28	0.48	*	nd
	弥生末～ 古墳前期	No16	青	0.76	0.38	5.22	82.9	6.19	0.43	0.24	0.02	0.89	0.01	2.43	0.53	*	nd
	弥生末～ 古墳前期	No17	紺	0.56	0.50	3.03	82.7	8.78	0.43	0.19	1.95	1.76	0.03	0.04	nd	nd	nd
	弥生末～ 古墳前期	No18	紺	0.31	0.48	3.05	85.4	8.46	0.93	0.19	1.76	1.39	0.06	nd	nd	nd	nd
	弥生末～ 古墳前期	No18	紺	0.33	0.41	2.98	88.4	4.74	0.38	0.14	1.39	1.14	0.06	0.01	nd	nd	nd
	弥生末～ 古墳前期	No20	紺	0.70	0.78	2.99	80.6	9.01	2.12	0.17	1.82	1.43	0.10	0.03	nd	nd	nd
藤塚古墳群	古墳前期	No7	青	11.05	0.42	17.10	60.9	2.99	2.97	1.05	0.06	2.09	nd	1.21	0.16	nd	nd
	古墳前期	No8	青	8.27	0.50	14.24	65.4	2.75	3.42	0.62	0.10	2.14	0.03	1.88	0.59	*	nd
下聖洲遺跡Ⅱ	5世紀後半	No20	青	9.71	0.56	8.16	71.6	2.53	1.83	1.19	0.13	3.02	0.07	0.90	0.29	nd	nd
	5世紀後半	Ⅱ-1	黒	0.91	2.63	15.2	35.7	1.11	34.38	0.42	0.51	9.10	nd	nd	nd	nd	nd
	5世紀後半	Ⅳ区	青	0.77	0.41	5.63	80.3	10.82	0.13	0.16	0.01	0.67	nd	1.03	0.22	nd	nd
久保河遺跡	6世紀後半	No1	青	0.54	0.47	5.19	78.6	12.19	0.25	0.14	0.02	0.84	nd	1.59	0.36	*	nd
	6世紀後半	No3米量	無色透明	0.54	0.24	1.86	97.3	nd	nd	nd	nd	0.08	nd	nd	nd	nd	nd
	6世紀後半	No3内装部	粉赤	4.64	4.45	23.7	51.2	0.97	1.78	0.93	0.10	12.2	nd	nd	nd	nd	nd
	6世紀後半	No10	黒	0.62	1.11	27.8	51.9	1.02	2.36	1.57	0.07	13.4	nd	0.04	nd	nd	nd
	6世紀後半	No16 P1	黒	1.76	2.72	24.37	54.6	2.54	2.94	1.57	0.08	9.43	nd	nd	nd	nd	nd
家地頭1号墳	6世紀後半	No16 P2	黒	1.55	2.33	20.02	61.0	1.88	2.38	1.97	0.05	8.81	nd	nd	0.04	nd	nd

nd: 検出限界値以下 *定量は困難であるが定性的に確認できた場合、

表3

遺跡名	時期	資料記号	色類	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	SnO ₂	ZnO
家地頭1号墳	6世紀後半	No16 P3	黒	1.72	2.38	20.0	60.8	1.87	2.37	1.98	0.05	8.78	nd	0.04	nd	nd	nd
	6世紀後半	小玉No2	青	2.25	0.65	9.21	76.6	1.99	6.36	0.57	0.07	1.59	nd	0.65	nd	nd	0.01
	6世紀後半	小玉No3	青	11.7	0.37	6.64	74.0	1.99	2.11	0.39	0.21	2.00	nd	0.65	nd	nd	nd
	6世紀後半	小玉No4	青	14.6	0.00	8.57	68.4	2.73	2.09	0.69	0.05	1.89	nd	0.95	nd	nd	0.01
	6世紀後半	小玉No22	青銅	9.29	3.37	5.77	68.6	3.42	7.16	0.18	0.06	1.75	0.14	9.17	nd	nd	0.04
	6世紀後半	小玉No23	青銅	5.38	2.28	4.71	76.4	3.00	5.86	0.28	0.33	2.24	0.12	0.18	0.24	nd	0.01
6世紀後半	小玉No27	緑	7.63	1.18	4.47	75.9	4.71	2.63	2.24	1.26	1.75	0.07	0.14	nd	nd	nd	
蛇塚古墳1号墳	7世紀初頭	No173	青	13.3	0.35	9.12	69.1	2.72	2.59	0.55	0.06	1.54	nd	0.53	0.02	nd	nd
	7世紀初頭	No174	青	12.6	0.54	6.91	61.9	3.28	7.31	1.03	0.15	4.20	nd	2.06	nd	nd	nd
	7世紀初頭	No175	青	14.5	0.38	9.61	67.4	2.84	2.42	0.56	0.06	1.63	0.02	0.64	nd	nd	nd
	7世紀初頭	No176	青	8.63	0.48	8.46	63.5	2.82	7.54	1.09	0.39	4.40	nd	2.37	nd	nd	0.33
	7世紀初頭	No177	青	15.5	0.37	6.64	68.0	2.15	2.66	0.58	0.07	1.46	nd	0.53	nd	nd	nd
	7世紀初頭	No183	緑	14.9	0.94	7.43	66.0	2.18	1.42	1.04	0.18	2.67	nd	1.07	2.20	nd	nd
	7世紀初頭	No184	薄黄緑	12.5	0.79	8.10	70.0	1.94	1.11	0.80	0.09	1.96	nd	0.81	1.94	nd	nd
	7世紀初頭	No185	薄黄緑	13.8	0.71	6.90	67.8	2.11	1.35	0.63	0.12	2.11	nd	0.72	1.77	nd	nd
	7世紀初頭	No186	薄黄緑	11.9	0.74	14.7	62.3	2.50	2.14	1.05	0.08	2.10	nd	0.75	1.75	nd	nd
	7世紀初頭	No21	緑	5.48	3.10	4.43	73.9	3.03	7.37	0.22	0.27	2.03	0.07	0.07	0.03	nd	nd
	7世紀初頭	No22	緑	5.07	2.86	2.77	78.1	3.39	5.85	0.13	0.07	1.49	0.10	0.13	0.09	nd	nd
	7世紀初頭	No63	緑	9.40	1.96	3.39	73.7	3.17	5.26	0.29	0.23	2.17	0.09	0.15	0.18	nd	nd

nd: 検出限界値以下

表4

遺跡名	時期	資料記号	色類	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	SnO ₂	ZnO
蛇塚古墳1号墳	7世紀初頭	No87	緑	0.31	nd	3.07	85.8	6.50	0.92	0.20	1.76	1.42	0.06	nd	nd	nd	nd
	7世紀初頭	No100	緑	3.87	3.56	3.46	76.7	3.68	6.39	0.14	0.09	1.65	0.10	0.15	0.26	nd	nd
	7世紀初頭	No187	黒	8.66	0.86	7.56	76.4	1.45	1.38	0.86	0.07	2.57	nd	0.09	0.06	nd	nd
	7世紀初頭	No188	青	10.30	0.58	9.63	71.4	2.73	1.21	0.38	0.04	1.22	0.01	0.03	2.48	***	0.00
	7世紀初頭	No188	青	13.22	0.57	9.95	66.2	3.01	1.31	0.51	0.06	1.50	0.01	0.04	3.55	***	nd
	7世紀初頭	No189	青	9.07	0.67	11.8	73.8	2.79	1.68	0.56	0.06	1.64	0.00	0.03	3.87	***	nd
	7世紀初頭	No191	青	9.31	nd	11.1	70.4	3.23	1.35	0.49	0.05	1.52	nd	0.02	2.50	***	nd
	7世紀初頭	No192	青	8.77	0.66	10.2	64.7	3.07	1.87	0.80	0.30	2.88	nd	0.08	6.62	***	nd
	7世紀初頭	No192	青	6.81	0.65	9.95	70.3	2.83	1.74	0.57	0.22	2.29	0.00	0.08	4.56	***	nd
	7世紀初頭	No61	青	10.59	0.67	11.3	68.4	3.14	1.35	0.57	0.07	1.47	nd	0.02	2.49	***	nd
	7世紀初頭	No10	青	14.29	3.65	9.72	63.7	2.87	1.10	0.46	0.03	1.38	nd	0.03	2.77	***	nd
	7世紀初頭	No201二層ガラス片層1	外層-茶褐色片	2.08	0.74	6.97	81.1	1.13	1.93	0.34	0.06	5.70	nd	nd	nd	nd	nd
	7世紀初頭	No201二層ガラス片層2	外層-茶褐色片	1.10	0.47	6.05	83.3	1.25	1.98	0.33	0.06	5.48	nd	nd	nd	nd	nd
	7世紀初頭	No202二層ガラス片層1	外層-茶褐色片	11.67	3.71	5.74	55.6	3.92	8.47	0.20	0.08	10.8	nd	nd	nd	nd	nd
7世紀初頭	No203二層ガラス片層	外層-茶褐色片	16.48	3.22	3.03	54.0	4.99	7.86	0.18	0.08	10.2	nd	nd	nd	nd	nd	

nd: 検出限界値以下 *実数は四捨五入であるが定性的に確認できた場合、**0.01wt%以下、***0.2wt%前後、二層ガラスの内層 白には微量の鉛(Pb)が検出された。

表5

遺跡名	時期	資料記号	色調	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	SnO ₂	ZnO
蛇塚古墳 1号墳	7世紀初葉	No302- 層ガラス 内層1	内層部・ 白色	0.53	0.96	5.88	86.6	1.21	3.52	0.11	0.04	1.09	nd	0.02	nd	nd	nd
	7世紀初葉	No302- 層ガラス 内層2	内層部・ 白色	0.50	0.94	5.85	86.7	1.20	3.52	0.12	0.04	1.10	nd	0.02	nd	nd	nd
	7世紀初葉	No302- 層ガラス 外層1	内層部・ 白色	0.48	0.70	5.72	87.4	1.19	3.49	0.09	0.04	0.92	nd	0.01	nd	nd	nd
蛇塚古墳 3号墳	7世紀中葉	No79	青	7.81	2.80	5.73	73.4	2.58	5.44	0.34	0.15	1.60	0.04	0.10	0.06	nd	nd
	7世紀中葉	No80	青	6.16	0.89	3.04	78.9	5.51	1.99	0.30	1.40	1.64	0.03	0.06	0.08	nd	nd
	7世紀中葉	No82	青	3.07	1.89	5.03	80.6	1.92	5.13	0.23	0.25	1.43	0.03	0.28	0.10	nd	nd
	7世紀中葉	No54	緑青	13.6	0.57	9.56	67.5	2.64	2.77	0.60	0.14	1.95	nd	0.84	nd	nd	nd
	7世紀中葉	No55	緑青	12.3	0.58	9.87	68.5	2.83	2.64	0.55	0.08	1.88	0.02	0.76	nd	nd	nd
	7世紀中葉	No6	青銅	10.4	3.82	4.04	68.9	2.24	7.92	0.18	0.19	1.57	0.04	0.11	0.50	nd	nd
	7世紀中葉	No4	紺	0.99	2.42	4.01	60.9	2.63	6.06	0.13	0.20	1.85	0.11	0.24	0.38	nd	nd
	7世紀中葉	No5	紺	0.83	2.74	2.98	82.7	2.78	6.02	0.08	0.06	1.48	0.04	0.18	0.13	nd	nd

n.d.:検出限界値以下

腐蝕のための参考値とした試料

表6

遺跡名	時期	資料記号	色調	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	SnO ₂	ZnO
粟地頭1号墳	6世紀後半	No1 磁食	緑	8.83	2.79	5.05	74.0	2.12	5.23	0.24	0.10	1.72	0.07	0.04	nd	nd	nd
藤塚古墳群 8号墳	7世紀後半	No5	緑	0.58	0.40	4.83	50.1	0.42	1.16	0.16	nd	0.11	nd	0.19	42.1	nd	nd
	7世紀後半	No6	緑	1.20	0.19	2.93	58.7	0.44	0.06	nd	nd	1.09	nd	0.33	35.0	nd	nd
	7世紀後半	No6	緑	1.39	0.17	2.71	48.8	0.43	0.05	nd	nd	1.21	nd	0.33	44.9	nd	nd
	7世紀後半	No6	緑	1.20	0.19	2.83	58.7	0.44	0.06	nd	nd	1.09	nd	0.33	35.0	nd	nd
北西の久保 遺跡包舎帯	弥生期?	様状P-1	青	0.99	nd	0.89	60.5	3.39	nd	nd	nd	0.18	nd	0.75	32.5	nd	0.98
	弥生期?	様状P-2	青	1.22	0.90	1.32	60.3	2.95	nd	nd	0.02	0.18	nd	0.78	31.4	nd	0.98
	弥生期?	様状研磨部	青	0.74	nd	0.99	62.0	3.84	nd	nd	nd	0.14	nd	0.73	30.7	nd	0.88
	弥生期?	様状磁食部	白	1.49	1.17	6.32	58.5	4.00	nd	0.07	0.02	0.95	nd	0.74	25.9	nd	0.80
	弥生期?	様状磁食部	白	2.37	1.55	5.96	60.0	3.78	nd	0.02	0.04	0.59	nd	0.61	24.3	nd	0.78

n.d.:検出限界値以下

表7. 佐久市出土のガラス玉分析試料一覽と分析結果に基づく分類

弥生時代後期から7世紀後半までのガラス玉類 94試料

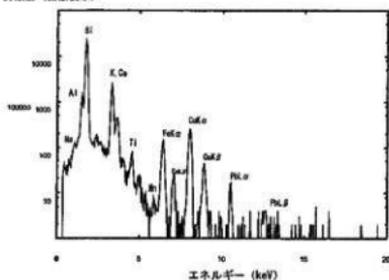
番号	遺跡名	時代	分析 試料数	ガラス 色調	形状	基礎ガラス分類 数		
						カリ石灰	ソーダ石灰	鉛・他
1	周防畑遺跡B	弥生後期	12試料	青、紺	小玉	13		
2	五里田遺跡	弥生後期	3試料	青	小玉	3		
3	竹田峯遺跡	弥生後期	2試料	紺	小玉	2		
4	後家山遺跡	弥生後期	15試料	青、青緑、	小玉	15		
5	直路遺跡Ⅱ	弥生後期	1試料	青	小玉	1		
6	下聖端遺跡Ⅱ	弥生後期	1試料	黒紺 濃青	小玉		1	
7	松ノ木遺跡	弥生末～古墳前期	1試料	青	小玉	1		
8	瀬の峯古墳群 2号墳	弥生末～古墳前期	1試料	青	小玉	1		
9	根々井大塚古墳	弥生末～古墳前期	5試料	青、紺	小玉	5		
10	藤塚古墳群	古墳前期	2試料	青	小玉		2	
11	下聖端遺跡Ⅱ	5世紀後半	3試料	青	小玉	1	1	赤ガラス1
12	久瀬添遺跡	6世紀後半	1試料	青	小玉	1		
13	家地頭1号墳	6世紀後半	11試料	黄、黒、紺、 青	小玉、丸 玉	0	10	分類不可1
14	蛇塚古墳 1号墳	7世紀初頭	25試料 30 部位	紺、青、緑、 黄、薄い黄 茶、白	小玉、 二層玉	1	24	
15	蛇塚古墳 3号墳	7世紀中葉	8試料	青、緑	小玉		8	
16	藤塚古墳群 8号墳	7世紀後半	2試料	緑	小玉			2
17	北西の久保遺跡 包含層	弥生時代	1試料 5部位	青	棒状P-1			1
分析結果による弥生時代後期～古墳時代前期までの基礎ガラス分類別の各試料数						41	3	0
5世紀後半～7世紀後半までの基礎ガラス分類別の各試料数						3	43	3 他1

図 青色、紺色ガラス玉のPIXEスペクトル

弥生時代後期（カリ石灰ガラス）と7世紀初頭（ソーダ石灰ガラス）の比較

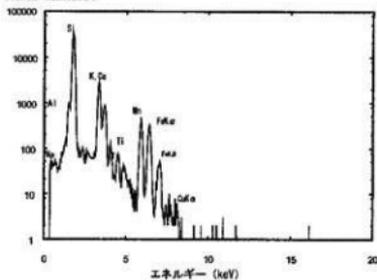
五里田遺跡（弥生時代後期）NNG-D1-3 青色

計数値（指数表示）



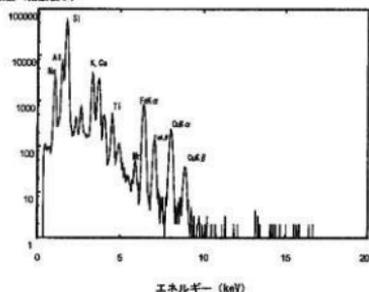
根々井大塚古墳（弥生末～古墳前期）NNO18 紺色

計数値（指数表示）



蛇塚古墳1号噴（7世紀初頭）YHA175 青色

計数値（指数表示）



蛇塚古墳1号噴（7世紀初頭）YHA21 紺色

計数値（指数表示）

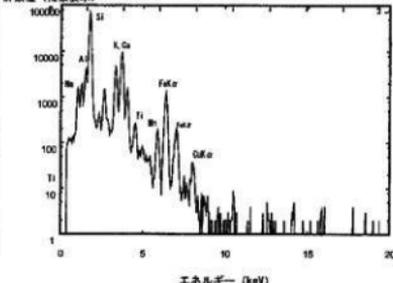
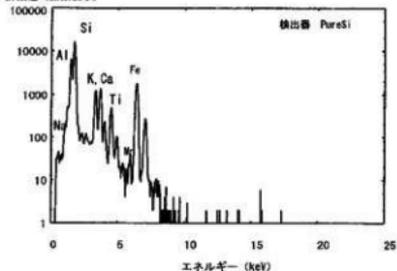


図 黄色、黒色ガラス玉のPIXEスペクトル

家地頭1号墳出土 YG No.16 黒色ガラス玉

計数値（指数表示）



蛇塚古墳1号墳出土 No.61 黄色ガラス玉

計数値（指数表示）

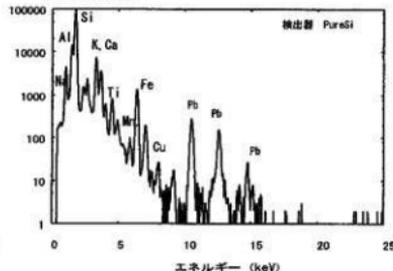
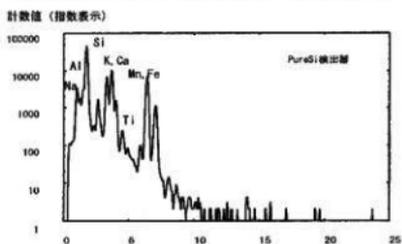
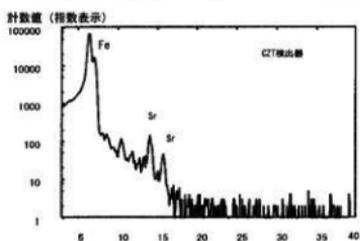


図 二層ガラス玉、棒ガラスPIXESペクトル

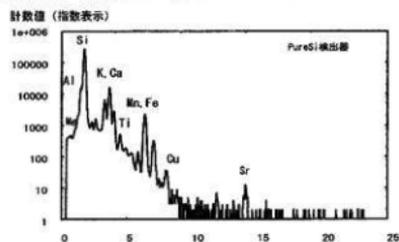
蛇塚古墳1号噴出土 二層ガラスNo.10 外層黄茶色部



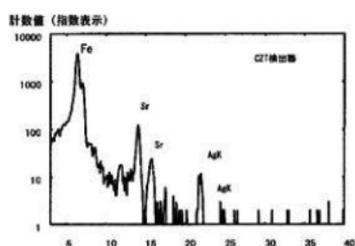
蛇塚古墳1号噴出土 二層ガラスNo.10 外層黄色部



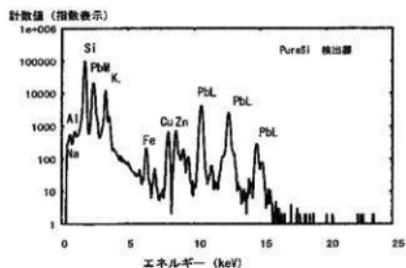
蛇塚古墳1号噴出土 二層ガラスNo.5 内層白色部



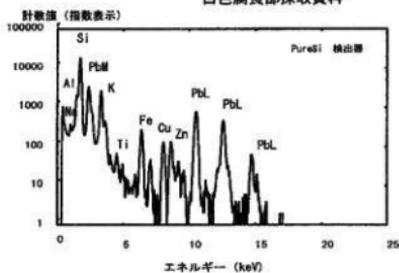
蛇塚古墳1号噴出土 二層ガラスNo.5 内層白色部



北西の久保遺跡出土 棒状ガラス片青色部



北西の久保遺跡出土 棒状ガラス片青色表面の
白色腐食部採取資料



2. 後家山遺跡出土の打製石斧の使用痕分析

株式会社アルカ 池谷勝典、高橋 哲

後家山遺跡は長野県佐久市に所在する弥生時代中期葉林式から後期箱清水式期の集落である。東の山麓からのびた丘陵が佐久の盆地に接する地点に位置する。この丘陵先端近くに深森（栗林式期）を巡らし、箱清水期には尾根上に集落を形成している。今回観察した打製石斧の大半の資料は、葉林期に掘削された深森内からまとまって出土したものである。

資料の選択

まず、肉眼により出土している22点を観察し、特に磨耗が顕著な11点を抜き出し資料化した。

観察方法

キーエンス社のデジタル1Dマイクロスコープ（VH-7000）による低倍率ズーム（VH-Z05）と高倍率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍～40倍と450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂肪などを取り除いた。観察範囲は、石斧表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は梶原・阿了島の分類基準によっている（梶原・阿了島 1981）。微小剥離痕の名称は、阿了島（阿了島 1989）を用いた。

分析結果

高倍率で観察を試みたが、表面が風化していることと、他の縁辺と比較検討しても、顕著な差異はみられなかった。よって、全て低倍率での資料提示となった。以下、観察資料について詳述する。

No.25 (図1)

安山岩製である。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で加工され、剥離末端はステップ状を呈している。

刃部は末端がステップ状を呈する細かな剥離で形成されている。剥離の後は摩耗のため不明瞭なものが多くみられた。刃は直線状を呈し、断面形は両刃の形態である。

使用痕として、刃部縁辺に磨耗がみられた(写真1-3)。刃部の中央部分は、剥離が特に重複してみられる。このことから、特に刃部突出部分が作業対象物と接触し、刃こぼれが進行した結果、摩耗の程度の差としてあらわれたものと考えられる。

装着をしめすような痕跡は確認できなかった。

No.27 (図1)

安山岩製の刃部断片である。素材剥片は板状に剥離されたもので、表裏は拱形面で覆われる。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で加工され、剥離末端はステップ状を呈している。刃部は末端がステップ状を呈する細かな剥離で形成されている。剥離の後は摩耗のため不明瞭なものが多くみられた。刃は弧状を呈し、断面は両刃の形態である。

使用痕として、刃部縁辺に磨耗がみられた。刃部中央の突出した部分は、顕著な磨耗がみられ(写真1-2)、刃部内端部分は顕著な磨耗がみられなかった(写真3)。刃部中央部分の突出部分は、剥離が特に重複してみられる。このことから、特に刃部突出部分が作業対象物と接触し、刃こぼれが進行した結果、摩耗の程度の差としてあらわれたものと考えられる。線状痕は肉眼でも縁辺に対して直交方向のものが確認できた。

装着をしめすような痕跡は確認できなかった。

No.30(図2)

安山岩製である。素材剥片は板状に剥離されたもので、表裏は拱形面で覆われる。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で整形されている。剥離末端はステップ状を呈している。

刃部形態はバチ形にひらき、刃縁が弧状になるが、やや偏刃状である。断面は片刃に近い形態であり、細かな刃こぼれが多数見られる。剥離の後は摩耗が顕著であり、その境界が明瞭でないものも多く見受けられる。剥離末端はステップ形態を呈しているものが多い。

使用痕は、刃部縁辺に顕著な摩耗がみられ、側辺には顕著な摩耗痕はみられなかった。刃部にみられた摩耗は特に刃部の弧状突出部において顕著である。剥離の稜は摩耗のため不明瞭である(写真2)。それ以外の縁辺にも、摩耗が確認されている(写真1,3)。裏面側にも表面ほど顕著でないが、摩耗痕がみられた(写真4)。

線状痕は確認できなかった。

No.31 (図3)

安山岩製である。素材剥片は板状に剥離されたもので、表裏は抵界面で覆われる。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で整形されている。左右両側辺は直接打撃で加工され、末端はステップ状を呈している。刃部のみ残存し、基部は曲折れて欠損している。

使用痕については、刃部縁辺に磨耗がみられ、特に刃部の両端部分において顕著である(写真1)。刃部中央は微小剥離痕や整形加工によってしめられているが、一部剥離面が磨耗している(写真2)。剥離面の稜線はほとんど磨耗している。線状痕は肉眼でも縁辺に対して直交方向のものが確認できた。

No.33 (図3)

安山岩製である。素材剥片は板状に剥離されたもので、表裏は抵界面で覆われる。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で整形されている。末端はステップ状を呈している。刃部のみ残存し、基部は曲折れて欠損している。刃部は、斜打を呈しているが、欠損したところを再加工して使用していたようである。そのため極端な斜刃になっていると考えられる。

使用痕については、刃部縁辺に磨耗がみられ、細かな刃こぼれも見られる(写真1-3)。

No.34 (図4)

安山岩製の刃部断片である。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で整形されている。末端はステップ状を呈している。刃部は片刃状を呈している。

使用痕については、刃部縁辺に磨耗がみられる(写真1-2)。刃部中央は微小剥離痕や整形加工によってしめられているが、一部剥離面が磨耗している。線状痕は肉眼でも縁辺に対して直交方向のものが確認できた。

刃部の反対側辺は、それほど顕著な磨耗や微小剥離痕の痕跡はみられなかった(写真3)。

No.36 (図4)

安山岩製である。平面形態は短冊形である。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で整形されている。末端はステップ状を呈している。両側辺の中央部にわずかに抉り部が作出されている。刃部は斜刃である。裏面側の刃部の磨耗が顕著である。基部の縁辺にも部分的に磨耗がみられる(写真3)。

使用痕については、刃部縁辺に磨耗がみられる(写真1-2)。線状痕は肉眼でも縁辺に対して直交方向のものが確認できた。

No.40(図5)

安山岩製の刃部断片である。素材剥片は板状に剥離されたもので、表裏は抵界面で覆われる。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で整形されている。刃部は弧状である。裏面から正面に力が加わり、曲げによる折れがみられる。

使用痕は、軽微であるが、刃部縁辺に磨耗がみられた(写真1-5)。特に正面側が裏面側と比べて顕著に摩耗痕がみられる。線状痕は肉眼でも縁辺に対して直交方向のものが確認できた。

No.41 (図6)

安山岩製である。素材剥片は板状に剥離されたもので、表裏は抵界面で覆われる。バチ形に刃部が開く平面形態を呈する。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で整形されている。末端はステップ状を呈している。

使用痕は、正面側刃部に顕著な磨耗がみられる(写真1-2)。線状痕は肉眼でも縁辺に対して直交方向のものが確認できた。刃部の平面形態は、刃部の破損により大きく変形しているが、弧状を呈していたものと推定される。刃部破損後も再加工して使用していたようである。

No.42 (図7)

安山岩製である。形態は、バチ状を呈している。素材剥片は板状に剥離されたもので、表裏は抵界面で覆われる。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で整形されている。末端はステップ状を呈している。刃部は弧状で、断面形態は内刃である。剥離稜線にも摩耗痕がみられた(写真2,3)。

使用痕は、刃部縁辺に磨耗がみられる(写真1)。刃部中央は微小剥離痕や整形加工によってしめられているが、一部剥離面が磨耗している。剥離稜線はよく磨耗している(写真4)。線状痕は肉眼でも縁辺に対して直交方向のものが確認できた。

No.46(図8)

安山岩製である。素材剥片は板状に剥離されたもので、表面は摂理面で覆われる。両側辺はハードハンマーによる直接打撃で整形されている。平面形態は基部を軸とした時、刃部は左右非対称となる。刃部は刃こぼれが目立ち、末端がステップ状を呈するものが多い。正面側の刃部に顕著な摩耗がみられ、その分布範囲も広がる。

線状痕は肉眼でも縁辺に対して直交方向のものが確認できた。

まとめ

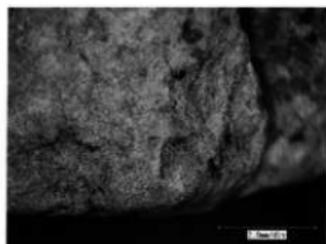
11点の打製石斧を見てきたが、石材の選択、素材剥片の取り方、加工の仕方、大きさはNo.36を除いてほぼ同じである。No.36については、石礫の大きさ、作り方などから縄文時代に所属する可能性も否定できない。残りの打製石斧については、大きさという点から縄文時代のものとは1.5～2倍以上の違いがある。また、形態についても刃部破損、基部破損等はあるが基部が明瞭に作られ、刃部が弧状になるものでいわゆるしゃもじ形が基本形態であると考えられる。No.25,33,41など刃部が斜刃や偏刃になるものは、刃部欠損後の再加工や使用頻度が高く変形した結果であると推測される。この種のしゃもじ形の大形品については、全国的に石礫を集成している松井氏の研究によると「有刃石礫」という名称を与えられており、その分布は群馬県と埼玉県などに分布の中心があるようである（松井1995）。本遺跡の立地も背後にある内山峠を越えれば群馬県に抜けられる位置にあり何らかの関係があるものと考えられる。今後、両地域の関係を検討していく上で貴重な資料となりうるものと思われる。

これらの打製石斧の使用法については、全体の大きさに比べて厚みがなく扁平である点、刃部の摩耗が表裏のどちらかに偏る点、刃部の平面形が斜刃や偏刃になる点などから横斧的な装着をされて使用されたと推定される（図9）。対象物は、摩耗の程度や分布の広がりから土であると推定される。

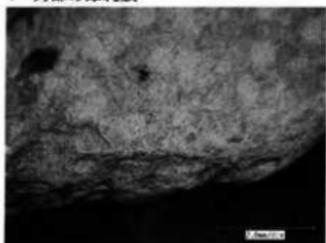
弥生時代の打製石斧については、その用途が農耕との関連を想定させ、「石礫」という名称が一般化しつつあるがその実際の用途については、いまだ不明確である。また、縄文時代晩期から弥生時代になり何ゆえに大形化してくるのかその理由についても不明である。今後、さらに研究をおこなっていく必要がある重要な研究分野である。

参考文献

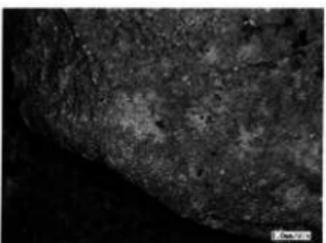
- 阿丁島香・梶原洋1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究-ポリッシュを中心とした機能推定の試み? (東北大学使用痕研究チームによる研究報告その2)」『考古学雑誌』67-1
- 阿丁島香 1989 『石器の使用痕』考古学ライブラリー56 ニュー・サイエンス社
- 池谷壽典 2001 「打製石斧研究の着眼点」『佐久考古通信』No.82 佐久考古学会
- 角張淳一 2002 「石器研究の展望」『利根川』23 利根川同人
- 竹岡俊樹 1988 『石器研究法』言叢社
- 松井一明 1995 「弥生時代の石礫について」『弥生文化博物館研究報告』第4集 大坂府弥生文化博物館



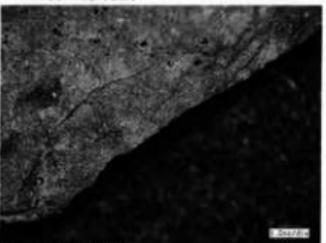
1 刃部の摩耗痕



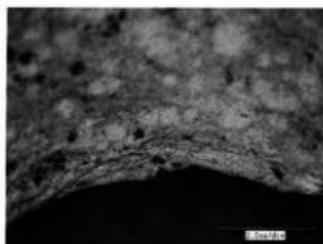
3 刃部の摩耗痕



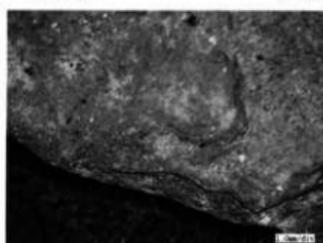
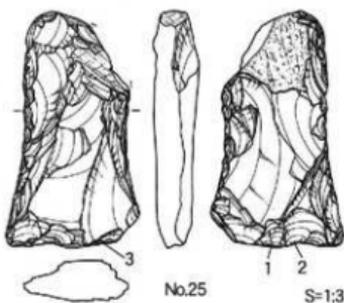
1 刃部の摩耗痕



3 刃部の摩耗痕



2 刃部の摩耗痕



2 刃部の摩耗痕

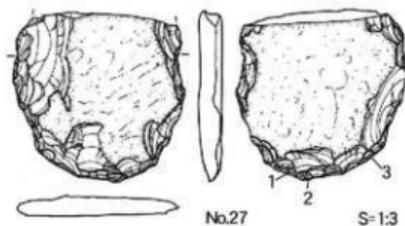
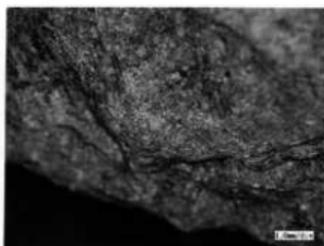
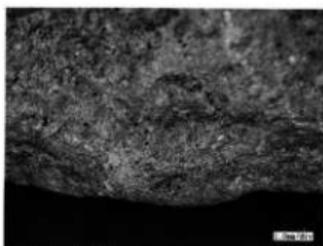


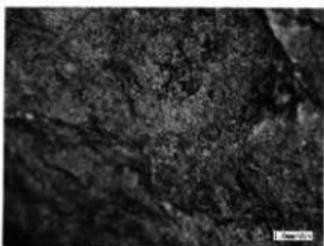
図1 打製石斧使用痕



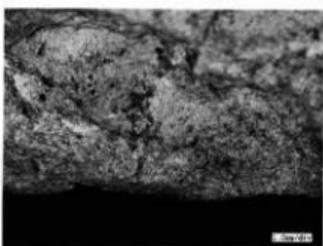
1 刃部の摩耗痕



2 刃部の摩耗痕



3 刃部の摩耗痕



4 刃部の摩耗痕

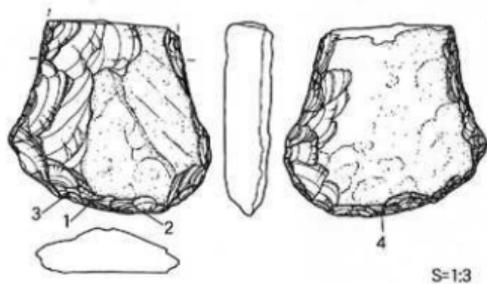
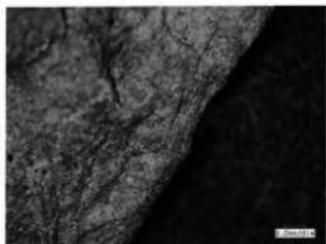
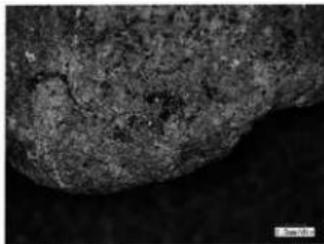


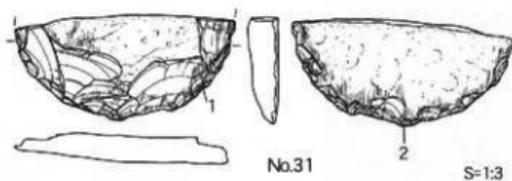
図2 打製石斧使用痕(No.30)



1 刃部の摩耗痕

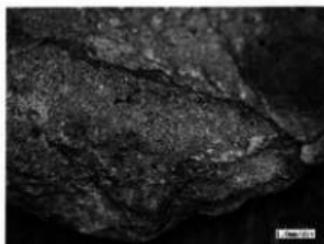


2 刃部の摩耗痕

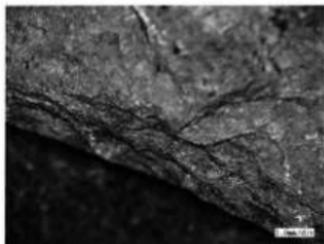


No.31

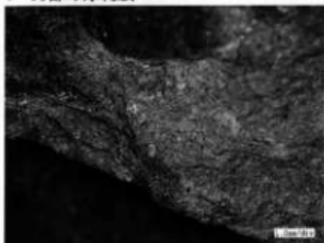
S=1:3



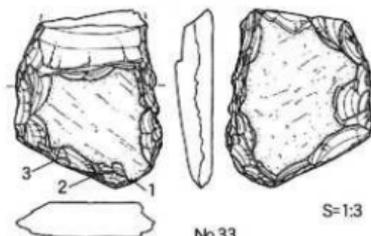
1 刃部の摩耗痕



2 刃部の摩耗痕



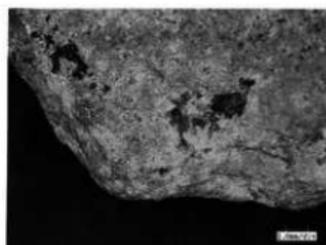
3 刃部の摩耗痕



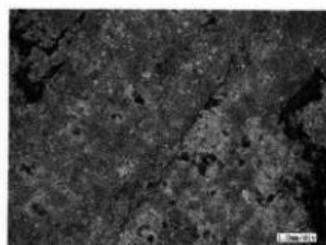
No.33

S=1:3

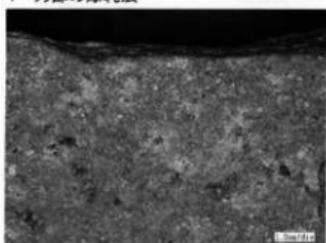
図3 打製石斧使用痕



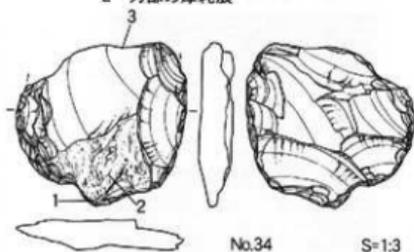
1 刃部の摩耗痕



2 刃部の摩耗痕

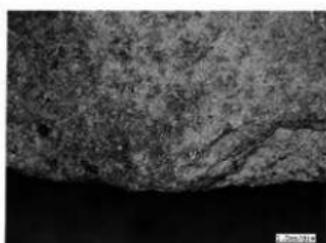


3 縁辺の状態

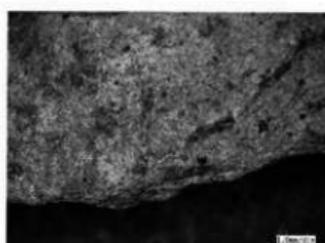


No.34

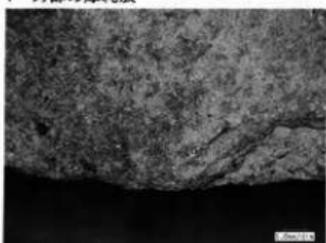
S=1:3



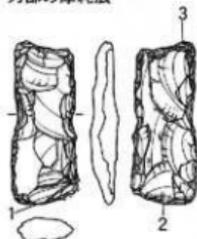
1 刃部の摩耗痕



2 刃部の摩耗痕



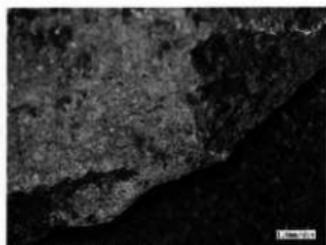
3 基部縁辺の摩耗



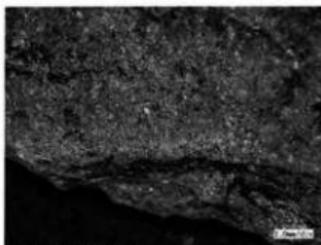
No.36

S=1:3

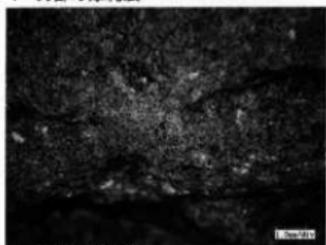
図4 打製石斧使用痕



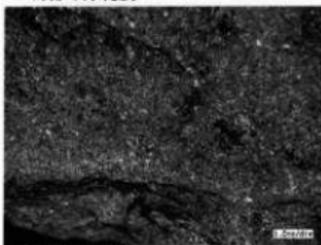
1 刃部の摩耗痕



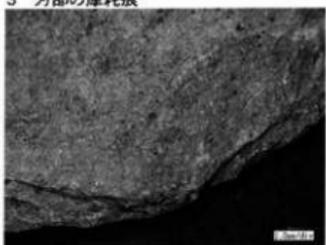
2 刃部の摩耗痕



3 刃部の摩耗痕



4 刃部の摩耗痕



5 刃部の摩耗痕

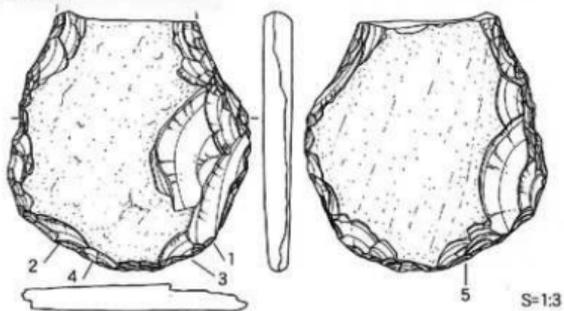
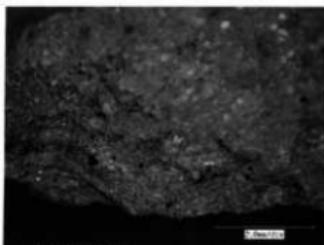
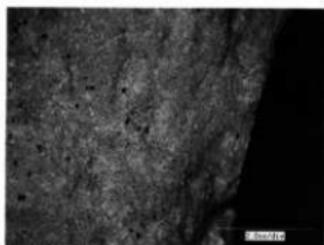


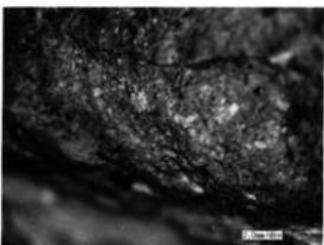
図5 打製石斧使用痕(No.40)



1 刃部の摩耗痕



2 刃部の摩耗痕



3 刃部の摩耗痕

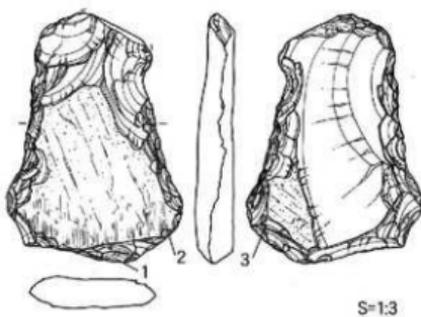
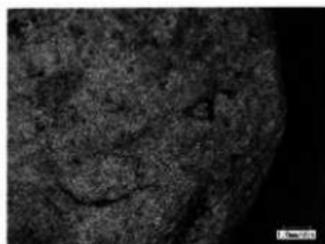
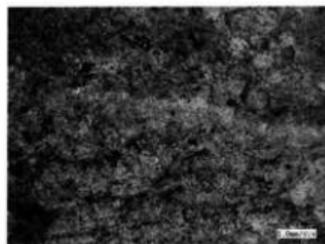


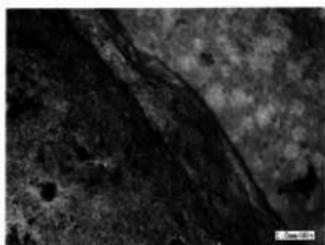
図6 打製石斧使用痕(No.41)



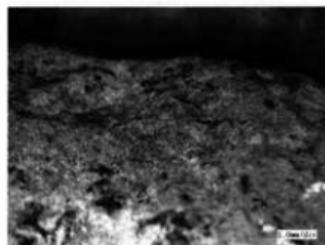
1 刃部の摩耗痕



2 縁辺の摩耗痕



3 稜上の摩耗痕



4 刃部の摩耗痕

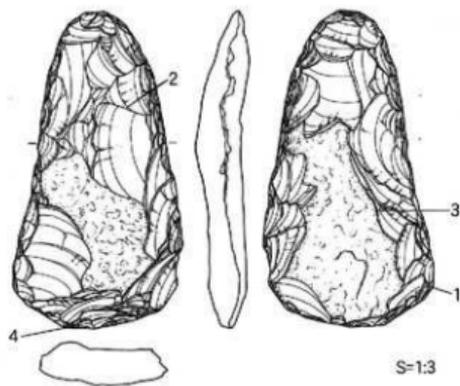
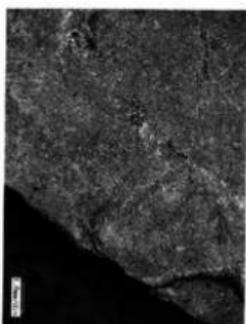


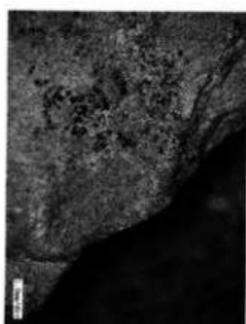
図7 打製石斧使用痕(No.42)



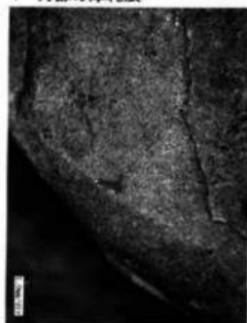
1 刃部の摩耗痕



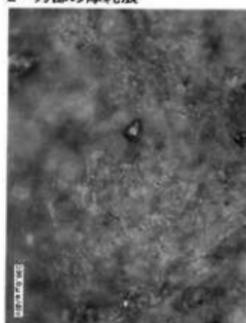
2 刃部の摩耗痕



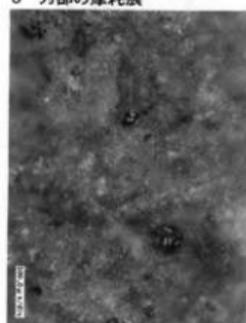
3 刃部の摩耗痕



4 刃部の摩耗痕



5 刃部の表面(高倍率)



6 刃部の表面(高倍率)

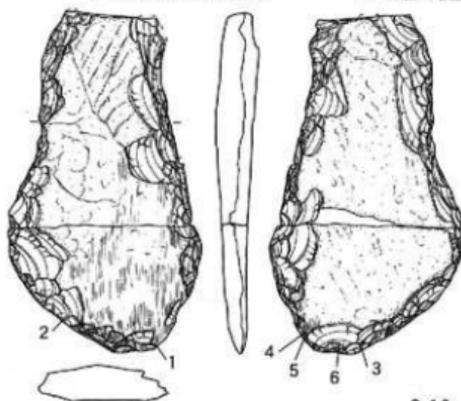


図8 打製石斧使用痕(No.46)

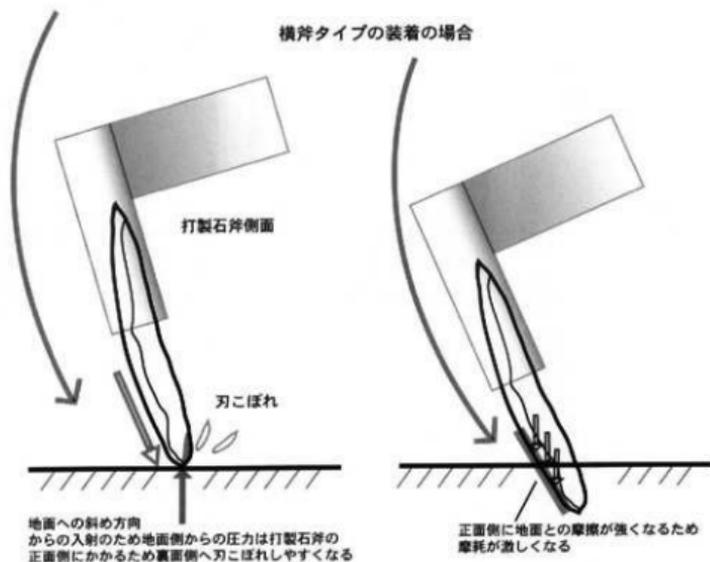


図9 打製石弁使用法模式図

後家山遺跡出土の弥生黒曜石製石器群の検討

株式会社アルカ
馬場伸一郎

はじめに

a) 分析資料体について

本稿では後家山遺跡の黒曜石製石器群を検討する。黒曜石を取り扱う理由は、後家山遺跡の剥片石器の8割以上が黒曜石製石器群であること、そして弥生時代佐久平の黒曜石の消費形態を理解する上でまとまった資料になるからである。

さて、黒曜石製石器群は弥生栗林期・箱清水期の遺構のみならず、古墳・平安住居等及び包含層からも出土するため、土壌から頻繁に移動し、古墳時代以降の遺構覆土へ混入している様相がまず推定される。したがって、分析対象とする資料体は、明確に時期を特定できる出土遺構を対象とするのが適切であると思われる。その際、住居跡覆土は土壌の移動により異なる時期の資料が混在する可能性が高いため、分析の対象とはしない。後家山遺跡で時期が特定できる良好な遺構はM1（溝）で、覆土下層の4層を中心に3層までは栗林2式が出土し、上層の2層を中心に3層までは箱清水式が出土した。

調査担当者の富沢一明氏の所見では、M1のGHセクション付近で上層（2層）から箱清水の上層とともに石罫がまとまりをもって出土したという。またしばらく掘り下げたのち、栗林2式と箱清水式が混在するとともに礫のまとまりが現れ、その礫を取り外し4層に入り栗林2式とともに黒曜石製の石器群が出土し始めた。なお、栗林2式の出土はGHセクション付近に集中する事実も指摘されている。同じM1の溝のCDセクション(図126)では2層より箱清水式に自然礫がともなって出土したが、黒曜石製石器群は一点も出土しなかったと指摘する。つまりCDセクション付近では箱清水式に黒曜石製石器群が共存しない事例が確認されている。

この富沢氏の発掘調査所見に従えば、黒曜石製石器群は栗林2式に伴うもので、石罫を後期箱清水期のものと位置づけられる。富沢氏の発掘調査所見に従い、本稿の分析を行うことにする。

分析の手順であるが、時期の特定できるM1を中心に黒曜石製石器の剥片剥離技法の復原と、剥片剥離工程に介在する剥離技術を解明する。後家山遺跡全体の黒曜石製石器群も同様に分析を行い、その結果をM1のデータの補強、補正のための参考とした。

本稿で特に留意したのは、基礎データの提示である。解釈中心ではなく、基礎となるデータを様々な角度から検討することで、より客観的な報告を試みた。

b) 用語について

以下に本稿で使用する専門用語を定義する。下記以外の器種名は通常の分類名を使用する。

使用痕剥片：いわゆるマイクロフレイキングの認められるが、刃部形成のための剥離加工のない石器。

両極石核：相対する上下端に細い階段状の剥離痕を有し、打点付近が潰れるもの。両極打撃が一回で終了していると考えられるもの。

両極石器：両極打撃が複数回行われるもの。

裂片：打点付近が欠損し、剥離技術が確認できない剥片。

1. M1から出土した黒曜石製石器群の剥片剥離技法と剥片の消費形態の復原

冒頭にも触れたように、M1は覆土下層に栗林2式段階の土器を伴い、上層に箱清水式を伴う。そして黒曜石製石器群は概ね弥生中期栗林段階のものであることが調査地点の対比より明らかとなっている。したがってM1から出土した石器群を時期の限定できる資料体として分析の対象とする。

a) 器種組成表 表1・表2

表1には後家山遺跡全体の遺構別器種組成を提示した。黒曜石製石器群がH10・H11およびM1から多く出土し、そのほか後期箱清水期の遺構からの出土は比較的少ない。この実態は黒曜石製石器群が中期後半栗林期のものであることをある程度反映する実態とも考えられる。

次に表2にM1から出土した黒曜石製石器群の器種組成を示した。合計89点の黒曜石製石器が出土した。石核・両極石核（以下、「石核類」とする）が合計20点、そして剥片・裂片類が多量に出土する。ツールでは有茎鏃と門基礎を筆頭に、使用痕剥片等が若干出土する。

なおM1からは原石の出土は認められなかったが、M1と同時期のH11住居跡から20mm程度の原石が2点出土していることを付け加えておく。

	素材形態	縦長割片	横長割片	卵形割片	貝殻状割片	剥片	角礫	角礫(磨石)	遺物外	不明	総計
石核							12	1		1	14
両面石核							3	2			5
剥片	13	6	14	4	6				1		43
裂片	1					7					8
有蓋蓋						5					5
出蓋蓋						2					2
石礫未成品					4						4
使用痕割片		1									1
二次加工割片	1				1						2
黒曜石類							1	1			2
裂片等 (22点)									1		1
裂片等 (28点)									1		1
総計	15	7	14	4	25	16	4	2	2		89

表2 M1出土の黒曜石製石器の素材形態

M1を中心とした石核の分析

b) 黒曜石製石核類の素材形状 表3

表2には器種ごとの素材形状を示した。石核・両極石(以下、「石核類」とする)の素材はブロック状角礫15点、扁平角礫3点である。M1からは原石は出土していないものの、石核から判断するに後家山遺跡に搬入された原石は角礫の状態であることがわかる。沼津工業高等専門学校の望月明彦氏の産地分析によると、出土した石核類の産地は全て諏訪屋ヶ台である(表20参照)。角礫であるので露頭での採取が考えられる。一方、未だ発生期の採掘痕跡は認められない。今後、原産地側の遺跡との突合せが望まれるところである。

c) 黒曜石製石核類のサイズ 表4

表4によると、石核の長さ(作業面の剥離軸を上下に置いた場合の測定値)は13.0mm~27.5mmの範囲である。非常に小形な原石が搬入され、剥片剥離が行われていたことがわかる。後家山全体でも同様の範囲に値は分布する。

d) 黒曜石製石核類の剥離技術

石核の剥離技術を理解するために、①剥片側の打点の状態の観察と、②石核側作業面の剥離痕の打点の観察が必要である。

まず①であるが、出土剥片43点中打面の種類が観察できるものは32点であった。そして、この32点の打面の種類と「剥離発生型の」、石核の種類と「剥離発生型の」の関係をもつてみた。

「剥離発生型」とはCotterellとKamminga(1987)の論文で既に指摘され、山田しよう・志村宗昭両氏により紹介されている。剥離発生型にはコーン(ヘルツ)・クサビ・曲げの型がある。これら3つの型が剥片観察で重要なのは、それぞれの型が

形態	石核	
	黒曜石	総計
石核	14	14
両極石核	6	6
有蓋蓋	5	5
出蓋蓋	2	2
石礫未成品	4	4
使用痕割片	1	1
二次加工割片	2	2
両極石器	2	2
剥片	43	43
裂片	59	59
総計	138	138

表3 M1出土の黒曜石製石器の組成

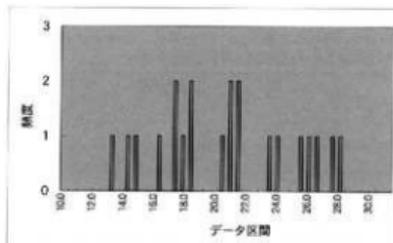


表4 M1出土：石核の長さ

ハンマーの先端形状、石核縁辺の角度、石核の縁と打点の位置、石核打撃の回数等と有意な関係にあることが、CotterellとKammin (1987)らの破壊力学実験で既に明らかになっているからである。つまり、この有意な関係性にもつづけば剥離痕から具体的な石器製作技術を復元することが可能となる。

この剥離発生型の型今回登場するのは、コーン型とクサビ型である。コーンタイプは打点直下に円錐とバルブが発達する型 (P563の図1-2参照)であり、理解がしやすい。ここではクサビ型について補足説明しておきたい。クサビ型は、コーン型と異なり打点付近に小さな階段状剥離が重なり、バルブが発達せず、リングが顕著に波打つ様相をもつ (図1-4参照)。CotterellとKamminga (1987)が指摘するように、両極打撃の場合、コーンタイプやクサビタイプ等の全ての剥離発生型が生じるが、クサビ型が優勢であることが指摘されている。なぜならば、両極打撃では剥片を剥がす際に何度も石核が打たれるため、この間に亀裂が生じ、それら断片による楔が打ち込まれるからである。複数の亀裂が発生するので、主な亀裂のまわりや石核の底から小さな剥片が剥がれ、階段状剥離痕の連続を形成する。クサビ型が発生しやすい要因の一つである。逆に、石刃などの剥片剥離では打面を押す圧縮力と同時に引っ張りの力 (作業面と打面のなす角度が鋭角なのはこれを発生させるため) を利用し、ハンマー直下にコーンが形成され、亀裂が生じる。つまりコーン型の形成である。したがって、コーン型とクサビ型の違いは、剥離を発生させるメカニズムそのものの違いを反映する。ただし、CotterellとKamminga (1987)が指摘するように、両極打撃の固定が不安定な状況では、剥離された剥片にクサビタイプとコーンタイプが混在することもあり、クサビ型=両極打撃という関係にないことには注意が必要である。

さて、話しを戻し、打面の種類と剥離発生型の関係を見ると、表5-1のようになる。

表5-1 M1溝出土 剥片の打面の種類とその剥離発生型の

	コーン	クサビ	不明	総計
自然面打面	21			21
単剥離面打面	4			4
線状打面	1	3	3	7

上記の表からは、自然面・平坦打面とコーン型、線状打面とクサビ型、という有意な結びつきが認められる。圧倒的に自然面-コーンの量が多いことがわかる。

なおこの傾向は後家山全体でも変化はないことが表5-2からわかる。

表5-2 後家山全体出土の剥片の打面の種類と剥離発生型の

	コーン	クサビ	不明	総計
自然面打面	48	1	2	51
単剥離面打面	4			4
線状打面	1	3	3	7

次に、②の石核の種類と剥離発生型の関係を見ると、表6のようになる。

表6 石核の種類とその剥離痕の剥離発生型の

	コーン型	クサビ型	コーンとクサビ混在	不明	総計
石核	11		1	1	13
両極石核		5	1		6

上記の結果から、求心状の剥離痕をもつ石核はコーン型、所謂両極打撃で剥離された石核にはクサビ型の剥離発生型の型が有意に結びついている状態がわかる。

さてここまでの検討で、次の属性系列が判明する。一つは石核-コーン型-自然面・単剥離面打面、もう一つは両極石核-クサビ型-線状打面、という系列である。前者は打面と作業面の鋭角な部分を利用した通常の剥離、後者は両極打撃による剥離が復元できる。したがって、黒曜石の剥片剥離技術には、作業面と打面のなす鋭角の角度を利用した剥離技術 (通常の打撃) と、所謂両極打撃による剥離技術の二つが存在することが判明した。

e) 石核の打面の種類と打面と作業面の対の数

さて、石核の打面の種類と、作業面と打面の対（打面転移）について調べてみよう。線状打面の両極石核は分析から除外する。

まず打面の種類は15点中12点と圧倒的に自然面打面が優勢で、単剥離面打面と複剥離面打面は極めて少ない。打面の作り出し等の石核準備が行われない特徴を示す。

また打面の転移も行われているのは15点中わずか3点であり、残り12点は単一の作業面で終了する。その上、作業面の剥離痕は1枚もしくは2枚程度で、石核の消費の度合いはわずかである実態が浮かび上がる。打面の転移が認められたとしても1回と少ない。

表7 石核の打面の種類と、打面と作業面の対の数との関係

	打面と作業面の対 1	打面と作業面の対 2	総数
自然面打面	11	1	12
単剥離面打面	1	1	2
複剥離面打面	1	1	1

f) その他石核の特徴

黒曜石製の石核の特徴として、同じ面を作業面として複数回打面を移動させる並行剥離であること、そして打面調整・石核整形（剥片剥離前の石核形状を整えるための加工）・石核再生の痕跡はない。

以上の分析の結果、黒曜石製石核の特徴は次のようにまとめられる。

- (1) 石核類の素材形状は角礫であること。
- (2) 石核類の大きさは13.0mm～27.5mmと小形であること。
- (3) 石核の打面は自然面打面がほとんどであり、打面転移はほとんどなされない。同一作業面上の剥離痕数も1枚～2枚と少ない。
- (4) 石核整形、打面調整、石核再生等は行われていない。
- (5) 黒曜石製石核類の剥片剥離技術は、作業面と打面のなす鋭角の角度を利用した剥離技術（通常の打撃）と所謂両極打撃による剥離技術の二つが存在することが判明した。

M1を中心とした剥片の分析と目的剥片の抽出

次に黒曜石製剥片の属性g～mに対し分析を加え、目的剥片の形状を明らかにする。

g) 剥片の打面の種類 表5-1

先に挙げた表5-1のとおりである。打面の種類は自然面・単剥離面打面・線状打面であり、剥離発生型の型と有意な関係にある。また、打面の種類の違いが黒曜石の剥片剥離技術の違いを反映することと先に指摘した。

h) 剥片の長さ 表8・13

表8に示されるように、おおそ10.0mm～22.0mm間に多くは分布する。先の石核の長さが13～27.5mmを主体とすることと比べ矛盾のない分布範囲である。なお、表13に示されるように後家山全体の場合では、最大長に40.5mmが1点存在するが、主要な分布はM1と変わらず10.0mm～22.0mmである。最大長50mm前後の原石がM1以外で2点出土しているため、40mmの剥片が出土することと矛盾する現象ではない。

i) 剥片の厚さ 表9・14・18・19

表9に示されるように、厚さは2.0mm～8.5mmと幅がある。後家山全体総数の場合でも2.0mm～9.0mm程度の幅をもつため、M1と傾向は同じである（表14）。石核整形や再生して打面調整等の石核準備行為が行われないためか、剥離される剥片の厚みに「定性がない」。

さて、この剥片の厚みを先の剥離発生型の別に分類すると（発生型の判別がつかない資料に限定）、コーン型の場合は3.0mm～8.0mm前後の範囲に分布し（表18）、一方クサビ型は分析点数が3点と少ないが、1.5mm～3.0mmの範囲に分布する（表19）。クサビ型剥片の出土点数が少ないのは、発掘で回収できないほど細かい剥片であることが原因であると考えられる。コーン型はバルブ発達し、逆にクサビ型はバルブが発達しないという特徴が厚みに反映される。

j) 石核完成品と未成品の厚さ 表10・11・15・16

後家山遺跡内で最も黒曜石が利用された凹基礫・有芽礫の石核の厚みを分析すると、石核は3.5mm～5.5mmの範囲に収まっている（表10）。一方石核未成品の場合、3.5mm～6.5mmの幅である（表11）。後家山全体の傾向で石核の厚みを見た場合、完成品で2.5～5.5mm（表15）、未成品で3.0～7.0mm（表16）であるため、M1の傾向とほとんど変わらない。なお、コーン型とクサビ型の剥片の消費を理解するために、石核の厚み（表10・15）と表18の剥離発

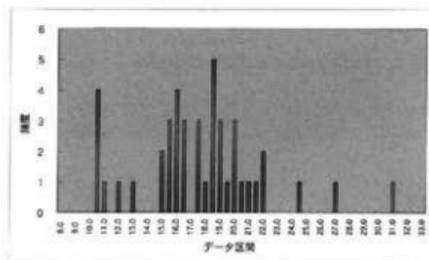


表8 M1出土：剥片の長さ

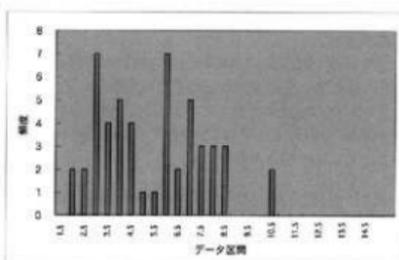


表9 M1出土：剥片・裂片の長さ

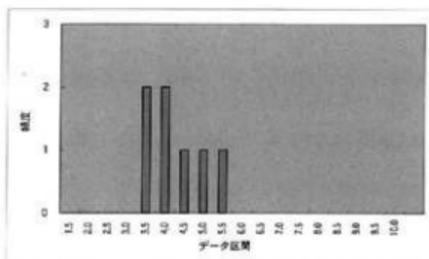


表10 M1出土：石鏝完成品の厚さ

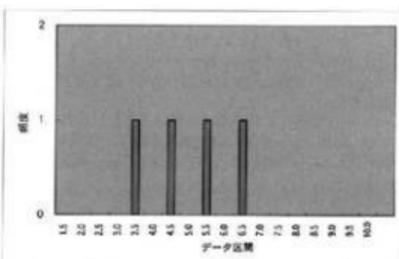


表11 M1出土：石鏝未完成品の厚さ

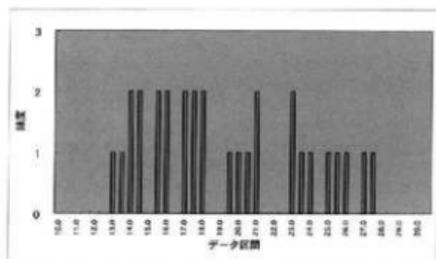


表12 後家山全体：石核の長さ

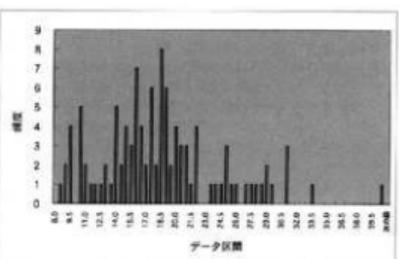


表13 後家山全体：剥片の長さ

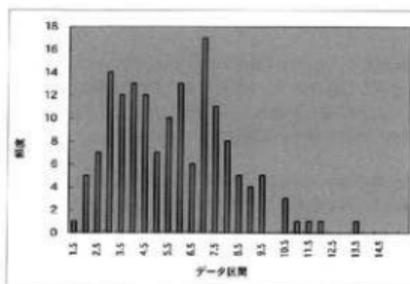


表14 後家山全体：割片・製片の厚さ

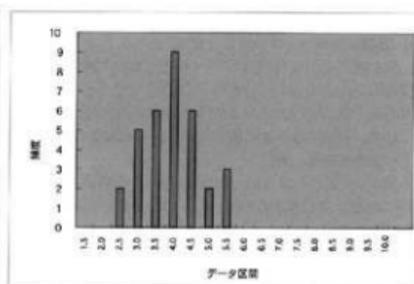


表15 後家山全体：石彫完成品の厚さ

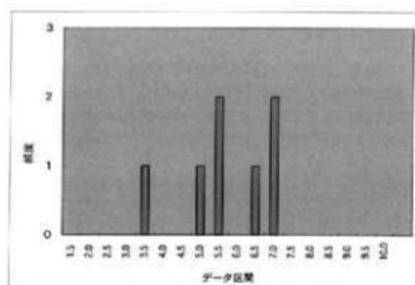


表16 後家山全体：石彫未成品の厚さ

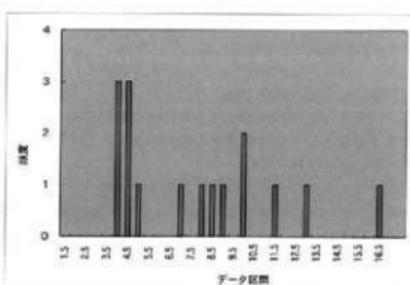


表17 後家山全体：石彫以外のツールの厚さ

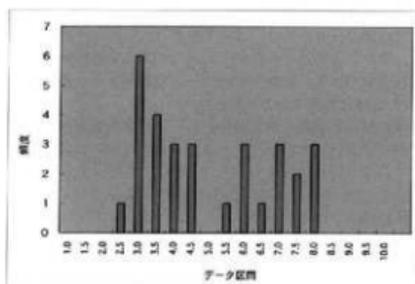


表18 コーン型割片の厚さ

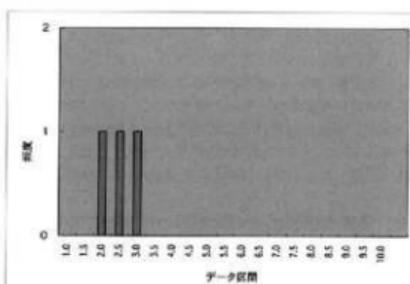


表19 クサビ型割片の厚さ

生型別の剥片の厚さを比べると、石鏃の素材としてはコーン型剥片が石鏃およびその未成品の素材に適合する。

k) 石鏃以外のツールの厚さ 表17

M1 湧出土の石器以外のツールは二次加工剥片1点、使用痕剥片1点と少なく統計の母体とはできない。かわりに後家山全体の場合のデータを表17に示した。4.0mm～10.0mm間と石鏃に比べやや厚みのある素材が利用される傾向である。先の表18のコーン型剥片が厚さ的に適合するため、コーン型の剥片が素材として利用されたと考えられる。

なお、石鏃の厚さと石鏃以外のツールの厚さの双方とも、表8の剥片の厚さの範囲にあり、矛盾はない。

l) 剥片の形状 表2

表2に示されたように、剥片43点のうち縦長剥片13点、横長剥片6点、矩形剥片（縦横ともほぼ同じ長さをもつ剥片）14点、貝殻状剥片4点、そして折損等で判別がつかない剥片が6点である。形状が判明しているものだけでも、剥片のかたちは一定していないことがわかる。

m) ツールの素材に使われた剥片の打面

加工が進んでいるものが多く、打面の種類は不明なものが実際多い。石鏃類の素材剥片の打面は不明であった。使用痕剥片・二次加工剥片・石鏃16点で自然面打面の素材が3点確認された。

以上のg) からm) までの分析で、目的剥片の特徴が以下のように明らかとなった。

- (1) 石鏃類の目的剥片の厚みは3.0～7.0mm前後の範囲にほぼ収まる。完成品のピークは4mm前後である。
- (2) 石鏃類以外のツールは、4.0～10.0mmと石鏃の比べやや厚みのある素材が利用される傾向にある。
- (3) 目的剥片の長さは11.0mm～31.0mmの範囲に収まる小形のものである。
- (4) 目的剥片の形状は一定していない。
- (5) ツールの目的剥片には自然面打向のものが認められる。出土した剥片の打面の種類で自然面>線状>準剥離面打面という順の傾向が認められたが（表5-1）、ツールの素材剥片に自然面打向のものが使用されていることから、出土剥片と目的剥片双方の打面の種類に差異はないと推定される。これは、石核の打面調整をせず自然面をそのまま打面として剥片剥離する傾向（表7）と矛盾がなく、また、打面調整等が行われた剥片がツールの素材に利用されたことも否定される。
- (6) コーン型の剥片の厚さは石鏃やその他ツールの厚みと適合する。一方クサビ型は、数量が少ないため断定は避けるが、ツールの素材の厚みに適合しない可能性が高い。

まとめ—剥片剥離技術と剥片の消費形態の復元—

以上のまでの分析の結果をまとめると、M1から出土した弥生中期の黒曜石石器群の剥片剥離技法は、諏訪屋ヶ台産の20～30mm前後の小形の角礫を主な素材とする（P563の図1-1）。

そして打面調整をせずそのまま自然面を打面とし、10～30mm程度の小形の剥片を剥離することが基本である。剥離技術には石核の鋭角な縁を利用する通常の打撃と、両極打撃（図1-3～5）の二者が存在した。前者はコーン型の剥片を剥離し（図1-2）、後者は主にクサビ型の剥片（図1-4）を剥離する。

剥離された10～30mm前後の剥片は、厚みのある剥片の一群が石鏃以外の石鏃や使用痕剥片等の素材に用いられ、3～5mm前後の薄い剥片の一群が石鏃の素材として用いられた（図1-6～8）。この素材剥片には図1-8のように主要剥離面のバルブ部が膨らむコーン型剥片が用いられる。使われる器種に合わせて石核の種類や剥離技術を変えている痕跡はない。石核から剥片剥離の段階まで一連の工程連鎖である。剥離されたコーン型の剥片から器種に見合う剥片が選択されたものと考えられ、本稿ではその選択基準の筆頭が厚みであると考えた。

なお、両極石核の存在に代表される両極打撃の存在は、両極打撃から剥離された剥片がツールに利用された積極的な痕跡がないため、目的剥片を作り出す剥離という結論を出すまでに至らなかった。両極石核自体がその後加工され「石器」となっている可能性も考慮する必要がある。

2. 後家山遺跡出土の黒曜石の原産地について 表20～23

次に黒曜石の原産地の検討を行い、産地と器種の関係、産地と製作工程の関係を整理する。

後家山遺跡から出土した黒曜石の産地を沼津工業高等専門学校の泉月明彦氏が、東五里山遺跡の報告書にその結果が報告されている（森泉ほか2004）。本章はそのデータに基づくものである。

望月氏の産地推定結果を出土地点別、器種別に集計したものが表20である。まず注目されるのが（1）和田鷹山群と諏訪屋ヶ台群の器種の偏りの違いであり、諏訪屋ヶ台群に多く存在する原石・石核類が、和田鷹山群には認められな

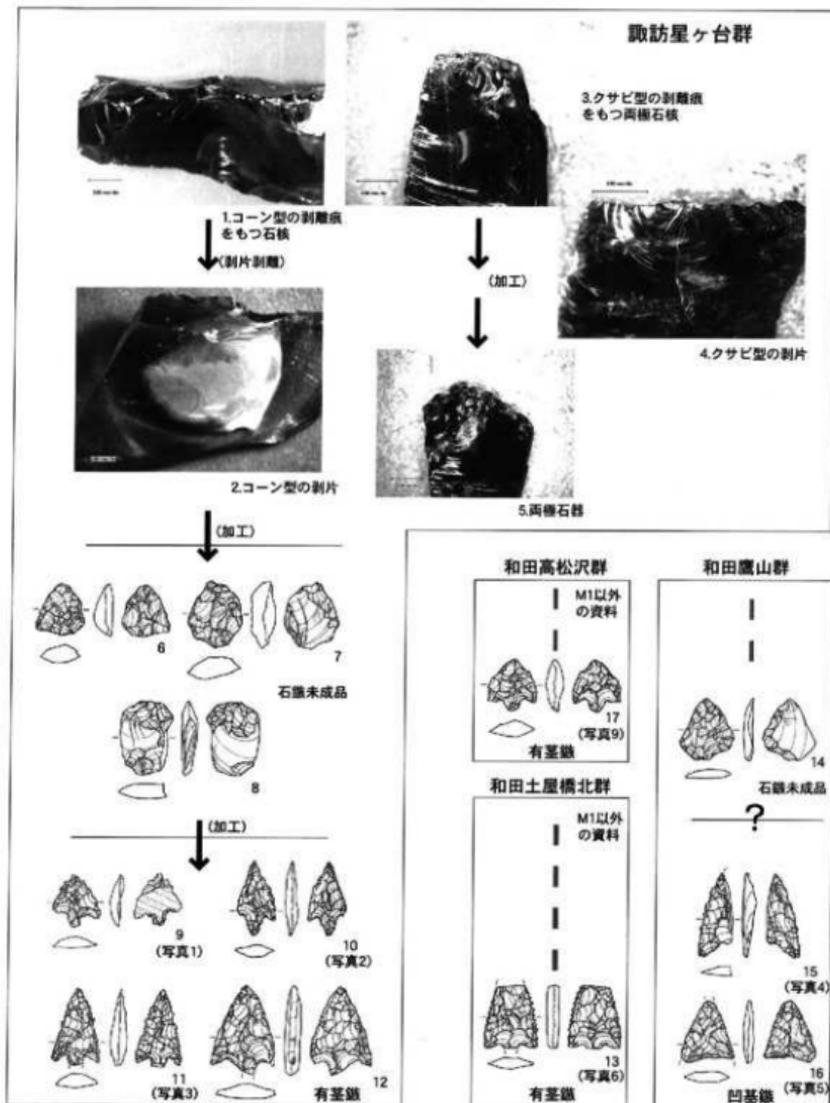


図1 黒曜石製石器群と産地別製作工程の系列 (実測図の縮尺は70%)

諏訪星ヶ台群と和田鷹山群はM1出土資料
和田土屋橋北群と和田高松沢群はM1以外の資料

	有蓋器	磁器類	石器未成品	石器断片	石器	使用痕断片	二次加工断片	剥片	両面石器	両面石核	石核(部片)	磨石(部片)	磨石(部片)	その他	合計
諏訪屋ヶ台群	M1 M1以外	5 10	3 4	1	4	4	2	43	2	6	14				76
	合計	15	7	1	4	5	4	102	4	7	24	15		1	119
和田原山群	M1 M1以外	2 3	1		3			1							3
	合計	5	1		3			1							7
和田土屋橋北群	M1以外	1											1		3
和田土屋橋西群	M1以外		1												1
和田高松沢群	M1以外	1													1
豊科冷山群	M1以外				1										1
	(石核?)											1			3

表20 黒曜石産地別器種組成 (後家山遺跡)

	諏訪屋ヶ台群	和田原山群	和田土屋橋北群	和田土屋橋西群	和田高松沢群	豊科冷山群
M1遺	73					
M1遺以外	122	10	3	1	1	3
合計	195	10	3	1	1	3

表21 出土地点と黒曜石の産地組成 (後家山遺跡)

	剥片	石核	磨石	合計	
諏訪屋ヶ台群	Y25住 No.19巻	40	2	5	47
豊科冷山群	Y25住 No.19巻	5		8	13
合計		45	2	13	60

表22 佐久市根々井芝宮Y25住No.19巻にストックされていた黒曜石の産地別器種組成

遺跡名 (遺跡記号)	時期	SWHD	TSTY	WDTY	WDKB	WDTK	WDTN	WOTM	推定不可	総計
		諏訪屋ヶ台群	豊科冷山群	和田原山群	和田小深沢群	新田土屋橋北群	和田土屋橋西群	和田高松沢群		
東五里田(★C)	弥生前期水Ⅱ式	28			1				1	30
根々井芝宮(★NS)	弥生中期後半	47	13							60
後家山(★GO)	弥生中期後半～ 期後半	195	3	10		3	1	1	1	214
東久保(★K)	弥生後期後半	4		2						6
総計		274	16	12	1	3	1		2	309

表23 佐久市の弥生遺跡における黒曜石産地の組成 (森泉ほか2004より)

※表20～23までの産地分析は沼津工業高等専門学校の望月明彦氏による。

い。また、(2) 和田鷹山群は凹基盤に偏り、有茎鐵の出土は確認できない。さらに(3) 後家山遺跡と佐久平の同時期の遺跡の黒曜石産地に違いが認められる、という点である。この3点の事実を整理してみよう。

まず(1)からは、図1-1~1-2に示したように、諏訪屋ヶ台群の原石から石器完成に至るまでの一連の製作工程の存在が認めうる。しかし和田鷹山群は石鐵の未成品が1点認められるものの、剥片剥離作業が認められない。まずここに諏訪屋ヶ台群と和田鷹山群に製作工程の差を見出すことが出来る。M1の黒曜石製石器群は弥生中期栗林2式段階のものであることから、該当期における諏訪屋ヶ台群産の黒曜石を利用した一連の石器製作工程の存在は動かしがたい。

次に(2)の事実、有茎鐵が信州の縄文晩期以降顕著になる事実、そして長野市松原遺跡の栗林期に有茎鐵が顕著である事例(馬場2003bなど)という例を踏まえれば、M1の有茎鐵が弥生中期栗林2式に伴う出土状況は前例に反せず、栗林2式段階と位置づけても問題はない。問題は凹基盤であり、栗林期の確実な出土例はいまのところ存在しない。そのため、弥生中期栗林期の所産のものかどうかを充分に検討する必要がある。さらに有茎鐵には1点も認められない和田鷹山群(ただし、図1-14の石鐵未成品が有茎鐵の未成品である余地は残す)ともなれば、縄文時代の石鐵の可能性も充分考慮する必要がある。この凹基盤の時期については次章の二次加工技術の検討で再び触れたい。

さてここで(3)の検討のために、佐久市根々井芝宮遺跡Y25住居跡出土の栗林2式の壺の中から出土した黒曜石産地(森泉ほか2004)と比較してみたい。産地推定分析は、後家山遺跡と同じく沼津工業高等専門学校の望月明彦氏である。壺の時期は後家山のM1と同時期である。

その結果は表22が示すように、諏訪屋ヶ台群の原石・石核・剥片が出揃うなかで、蓼科冷山群の原石8点の出土が目立つ。蓼科冷山群は後家山遺跡のM1では出土せず、なおかつM1以外からは原石は1点(古墳岡溝より出土)、石鐵1点、石鐵と思われる石器1点とわずかな出土であったのが、根々井芝宮遺跡では後家山遺跡に比べまとまって出土する。今回の根々井芝宮遺跡の産地分析は限定的で他遺構からも黒曜石製石器群は多数出土するため、これを根々井芝宮遺跡の全体的特徴として敷衍することはできないが、現段階では後家山遺跡のように諏訪屋ヶ台群をメインとする弥生中期集落と、一方根々井芝宮遺跡のように諏訪屋ヶ台群とともに蓼科冷山群もまとまりをもって加わる弥生中期集落の二者が存在することが判明した。ちなみに、蓼科冷山の産地に距離的に近いのは後家山遺跡の方である。

後家山遺跡と根々井芝宮遺跡の違いが何を意味するのか、原産地と遺跡の位置の距離関係は否定されるため、今後追究すべき課題として提示しておきたい。あわせて、有茎鐵の完成品が1点ずつ出土する和田高松沢群・和田上屋橋北群という和田北近辺の黒曜石の存在も無視できず、今後も類似の増加を待って、検討の対象としたい。

3. 二次加工技術について—石鐵の押圧剥離—

a) 石鐵剥離痕の様相と素材の厚みの有意な関係

さて2章では表20より凹基盤と和田鷹山群産黒曜石の有意な関係に対し、縄文時代の石鐵の可能性を考慮すべきであると示した。ここではその問題の解決のための糸口を資料に即して検証・再論する。方法としては産地と凹基盤という石鐵デザインのほかに、特に石鐵の二次加工である押圧剥離の違い注目した。

写真1~9は石鐵の剥離痕の低倍率写真である。

まず特徴として挙げられるのは、(1) 写真1~3の有茎鐵の鋸歯状縁辺である。有茎鐵の縁辺が鋸歯状に形作られ、打点の位置に沿ってU字状に窪む。そして有茎鐵の剥離痕の打点付近は押圧具との接触で潰れ、小さな階段状剥離を生じる。ネガティブバルブの発達も明瞭で、後に触れる凹基盤に比べ比較的急角度の剥離痕である。これら剥離痕の特徴は石器に対する押圧具当て方の結果による可能性もあり、一元的にハンマー材質の硬度によるものであるとは言えない。なお、剥離痕の打点の径は1mm程度と非常に細く、先端が細く尖った工具を使用していることが推定される。写真提示した3点(写真1~3)を含めた計5点が諏訪屋ヶ台群のM1出土分である。その他にM1以外から諏訪屋ヶ台群の有茎鐵が10点、和田土屋橋北群の有茎鐵が1点、(写真6)、和田高松沢群の有茎鐵が1点(写真9)が出土する。そして有茎鐵未成品の可能性を残す図1-14はM1出土と和田鷹山群であった。

次に凹基盤を見ると(2) 写真4・5・7・8の凹基盤剥離痕は有茎鐵に比べ鋸歯が形成されない。そしてバルブも発達せず有茎鐵に比べ比較的フラットな剥離痕であり、急角度の剥離は行われない。なお有茎鐵と同様に、押圧剥離具の先端の幅は狭い。写真2点(写真4~5)は和田鷹山群でM1出土である。M1以外の出土の凹基盤は、諏訪屋ヶ台群が6点、和田鷹山群が3点、和田上屋橋西群が1点である。

以上の諏訪屋ヶ台群と和田鷹山群をみると【押圧剥離痕—器種デザイン—石材産地】の二つに有意な関係が見出せ



写真1 M1出土
有茎鐵 諏訪星ヶ台

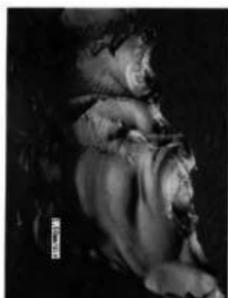


写真2 M1出土
有茎鐵 諏訪星ヶ台



写真3 M1出土
有茎鐵 諏訪星ヶ台



写真4 M1出土
凹基鐵 和田鷹山



写真5 M1出土
凹基鐵 和田鷹山

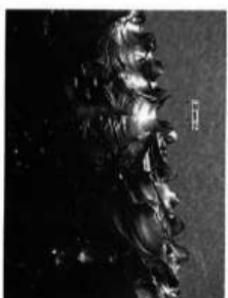


写真6 H71出土
有茎鐵 和田土屋橋北



写真7 M1出土
凹基鐵 諏訪星ヶ台



写真8 グリッド出土
凹基鐵 和田土屋橋西



写真9 M1出土
有茎鐵 和田高松沢群

写真1~9 石鐵の剥離痕低倍率拡大写真

そうであるが、そうとは積極的に言えない事実も一方で存在する。和田山屋橋北群の有茎鏃(写真6)の剥離面は、縁辺こそ鋸歯状に形成されるものの、器体の剥離痕はむしろ和山鷹山群のフラットな剥離痕の様相に近い。鋸歯は器体の押圧剥離のあと、別の工程で加えられた加工である。また諏訪屋ヶ台群(写真7)と和山山屋橋北群(写真8)の凹基鏃の剥離痕も和山鷹山群の様相と同じフラットな剥離痕である。写真7と8を見る限り、石材産地と押圧剥離痕に有意な関係はなく、むしろ「有茎鏃」=急角度の押圧剥離痕+鋸歯、「凹基鏃」=フラットな押圧剥離痕というように石鏃デザインに結びつく。あるいはこの結果は、有茎鏃のほうが凹基鏃より厚みに均一性がない(=厚みの最大値と最小値の幅が大きい)素材を利用する傾向があるため、その厚みの差に対する押圧剥離痕の当て方の違いのかもしれない。写真9(図1-17)の和田高松沢群の有茎鏃は急角度の押圧剥離痕で弱い鋸歯を形成しているが、素材は中央部分が影らむ剥片で厚みは均一ではない。逆に、写真6(図1-13)の和山山屋橋北群の有茎鏃のみ凹基鏃のフラットな剥離痕に近いため有茎鏃のなかでは例外的であるが、素材の厚みは凹基鏃と同様、ほぼ均一である。このような素材の厚みの状態と押圧剥離痕の有意な関係は、素材に対する押圧工具の当て方の違いの可能性を考えた。

このように石材産地・押圧剥離痕・石鏃デザインの関係を分析することで、後家山遺跡では石鏃デザインと押圧剥離痕に有意な関係を見出すことができる。だが、黒曜石産地が石鏃デザインや押圧剥離痕と有意な関係にあることを積極的に裏付ける事実を見出すことはできず、当初設定した問題である和山鷹山群の凹基鏃が縄文時代所産なのかどうかを剥離痕の違いから判断することは難しい。

一方、和山鷹山群の原産地および付近の遺跡状況から判断することはできないだろうか。現在までの和山遺跡群の発掘調査では確実な弥生土器を伴った例はなく、唯一、縄文晩期水式の土器片が試掘調査で出土したのみである(山科ほか2003)。また佐久平側にある周辺の遺跡では、長門町中道遺跡・六反田遺跡で弥生後期の箱濠水期から弥生末の土器が出土している報告があるものの、石器については不明である(森嶋ほか1989)。これらは和山鷹山群の産地が弥生時代に利用されていなかったことを立証するには少ない事例であり、今後の事例の増加を待ちたい。ただし、出土状態から時間的に位置づける手法にも問題がないかといえば実際は存在、弥生時代の遺構から伴ったからという理由で和山鷹山群の石器を弥生時代に位置づける手法には検討の余地があり、混入はないか等ネガティブな条件も洗い出す必要がある。後家山遺跡以外に確実な出土例を押さえ類別を増やしてからも、和山鷹山群の石器の時間的位置は遅くないであろう。

ただし同じ凹基鏃でも、弥生前期の佐久市東五里田遺跡のD8土坑出土例は混入の可能性が低く、一括性が高い。ここでは黒曜石製有茎鏃と凹基鏃が共存しており(森泉ほか2004)、その事実は動かしがたい。双方とも産地は諏訪屋ヶ台群である。現に後家山遺跡でもM1以外より6点の諏訪屋ヶ台群の凹基鏃が出土し、東五里田遺跡の事例があることから弥生時代の可能性を考慮するが、いずれにしても、今後、時期の限定できる確実な出土例の増加が求められる。

b) 後家山遺跡の有茎鏃の製作技法

さて次に、後家山遺跡から出土した有茎鏃の製作技法について触れておきたい。P563の図1-9~12の有茎鏃はいずれも「逆刺」が下方に発達する「凹基有茎鏃」に厳密には分類されるものである。この凹基有茎鏃の製作工程には特徴があり、まず図1-6・7のように角や菱形状の三角形に素材を贅え、大きく剥離を入れ、逆刺を作りだす。図1-9~12の逆刺の部分にある大きな剥離痕がこれに相当する。これを角張洋一氏は「凹基鏃の作り方の要領(角張2000)」と指摘する。凹基鏃は有茎鏃に隣発に共存する事例が東五里田遺跡(森泉ほか2004)以外でも増えれば、角張氏の指摘はより一層具体性を増す。

なお、更に重要なのは、凹基有茎鏃の製作技法は既に角張氏(角張2000)が分析した小幡市氷遺跡(大洞A~A')でも認められており、佐久平では縄文晩期後半以後、後家山遺跡の弥生中期後半までの技法は継続する点である。最大長2~3cm前後と小形である点も同じである。この点については弥生中期後半の長野市松原遺跡の有茎鏃のなかにも同例があり(馬場2003b)、北信から東信一体に共通してみられる現象である。信州の弥生中期後半栗原の石器文化は在来石器文化と新来石器文化で構成され、新来石器文化には磨製石斧丁や太形刃刀石斧・扁半片刀石斧そして磨製石鏃等の以前にみられない石器づくり(石器製作技法)が含まれる。一方、黒曜石製有茎鏃に代表される各地の例は、縄文晩期以来の在来石器文化と理解することができる。

この黒曜石製石器群の在来的な側面を整理すると、黒曜石製有茎鏃に代表される小形剥片石器は縄文晩期の松本市女鳥羽川遺跡(大河C2~A併行、松本市教育委員会1972)には確実に存在する。女鳥羽川遺跡の黒曜石製有茎鏃の全体数は不明であるが、同市石行遺跡(弥生前期型玉式併行、関沢ほか1987)では有茎鏃151点中116点が黒曜石製で、黒曜石製の原石・石核・剥片類は5660点出土していると報告されている。

このように信州における黒曜石の多用は既に縄文晩期には確実であり、弥生中期後半の後家山遺跡における黒曜石の利用例はその延長線上で考えることができるであろう。それを示す一例に、後家山遺跡で認められた有茎鏃と同様

の製作技法が、小諸市氷道跡・松本市石行遺跡等の北信・東信・中信の大洞A～弥生前期の遺跡で既に認められる事実を挙げることができる。弥生中期後半栗林期の石器文化は、黒曜石製有茎鏃に代表される在来石器文化と所謂大陸系磨製石器に代表される新来石器文化の二者で大きく構成されており、一方で長身有茎鏃の影響を受けて成立した新たな有茎鏃が松原遺跡で出現する(馬場2003b)。この実態の具体化を図ることが、系統関係や広域相互の影響関係を把握するための基礎材料となり、栗林式土器分布圏の歴史的理解へと繋がるものと考えられる。

4. 今後の展望

最後に黒曜石製石器群研究の展望について私見を述べておきたい。最近、弥生時代の黒曜石製石器群の原産地分析が行われた例が信州でも増え始め(町田2000a等)、佐久平でも後家山遺跡の他に、東五里山・根々井芝宮・東久保の遺跡で実施された(森泉ほか2004)。この結果、佐久平では弥生中期栗林期から後期箱清水期までの黒曜石製石器群に複数の産地の石材石器が存在することが判明し、今後、佐久平という地域を黒曜石(あるいは黒曜石製石器)の利用・流通という角度から検討する道を開いた。著者は長野盆地で生産された磨製石斧が信州の広域に流通する実態を指摘しており、佐久平もその例外ではない(馬場2001・2003a)。石器石材の流通は集落間の関係を復原するにあたり有効な手段であり、上器情報からは見出せない一対一の集落間関係の復原をも可能とする。本稿でも後家山遺跡と根々井芝宮遺跡で同時期にもかかわらず、原石段階での黒曜石産地に違いが認められたため、今後その背景を追究する必要がある。

さて、信州の弥生遺跡における黒曜石の消費形態についてはいまだ不明な部分が多く、基礎的なデータの提示とそれを交えた議論の必要性を感じる。このような最中、町田勝則氏(町田2000b)が長野市松原遺跡で実践した基礎属性の採取とFDによるそのデータ提供は今後参考すべきデータ提示スタイルであろう。本稿では後家山遺跡の原石から石器製作までの一連の工程を復原し、そこに介在する剥離技術の関与の仕方、黒曜石産地と製作工程の連鎖の仕方等を整理した。後家山遺跡で整理された実態は遺跡の個性なのか、あるいは地域性なのかといった議論は、複数の遺跡で同様の分析を行わぬ限り、想定に留まる。まず基礎データの集積と着実な事例分析を重ね、パターンを突き止めていくことが必要であろう。

最近、上伊那の箕輪町箕輪遺跡では、後家山遺跡や根々井芝宮遺跡と同様に黒曜石製石器や剥片・石核が出土し、時期は栗林期である(市川2002)。伊那谷の黒曜石の消費形態の実態と佐久平のそれに違いはあるのかなど、信州には黒曜石をめぐる重要な検討課題が存在する。いずれこの分析にも着手したいと考えている。

[引用・参考文献]

- 安藤広道1999 「栗林式土器」の成立をめぐる諸問題 『長野県考古学会誌』92
市川日出志2002 「栗林式土器の形成過程」 『長野県考古学会誌』99・100長野県考古学会
山川隆之2002 「箕輪遺跡の発掘について」 『信濃考古』No.169 長野県考古学会
角張淳一2000 「長野県氷道跡出土の剥片石器の分析」 『東京考古』18 東京考古学会
角張淳一2002 「石器研究の展望」 『河根川23』
角張淳一2003 「剥片剥離技術の検討および石器実測図の評価」 『平成14年度愛知県埋蔵文化財センター年報』
Cotterell,B.,Kamminga,J 1987 The formation of flake American Antiquity 52:675-708 (山田しょう・志村宗昭1989 「石器の破壊力学1-2」 『山石器考古』38・39にて解説)
関沢聡ほか1987 「松本市赤木山遺跡群Ⅱ」 松本市教育委員会
森崎聡ほか1989 「長門町誌」 新編長門町誌編纂委員会
山科哲ほか2003 『鹿山遺跡群VI』長門町教育委員会・鹿山遺跡群調査団
竹岡俊樹1989 「石器研究法」 吉澤社
馬場伸一郎2001 「南関東弥生中期の地域社会(1)(下) ?石器石材の流通と石器製作技術を中心に」 『古代文化』53-5・53-6 古代学協会
馬場伸一郎2003a 根田製磨製石斧の再検討—埼玉県新屋敷遺跡第二地点(台の城山遺跡)と長野盆地の弥生中期後半における太形始刈石斧の比較検討から— 『埼玉考古』38 埼玉考古学会
馬場伸一郎2003b 「石材・技法・石器の種類からみた長野の弥生時代石器」 『中部弥生時代研究会 第7回例会発表要集』
町田勝則2000a 「第3章 遺物の理化学的分析」 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡弥生総論5 弥生中期・石器本文』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36
町田勝則2000b 第2章 第1節石製の遺物 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡弥生総論5 弥生中期・石器本文・石原図版』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36
松本市教育委員会1972 「長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書」 昭和45年度 松本市教育委員会ほか
森泉ほか2004 「東五里山遺跡」 佐久市教育委員会

4. 後家山遺跡 1号木棺墓出土の螺旋型鉄釧について

野澤 誠

(1) はじめに

螺旋型鉄釧は、弥生時代後期という短い期間に、東日本（この場合、ほぼ飛騨山脈から木曾山脈及び天竜川以東、利根川以南以西の地域を指す）で独自に使用された、時間的にも空間的にも非常に限定された装身具である。弥生時代の鉄釧は西日本にも散見されるが、鉄製実用利器・祭器の出土量からみれば極めて稀な存在といえてよい。それに対して、東日本では、帯状円環型銅釧・螺旋型鉄釧が盛んに用いられて金属器の中でも比率が高く、その形状や製作技法など東日本で独自に発展した可能性が高い¹⁾。近年、螺旋型鉄釧を扱った論考がいくつか公表されており²⁾分析が行われているが、それらの成果を踏まえて、佐久市後家山遺跡から出土した、鉄材幅の異なる2種類が組み合わされた螺旋型鉄釧（第1図）がもつ意義について考えてみたい。

(2) 出土状況と形態的特徴

後家山遺跡は佐久平に張り出した尾根上に所在し、弥生時代後期（箱清水期）の遺構として、住居跡66軒と土壇墓2基が見つかり、その土壇墓の一つ（1号木棺墓）から螺旋型鉄釧が出土した。ここでは隣接する東久保遺跡の住居跡と土壇墓の部分を含めて考えると、約100軒ほどの比較的大きな集落が形成されていたと考えられている。

螺旋型鉄釧が出土した土壇墓は、箱清水期のH25号住居跡を切って作られておりガラス小玉55点が伴出している。ガラス小玉が集中する出土位置と螺旋型鉄釧を右腕に装着した人骨が出土した長野市塩崎遺跡伊勢崎地点例を参考すると、埋葬推定図（第2図、佐久市教育委員会富沢一明氏作成）のように右腕に装着していた可能性が高い。

出土した鉄釧は、断面が三角形で外側に稜を持ち（写真1・2）バネのような螺旋状に巻き上げた典型的な螺旋型鉄釧で、第1図のように幅の違う多段の螺旋型鉄釧2個体を前後に組み合わせて装着している。手首側の個体を釧1、肘側の個体を釧2とすると、釧1は外径4～4.5cm・幅6～8mm・6段・延伸長88.2cm、釧2は外径5～6.3cm・幅10～16mm・5段・延伸長84.6cmで、いずれも多段の螺旋を有しており、鉄材の両端部がほぼ残存している。

釧1は、南関東地方（千葉・神奈川・東京・埼玉の各都県）で出土例の多い6～8mmの幅の螺旋型鉄釧であり、中央高地（群馬・長野の内県）でははじめて比較的幅広・多段の螺旋型鉄釧の確実な事例となった。鉄材の両端部はやや細くなりながら丸く舌状に仕上げられており、長野県佐久市五里田遺跡や埼玉県大里村下田町遺跡の出土例などで残存していた端部と共通の形態である。

一方、釧2のような極めて鉄材幅が広く多段に巻き上げられた螺旋型鉄釧はこれまでほとんど知られていない。確実な事例は、東京都北区田端西台通遺跡の外径5.5～5.9cm・幅13～15mm・3段の1個体（第3図³⁾のみである。ただし、断面形状がレンズ状⁴⁾で釧2とは異っており、釧2は断面形状においても螺旋型鉄釧の典型的な特徴を備えている。両端部はやや細くなっているもの、角張った形に仕上げられていて、釧1との違いが観察できる。こうした仕上げをしている螺旋型鉄釧はこれまで類例がない。

後家山例が際立った特徴を見せるのは、鉄材幅の違う多段の螺旋型鉄釧2種類を、腕の前後に並べて装着していることである。管見では2種類以上の釧を装着した出土例は長野県塩尻市丘中学校遺跡の2～3段の螺旋型鉄釧3～4個体装着したもの（第4図⁵⁾、東京都羽江市弁財天池遺跡の断面形状が違う1～2段の螺旋型鉄釧を2個体装着したもの（第4図⁶⁾、長野市檀田遺跡の銅釧（帯状円環型銅釧）と鉄釧（3段の螺旋型鉄釧と思われる）という異なる素材・形態の金属製釧を装着したものの3例である。檀田例については未報告のため詳細は不明であるが、丘中学校例、弁財天池例ともに段数の少ない鉄釧の組合せであり、複数個体をもって多段の螺旋型鉄釧1個体分程度もしくはそれより小型の大きさである。それと比べて後家山例は、多段の螺旋型鉄釧を2個体分組み合わせて装着しており、特に釧2は他の出土例と比べて極めて幅広で重厚な螺旋型鉄釧であり、腕を飾る装身具として非常に大型な部類といえよう。

(3) 後家山遺跡の組合せ螺旋型鉄釧出土の意義

螺旋型鉄釧の分布状況は、第5図及び第1表に示したとおりで、これまでに指摘されているとおり東京湾岸周辺の南関東と千曲川水系を中心とした山間部の中央高地に分かれ2つの核があるように見える。岩本崇は、断面形による分類案を提示し、幅広な螺旋型鉄釧は前者に、幅狭の螺旋型鉄釧は後者に集中することを指摘して鉄材幅の違いが分布にあらわれることを示した⁷⁾。幅狭の螺旋型鉄釧が中央高地以外に出土していないことは岩本の指摘のとおりである。しかし幅広の螺旋型鉄釧が、関東平野の西端で口前に中央高地を臨む下田町遺跡と中央高地の後家山遺跡から出土し

たことから、南関東のみならず、中央高地の箱清水式土器文化圏内にまで広範囲に分布していたことが明らかになった¹⁾。したがって箱清水土器文化圏では、幅狭・幅広・超幅広で多段階構造の鉄剣と2～3段階程度の鉄剣の、多様な特徴をもった螺旋型鉄剣を使用していたことになる。これは、箱清水土器文化圏が東日本における螺旋型鉄剣文化の中心の担い手であったことを示すものと考えられる。かつて筆者は螺旋型鉄剣の出土遺構数が圧倒的に箱清水土器文化圏の中心である長野に多いことを指摘した²⁾。多様な形状を呈する鉄剣の存在と出土遺構数の多さが示しているのは、金属製剣の製作に具体的に開わり、実用利器の素材として貴重かつ重要であった鉄の流通に箱清水文化圏の人々が深く介在していた実態を反映したものでないだろうか。

後家山遺跡の弥生集落は、周囲の平地から約20～50mの比高差があり水稲耕作に向きない丘陵上に位置する、いわゆる高地性集落であるが、防衛的・戦闘的な性格を示す遺構遺物が出土していないことから、軍事目的の集落ではない。むしろこの集落で重要なのは地理的な位置であり、佐久平から比較的近いならぬ山地を抜けて関東平野に出ることのできる内山峠に向かうルートの入口に所在し、周囲を眺望できる高所に営まれている点である。内山峠から関東地方へ向うにはこの集落の眼下を必ず通らなければならない。前稿ですべて指摘したが、関東平野にもたらされる鉄素材は山陰・北陸の日本海側から千曲川水系を廻り、佐久平を通過して峠を越え、関東平野へ流通したと考えられる。後家山遺跡で出土した螺旋型鉄剣が南関東で使われることの多い幅広・多段階螺旋型鉄剣(銅1)とさらにそれより大型・超幅広・多段階螺旋型鉄剣(銅2)の組合せであることは、鉄素材の流通ネットワークに深く介在し、そのルート上の要地に立地した集落ならではの性格を表しているのではないかと。

次に製作技術に注目してみたい。一定の幅を持つ鉄材を螺旋状に巻くとどうしても材の厚さに伴う円周長の差からゆがみが生じ、銅2のように幅が広く厚みがあればそのゆがみはさらに大きくなる。螺旋型鉄剣の断面形状が概ね外側に膨らむ様を持つ三角形又は薄餅形をしている(写真1,2)のは、装身具・威信具としての視覚的な効果に加え、そのゆがみを解決するため鉄材の中心部が厚く周縁部が薄く加工した結果であろう。後家山例の螺旋型鉄剣(銅2)は第7章章の自然科学分析により、加工のしやすい極軟鋼の素材を使い、鍛打により製作されていたことが判った。多段階螺旋型鉄剣は鉄素材を丹念に鍛いて延ばし磨いて仕上げた鉄線螺旋を螺旋状に巻き上げるといった鍛造・研磨技術をもって製作されたのである。本来ここには、鉄素材の少ない東日本で実用鉄器を鍛造により再加工し、廃棄された利器を素材として再利用することから素材不足を補うため発達した技術だと考えられる。東日本ではその技術を応用し、長さが約3mにも及ぶ鉄材を使った螺旋型鉄剣³⁾も製作されたが、再利用せねばならないはずの鉄素材を実用品でない鋼に加工し副産物として幕に納めることができた人物または集団は、鉄素材を扱う役割を担い、高度な金属加工技術を保持していたと想定できる。したがって、後家山例のような大型・多段階螺旋型鉄剣を2個組み合わせた人物に装着しそのまま埋葬していたという事実も、後家山遺跡の集落が高度な金属加工(鍛造)技術を持ち鉄素材の流通に深い関係があったことを窺わせるのである。

弥生時代の銅剣、鉄剣はともに数量的に東日本が西日本をはるかに上回り、西日本には見られない形状の帯状円環型銅剣・螺旋型鉄剣を使用することから、東日本が独自の金属製剣を製作・装着する文化を持つ地域として特徴づけられる。つまり実用利器ではない銅剣・鉄剣の在り方が、武器形兵器や銅鐸の文化を受け入れなかった第三の地域として東日本全属文化の独自性を示しているものと考えられる。

佐久平では、佐久平上面路遺跡の埴内埋葬木棺墓からは、一人の人物が両腕に装着したと思われる帯状円環型銅剣が15本以上もまとまって出土しており、後家山遺跡の大型・多段階の組み合わせられた螺旋型鉄剣とともに他地域にない豊かさである。後家山遺跡出土の組合せ螺旋型鉄剣は、弥生時代後期の東日本において佐久平がもつ役割、つまり鉄素材流通の結節点としての役割の大きさを示す重要な資料として高い意義を持つと思われる。

¹⁾ 弥生時代の鋼については、定まった名称(型式名)がないが、本稿では拙稿(野澤 誠 - 2002「銅剣・鉄剣からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』第8号)の分類を使用する。鉄剣については、細分案もいくつか提案されているが、脆弱な鉄製品であるため錆化が進行して出土品の残存状況が極めて悪く、現段階の細分化は困難と考える。螺旋型鉄剣には、1段階に及ぶ多段階の製品が知られる一方、2～3段もしくは「単環」とされる製品が複数装束されていたとの報告もある。しかし、後者の事例ではその本数に見合った内端部が検出されたとの報告はほとんどなく、後者と判断することは難しいのが実状である。したがって、完形または残存状況のよい出土品を参考にして現段階で分類可能な断面形状による分類にとどめる。すなわち断面形状が三角形又は外に膨らむ薄餅形で螺旋状に製作される「螺旋型鉄剣」と、断面形状が扁平な長方形又はレンズ状で素材を円形に曲げて単環とした「帯状曲輪型鉄剣」の2種である。

²⁾ 註1拙稿(野澤 2002)参照

³⁾ 青木一男 1998「長野県出土鉄剣の基礎的整理」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5-長野市内その3-松原遺跡 弥生・総論6 弥生後期・古墳前期』長野県埋蔵文化財センター他、牛山英昭 1996「弥生時代鉄剣の一例-東京都北区七社神社前遺跡出土資料」『考古学雑誌』第81巻第2号 日本考古学会、牛山英昭 1998「七社

神社前遺跡出土の鉄剣『七社神社前遺跡Ⅱ』、北区教育委員会、藤岡孝司 1995『螺旋状鉄剣考—東日本に於ける
 駒輪の意味—』『千葉県文化財センター 研究紀要』16 (財)千葉県文化財センター、岩本崇 2002『東日本における
 弥生時代鉄剣の製作背景』『古代文化』第54巻第5号, 註1 拙稿 (野澤 2002) など。

1 第Ⅶ章の自然科学分析では、「断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。」とされる。金属鉄
 が全く残存せず完全に錆化しているため慎重な判断が必要であろうが、保存処理前の断面の観察 (写真1) やX線
 撮影による断面映像 (写真2) から、内側に膨らむ部分があるものやわずかながら内側で覆はれていない。製作者の意
 図は明確に後の残存している外側に意識があり、本文で後述するのとおり、この二形間の両面形は螺旋製作技術として
 必要な形であった可能性が高い。

2 牛山英昭『田端西台通遺跡出土の鉄剣』『文化財研究紀要』第15集(東京都北区教育委員会 2002)

3 筆者の分類ではレンズ状の断面形は、本来帯状曲輪型鉄剣の特徴としているものである。螺旋状に巻き上げられた
 鉄剣でありながらこのような断面形態を持つのは、この田端西台通遺跡例と東京都鉾田市弁財天池遺跡例(第4図の
 b)の2例のみである。今後、同様な事例が増加すれば「タイプ」に分類できる可能性もあるが、曲輪加工前の鉄
 素材の形が田端西台通遺跡例では整った帯状であるのに対して、弁財天池例は粗雑で横長な台形状であって幅が一定
 ならず両端部が別々の形をする粗雑なつくりの鉄材を利用している。したがってひとくくりにして考えることは現段階では
 できない。

4 塩尻市教育委員会 1983『丘中学校遺跡』

5 鉾田市教育委員会 1992『弁財天池遺跡』

6 註3岩本2002

7 このことから、岩本が前掲論文で「渦巻形」とした幅広の五里田遺跡例や長野県人町市中城原遺跡例について、端
 部がほとんど残存せず、接合しない破片もいくつかあって良好な状態で出土してないことから、この2例が多段の螺
 旋型鉄剣となる可能性があるのではないかと考える。鉄材の両端部が存在しない以上、この可能性は常に念頭に置いて
 分析する必要がある。

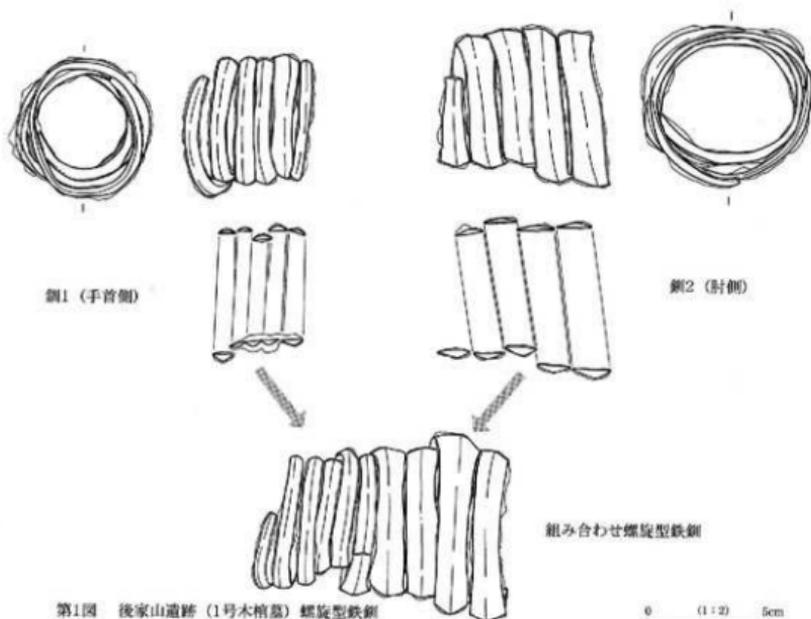
8 註1 拙稿 (野澤 2002) 参照

9 長野市塩崎遺跡群伊勢吉地点出土の螺旋型鉄剣が最長である。

第1表 螺旋型鉄剣、帯状曲輪型鉄剣出土一覧

No.	遺跡名	所在	年代	出土状況	出土品	年代	備考	参考
1	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
2	七社神社前遺跡Ⅱ	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1995	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
3	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
4	鉾田市教育委員会	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
5	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
6	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
7	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
8	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
9	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
10	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
11	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
12	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
13	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
14	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
15	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
16	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
17	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
18	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
19	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
20	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
21	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
22	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
23	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
24	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
25	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
26	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
27	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
28	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
29	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
30	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
31	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
32	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
33	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
34	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
35	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
36	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
37	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
38	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
39	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002
40	田端西台通遺跡	千葉県鉾田市	弥生	出土品	1本	1992	断面が平行四辺形を呈する形状に加工された形跡が覆われた。	野澤 2002

※ 参考元については野澤(2002)を参照した。注1、注2は野澤(2002)を参照した。



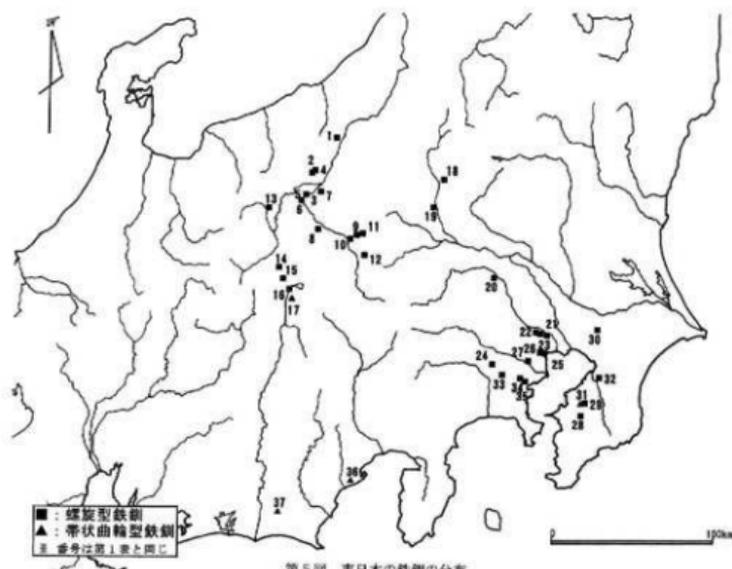


① 丘中学校遺跡 (第1号周溝墓主体部 塩尻市)

② 弁財天池遺跡 (第1号周溝墓主体部 東京都柏江市)

第3図 田崎西台遺跡 (東京都北区)

第4図 2種類を組み合わせた螺旋型鉄剣



第5図 東日本の鉄剣の分布

5. 後家山遺跡出土の曲柄装着鍬について

臼居直之

本遺跡の曲柄装着平鍬(以下曲柄鍬と呼称する 第78図 31)は、竪穴住居内から炭化した状態で単独出土した。炭化しているものの遺存状況は良好であり、平面形状はほぼ保たれ木取り樹種から耕作具(製品)であることが確認できた。この出土炭化物が曲柄鍬であると認識されたことによって以下のことが注目される。①本資料が佐久地域での当該期の農具として初出土であり、耕作具の地域性を知りうる資料が得られたこと。②出土場所が竪穴住居跡内であり、耕作具の保管場所として従来ない所見が得られたことである。以下この曲柄鍬の特長から分かりえることを追及する。

本遺跡出土曲柄鍬の特長

先にも述べたが、全面炭化しているものの平面形状の全容が確認できる。ただし微細な加工形状と焼痕が弱く木質部として残存していた部分に関しては腐食劣化によって形状が失われている。したがって、刃部表面にある削り込まれた湾曲形状は本来木質部としてあったものと判断され、厚みと表面の加工痕は不明である。また着柄軸先端の形状に関しても詳細は不明である。計測値は、炭化炭化による影響があり10~15%の収縮が考えられるが、身部長が48.5cm+ α 、着柄軸が21.0cm+ α 、身部長が8.7cm+ α である。身部のプロポジションは着柄軸から直角に明瞭な加工を施さないで刃部に緩やかに移行する形状(なで肩形状)であり、刃部下半部がやや膨らみ、丸みをもつ形態が想定される。着柄軸の平面形状はほぼ直線的に伸び、側面形状は刃部より厚く隆起する形態である。残念ながら着柄軸部の加工痕は不明でこの点から曲柄鍬の地域性を明確にすることはできない。以上の形態的特長から長野県内出土曲柄鍬と比較する。

県内の農耕具(耕作具)の変遷

県内の古代木製農耕具は善光寺平を中心に17遺跡から出土し、弥生時代中期から平安時代まで確認されている(表1・第1図)。県内初現となる弥生中期の耕作具は中野市七瀬遺跡を含め2遺跡で出土しているが、今のところ曲柄鍬の形態以外は不明な部分が多い。この時期の農具組成は、他地域の状況から曲柄鍬のほか直柄鍬と一木鍬が想定される。弥生後期は、農具組成の全容が明確になり耕作具には曲柄鍬と直柄鍬、組み合わせ鍬・一木鍬がある。この時期は曲柄鍬・直柄鍬から地域的な特色と時期ごとの形態・組成変化を読み取ることができる。古墳時代の状況は、出土遺跡数が少ないものの前・中・後期とそれぞれまとまった出土遺跡があり組成・形態とも特色をつかむことができる。前期の畿内・東海域の特徴的な農具の広がりから全国的に組成も形態も画一化する中期への変革が顕著に捉えられる。奈良時代の農耕具は数点であるがこの段階で曲柄鍬は消滅し、平安時代の直柄鍬(角柄鍬)を主体とする耕作具の時代が今日まで継続されている(文1・2)。さて、縄文時代の石斧装着方法を起源とする曲柄鍬であるが農耕具としての形態変遷をみると、県内の場合大きく弥生中期から古墳時代前期初頭、古墳時代前期前半から前期後半、古墳中期から後期の3段階の変化・二期が認められる(第3図)。以下概略を述べる。(第1段階①・弥生時代中期)の曲柄鍬は平鍬が主体で、着柄軸が棒状となる形態で、着柄軸の厚みが刃部より隆起すること着柄軸が比較的長いことがあげられる。弥生後期には農具組成に又鍬が加わり、長い着柄軸が次第に短くなることも刃部が伸びる。また長方形であった中期の刃部から下半部が膨らむ傾向にある。この時期は東海系曲柄鍬が顕著に認められ(文3)、方形板状鉄刃の装着が想定される鍬も存在している。(第1段階②・古墳前期前半)は、着柄軸が所謂「ナスビ型」に大きく変化した曲柄鍬が出現し、組成の主体を占めるようになる。又鍬の比率も増加し、平鍬の中央部に透かし(スリット)の入った形態も登場する。軸部表面に段差を作り出す加工も特長的であり、曲柄(膝柄)との装着強化が窺える。形状の組立ては古墳前期後半まで「ナスビ型」を着柄軸とする平鍬・又鍬・多又鍬で構成される。(第2段階・古墳中期後半)も着柄軸の「ナスビ型」が継続されるが、刃部先端にU字型鉄刃が装着される形態に変化する。刃部幅が比較的大きくなり鉄刃装着のために段を作りだし先端部には削りが施される。またこの時期から鍬身部に装着する柄が、膝柄から反柄に変化し普及する。「ナスビ型」への転換は畿内型の農具組成が浸透したという現象ばかりでなく、鍬身と曲柄の緊縛強度が増したことにより、曲柄鍬使用の耕作用途(打ち鍬・開墾・掘削など)を変化させたと考えられる。鉄刃の磨装は更に形態を進化させ古墳後期まで引き継がれる。

以上のような各時代・時期の変化を捉えた上で本遺跡の曲柄鍬を弥生時代中・後期の資料と比較する。本資料は弥生時代に共通する棒状着柄軸となるが、刃部に比べ比較的長い軸長と厚みが隆起する形態である。この点からすると中期後半の要素が窺われるが、刃部の形状が丸みを帯び下半部がやや膨らむことと焼痕による欠損・収縮を考慮すると弥生後期の範疇ととらえられる(第2図)。

弥生時代の直柄鍬・曲柄鍬の形態には、地域性が反映されている。曲柄鍬の地域性に関しては樋上氏によって論じ

られ、ことに東海系曲柄鍬の広がりについては長野県北部への広がりを指摘している。本資料が東海系曲柄鍬か否かは、炭化により着柄軸の詳細な加工形状と表面の加工、肩部の形状等が損なわれているため十分な検討はできないが、東海系曲柄鍬の可能性が高いと判断される。地理的な条件から群馬県と同一傾向にあると思われるが、今後の佐久地域の資料の増加を待って検討したい。

樹種について

弥生から古墳時代の県内出土農耕具の樹種はクヌギが主体であり、石川条里遺跡では80%を占めている。同じ中部高地である群馬県もクヌギを用いた農具が弥生時代から古墳時代にカシから移行していった状況が報告されている(文4)。東日本の農耕具用材がクヌギ主体であることが指摘され、善光寺平はその傾向が顕著である。曲柄鍬の樹種を整理してみると、石川条里遺跡では弥生後期から古墳前期の曲柄鍬が破片資料も含め約80点出土し、樹種が確認できたもののうち82%がクヌギ節、9%がコナラ節であり、ほかフジキ、クリ、カバノキ属、カエデ属であった。川田条里遺跡からは水田畦畔・溝内から古墳前期以後の曲柄鍬が15点出土し、クヌギ節が60%を占め、アサダが20%であった。横田遺跡からは古墳時代中期の曲柄鍬が20点出土し、いずれもじ字型鉄刃が装着される形態を示しているが8点がクヌギ節で、7点がアサダと同定されている。牛仁遺跡では自然流路から5点の曲柄鍬が出土し、形態の特長から弥生後期・古墳前期・古墳後期の所産に分類され、古墳前期以前の形態を示す曲柄鍬3点がコナラ節・クヌギ節であったのに対して古墳後期のものはアサダであった。

本資料は同定の結果アサダであることが確認され、弥生後期の曲柄鍬としては従来なかった樹種である。ただ川田条里遺跡の古墳前期資料にアサダが用材となっていることをはじめ古墳後期まで曲柄鍬用材の一端を担った樹種であり、本遺跡資料からアサダが弥生後期から用いられたことが確認された。

出土地点について

県内出土木製耕作具の出土地点をみると、7遺跡が生産域(水田)に関連する遺構、7遺跡が自然流路もしくは自然流路となった溝、4遺跡が集落域に隣接した祭祀場、加工・貯木関連施設である。木製遺物という劣化・腐食しやすい性格上、遺物として残される条件が極めて限定されることにより保水性がある低湿地からの出土となる。このため農具の所有・保管がどのような場所でもどのようになされたのか曖昧な点が多く、出土地点から見ると生産域もしくは集落に隣接する施設が考えられる。しかし古墳時代中期以降の鍬・鋨先に装着されたじ字型鉄刃は、平安時代に至るまで普通に竈穴住居から出土している。複数の鉄刃鍬・鋨先の出土例もあり鉄刃のみ保管されていたという状況もあるが、単独出土が大抵で木質部である鍬身部、柄が装着されていたものと見られる。本遺跡の出土地点が集落を形成する竈穴住居内であり、全国的にも極めて特殊な例となった。弥生時代後期に、製品としての鍬が個人所有で住居内に保管・管理された可能性を示唆する資料となった。この課題は更なる資料収集と分析が必要である。

参考文献

- 1: 長野県埋蔵文化財センター 1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書15—長野市その3—
石川条里遺跡 第3分冊』
- 2: 白居直之 2002 『弥生・古墳時代における善光寺平の水田開発』国立歴史博物館研究報告第96集
- 3: 樋上 昇 2000 『3～5世紀の地域間交流—東海系曲柄鍬の産及と展開—』日本考古学第10号
- 4: (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
新保遺跡1』

第1表 長野県 木製農具(耕作具)出土遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	木製農具	時代・時期	出土地点	文献	農具調査後の状況
	後寮山	佐久市	曲柄鍬	弥生後期	堀内住居内		アサダ
1	北原	須山市	直柄鍬	平安	土坑	①	
2	七瀬	中野市	曲柄鍬・えぶり	弥生中期	溝址	②	
3	種田	長野市	曲柄鍬・横鍬	古墳中期	穴溝	③	クスギ跡・アサダ・コナラ跡・モミ属
4	川田倉屋	長野市	曲柄鍬・直柄鍬・鋤・馬銜・えぶり	弥生後期～平安	水田跡(溝址・畦畔内)	④	クスギ跡・アサダ・クリ
5	松原遺跡	長野市	曲柄鍬	弥生中期	溝址	⑤	カバノキ属
6	水内倉一円神社	長野市	一木鍬・直柄鍬・えぶり	弥生後期	埋溝		
7	藤ノ井	長野市	曲柄鍬	弥生中期	溝址	⑥	カバノキ属
8	石川倉庫	長野市	曲柄鍬・直柄鍬・一木鍬・曲柄・えぶり	弥生後期～古墳前期	水田溝、祭祀溝埋溝・土坑	⑦	
9	生仁	千曲市歴代	曲柄鍬・直柄鍬	弥生後期～古墳後期	自然遺跡	⑧	アサダ・コナラ跡・クスギ跡・カバノキ属
10	更埴倉庫・歴代	千曲市歴代	曲柄鍬	古墳中期	溝址	⑨	アサダ
11	本智寺	千曲市歴代	直柄鍬	平安	水田灌漑洪水貯留	⑩-⑪	
12	鹿宮寺	千曲市歴代	直柄鍬・曲柄鍬	～平安	溝址	⑫	
13	霞毛塚	佐久市	曲柄鍬・横鍬	弥生～平安	自然遺跡河床	⑬	
14	塚下	茅野市	曲柄鍬・曲柄	弥生後期	自然遺跡・低湿地	⑭	クスギ
15	箕輪	上伊那郡箕輪町	曲柄鍬?	平安	水田(低湿地)	⑮	
16	横田	須山市	曲柄鍬	不詳	低湿地	⑯	
17	辻前	須山市	曲柄鍬・横鍬・鋤	古墳中期	加工箇所(押木)	⑰	クスギ

① 須山市教育委員会

② 長野県埋蔵文化財センター

③ 長野県埋蔵文化財センター

④ 長野県埋蔵文化財センター

⑤ 長野県埋蔵文化財センター

⑥ 長野県埋蔵文化財センター

⑦ 長野県埋蔵文化財センター

⑧ 更埴市教育委員会(現千曲市)

⑨ 長野県埋蔵文化財センター

⑩ 更埴市教育委員会(現千曲市)

⑪ 奈良国立文化財研究所

⑫ 更埴市教育委員会(現千曲市)

⑬ 長野県埋蔵文化財センター

⑭ 茅野市教育委員会

⑮ 箕輪町教育委員会

⑯ 長野県史料行会編

⑰ 須山市教育委員会

1990 北原遺跡調査報告書 塚か

1994 稲道中野野野跡ハイパス・忠賀中野科埋蔵文化財発掘調査報告書 農具・七瀬遺跡

1999 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12—長野市内その10—種田遺跡

2000 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10 —長野市内その8—川田倉庫遺跡

2000 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書6—長野市内その4—藤ノ井遺跡群

1997 中央自動車道長野埋蔵文化財発掘調査報告書16—長野市内その3—石川倉庫遺跡

1997 中央自動車道長野埋蔵文化財発掘調査報告書15—長野市内その3—石川倉庫遺跡

2001 生仁遺跡IV 稲道ため池等埋蔵文化財発掘調査報告書

1998 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 更埴市内その3—更埴倉庫遺跡・歴代遺跡群

1988 本智寺遺跡調査の概要

1993 木製品図録 近畿篇編

1985 辻前遺跡

1991 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 —佐久市内その2—

1995 塚下遺跡—平成6年度茅野市境内土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(木製農具の詳細は茅野市教育委員会小池出史氏の調査による)

1980～1982 箕輪遺跡調査第1集～第3集

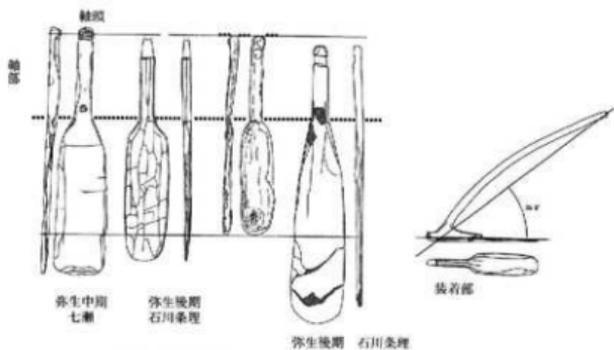
1993 長野県史 考古資料編全1巻 主要遺跡(中・南篇)

2003 辻前遺跡

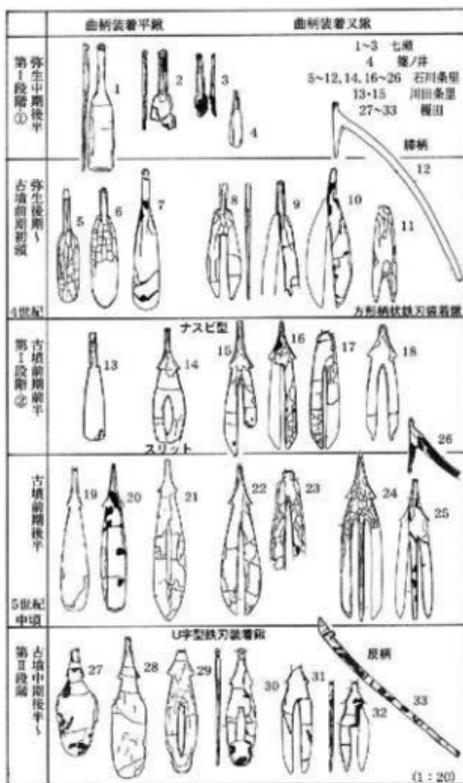


★が後家山遺跡

第1図 県内木製農耕具出土遺跡

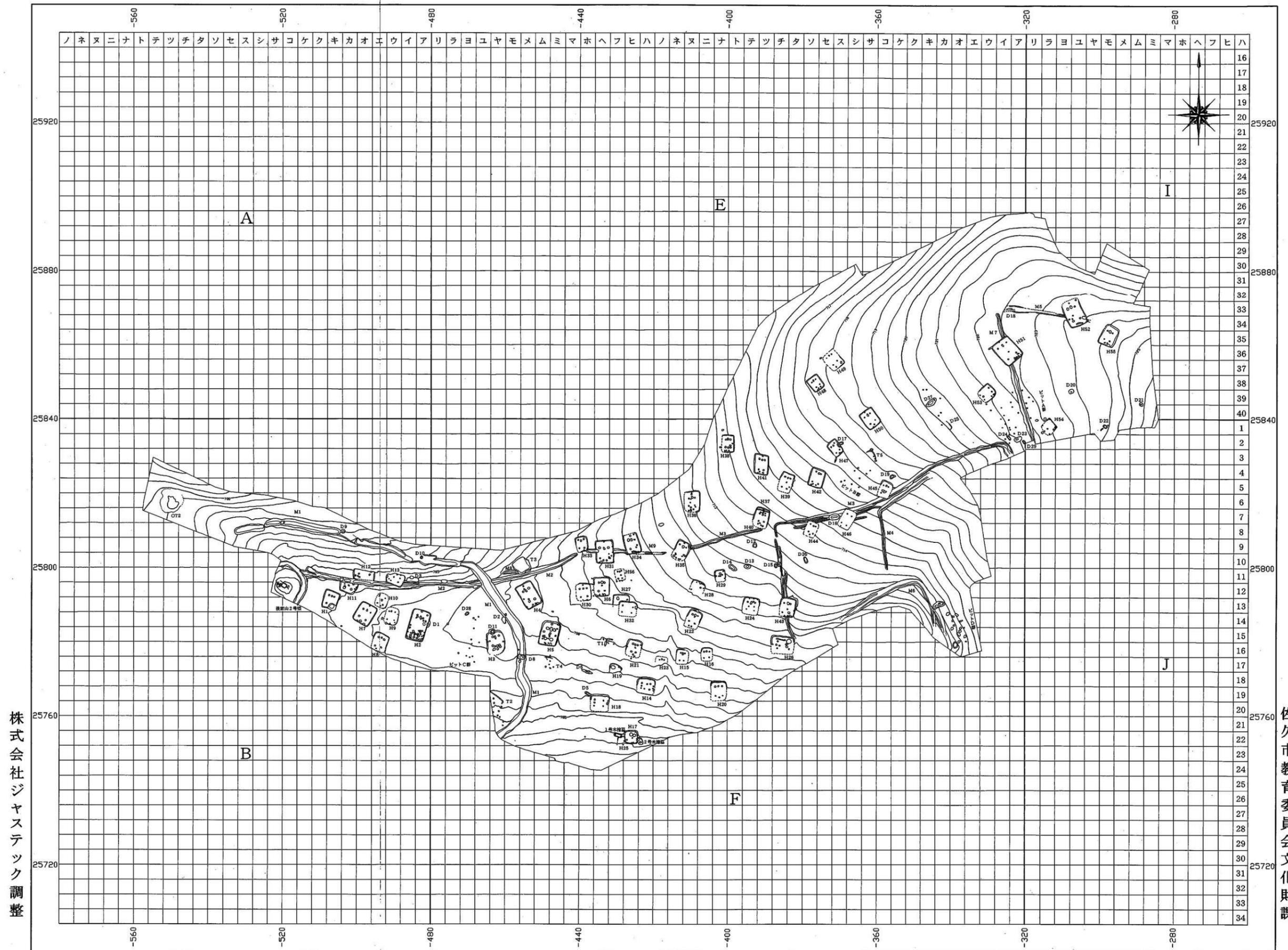


大2図 後家山遺跡出土木製品との比較



第3図 曲柄鍬変遷図

後家山遺跡 I

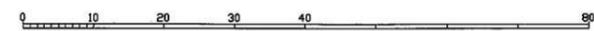


株式会社ジャステック調整

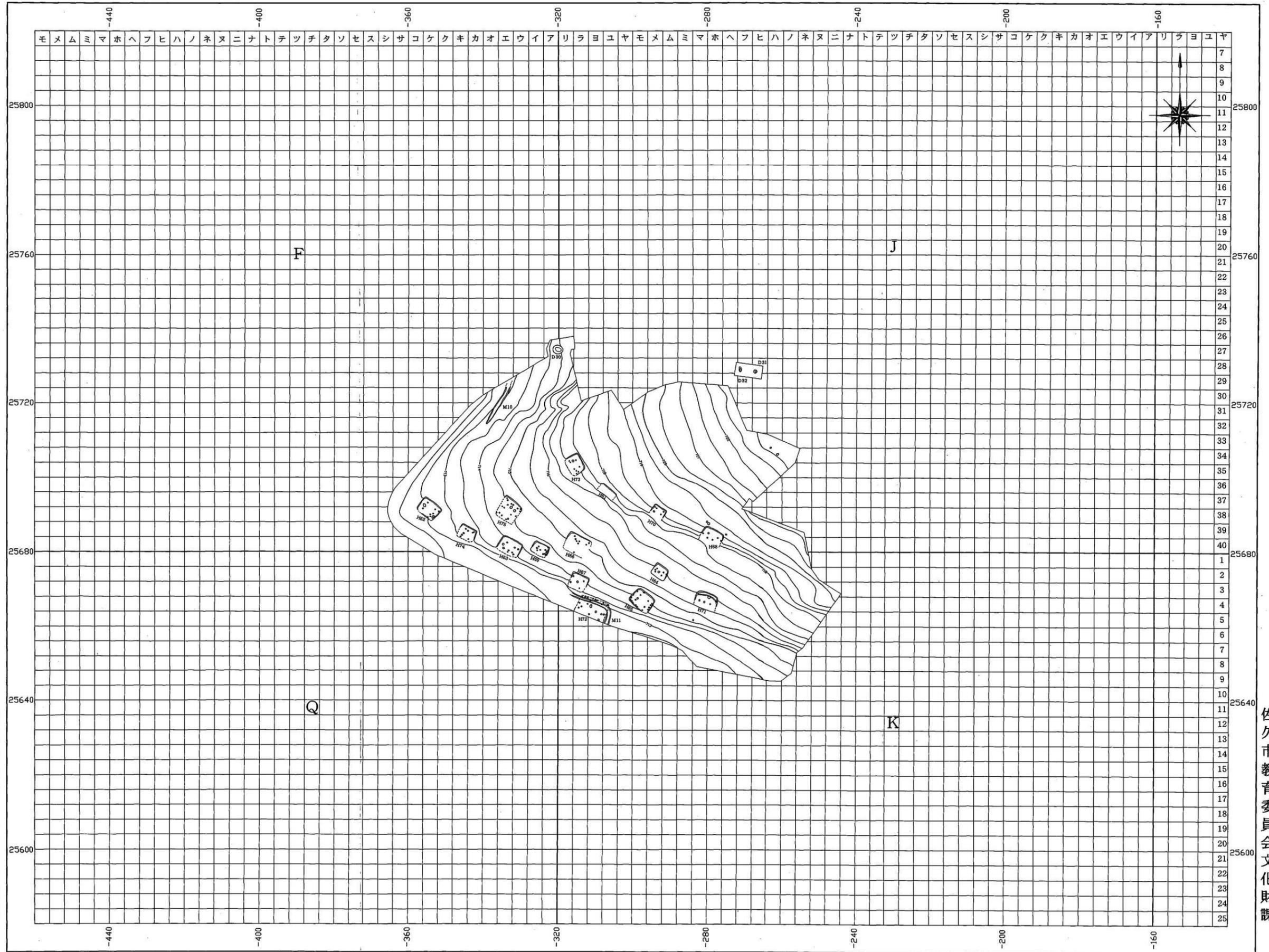
佐久市教育委員会文化財課

測 図 平成15年 3月解析図化機ケルンDSR2000

1 : 500



後家山遺跡Ⅱ

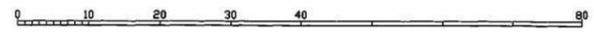


株式会社ジャステック調整

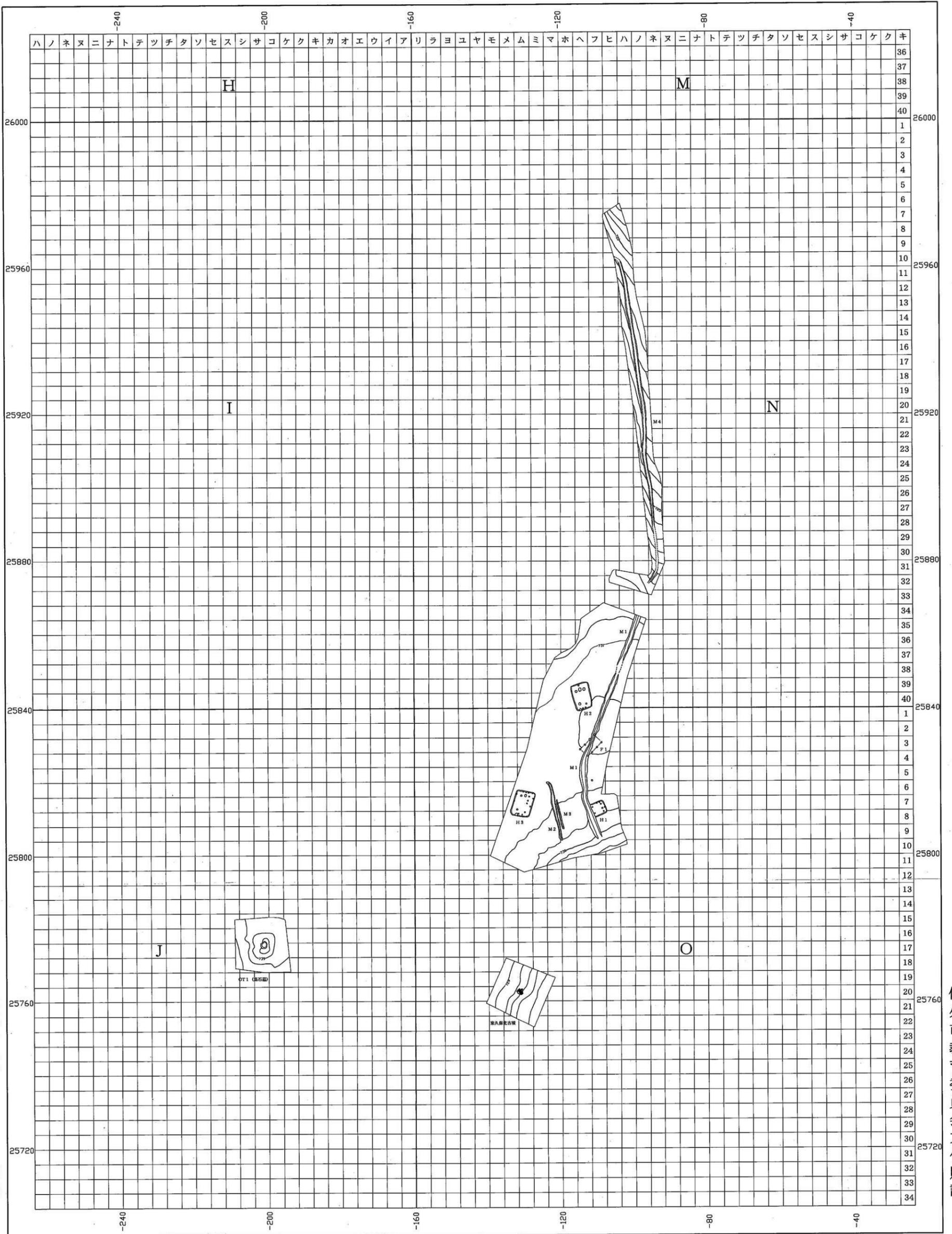
佐久市教育委員会文化財課

測 図 平成15年 3月解析図化機ケルンDSR2000

1 : 500



東久保遺跡

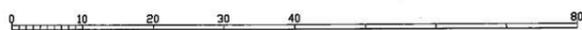


株式会社ジャステック調整

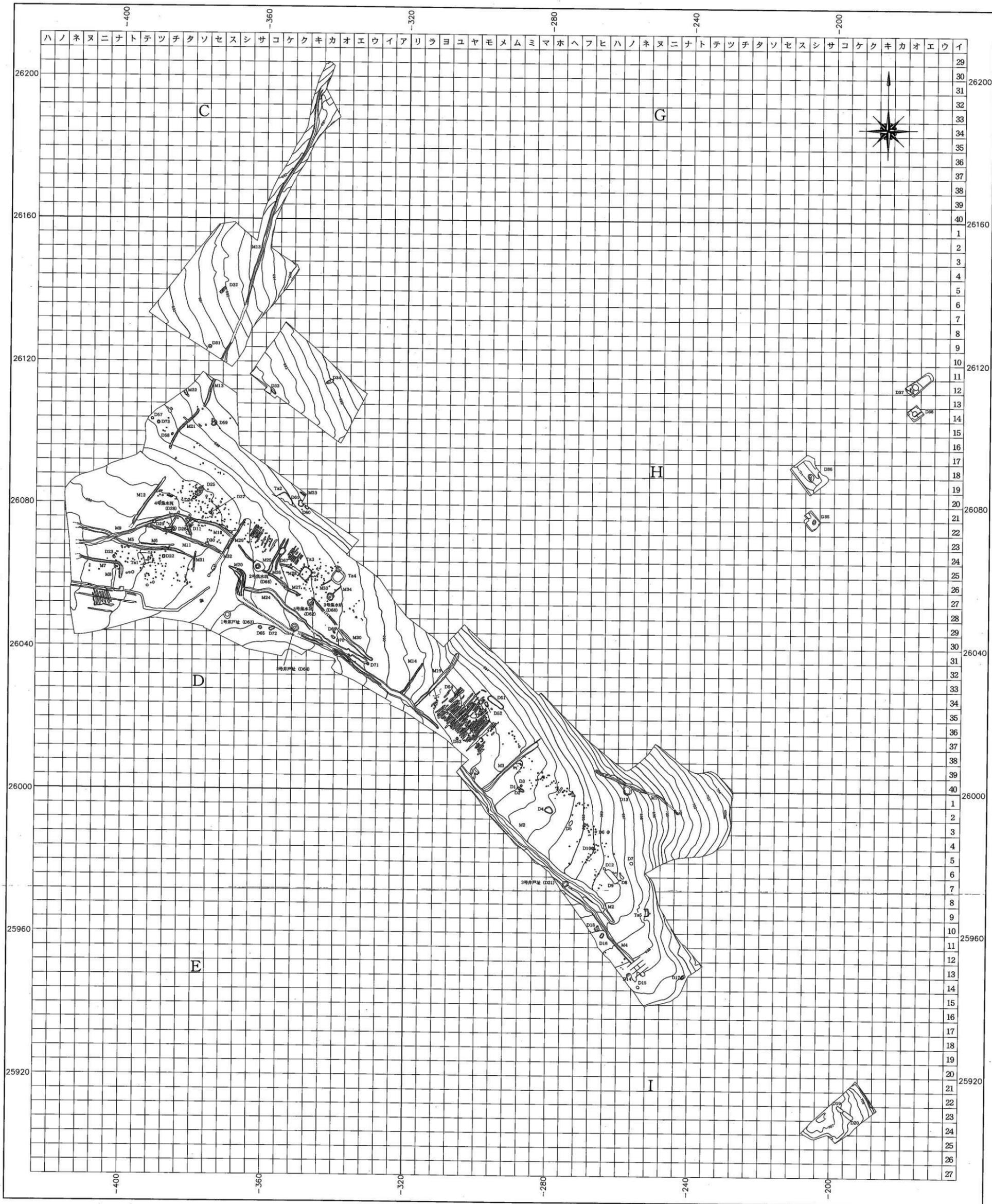
佐久市教育委員会文化財課

測 図 平成15年 3月解析図化機ケルンDSR2000

1 : 500



宮田遺跡 I

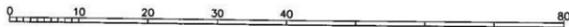


株式会社ジャステック調整

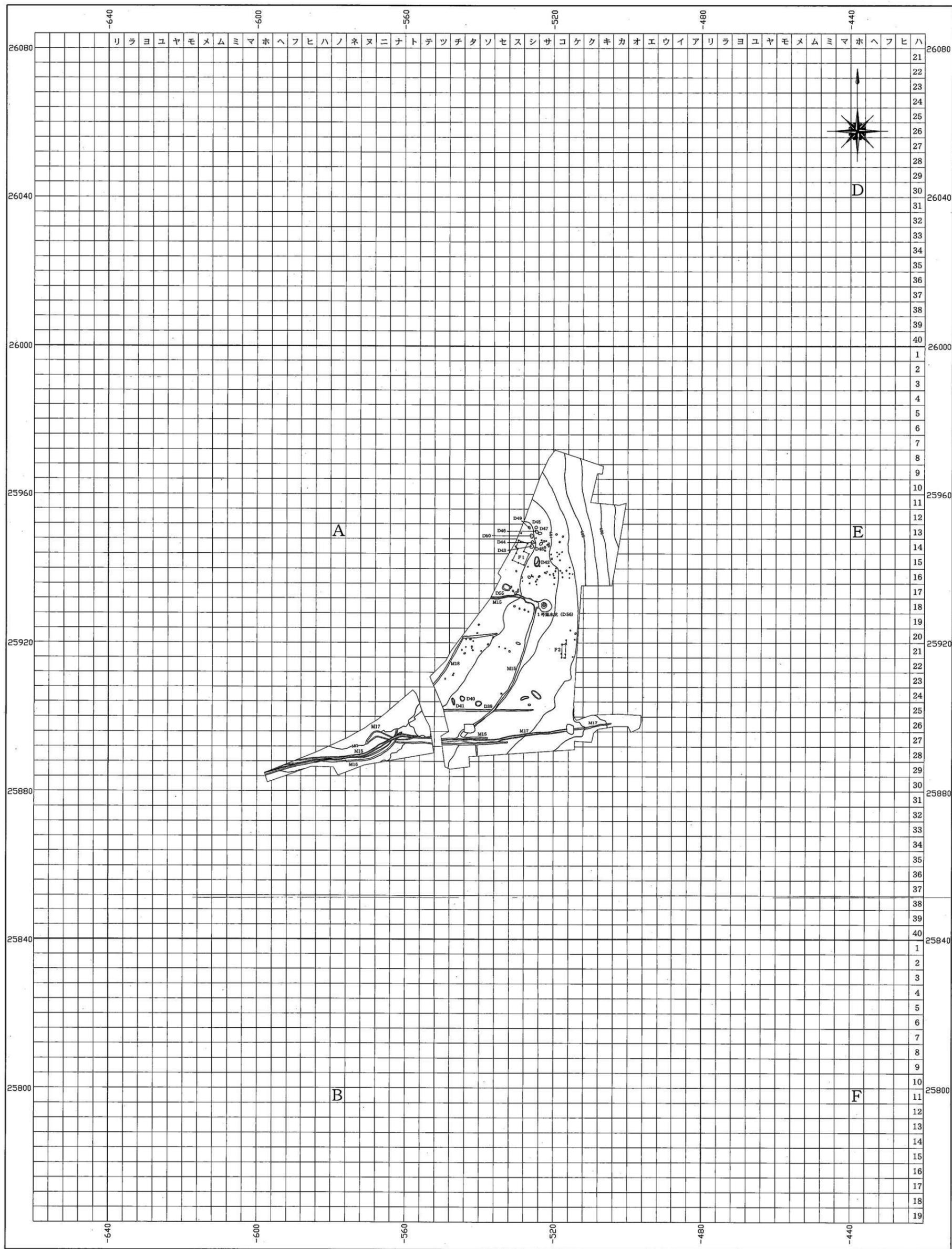
佐久市教育委員会文化財課

測 図 平成15年 3月解析図化機ケルンDSR2000

1 : 500



宮田遺跡Ⅲ

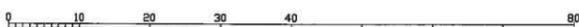


株式会社ジャステック調整

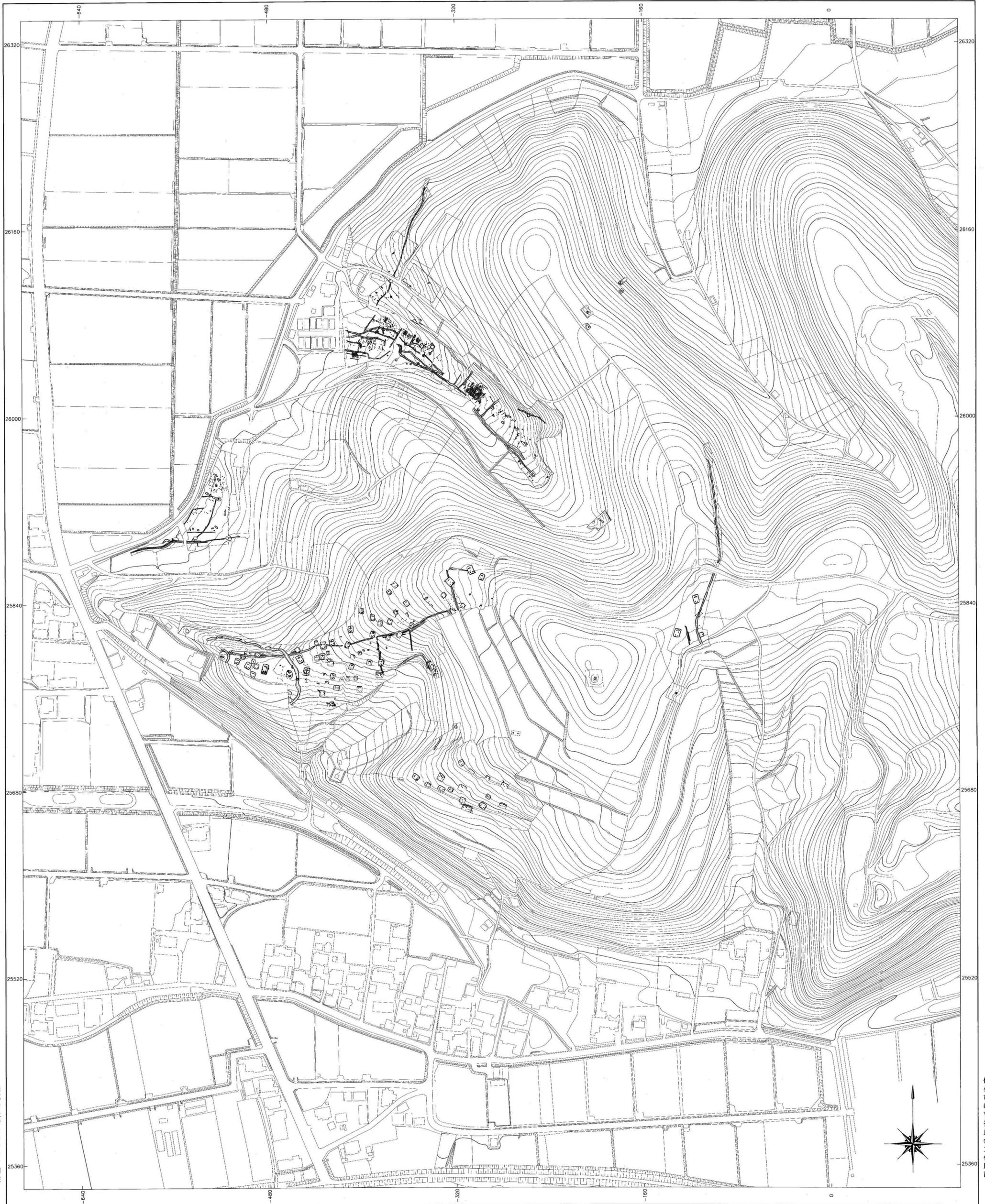
佐久市教育委員会文化財課

測 図 平成15年 3月解析図化機ケルンDSR2000

1:500



後家山・東久保・宮田遺跡調査全体図

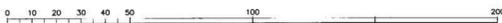


株式会社ジャステック調整

佐久市教育委員会文化財課

測 図 平成15年 3月解析図化機ケルンISR2000

1 : 1000



佐久市埋蔵文化財調査報告書

- | | |
|---|---|
| <p>第 1集 『金井城跡』
 第 2集 『市内遺跡発掘調査報告書1990』
 第 3集 『右衛門町址群』
 第 4集 『大ふけ』
 第 5集 『立科下遺跡』
 第 6集 『上菅原遺跡』
 第 7集 『上菅原遺跡』
 第 8集 『藤の下の遺跡』
 第 9集 『国道11号線関係遺跡』
 第 10集 『龍泉遺跡Ⅱ』
 第 11集 『赤坂外遺跡』
 第 12集 『岩宮遺跡Ⅱ』
 第 13集 『北高山遺跡Ⅱ』
 第 14集 『栗毛坂遺跡』
 第 15集 『野馬久保遺跡』
 第 16集 『石並城跡』
 第 17集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』（1月～3月）
 第 18集 『西宮根遺跡』
 第 19集 『上之芝』
 第 20集 『下聖原遺跡Ⅱ』
 第 21集 『金井城跡Ⅱ』
 第 22集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』
 第 23集 『南1号塚・南下中間遺跡』
 第 24集 『上芝塚遺跡』
 第 25集 『久保内Ⅳ』
 第 26集 『藤原古墳群・藤原Ⅱ』
 第 27集 『上久保内Ⅲ』
 第 28集 『菅原新成遺跡Ⅴ』
 第 29集 『岡村遺跡Ⅱ 山法師遺跡Ⅱ』
 第 30集 『市内遺跡発掘調査報告書1992』
 第 31集 『興村遺跡A 山法師遺跡A』
 第 32集 『塚ノ新』
 第 33集 『聖原遺跡Ⅶ 下菅原遺跡Ⅰ 前橋御遺跡Ⅱ』
 第 34集 『西一本柳遺跡Ⅰ』
 第 35集 『市内遺跡発掘調査報告書1993』
 第 36集 『蛇塚Ⅲ遺跡Ⅱ』
 第 37集 『西一本柳遺跡Ⅱ 中西ノ久保遺跡Ⅰ』
 第 38集 『南下中間遺跡Ⅱ』
 第 39集 『中屋敷遺跡』
 第 40集 『寺原遺跡』
 第 41集 『曾根新成遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ
 上久保内遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ
 西菅原遺跡Ⅱ・Ⅲ』
 第 42集 『奇山』
 第 43集 『権現平遺跡 池端遺跡』
 第 44集 『寺坂遺跡』
 第 45集 『市内遺跡発掘調査報告書1994』
 第 46集 『海ノ遺跡』
 第 47集 『上芝宮遺跡Ⅴ』
 第 48集 『池端城跡』
 第 49集 『根々井之宮遺跡』
 第 50集 『藤原遺跡Ⅲ』
 第 51集 『寺中遺跡 小原敷遺跡Ⅱ』
 第 52集 『塚の内遺跡』
 第 53集 『門正坊遺跡Ⅱ』
 第 54集 『市内遺跡発掘調査報告書1995』
 第 55集 『藤原前遺跡Ⅰ・Ⅱ』
 第 56集 『聖原遺跡Ⅷ』
 第 57集 『高藤町遺跡Ⅱ』
 第 58集 『下穴山遺跡Ⅰ』
 第 59集 『市内発掘調査報告書1996』</p> | <p>第 60集 『曾根城遺跡Ⅱ』
 第 61集 『割捨遺跡』
 第 62集 『野馬久保遺跡Ⅱ』
 第 63集 『西大久保遺跡Ⅱ』
 第 64集 『梨の木遺跡Ⅳ』
 第 65集 『中宮遺跡』
 第 66集 『中西ノ久保遺跡Ⅱ 仲田遺跡 寺畑遺跡Ⅱ』
 第 67集 『供養塚遺跡』
 第 68集 『前藤部遺跡』
 第 69集 『藤山遺跡Ⅰ・Ⅱ』
 第 70集 『堀倉寺遺跡』
 第 71集 『市内遺跡発掘調査報告書1997』
 第 72集 『赤沼遺跡Ⅱ』
 第 73集 『西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ』
 第 74集 『五甲田遺跡』
 第 75集 『八風田遺跡群』
 第 76集 『南近津遺跡』
 第 77集 『藤原前遺跡Ⅲ』
 第 78集 『蛇塚遺跡 蛇塚古墳』
 第 79集 『四ツ塚遺跡Ⅰ』
 第 80集 『四ツ塚遺跡Ⅱ』
 第 81集 『塚原寺遺跡』
 第 82集 『市内遺跡発掘調査報告書1998』
 第 83集 『下聖原遺跡Ⅳ』
 第 84集 『鎌倉寺遺跡』
 第 85集 『柳定遺跡』
 第 86集 『市内遺跡発掘調査報告書1999』
 第 87集 『宮伝遺跡』
 第 88集 『下聖原遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ 上芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』
 第 89集 『川原遺跡』
 第 90集 『柳の木遺跡Ⅱ』
 第 91集 『西一本柳遺跡Ⅱ 中塚塚Ⅰ・Ⅱ 柳の木遺跡Ⅰ・Ⅱ』
 第 92集 『辻の前遺跡Ⅱ 中仲田遺跡Ⅱ』
 第 93集 『八雲山遺跡』
 第 94集 『史石遺跡』
 第 95集 『市内遺跡発掘調査報告書2000』
 第 96集 『木戸遺跡』
 第 97集 『久瀬部遺跡』
 第 98集 『深沼Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ』
 第 99集 『川邊遺跡Ⅱ』
 第 100集 『野矢部遺跡Ⅱ』
 第 101集 『深瀬遺跡Ⅳ』
 第 102集 『門正坊遺跡Ⅳ』
 第 103集 『聖原 一第3分冊Ⅰ』
 第 104集 『史石遺跡Ⅱ』
 第 105集 『曾根城遺跡Ⅲ』
 第 106集 『榑村遺跡Ⅱ』
 第 107集 『聖原 一第2分冊Ⅰ』
 第 108集 『市内遺跡発掘調査報告書2001』
 第 109集 『西一本柳遺跡』
 第 110集 『佐久駅前周辺地区調整事業埋蔵文化財発掘調査報告書』
 第 111集 『上ノ城遺跡』
 第 112集 『西志保』
 第 113集 『西一本柳遺跡Ⅳ』
 第 114集 『供養塚遺跡Ⅲ』
 第 115集 『聖原 一第3分冊Ⅱ』
 第 116集 『東久保遺跡Ⅱ 東久保古墳群1号墳・宮田遺跡Ⅱ』
 第 117集 『東五甲田遺跡』
 第 118集 『東近津遺跡』
 第 119集 『野矢部遺跡Ⅳ』
 第 120集 『市内遺跡発掘調査報告書2002』</p> |
|---|---|

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第121集
後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ

2004年10月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385 8501 長野県佐久市大字中込3056

文化財課

〒385 0006 長野県佐久市大字志賀5953

TEL. 0267-68 7321

印刷所 キクハラインク株式会社

報 告 書 抄 録

ふりがな 書名	ごかやまいせき、ひがしくぼいせき、みやたいせき 後家山遺跡、東久保遺跡、宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第121集
編著者名	富沢一明、佐々木宗剛
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20040930
作成機関ID	
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市大字志賀5953
ふりがな 遺跡名	ごかやまいせき、ひがしくぼいせき、みやたいせき 後家山遺跡、東久保遺跡、宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ
ふりがな 遺跡所在地	ながのけんさくしのおおあざせとあざみやた、おおあざひらかあざごかやま、ひがしくぼ 長野県佐久市大字瀬戸字宮田、大字平賀字後家山、東久保
市町村コード	
遺跡番号	340.341.342
北緯	36°13'57"
東経	138°29'03"
調査期間	20010507～20040930
調査面積	38200
調査原因	佐久市総合運動公園建設
種別	集落址
主な時代	弥生中期・後期／古墳／中世
遺跡概要	弥生中期の環壕集落、弥生後期の集落と木棺墓、古墳中期の円墳、中世村落と生産址 縄文型絞縄曲柄装著平塚、竊穴勾玉等
特別事項	